FUJIFILM

セットアップガイド

ArcSuite 4.0

2021 年 5 月 -2 版（GM1119J1-1）
©FUJIFILM Business Innovation Corp. All rights reserved.

はじめに

このたびは富士フイルムビジネスイノベーションのArcSuite®をご利用いただき、まことにありがとうございます。

一般に、企業活動では、各業務に関する情報はさまざまな形態のドキュメントとして存在しています。ここでいうドキュメントとは、紙に書かれた文書だけを示す狭義のものではありません。紙はもちろんのこと、ホワイトボードに書かれた文字や図表、プロジェクターやテレビに映し出された映像などを含む広義なものを指します。
ドキュメントは一般に、ひとりの手で作成されるものではなく、複数の人の意見交換や討議を経て作成されます。単純な作業や複雑な計算はコンピューターに委ねられ、あらゆる分野でさまざまなソリューションが展開されていますが、ドキュメントの作成では一般に人が中心なのです。

ArcSuiteは、「ドキュメント」に着目して「人」と「人」をつなぐ、「ドキュメント指向」のソリューション・パッケージです。ArcSuiteをご利用いただくことによって、さまざまなコンピューターシステムを統合したうえでのドキュメントの共有や管理が可能になります。

お使いの商品構成によって、次の機能が標準で提供されないことがあります。
コラボスペース、ドキュメントレビューオプション、ワークフロー、分類ビュー、関連文書検索サービス、原本性保証オプション、キャプチャリングサービス、統合検索サービス、オンラインバックアップオプション、ドキュメント一括操作ツール、連携フォルダ for DocuWorks、連携オプション for Working Folder

本書の内容は、Microsoft Windows Operating System、およびWebブラウザーの基本的な知識や操作方法を習得されているかたを対象として記述しています。

Active Directory、ActiveX、Excel、Internet Explorer、Microsoft、Microsoft Edge、PowerPoint、Windows、およびWindows Serverは、米国Microsoft Corporationの、米国およびその他の国における登録商標または商標です。
iPad, iPad Pro, and Safari are trademarks of Apple Inc., registered in the U.S. and other countries.
iPadOS is a trademark of Apple Inc.
IOS is a trademark or registered trademark of Cisco in the U.S. and other countries and is used under license.
OracleとJavaは、Oracle Corporation及びその子会社、関連会社の米国及びその他の国における登録商標です。
Xerox、Xeroxロゴ、およびFuji Xerox ロゴは、米国ゼロックス社の登録商標または商標です。
その他の社名または商品名などは、各社の登録商標または商標です。
Microsoft Corporationの許可を得て画面写真を使用しています。

- 本書の編集、変更、または無断での転載はしないでください。
- 本書に記載されている内容は、将来予告なしに変更されることがあります。
- 本書に記載されている画面やイラストは一例です。ご使用の機種やソフトウェア、OS のバージョンによって異なることがあります。

FUJIFILM、およびFUJIFILM ロゴは、富士フイルム株式会社の登録商標または商標です。
ApeosPort、ArcEPS、ArcSuite、DocuWorks、Evidence Tracker、および Working Folderは、富士フイルムビジネスイノベーション株式会社の登録商標または商標です。

本書は富士ゼロックスブランドの商品を含みます。
富士ゼロックスブランドの商品は、米国ゼロックス社からライセンスを受けている商品です。商品提供者は富士フイルムビジネスイノベーション株式会社です。

著作権について

本ソフトウェア、およびバックアップのために複製されたソフトウェアに関する著作権等を含む一切の無体財産権は、弊社および弊社への供給者に帰属します。
(c) 2002-2021 FUJIFILM Business Innovation Corp.

マニュアル体系

ArcSuiteには、次のマニュアルおよびヘルプがあります。

マニュアルは、PDFファイルまたはヘルプの形式で提供しています。

主なマニュアルは、『ポータル画面のヘルプ』から参照できます。『ポータル画面のヘルプ』は、Webブラウザーの操作画面にある［ヘルプ］から表示できます。

補足 お使いの商品構成によっては、提供されない機能の説明がマニュアルに含まれることがあります。

■ 管理者ユーザー向け

名称	概要
セットアップガイド（本書）	本製品全体のセットアップ方法について説明しています。
システム管理者ガイド	リソース管理サービスの概要、機能、管理操作を行うコマンドについて説明しています。また、本製品の運用に必要な管理作業について説明しています。
ドキュメント管理サービス管理者ガイド	ドキュメント管理サービスの概要、機能、および管理操作を行うコマンドについて説明しています。
ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版のヘルプ	サーバーで行うドキュメント管理サービスの管理操作について説明しています。
ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web版のヘルプ	クライアントPCで行うドキュメント管理サービスの管理操作について説明しています。
オフラインバックアップ・リストア運用ガイド	オフラインバックアップ機能の操作、およびリストア機能の操作について説明しています。
リソース管理アプリケーションのヘルプ	ユーザー、グループ、ユーザーロールの追加、およびライセンスの編集、検索について説明しています。
ログインサーバー管理アプリケーションのヘルプ	ログインサーバーでの認証モードの設定について説明しています。
メッセージ通知管理アプリケーションのヘルプ	メッセージ通知サーバーの設定、メッセージのスプール管理、メッセージテンプレートの設定について説明しています。
ポータル管理アプリケーションのヘルプ	ユーザープロファイルに表示する項目の設定、お知らせの設定について説明しています。
ドキュメントスペース管理アプリケーションのヘルプ	属性テンプレートや表示する属性の設定、表示するボタンの設定、およびシステム環境の設定について説明しています。
表示アプリケーション管理ツールのヘルプ	表示アプリケーションのテンプレート、システム環境の設定について説明しています。
ログ管理アプリケーションのヘルプ	ログを表示する機能、ログを取得する機能、および保守情報を一括で取得する機能について説明しています。

名称	概要
監視ツールのヘルプ	ArcSuiteのコンポーネントにアクセスしているユーザー、データベースの状態、およびセッションの状態を監視する機能について説明しています。
ドキュメントスペースドキュメント操作URLリファレンスガイド	ドキュメントスペースの機能にURLを使用して接続する機能について説明しています。
オンラインバックアップ・リストア運用ガイド	オンラインバックアップ機能の操作、およびリストア機能の操作について説明しています。
e-文書法対応 概要説明書	e-文書法対応の概要および原本性保証オプションの機能について説明しています。
コラボスペース管理アプリケーションのヘルプ	コラボスペースのメールの設定、ログの設定、およびタスクやメッセージの用語をカスタマイズする設定について説明しています。
ワークフロー管理アプリケーションのヘルプ	ワークフロー定義または起動テンプレートの作成者および公開者の設定、ログの設定、外部コマンドの設定について説明しています。
キャプチャリング管理アプリケーションのヘルプ	キャプチャリングサービスの監視キューに対する操作について説明しています。
統合検索サービス管理アプリケーションのヘルプ	統合検索サービスのリソースの設定、収集スケジュールの設定、およびシステム環境の設定について説明しています。
コラボスペースタスク操作URLリファレンスガイド	コラボスペースの機能にURLを使用して接続する機能について説明しています。
ワークフロー操作URLリファレンスガイド	ワークフローの機能にURLを使用して接続する機能について説明しています。
Webサービスインターフェイスリファレンスガイド	ArcSuiteの機能にSOAPを使用して接続するAPIについて説明しています。
ドキュメント管理サービスSDKリファレンスガイド	ドキュメント管理サービスのオブジェクトを処理するコマンドについて説明しています。
コラボスペースInterface Toolkitリファレンスガイド	コラボスペースのオブジェクトを処理するコマンドについて説明しています。
ワークフロー Interface Toolkitリファレンスガイド	ワークフローのオブジェクトを処理するコマンドについて説明しています。

■ クライアントユーザー向け

名称	概要
ポータル画面のヘルプ	ポータル画面で、お気に入りの編集、ユーザープロファイルを変更する操作について説明しています。 Webブラウザーの操作画面にある［ヘルプ］から参照してください。
アドレス帳のヘルプ	アドレス帳で、ユーザー、グループ、ユーザーロール、およびタスクを検索する操作について説明しています。
ドキュメントスペースのヘルプ	ドキュメントスペースで、登録、属性の変更、検索などのドキュメントを管理する機能の操作について説明しています。
表示アプリケーションのヘルプ	表示アプリケーションで、ブラウザーイメージ変換された画像を編集する操作、およびユーザー設定について説明しています。
検索条件式のヘルプ	ドキュメントスペースの詳細検索で、全文検索または属性検索の条件式をXMLで指定するときの記述方法について説明しています。

名称	概要
簡易操作のヘルプ	簡易操作画面でドキュメントを管理する機能の操作、および操作画面の設定方法について説明しています。
コラボスペースのヘルプ	コラボスペースで、タスクの作成、メッセージの登録、および検索などの操作について説明しています。
ワークフローのヘルプ	ワークフローで、ワークフロー定義の作成、公開および起動する操作、作業を実行する操作について説明しています。
ドキュメント一括操作ツール説明書	Microsoft Excelを使って、ドキュメント管理サービスのオブジェクトを処理する操作について説明しています。
デスクトップクライアント セットアップガイド	デスクトップクライアントのセットアップ方法について説明しています。
デスクトップクライアント 操作説明書	デスクトップクライアントで、ドキュメント管理サービスのフォルダーやドキュメントにアクセスする操作方法について説明しています。
連携フォルダ for DocuWorks セットアップガイド	連携フォルダ for DocuWorksのセットアップ方法について説明しています。
連携フォルダ for DocuWorksのヘルプ（＊1）	DocuWorks Deskで、ArcSuiteに登録されているドキュメントを操作する方法について説明しています。

＊ 1: 連携フォルダ for DocuWorks をインストールした DocuWorks Desk のヘルプから参照してください。

本書の使い方

本書は、ArcSuiteの機能や操作方法について説明しています。

■ 本書の構成

本書は、次の部、章、付録から構成されています。

◆ 第 1 部　オールインワン構成のセットアップ

オールインワン構成の場合のセットアップについて説明しています。「オンラインバックアップ」をインストールする場合は、オールインワン構成でセットアップします。

1　ArcSuite のセットアップの概要

ArcSuiteのセットアップの概要について説明しています。

2　オペレーティングシステムと外部コンポーネント

各種サーバーへのオペレーティングシステムと外部コンポーネントのインストール方法について説明しています。

3　データベース

データベースのインストール方法について説明しています。

4　共通設定

ArcSuiteの共通設定について説明しています。

5　ドキュメント管理サービス

ドキュメント管理サービスのインストール方法について説明しています。

6　メッセージ通知サービス

メッセージ通知サービスのインストール方法について説明しています。

7　ドキュメントスペース
ドキュメントスペース関連のコンポーネントのインストール方法について説明しています。

8　コラボスペース
コラボスペースのインストール方法について説明しています。

9　ドキュメントレビューオプション
ドキュメントレビューオプションのインストール方法について説明しています。

10　ワークフロー
ワークフローのインストール方法について説明しています。

11　原本性保証オプション
原本性保証オプションのインストール方法について説明しています。

12　サーバーの再起動
サーバーの再起動方法について説明しています。

14　各コンポーネントの初期設定
各コンポーネントの初期設定について説明しています。

15　キャプチャリングサービス
キャプチャリングサービスのインストール方法について説明しています。

16　統合検索サービス
統合検索サービスのインストール方法について説明しています。

17　ArcSuite の起動と終了
ArcSuiteの起動（ログイン）と、ArcSuiteの終了（ログアウト）の方法について説明しています。

18　動作確認
ArcSuiteの動作確認について説明しています。

19　ライセンス認証
ArcSuiteのライセンス認証について説明しています。

◆ 第 2 部　2 台以上の構成へのセットアップ
2台以上の構成へのセットアップ方法について説明しています。

1　ArcSuite のセットアップの概要
ArcSuiteのセットアップの概要について説明しています。

2　オペレーティングシステムと外部コンポーネント
各種サーバーへのオペレーティングシステムと外部コンポーネントのインストール方法について説明しています。

3　データベース
データベースのインストール方法について説明しています。

4　コンポーネントサーバーの共通設定
ArcSuiteの共通設定について説明しています。

5　リポジトリーサーバーの設定
リポジトリーサーバーのインストール方法について説明しています。

6　追加リポジトリーサーバーの設定
追加リポジトリーサーバーのインストール方法について説明しています。

7　コンポーネントサーバーの設定
コンポーネントサーバーのインストール方法について説明しています。

9　各コンポーネントの初期設定
各コンポーネントの初期設定について説明しています。

10　キャプチャリングサービス
キャプチャリングサービスのインストール方法について説明しています。

11　統合検索サービス
統合検索サービスのインストール方法について説明しています。

12　ArcSuite の起動と終了
ArcSuiteの起動（ログイン）と、ArcSuiteの終了（ログアウト）の方法について説明しています。

13　動作確認
ArcSuiteの動作確認について説明しています。

14　ライセンス認証
ArcSuiteのライセンス認証について説明しています。

◆ 第 3 部　バージョンアップ
ArcSuiteのバージョンアップについて説明しています。

1　概要
バージョンアップ対象のArcSuiteのバージョンと、サーバーのOSの組み合わせによって異なる、各バージョンアップ方法について説明しています。

2　同じサーバーでのバージョンアップ（オールインワン構成の場合のみ）
Windows Server 2016または2019を使用している場合で、ArcSuite Engineeringを使用しているサーバーを変更せずに、ArcSuite 4.0にバージョンアップする手順について説明しています。

3　新サーバーへの移行とバージョンアップ
ArcSuiteを使用するサーバーを新規に用意して、ArcSuite Engineeringを使用している環境を、ArcSuite 4.0にバージョンアップする手順について説明しています。

◆ 付録
ArcSuiteのアンインストール手順、HTTPサービスに直接SSLを設定する手順、簡易モードでのインストール方法、機能を追加する手順、LDAP連携の設定、統合Windows認証連携の設定、ドキュメント管理サービス管理アプリケーションのインストール手順、インストール後に原本性保証オプションの設定内容を変更する手順、Windowsの互換性に関する注意・制限事項、Windowsのファイアウォール機能に対する設定内容、コンポーネントとサービスの関係、インストーラーで初期値として表示される値、データベース表領域管理ツールの使い方について説明しています。

■ 本書の表記

・本書では、次の記号を使用しています。

< > キー	キーボードのキーを表します。 例：<Enter>キーを押します。
[　　]	画面に表示されるメニュー、ボタン、項目を表します。 例：[新規作成] をクリックします。
「　　」	同一マニュアル内の参照箇所を表します。 また、強調する用語やメッセージも表します。 例：「1 概要」 　　「名前が指定されていません。」と表示されます。
『　　』	参照するマニュアルの名前を表します。 例：『システム管理者ガイド』
{　　}	ユーザー名やサーバー名など、操作時に変わる値を表します。 例：[{ユーザー名}] をクリックします。
>	メニューやWebページの階層を表します。 例：[システムとセキュリティ] > [管理ツール]
注記	一般的な注意事項を表します。
補足	機能や操作に関する補足説明を表します。
参照	参照する事項があることを表します。
＿＿＿＿	参照先タイトルやページへのリンクがあることを表します。 例：「1 概要」(P.6)

・コマンドラインを次のように表記しています。

abc	画面に表示される文字列、またはユーザーが入力する文字列を表します。 例：showDrawerInformation
{abc}	ユーザー名やサーバー名など、操作時に変わる値を表します。 例： cabinetId {or RETURN} = {キャビネットID}

・Microsoft Windows Operating System を「Windows」と表記しています。

・ArcSuite がインストールされているサーバーを「ArcSuite サーバー」と表記しています。

・パーソナルコンピューターを「クライアント PC」と表記しています。

・お使いの環境によって、マニュアルに記載の画面と実際の画面が異なることがあります。

・特に断りがない場合、ArcSuite のインストール先フォルダーを、「{ArcSuite のインストールフォルダー}」と表記します。インストール先は、たとえば「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」です。

・特に断りがない場合、ユーザーデータの格納先フォルダーを、「{ArcSuite のユーザーホームフォルダー}」と表記します。ユーザーデータ格納先は、たとえば「D:¥ArcSuite」です。

・特に表記がない場合の製品のバージョン番号は「4.0」です。

目次

第 1 部 オールインワン構成のセットアップ

1 ArcSuiteのセットアップの概要

1.1 ArcSuite について 22
オールインワン構成 22
1.2 動作環境 23
1.3 セットアップ前の設定事項 24
本書でのシステム構成例 24
1.3.1 オールインワン構成の設定値 25
1.4 セットアップの流れ 33
ライセンスの管理 33
「富士フイルム BI ダイレクト」でのユーザー登録 33
ライセンスシリアル番号の取得 34
タイムスタンプサービスのライセンスファイルの取得 34
セットアップの流れ 35

2 オペレーティングシステムと外部コンポーネント

2.1 Windows のインストール 38
2.1.1 OS が英語版のサーバーに必要な設定 38
2.1.2 Windows のサービス起動ユーザーの設定 38
ユーザー名とパスワードを設定する 39
グループを設定する 39
「サービスとしてログオン」の権利を設定する 40
2.1.3 Windows の環境設定 41
フルコンピューター名を設定する 41
TCP/IP プロトコルを設定する 42
IIS をインストールする 42
Microsoft .NET Framework 3.5 をインストールする 43
ファイルのアップロードサイズの制限値を変更する 45
2.2 DocuWorks のインストール 46
2.3 ドキュメント編集ソフトウェアのインストール 47
2.4 統合 Windows 認証の環境で認証に失敗する場合 48

3 データベース

3.1 データベースのインストール 50
3.1.1 「リポジトリーサーバーの最大セッション数」の見積もり 50
3.1.2 データベースインストーラー 50
3.1.3 データベースの起動と停止 54
データベースを起動する 54
データベースを停止する 55

4 共通設定

4.1 共通設定 57
4.1.1 「富士フイルム BI ダイレクト」でユーザー登録をする 57
4.1.2 共通設定をする 57

5 ドキュメント管理サービス
5.1 ドキュメント管理サービスのインストール 66
6 メッセージ通知サービス
6.1 メッセージ通知サービスのインストール 70
7 ドキュメントスペース
7.1 ドキュメントスペースのインストール 73
8 コラボスペース
8.1 コラボスペースのインストール 75
9 ドキュメントレビューオプション
9.1 ドキュメントレビューオプションのインストール 78
ドキュメントレビューオプションのインストール手順 78
10 ワークフロー
10.1 ワークフローのインストール 80
11 原本性保証オプション
11.1 原本性保証オプションのインストール 82
12 サーバーの再起動
12.1 サーバーの再起動 85
13 Webブラウザーの設定
13.1 Internet Explorer の設定 87
［インターネットオプション］画面を表示する 87
13.1.1 ［全般］タブの環境設定 87
ページ更新を有効にする（キャッシュ属性を設定する） 87
13.1.2 ［セキュリティ］タブの環境設定 88
セキュリティ設定を表示または変更するゾーンを選択する 88
［セキュリティ設定］画面での環境設定 89
ArcSuite サーバーをイントラネットゾーンに設定する 90
13.1.3 ［プライバシー］タブの環境設定 91
ポップアップを許可する 91
13.1.4 ［接続］タブの環境設定 91
プロキシを使用しない（推奨） 91
13.1.5 ［詳細設定］タブの環境設定 92
HTTP 1.1 を使用する 92
スクリプトのデバッグを使用しない 92
13.2 Google Chrome の設定 93
13.2.1 Google Chrome の［設定］ページでの設定 93
［設定］ページの詳細設定を表示する 93
［プライバシーとセキュリティ］を設定する 94
13.2.2 ［インターネットオプション］画面での設定 98
プロキシサーバーを使用しない設定にする（推奨） 98
［セキュリティ］タブの環境設定をする 99
13.3 Microsoft Edge の設定 100

13.4 Safari の設定 101

14 各コンポーネントの初期設定
14.1 ドキュメント管理サービスの初期設定 103
14.1.1 ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版での設定方法 103
ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版を起動する 103
ユーザーアトムを追加する 104
ユーザー属性の追加 104
データベース表領域のサイズの算出 105
データベース表領域の作成 106
標準キャビネットの作成 106
標準キャビネットのドロワーの作成 107
ワークスペースキャビネットの作成 108
ワークスペースキャビネットのドロワーの作成 109
キャビネットのインデックスキーの追加 109
通常モードへの変更 110
ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版の終了 110
14.1.2 ドキュメント管理サービス管理コマンドでの設定方法 111
ドキュメント管理サービス管理コマンドの実行 111
ドキュメント管理サービス管理コマンドで設定する手順 112
14.1.3 ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web 版での設定方法 114
ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web 版にログインする手順 114
データベース表領域のサイズの算出 115
データベース表領域の作成 121
標準キャビネットの作成 122
標準キャビネットへのドロワーの作成 123
ワークスペースキャビネットの作成 123
ワークスペースへのドロワーの作成 124
キャビネットのモード変更 125
14.2 リソース管理アプリケーションでの初期設定 126
リソース管理アプリケーションを起動する手順 126
ユーザーを追加する手順 126
利用ユーザーを設定する手順 127
14.3 メッセージ通知管理アプリケーションでの初期設定 129
メッセージ通知管理アプリケーションを起動する手順 129
基本設定の変更をする手順 129
テストメール送信の設定をする手順 130
14.4 ドキュメントスペース管理アプリケーションでの初期設定 131
14.4.1 共通の初期設定 131
ドキュメントスペース管理アプリケーションの起動 131
属性テンプレートの追加 131
フォーマットの追加 133
14.4.2 中国語（簡体字）ライセンスをインストールしたときの設定 134
14.5 全文検索サービスの初期設定 136
全文検索サービスの初期設定の手順 136
14.5.1 ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版での設定方法 136
ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版の起動 136
ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版での初期設定 136
14.5.2 ドキュメント管理サービス管理コマンドでの設定方法 137
ドキュメント管理サービス管理コマンドの起動 137
ドキュメント管理サービス管理コマンドでの操作 138

14.6 関連文書検索サービスの初期設定 140
関連文書検索サービスの初期設定の手順 140
14.6.1 ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版での設定方法 140
ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版の起動 140
ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版での初期設定 140
14.6.2 ドキュメント管理サービス管理コマンドでの設定方法 141
ドキュメント管理サービス管理コマンドの起動 141
ドキュメント管理サービス管理コマンドでの操作 141
14.7 コラボスペースの初期設定 143
14.7.1 ユーザーのメールアカウントの作成 143
14.7.2 メールの設定 143
コラボスペース管理アプリケーションを起動する 143
メールサーバーを設定する 144
14.7.3 コラボスペースの利用ユーザーの設定 146
コラボスペースの利用可能ユーザーを設定する 146
14.7.4 イントラ外ユーザーの設定 146
14.8 ワークフローの初期設定 147
14.8.1 ユーザーのメールアカウントの作成 147
14.8.2 ワークフロー管理アプリケーションを使用する初期設定 147
管理者を設定する 147
メール通知を設定する 147
ログ設定を確認する 148
ワークフローキャビネット設定を確認する 148
不要データの削除を確認する 148
外部コマンドスケジュール設定を確認する 149
外部コマンドサービス状態設定を確認する 149
外部コマンド一覧を確認する 149
外部コマンド実行を設定する 149
14.8.3 ワークフローの利用ユーザーを登録する 150
ワークフローの利用可能ユーザーを設定する 150
14.9 監視サービスの初期設定 151
14.10 ファイルフォーマット変換サービスの初期設定 152
14.10.1 DocuWorks のインストール後の設定をする 152
FX XDW Creation Printer を再作成する 152
FX XDW Creation Printer の設定を変更する 154
DocuWorks Printer の設定を変更する 154
DocuWorks のユーザー個別設定を変更する 155
DocuWorks Viewer の印刷設定を変更する 155
14.10.2 Microsoft Office をインストールしたあとの作業 156
Microsoft Word 文書を作成できるかどうか確認する 156
「SetupAppDcom.exe」コマンドを実行する 157
DCOM の構成を開けるかどうか確認する 158
14.11 データベース表領域管理ツールの初期設定 160
14.12 Web サービスインターフェイスのための初期設定 161
14.13 インストールしたデータのバックアップ 162

15 キャプチャリングサービス
15.1 キャプチャリングサービスのインストール前の準備 164
インストール前の準備 164
15.2 キャプチャリングサービスのインストール 165

15.2.1 キャプチャリングサービスのインストール手順 165
15.2.2 キャプチャリングサービスをインストールしたあとの設定 168
15.2.3 Windows 8.1（32 ビット）または Windows 10 （32 ビット）の場合に必要な設定 168
15.3 Web ブラウザーの設定 169
15.3.1 Internet Explorer の設定 169
15.3.2 Google Chrome の設定 169
15.3.3 Microsoft Edge の設定 169
15.4 キャプチャリングサービスの初期設定 170
15.4.1 監視キューを作成する 170
キャプチャリング管理アプリケーションを起動する手順 170
監視キューを作成する手順 170
15.4.2 監視キューの開始 172
監視キューの開始手順 172

16 統合検索サービス

16.1 インストールの概要 174
16.1.1 手順の概要 174
16.1.2 構成の決定 174
すべてのモジュールを ArcSuite サーバーにインストール 174
ストレージプロキシの分離インストール 174
管理ツールと登録アプリケーションの分離インストール 174
構成とインストールするモジュール 174
16.1.3 サービスの確認とキャビネット／ドロワーの登録 175
ドキュメント管理サービス管理コマンドで設定する 175
キャビネットを登録する 176
ドロワーを登録する 177
キャビネットのモードを normal にする 177
ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版で設定する 178
キャビネットを登録する 178
16.1.4 インストール前の準備 181
16.1.5 統合検索インストーラーの実行 182
統合検索インストーラーの機能概要 182
統合検索インストーラーの操作概要 182
16.1.6 Web ブラウザーの設定 182
16.1.7 インストール後の初期設定の実行 182
16.2 統合検索インストーラーの実行の詳細 183
16.2.1 インストール手順 183
16.3 Web ブラウザーの設定 187
16.3.1 Internet Explorer の設定 187
16.3.2 Google Chrome の設定 187
16.3.3 Microsoft Edge の設定 187
16.4 インストール後の初期設定の操作手順 188
16.4.1 作業の概要 188
16.4.2 ストレージプロキシ起動ユーザーの設定 188
ストレージプロキシの起動ユーザーを設定する 188
16.4.3 リソースの作成 189
ストレージタイプが NTFS の場合の操作 191
16.4.4 収集の開始 192
16.4.5 収集についての注意事項 193
名称について 193
収集するファイルの形式について 193

性能について 193

17 ArcSuiteの起動と終了

17.1 ArcSuite の起動（ログイン） 195
ArcSuite にログインする 195
17.2 ArcSuite の終了（ログアウト） 196
ArcSuite からログアウトする 196

18 動作確認

18.1 動作確認の概要 198
18.1.1 準備 198
18.1.2 動作確認の流れ 198
18.2 動作確認 199
18.2.1 キャビネットおよびドロワーの作成 199
データベース表領域を作成する 199
キャビネットを作成する 199
ドロワーを作成する 200
キャビネットのモードを変更する 201
18.2.2 Internet Explorer の設定 201
18.2.3 RMS 管理者へのライセンスの付与 201
18.2.4 ドキュメントスペースの確認 202
ドキュメントを登録する 202
ドキュメントのアクセス権を変更する 202
ドキュメントを表示する 203
18.2.5 RMS 管理者のライセンスの解除 203
18.2.6 キャビネットの削除 204

19 ライセンス認証

19.1 ライセンス認証 206
19.1.1 ArcSuite に必要なライセンス 206
19.1.2 ライセンスの認証方法 206
インターネットを使用する 206
ファイルを使用する 206
19.2 ArcSuite のライセンス認証 207
19.2.1 インターネットを使用してライセンスを認証する 207
クライアントアクセスライセンスまたは言語ライセンスを追加する 208
19.2.2 ファイルを使用してライセンスを認証する 209
ライセンスファイルでライセンスを認証する流れ 209
ライセンス認証情報ファイルを出力する 210
ライセンス認証情報ファイルをアップロードする 210
ライセンスファイルをダウンロードする 211
ライセンスファイルを使用してライセンスを認証する 211
19.3 ArcSuite ライセンス状態の表示 212
19.3.1 ライセンスの状態を確認する 212
19.4 ArcSuite ライセンスの削除 213
19.4.1 インターネットを使用してライセンスを削除する 213
19.4.2 ファイルを使用してライセンスを削除する 214
ファイルでライセンスを削除する流れ 214
ライセンス認証解除ファイルを出力する 214
ライセンス認証解除ファイルをアップロードする 215

19.5 ArcSuite ライセンス認証の解除 216
19.5.1 インターネットを使用してライセンスの認証を解除する 216
19.5.2 ファイルを使用してライセンスの認証を解除する 217
ライセンス認証解除ファイルでライセンス認証を解除する流れ 217
ライセンス認証解除ファイルを出力する 217
ライセンス認証解除ファイルをアップロードする 218
19.6 シリアル番号の削除 219
19.6.1 シリアル番号を削除する 219
19.7 ArcSuite ライセンスの移動 220

第 2 部 2 台以上の構成へのセットアップ

1 ArcSuiteのセットアップの概要
1.1 ArcSuite について 222
1.1.1 システム構成 222
2 台構成 222
負荷分散構成 223
クラスター構成 223
1.2 動作環境 224
1.3 セットアップ前の設定事項 225
本書でのシステム構成例 225
1.3.1 2 台構成での設定値 226
1.4 セットアップの流れ 234
ライセンスの管理 234
「富士フイルム BI ダイレクト」でのユーザー登録 234
ライセンスシリアル番号の取得 235
タイムスタンプサービスのライセンスファイルの取得 235
2 台構成でセットアップする場合の注意 235
セットアップの流れ 236

2 オペレーティングシステムと外部コンポーネント
2.1 Windows のインストール 239
2.1.1 OS が英語版のサーバーに必要な設定 239
2.1.2 Windows のサービス起動ユーザーの設定 239
2.1.3 Windows の環境設定 240
2.2 DocuWorks のインストール 241
2.3 ドキュメント編集ソフトウェアのインストール 242

3 データベース
3.1 データベースのインストール 244
3.1.1 「リポジトリーサーバーの最大セッション数」の見積もり 244
3.1.2 データベースインストーラー 244
3.1.3 データベースの起動と停止 249

4 コンポーネントサーバーの共通設定
4.1 コンポーネントサーバーの共通設定 251
4.1.1 「富士フイルム BI ダイレクト」でユーザー登録をする 251
4.1.2 コンポーネントサーバーの共通設定 251
コンポーネントサーバーの共通設定 251

5　リポジトリーサーバーの設定
5.1　リポジトリーサーバーの設定 260
5.1.1　リポジトリーサーバーの共通設定 260
リポジトリーサーバーの共通設定をする 260
5.1.2　ドキュメント管理サービスのインストール 263

6　追加リポジトリーサーバーの設定
6.1　追加リポジトリーサーバーおよびスレーブ管理サーバーの追加 268
6.1.1　サービス起動ユーザーの設定 268
サービス起動ユーザーを設定する 268
6.1.2　追加リポジトリーサーバーおよびスレーブ管理サーバーの共通設定 268
6.1.3　追加リポジトリーサーバーおよびスレーブ管理サーバーのインストール 272
ドキュメント管理サービスをインストールする 272

7　コンポーネントサーバーの設定
7.1　メッセージ通知サービスのインストール 275
7.2　ドキュメントスペースのインストール 276
7.3　コラボスペースのインストール 277
7.4　ドキュメントレビューオプションのインストール 278
7.5　ワークフローのインストール 279
7.6　原本性保証オプションのインストール 280
7.7　サーバーの再起動 281

8　Webブラウザーの設定
8.1　Internet Explorer の設定 283
8.2　Google Chrome の設定 284
8.3　Microsoft Edge の設定 285
8.4　Safari の設定 286

9　各コンポーネントの初期設定
9.1　ドキュメント管理サービスの初期設定 288
9.1.1　ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版での設定方法 288
9.1.2　ドキュメント管理サービス管理コマンドでの設定方法 289
9.1.3　ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web 版での設定方法 289
9.2　リソース管理アプリケーションでの初期設定 290
9.3　メッセージ通知管理アプリケーションでの初期設定 291
9.4　ドキュメントスペース管理アプリケーションでの初期設定 292
9.5　全文検索サービスの初期設定 293
9.6　関連文書検索サービスの初期設定 294
9.7　コラボスペースの初期設定 295
9.8　ワークフローの初期設定 296
9.8.1　初期設定 296
9.8.2　負荷分散構成の外部コマンド設定 296
共有ディスクを外部コマンド配置フォルダーにする 296
9.9　監視サービスの初期設定 298
9.10　ファイルフォーマット変換サービスの初期設定 299

9.10.1 DocuWorks のインストール後の設定をする 299
9.10.2 Microsoft Office のインストール後の設定をする 299
9.11 データベース表領域管理ツールの初期設定 300
9.12 Web サービスインターフェイスのための初期設定 301
9.12.1 システムプロパティの設定 301
9.12.2 負荷分散構成でのプロパティファイルの作成 301
9.13 インストールしたデータのバックアップ 303

10 キャプチャリングサービス
10.1 キャプチャリングサービスのインストール前の準備 305
10.2 キャプチャリングサービスのインストール 306
10.3 Web ブラウザーの設定 307
10.4 キャプチャリングサービスの初期設定 308

11 統合検索サービス
11.1 インストールの概要 310
11.2 統合検索インストーラーの実行 311
11.3 Web ブラウザーの設定 312
11.4 インストール後の初期設定 313

12 ArcSuiteの起動と終了
12.1 ArcSuite の起動（ログイン） 315
12.2 ArcSuite の終了（ログアウト） 316

13 動作確認
13.1 動作確認の概要 318
13.1.1 準備 318
13.1.2 動作確認の流れ 318
13.2 動作確認 319

14 ライセンス認証
14.1 ライセンス認証 321

第 3 部 バージョンアップ

1 概要
1.1 バージョンアップの種類 323

2 同じサーバーでのバージョンアップ（オールインワン構成の場合のみ）
2.1 概要 325
2.1.1 サーバー構成 326
2.1.2 バージョンアップ対象 326
2.2 同じサーバーでのバージョンアップの流れ 327
2.3 バージョンアップ前の事前確認 328
2.3.1 旧バージョンの稼働の確認 328
2.3.2 メッセージのスプールの確認 328

2.3.3 ダイジェストメールボックスの確認 328
2.3.4 表領域の使用率の確認 329
2.3.5 LDAPS の確認 329
2.4 DocuWorks のバージョンアップ 331
2.5 データベースのインストール 332
2.6 ArcSuite 4.0 のインストール 333
2.7 「switchdb.exe」の実行 334
2.8 「SwitchFile.exe」の実行 335
2.9 「switchmain.exe」の実行 336
2.10 バージョンアップ後の確認 337
2.11 「removeoldmain.exe」の実行 338
2.12 「removeolddb.exe」の実行 339
2.13 バージョンアップしたあとの設定 340
2.13.1 全文検索インデックス・関連文書検索インデックスを生成する 340
2.13.2 コラボスペースの全文検索インデックス・関連文書検索インデックスを生成する 340
2.13.3 全文検索エンジン連携を設定する 342
2.13.4 関連文書検索エンジン連携を設定する 342
2.13.5 SSL サーバー証明書を再設定する 343
2.14 ArcEPS と連携している環境を ArcSuite 4.0 にバージョンアップする手順と注意点 345

3 新サーバーへの移行とバージョンアップ
3.1 新サーバーへの移行とバージョンアップの概要 347
3.1.1 サーバー構成 348
3.1.2 バージョンアップ対象 348
3.2 新サーバーへの移行とバージョンアップの準備 349
3.3 新サーバーへの移行を伴うバージョンアップの流れ 350
3.4 旧サーバーでの確認とツールの準備 353
3.4.1 旧バージョンの稼働の確認 353
3.4.2 メッセージのスプールの確認 353
3.4.3 ダイジェストメールボックスの確認 354
3.4.4 表領域の使用率の確認 354
3.4.5 コラボスペースのインポートフォルダーの確認 354
3.4.6 ワークフローの外部コマンドを配置するフォルダーの確認 355
3.4.7 LDAPS の確認 356
3.4.8 オンラインバックアップが正常終了していることの確認 356
3.4.9 ツールの準備（旧サーバー） 357
3.5 外部連携サーバーのサービスの停止 358
3.6 旧サーバーでの事前チェック 359
3.6.1 コンピューター名、グローバルデータベース名、パスワードなどの確認 359
3.6.2 データ格納先フォルダー以外にあるストレージパスの確認 361
3.7 データのエクスポート 363
3.8 新サーバーの事前設定 365
3.8.1 ネットワークハブの接続 365
3.8.2 動作環境と設定する項目の確認 365
動作環境を確認する 365
設定する項目を確認する 365
3.8.3 オペレーティングシステムおよび外部コンポーネントのインストール 366

Windows をインストールする 366
DocuWorks、ドキュメント編集ソフトウェアをインストールする 366
3.8.4 ツールの準備（新サーバー） 366
3.9 データベースのインストール 367
3.10 サービスの起動方法の変更 368
3.11 新サーバーのホスト名の一時変更とネットワークへの接続 369
3.12 エクスポートデータのコピー 370
3.12.1 エクスポート先フォルダーのコピー 370
3.12.2 インストール先フォルダー、データ格納先フォルダーのコピー 371
3.13 その他のデータのコピー 372
3.13.1 サービス起動ユーザーの作成 372
3.13.2 ドキュメント管理サービスのストレージパスのフォルダーのコピー 373
ストレージパスのフォルダーのコピー 373
アクセス権の設定 374
3.13.3 コラボスペースのインポートフォルダーのコピー 375
インポートフォルダーのコピー 375
アクセス権の設定 375
3.13.4 ワークフローの外部コマンド配置フォルダーのコピー 376
外部コマンド配置フォルダーのコピー 376
アクセス権の設定 376
3.14 サービスの自動起動の設定 378
3.15 新サーバーのホスト名の変更 379
3.16 データのインポート 380
3.17 キャプチャリングサービスの監視キューフォルダーの作成 382
3.18 コンポーネントサーバーのインストール 383
共通の設定 383
3.19 リポジトリーサーバーのインストール 388
リポジトリーサーバーの共通設定 388
ドキュメント管理サービスのインストール 391
3.20 コンポーネントサーバーのインストール（続き） 392
3.21 外部連携サーバーへのインストール 396
3.21.1 キャプチャリングサービスのインストール 396
3.21.2 統合検索サービスのインストール 399
3.22 インストール後の設定 402
3.22.1 コラボスペースを設定する 402
メッセージ通知サーバーの URL 402
全文検索インデックスの生成 403
関連文書検索インデックスの再作成 404
3.22.2 ワークフローを設定する 404
メッセージ通知サーバーの URL 404
外部コマンド設定 405
3.22.3 全文検索エンジン連携を設定する 405
3.22.4 関連文書検索エンジン連携を設定する 406
3.22.5 データベース表領域管理ツールの性能向上のための設定をする 406
3.22.6 Web サービスインターフェイスのための設定をする 407
3.22.7 SSL サーバー証明書を再設定する 408
3.23 「mime.types」ファイルのコピー 409

3.24 SDK、IFTK、ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版のバージョンアップ 410
3.24.1 旧バージョンのアンインストール 410
3.24.2 新バージョンのインストール 410
3.25 デスクトップクライアントのバージョンアップ 411
3.26 連携フォルダ for DocuWorks のバージョンアップ 412
3.27 ドキュメント一括操作ツールのバージョンアップ 413
アンインストールする前に 415
コンポーネントサーバーでアンインストールする 416
リポジトリーサーバーでアンインストールする 416
アンインストール実行前の作業 418
キャプチャリングサービスをアンインストールする 418
IIS に対する設定 423
証明書とユーザーのマッピングデータの設定 423
ArcSuite のログイン方法の設定 424
簡易モードで補完する入力値 429
LDAP 連携とは 433
LDAP 連携を構成する 433
構成名とは 434
LDAP 連携のシステムプロパティ 434
連携用のシステムプロパティを設定する 435
同期コマンドを実行する 440
RMS の設定、各種ユーザー登録の確認 441
同期コマンドの設定、実行の確認 442
連携先の Active Directory がグローバルカタログの場合の制限 443
検索上限値を超えるエントリーの同期 443
Active Directory の制限 444
LDAP 連携確認シート（利用者用） 444
LDAP 連携確認シート（弊社サービスエンジニア用） 447
ユーザーを同期しない構成 453
ユーザーを同期する構成 454
ArcSuite の設定 455
Windows の設定 457
リソース管理アプリケーションを用いたユーザーの対応付け 458
リソース管理サービス管理ツールを用いたユーザーの対応付け 459
ユーザーを同期しない構成 460
ユーザーを同期する構成 460
ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版をインストールする 461
タイムスタンプサービスの変更に必要な情報 464
オールインワン構成の場合 476
2 台構成の場合 477
データベース表領域管理ツールを起動する 491
表領域の一覧を表示する 491
表領域のデータファイルを追加する 491
表領域のデータファイルのサイズを拡大する 492
データベース表領域管理ツールの終了 492

第1部 オールインワン構成のセットアップ

1 ArcSuiteのセットアップの概要

ここでは、オールインワン構成の場合の、セットアップ前に必要な準備作業と、セットアップの流れについて説明します。

1.1　ArcSuite について

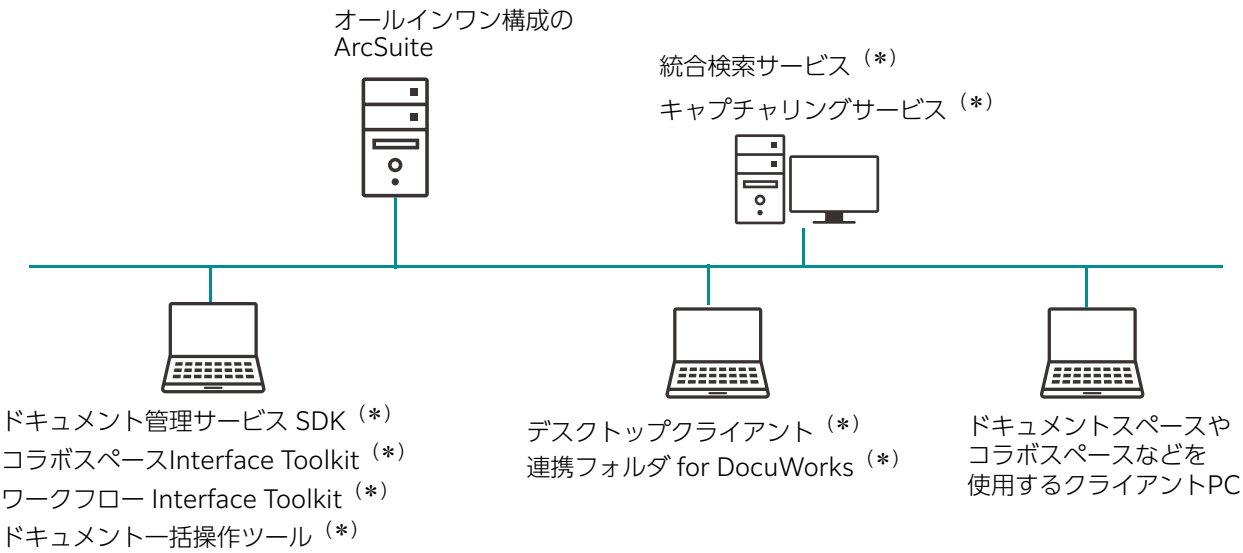
ArcSuiteとは、図面や文書の入力、管理、検索、出力までを統合的に管理し、情報の有効活用を支援する文書管理・活用ソフトウェアです。
この第1部では、オールインワン構成のセットアップについて説明します。
2台構成や負荷分散構成など、その他の構成でセットアップする場合については、第2部で説明しています。

参照　2 台構成、その他の構成の場合のセットアップについては、「第 2 部　2 台以上の構成へのセットアップ」(P.221) を参照してください。

オールインワン構成

「オールインワン構成」とは、次のコンポーネントが1台のサーバーにインストールされている構成です。

- データベース
- ドキュメント管理サービス
- ドキュメントスペース
- 全文検索サービス
- ファイルフォーマット変換サービス
- メッセージ通知サービス
- コラボスペース（*）
- ドキュメントレビューオプション（*）
- ワークフロー（*）
- 原本性保証オプション（*）
- 関連文書検索サービス（*）
- 分類ビュー（*）
- オンラインバックアップ（*）



（*）はオプション商品です。ご使用の商品構成によって提供されないことがあります。

参照　Evidence Tracker のセットアップについては、『Evidence Tracker セットアップガイド』を参照してください。

1.2 動作環境

最新の情報については、弊社公式サイトをご覧ください。

1.3 セットアップ前の設定事項

セットアップを開始する前に決めておく必要のある項目と、本書での設定値は次のとおりです。本書では、次の設定値で、セットアップの手順を説明します。

補足 設定値に関する注意制限事項は、各手順に記載しています。

参照 インストール時にインストーラーで初期値として表示される値については、「付録 N インストーラーの初期値」（P.479）を参照してください。

表 :設置場所やサーバーに関する設定項目

設定項目	本書での設定値	パスの記述例
設置場所のドメイン	example.com	
ArcSuite のサーバーのホスト名	arcsuite	arcsuite.example.com
外部連携サーバーのホスト名	gaibu	gaibu.example.com
SMTP/pop サーバーのホスト名	smtp	smtp.example.com
プロキシサーバーのホスト名	proxy	proxy.example.com

注記 ・ホスト名には、「_ （アンダースコア）」などの文字を指定しないでください。
・データベースをインストールするサーバーのホスト名（arcsuite.example.com など）は、37 文字以内にしてください。
・データベースをインストールするサーバーのコンピューター名は、15 文字以内にしてください。

参照 ホスト名の詳細については、次のサポート情報の「DNS ホスト名」および「DNS ドメイン名」を参照してください。
http://support.microsoft.com/kb/909264
URL は、2021 年 4 月現在のものです。

本書でのシステム構成例

本書でのセットアップ環境の例は次のとおりです。

表 :各サーバーに関する環境

項目	値	SMTP/POPサーバーの環境
ホスト名	arcsuite.example.com	smtp.example.com
OS	Windows Server 2019	
IP アドレス	192.168.1.1	192.168.1.4
DNS ドメインアドレス	なし	
DNS サーバーアドレス	なし	
netmask	255.255.255.0	
gateway	192.168.1.254	
その他のインストールソフト	・Microsoft Office ・DocuWorks	
Administrator パスワード	admin	

1.3.1 オールインワン構成の設定値

オールインワン構成の設定項目と、本書での設定値の例は、次のとおりです。

サービス/コンポーネント	設定項目	本書での設定値
データベース	データベースのインストール先	D:¥Database
	データファイルの配置先	D:¥Database¥datafiles
	データベース サーバー名	arcsuite.example.com
	グローバルデータベース名	arcsuite.example.com
	データベース管理者のパスワード	System0
データベース設定ツール	データベースの最大接続数算出方法	カスタム
	設置パターン	ロードバランス無し
	設置構成	All in One構成
	コンポーネントサーバー兼リポジトリーサーバーの台数	1（変更不可）
	リポジトリーサーバーの台数	0（変更不可）
	コンポーネントサーバーの台数	0（変更不可）
	コラボスペース	使用する
	ドキュメントレビューオプション	使用する
	ワークフロー	使用する
	原本性保証オプション	使用する
	作成予定のキャビネット数	20
	リポジトリーサーバーの最大セッション数	100
	追加リポジトリーサーバーの最大セッション数	0（変更不可）
	統合検索サービスの設置数	1
	データベースの最大接続数	518
共通設定	ユーザー名	ArcSuite
	会社名	FUJIFILM
	モード選択	通常モード
	インストール先のフォルダ	D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite
	データ格納先	D:¥ArcSuite
	データベースのサーバー名	arcsuite.example.com
	データベースのポート番号	1521
	グローバルデータベース名	arcsuite.example.com
	データベース管理者のパスワード	System0
	データベース RMS 用ユーザー名	rms

サービス/コンポーネント	設定項目	本書での設定値
共通設定	データベース RMS 用パスワード	rms
	データファイルの配置先	D:¥DATABASE¥DATAFILES¥ARCSUITE
	表領域名	rms
	データファイル名	rms.dbf
	データベース参照専用ユーザー名	rmsclient
	データベース参照専用パスワード	rmsclient
	システム名	ArcSuite
	システム ID	(発行されたシステムID)
	RMS の管理者ユーザー名	rmsadmin
	パスワード	rmsadmin001
	RMS の管理者ユーザーの表示名（JA）	RMS管理者
	RMS の管理者ユーザーの表示名（EN）	rmsadmin
	RMS の管理者に設定するユーザーロール名	administrators
	管理者ユーザーロールの表示名（JA）	管理者ロール
	管理者ユーザーロールの表示名（EN）	AdminRole
	ホスト名	arcsuite.example.com
	設置場所（JA）	サーバールーム
	設置場所（EN）	ServerRoom
	サービス起動ユーザー名	ARCUSRSVC
	パスワード	ArcSuite001
	グループ名	ARCGRPSVC
	SSL 構成の選択	SSLを使用しない
	HTTP ホスト名	arcsuite.example.com
	HTTP ポート番号	80
	ArcSuite 仮想ディレクトリー名	ArcSuite
	ArcSuite のサーバー間でアクセスを許可するホスト	以下のホストからのアクセスのみ受け付ける
	ログインの方法	自動ログインを使用する
	データベースのポータル用表領域	PORTAL_TBS
	データベースのポータル用データファイル名	PORTAL_TBS.dbf
	データベースのポータル用ユーザー名	PORTAL
	データベースのポータル用パスワード	PORTAL
	RMI レジストリサービスのポート番号	11099

サービス/コンポーネント	設定項目	本書での設定値
共通設定	ログ管理サービスのポート番号	11102
	オンラインバックアップのユーザー名 補足 オンラインバックアップをインストールする場合の設定項目です。	ONLINE_BACKUP
	オンラインバックアップのパスワード 補足 オンラインバックアップをインストールする場合の設定項目です。	ONLINE_BACKUP
	オンラインバックアップのアーカイブログの出力先 補足 オンラインバックアップをインストールする場合の設定項目です。	D:¥Database¥ArchiveLogArea
ドキュメント管理サービス	サービス ID	arcsuite
	サーバー ID	arcsuite
	ユーザー定義属性の名前空間	user
	データベースのサーバー名	arcsuite.example.com
	データベースのポート番号	1521
	グローバルデータベース名	arcsuite.example.com
	データベース管理者のパスワード	System0
	データベースのドキュメント管理サービス用表領域名	DREPSYS
	データベースのドキュメント管理サービス用データファイル名	DREPSYS.dbf
	データベースのドキュメント管理サービス用一時表領域名	DREPTEMP
	データベースのドキュメント管理サービス用一時表領域データファイル名	DREPTEMP.dbf
	データベースのドキュメント管理サービス用ユーザー名	DREP
	データベースのドキュメント管理サービス用ユーザーパスワード	drep
	管理サーバーのポート番号	11100
	リポジトリーサーバーのポート番号	11101
メッセージ通知サービス	SMTP サーバーのホスト名	smtp.example.com
	SMTP サーバーのポート番号	25
	管理者のメールアドレス	rmsadmin@example.com
	データベースのメッセージ通知サービス用表領域名	cmessage
	データベースのメッセージ通知サービス用データファイル名	cmessage.dbf

サービス/コンポーネント	設定項目	本書での設定値
メッセージ通知サービス	データベースのメッセージ通知サービス用ユーザー名	cmuser
	データベースのメッセージ通知サービス用ユーザーパスワード	cmuser
	ドキュメント管理サービスのサービス ID	arcsuite
	ドキュメント管理サービスの管理者ユーザー名	rmsadmin
	メッセージ通知サービス用キャビネットのストレージパス	(未入力)
ドキュメントスペース	データベースのドキュメントサービス用表領域名	eappli
	データベースのドキュメントサービス用データファイル名	eappli.dbf
	データベースのドキュメントスペース用ユーザー名	eappli
	データベースのドキュメントスペース用ユーザーパスワード	eappli
コラボスペース	サーバー ID	0001
	データベースのコラボスペース用表領域名	collabospace
	データベースのコラボスペース用データファイル名	collabospace.dbf
	データベースのコラボスペース用ユーザー名	couser
	データベースのコラボスペース用ユーザーパスワード	couser
	全文検索サービス	fts2@arcsuite
	関連文書検索サービス	kSearchDuo@arcsuite
	ドキュメント管理サービスのサービス ID	arcsuite
	ドキュメント管理サービス管理者のユーザー名	rmsadmin
	コラボスペース用キャビネットのストレージパス	(未入力)
ドキュメントレビューオプション	データベースのドキュメントレビューオプション用表領域の名前	dbcollabo
	データベースのドキュメントレビューオプション用データファイル名	dbcollabo.dbf
	データベースのドキュメントレビューオプション用ユーザー名	dbcollabouser
	データベースのドキュメントレビューオプション用ユーザーパスワード	dbcollabouser

サービス/ コンポーネント	設定項目	本書での設定値
ワークフロー	データベースのワークフロー用表領域名	wf
	データベースのワークフロー用データファイル名	wf.dbf
	データベースのワークフロー用ユーザー名	wf
	データベースのワークフロー用ユーザーパスワード	wf
	ドキュメント管理サービスのサービス ID	arcsuite
	ドキュメント管理サービスの管理者ユーザー名	rmsadmin
	ワークフロー用キャビネットのストレージパス	(未入力)
原本性保証 オプション	プロキシサーバーのサーバー名	proxy.example.com
	プロキシサーバーのポート番号	8080
	タイムスタンプサービスのライセンスファイル	(アマノタイムスタンプサービスの契約時に提供されたライセンスファイル)

サービス/ コンポーネント	設定項目	本書での設定値
原本性保証 オプション	タイムスタンプサービス接続パスワード	(アマノタイムスタンプサービスの契約時に提供されたパスワード)
	タイムスタンプサービスの URL	・従量制メニューの場合 http://tss3161.e-timing.ne.jp/astdtssvr/TSRequest ・定額制メニューでポート番号を変更していない場合 http:// {e-timing Proxy 3161 for AMANO TSAをインストールしたサーバーのFQDNまたはIPアドレス} /atssprxy/Proxy ・定額制メニューでポート番号を変更している場合 http:// {e-timing Proxy 3161 for AMANO TSAをインストールしたサーバーのFQDNまたはIPアドレス} : {ポート番号} / atssprxy/Proxy 補 足 ・従量制メニューおよび定額制メニューは、アマノセキュアジャパン株式会社の料金メニューです。 ・「e-timing Proxy 3161 for AMANO TSA」は、アマノセキュアジャパン株式会社のソフトウェアです。
	ドキュメント管理サービスのサービス ID	arcsuite
	ドキュメント管理サービスの管理者ユーザー名	rmsadmin
	証明書格納用キャビネットの Certificates ストレージパス	(未入力)
	証明書格納用キャビネットの TrustAnchors ストレージパス	(未入力)
キャプチャリングサービス	ユーザー名	ArcSuite
	会社名	FUJIFILM
	インストール先のフォルダ	D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite
	データ格納先	D:¥ArcSuite
	HTTP ホスト名	arcsuite.example.com
	HTTP ポート番号	19115
	ArcSuite 仮想ディレクトリー名	ArcSuite
	サービス起動ユーザー名	ARCUSRSVC
	サービス起動ユーザーのパスワード	ArcSuite001

サービス/ コンポーネント	設定項目	本書での設定値
キャプチャリングサービス	サービス起動ユーザーのグループ名	ARCGRPSVC
	RMI レジストリーサービスのポート番号	19145
	キャプチャリングサービスの管理ユーザー名	capadmin
	キャプチャリングサービスの管理ユーザーパスワード	capadmin001
	登録先の ArcSuite の Web サービス	http://arcsuite.example.com/ArcSuite
	HTTP プロキシサーバーのホスト名	proxy.example.com
	HTTP プロキシサーバーのポート番号	8080
統合検索サービス	ユーザー名	ArcSuite
	会社名	FUJIFILM
	インストール先のフォルダ	D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite
	データ格納先	D:¥ArcSuite
	データベースのサーバー名	arcsuite.example.com
	データベースのポート番号	1521
	グローバルデータベース名	arcsuite.example.com
	データベース RMS 用ユーザー名	rms
	データベース RMS 用パスワード	rms
	データベース参照専用ユーザー名	rmsclient
	データベース参照専用パスワード	rmsclient
	ホスト名	gaibu.example.com
	設置場所（JA）	サーバールーム
	設置場所（EN）	ServerRoom
	サービス起動ユーザー名	ARCUSRSVC
	サービス起動ユーザーのパスワード	ArcSuite001
	サービス起動ユーザーのグループ名	ARCGRPSVC
	HTTP ポート番号	19105
	ArcSuite 仮想ディレクトリー名	ArcSuite
	データベースのサーバー名	arcsuite.example.com
	データベースのポート番号	1521
	グローバルデータベース名	arcsuite.example.com
	データベース管理者のパスワード	System0
	データベースの統合検索サービス用表領域名	DGA

サービス/ コンポーネント	設定項目	本書での設定値
統合検索 サービス	データベースの統合検索サービス用表領域データファイル名	DGA.dbf
	データベースの統合検索サービス用一時表領域名	DGA_TMP
	データベースの統合検索サービス用一時表領域データファイル名	DGA_TMP.dbf
	データベースの統合検索サービス用ユーザー名	DGA
	データベースの統合検索サービス用ユーザーパスワード	dga
	想定文書情報	500000
	ストレージプロキシの説明	DocumentGatheringAgentStorageProxy

1.4 セットアップの流れ

ここでは、セットアップの流れをフロー図で示します。フロー図では、各操作項目の詳細な手順を説明している参照先（項番号）も示しています。
なお、インストールの実行中にエラーが発生した場合、エラーメッセージが表示されます。エラーメッセージが表示された場合は、記述された内容を確認してから対処します。

ライセンスの管理

ライセンスの管理は、ライセンスアクティベーターによって行われます。ライセンスアクティベーターは、ArcSuiteをインストールするとインストールされます。

・ライセンスアクティベーター
ライセンス情報の登録処理や、アクティベーション / ディアクティベーション処理を管理するソフトウェアです。ライセンスアクティベーターはインストールするときに自動的に起動し、アクティベーションができます。インストールするときにアクティベーションをしなかった場合、インストールしたあとにライセンスアクティベーターを起動して、アクティベーションをすることもできます。

参照 ライセンス認証についての詳細は、「19 ライセンス認証」（P.205）を参照してください。

・ライセンス認証処理
ライセンスアクティベーターで、ライセンス認証する製品のライセンスシリアル番号を入力し、ユーザー登録で設定したメールアドレス（ユーザー ID）およびパスワードを入力すると、ライセンス認証処理が行われます。これを「アクティベーション」と言います。
ライセンス認証の解除も同様にライセンスアクティベーターで行われます。これを「ディアクティベーション」と言います。

「富士フイルム BI ダイレクト」でのユーザー登録

ライセンスのアクティベーションで、「メールアドレス」（ユーザー ID）と「パスワード」の入力が必要となります。ライセンスのアクティベーションの前に、「富士フイルムBIダイレクト」のサイトでユーザー登録を行い、「メールアドレス」（ユーザー ID）と「パスワード」を設定します。

参照 ユーザー登録についての詳細は、「4.1.1 「富士フイルム BI ダイレクト」でユーザー登録をする」（P.57）を参照してください。

ライセンスシリアル番号の取得

ライセンスは、対応するシリアル番号を入力することで利用可能です。
ライセンスには、大きく分けて次の3種類があります。

・コンポーネントライセンス
ライセンスを必要とするコンポーネントをインストール・運用するときに必要なライセンスで、それぞれのシリアル番号が必要です。
コンポーネントライセンスは、ArcSuite サーバーごとに設定します。

・言語ライセンス
言語を使用するときに必要なライセンスです。
ArcSuite サーバーごとに必要です。
言語ライセンスは、ArcSuite サーバーごとに指定します。

・クライアントアクセスライセンス（CAL）
基本アクセスライセンス、ドキュメントスペース CAL、コラボスペース CAL、ワークフロー CAL の 4 種類があります。
基本アクセスライセンスはシステム内に 1 つ必要です。
クライアントアクセスライセンスは、ArcSuite をインストールするときに指定します。
ドキュメントスペース CAL、コラボスペース CAL、およびワークフロー CAL は、インストールしたあとで追加できます。それぞれのコンポーネントを利用するユーザーの数だけ必要です。

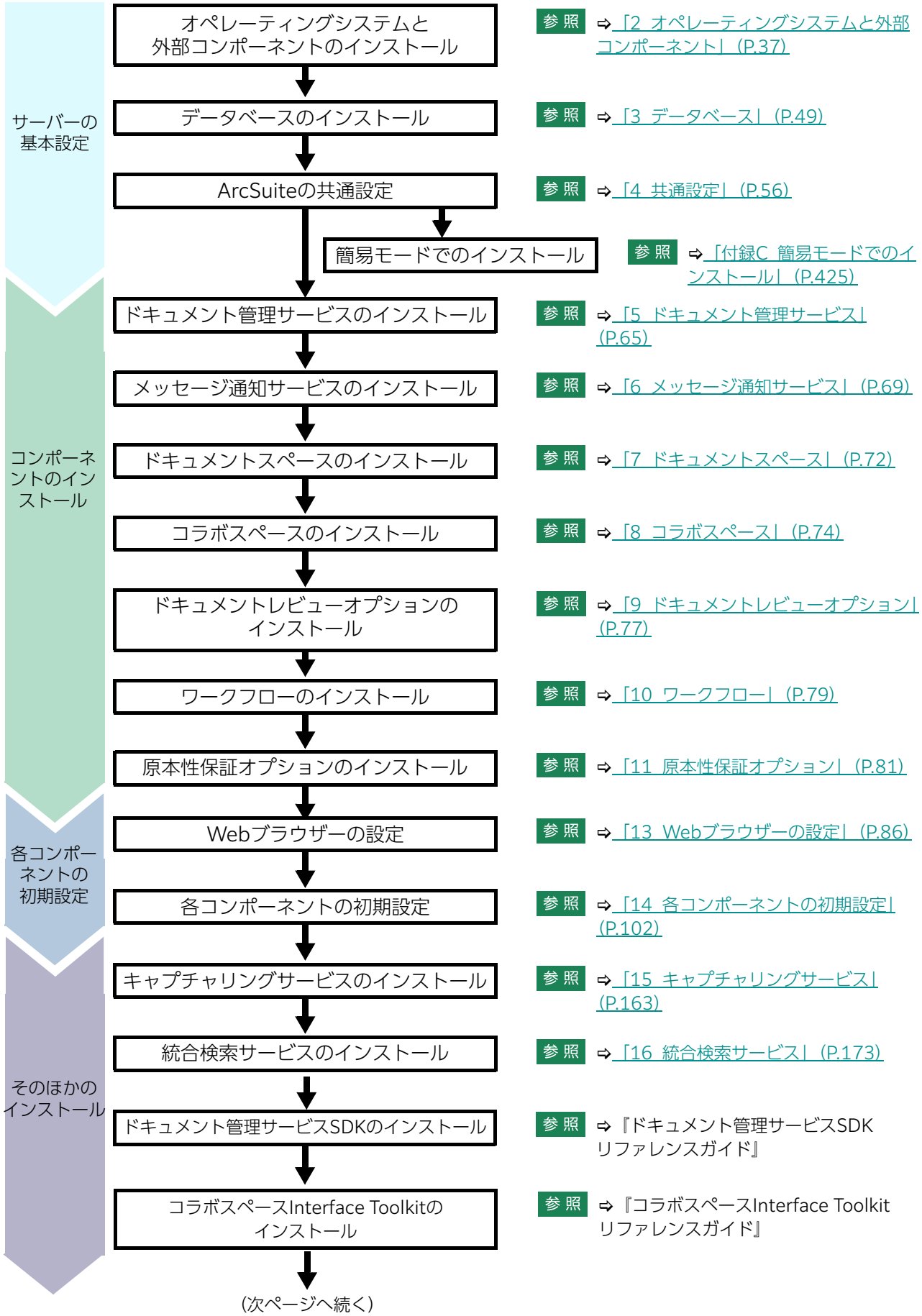
注記 **インストールする環境やライセンスによっては、このマニュアルでの手順と異なる場合があります。注意してください。**

参照 ライセンスシリアル番号の発行方法については、「ArcSuite 4.0 インストール」インストールメディアの「License」フォルダーにある『シリアル番号ファイル発行依頼書』を参照してください。

タイムスタンプサービスのライセンスファイルの取得

原本性保証オプションをインストールする場合には、あらかじめ「アマノタイムスタンプサービス」に契約してライセンスファイルを入手する必要があります。
詳しくは、『e-文書法対応 概要説明書』を参照してください。

セットアップの流れ



参照 ⇨「2 オペレーティングシステムと外部コンポーネント」(P.37)

参照 ⇨「3 データベース」(P.49)

参照 ⇨「4 共通設定」(P.56)

参照 ⇨「付録C 簡易モードでのインストール」(P.425)

参照 ⇨「5 ドキュメント管理サービス」(P.65)

参照 ⇨「6 メッセージ通知サービス」(P.69)

参照 ⇨「7 ドキュメントスペース」(P.72)

参照 ⇨「8 コラボスペース」(P.74)

参照 ⇨「9 ドキュメントレビューオプション」(P.77)

参照 ⇨「10 ワークフロー」(P.79)

参照 ⇨「11 原本性保証オプション」(P.81)

参照 ⇨「13 Webブラウザーの設定」(P.86)

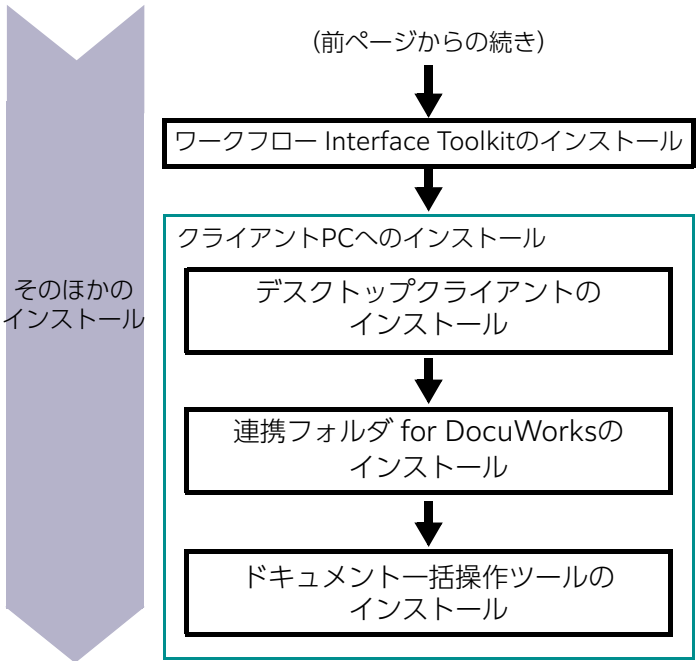
参照 ⇨「14 各コンポーネントの初期設定」(P.102)

参照 ⇨「15 キャプチャリングサービス」(P.163)

参照 ⇨「16 統合検索サービス」(P.173)

参照 ⇨『ドキュメント管理サービスSDK リファレンスガイド』

参照 ⇨『コラボスペースInterface Toolkit リファレンスガイド』



参照 ⇨『ワークフロー Interface Toolkit リファレンスガイド』

参照 ⇨『デスクトップクライアント セットアップガイド』

参照 ⇨『連携フォルダ for DocuWorks セットアップガイド』

参照 ⇨『ドキュメント一括操作ツール 説明書』

参照 Evidence Tracker をインストールする場合のセットアップの流れは、『Evidence Tracker セットアップガイド』を参照してください。

2 オペレーティングシステムと外部コンポーネント

最初に、ArcSuiteをインストールするサーバーにオペレーティングシステムと外部コンポーネントをインストールします。

2.1 Windows のインストール

ArcSuiteをインストールするサーバーに、サポートしているOSをインストールします。

注記 サーバーを用意するときに注意することは、次のとおりです。

・ドメインコントローラーとして動作しているサーバーに ArcSuite をインストールしないでください。

・ArcSuite を構成するソフトウェアおよび ArcSuite で使用するドキュメント編集ソフトウェアなど、ArcSuite で必要とするソフトウェア以外はインストールしないでください。

・必ず Internet Information Services（以降、「IIS」と表記します）をインストールし、World Wide Web Publishing Service が自動で起動するように設定してください。

・次のドライブは、必ず NTFS ファイルシステムでフォーマットしてください。

- システムドライブ
- ArcSuite のインストール先に指定するドライブ
- ArcSuite のデータ格納先に指定するドライブ
- ArcSuite が使用するドライブ

参照 サポートしている OS のインストール手順については、Windows 付属の説明書を参照してください。

2.1.1 OS が英語版のサーバーに必要な設定

次のOSの場合に必要な設定をします。

・Windows Server 2016 英語版

・Windows Server 2019 英語版

必要な設定については、「付録」OSが英語版のサーバーに必要な設定」（P.466）を参照してください。

2.1.2 Windows のサービス起動ユーザーの設定

ArcSuiteをインストールするサーバーに、ArcSuiteの各コンポーネントを起動するためのユーザー（サービス起動ユーザー）を登録します。サービス起動ユーザーとグループの設定は、ArcSuiteインストール時にも行えます。

補足 ・サービス起動ユーザーには、ローカルユーザーまたは既存のドメインユーザーを指定することもできます。

・サービス起動ユーザーおよびグループが設定されていない場合、インストール時に自動で設定されます。

ここでは、次のサービス起動ユーザーおよびグループを設定する例を説明します。

・ユーザー
ARCUSRSVC

・グループ
ARCGRPSVC

Windowsのサービス起動ユーザーを設定する手順は、次のとおりです。

・ユーザー名とパスワードを設定する

・グループを設定する

・「サービスとしてログオン」の権利を設定する

ユーザー名とパスワードを設定する

サービス起動ユーザーのユーザー名とパスワードを設定します。

1. ArcSuite をインストールするサーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. Windows の［スタート］メニューから、［Windows 管理ツール］＞［コンピューターの管理］を選択します。
   ［コンピューターの管理］画面が表示されます。
3. ツリーから、［システムツール］＞［ローカル ユーザーとグループ］＞［ユーザー］を選択します。
4. ［操作］メニューから、［新しいユーザー］を選択します。
   ［新しいユーザー］画面が表示されます。
5. ［ユーザー名］に、登録するユーザー名を入力します。
   ここでは、「ARCUSRSVC」と入力します。
6. ［フルネーム］に登録するユーザーのフルネームを入力します。
   ここでは、「ARCUSRSVC」と入力します。
7. ［説明］にユーザーの説明を入力します。
   ここでは、「ARCUSRSVC」と入力します。
8. ［パスワード］および［パスワードの確認入力］に、登録するユーザーのパスワードを入力します。
   ここでは、「ArcSuite001」と入力します。
   入力した文字はすべて「*」で表示されます。
9. ［ユーザーは次回ログオン時にパスワードの変更が必要］のチェックマークを外します。
10. ［パスワードを無期限にする］にチェックマークを付けます。
11. ［作成］をクリックします。
    入力した内容でユーザーが作成されます。
12. ［閉じる］をクリックします。
    ［新しいユーザー］画面が閉じます。

グループを設定する

グループを設定します。
サービス起動ユーザーのファイルアクセス権限を一元管理するため、「ARCUSRSVC」を「ARCGRPSVC」グループに加えます。

1. ［コンピューターの管理］画面で、ツリーから［システムツール］＞［ローカル ユーザーとグループ］＞［グループ］を選択します。
   画面内の右側にグループの一覧が表示されます。
2. ［操作］メニューから、［新しいグループ］を選択します。
   ［新しいグループ］画面が表示されます。
3. ［グループ名］に、グループの名前を入力します。
   ここでは、「ARCGRPSVC」と入力します。
4. ［追加］をクリックします。
   ［ユーザーの選択］画面が表示されます。
5. ［詳細設定］をクリックします。

6. [共通クエリ] エリア右側の [検索] をクリックします。
7. 検索結果に表示されているユーザーの一覧から、該当するユーザーを選択します。
   ここでは、「ARCUSRSVC」を選択します。
8. [OK] をクリックします。
   [選択するオブジェクト名を入力してください] に、選択したユーザーが表示されます。
9. [OK] をクリックします。
   [ユーザーの選択] 画面が閉じて、[新しいグループ] 画面に戻ります。
10. [所属するメンバー] にユーザーが追加されていることを確認して、[作成] をクリックします。
    [新しいグループ] 画面が閉じます。

「サービスとしてログオン」の権利を設定する

「サービスとしてログオン」の権利を設定します。
作成したユーザー（「ARCUSRSVC」）がサービスを起動できるように、「サービスとしてログオン」の権利を「ARCUSRSVC」に設定します。

1. [サーバーマネージャー] 画面を表示します。
2. [ツール] メニューから [ローカルセキュリティポリシー] を選択します。
   [ローカルセキュリティポリシー] 画面が表示されます。
3. ツリーから、[ローカルポリシー] > [ユーザー権利の割り当て] を選択します。
   画面内の右側にポリシーの一覧が表示されます。
4. 一覧として表示されたポリシーの中から、[サービスとしてログオン] をダブルクリックします。
   [サービスとしてログオンのプロパティ] 画面が表示されます。
5. [ユーザーまたはグループの追加] をクリックします。
   [ユーザーまたはグループの選択] 画面が表示されます。
6. [詳細設定] をクリックします。
7. [共通クエリ] エリア右側の [検索] をクリックします。
8. 検索結果に表示されているユーザーの一覧から、該当するユーザーを選択します。
   ここでは、「ARCUSRSVC」を選択します。
9. [OK] をクリックします。
   [選択するオブジェクト名を入力してください] に、選択したユーザーが表示されます。
10. [OK] をクリックします。
    [ユーザーまたはグループの選択] 画面が閉じて、[サービスとしてログオンのプロパティ] 画面に戻ります。
11. ユーザーが追加されていることを確認して、[OK] をクリックします。
    [サービスとしてログオンのプロパティ] 画面が閉じます。

これで、サービス起動ユーザーの設定は終了です。

2.1.3 Windows の環境設定

各サーバーで、フルコンピューター名、サブネットマスク、デフォルトゲートウェイ、およびDNSサーバーなどの環境設定をします。
ここでは、設定の操作を例に説明します。環境に応じた設定をします。

・フルコンピューター名を設定する
・TCP/IP プロトコルを設定する
・IIS をインストールする
・Microsoft .NET Framework 3.5 をインストールする
・ファイルのアップロードサイズの制限値を変更する

フルコンピューター名を設定する

フルコンピューター名は、「コンピューター名」と「ドメイン名」を指定して設定します。
データベースをインストールするサーバーの場合、フルコンピューター名は37文字以内にします。

注記 ・データベースをインストールするサーバーのフルコンピューター名は、37 文字以内にしてください。37 文字を超えている場合、データベースをインストールできません。
・データベースをインストールするサーバーのコンピューター名は、15 文字以内にしてください。15 文字を超えている場合、データベースをインストールできません。

1. ArcSuite をインストールするサーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. Windows の［スタート］メニューから、［コントロールパネル］を選択します。
［コントロールパネル］画面が表示されます。
3. ［システムとセキュリティ］＞［システム］をクリックします。
［システム］画面が表示されます。
4. ［コンピューター名、ドメインおよびワークグループの設定］の［設定の変更］をクリックします。
［システムのプロパティ］画面の［コンピューター名］タブの内容が表示されます。
5. ［変更］をクリックします。
［コンピューター名 / ドメイン名の変更］画面が表示されます。
6. ［コンピューター名］を入力します。たとえば、「arcsuite」と入力します。

注記 コンピューター名は、15 文字以内にしてください。15 文字を超えている場合、データベースをインストールできません。

補足 コンピューター名は、先頭が英字、それ以降は英数字、「- （ハイフン）」、「. （ピリオド）」を使用できます。

7. ［詳細］をクリックします。
［DNS サフィックスと NetBIOS コンピューター名］画面が表示されます。
8. ［このコンピューターのプライマリ DNS サフィックス］にドメイン名を入力します。ここでは「example.com」と入力します。

補足 ［ドメインのメンバーシップが変更されるときにプライマリ DNS サフィックスを変更する］は、運用環境に応じて設定します。

9. ［OK］をクリックします。
［DNS サフィックスと NetBIOS コンピューター名］画面が閉じて、［コンピューター名 / ドメイン名の変更］画面に戻ります。
10. フルコンピューター名を確認し、［OK］をクリックします。

注記 データベースをインストールするサーバーの場合は、フルコンピューター名が 37 文字以内であることを確認してください。

［コンピュータ名の変更］画面が閉じて、フルコンピューター名が変更されます。

11. ［システムのプロパティ］画面で［OK］をクリックします。
［システムのプロパティ］画面が閉じて、［コントロールパネル］画面に戻ります。

TCP/IP プロトコルを設定する

TCP/IPプロトコルを設定します。

注記 サブネットマスク、デフォルトゲートウェイ、および優先 DNS サーバーは、そのネットワークの環境によって、入力する値が異なります。入力する値については、ネットワーク管理者に確認してください。

1. Windows の［スタート］メニューから、［コントロールパネル］を選択します。
［コントロールパネル］画面が表示されます。
2. ［ネットワークとインターネット］の［ネットワークの状態とタスクの表示］をクリックします。
［ネットワークと共有センター］画面が表示されます。
3. ［アクティブなネットワークの表示］の［イーサネット］をクリックします。
［イーサネットの状態］画面が表示されます。
4. ［プロパティ］をクリックします。
［イーサネットのプロパティ］画面が表示されます。
5. ［インターネットプロトコル バージョン 6（TCP/IPv6)］のチェックマークを外します。
6. ［インターネットプロトコル バージョン 4（TCP/IPv4)］を選択し、［プロパティ］をクリックします。
［インターネットプロトコル バージョン 4（TCP/IPv4）のプロパティ］画面が表示されます。
7. ［次の IP アドレスを使う］を選択します。
8. ArcSuite をインストールするサーバーの［IP アドレス］を入力します。たとえば、「192.168.1.1」と入力します。
9. ［サブネットマスク］を入力します。たとえば「255.255.255.0」と入力します。
10. ［デフォルトゲートウェイ］を入力します。たとえば「192.168.1.254」と入力します。
11. ［次の DNS サーバーのアドレスを使う］を選択します。
12. ［優先 DNS サーバー］を入力します。
13. ［OK］をクリックします。
［インターネットプロトコル バージョン 4（TCP/IPv4）のプロパティ］画面が閉じて、サブネットマスク、デフォルトゲートウェイ、および DNS サーバーが設定されます。
14. ［イーサネットのプロパティ］画面で［OK］をクリックします。
15. ［イーサネットの状態］画面で［閉じる］をクリックします。

IIS をインストールする

IISをインストールします。

1. ArcSuite をインストールするサーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。

   補足 2 台以上で構成されている場合は、コンポーネントサーバーにサインインします。

2. Windows の［スタート］メニューから、［サーバーマネージャー］を選択します。
   ［サーバーマネージャー］画面が表示されます。

3. ［管理］メニューから［役割と機能の追加］を選択します。
   ［役割と機能の追加ウィザード］が表示されます。

4. ［次へ］をクリックします。

5. ［役割ベースまたは機能ベースのインストール］を選択し、［次へ］をクリックします。

6. ArcSuite をインストールするサーバーを選択し、［次へ］をクリックします。

7. ［Web サーバー（IIS）］を選択して、［次へ］をクリックします。

   補足 必要な機能がインストールされていない場合は、追加の画面が表示されます。［機能の追加］をクリックします。

8. ［次へ］をクリックして、［役割サービスの選択］画面の表示まで進みます。

9. ［役割サービス］で、次の項目のチェックボックスにチェックマークが付いていることを確認します。チェックマークが付いていない場合は、チェックマークを付けます。
   - ［Web サーバー］＞［HTTP 共通機能］＞［HTTP エラー］、［ディレクトリの参照］、［既定のドキュメント］、［静的なコンテンツ］
   - ［Web サーバー］＞［セキュリティ］＞［要求フィルター］、［IP およびドメインの制限］
   - ［Web サーバー］＞［パフォーマンス］＞［静的なコンテンツの圧縮］
   - ［Web サーバー］＞［状態と診断］＞［HTTP ログ］、［要求の監視］
   - ［Web サーバー］＞［アプリケーション開発］＞［ISAPI フィルター］、［ISAPI 拡張］
   - ［管理ツール］＞［IIS 管理コンソール］

   補足 ログイン方法で［統合 Windows 認証を使用する］を選択する場合は、［Windows 認証］の役割サービスを追加します。

10. ［Web サーバー］＞［アプリケーション開発］＞［ASP.NET 3.5］、［ASP.NET 4.5］、［ASP.NET 4.6］、および［ASP.NET 4.7］にチェックマークが付いていないことを確認します。チェックマークが付いている場合は、チェックマークを外します。

    注記 ASP.NET がインストールされている場合、ArcSuite が正しく動作しません。

    補足 OS によっては、［ASP.NET 3.5］、［ASP.NET 4.5］、［ASP.NET 4.6］、または［ASP.NET 4.7］のうち、存在しない項目があります。

11. ［次へ］をクリックします。

12. ［インストール］をクリックします。

13. ［閉じる］をクリックします。

Microsoft .NET Framework 3.5 をインストールする

ArcSuiteをインストールするサーバーに、ファイルフォーマット変換サービスを正常に動作させるために必要なMicrosoft .NET Framework 3.5を、追加でインストールする必要があります。

次の手順で、Microsoft .NET Framework 3.5をインストールします。

補足 Windows Server 2016 英語版または Windows Server 2019 英語版の場合で、すでに Microsoft .NET Framework 3.5 がインストールされているときは、この設定は必要ありません。

参照 サーバーの OS と Microsoft .NET Framework のバージョンの依存関係については、次のページを参照してください。
https://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/bb822049(v=vs.110).aspx
URL は、2021 年 4 月現在のものです。

Windows Server 2016、Windows Server 2019 の場合

1. ArcSuite をインストールするサーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. Windows の［スタート］メニューから、［サーバーマネージャー］を選択します。
［サーバーマネージャー］画面が表示されます。
3. ［管理］メニューから［役割と機能の追加］を選択します。
［役割と機能の追加ウィザード］が表示されます。
4. ［次へ］をクリックします。
5. ［次へ］をクリックします。
6. ［次へ］をクリックします。
7. ［次へ］をクリックします。
8. ［機能の選択］で、［.NET Framework 3.5 Features］を選択して、［次へ］をクリックします。
選択されている場合は、［キャンセル］をクリックします。
9. ［インストールオプションの確認］で、［必要に応じて対象サーバーを自動的に再起動する］にチェックマークを付けます。

   補足 画面上部に「代替ソースパスを指定する必要がありますか？ ...（以下略）」というメッセージが表示された場合は、OS のインストールメディアが必要です。
   OS のインストールメディアをドライブにセットしたあと、［代替ソース パスの指定］をクリックし、［パス］に「{OS のインストールメディア} ¥Sources¥SxS」を入力してください。

10. ［はい］をクリックします。

    補足 ［いいえ］をクリックした場合、「.NET Framework 3.5 Features」をインストールしたあとで、サーバーを再起動します。

11. ［インストール］をクリックします。
インストールが完了したら、［{サーバー名} でインストールが正常に完了しました。］が表示されます。
12. ［閉じる］をクリックします。
13. 手順 9 で［必要に応じて対象サーバーを自動的に再起動する］にチェックマークを付けなかった場合、または手順 10 で［いいえ］をクリックした場合は、サーバーを再起動します。

Windows 8.1 または Windows 10 の場合

1. Windows の［スタート］ボタンを右クリックして、［プログラムと機能］を選択します。
2. ［プログラムと機能］で［Windows の機能の有効化または無効化］をクリックします。
3. ［.NET Framework 3.5 （.NET 2.0 および 3.0 を含む）］にチェックマークを付けます。
4. ［OK］をクリックします。
5. ［Windows Update からファイルをダウンロードする］をクリックします。
変更が完了したことを表すメッセージが表示されます。

6. ［閉じる］をクリックします。

ファイルのアップロードサイズの制限値を変更する

IISでは、アップロードできるファイルサイズの初期値として、30,000,000バイト（約28.6MB）が設定されています。
このサイズより大きなファイルをArcSuiteに登録する運用の場合、コマンドを実行してファイルサイズの制限値をIISに設定します。

補足
- 2 台以上の構成の場合は、すべてのコンポーネントサーバーで設定してください。
- ファイルのアップロードサイズの制限値を変更していない場合、ドキュメントスペースなどからファイルを登録すると「サーバーへのリクエスト送信に失敗しました。サーバーとの接続がリセットされました。」などのメッセージが表示されます。
- Web サービスインターフェイスを使用して作成されたアプリケーションから、ArcSuite にファイルを登録する運用などの場合でも、制限値を設定してください。

1. Windows の［スタート］メニューから、［Windows システムツール］＞［コマンドプロンプト］を右クリックし、［その他］＞［管理者として実行］を選択します。
［管理者：コマンド プロンプト］画面が表示されます。

2. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
%windir%¥system32¥inetsrv¥appcmd set config -section:system.webServer/
security/requestFiltering /requestLimits.maxAllowedContentLength:｛ファイルの
アップロードサイズ｝
```

たとえば、「{ファイルのアップロードサイズ}」が「4000000000」の場合は、次のように入力します。

```
%windir%¥system32¥inetsrv¥appcmd set config -section:system.webServer/
security/requestFiltering /requestLimits.maxAllowedContentLength:4000000000
```

補足 {ファイルのアップロードサイズ} には、0 ～ 4294967295 の範囲でバイト数を入力します。

3. Windows の［スタート］メニューから、［Windows 管理ツール］＞［インターネット インフォメーション サービス（IIS）マネージャー］を選択します。
［インターネット インフォメーション サービス（IIS）マネージャー］画面が表示されます。

4. 左側の［接続］ツリーから、サーバーを選択します。

5. 右側の［操作］エリアで、［再起動］をクリックします。

2.2 DocuWorks のインストール

文書を変換したり全文検索をしたりする運用や、ドキュメントレビューオプションを使用する場合、また、キャプチャリングサービスを使用する場合は、ArcSuiteサーバーに、DocuWorksをインストールします。

補 足
- 2 台以上の構成の場合は、すべてのコンポーネントサーバーおよびリポジトリーサーバーに DocuWorks をインストールします。
- キャプチャリングサービスをインストールするサーバーの場合は、キャプチャリングサービスをインストールしたあとに DocuWorks をインストールすることもできます。
- ArcSuite の運用には DocuWorks 本体のインストールが必要です。
  DocuWorks に付属の Update Service、DocuWorks 連携フォルダ for Working Folder、ネットプリント DocuWorks Plug-in、DocuWorks PDF Creator などは、インストールする必要はありません。

参 照 DocuWorks のインストール手順については、DocuWorks のマニュアルを参照してください。

2.3 ドキュメント編集ソフトウェアのインストール

文書を変換する運用の場合、必要なドキュメント編集ソフトウェア（Microsoft Officeアプリケーションなど）を、次のArcSuiteサーバーにそれぞれインストールします。

・ファイルフォーマット変換サービスをインストールするサーバー

・キャプチャリングサービスをインストールするサーバー

補足
・2 台以上の構成では、ファイルフォーマット変換サービスは、コンポーネントサーバーまたはリポジトリーサーバーのどちらかにインストールします。
・ArcSuite をインストールしたあとに Microsoft Office をインストールすることもできます。ArcSuite と Microsoft Office のどちらを先にインストールしたのかによって、初期設定の手順が異なります。

2.4 統合 Windows 認証の環境で認証に失敗する場合

認証モードが統合Windows認証の場合、ArcSuiteにアクセスすると表示される認証画面に正しい認証情報を入力しても認証に失敗し、これを3回繰り返すと「Error」と表示されることがあります。
この現象は、クライアントPCとサーバーの間でLAN Manager認証のレベルが適切に設定されていない場合に発生します。
このような場合は、クライアントPCとサーバーでLAN Manager認証レベルを適切に設定する必要があります。

1. ［ローカルセキュリティポリシー］画面を表示します。

◆ **Windows 8.1 の場合**

(1) Windows の［スタート］ボタンを右クリックし、［コントロールパネル］を選択します。

(2) ［システムとセキュリティ］＞［管理ツール］を選択します。

(3) ［ローカルセキュリティポリシー］をダブルクリックします。

◆ **Windows 10 の場合**

(1) Windows の［スタート］メニューから、［Windows システムツール］＞［コントロールパネル］を選択します。

(2) ［システムとセキュリティ］＞［管理ツール］を選択します。

(3) ［ローカルセキュリティポリシー］をダブルクリックします。

補 足 Windows Server 2016 または Windows Server 2019 の場合は、次のように操作します。
1. Windows の［スタート］メニューから、［サーバーマネージャー］を選択します。
［サーバーマネージャー］画面が表示されます。
2. ［ツール］メニューから［ローカルセキュリティポリシー］を選択します。

2. 左側のツリーから［ローカルポリシー］＞［セキュリティオプション］を選択します。

3. ［ネットワークセキュリティ：LAN Manager 認証レベル］をダブルクリックします。

4. 認証レベルを適切な値に設定します。

補 足 設定する値については、画面の指示に従って設定してください。

3 データベース

オペレーティングシステムと外部コンポーネントのインストールが終了したら、データベースをインストールします。

3.1 データベースのインストール

ここでは、データベースのインストール手順の概要と注意点を説明します。
データベースインストーラーを使って、データベースをインストールします。

参照 データベースインストーラーの詳細については、「3.1.2 データベースインストーラー」(P.50)を参照してください。

3.1.1 「リポジトリーサーバーの最大セッション数」の見積もり

「3.1.2 データベースインストーラー」(P.50)では、[データベースの最大接続数算出方法の選択] 画面で「カスタム」を選択したときに、「リポジトリーサーバーの最大セッション数」を入力します。「リポジトリーサーバーの最大セッション数」には、ドキュメント管理サービスに同時にアクセスするユーザーのセッション数の最大値を入力します。

リポジトリーサーバーの最大セッション数は次の点に注意して見積もってください。

- 「リポジトリーサーバーの最大セッション数」には、ドキュメント管理サービスを使用するすべてのユーザー数の 5% ～ 20% の値を指定します。
- ドキュメント管理サービスを使用するユーザーには、ドキュメントスペース、コラボスペース、およびワークフローを利用するユーザーのほかに、ドキュメント管理サービス SDK を使ったアプリケーションなどを利用するユーザーも含まれます。

3.1.2 データベースインストーラー

データベースインストーラーを起動して、データベースをインストールします。

1. ArcSuite をインストールするサーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. ArcSuite 4.0 のデータベースのインストールメディアを、ドライブにセットします。
3. 「{インストールメディア} :¥setup.exe」をダブルクリックします。
   [ArcSuite データベース セットアップへようこそ] 画面が表示されます。
4. [次へ] をクリックします。
   [使用許諾契約] 画面が表示されます。

   補足 必要なソフトウェアがインストールされていない場合は、インストールを促す画面が表示されます。その場合は、表示されているソフトウェアをすべてインストールしてください。
   インストール後、再起動が必要な場合は、再起動したあと、手順 1 から操作してデータベースをインストールしてください。
5. 使用許諾契約を読み、同意する場合は、[使用許諾契約の全条項に同意します] を選択します。
6. [次へ] をクリックします。
   [インストール先の選択] 画面が表示されます。
7. データベースのインストール先を入力します。

   補足
   - 初期値では、「{最大空容量のドライブ} :¥Database」が表示されます。
   - この項目は、入力が必須です。
   - マルチバイト文字、Windows のフォルダーに指定できない文字、または半角スペースは使用できません。
   - 相対パス、ルートフォルダーは指定できません。
   - UNC 形式のファイルパスは指定できません。
   - オンラインバックアップをインストールする場合、データベースをインストールするフォルダーは、システムドライブ以外を選択することを推奨します。システムドライブを選択した場合、オンラインバックアップに時間がかかることがあります。

・インストールするドライブには、5.15 GB 以上の空き容量が必要です。

8. [次へ] をクリックします。
[データファイル配置先の選択] 画面が表示されます。

9. データファイルの配置先を入力します。
入力した配置先の下に、「{SID}」フォルダーが作成されます。

補足
・初期値では、「{インストール先と同じドライブ} :¥Database¥datafiles」が表示されます。
・この項目は、入力が必須です。
・データファイルは、「{SID}」フォルダーの下に配置されます。
・マルチバイト文字および Windows のフォルダーに指定できない文字は使用できません。
・相対パス、ルートフォルダー、および「Program Files」フォルダーの配下は、指定できません。また、64 ビット OS にインストールする場合は、[Program Files(x86)] フォルダー配下は指定できません。
・UNC 形式のファイルパスは指定できません。
・オンラインバックアップをインストールする場合、データファイルを配置するフォルダーは、システムドライブ以外を選択することを推奨します。システムドライブを選択した場合、オンラインバックアップに時間がかかることがあります。
・データファイルの配置先ドライブには、2 GB 以上の空き容量が必要です。

10. [次へ] をクリックします。
[データベースのサーバー情報] 画面が表示されます。

11. データベースサーバーの [サーバー名] を確認します。

注記
・[サーバー名] は変更せずに、必ず、初期値を使用してください。
・表示されているサーバー名が 37 文字以内であることを確認してください。37 文字を超えている場合、データベースをインストールできません。
・表示されているサーバー名のうち、コンピューター名が 15 文字以内であることを確認してください。15 文字を超えている場合、データベースをインストールできません。

補足 初期値は、通常、FQDN（ドメイン付きのフルコンピューター名）です。ドメインが設定されていない環境の場合の初期値は「コンピューター名」です。

12. データベースサーバーの [グローバルデータベース名] を確認します。
通常、[グローバルデータベース名] は初期値を使用します。[グローバルデータベース名] を変更する場合は、ArcSuite のデータベースであるということを判断できるような一意な名前を入力します。

注記
・グローバルデータベース名には、「 - （ハイフン）」、マルチバイト文字、データベースの予約語は使用できません。
・[グローバルデータベース名] のうち、最初の「 . （ピリオド）」までの文字列が、データベースの SID になります。「 . （ピリオド）」がない場合は、[グローバルデータベース名] が SID になります。データベースの SID は、先頭が英字、それ以降は英数字で構成された 8 文字以内の文字列にする必要があります。

補足
・初期値は、通常、FQDN（ドメイン付きのフルコンピューター名）です。ドメインが設定されていない環境の場合の初期値は「コンピューター名」です。
・この項目は、入力が必須です。
・先頭が英字、それ以降は英数字、「 . （ピリオド）」で構成された 128 文字以内の文字列で入力します。

13. [次へ] をクリックします。
[データベースの管理者パスワードの設定] 画面が表示されます。

14. [パスワード]、および [パスワード確認] に、データベースの管理者ユーザーのパスワードを入力します。

補足
・[パスワード]、および [パスワード確認] は、入力が必須です。
・[パスワード] は、先頭が英字、それ以降は英数字、「_ （アンダースコア）」で構成された 3 文字以上 30 文字以内の文字列を入力します。
・[パスワード] には、英字の大文字、小文字、数字が含まれている必要があります。

15. [次へ] をクリックします。
[ファイル コピーの開始] 画面が表示されます。

16. [次へ] をクリックします。
インストール中の画面が表示されます。
ファイアウォールの例外を設定するかどうかの確認画面が表示されます。

補足 手順 4 ～ 14 の画面で、[キャンセル] をクリックして途中で終了した状態から、再度インストールしたい場合は、手順 3 へ戻ってもう一度インストーラーを起動してください。

17. [はい] または [いいえ] をクリックします。
[スクリプトの登録] 画面が表示されます。
同時に [ローカル グループ ポリシー エディター] 画面が表示されます。

18. [スクリプトの登録] 画面を表示したまま、「ローカル グループ ポリシー エディター」画面で、スクリプトの登録をします。画面に記載されている手順に従って操作します。

(1) 左側のツリーから、[コンピューターの構成] > [Windows の設定] > [スクリプト (スタートアップ / シャットダウン)] を選択します。

(2) 右側の詳細情報から [シャットダウン] をダブルクリックします。
[シャットダウンのプロパティ] 画面が表示されます。

(3) [シャットダウンのプロパティ] 画面で [追加] をクリックします。
[スクリプトの追加] 画面が表示されます。

(4) [参照] をクリックします。
[参照] 画面が表示されます。

(5) 画面に表示されている「DatabaseShutdown.bat」を選択し、[開く] をクリックします。
[スクリプトの追加] 画面の [スクリプト名] に「DatabaseShutdown.bat」が設定されます。

(6) [OK] をクリックします。
[スクリプトの追加] 画面が閉じます。

(7) [OK] をクリックします。
[シャットダウンのプロパティ] 画面が閉じます。

(8) [ローカル グループ ポリシー エディター] 画面を閉じます。

19. [スクリプトの登録] 画面の [次へ] をクリックします。
[シャットダウンスクリプトの登録] 画面が表示されます。

20. [はい] をクリックします。
[セットアップの完了] 画面が表示されます。

21. 手順 18 の各画面で、[キャンセル] をクリックして途中で終了した状態から、再度インストールしたい場合は、最初にデータベースをアンインストールしてから、もう一度インストーラーを起動してください。

22. [完了] をクリックします。
[データベース設定ツールへようこそ] 画面が表示されます。

23. [次へ] をクリックします。
[データベースの最大接続数算出方法の選択] 画面が表示されます。

24. データベースの最大接続数の算出方法を選択し、[次へ] をクリックします。

・標準
最大接続数の数値を直接入力する場合に選択します。
[標準] を選択した場合は、[データベースの最大接続数の設定] 画面が表示されます。手順 32 に進みます。

・カスタム
項目を選択し、環境に合わせた値を算出したい場合に選択します。
［カスタム］を選択した場合は［設置パターンと設置構成の選択］画面が表示されます。手順 25 に進みます。

補足 ［標準］を選択したときの初期値は、［カスタム］で次の構成を選択した場合と同じになります。
次の構成以外で算出したい場合は、［カスタム］を選択します。
・ロードバランス無し、All in One 構成
・コラボスペース：使用しない
・ドキュメントレビューオプション：使用しない
・ワークフロー：使用しない
・原本性保証オプション：使用しない
・作成予定のキャビネット数 :20
・リポジトリーサーバーの最大セッション数 :100
・統合検索サービスの設置数 :0

25. ［設置パターンと設置構成の選択］画面で、［ロードバランス無し］を選択し、［All in One 構成］を選択します。

26. ［次へ］をクリックします。
［サーバー情報の設定］画面が表示されます。

27. ［コンポーネントサーバー兼リポジトリーサーバーの台数］の値が「1」となっているのを確認し、［次へ］をクリックします。
［データベースのコンポーネント情報］画面が表示されます。

28. それぞれのコンポーネントについて、［使用する］または［使用しない］のどちらかを選択して、［次へ］をクリックします。
［ドキュメント管理サービスの利用情報の設定］画面が表示されます。

29. ［作成予定のキャビネット数］、［リポジトリーサーバーの最大セッション数］の値を入力します。

補足 ・［作成予定のキャビネット数］には、1 ～ 999 までの数値を入力できます。初期値は 20 です。
・［リポジトリーサーバーの最大セッション数］には、10 ～ 1000 までの数値を入力できます。初期値は 100 です。

参照 「リポジトリーサーバーの最大セッション数」の計算方法については、「3.1.1 「リポジトリーサーバーの最大セッション数」の見積もり」（P.50）を参照してください。

30. ［次へ］をクリックします。
［統合検索サービスの設置情報］画面が表示されます。

31. ［統合検索サービスの設置数］を入力し、［次へ］をクリックします。

補足 0 ～ 10 までの数値を入力できます。初期値は 0 です。

［データベースの最大接続数の設定］画面が表示されます。

32. 計算された数値が初期値で表示されています。変更したい場合は数値を変更し、［次へ］をクリックします。

補足 ・初期値は 293 です。最小値は 170 です。
・ArcSuite 4.0 Evidence Tracker を使用する場合は、計算された数値に「170」を加算した値を設定してください。

［データベース設定の開始］画面が表示されます。

33. ［次へ］をクリックします。
［セットアップステータス］画面が表示され、インストールが開始されます。インストールが終わると［データベース設定の完了画面］が表示されます。

34. [はい、今すぐコンピュータを再起動します。] を選択します。

35. [完了] をクリックします。
コンピュータが再起動されます。

データベースインストーラーでのインストールは終了です。

注記 データベース設定ツールがエラーで終了したり、[キャンセル] で終了したりした場合は、データベースのインストールメディアにある、次のデータベース設定ツールを個別に実行してください。
「{インストールメディア} :¥tool¥setup.exe」

3.1.3 データベースの起動と停止

データベースの起動と停止の手順は次のとおりです。

データベースを起動する

データベースを起動します。

注記 起動する前に、ユーザーが使用していないことを必ず確認してください。

1. ArcSuite サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。

補足 オールインワン構成以外の場合は、ArcSuite のデータベースがインストールされているサーバーにサインインします。

2. Windows の [スタート] メニューから、[Windows 管理ツール] > [サービス] を選択します。
[サービス] 画面が表示されます。

3. サービスを選択して、[サービスの開始] をクリックします。
次の順序で開始します。

(1) OracleOraDB19Home1TNSListener

(2) OracleService {SID}

注記 次のサービスは、起動しないでください。
- OracleOraDB19Home1MTSRecoveryService
- OracleRemExecServiceV2
- OracleJobScheduler {SID}
- OracleVssWriter {SID}

補足 {SID} は、データベースをインストールしたときに、[データベースのサーバー情報] 画面で「グローバルデータベース名」に入力した値から、最初の「.（ピリオド）」までの値です。「.（ピリオド）」がない場合は、入力したグローバルデータベース名がそのまま表示されます。たとえば、「server1.example.com」と入力すると、{SID} には「SERVER1」と表示されます。

参照 OracleVssWriter {SID} はオンラインバックアップを使用するときに必要になるサービスです。OracleVssWriter {SID} については、『オンラインバックアップ・リストア運用ガイド』を参照してください。

データベースを停止する

データベースを停止します。

注記 停止する前に、ユーザーが使用していないことを必ず確認してください。

1. ArcSuite サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. Windows の［スタート］メニューから、［Windows 管理ツール］＞［サービス］を選択します。
   ［サービス］画面が表示されます。
3. サービスを選択して、［サービスの停止］をクリックします。
   次の順序で停止します。

(1) OracleService {SID}

(2) OracleOraDB19Home1TNSListener

補足
- {SID} は、データベースをインストールしたときに、［データベースのサーバー情報］画面で「グローバルデータベース名」に入力した値から、最初の「.（ピリオド）」までの値です。「.（ピリオド）」がない場合は、入力したグローバルデータベース名がそのまま表示されます。たとえば、「server1.example.com」と入力すると、{SID} には「SERVER1」と表示されます。
- ［別のサービスの停止］画面が表示された場合は、［はい］をクリックしてください。

4 共通設定

データベースのインストールが終了したら、共通設定をします。

4.1 共通設定

ArcSuiteをインストールする前に、「富士フイルムBIダイレクト」サイトでユーザー登録をします。
そのあと、サーバーのメインインストーラーでライセンスシリアル番号、RMSデータベースの情報などを入力し、EXEファイルやJARファイルなどをサーバーにインストールします。

補足 ライセンスを認証するには、「富士フイルム BI ダイレクト」サイトでのユーザー登録が必要です。

参照 設定時のユーザー名およびパスワードについては、「1.3 セットアップ前の設定事項」(P.24)を参照してください。

4.1.1 「富士フイルム BI ダイレクト」でユーザー登録をする

富士フイルムBIダイレクトでユーザー登録をします。

1. Web ブラウザーを起動します。
2. Web ブラウザーの［アドレス］に、「富士フイルム BI ダイレクト」の URL を入力します。
   https://direct-fb.fujifilm.com/ap1/top
   ［富士フイルム BI ダイレクト ユーザー登録］画面が表示されます。
   このあとは、画面の指示に従って、ユーザー登録を完了します。

4.1.2 共通設定をする

1. ArcSuite をインストールするサーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. 「ArcSuite 4.0 インストール」インストールメディアを、ドライブにセットします。
3. 「{インストールメディア} :¥Service¥ArcSuite¥setup.exe」をダブルクリックします。
   ［ArcSuite セットアップへようこそ］画面が表示されます。
4. ［次へ］をクリックします。
   ［インストールの確認］画面が表示されます。

   補足 必要なソフトウェアがインストールされていない場合は、インストールを促す画面が表示されます。その場合は、表示されているソフトウェアをすべてインストールしてください。
   インストール後、再起動が必要な場合は、再起動したあと、手順 1 から操作して ArcSuite をインストールしてください。
5. ［OK］をクリックします。
   ［License Activator］画面が表示されます。

   補足 ［キャンセル］を選択した場合は、ArcSuite のインストールを終了します。
6. ［ライセンス登録］をクリックします。
   シリアル番号を入力する画面が表示されます。
7. 弊社より発行されたシリアル番号を入力します。
   テキストファイルで発行されたシリアル番号がある場合は、格納場所を指定してファイルをインポートします。

   補足 ・シリアル番号の追加および削除は、［追加］、［削除］をクリックして実行します。
   ・指定する格納場所のパスには、マルチバイト文字および Windows のフォルダーに指定できない文字は使用できません。

8. [次へ] をクリックします。
ライセンスの認証方法を選択する画面が表示されます。

9. [インターネットを使ってライセンス認証を行う（推奨）] を選択して、[次へ] をクリックします。
「富士フイルム BI ダイレクト」のアカウント情報を入力する画面が表示されます。

補足 ここでは、インターネットを使用してライセンスを認証する手順で説明します。
インターネットに接続できない場合は、ファイルを使用してライセンスを認証することもできます。

参照 ファイルを使用してライセンスを認証する手順については、「19.2 ArcSuite のライセンス認証」（P.207）を参照してください。

10. 「富士フイルム BI ダイレクト」でユーザー登録をした [メールアドレス] および [パスワード] を入力します。

補足 ユーザー登録していない場合は、[会員登録] リンクをクリックし、表示された [富士フイルム BI ダイレクト ユーザー登録] 画面から、ユーザー登録します。

参照 「富士フイルム BI ダイレクト」でのユーザー登録の方法については、「4.1.1 「富士フイルム BI ダイレクト」でユーザー登録をする」（P.57）を参照してください。

11. [次へ] をクリックします。
ライセンス認証の結果を確認する画面が表示されます。

12. [完了] をクリックします。

13. [終了] をクリックします。
確認画面が表示されます。

14. [はい] をクリックします。
[機能の選択] 画面が表示されます。
ライセンスを認証したコンポーネントのチェックボックスにチェックマークが付いています。

15. インストールが必要なコンポーネントを選択して、[次へ] をクリックします。
[インストールするコンポーネントの確認] 画面が表示されます。

16. インストールするコンポーネントを確認します。

17. [次へ] をクリックします。
使用許諾契約の画面が表示されます。

補足 ・同意済みの使用許諾契約は、インストール終了後、次のパスに保存されます。
「{ArcSuite のインストールフォルダー} ¥License ArcSuite.txt」
・{ArcSuite のインストールフォルダー} は、手順 23 で指定するフォルダーです。たとえば、「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」です。

18. 使用許諾契約を読み、同意する場合は、[使用許諾契約の全条項に同意します] を選択し、[次へ] をクリックします。
ユーザー情報の画面が表示されます。

19. [ユーザ名] と [会社名] を確認します。

補足 [ユーザ名] と [会社名] には、OS に設定されている内容が表示されます。

20. [次へ] をクリックします。
[モード選択] 画面が表示されます。

注記 次の場合のインストールのときは、[通常モード] を選択します。
・再インストールする
・すでにキャプチャリングサービスや統合検索サービスをインストールしている

21. モードを選択します。ここでは、[通常モード] をクリックします。

参照 「簡易モード」を選択してインストールする場合は、「付録 C 簡易モードでのインストール」(P.425) を参照してください。

22. [次へ] をクリックします。
インストール先を選択する画面が表示されます。

23. [参照] をクリックして、インストール先を指定します。ここでは、「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」を指定します。

注記 インストール先には、ネットワークドライブ上のパスを指定しないでください。

補足 ・手順 12 の [機能の選択] 画面で、[オンラインバックアップ] にチェックマークを付けた場合、システムドライブ以外のパスを指定することを推奨します。システムドライブを選択した場合、オンラインバックアップに時間がかかることがあります。
・インストール先の初期値は、「C:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」です。

24. [次へ] をクリックします。
[データ格納先の選択] 画面が表示されます。

25. [参照] をクリックするか、フォルダー名を直接入力して、ユーザーデータの格納先を指定します。ここでは、「D:¥ArcSuite」を指定します。

注記 データ格納先には、ネットワークドライブ上のパスを指定しないでください。

補足 ・手順 12 の [機能の選択] 画面で、[オンラインバックアップ] にチェックマークを付けた場合、システムドライブ以外のパスを指定することを推奨します。システムドライブを選択した場合、オンラインバックアップに時間がかかることがあります。
・ユーザーデータの格納先の初期値は、「C:¥ArcSuite」です。
・データ格納先名には、半角英数字だけ使用できます。

26. [次へ] をクリックします。
[データベースのサーバー情報] 画面が表示されます。

補足 データベースとは、ArcSuite システムの設定情報が保存されているデータベースです。

27. [サーバー名] で、データベースサーバーのホスト名を確認します。

28. [ポート番号] を確認します。

29. [グローバルデータベース名] にデータベースを設定したときに入力したグローバルデータベース名を入力します。ここでは、「arcsuite.example.com」と入力します。

30. [次へ] をクリックします。
[データベースの管理者情報] 画面が表示されます。

31. [パスワード] にデータベース設定時のパスワードを入力します。ここでは、「System0」と入力します。

32. [次へ] をクリックします。
[データベースの RMS 用ユーザー情報] 画面が表示されます。

33. [ユーザー名] に、データベースにアクセスするための RMS 用ユーザーのユーザー名を入力します。

注記 ここで入力するユーザー名は、追加するコンポーネントのインストール時に、入力が必要になる場合があります。

補足 ・ユーザー名の初期値は、「rms」です。
・インストールするコンポーネント、ユーザー、グループ、またはロールなどを管理するデータベースを新たに構築する場合は、すでに作成されているデータベースで使用していないユーザー名を入力します。また、既存の RMS データベースにアクセスする場合は、初期化時に作成した RMS 用のユーザー名を入力します。

34. [パスワード] および [パスワード確認] を入力します。ここでは、「rms」と入力します。

注記 ここで入力するパスワードは、追加するコンポーネントのインストール時に、入力が必要になる場合があります。忘れないようにしてください。

補足 既存の RMS データベースにアクセスする場合は、初期化時に作成した RMS 用のパスワードを入力します。

35. [次へ] をクリックします。
[データファイルの配置先] 画面が表示されます。

補足 [RMS の新規構築] 画面が表示された場合は、[はい] をクリックします。

36. [データファイルの配置先] にデータベースのデータファイルの配置先を指定します。

注記 初期値で表示された配置先のフォルダーとは別のフォルダーを指定する場合は、あらかじめデータベースがインストールされたサーバーでフォルダーを作成しておきます。作成したフォルダーのパスを指定してください。
フォルダーを作成していなかった場合は、インストールできません。

補足
- データベースのサーバー情報画面で指定したデータベースの SYSTEM データファイルのパスが初期値として表示されます。
- UNC 形式のファイルパスは指定できません。

37. [次へ] をクリックします。
[データベースの RMS 用表領域作成] 画面が表示されます。

38. RMS データベースに作成する表領域の [表領域名] と [データファイル名] を確認します。

39. [次へ] をクリックします。
[データベースの RMS 参照専用ユーザー登録] 画面が表示されます。

40. [ユーザー名] を入力します。ここでは、「rmsclient」と入力します。

注記 ここで入力するユーザー名は、追加するコンポーネントのインストール時に、入力が必要になる場合があります。忘れないようにしてください。

41. [パスワード]、および [パスワード確認] を入力します。ここでは、「rmsclient」と入力します。

注記 ここで入力するパスワードは、追加するコンポーネントのインストール時に、入力が必要となる場合があります。忘れないようにしてください。

42. [次へ] をクリックします。
[RMS のシステム名] 画面が表示されます。

43. RMS の [システム名] 、[システム ID] を入力します。ここでは、[システム名] に「ArcSuite」、[システム ID] に弊社から発行されたシステム ID を入力します。

補足
- [システム名] とは、現在セットアップ中の ArcSuite システムの名前です。ここで入力した値は、DN の [dc=] 部に使用されます。「. (ピリオド)」で区切られたドメイン名を指定した場合には、[dc=XXX.dc=XXX] のように、「. (ピリオド)」部分でドメイン名が区切られます。
- [システム名] には、先頭と末尾が英数字、それ以外は英数字、「- (ハイフン)」、「. (ピリオド)」で構成された文字列を入力します。

44. [次へ] をクリックします。
[RMS の管理者ユーザー登録] 画面が表示されます。

45. RMS の管理者ユーザーの [ユーザー名] を入力します。ここでは、「rmsadmin」と入力します。

46. [パスワード]、および [パスワード確認] を入力します。ここでは、「rmsadmin001」と入力します。

注記 RMS に登録するユーザーのパスワードは、英小文字、数字で構成された 8 文字以上を入力します。

47. [次へ] をクリックします。
[RMS の管理者ユーザーの表示名] 画面が表示されます。

48. RMS 管理ユーザーの表示名を日本語と英語で入力します。

・[表示名（JA)]
日本語で入力します。

・[表示名（EN)]
英語で入力します。

ここでは、[表示名（JA)] に「RMS 管理者」、[表示名（EN)] に「rmsadmin」と入力します。

49. [次へ] をクリックします。
[RMS の管理者に設定するユーザーロール] 画面が表示されます。

50. RMS に登録する [ユーザーロール名] を入力します。ここでは、「administrators」と入力します。

51. ユーザーロールの表示名を日本語と英語で入力します。

・[表示名（JA)]
日本語で入力します。

・[表示名（EN)]
英語で入力します。

ここでは、[表示名（JA)] に「管理者ロール」、[表示名（EN)] に「AdminRole」と入力します。

補足 RMS の管理者には、ユーザーまたはユーザーロールを設定できます。この画面でユーザーロール名を入力すると、そのユーザーロールを RMS に作成したあと、RMS 管理者に設定できます。したがって、そのロールを持つユーザーが RMS 管理者になります。インストール直後の状態では、「RMS の管理者ユーザー情報」で作成したユーザーだけが、このユーザーロールを持っています。この画面でユーザーロール名を入力しなかった場合、RMS 管理者には「RMS の管理者ユーザー情報」で作成したユーザーを直接設定します。

52. [次へ] をクリックします。
[コンピュータのホスト名] 画面が表示されます。

53. [ホスト名] を確認します。

54. [次へ] をクリックします。
[コンピュータの設置場所] 画面が表示されます。

55. コンピューターの設置場所を、日本語と英語で入力します。

・[設置場所（JA)]
日本語で入力します。

・[設置場所（EN)]
英語で入力します。

ここでは、[設置場所（JA)] に「サーバールーム」、[設置場所（EN)] に「ServerRoom」と入力します。

補足 ここで入力した文字列は、RMS データベースに登録する属性として使用されます。

56. [次へ] をクリックします。
[サービス起動ユーザー情報] 画面が表示されます。

57. [ユーザー名] を確認します。ユーザー名は、ローカルユーザーかドメインユーザーのユーザー名のどちらかです。ドメインユーザーの場合は、次の形式で表示されます。
{ドメイン名} ￥ {ユーザー名}

補足 ・入力されたユーザーが「サービスとしてログオン」権限を持たない場合、画面に次のメッセージが表示されます。権限を付与するかどうかを選択します。
「入力されたユーザーの以下の設定を変更します。他のユーザーを使用する場合は、「いいえ」を選択してください。サービスとしてログオン権限の付与」

・ローカルユーザーとして入力したユーザー名が、既存のローカルユーザーに存在しなかった場合、画面に次のメッセージが表示されます。ローカルユーザーを新規作成するかどうかを選択します。
「入力されたユーザー名とパスワードでサービス起動ユーザーを作成します。既存のユーザーを使用する場合、または、作成するユーザーを変更する場合は、「いいえ」を選択してください。」

58. [パスワード]、および［パスワード確認］を入力します。ここでは、「ArcSuite001」と入力します。

59. [次へ］をクリックします。
［サービス起動ユーザーのグループ情報］画面が表示されます。

60. サービス起動ユーザーが所属するグループの［グループ名］を確認します。

補足 ・入力したグループが存在しない場合、画面に次のメッセージが表示されます。
「入力されたグループ名でサービス起動ユーザーのグループを作成します。既存のグループを使用する場合、または、作成するグループ名を変更する場合は、「いいえ」を選択してください。」
ローカルグループを新規作成するかどうかを選択します。
・入力したグループが存在していて、［サービス起動ユーザー情報］画面で入力したユーザーがメンバーに含まれていない場合、画面に次のメッセージが表示されます。
「入力されたグループの以下の設定を変更します。他のグループを使用する場合は、「いいえ」を選択してください。サービス起動ユーザーをグループメンバーに追加」
サービス起動ユーザーをグループメンバーに追加するかどうかを選択します。

61. [次へ］をクリックします。
[SSL 構成の選択］画面が表示されます。

補足 IIS の「Web サイト」が複数存在する場合は、［SSL 構成の選択］画面の前に［IIS の Web サイトの選択］画面が表示されます。

62. [SSL を使用しない］を選択します。

補足 ［SSL アクセラレーターを使用する］を選択する場合は、別途ハードウェアの設定が必要となります。詳細については、弊社担当者に確認してください。

参照 ［SSL 構成の選択］画面で、［HTTP サービスに直接 SSL を設定する］を選択した場合の操作については、「付録 B HTTP サービスに直接 SSL を設定する」（P.422）を参照してください。

63. [次へ］をクリックします。
［HTTP サービスの情報］画面が表示されます。

64. このコンピューターにインストールする HTTP サービスの［ホスト名］、［ポート番号］、および［仮想ディレクトリー名］を確認します。

◆ SSL アクセラレーターを使用する場合

(1) SSL アクセラレーターの設定情報を入力します。

◆ HTTP サービスに直接 SSL を設定する場合

(1) IIS に設定するサーバー名などを入力します。

(2) ポート番号に、ほかのソフトウェアが使用していないポート番号を入力します。

◆ SSL アクセラレーターを使用せず、ロードバランサーも使用しない場合

(1) IIS に設定するサーバー名などを入力します。

(2) ポート番号に、ほかのソフトウェアが使用していないポート番号を入力します。

◆ SSL アクセラレーターを使用せず、ロードバランサーを使用する場合

(1) ロードバランサーの設定情報を入力します。

補足 仮想ディレクトリー名には、半角英数字だけ入力可能です。

65. [次へ］をクリックします。
［アクセス制御情報］画面が表示されます。

66. アクセスを受け付けるホストを制限する場合は、［以下のホストからのアクセスのみ受け付ける］を選択します。制限しない場合は、［全てのホストからのアクセスを受け付ける］を選択します。

注記 SSL アクセラレーターまたはプロキシサーバーを使用する場合は、［追加］をクリックし、使用する SSL アクセラレーターまたはプロキシサーバーの IP アドレスを追加してください。

補足 ホスト名および IP アドレスは、追加、削除できます。［編集］をクリックし、ArcSuite をインストールするサーバーの IP アドレスを入力します。

67. ［次へ］をクリックします。
［ログイン方法の選択］画面が表示されます。

68. ログイン方法を選択します。ここでは、［自動ログインを使用する］を選択します。

補足 ログイン方法の動作は次のとおりです。

・［自動ログインを使用する］
ユーザー認証に 1 度成功すると、2 度め以降はユーザー認証なしにログインできます。
- 自動ログインでユーザー認証に成功していない場合：
1 度めは、入力フォームでユーザーがログイン名とパスワードを入力する必要があります。クライアントからサーバーに、パスワードと秘密情報を通信するのための情報が送られます。サーバーでパスワードが確認されると、自動ログイン用の秘密情報が生成され、クライアントに送られます。これでログイン状態になります。
その後は、ユーザー認証することなくログインできます。
- 自動ログインでユーザー認証に成功している場合：
認証処理を意識することなく、自動ログインに参加しているアプリケーションを選択できます。

・［常にログインフォームを使用する］
ログインするときに毎回ユーザー認証します。入力フォームでユーザーがログイン名とパスワードを毎回入力することになります。

・［統合 Windows 認証を使用する］
統合 Windows 認証では、Web ブラウザーを利用している Windows のログイン済みの状態が ArcSuite に引き継がれます。そのため、ユーザー名、およびパスワードの入力を省略できます。

69. ［次へ］をクリックします。
［データベースのポータル用表領域作成］画面が表示されます。

70. ［表領域名］および［データファイル名］を確認します。

71. ［次へ］をクリックします。
［データベースのポータル用ユーザー作成］画面が表示されます。

72. ［ユーザー名］を確認します。

73. ［パスワード］、および［パスワード確認］を入力します。ここでは、「PORTAL」と入力します。

参照 各コンポーネントのユーザー名およびパスワードについては、「1.3 セットアップ前の設定事項」(P.24) を参照してください。

74. ［次へ］をクリックします。
［RMI レジストリサービスのポート番号］画面が表示されます。

75. RMI レジストリサービスで使用する［ポート番号］を確認します。

補足 通常は初期値を使用します。表示されている番号を別のソフトウェアが使用している場合は、未使用のポート番号に変更します。

76. ［次へ］をクリックします。
［ログ管理サービスのポート番号］画面が表示されます。

77. ログ管理サービスで使用する［ポート番号］を確認します。

補足 通常は初期値を使用します。表示されている番号を別のソフトウェアが使用している場合は、未使用のポート番号に変更します。

78. [次へ] をクリックします。

手順 15 の［機能の選択］画面で、［オンラインバックアップ］にチェックマークを付けた場合は、［オンラインのバックアップのユーザー情報］画面が表示されます。
チェックマークを付けていない場合は、手順 82 へ進みます。

79. オンラインバックアップの［ユーザー名］、［パスワード］および［パスワード確認］を入力します。ここでは、すべてに「ONLINE_BACKUP」と入力します。

80. [次へ] をクリックします。

［オンラインバックアップのアーカイブログの出力先］画面が表示されます。

81. オンラインバックアップのアーカイブログの出力先を指定します。

補足
- システムドライブ以外のパスを指定することを推奨します。システムドライブを選択した場合、オンラインバックアップに時間がかかることがあります。
- 初期値では、「{データベース格納先ドライブ} :¥Database¥ArchiveLogArea」が表示されます。
- UNC 形式のファイルパスは指定できません。

82. [次へ] をクリックします。

［ファイルコピーの開始］画面が表示されます。

83. [次へ] をクリックします。

インストールが開始されます。

注記 ファイアウォールサービスが起動している場合は、インストールの開始前にファイアウォールの設定を確認する画面が表示されます。
設定する場合は［はい］を選択します。すでにファイアウォールを設定している場合、または Windows ファイアウォールを使用しない場合は、［いいえ］を選択してください。

続いてドキュメント管理サービスのインストールに進みます。

5 ドキュメント管理サービス

ドキュメント管理サービスをインストールします。

5.1 ドキュメント管理サービスのインストール

ドキュメント管理サービスをインストールします。
共通設定が完了すると、自動的にドキュメント管理サービスのインストール画面が表示されます。
インストールする手順は次のとおりです。

1. [ArcSuite ドキュメント管理サービスセットアップへようこそ] 画面で、[次へ] をクリックします。
   [サービス ID の登録] 画面が表示されます。

2. [サービス ID] にドキュメント管理サービスのサービス ID を入力します。ここでは、「arcsuite」と入力します。

   補足
   - 先頭が英字で、それ以降は英数字、「 _ （アンダースコア）」で構成された 30 文字以内の文字列を入力します。
   - マルチバイト文字は使用できません。
   - ここでは、RMS 内で重複する [サービス ID] は設定できません。
   - 初期値には、メインインストーラーで入力された「ホスト名」がドメイン無しホスト名として設定されます。

3. [次へ] をクリックします。
   [サーバー ID の登録] 画面が表示されます。

4. ドキュメント管理サービス内でサーバーを一意に識別するための [サーバー ID] を入力します。

   補足
   - 英数字、「 - （ハイフン）」、「 . （ピリオド）」で構成された 64 文字以内の文字列を入力します。
   - マルチバイト文字は使用できません。
   - RMS 内で重複する [サーバー ID] は設定できません。
   - 初期値には、メインインストーラーで入力された「ホスト名」がドメイン無しホスト名として設定されます。

5. [次へ] をクリックします。
   [ユーザー定義属性の名前空間登録] 画面が表示されます。

6. [名前空間] を入力します。

   補足
   - 先頭が英字、それ以降は英数字、「_ （アンダースコア）」で構成された 64 文字以内の文字列を入力します。
   - マルチバイト文字は使用できません。
   - 大文字、小文字、どちらの場合でも、「system」は使用できません。
   - 初期値には「user」が設定されています。

7. [次へ] をクリックします。
   [データベースのサーバー情報] 画面が表示されます。

8. データベースをインストールしたときに指定した [サーバー名]、[ポート番号]、および [グローバルデータベース名] を入力します。

   補足 「データベースのサーバー情報」画面の初期値には、メインインストーラーで指定したデータベースの情報が設定されています。

9. [次へ] をクリックします。
   [データベースの管理者情報] 画面が表示されます。

10. [パスワード] にデータベースのサーバー管理者のパスワードを入力します。ここでは、「System0」と入力します。

11. [次へ] をクリックします。
    [データベースのドキュメント管理サービス用表領域作成] 画面が表示されます。

12. [表領域名] と [データファイル名] を入力します。

補足
- [表領域名] は、先頭が英字、それ以降は英数字、「_ (アンダースコア)」で構成された 30 文字以内の文字列を入力します。
- [表領域名] には、マルチバイト文字は使用できません。
- [表領域名] には、システム表領域、データベースの予約語、すでに存在する表領域は使用できません。
- [データファイル名] は、先頭が英字、それ以降は英数字、「_ (アンダースコア)」、「. (ピリオド)」、「 (スペース)」で構成された文字列を入力します。
- [データファイル名] には、マルチバイト文字は使用できません。
- [データファイル名] には、すでに使用されているデータファイルは使用できません。ファイル名だけを指定してください。
- [表領域名] の初期値には、「DREPSYS」が設定されています。
- [データファイル名] の初期値には、「DREPSYS.dbf」が設定されています。

13. [次へ] をクリックします。

[データベースのドキュメント管理サービス用一時表領域作成] 画面が表示されます。

14. [一時表領域名] と [データファイル名] を入力します。

補足
- [一時表領域名] は、先頭が英字、それ以降は英数字、「_ (アンダースコア)」で構成された 30 文字以内の文字列で入力します。
- [一時表領域名] には、マルチバイト文字は使用できません。
- [一時表領域名] には、システム表領域、データベースの予約語、すでに存在する表領域は使用できません。
- [データファイル名] は、先頭が英字、それ以降は英数字、「_ (アンダースコア)」、「. (ピリオド)」、「 (スペース)」で構成された文字列を入力します。
- [データファイル名] には、マルチバイト文字は使用できません。
- [データファイル名] には、すでに使用されているデータファイルは使用できません。ファイル名だけを指定してください。
- [一時表領域名] の初期値には「DREPTEMP」が設定されています。
- [データファイル名] の初期値には「DREPTEMP.dbf」が設定されています。

15. [次へ] をクリックします。

[データベースのドキュメント管理サービス用ユーザー作成] 画面が表示されます。

補足 [データベースのドキュメント管理サービス用ユーザー作成] 画面は、リポジトリーサーバー (マスター管理サーバー) を新規でインストールする場合に表示されます。
バージョンアップ、再インストール、または追加リポジトリーサーバー (スレーブ管理サーバー) を新規でインストールする場合は、[データベースのドキュメント管理サービス用ユーザー情報] 画面が表示されます。

16. [ユーザー名] を入力します。

補足
- [ユーザー名] は、先頭が英字、それ以降は英数字、「_ (アンダースコア)」で構成された 30 文字以内の文字列を入力します。
- [ユーザー名] には、マルチバイト文字は使用できません。
- [ユーザー名] には、「SYS_」で始まる文字列、データベースの予約ユーザー、予約語、すでに使用されているユーザー名は使用できません。
- [ユーザー名] の初期値には「DREP」が設定されています。

17. [パスワード] および [パスワード確認] にパスワードを入力します。ここでは、「drep」と入力します。

補足
- [パスワード] は、先頭が英字、それ以降は英数字、「_ (アンダースコア)」で構成された 30 文字以内の文字列で入力します。
- [パスワード] には、マルチバイト文字は使用できません。

18. [次へ] をクリックします。

[管理サーバーの情報] 画面が表示されます。

19. [ポート番号] を確認します。

補足 ・[ポート番号] には、1 ～ 65535 までの整数値を入力します。
・初期値には「11100」が設定されています。

20. [次へ] をクリックします。
[リポジトリーサーバーの情報] 画面が表示されます。

21. [ポート番号] を入力します。

補足 ・[ポート番号] には、[管理サーバーの情報] 画面のものとは異なる、1 ～ 65535 までの整数値を入力します。
・初期値には「11101」が設定されています。

22. [次へ] をクリックします。
[ファイルコピーの開始] 画面が表示されます。

23. インストールの内容を確認し、[次へ] をクリックします。
インストールが開始されます。インストールが終了すると、[セットアップの完了] 画面が表示されます。

24. [完了] をクリックします。

ドキュメント管理サービスのインストールは終了です。
次のコンポーネントのインストールに進みます。

6 メッセージ通知サービス

メッセージ通知サービスをインストールします。

6.1 メッセージ通知サービスのインストール

メッセージ通知サービスをインストールします。
インストール手順は次のとおりです。

1. [ArcSuite メッセージ通知サービス セットアップへようこそ] 画面の [次へ] をクリックします。
   [SMTP サーバー情報] 画面が表示されます。
2. [ホスト名] を入力します。ここでは、「smtp.example.com」と入力します。
   参照 各コンポーネントのユーザー名およびパスワードについては、「1.3 セットアップ前の設定事項」(P.24) を参照してください。
3. SMTP サーバーの [ポート番号] を確認し、[次へ] をクリックします。
   [管理者メールアドレス情報] 画面が表示されます。
4. [メールアドレス] に管理者のメールアドレスを入力します。
   ここでは、「rmsadmin@example.com」と入力します。
5. [次へ] をクリックします。
   [データベースのメッセージ通知サービス用表領域作成] 画面が表示されます。
6. [表領域名] に表領域名を入力します。
   注記 すでにデータベース上にある表領域名を指定しないでください。ここで指定した名前で表領域が作成されます。
   補足 初期値は「cmessage」です。
7. [データファイル名] にデータファイル名を入力します。
   補足 初期値は「cmessage.dbf」です。
8. [次へ] をクリックします。
   [データベースのメッセージ通知サービス用ユーザー作成] 画面が表示されます。
   補足 すでにデータベース上に存在している表領域名を指定した場合は、エラー画面が表示されます。[OK] をクリックすると、[データベースのメッセージ通知サービス用表領域作成] 画面に戻ります。
9. [ユーザー名] に、メッセージ通知サーバーが使用するデータベースのユーザー名を入力します。
   注記 すでにデータベース上にあるユーザー名を入力しないでください。ここで指定したユーザーがデータベースに作成されます。
   補足 初期値は「cmuser」です。
10. [パスワード] および [パスワード確認] にデータベースユーザー名のパスワードを入力します。
11. [次へ] をクリックします。
    [ドキュメント管理サービスのメッセージ通知サービス用キャビネット作成] 画面が表示されます。
    補足 すでにデータベース上に存在しているユーザー名を指定した場合は、エラー画面が表示されます。[OK] をクリックすると、[データベースのメッセージ通知サービス用ユーザー作成] 画面に戻ります。
12. [サービス ID] に、ドキュメント管理サービスのサービス ID を入力します。
    補足 初期値は、「5.1 ドキュメント管理サービスのインストール」(P.66) の手順 2 で入力したサービス ID です。

13. [管理者ユーザー名] に、ドキュメント管理サービスの管理者のユーザー名を入力します。ここでは、「rmsadmin」と入力します。

14. [ストレージパス] に、ドロワーのストレージパスを入力します。

補足 ・オンラインバックアップをインストールする場合、ストレージパスには、システムドライブ以外のパスを指定することを推奨します。システムドライブを選択した場合、オンラインバックアップに時間がかかることがあります。
・ストレージパスの指定を省略することもできます。省略すると、ArcSuite のユーザーホームフォルダー以下に自動で作成されます。

参照 ストレージパスに関する注意事項については、『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。

15. [次へ] をクリックします。
[ファイルコピーの開始] 画面が表示されます。

補足 [サービス ID] にデータベースに存在しないサービス ID を指定した場合、または [管理者ユーザー名] に管理者権限を持たないユーザーを指定した場合は、エラー画面が表示されます。[OK] をクリックすると、[ドキュメント管理サービスのメッセージ通知サービス用キャビネット作成] 画面に戻ります。

16. [次へ] をクリックします。
[セットアップの完了] 画面が表示されます。

17. [完了] をクリックします。

メッセージ通知サービスのインストールは終了です。
次のコンポーネントのインストールに進みます。

7 ドキュメントスペース

ドキュメントスペースをインストールします。

7.1 ドキュメントスペースのインストール

ドキュメントスペースをインストールします。

1. [ArcSuite ドキュメントスペース セットアップへようこそ] 画面で、[次へ] をクリックします。
   [データベースのドキュメントスペース用表領域作成] 画面が表示されます。
2. データベースに作成する表領域の [表領域名] と [データファイル名] を確認します。
3. [次へ] をクリックします。
   [データベースのドキュメントスペース用ユーザー作成] 画面が表示されます。
4. データベースにアクセスするユーザーの [ユーザー名] を確認します。
   データベースにアクセスするユーザーの [パスワード] および [パスワード確認] を入力します。ここでは、「eappli」と入力します。

   参照 各コンポーネントのユーザー名およびパスワードについては、「1.3 セットアップ前の設定事項」(P.24) を参照してください。
5. [次へ] をクリックします。
   [ファイルコピーの開始] 画面が表示されます。
6. [次へ] をクリックします。
   [セットアップの完了] 画面が表示されます。
7. [完了] をクリックします。

ドキュメントスペースのインストールは終了です。

コラボスペース、ドキュメントレビューオプション、ワークフロー、または原本性保証オプションのどれかをインストールする場合は、次のコンポーネントのインストールに進みます。

どれもインストールしない場合は、「12 サーバーの再起動」(P.84) に進みます。

補足 コラボスペース、ドキュメントレビューオプション、ワークフロー、原本性保証オプションのどれもインストールしない場合、[完了] をクリックしたあとは、アップデートが実行されます。そのため、次の [セットアップの完了] 画面が表示されるまで時間がかかることがあります。

8 コラボスペース

コラボスペースをインストールします。
コラボスペースは、［機能の選択］画面でコラボスペースを選択したときにインストールします。

8.1 コラボスペースのインストール

コラボスペースをインストールします。

1. [ArcSuite コラボスペース セットアップへようこそ] 画面で、[次へ] をクリックします。
   オールインワン構成のセットアップの場合は、手順 2 へ進みます。
   「第 2 部 2 台以上の構成へのセットアップ」の「コンポーネントサーバーの共通設定」(P.251) の手順 11「機能の選択」で [分散サーバー構成] にチェックマークを付けた場合は、[負荷分散設定] 画面が表示されます。サーバーのタイプを指定します。
   ここでは、[マスターサーバー] を選択します。

2. [次へ] をクリックします。
   [サーバー ID 情報] 画面が表示されます。

3. コラボスペースの [サーバー ID] を入力します。ここでは、「0001」と入力します。

   補足 [サーバー ID] には、弊社から発行されたサーバー ID を入力します。

4. [次へ] をクリックします。
   [データベースのコラボスペース用表領域作成] 画面が表示されます。

5. コラボスペース用にインストーラーが作成する [表領域名]、[データファイル名] を確認します。

   注記 すでに存在している [表領域名] は指定しないでください。

   補足 「{共通設定のインストールで指定したデータファイルの配置先情報のパス} ￥ {データファイル名}」の絶対パスを指定します。

6. [次へ] をクリックします。
   [データベースのコラボスペース用ユーザー作成] 画面が表示されます。

7. コラボスペースが使用するデータベースの「ユーザー名」を確認します。

   補足 [ユーザー名] には、任意のアカウント名を入力できます。データベース内で重複しない名前を入力してください。

8. コラボスペースが使用するデータベースユーザーの [パスワード] および [パスワード確認] を入力します。ここでは、[couser] と入力します。

   参照 各コンポーネントのユーザー名およびパスワードについては、「1.3 セットアップ前の設定事項」(P.24) を参照してください。

9. [次へ] をクリックします。
   [全文検索の設定] 画面が表示されます。

10. コラボスペースが使用する全文検索サービスを確認します。

11. [次へ] をクリックします。
    [類似タスク検索の設定] 画面が表示されます。

12. コラボスペースが使用する関連文書検索サービスを確認します。

13. [次へ] をクリックします。
    [ドキュメント管理サービスのコラボスペース用キャビネット作成] 画面が表示されます。

14. [サービス ID]、[管理者ユーザー名]、および [ストレージパス] を入力します。ここでは [サービス ID] に「arcsuite」、[管理者ユーザー名] に「rmsadmin」と入力します。

    補足 ストレージパスの指定を省略することも可能です。省略すると、ArcSuite のユーザーホームフォルダー以下に自動で作成されます。

参照 ストレージパスに関する注意事項については、『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。

15. [次へ] をクリックします。
［ファイルコピーの開始］画面が表示されます。

16. [次へ] をクリックします。
［セットアップの完了］画面が表示されます。

17. [完了] をクリックします。

コラボスペースのインストールは終了です。
ドキュメントレビューオプション、ワークフロー、または原本性保証オプションのどれかをインストールする場合は、次のコンポーネントのインストールに進みます。

どれもインストールしない場合は、「12 サーバーの再起動」（P.84）に進みます。

補足 ドキュメントレビューオプション、ワークフロー、原本性保証オプションのどれもインストールしない場合、［完了］をクリックしたあとは、アップデートが実行されます。そのため、次の［セットアップの完了］画面が表示されるまで時間がかかることがあります。

9 ドキュメントレビューオプション

ドキュメントレビューオプションをインストールします。
ドキュメントレビューオプションは、［機能の選択］画面でドキュメントレビューオプションを選択したときにインストールします。

9.1 ドキュメントレビューオプションのインストール

ドキュメントレビューオプションをインストールします。

ドキュメントレビューオプションのインストール手順

1. [ArcSuite ドキュメントレビューオプション セットアップへようこそ] 画面で、[次へ] をクリックします。
   [データベースのドキュメントレビューオプション用表領域作成] 画面が表示されます。
2. ドキュメントレビューオプション用にインストーラーが作成する [表領域名]、[データファイル名] を確認します。

   注記 すでに存在している [表領域名] を指定しないでください。
3. [次へ] をクリックします。
   [データベースのドキュメントレビューオプション用ユーザー作成] 画面が表示されます。
4. データベースにアクセスするユーザーの [ユーザー名] を確認します。
5. データベースにアクセスするユーザーの [パスワード] および [パスワード確認] を入力します。ここでは、「dbcollabouser」と入力します。

   参照 各コンポーネントのユーザー名およびパスワードについては、「1.3 セットアップ前の設定事項」(P.24) を参照してください。
6. [次へ] をクリックします。
   [ファイルコピーの開始] 画面が表示されます。
7. [次へ] をクリックします。
   [セットアップの完了] 画面が表示されます。
8. [完了] をクリックします。

ドキュメントレビューオプションのインストールは終了です。

ワークフローまたは原本性保証オプションをインストールする場合は、次のコンポーネントのインストールに進みます。

どちらもインストールしない場合は、「12 サーバーの再起動」(P.84) に進みます。

補足 ワークフロー、原本性保証オプションのどちらもインストールしない場合、[完了] をクリックしたあとは、アップデートが実行されます。そのため、次の [セットアップの完了] 画面が表示されるまで時間がかかることがあります。

10 ワークフロー

ワークフローをインストールします。
ワークフローは、［機能の選択］画面でワークフローを選択したときにインストールします。

10.1 ワークフローのインストール

ワークフローをインストールします。

1. [ArcSuite ワークフローセットアップへようこそ] 画面で、[次へ] をクリックします。
   [データベースのワークフロー用表領域作成] 画面が表示されます。
2. ワークフロー用データベースを作成するために、[表領域名]、[データファイル名] を確認し、[次へ] をクリックします。
   [データベースのワークフロー用ユーザー作成] 画面が表示されます。
3. ワークフロー用データベースにアクセスするユーザーの [ユーザー名] を確認します。
4. ワークフロー用データベースにアクセスするユーザーの [パスワード] および [パスワード確認] を入力します。ここでは、「wf」と入力します。

   参照 各コンポーネントのユーザー名およびパスワードについては、「1.3 セットアップ前の設定事項」(P.24) を参照してください。

5. [次へ] をクリックします。
   [ドキュメント管理サービスのワークフロー用キャビネット作成] 画面が表示されます。
6. ワークフローが使用するキャビネットをドキュメント管理サービスに作成するための [サービス ID]、[管理者ユーザー名]、[ストレージパス] を入力します。ここでは、[サービス ID] に「arcsuite」、[管理者ユーザー名] に「rmsadmin」と入力します。

   補足 ストレージパスの指定を省略することも可能です。省略すると、ArcSuite のユーザーホームフォルダー以下に自動で作成されます。

   参照 ストレージパスに関する注意事項については、『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。

7. [次へ] をクリックします。
   [ファイルコピーの開始] 画面が表示されます。
8. [次へ] をクリックします。
   ファイルのコピーが開始されます。コピーが完了すると [セットアップの完了] 画面が表示されます。
9. [完了] をクリックします。

ワークフローのインストールは終了です。
原本性保証オプションをインストールする場合は、次のコンポーネントのインストールに進みます。

原本性保証オプションをインストールしない場合は、「12 サーバーの再起動」(P.84) に進みます。

補足 原本性保証オプションをインストールしない場合、[完了] をクリックしたあとは、アップデートが実行されます。そのため、次の [セットアップの完了] 画面が表示されるまで時間がかかることがあります。

11 原本性保証オプション

原本性保証オプションをインストールします。
原本性保証オプションは、［機能の選択］画面で原本性保証オプションを選択したときにインストールします。

11.1　原本性保証オプションのインストール

原本性保証オプションをインストールします。

補 足　原本性保証オプションをインストールする場合には、あらかじめ「アマノタイムスタンプサービス」と契約しライセンスファイルを入手する必要があります。詳しくは、『e- 文書法対応 概要説明書』を参照してください。

参 照　原本性保証オプションの初期設定については、『e- 文書法対応 概要説明書』を参照してください。

インストールする手順は次のとおりです。

1. [ArcSuite 原本性保証オプション セットアップへようこそ] 画面で、[次へ] をクリックします。
[プロキシーサーバーの情報] 画面が表示されます。

2. 必要に応じて、プロキシサーバーの [サーバー名]、[ポート番号] を入力します。ここでは、[サーバー名] に「proxy.example.com」、[ポート番号] に「8080」と入力します。

補 足　プロキシサーバーの設定は省略できます。

参 照　各コンポーネントのユーザー名およびパスワードについては、「1.3　セットアップ前の設定事項」(P.24) を参照してください。

3. [次へ] をクリックします。
[タイムスタンプサービスのライセンスファイルのインポート] 画面が表示されます。

4. サーバー内に格納してあるタイムスタンプサービスのライセンスファイル（拡張子が「atl」のファイル）を指定します。

補 足　・アマノタイムスタンプサービスの契約時に提供されたライセンスファイルを指定します。
・[参照] をクリックするか、フォルダー名を直接入力するとライセンスファイルのインポート先を変更できます。ライセンスファイルを格納するフォルダーのパスには、マルチバイト文字を使用できません。

5. [次へ] をクリックします。
[タイムスタンプサービスの接続時のパスワードの設定] 画面が表示されます。

6. [パスワード]、および [パスワード確認] に、パスワードを入力します。ここでは、「etiming」と入力します。

補 足　アマノタイムスタンプサービスの契約時に提供されるパスワードを入力します。

7. [次へ] をクリックします。
[タイムスタンプサービスの URL の設定] 画面が表示されます。

8. タイムスタンプサービスの URL を入力します。

◆ 従量制メニューの場合

(1) 「http://tss3161.e-timing.ne.jp/astdtssvr/TSRequest」と入力します。

◆ 定額制メニューでポート番号を変更していない場合

(1) 「http:// {e-timing Proxy 3161 for AMANO TSA をインストールしたサーバーの FQDN または IP アドレス} /atssprxy/Proxy」を入力します。

◆ 定額制メニューでポート番号を変更している場合

(1) 「http:// {e-timing Proxy 3161 for AMANO TSA をインストールしたサーバーの FQDN または IP アドレス} : {ポート番号} /atssprxy/Proxy」を入力します。

補 足　・従量制メニューおよび定額制メニューは、アマノセキュアジャパン株式会社の料金メニューです。
・「e-timing Proxy 3161 for AMANO TSA」は、アマノセキュアジャパン株式会社のソフトウェアです。

・{ポート番号} は、「e-timing Proxy 3161 for AMANO TSA」のポート番号です。オールインワン構成のサーバー、または 2 台以上の構成ではコンポーネントサーバーに「e-timing Proxy 3161 for AMANO TSA」をインストールした場合、「e-timing Proxy 3161 for AMANO TSA」のポート番号を変更する必要があります。

参照 「e-timing Proxy 3161 for AMANO TSA」のポート番号の変更については、『e- 文書法概要説明書』を参照してください。

9. [次へ] をクリックします。
［ドキュメント管理サービスの証明書格納用キャビネット作成（1/1)］画面が表示されます。

10. [サービスの管理者]、[Certificate ストレージパス]、[TrustAnchors ストレージパス] を入力します。ここでは、［サービスの管理者］に「rmsadmin」と入力します。

補足 ・ドキュメント管理サービスがクラスター構成ではない場合、Certificate ストレージパス、TrustAnchors ストレージパスの指定を省略できます。
省略すると、ArcSuite のユーザーホームフォルダー以下に自動で作成されます。
・ドキュメント管理サービスがクラスター構成の場合、ストレージパスには、クラスターを構成するすべてのサーバーで作成可能なパスを指定してください。

参照 ストレージパスに関する注意事項については、『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。

11. [次へ] をクリックします。
［ファイルコピーの開始］画面が表示されます。

12. [次へ] をクリックします。
ファイルのコピーが開始されます。コピーが完了すると［セットアップの完了］画面が表示されます。

13. [完了] をクリックします。

補足 ［完了］をクリックしたあとは、アップデートが実行されます。そのため、次の［セットアップの完了］画面が表示されるまで時間がかかることがあります。

原本性保証オプションのインストールは終了です。

補足 インストールしたあとに原本性保証オプションの設定内容を変更する場合、ArcSuite がインストールされている状態で、インストーラーを実行して設定内容を変更できます。

参照 インストールしたあとに原本性保証オプションの設定を変更する手順については、「付録 H インストール後に原本性保証オプションの設定内容を変更する手順」（P.463）を参照してください。

12 サーバーの再起動

12.1　サーバーの再起動

コンポーネントのインストールが終了すると、［セットアップの完了］画面が表示されます。

1. ［はい、今すぐコンピュータを再起動します。］を選択します。
2. ［完了］をクリックします。
   サーバーが再起動されます。

13 Webブラウザーの設定

ArcSuiteを使用するために必要なWebブラウザーの設定について説明します。

13.1 Internet Explorer の設定

ArcSuiteを使用するWebブラウザーがInternet Explorerの場合は、Internet Explorerの設定が必要です。
Internet Explorerの次の項目を設定します。

- ページ更新を有効にする（キャッシュ属性を設定する）
- イントラネットとして接続する
- 信頼済みサイトとして設定する
- ページの自動読み込みを有効にする
- ファイルのドラッグ / ドロップを有効にする
- JavaScript を有効にする
- ActiveX コントロールを有効にする
- ファイルのダウンロードを有効にする
- ArcSuite サーバーをイントラネットゾーンに設定する
- ポップアップを許可する
- プロキシを使用しない（推奨）
- HTTP 1.1 を使用する
- スクリプトのデバッグを使用しない

注記 適切に設定をしていない Internet Explorer での動作は保証しません。

［インターネットオプション］画面を表示する

Internet Explorerの環境設定は、［インターネットオプション］画面の各タブ、または［ツール］メニューから設定します。
［インターネットオプション］画面は次の手順で表示します。

1. Internet Explorer の［ツール］メニューから、［インターネットオプション］を選択します。
   ［インターネットオプション］画面が表示されます。
2. 各タブの設定を確認または変更します。
3. ［OK］をクリックします。

13.1.1 ［全般］タブの環境設定

ページ更新を有効にする（キャッシュ属性を設定する）

ArcSuiteの表示内容を最新の状態に保つために、Internet ExplorerからArcSuiteサーバーに接続するときのキャッシュ属性を適切に設定する必要があります。

1. ［インターネットオプション］画面の［全般］タブを表示します。

   参照 ［インターネットオプション］画面の表示方法については、「［インターネットオプション］画面を表示する」（P.87）を参照してください。

2. ［閲覧の履歴］の［設定］をクリックします。
3. ［インターネット一時ファイル］タブで、［自動的に確認する］を選択します。
4. ［OK］をクリックします。

5. [OK] をクリックします。

13.1.2 ［セキュリティ］タブの環境設定

［セキュリティ］タブの環境を設定する前に、ArcSuiteサーバーへの接続が正しく認識されているかどうかを確認します。確認する手順は次のとおりです。

1. Internet Explorer を起動して URL を入力し、ArcSuite のログイン画面を表示します。

   補足 ArcSuite の URL は、次のとおりです。
   「http:// {ArcSuite サーバーのホストアドレス} /ArcSuite/login」

2. ログイン画面で、右クリックで表示されるショートカットメニューから［プロパティ］を選択し、表示された［プロパティ］画面で、［ゾーン］の表示を確認します。
   ［ローカル イントラネット］と表示されている場合は、イントラネットで接続しています。［インターネット］と表示されている場合は、インターネットで接続しています。

セキュリティ設定を表示または変更するゾーンを選択する

■ イントラネットとして接続する

イントラネットのArcSuiteサーバー接続がイントラネットと認識されていない場合は、次の手順でInternet Explorerに認識させます。

1. ［インターネットオプション］画面の［セキュリティ］タブを表示します。

   参照 ［インターネットオプション］画面の表示方法については、「［インターネットオプション］画面を表示する」（P.87）を参照してください。

2. ［ローカル イントラネット］をクリックします。

3. ［サイト］をクリックします。
   ［ローカル イントラネット］画面が表示されます。

4. ［詳細設定］をクリックします。

5. ［ローカルイントラネット］画面で、［この Web サイトをゾーンに追加する］に、ArcSuite サーバーのアドレスを入力し、［追加］をクリックします。

6. ［閉じる］をクリックします。

7. ［OK］をクリックします。

8. ［OK］をクリックします。

■ 信頼済みサイトとして設定する

インターネットを使用して海外拠点などと接続する場合や、ArcSuiteサーバー以外のイントラネットの設定を変更したくない場合は、次の手順でArcSuiteを信頼済みサイトに設定します。

1. ［インターネットオプション］画面の［セキュリティ］タブを表示します。

   参照 ［インターネットオプション］画面の表示方法については、「［インターネットオプション］画面を表示する」（P.87）を参照してください。

2. ［信頼済みサイト］をクリックします。

3. ［サイト］をクリックします。
   ［信頼済みサイト］画面が表示されます。

4. [この Web サイトをゾーンに追加する] に、ArcSuite サーバーのアドレスを入力します。

   補足 たとえば、「http://arcsuite.example.com」と入力します。

5. [追加] をクリックします。

6. [閉じる] をクリックします。

7. [OK] をクリックします。

[セキュリティ設定] 画面での環境設定

セキュリティレベルの変更は、ArcSuiteサーバーの接続に使用するセキュリティゾーンを、4つ並んだアイコンから選択して、各設定の手順を実行します。

以降の各設定は、[このゾーンのセキュリティのレベル] の [レベルのカスタマイズ] をクリックして表示される [セキュリティ設定] 画面から設定します。

ページの自動読み込みを有効にする

コンテント表示/インデックス表示などの操作を有効にするために、ArcSuiteのページからのファイルやプログラムのダウンロードを許可する必要があります。

注記 ページの自動読み込みの設定が無効になっていると、コンテント表示 / インデックス表示をしたときに、[データの取得中] のまま画面が変わりません。

1. [その他] の [ページの自動読み込み] で、[有効にする] を選択します。

ファイルのドラッグ / ドロップを有効にする

ドラッグ＆ドロップ機能を使用するために、ファイルのドラッグ/ドロップを有効にする必要があります。

1. [その他] の [ファイルのドラッグ / ドロップ、またはコピー / 貼り付け] で、[有効にする] を選択します。

JavaScript を有効にする

ArcSuiteを使用するには、Internet ExplorerがJavaScriptを実行できるように設定する必要があります。JavaScriptが無効になっていると、ログイン画面やドキュメントスペースの画面を表示できません。

1. [スクリプト] の [アクティブスクリプト] で、[ダイアログを表示する] または [有効にする] を選択します。

   補足 [有効にする] の選択を推奨します。

ActiveX コントロールを有効にする

ArcSuiteを使用するには、Internet ExplorerがActiveX®コントロールを実行できるように設定する必要があります。ActiveXコントロールが無効になっている場合、自動ログイン、コラボスペースの階層構造を表示する機能、ドラッグ＆ドロップ機能、およびドキュメントスペースのリモート編集とドラッグ＆ドロップ機能を使用できません。

1. [ActiveX コントロールとプラグイン] で、次の項目を設定します。
   - [ActiveX コントロールとプラグインの実行] で、[ダイアログを表示する]、[管理者の許可済み]、または [有効にする] を選択する
   - [ActiveX フィルターを有効にする] で、[無効にする] を選択します。

・［スクリプトを実行しても安全だとマークされている ActiveX コントロールのスクリプトの実行］で、［ダイアログを表示する］または［有効にする］を選択する
・［署名された ActiveX コントロールのダウンロード］で、［ダイアログを表示する］または［有効にする］を選択する

補足 Internet Explorer の情報バーをクリックして ActiveX をダウンロードすると、エラーになりダウンロードできない場合があります。この場合は、［ActiveX コントロールとプラグイン］の［ActiveX コントロールに対して自動的にダイアログを表示］で［有効にする］を選択します。

ファイルのダウンロードを有効にする

ArcSuiteでファイルをダウンロードするには、ダウンロードを実行できるように設定する必要があります。

1. ［ダウンロード］の［ファイルのダウンロード］で、［有効にする］を選択します。

ArcSuite サーバーをイントラネットゾーンに設定する

この設定は、認証モードが統合Windows認証で、正しく動作しないときだけ設定します。Internet Explorerを使用して、ArcSuiteにアクセスする場合、イントラネットのネットワークを自動検知に設定していると、アクセス時に再度認証を要求されることがあります。この場合は、アクセス先のArcSuiteのURLをイントラネットゾーンに設定する必要があります。

補足 アクセス元のクライアント PC を統合 Windows 認証で利用するサーバーと同じドメインに設定していない場合には、自動検知で必ず認証を要求されます。

1. ［インターネットオプション］画面の［セキュリティ］タブを表示します。

参照 ［インターネットオプション］画面の表示方法については、「［インターネットオプション］画面を表示する」（P.87）を参照してください。

2. ［ローカルイントラネット］を選択します。
3. ［サイト］をクリックします。
［ローカルイントラネット］画面が表示されます。
4. ［詳細設定］をクリックします。
［ローカルイントラネット］画面が表示されます。
5. ［この Web サイトをゾーンに追加する］に、ArcSuite サーバーの URL（ホスト名）を入力します。
6. ［追加］をクリックします。
7. 手順 5 ～ 6 を ArcSuite がインストールされたサーバーの数だけ繰り返します。
8. ［閉じる］をクリックします。
9. ［OK］をクリックします。
10. ［OK］をクリックします。

13.1.3 ［プライバシー］タブの環境設定

ポップアップを許可する

別ウィンドウを表示するためにポップアップを許可する必要があります。ポップアップブロックは、イントラネットに対しては初期値で無効（ポップアップ許可）になっています。ローカルネットワークでポップアップがブロックされる場合には、イントラネットゾーンに含まれるWebサイトの設定が必要です。［セキュリティ］タブの「ローカルイントラネット」ゾーンに対する［サイト］画面で設定します。

補足 詳細は、画面の「イントラネット設定の詳細」から表示されるヘルプを参照してください。

1. ［インターネットオプション］画面の［プライバシー］タブを表示します。

   参照 ［インターネットオプション］画面の表示方法については、［［インターネットオプション］画面を表示する］（P.87）を参照してください。

2. ポップアップブロックの［設定］をクリックします。

   補足 ［ポップアップブロックを有効にする］にチェックマークが付いていない場合には、すべてのセキュリティゾーンに対してポップアップが有効になっているため、［設定］によるサイトの追加は必要ありません。

3. ［許可する Web サイトのアドレス］に、ArcSuite サーバーの URL またはドメイン名を入力します。ここでは、「*.example.com」と入力します。

   補足 ・ArcSuite サーバーの URL は、たとえば、「http://arcsuite.example.com」と入力します。
   ・ArcSuite サーバーのドメイン名は、たとえば、「*.example.com」と入力します。
   ・2 台以上で構成されている場合は、コンポーネントサーバーの URL を入力します。

4. ［追加］をクリックします。

5. ［閉じる］をクリックします。

6. ［OK］をクリックします。

13.1.4 ［接続］タブの環境設定

プロキシを使用しない（推奨）

インターネットを経由する必要がない場合は、プロキシサーバーを使用しないで、ArcSuiteサーバーに直接アクセスすることを推奨します。プロキシサーバーを使用すると、ArcSuiteサーバーにファイルをアップロードするときに、プロキシに残ったキャッシュが使われ、登録に失敗することがあります。

1. ［インターネットオプション］画面の［接続］タブを表示します。

   参照 ［インターネットオプション］画面の表示方法については、［［インターネットオプション］画面を表示する］（P.87）を参照してください。

2. ［ローカルエリアネットワーク（LAN）の設定］エリアの［LAN の設定］をクリックします。
   ［ローカルエリアネットワーク（LAN）の設定］画面が表示されます。

3. ［プロキシサーバー］エリアの［LAN にプロキシサーバーを使用する（これらの設定はダイアルアップまたは VPN 接続には適用されません）］にチェックマークを付けます。

4. ［プロキシサーバー］エリアの［詳細設定］をクリックします。
   ［プロキシの設定］画面が表示されます。

5. [次で始まるアドレスにはプロキシを使用しない] に、ArcSuite サーバーのホスト名またはドメイン名を入力します。
ここでは、「*.example.com」と入力します。

補足 ・ArcSuite サーバーのホスト名は、たとえば、「arcsuite.example.com」と入力します。
・2 台以上で構成されている場合は、コンポーネントサーバーの URL を入力します。

6. [OK] をクリックします。

7. [OK] をクリックします。

8. [OK] をクリックします。

13.1.5 [詳細設定] タブの環境設定

HTTP 1.1 を使用する

ArcSuiteを安全に使用するために、「HTTP 1.1」を使用する必要があります。

1. [インターネットオプション] 画面の [詳細設定] タブを選択します。

参照 [インターネットオプション] 画面の表示方法については、「[インターネットオプション] 画面を表示する」(P.87) を参照してください。

2. [HTTP 設定] の [HTTP 1.1 を使用する] にチェックマークを付けます。

スクリプトのデバッグを使用しない

SSL環境でArcSuiteを使う場合は、スクリプトのデバッグを使用しないように設定する必要があります。

1. [ブラウズ] の [スクリプトのデバッグを使用しない (Internet Explorer)]、および [スクリプトのデバッグを使用しない (その他)] にチェックマークを付けます。

2. [OK] をクリックします。

13.2 Google Chrome の設定

ArcSuiteを使用するWebブラウザーがGoogle Chrome™の場合は、Google Chromeの［設定］ページおよび［インターネットオプション］画面での設定が必要です。

注記 適切に設定をしていない Google Chrome での動作は保証しません。

補足 ここでは、Google Chrome のバージョン 87 での設定を例に説明しています。

13.2.1 Google Chrome の［設定］ページでの設定

Google Chromeの［設定］ページで、Cookie、JavaScript、ポップアップなどの設定をします。

［設定］ページの詳細設定を表示する

Google Chromeの設定は、［設定］ページで設定します。

［設定］ページは、次の手順で表示します。

1. Google Chrome の詳細アイコンをクリックし、表示されたメニューから［設定］を選択します。

・Google および Google ロゴは Google Inc. の登録商標であり、同社の許可を得て使用しています。

2. 一番下にある［詳細設定］をクリックします。

・Google および Google ロゴは Google Inc. の登録商標であり、同社の許可を得て使用しています。

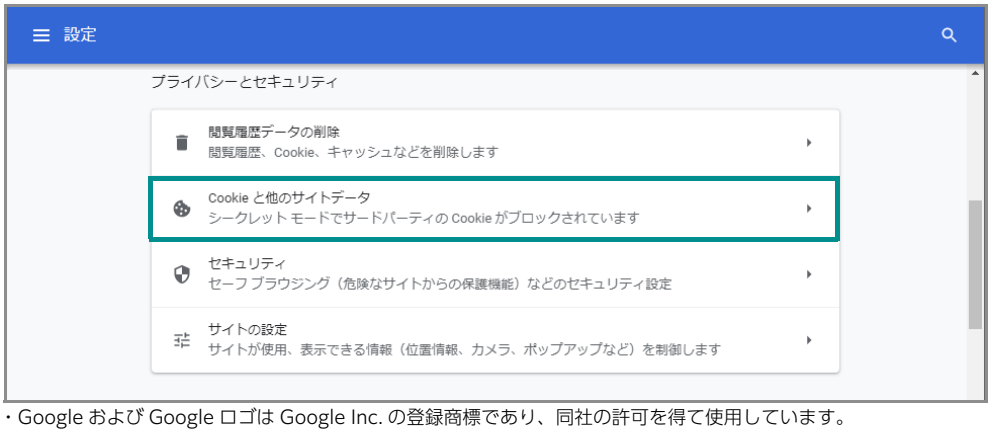
詳細な設定項目が表示されます。

続いて、［[プライバシーとセキュリティ］を設定する］（P.94）に進みます。

［プライバシーとセキュリティ］を設定する

Cookie、JavaScript、ポップアップなどの設定をします。

1. ［プライバシーとセキュリティ］の［Cookie と他のサイトデータ］をクリックします。



・Google および Google ロゴは Google Inc. の登録商標であり、同社の許可を得て使用しています。

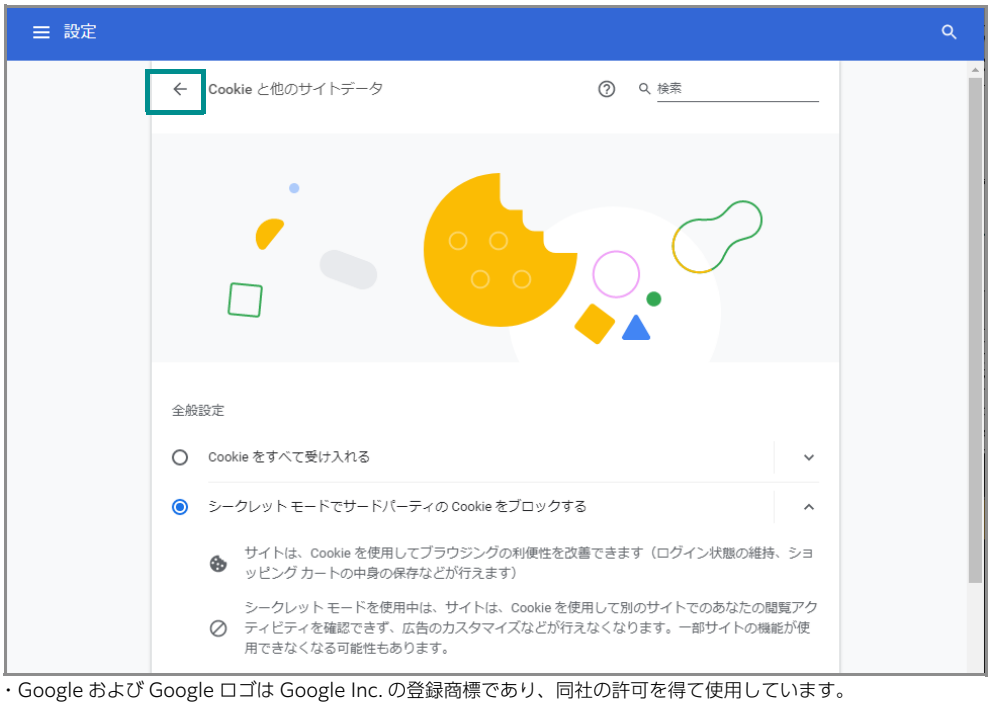
［Cookie と他のサイトデータ］画面が表示されます。

2. 次の項目が無効になっていることを確認します。

・[閲覧トラフィックと一緒に「トラッキング拒否」リクエストを送信する]

・Google および Google ロゴは Google Inc. の登録商標であり、同社の許可を得て使用しています。

3. [←] をクリックします。



・Google および Google ロゴは Google Inc. の登録商標であり、同社の許可を得て使用しています。

[設定] ページに戻ります。

4. ［プライバシーとセキュリティ］の［サイトの設定］をクリックします。

・Google および Google ロゴは Google Inc. の登録商標であり、同社の許可を得て使用しています。

［サイトの設定］画面が表示されます。

5. 各項目をクリックして、次のように設定します。

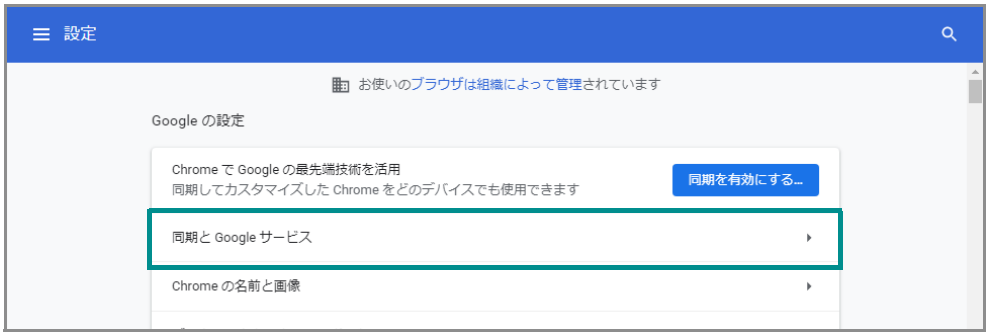
項目	設定内容
［Cookieとサイトデータ］	［Cookieをすべて受け入れる］を有効にします。
［Javascript］	［許可（推奨）］を有効にします。
［画像］	［すべてを表示（推奨）］を有効にします。
［ポップアップとリダイレクト］	次のどちらかの設定をします。 ・すべてのサイトのポップアップ表示を許可する場合 ［許可］に設定します。 ・ArcSuite のサイトだけポップアップ表示を許可する場合 1.［許可］の［追加］をクリックします。 2.［サイト］にArcSuiteサーバーのドメイン名を入力し、［追加］をクリックします。
［バックグラウンド同期］	［最近閉じたサイトがデータの送受信を完了できるようにする（推奨）］を有効にします。
［その他の権限］ー［サンドボックスの無効化プラグインのアクセス］	［サイトがプラグインを使用してパソコンにアクセスしようとしたときに確認する（推奨）］を有効にします。
［その他の権限］ー［ハンドラ］	［サイトからのプロトコルのデフォルトハンドラとしての登録要求を許可する（推奨）］を有効にします。

6. ［←］をクリックします。

・Google および Google ロゴは Google Inc. の登録商標であり、同社の許可を得て使用しています。

［設定］ページに戻ります。

7. ［Google の設定］の［同期と Google サービス］をクリックします。

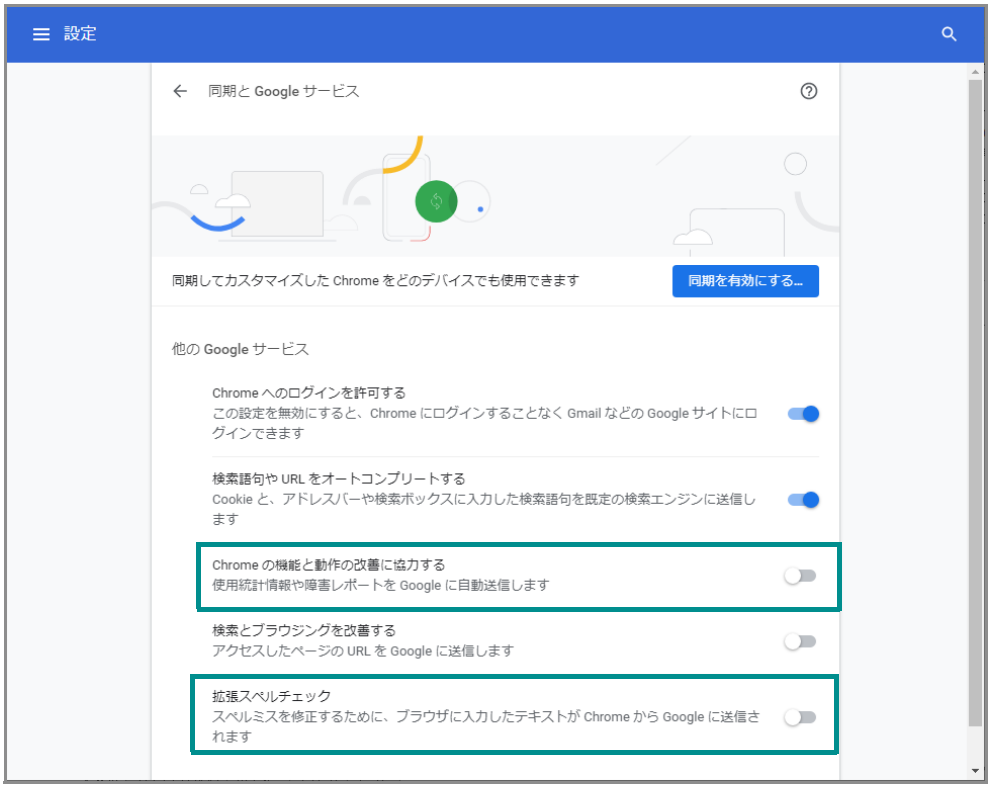


・Google および Google ロゴは Google Inc. の登録商標であり、同社の許可を得て使用しています。

8. 次の項目が無効になっていることを確認します。

・［Chrome の機能と動作の改善に協力する］

・［拡張スペルチェック］



・Google および Google ロゴは Google Inc. の登録商標であり、同社の許可を得て使用しています。

9. ［←］をクリックします。

・Google および Google ロゴは Google Inc. の登録商標であり、同社の許可を得て使用しています。

［設定］ページに戻ります。

続いて、［13.2.2 ［インターネットオプション］画面での設定］（P.98）に進みます。

13.2.2 ［インターネットオプション］画面での設定

Google Chromeを使用する場合は、［インターネットオプション］画面で次の設定をします。

・プロキシサーバーを使用しない設定にする（推奨）
・［セキュリティ］タブの環境設定をする

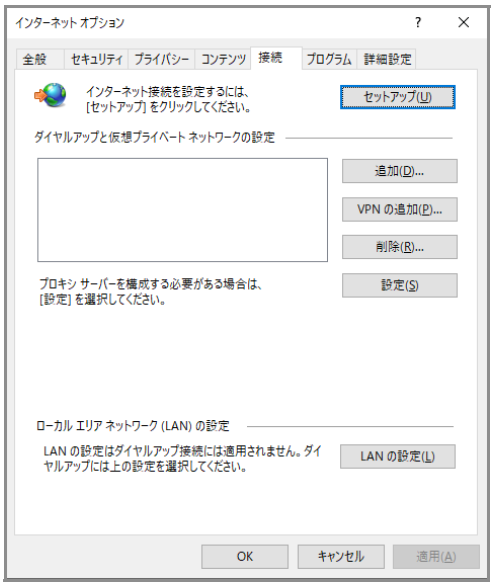
プロキシサーバーを使用しない設定にする（推奨）

イントラネットなどインターネットを経由する必要がない場合は、プロキシサーバーを使用しないで、ArcSuiteサーバーに直接アクセスすることを推奨します。プロキシサーバーを使用すると、ArcSuiteサーバーにファイルをアップロードするときに、プロキシに残ったキャッシュが使われ、登録に失敗することがあります。

1. Internet Explorer を起動します。
2. ［インターネット オプション］画面を表示して、［接続］タブを選択します。

参照 ［インターネットオプション］画面の［接続］タブの表示方法については、「13.1 Internet Explorerの設定」の「［インターネットオプション］画面を表示する」（P.87）を参照してください。

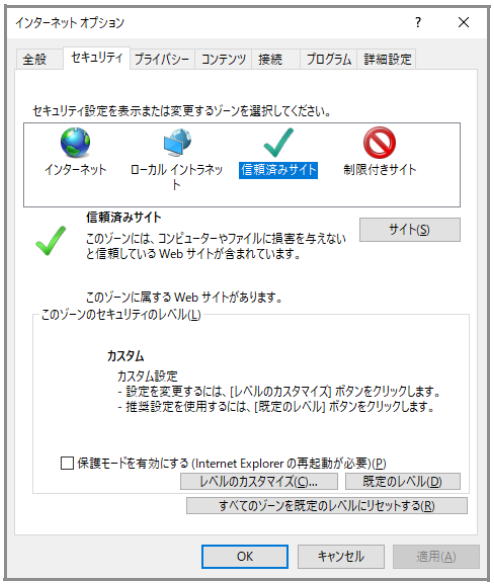
3. プロキシサーバーを使用しない設定にします。



参照 ［インターネットオプション］画面の［接続］タブでの設定については、「13.1.4 ［接続］タブの環境設定」（P.91）を参照してください。

［セキュリティ］タブの環境設定をする

［インターネットオプション］画面の［セキュリティ］タブでセキュリティの設定をします。



参照 ［インターネットオプション］画面の［セキュリティ］タブでの設定については、［13.1.2 ［セキュリティ］タブの環境設定］（P.88）を参照してください。

13.3 Microsoft Edge の設定

クライアントPCでArcSuiteを使用するWebブラウザーがMicrosoft Edgeの場合は、Microsoft Edgeの設定が必要です。

注記 適切に設定をしていない Microsoft Edge での動作は保証しません。

補足 ここでは、Microsoft Edge のバージョン 87 での設定を例に説明しています。

1. Microsoft Edge の詳細アイコンをクリックし、表示されたメニューから［設定］を選択します。
2. ［Cookie とサイトのアクセス許可］をクリックします。
3. ［ポップアップとリダイレクト］の［ブロック（推奨）］をオフにします。
4. ［Cookie とサイトデータ］の［Cookie データの保存と読み取りをサイトに許可する（推奨）］をオンにします。

13.4　Safari の設定

iPadでArcSuiteを使用する場合は、Safari（iOSまたはiPadOS標準ブラウザー）の設定が必要です。

注記 ・適切に設定をしていない Safari での動作は保証しません。
・Safari では、管理アプリケーションおよびキャプチャリングサービスは使用できません。

1. iPad を起動します。
2. [設定] をタップします。
3. [Safari] をタップします。
4. [すべての Cookie をブロック] を［オフ］にします。
5. [詳細] をタップします。
6. [JavaScript] を［オン］にします。
7. iPadOS のバージョンが「13」または「14」の場合は、次の操作をします。

(1) Safari を起動して URL を入力し、ArcSuite のログイン画面を表示します。

補足 ArcSuite の URL は、次のとおりです。
「http:// {ArcSuite サーバーのホストアドレス} /ArcSuite/login」

(2) 左上の AA をタップし、表示されたメニューから［Web サイトの設定］を選択します。

(3) [デスクトップ用 Web サイトを表示] を［オフ］にします。

14 各コンポーネントの初期設定

14.1 ドキュメント管理サービスの初期設定

ドキュメント管理サービスの初期設定をするには、「ドキュメント管理サービス管理ツール」を使います。「ドキュメント管理サービス管理ツール」は、サーバー、サービス、キャビネット、およびドロワーを管理するためのツールであり、ツールには次の3つの種類があります。

・ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版

・ドキュメント管理サービス管理コマンド

・ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web 版

ここでは、それぞれのツールを使用して、ドキュメント管理サービスの初期設定を行う方法を説明します。

ドキュメント管理サービスに設定する主な項目は次のとおりです。

・ユーザーアトムの追加

・ユーザー属性の追加

・標準キャビネット（cabinetLabel=public）の作成

・標準キャビネットドロワーの作成

・ワークスペースキャビネット（cabinetLabel=workspace）の作成

・ワークスペースキャビネットのドロワーの作成

・インデックスの追加

・キャビネットのモード変更

補足 ・ユーザーアトムの追加とユーザー属性の追加は必要に応じて行います。キャビネットに設定するユーザーアトム、ユーザー属性がある場合に必要な作業です。
・「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web 版」では、ユーザーアトムの追加、ユーザー属性の追加、およびインデックスの追加は設定できません。

参照 署名およびタイムスタンプを付与する運用の場合、キャビネットを作成する手順は、『e- 文書法対応 概要説明書』の説明を参照してください。

14.1.1 ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版での設定方法

「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版」は、GUIを利用した管理ツールです。

ドキュメント管理サービスをインストールすると、自動的にドキュメント管理サービス管理アプリケーションがインストールされます。「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版」を使った初期設定の方法は次のとおりです。

参照 「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版」の詳細については、『ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版のヘルプ』を参照してください。

ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版を起動する

1. ArcSuite サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. デスクトップ上に表示されているドキュメント管理サービス管理アプリケーションのショートカットアイコンをダブルクリックします。
   ［ログイン］画面が表示されます。
3. ドキュメント管理サービスの管理者を指定します。ここでは、「rmsadmin」を入力します。

4. ドキュメント管理サービスの管理者のパスワードを入力します。
ここでは、「rmsadmin001」と入力します。

補足 ［ドキュメント管理サービスの管理者］は、初期値として［RMS の管理者］が、設定されています。パスワードも同様です。

参照 各コンポーネントのユーザー名およびパスワードについては、「1.3 セットアップ前の設定事項」(P.24)を参照してください。

5. ［サービス］プルダウンメニューで、操作するサービスを指定します。

6. ［OK］をクリックします。
ドキュメント管理サービス管理アプリケーションが起動します。

ユーザーアトムを追加する

ユーザーアトムの追加は必要に応じて行います。
キャビネットに設定するユーザーアトムがある場合は必要な作業です。

1. ドキュメント管理サービス管理アプリケーションの［RMS］＞［ユーザーアトムの追加］を選択します。
［ユーザーアトムの追加］画面が表示されます。

2. ［ネームスペース］プルダウンメニューからネームスペースを選択します。

3. ［新規に登録するユーザーアトムの一覧］エリア右側の［追加］をクリックします。
［ユーザーアトムの指定］画面が表示されます。

4. ［アトム名］に、アトム名を入力します。

補足 先頭が英字、それ以降は英数字、「_ （アンダースコア）」で構成された 64 バイト以内の文字列を入力します。

5. ライセンスのある言語について属性名を入力します。日本語表示名の入力は、必須です。

・［日本語］
日本語で入力します。

・［英語］
英語で入力します。

補足 属性名は 128 バイト以内の文字列で入力します。

6. ［OK］をクリックします。
［ユーザーアトムの追加］画面が表示されます。［ユーザーアトムの追加］画面の［新規に登録するユーザーアトムの一覧］に、登録したユーザーアトムが表示されます。

ユーザー属性の追加

ユーザー属性の追加は必要に応じて行います。
キャビネットにユーザー属性を設定する場合は、必要な作業です。

1. ドキュメント管理サービス管理アプリケーションの［RMS］＞［ユーザー属性の追加］を選択します。
［ユーザー属性の追加］画面が表示されます。

2. ［ネームスペース］プルダウンメニューからネームスペースを選択します。

3. ［新規に登録するユーザー属性一覧］エリア右側の［追加］をクリックします。
［ユーザー属性の指定］画面が表示されます。

4. [属性名] に、属性名を入力します。

   補足 先頭が英字、それ以降は英数字、「_ (アンダースコア)」で構成された文字を 64 バイト以内で入力します。

5. [DB カラム入力] に、DB カラム名を入力します。

   補足 先頭が英字、それ以降は英数字、「_ (アンダースコア)」で構成された文字を 25 バイト以内で入力します。

6. ライセンスのある言語について属性名を入力します。日本語表示名の入力は、必須です。
   - [日本語]
   - [英語]

   補足 属性名は 128 バイト以内で入力します。

7. [型] プルダウンメニューから、データ型の種類を選択します。[文字列型 (string)] を選択した場合は、右側のテキストボックスに、1 ～ 3000 の範囲で、文字列の長さを入力します。

8. 次のどれかのラジオボタンを選択します。
   - [単値型属性]
   - [多値型属性]

   補足 [多値型属性] を選択した場合は、右側のテキストボックスに、2 ～ 100 の範囲で多属属性の最大数を入力します。

9. [OK] をクリックします。

10. [ユーザー属性の追加] 画面で、[OK] をクリックします。
    ユーザー属性の追加を確認する画面が表示されます。

11. [はい] をクリックします。
    ユーザー属性が追加され、元の画面に戻ります。

    補足 追加したユーザー属性は、キャビネットを作成したあとに、[ユーザー属性の設定] から必要な属性を設定します。

データベース表領域のサイズの算出

1. [ドキュメント管理サービス管理アプリケーション] の [サービス] タブのページで、左側の [階層ツリー表示] エリアから [サービス] を選択します。

2. メニューバーの [サービス操作] > [DB 表領域] > [DB 表領域のサイズ算出] を選択します。
   [DB 表領域のサイズ算出] 画面－ [全般] タブのページが表示されます。

3. [キャビネットラベル (用途)] プルダウンメニューから、キャビネットの用途を選択します。

4. [登録予定件数] に、キャビネットの登録予定件数を 1,000 ～ 2,147,483,647 までの範囲で入力します。

5. [フォルダ階層限界値] に、作成するキャビネットのフォルダー階層の限界値を 3 ～ 30 までの範囲で入力します。初期値は 10 です。

6. クラスを使用するときは、[クラスの利用を想定する] にチェックマークを付けます。

7. 必要に応じて、[ユーザー属性] タブ、[エディションキー] タブ、[インデックスキー] タブを設定します。

8. 署名およびタイムスタンプを付与するキャビネット用の表領域を作成するときは、[原本性保証情報] タブを選択します。
[DB 表領域のサイズ算出] 画面ー [原本性保証情報] タブのページが表示されます。

補足 [原本性保証情報] タブは、手順 3 で [標準キャビネット] を選択した場合だけ表示されます。

9. [長期署名方式] プルダウンメニューから、長期署名方式を選択します。

10. 手順 9 で [XAdES 方式] を選択した場合は、証明付与情報を設定します。

11. [計算] をクリックします。
設定した内容のデータベース表領域のサイズの計算が開始されます。
計算が終了すると、[DB 表領域のサイズ算出] 画面が表示されます。

12. 計算されたデータベース表領域サイズを確認します。

13. [OK] をクリックします。

データベース表領域の作成

1. [ドキュメント管理サービス管理アプリケーション] の [サービス] タブのページで、左側の [階層ツリー表示] エリアから [サービス] を選択します。

2. メニューバーの [サービス操作] > [DB 表領域] > [DB 表領域の作成] を選択します。
[DB 表領域の作成] 画面が表示されます。

3. [表領域名] に、表領域名を入力します。

注記 「SYS_」で始まる文字列、またはデータベースの予約語となっている文字列は指定できません。

補足 先頭文字が英字、2 文字目以降が英数字と「_ (アンダースコア)」で構成される文字列を、30 バイト以内で入力します。

参照 データベースの予約語については、次の URL で確認してください。
https://docs.oracle.com/cd/F19136_01/sqlrf/Oracle-SQL-Reserved-Words.html#GUID-55C49D1E-BE08-4C50-A9DD-8593EB925612
URL は、2021 年 4 月現在のものです。

4. [表領域ファイルサイズ] に、「データベース表領域のサイズの算出」(P.105) で確認した表領域のサイズを 20 ～ 32,000 の範囲で入力します。初期値は 50 MB です。

5. [表領域データファイルパス] に、作成するファイルのパスを入力します。

補足 ・入力を省略すると「{表領域名} .dbf」が指定されます。
・ファイルおよびフォルダー名として使用できる文字は、英数字、「_ (アンダースコア)」、「. (ピリオド)」、「 (スペース)」だけです。

6. [OK] をクリックします。
データベース表領域が作成されます。

標準キャビネットの作成

1. [ドキュメント管理サービス管理アプリケーション] の [サービス] タブのページで、左側の [階層ツリー表示] エリアから [サービス] を選択します。

2. メニューバーの [サービス操作] > [キャビネットの作成] を選択します。
作成する [キャビネットの用途] を選択する画面が表示されます。

3. [標準キャビネット] を選択します。
4. [OK] をクリックします。
5. [キャビネットの作成] 画面－ [全般] タブのページが表示されます。
6. [キャビネットの作成] 画面－ [全般] タブのページで、次の項目を入力します。
   - [キャビネット名]
     作成するキャビネットの名前を入力します。
   - [キャビネット ID]
     作成するキャビネットの ID を入力します。
   - [登録予定件数]
     登録予定件数を入力します。
   - [表領域名]
     作成するキャビネットが使用する表領域名を選択します。
     すでに存在している表領域を選択します。
   - [ファイルフォーマット変換サービス]
     フォーマット変換サービスを使用する場合はサービス名を選択します。
   - [フォルダ階層限界値]
     フォルダー階層の限界値（フォルダーを階層構造で管理できる階層の深さ）を入力します。
   - [キャビネット管理者]
     [ロールの参照] をクリックしてキャビネット管理者を選択します。
   - [注釈]
     キャビネットに付ける注釈を入力します。
   - [操作制約パターンラベル]
     「制約なし」を選択します。
   - [長期署名方式]
     「XAdES 方式」または「PAdES 方式」を選択します。

   補足
   - [キャビネット名] は、384 バイト以内で入力します。
   - [キャビネット ID] は、64 バイト以内で入力します。
   - [登録予定件数] は、1,000 ～ 2,147,483,647 の範囲で入力します。
   - 表領域が不明な場合は [サービス情報の表示] から確認します。
   - 作成するキャビネットが、分類キャビネット、およびメッセージ通知キャビネットの場合は、ファイルフォーマット変換サービスを使用できません。
   - [フォルダ階層限界値] の範囲は 3 ～ 30 で入力します。初期値は 10 です。
   - [注釈] は、512 バイト以内で入力します。
   - [長期署名方式] は、原本性保証オプションがインストールされていて、作成するキャビネットが標準キャビネットの場合だけ表示されます。
7. 必要な属性や権限をタブページで選択して設定します。
8. [OK] をクリックします。
   指定した条件でキャビネットが作成され、キャビネット作成が成功したことを示す画面が表示されます。
   [ドキュメント管理サービス管理アプリケーション] の [サービス] タブのページに戻ります。

標準キャビネットのドロワーの作成

1. [ドキュメント管理サービス管理アプリケーション] の [サービス] タブのページで、左側の [階層ツリー表示] エリアから [サービス] を選択します。
   キャビネットの一覧が表示されます。
2. キャビネット一覧が表示された状態で、操作対象のキャビネットを選択します。

3. メニューバーの［キャビネット操作］＞［ドロワーの作成］を選択します。
［ドロワーの作成］画面－［全般］タブのページが表示されます。

4. 次の項目を入力します。

・［ドロワー名］
作成するドロワーの名前を入力します。

・［ストレージパス］
あらかじめ、サーバーに任意のフォルダーを用意します。
作成するドロワーが指定するストレージとして、このフォルダーを指定します。

注記 オンラインバックアップをインストールする場合、ストレージパスには、システムドライブ以外のパスを指定することを推奨します。
システムドライブを選択した場合、オンラインバックアップに時間がかかることがあります。

・［注釈］
ドロワーに付ける注釈を入力します。

補足 ・［ドロワー名］は、384 バイト以内で入力します。
・［ストレージパス］は、英数字と記号だけの絶対パスで入力します。入力できる文字列の長さは、1 ～ 165 バイト以内で入力します。
・［注釈］は、0 ～ 512 バイト以内で入力します。

5. そのほか、アクセス権、デフォルトアクセス権など必要な設定をします。

6. ［OK］をクリックします。
指定した条件でドロワーが作成され、ドロワー作成が成功したことを示す画面が表示されます。

7. ［OK］をクリックします。
［ドキュメント管理サービス管理アプリケーション］の［サービス］タブのページに戻ります。

注記 ワークスペースキャビネットおよびワークスペースドロワーの作成が不要のときは、「キャビネットのインデックスキーの追加」（P.109）の手順へ移動します。

ワークスペースキャビネットの作成

1. ［ドキュメント管理サービス管理アプリケーション］の［サービス］タブのページで、左側の［階層ツリー表示］エリアから［サービス］を選択します。

2. メニューバーの［サービス操作］＞［キャビネットの作成］を選択します。
作成する［キャビネットの用途］を選択する画面が表示されます。

3. ［ワークスペースキャビネット］を選択します。

4. ［OK］をクリックします。
［キャビネットの作成］画面－［全般］タブのページが表示されます。

5. ［キャビネットの作成］画面－［全般］タブのページで、次の項目を入力します。

・［キャビネット名］
作成するキャビネットの名前を、384 バイト以内で入力します。

・［キャビネット ID］
作成するキャビネット ID を、64 バイト以内で入力します。

・［登録予定件数］
登録予定件数を、1,000 ～ 2,147,483,647 の範囲で入力します。

・［表領域名］
作成するキャビネットが使用する表領域名を選択します。
すでに存在している表領域を選択します。

・［ファイルフォーマット変換サービス］
フォーマット変換サービスを使用する場合はサービス名を選択します。

・[フォルダ階層限界値]
フォルダー階層の限界値（フォルダーを階層構造で管理できる階層の深さ）を、3 ～ 30 の範囲で入力します。初期値は 10 です。

・[キャビネット管理者]
[ロール参照] をクリックしてキャビネット管理者を選択します。

・[注釈]
キャビネットに付ける注釈を、512 バイト以内で入力します。

補足 作成するキャビネットが、分類キャビネット、およびメッセージ通知キャビネットの場合は、ファイルフォーマット変換サービスを使用できません。

6. 必要な属性や権限をタブページで選択して設定し［OK］をクリックします。
指定した条件でキャビネットが作成され、キャビネット作成が成功したことを示す画面が表示されます。
［ドキュメント管理サービス管理アプリケーション］の［サービス］タブのページに戻ります。

ワークスペースキャビネットのドロワーの作成

1. ［ドキュメント管理サービス管理アプリケーション］の［サービス］タブのページで、左側の［階層ツリー表示］エリアから［サービス］を選択します。
キャビネットの一覧が表示されます。

2. キャビネット一覧が表示された状態で、操作対象のワークスペースキャビネットを選択します。

3. メニューバーの［キャビネット操作］＞［ドロワーの作成］を選択します。
［ドロワーの作成］画面－［全般］タブのページが表示されます。

4. 次の項目を入力します。

・[ドロワー名]
作成するドロワーの名前を、384 バイト以内で入力します。

・[ストレージパス]
あらかじめ、サーバーに任意のフォルダーを用意します。
作成するドロワーが指定するストレージとして、このフォルダーを指定します。

注記 **オンラインバックアップをインストールする場合、ストレージパスには、システムドライブ以外のパスを指定することを推奨します。**
システムドライブを選択した場合、オンラインバックアップに時間がかかることがあります。

補足 ［ストレージパス］は、英数字と記号だけの絶対パスで入力します。入力できる文字列の長さは、1 ～ 165 バイト以内です。

・[注釈]
ドロワーに付ける注釈を、0 ～ 512 バイト以内で入力します。

5. [OK] をクリックします。
指定した条件でドロワーが作成され、ドロワー作成が成功したことを示す画面が表示されます。

6. [OK] をクリックします。
［ドキュメント管理サービス管理アプリケーション］の－［サービス］タブのページに戻ります。

キャビネットのインデックスキーの追加

1. ［ドキュメント管理サービス管理アプリケーション］の［サービス］タブのページで、左側の［階層ツリー表示］エリアから［サービス］を選択します。
キャビネットの一覧が表示されます。

2. キャビネット一覧が表示された状態で、操作対象のキャビネットを選択します。

3. メニューバーの［キャビネット操作］＞［インデックスキー］＞［インデックスキーの追加］を選択します。
［インデックスキーの追加］画面が表示されます。

4. ［新規に登録するインデックスキー一覧］エリア右側の［追加］をクリックします。
［インデックスキーの指定］画面が表示されます。

5. ［ID］に、設定するインデックスキーの ID を入力します。

   補足 ユニークキーの場合は、［ユニークキー］にチェックマークを付けます。

6. 必要に応じて、［追加］、［削除］を使って、インデックスキーを構成する属性を追加、削除します。

7. 必要に応じて、［上へ］、［下へ］を使って、選択した属性の順番を変更します。

8. ［OK］をクリックします。
［インデックスキーの追加］画面が表示されます。
新規に登録するインデックスキー一覧には、設定したインデックスキーが表示されます。

9. ［OK］をクリックします。
［ドキュメント管理サービス管理アプリケーション］の［サービス］タブのページに戻ります。

通常モードへの変更

1. ［ドキュメント管理サービス管理アプリケーション］の［サービス］タブのページで、左側の［階層ツリー表示］エリアから［サービス］を選択します。
キャビネットの一覧が表示されます。

2. キャビネット一覧が表示された状態で、操作対象のキャビネットを選択します。

3. メニューバーの［キャビネット操作］＞［キャビネットのモード変更］を選択します。
［キャビネットのモード変更］画面が表示されます。

4. ［キャビネットのモード変更］画面で、［はい］をクリックします。
モードが通常モードに変更されます。

ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版の終了

1. ［ドキュメント管理サービス管理アプリケーション］画面で、［サービス操作］＞［閉じる］を選択します。
ドキュメント管理サービス管理アプリケーションの終了を確認する画面が表示されます。

2. ［はい］をクリックします。
ドキュメント管理サービス管理アプリケーションが終了します。

14.1.2 ドキュメント管理サービス管理コマンドでの設定方法

ドキュメント管理サービス管理コマンドを使用して、ドキュメント管理サービスの設定を行うためには、CSVファイルとコントロールファイルが必要です。ArcSuiteでは、それぞれの設定を行うために必要なCSVファイルとコントロールファイルのサンプルファイルが用意されています。これらのサンプルファイルを使用して、設定を行うことができます。必要に応じて、サンプルファイルの内容を変更できます。

参照 ・CSV ファイルとコントロールファイルの詳細については、『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。
・ドキュメント管理サービス管理コマンドの詳細については、『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。

ドキュメント管理サービス管理コマンドの実行

1. ArcSuite サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. ドキュメント管理サービスが起動していない場合は、ドキュメント管理サービスを起動します。

   参照 サービスの起動方法については、『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。
3. Windows の［スタート］メニューから、［Windows システムツール］＞［コマンドプロンプト］を右クリックし、［その他］＞［管理者として実行］を選択します。
   ［管理者：コマンド プロンプト］画面が表示されます。
4. 次のコマンドを入力して <Enter> キーを押し、サンプルファイルの保存フォルダーに移動します。

   ```
   cd /d {ArcSuite のインストールフォルダー}¥Service¥Components¥Repository¥sample¥admin
   ```

   たとえば、「{ArcSuite のインストールフォルダー}」が「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」の場合は、次のように入力します。

   ```
   cd /d D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite¥Service¥Components¥Repository¥sample¥admin
   ```

   補足 {ArcSuite のインストールフォルダー} は、インストール時に指定したインストール先のフォルダーです。たとえば、「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」です。
5. 次のコマンドを入力して <Enter> キーを押し、ドキュメント管理サービス管理コマンドを実行します。

   ```
   "{ArcSuite のインストールフォルダー}¥Service¥Components¥Repository¥bin¥dradmincmd.bat" {コントロールファイル名}
   ```

   たとえば、「{ArcSuite のインストールフォルダー}」が「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」、「{コントロールファイル名}」が「addUserAtom.ctl」の場合は、次のように入力します。

   ```
   "D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite¥Service¥Components¥Repository¥bin¥dradmincmd.bat" addUserAtom.ctl
   ```

   補足 {コントロールファイル名} には、それぞれの操作で使用するコントロールファイルを指定します。コントロールファイル中には、必要な CSV ファイルの名前が記載されています。

   参照 具体的なコントロールファイル名については、「14.1 ドキュメント管理サービスの初期設定」の「ドキュメント管理サービス管理コマンドで設定する手順」（P.112）を参照してください。

   次のメッセージが表示されます。

   ```
   コマンド実行ユーザーを設定してください。
   userName =
   ```

6. ドキュメント管理サービスの管理者を指定します。ここでは、「rmsadmin」と入力し、<Enter> キーを押します。
次のメッセージが表示されます。

```
userPasswd =
```

7. ドキュメント管理サービスの管理者のパスワードを入力します。ここでは、「rmsadmin001」と入力し、<Enter> キーを押します。
次のメッセージが表示されます。

```
コマンドを実行しても良いですか？［yes/no］：
```

参照 各コンポーネントのユーザー名およびパスワードについては、「1.3 セットアップ前の設定事項」(P.24) を参照してください。

8. 「y」と入力して <Enter> キーを押します。

ドキュメント管理サービス管理コマンドで設定する手順

ドキュメント管理サービス管理コマンドでのドキュメント管理サービスの初期設定手順の例を説明します。なお、本設定で使用するように記述されているファイル名は、それぞれの処理を行うために使用できるサンプルファイルの名前を示しています。設定する内容にあわせて、サンプルのコントロールファイルとCSVファイルを編集してから、ドキュメント管理サービス管理コマンドを実行します。
サンプルファイルは次のパスにあります。
{ArcSuiteのインストールフォルダー} ¥Service¥Components¥Repository¥sample¥admin

補足 {ArcSuite のインストールフォルダー} は、プログラムのインストール先のフォルダーです。インストール時に指定します。

ドキュメント管理サービス管理コマンドの「dradmincmd.bat」を使用して、各種設定をします。
dradmincmd.batの使用方法を説明します。

参照 各ファイルの編集内容など、管理コマンドの詳細については、『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。

1. ユーザーアトムを追加します。
次のコントロールファイルを編集して、使用します。

・addUserAtom.ctl

補足
・addUserAtom.ctl のコントロールファイルでは、次の CSV ファイルが使用されます。
userAtomDefFile.csv（アトム定義ファイル）
・ユーザーアトムの追加は必要に応じて行います。キャビネットに設定するユーザーアトムがある場合だけ必要な作業です。
・必要に応じてネームスペースを追加してください。

2. ユーザー属性を追加します。
次のコントロールファイルを編集して、使用します。

・addUserAttribute.ctl

補足
・addUserAttribute.ctl のコントロールファイルでは、次の CSV ファイルが使用されます。
userAttrListDef.csv（属性定義ファイル）
・ユーザー属性の追加は必要に応じて行います。キャビネットに設定するユーザー属性がある場合は必要な作業です。
・必要に応じてネームスペースを追加してください。

3. キャビネットのテーブルスペースの容量サイズを測定します。
次のコントロールファイルを使用します。

・calculateDbSize.ctl

4. 標準キャビネット（cabinetLabel=public）を作成します。

(1) 次のコントロールファイルを編集して、テーブルスペースを作成します。

・createDbTableSpace.ctl

(2) コントロールファイルを編集して、標準キャビネットを作成します。

・createCabinetPublic.ctl

補足 createCabinetPublic.ctl のコントロールファイルでは、次の CSV ファイルが使用されます。
- ・cabinetAcl.csv（アクセス権を設定するファイル）
- ・defaultAcl.csv（デフォルトアクセス権を設定するファイル）
- ・maskAcl.csv（キャビネットのアクセス権マスクを設定するファイル）
- ・contentLabel.csv（コンテントラベルリストの定義ファイル）
- ・userAttrListFile.csv（属性リストのファイル）
- ・statusDef.csv（状態定義のファイル）
- ・statusPath.csv（状態遷移定義のファイル）

5. 標準キャビネットのドロワーを作成します。
次のコントロールファイルを編集して、使用します。

・createDrawer.ctl

補足 createDrawer.ctl のコントロールファイルでは、次の CSV ファイルが使用されます。
- ・drawerAcl.csv（ドロワーのアクセス権を設定するファイル）
- ・defaultAcl.csv（ドロワーのデフォルトアクセス権を設定するファイル）

6. ワークスペースキャビネット（cabinetLabel=workspace）を作成します。

(1) 次のコントロールファイルを編集して、テーブルスペースを作成します。

・createDbTableSpaceWS.ctl

(2) 次のコントロールファイルを使用して、ワークスペースキャビネットを作成します。

・createCabinetWS.ctl

補足 createCabinetWS.ctl のコントロールファイルでは、次の CSV ファイルが使用されます。
- ・cabinetAcl.csv（アクセス権を設定するファイル）
- ・defaultAcl.csv（デフォルトアクセス権を設定するファイル）
- ・maskAcl.csv（キャビネットのアクセス権マスクを設定するファイル）
- ・contentLabel.csv（コンテントラベルリストの定義ファイル）
- ・userAttrListFile.csv（属性リストのファイル）
- ・statusDef.csv（状態定義のファイル）
- ・statusPath.csv（状態遷移定義のファイル）

7. ワークスペースキャビネットのドロワーを作成します。cabinetLabel には Workspace を指定します。
次のコントロールファイルを編集して、使用します。

・createDrawerWS.ctl

補足 createDrawerWS.ctl のコントロールファイルでは、次の CSV ファイルが使用されます。
- ・drawerAcl.csv（ドロワーのアクセス権を設定するファイル）
- ・defaultAcl.csv（ドロワーのデフォルトアクセス権を設定するファイル）

8. キャビネットのインデックスを追加します。
ユーザー属性を指定した場合などでインデックス作成が必要な場合は、次のコントロールファイルを編集して、インデックスを作成します。

・addIndexOfCabinet.ctl

補足
- ・addIndexOfCabinet.ctl のコントロールファイルでは、次の CSV ファイルが使用されます。
  keyListFile.csv（インデックスキーの定義ファイル）
- ・ワークスペースキャビネットには、ユニークキーは設定できません。

9. キャビネットのモードを normal にします。

(1) コントロールファイルを指定しないで dradmincmd.bat を実行します。

(2) ユーザー名を入力します。

(3) パスワードを入力します。

(4)「operation」のプロンプトに対して、「setModeOfCabinet」を入力します。

(5)「cabinetID」のプロンプトまたは「cabinetName」のプロンプトに対して、キャビネット ID またはキャビネット名を入力します。

(6)「mode」のプロンプトに対して、「normal」を入力します。

(7) 確認メッセージに対して「y」を入力します。
キャビネットのモードが「normal」に変更されます。

10. 手順 8 と手順 9 をすべてのキャビネット（ワークスペース用のキャビネットを含む）に対して実行します。

11.「operation」のプロンプトに対して、「exit」を入力します。
ドキュメント管理サービス管理コマンドが終了します。

14.1.3 ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web 版での設定方法

「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web版」は、クライアントPCからWebブラウザーを使って操作する管理ツールです。
ここでは、「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web版」を使った初期設定の方法を説明します。

参照 「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web 版」の詳細については、『ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web 版のヘルプ』を参照してください。

ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web 版にログインする手順

1. ［ポータル］画面で、［システム管理］リンクをクリックします。
［システム管理］画面が表示されます。

2. ［システム管理］画面の左側にある［システム管理］から、［ドキュメント管理サービス］をクリックします。
画面の右側に、ドキュメント管理サービスの情報が表示されます。

3. 管理アプリケーションのリンクをクリックします。
［管理ログイン］画面が表示されます。

4. ドキュメント管理サービスのサービス管理者の［ユーザー ID］、および［パスワード］を入力します。

5. ［ログイン］をクリックします。
ドキュメント管理サービス管理アプリケーションが起動し、［ドキュメント管理サービス 管理アプリケーション］の［管理オブジェクト一覧］画面が表示されます。

データベース表領域のサイズの算出

ここでは、キャビネットが必要とするデータベース表領域のサイズを算出する手順を説明します。
データベース表領域のサイズを算出できるのは、サービス管理者だけです。

1. [ドキュメント管理サービス] − [管理オブジェクト一覧] の [ドキュメント管理サービス] 画面で、[DB 表領域] メニューから、[サイズ算出] を選択します。
[DB 表領域のサイズ算出] 画面 − [全般] タブのページが表示されます。

2. [キャビネットラベル（用途)] プルダウンメニューから、[キャビネットの用途] を選択します。

3. [登録予定件数] に、キャビネットの登録予定件数を 1,000 ～ 2,147,483,647 の範囲で入力します。

4. [フォルダ階層限界値] に、作成するキャビネットのフォルダー階層の限界値を 3 ～ 30 の範囲で入力します。初期値は 10 です。

補足 [キャビネットラベル（用途)] プルダウンメニューで「分類キャビネット」を選択している場合は、[フォルダ階層限界値] が表示されません。この場合、フォルダー階層の限界値は 8 に固定されます。

5. クラスを利用するための表領域を作成する場合は、[クラスの利用を想定する] にチェックマークを付けます。
チェックボックスは、作成するキャビネットが、標準キャビネットの場合だけ表示されます。

6. [ユーザー属性] タブを選択します。
[DB 表領域サイズ算出] 画面 − [ユーザー属性] タブのページが表示されます。
作成するキャビネットが、分類キャビネットの場合は、[DB 表領域のサイズ算出] 画面 − [ユーザー属性] タブの画面は表示されません。手順 8 に進んでください。

7. 作成するキャビネットに設定するユーザー属性を指定します。操作に応じて、次の手順に進みます。

◆ ユーザー属性を追加する

(1) [DB 表領域サイズ算出] 画面 − [ユーザー属性] タブのページの [追加] をクリックします。
[属性の追加] 画面が表示されます。

(2) [ネームスペース] プルダウンメニューから、ネームスペースを選択します。
画面下部に表示されている属性一覧に、選択したネームスペースに登録されている属性情報が表示されます。

(3) 追加するユーザー属性を選択します。

(4) [追加] をクリックします。
[DB 表領域サイズ算出] 画面 − [ユーザー属性] タブのページが表示されます。
ユーザー属性一覧に選択したユーザー属性が表示されます。

(5) 手順 8 に進みます。

◆ ユーザー属性を削除する

(1) [DB 表領域サイズ算出] 画面 − [ユーザー属性] タブのページのユーザー属性一覧から、削除するユーザー属性を選択します。

(2) [削除] をクリックします。
選択したユーザー属性が削除されます。

(3) 手順 8 に進みます。

◆ **ユーザー属性をファイルから読み込む（インポート）**

ファイルを読み込む場合は、あらかじめ設定ファイルを用意しておく必要があります。設定ファイル（CSV ファイル）の例を次に示します。

```
"attrId"
tokyo:drawingNumber
tokyo:cost
```

(1) [DB 表領域サイズ算出] 画面－［ユーザー属性］タブのページの［インポート］をクリックします。
［ファイルの選択］画面が表示されます。

(2) 追加するユーザー属性の設定ファイル名を選択します。

(3) エンコーディングをプルダウンメニューから選択します。

(4) [OK] をクリックします。
設定ファイルに記述されているユーザー属性が、ユーザー属性一覧に追加されます。

(5) 手順 8 に進みます。

補足
- インポートで読み込まれた設定項目は、現在の設定に追加されます。
- ファイルは、1 行ずつ読み込まれます。
- 指定したユーザー属性が必要とするデータベースの列が、900 個を超えるユーザー属性を追加する場合に、警告メッセージが表示され、読み込みを終了します。
- すでに表示されている設定項目が読み込まれた場合はメッセージが表示され、その項目はスキップされます。
- インポートファイルの記述が正しくない場合は、エラーになります。

◆ **ユーザー属性をファイルに保存する（エクスポート）**

(1) [DB 表領域サイズ算出] 画面－［ユーザー属性］タブのページの［エクスポート］をクリックします。
［エンコーディングの選択］画面が表示されます。

(2) エンコーディングを、プルダウンメニューから選択します。

(3) [OK] をクリックします。
［ファイルのダウンロード］画面が表示されます。

(4) [保存] をクリックします。
設定されているユーザー属性が、設定ファイルとして保存されます。

(5) 手順 8 に進みます。

8. [エディションキー] タブを選択します。
［DB 表領域サイズ算出］画面－［エディションキー］タブのページが表示されます。
作成するキャビネットが、ワークスペースキャビネット、分類キャビネット、およびワークフローキャビネットの場合は、［DB 表領域サイズ算出］画面－［エディションキー］タブのページは表示されません。手順 10 に進んでください。

9. 作成するキャビネットに設定するエディションキーを指定します。操作に応じて、次の手順に進みます。

◆ **エディションキーを追加する**

(1) [DB 表領域サイズ算出] 画面－［エディションキー］タブのページの［追加］をクリックします。
［属性の追加］画面が表示されます。

(2) 追加するエディションキーを選択します。

(3) [OK] をクリックします。
［DB 表領域サイズ算出］画面－［エディションキー］タブのページが表示されます。
エディションキー一覧に選択したエディションキーが表示されます。

(4) 手順 10 に進みます。

◆ **エディションキーを削除する**

(1) [DB 表領域サイズ算出] 画面－ [エディションキー] タブのページのエディションキー一覧から、削除するエディションキーを選択します。

(2) [削除] をクリックします。
選択したエディションキーが削除されます。

(3) 手順 10 に進みます。

◆ **エディションキーをファイルから読み込む（インポート）**
ファイルを読み込む場合は、あらかじめ設定ファイルを用意しておく必要があります。設定ファイル（CSV ファイル）の例を次に示します。

```
"attrId"
tokyo:drawingNumber
tokyo:cost
```

(1) [DB 表領域サイズ算出] 画面－ [エディションキー] タブのページの [インポート] をクリックします。
[ファイルの選択] 画面が表示されます。

(2) 追加するエディションキーの設定ファイル名を選択します。

(3) エンコーディングをプルダウンメニューから選択します。

(4) [OK] をクリックします。
設定ファイルに記述されているエディションキーが、エディションキー一覧に追加されます。

(5) 手順 10 に進みます。

補足
- インポートにより読み込まれた設定項目は、現在の設定に追加されます。
- ファイルは、1 行ずつ読み込まれます。
- すでに表示されている設定項目が読み込まれた場合はメッセージが表示され、その項目はスキップされます。
- インポートファイルの記述が正しくない場合は、エラーになります。

◆ **エディションキーをファイルに保存する（エクスポート）**

(1) [DB 表領域サイズ算出] 画面－ [エディションキー] タブのページの [エクスポート] をクリックします。
[エンコーディングの選択] 画面が表示されます。

(2) エンコーディングをプルダウンメニューから選択します。

(3) [OK] をクリックします。
[ファイルのダウンロード] 画面が表示されます。

(4) [保存] をクリックします。
設定されているエディションキーが、設定ファイルとして保存されます。

(5) 手順 10 に進みます。

10. [インデックスキー] タブを選択します。
[DB 表領域サイズ算出] 画面－ [インデックスキー] タブのページが表示されます。
作成するキャビネットが、分類キャビネットの場合は、[DB 表領域サイズ算出] 画面－ [インデックスキー] タブのページは表示されません。手順 12 に進んでください。

補足 「分類キャビネット」を選択している場合、[インデックスキー] タブは表示されません。

11. 操作に応じて、次の手順に進みます。

◆ **インデックスキーを追加する**

(1) [DB 表領域サイズ算出] 画面－ [インデックスキー] タブのページの [追加] をクリックします。
[インデックスキーの追加] 画面が表示されます。

(2) [ID] に、設定するインデックスキーの ID を入力します。

(3) ユニークキーの場合は、[ユニークキーとする] を選択します。

(4) 必要に応じて、[追加]、[削除] を使って、インデックスキーを構成する属性を追加、削除します。

(5) 必要に応じて、[上へ]、[下へ] を使って、選択した属性の順番を変更します。

(6) [OK] をクリックします。
[DB 表領域サイズ算出] 画面− [インデックスキー] タブのページが表示されます。
インデックスキー一覧に選択したインデックスキーが表示されます。

(7) 手順 12 に進みます。

◆ **インデックスキーを削除する**

(1) [DB 表領域サイズ算出] 画面− [インデックスキー] タブのページの、インデックスキー一覧から、削除するインデックスキーを選択します。

(2) [削除] をクリックします。
選択したインデックスキーが削除されます。

(3) 手順 12 に進みます。

◆ **インデックスキーをファイルから読み込む（インポート）**
ファイルを読み込む場合は、あらかじめ設定ファイルを用意しておく必要があります。設定ファイル (CSV ファイル) の例を次に示します。

```
"keyId","option","keyList"
index1,,system:name|system:mimeType
index2,unique,tokyo:drawingNumber
```

(1) [DB 表領域サイズ算出] 画面− [インデックスキー] タブのページの [インポート] をクリックします。
[ファイルの選択] 画面が表示されます。

(2) [参照] をクリックし、追加するインデックスキーの設定ファイル名を選択します。

(3) エンコーディングを、プルダウンメニューから選択します。

(4) [OK] をクリックします。
設定ファイルに記述されているインデックスキーが、インデックスキー一覧に追加されます。

(5) 手順 12 に進みます。

補足
- インポートにより読み込まれた設定項目は、現在の設定に追加されます。
- ファイルは、1 行ずつ読み込まれます。
- すでに表示されている設定項目が読み込まれた場合はメッセージが表示され、その項目はスキップされます。
- インポートファイルの記述が正しくない場合は、エラーになります。

◆ **インデックスキーをファイルに保存する（エクスポート）**

(1) [DB 表領域サイズ算出] 画面− [インデックスキー] タブのページの [エクスポート] をクリックします。
[ファイルの選択] 画面が表示されます。

(2) 保存するインデックスキーの設定ファイル名を選択します。

(3) エンコーディングを、プルダウンメニューから選択します。

(4) [OK] をクリックします。
設定されているインデックスキーが、設定ファイルとして保存されます。

(5) 手順 12 に進みます。

12. 署名およびタイムスタンプを付与するキャビネット用の表領域を作成するときは、［原本性保証情報］タブを選択します。
［DB 表領域サイズ算出］画面－［原本性保証情報］タブのページが表示されます。
［原本性保証情報］タブは、手順 3 で［標準キャビネット］を選択した場合だけ表示されます。標準キャビネット以外を選択した場合は、手順 15 に進みます。

13. ［長期署名方式］プルダウンメニューから、長期署名方式を選択します。
［長期署名方式］で、［PAdES 方式］を選択した場合は、証明付与情報を追加する必要はありません。手順 15 に進みます。

14. ［長期署名方式］で［XAdES 方式］を選択した場合は、証明付与情報を追加します。

◆ 証明付与情報を追加する

(1) ［DB 表領域サイズ算出］画面－［原本性保証情報］タブのページの［追加］をクリックします。
［証明付与情報の追加］画面が表示されます。

(2) ［付与方法］プルダウンメニューから、証明の付与方法を選択します。

(3) ［文書数］に、証明を付与する予定の文書数を、1 ～ 2,147,483,647 までの範囲で入力します。

(4) ［付与回数］に、1 文書あたりの証明付与予定回数を、1 ～ 20 までの範囲で入力します。

(5) 手順 2 で証明の付与方法に［［署名付与］と［署名タイムスタンプ付与］］を選択した場合、［CRL サイズ］に、想定する失効リスト（CRL）のファイルサイズを、1 ～ 10,000 までの範囲で入力します。

(6) 手順 2 で証明の付与方法に［［署名付与］と［署名タイムスタンプ付与］］を選択した場合、［延長回数］に、署名の延長回数を、1 ～ 9 までの範囲で入力します。

(7) ［追加］をクリックします。

(8) 手順 15 に進みます。

◆ 証明付与情報を削除する

(1) ［DB 表領域のサイズ算出］画面－［原本性保証情報］タブのページの、証明付与情報一覧から、削除する証明付与情報を選択します。

(2) ［削除］をクリックします。
選択した証明付与情報が削除されます。

(3) 手順 15 に進みます。

◆ 証明付与情報をファイルから読み込む（インポート）
ファイルを読み込む場合は、あらかじめ設定ファイル（原本性保証情報の格納パラメーターファイル）を用意しておく必要があります。設定ファイル（CSV ファイル）の例を次に示します。

```
"evidenceType","targetDocumentCount","addTimes","CRLSizeKByte","extendTimes"
SignatureAndTimeStamp,2000,1,300,2
SignatureOnly,1000,1,,
DocumentTimeStampOnly,100,1,,
```

(1) ［DB 表領域サイズ算出］画面－［原本性保証情報］タブのページの［インポート］をクリックします。
［ファイルの選択］画面が表示されます。

(2) ［参照］をクリックして、追加する証明付与情報の設定ファイルを選択します。

(3) エンコーディングを、プルダウンメニューから選択します。

(4) ［OK］をクリックします。
設定ファイルに記述されている証明付与情報が、長期署名方式の一覧に追加されます。

(5) 手順 15 に進みます。

補足 ・インポートにより読み込まれた設定項目は、現在の設定に追加されます。
・ファイルは、1 行ずつ読み込まれます。
・すでに表示されている設定項目が読み込まれた場合はメッセージが表示され、その項目はスキップされます。
・インポートファイルの記述が正しくない場合は、エラーになります。

◆ 証明付与情報をファイルに保存する（エクスポート）

(1) [DB 表領域のサイズ算出] 画面－ [証明付与情報] タブのページの [エクスポート] をクリックします。
[エンコーディングの選択] 画面が表示されます。

(2) エンコーディングを、プルダウンメニューから選択します。

(3) [OK] をクリックします。
確認画面が表示されます。

(4) [保存] または [名前を付けて保存] を選択します。
[名前を付けて保存] を選択した場合は、ファイル名を指定します。
設定されている証明付与情報が、設定ファイルとして保存されます。

(5) 手順 15 に進みます。

15. [計算] をクリックします。
設定した内容のデータベース表領域のサイズの計算が開始されます。
計算が終了すると、[DB 表領域サイズ算出] 画面が表示されます。

16. 計算されたデータベース表領域サイズを確認します。

17. [OK] をクリックします。
[ドキュメント管理サービス 管理アプリケーション] の [サービス] タブのページに戻ります。

補足 追加、編集、削除、およびインポートで設定した内容は、[OK] をクリックしたときに反映されます。

注記 ・データベースに作成可能なデータベース表領域の最大サイズは 32 GB です。32 GB を超えている場合には、32 GB の表領域を作成したあとで、データベース表領域管理ツールで、表領域にデータファイルを追加してください。
・算出された値は、平均的な大きさの属性が設定された場合に対して約 4 分の 1 に相当する値です。予定登録件数までのオブジェクトが必ず登録できることを保証する値ではない点に注意してください。

参照 データベース表領域管理ツールについては、「付録 O データベース表領域管理ツール」（P.489）を参照してください。

データベース表領域の作成

ここでは、データベース表領域の作成手順を説明します。
データベース表領域を作成できるのは、サービス管理者だけです。

1. ［ドキュメント管理サービス］－［管理オブジェクト一覧］の［ドキュメント管理サービス］画面で、メニューバーの［DB 表領域］＞［作成］を選択します。
［DB 表領域作成］画面が表示されます。

2. ［表領域名］に、表領域名を入力します。先頭文字が英字、2 文字目以降が英数字と「_（アンダースコア）」で構成される文字列を、30 バイト以内で入力します。

注記 「SYS_」で始まる文字列、またはデータベースの予約語となっている文字列は指定できません。

参照 データベースの予約語については、次の URL で確認してください。
https://docs.oracle.com/cd/F19136_01/sqlrf/Oracle-SQL-Reserved-Words.html#GUID-55C49D1E-BE08-4C50-A9DD-8593EB925612
URL は、2021 年 4 月現在のものです。

3. ［表領域ファイルサイズ］に、「データベース表領域のサイズの算出」（P.115）で確認した表領域のサイズを入力します。

補足 表領域のサイズは 20 ～ 32,000 の範囲で入力します。初期値は 50 MB です。

4. ［表領域データファイルパス］に、作成するファイルのパスを入力します。
入力を省略すると「{表領域名} .dbf」が指定したものとみなされます。
相対パスは初期値のデータファイル配置先（サービス用表領域のデータファイルが格納されているフォルダー）を基準とします。

注記 データベースファイルを相対形式のパスで指定し、かつデータベースファイルの拡張子が「dbf」の場合（データベースファイルの指定を省略した場合も同じ）、指定したファイルが存在した場合、そのファイルをデータベースファイルとして利用します。
このとき、データベースが指定されたファイルを再利用可能と判断した場合、もともとデータベースファイルとして利用していたファイルではない場合でも、既存のファイルを上書きして表領域を作成するので、ご注意ください。

補足 ファイルおよびフォルダー名として使用できる文字は、英数字、「_（アンダースコア）」、「.（ピリオド）」、「（スペース）」だけです。

5. ［作成］をクリックします。
データベース表領域が作成されます。

補足 作成した表領域は、次のオプションで構成されます。

オプション項目	設定値
自動拡張モード	設定する（作成時に指定したサイズの倍まで拡張可能）

標準キャビネットの作成

ここでは、キャビネットの作成手順を説明します。
キャビネットを作成する前に、データベース表領域を作成しておく必要があります。
キャビネットを作成できるのは、サービス管理者だけです。

1. ［ドキュメント管理サービス］－［管理オブジェクト一覧］の［ドキュメント管理サービス］画面で、サービス一覧からサービス ID をクリックします。
［キャビネット一覧］画面が表示されます。

2. ［基本］メニューから、［キャビネット作成］－［標準キャビネット］を選択します。

3. ［キャビネット作成］画面－［全般］タブのページで、次の項目を入力します。

項目	説明
キャビネット名	作成するキャビネットの名前を、384バイト以内で入力します。
キャビネット ID	作成するキャビネットIDを、64バイト以内で入力します。指定したキャビネットIDがサービス中に存在しているキャビネットと同じキャビネットIDかどうかチェックするときは、大文字小文字の区別はされません。たとえば「cabinetA」というIDのキャビネットが存在している状態では、「CabinetA」というIDのキャビネットを作成できません。
登録予定件数	登録予定件数を、1,000～2,147,483,647の範囲で入力します。
表領域名	作成するキャビネットが使用する表領域名を選択します。すでに存在している表領域を選択します。 補足 ・データベースの初期値の表領域名（SYSTEM、TOOLS、RBS、TEMP、USERS、INDX）は指定できません。 ・ドキュメント管理サービスをインストールしたときに、サービスのシステム情報を保存するために作成された表領域は指定できません。
ファイルフォーマット変換サービス	ファイルフォーマット変換サービスを使用する場合は、サービス名を選択します。 補足 ドキュメント管理サービスが、初期値として使用しているネームスペースに登録されているファイルフォーマット変換サービスだけが指定できます。
フォルダ階層限界値	フォルダー階層の限界値（フォルダーを階層構造で管理できる階層の深さ）を、3～30の範囲で入力します。初期値は10です。 注記 **作成時に設定されたフォルダー階層の限界値は、あとから変更できません。**
キャビネット管理者	［アドレス帳］をクリックして表示される画面から、キャビネット管理者を選択します。初期値はサービスの管理者に設定されているユーザーロールです。キャビネット管理者は512バイト以内のDN形式の文字列です。
注釈	キャビネットに付ける注釈を入力します。
操作制約パターンラベル	「制約なし」または「e文書法対応」から選択します。 補足 原本性保証オプションがインストールされている場合で、アーカイブタイムスタンプを付与するときは、必ず「e文書法対応」を設定します。
長期署名方式	「XAdES方式」または「PAdES方式」を選択します。 補足 ［長期署名方式］は、原本性保証オプションがインストールされていて、作成するキャビネットが標準キャビネットの場合だけ表示されます。

4. 必要な属性や権限をタブページで選択して設定し［作成］をクリックします。
指定した条件でキャビネットが作成され、キャビネット作成が成功したことを示す画面が表示されます。

標準キャビネットへのドロワーの作成

1. [ドキュメント管理サービス] − [管理オブジェクト一覧] の [ドキュメント管理サービス] 画面で、サービス一覧からサービス ID をクリックします。
   [キャビネット一覧] 画面が表示されます。
2. 操作対象の標準キャビネットの名前を選択します。
   [ドロワー一覧] 画面が表示されます。
3. [基本] メニューから、[ドロワー作成] を選択します。
   [ドロワー作成] 画面 − [全般] タブのページが表示されます。
4. 次の項目を入力します。

項目	説明
ドロワー名	作成するドロワーの名前を、384バイト以内で入力します。
ストレージパス	あらかじめ、サーバーに任意のフォルダーを用意します。 作成するドロワーが指定するストレージとして、このフォルダーを指定します。設定できる文字列の長さは、1～165バイトの範囲です。絶対パスで指定します。 注記 オンラインバックアップをインストールする場合、ストレージパスには、システムドライブ以外のパスを指定することを推奨します。システムドライブを選択した場合、オンラインバックアップに時間がかかることがあります。
注釈	ドロワーに付ける注釈を、512バイト以内で入力します。

5. その他、アクセス権、デフォルトアクセス権など必要な設定をします。
6. [作成] をクリックします。
   指定した条件で、ドロワーが作成され、ドロワー作成が成功したことを示す画面が表示されます。
7. [OK] をクリックします。
   [ドロワー一覧] 画面に戻ります。

ワークスペースキャビネットの作成

ここでは、キャビネットの作成手順を説明します。
キャビネットを作成する前に、データベース表領域を作成しておく必要があります。
キャビネットを作成できるのは、サービス管理者だけです。

1. [ドキュメント管理サービス] − [管理オブジェクト一覧] の [ドキュメント管理サービス] 画面で、サービス一覧からサービス ID をクリックします。
   [キャビネット一覧] 画面が表示されます。
2. [基本] メニューから、[キャビネット作成] − [ワークスペースキャビネット] を選択します。
3. [キャビネット作成] 画面 − [全般] タブのページで、次の項目を入力します。

項目	説明
キャビネット名	作成するキャビネットの名前を、384バイト以内で入力します。
キャビネット ID	作成するキャビネットIDを、64バイト以内で入力します。指定したキャビネットIDがサービス中に存在しているキャビネットと同じキャビネットIDかどうかチェックするときは、大文字小文字の区別はされません。たとえば「cabinetA」というIDのキャビネットが存在している状態では、「CabinetA」というIDのキャビネットを作成できません。

項目	説明
登録予定件数	登録予定件数を、1,000～2,147,483,647の範囲で入力します。
表領域名	作成するキャビネットが使用する表領域名を選択します。すでに存在している表領域を選択します。 補足 ・データベースの初期値の表領域名（SYSTEM、TOOLS、RBS、TEMP、USERS、INDX）は指定できません。 ・ドキュメント管理サービスをインストールしたときに、サービスのシステム情報を保存するために作成された表領域は指定できません。
ファイルフォーマット変換サービス	ファイルフォーマット変換サービスを使用する場合は、サービス名を選択します。 補足 ドキュメント管理サービスが、初期値として使用しているネームスペースに登録されているファイルフォーマット変換サービスだけが指定できます。
フォルダ階層限界値	フォルダー階層の限界値（フォルダーを階層構造で管理できる階層の深さ）を、3～30の範囲で入力します。初期値は10です。 注記 作成時に設定されたフォルダー階層の限界値は、あとから変更できません。
キャビネット管理者	［アドレス帳］をクリックして表示される画面から、キャビネット管理者を選択します。初期値はログインしているユーザー名です。キャビネット管理者は512バイト以内のDN形式の文字列です。
注釈	キャビネットに付ける注釈を入力します。

4. 必要な属性や権限をタブページで選択して設定し［作成］をクリックします。
5. 指定した条件でキャビネットが作成され、キャビネット作成が成功したことを示す画面が表示されます。

ワークスペースへのドロワーの作成

1. ［ドキュメント管理サービス］－［管理オブジェクト一覧］の［ドキュメント管理サービス］画面で、サービス一覧からサービス ID をクリックします。
   ［キャビネット一覧］画面が表示されます。
2. 操作対象のワークスペースキャビネットの名前を選択します。
   ［ドロワー一覧］画面が表示されます。
3. ［基本］メニューから、［ドロワー作成］を選択します。
   ［ドロワー作成］画面－［全般］タブのページが表示されます。
4. 次の項目を入力します。

項目	説明
ドロワー名	作成するドロワーの名前を、384バイト以内で入力します。
ストレージパス	あらかじめ、サーバーに任意のフォルダーを用意します。 作成するドロワーが指定するストレージとして、このフォルダーを指定します。設定できる文字列の長さは、1～165バイトの範囲です。絶対パスで指定します。 注記 オンラインバックアップをインストールする場合、ストレージパスには、システムドライブ以外のパスを指定することを推奨します。システムドライブを選択した場合、オンラインバックアップに時間がかかることがあります。

項目	説明
注釈	ドロワーに付ける注釈を、512バイト以内で入力します。

5. その他、アクセス権、デフォルトアクセス権など必要な設定をします。

6. [作成] をクリックします。
指定した条件で、ドロワーが作成され、ドロワー作成が成功したことを示す画面が表示されます。

7. [OK] をクリックします。
[ドロワー一覧] 画面に戻ります。

キャビネットのモード変更

1. [キャビネット一覧] 画面で、操作対象のキャビネットチェックボックスにチェックマークを付けます。

2. [基本] − [キャビネットモード変更] から、「通常モード」または「メンテナンスモード」を選択します。
[キャビネットモード変更] 画面が表示されます。

3. 変更に応じて、次の手順に進みます。

◆ 通常モードからメンテナンスモードに変更する

(1) [キャビネットモード変更] 画面で、ラジオボタンを選択します。

(2) [OK] をクリックします。
キャビネットモード変更の結果が表示されます。手順 1 で選択したラジオボタンの条件を満たした場合、モードがメンテナンスモードに変更されます。

(3) [OK] をクリックします。

◆ メンテナンスモードから通常モードに変更する

(1) [キャビネットモード変更] 画面で、[OK] をクリックします。
モードが通常モードにされ、キャビネットモード変更の結果が表示されます。

(2) [OK] をクリックします。

14.2 リソース管理アプリケーションでの初期設定

リソース管理アプリケーションを使用して、ドキュメントスペースの利用ユーザーの割り当てをします。

リソース管理アプリケーションを起動する手順

1. Web ブラウザーを起動します。
2. Web ブラウザーの［アドレス］に、［ポータル］画面の URL を入力します。
   ここでは、「http://arcsuite.example.com/ArcSuite/portal」と入力します。
   ［ログイン］画面が表示されます。
3. ［ユーザー ID］にユーザー ID を入力します。ここでは、「rmsadmin」と入力します。
4. ［パスワード］にパスワードを入力します。ここでは、「rmsadmin001」と入力します。
5. ［ログイン］をクリックします。
   ［ポータル］画面が表示されます。
6. ［ポータル］画面で［システム管理］リンクをクリックします。
   ［システム管理］画面が表示されます。
7. 右側の［このシステム］に表示されている［RMS］のリンクをクリックします。
   ［管理ログイン］画面が表示されます。
8. ［ユーザー ID］にユーザー ID を入力します。ここでは、「rmsadmin」と入力します。
9. ［パスワード］にパスワードを入力します。ここでは、「rmsadmin001」と入力します。
10. ［ログイン］をクリックします。
    ログインが成功すると、リソース管理アプリケーションのトップ（検索）画面が表示されます。

    補足 リソース管理アプリケーションでは、［検索］画面－［検索フォーム］タブのページがリソース管理アプリケーションのトップ画面となります。

ユーザーを追加する手順

セットアップ直後は、「RMSの管理者ユーザー」としてインストールのときに設定したユーザーだけが登録されています。必要なユーザーを追加します。

1. リソース管理アプリケーションを起動します。

   参照 リソース管理アプリケーションの起動方法については、「リソース管理アプリケーションを起動する手順」（P.126）を参照してください。

2. リソース管理アプリケーションのトップ画面で、［ユーザー追加］をクリックします。
   ［ユーザー追加］画面が表示されます。
3. ［ユーザー追加］画面の［ユーザーを追加する部署］プルダウンメニューから、ユーザーを追加する部署を選択します。
4. 値を設定する属性に対して、属性値を入力します。
   証明書を指定する場合は、次の手順へ進んでください。証明書を指定しない場合は、手順 8 へ進んでください。

   注記 ・［必須］が表示されている属性は、必ず設定してください。
   ・［パスワード］は必ず設定してください。
   ・「ログイン名」属性の値に設定できるのは、制御文字を除く ASCII 文字です。

・「ログイン名」属性の値には「,」、「+」、「"」、「¥」、「<」、「>」、「;」を、含むことができません。
・「ログイン名」属性の値には「#」、「.」を先頭の文字に使用できません。

[カード ID] については、([値を空に戻す] アイコン) 以外に、([値を変更] アイコン)、([値を追加] アイコン)、([値を削除] アイコン) が表示されます。

([値を変更] アイコン) をクリックすると、選択しているカード ID を変更するためのプロンプトが表示されます。

([値を追加] アイコン) をクリックすると、Web ブラウザー標準のユーザープロンプトが表示されます。追加するカード ID を入力します。

入力フィールドで、削除するカード ID を選択してから([値を削除] アイコン) をクリックすると、選択したカード ID が削除されます。

[ユーザーロール] については、([値を空に戻す] アイコン) 以外に、([値を追加] アイコン)、([値を削除] アイコン) が表示されます。また、入力フィールドの上側に、([すべて選択] アイコン)、([選択解除] アイコン) が表示されます。入力フィールド内に表示されているユーザーロールの右側に、([詳細表示] アイコン) が表示されます。

([値を追加] アイコン) をクリックすると、[アドレス帳] の [ロール] 画面が表示されます。ユーザーロールを検索し、表示された一覧から追加するユーザーロールを選択して [追加] をクリックしたあと、[閉じる] をクリックして [アドレス帳] 画面を閉じてください。

([すべて選択] アイコン) をクリックすると、一覧表示されたすべてのユーザーロールにチェックマークが付きます。([選択解除] アイコン) をクリックすると、一覧表示されたすべてのユーザーロールのチェックマークが外れます。入力フィールド内の ([詳細表示] アイコン) をクリックすると、ユーザーロールの詳細画面が表示されます。

入力フィールドで、削除するユーザーロールを選択してから([値を削除] アイコン) をクリックすると、選択したユーザーロールが削除されます。

補足
・属性の右側の([値を空に戻す] アイコン) をクリックすると、入力した属性値が未設定の状態 (空欄) に戻ります。
・[クリア] をクリックすると、[ファイル選択パーツ] を除くすべての属性値が未設定の状態 (空欄) に戻ります。

参照 各項目の詳細については、『システム管理者ガイド』を参照してください。

5. [参照] をクリックします。
[ファイルの選択] 画面が表示されます。

6. 証明書ファイルを指定します。

7. [開く] をクリックします。
証明書が設定されます。

8. [追加] をクリックします。
ユーザーが追加されて、[ユーザー追加結果] 画面が表示されます。

9. [ユーザー追加結果] 画面で、[OK] をクリックします。
[ユーザー追加] 画面に戻ります。

利用ユーザーを設定する手順

1. リソース管理アプリケーションを起動します。

参照 リソース管理アプリケーションの起動方法については、「リソース管理アプリケーションを起動する手順」(P.126) を参照してください。

2. リソース管理アプリケーションのトップ画面で、[ライセンス編集] をクリックします。
[ライセンス編集] 画面が表示されます。

3. ライセンスを編集するドキュメントスペースをクリックします。ここでは、[ドキュメントスペース (arcsuite)] をクリックします。
   [ライセンス編集用ユーザ検索] 画面が表示されます。

4. [検索対象システム] プルダウンメニューから、ライセンス対象のユーザーが所属するシステムを選択します。ここでは、「dc=example, dc=com」を選択します。

5. [ライセンス非保持者のみ] を選択します。

6. [検索] をクリックします。
   [ライセンス編集用検索結果] 画面に検索されたユーザーの一覧が表示されます。

7. ライセンスを付与するユーザーのチェックボックスにチェックマークを付けます。

8. [ライセンス付与] をクリックします。
   [ライセンス付与] 画面に選択したユーザーの一覧が表示されます。

9. ユーザーの一覧を確認してから、[付与] をクリックします。
   選択したユーザーに、ライセンスが付与されます。

   参照 リソース管理アプリケーションの詳細については、『リソース管理アプリケーションのヘルプ』を参照してください。

14.3 メッセージ通知管理アプリケーションでの初期設定

メッセージ通知管理アプリケーションの初期設定をします。

メッセージ通知管理アプリケーションを起動する手順

1. Web ブラウザーを起動します。
2. Web ブラウザーの［アドレス］に、ArcSuite の［システム管理］画面の URL を入力します。
   ここでは、「http://arcsuite.example.com/ArcSuite/portal/system.jsp」と入力します。
   ［システム管理］画面が表示されます。
3. 左側の［システム管理］画面で、［メッセージ通知サービス］リンクをクリックします。
   ［このシステム］に、メッセージ通知サービスの情報が表示されます。
4. 右側の［このシステム］に表示されている［メッセージ通知］のリンクをクリックします。
   ［ログイン］画面が表示されます。
5. ［ユーザー ID］および［パスワード］を入力します。
6. ［ログイン］をクリックします。
   ［メッセージ通知管理］画面が表示されます。

基本設定の変更をする手順

1. ［メッセージ通知管理］画面で、［設定の変更］リンクをクリックします。
   ［設定の変更］画面が表示されます。
2. ［基本設定］の［メッセージ通知管理アドレス］を入力します。
   ここでは「rmsadmin@example.com」と入力します。

   補足 「6.1 メッセージ通知サービスのインストール」（P.70）の手順 4 で［管理者メールアドレス情報］画面で入力した［メールアドレス］です。
3. ［SMTP サーバーのホスト名］を入力します。ここでは「smtp.example.com」と入力します。

   補足 「6.1 メッセージ通知サービスのインストール」（P.70）の手順 2 で［SMTP サーバー情報］画面で入力した［ホスト名］です。
4. ［SMTP サーバーのポート番号］を入力します。ここでは「25」と入力します。

   補足 「6.1 メッセージ通知サービスのインストール」（P.70）の手順 3 で［SMTP サーバー情報］画面で確認した［ポート番号］です。
5. ［暗号化接続方式］で、メールサーバーへの接続に使用する暗号化接続方式を選択します。

   補足 ［SMTPS で接続］または［STARTTLS で接続］を選択した場合、証明書格納用キャビネットを作成し、メールサーバーが通信の暗号化に使用している証明書を検証するために必要なルート証明書、中間 CA 証明書、またはサーバー証明書を格納する必要があります。

   参照 証明書格納用キャビネットの作成および証明書の格納については、『システム管理者ガイド』を参照してください。
6. ［登録］をクリックします。
   メッセージ通知コンポーネントの設定が変更されます。

テストメール送信の設定をする手順

1. [メッセージ通知管理] 画面で、[テストメール送信] リンクをクリックします。
   [テストメール送信] 画面が表示されます。
2. [あて先のメールアドレス] を入力します。ここでは「rmsadmin@example.com」と入力します。
3. [メッセージ通知サービスの URL] を入力します。
   ここでは「http://arcsuite.example.com/ArcSuite/cmMailIF/services/CmessageAxisService」と入力します。
4. [送信] をクリックします。
   あて先のメールアドレスにテストメールが送信されます。

14.4 ドキュメントスペース管理アプリケーションでの初期設定

ドキュメントスペース管理アプリケーションで次の設定をします。

・共通の初期設定

・中国語（簡体字）ライセンスをインストールしたときの設定

14.4.1 共通の初期設定

ドキュメントスペース管理アプリケーションを使用して、属性テンプレートの作成とフォーマットの追加をします。

ドキュメントスペース管理アプリケーションの起動

1. Web ブラウザーを起動します。
2. Web ブラウザーの［アドレス］に、ArcSuite の［システム管理］画面の URL を入力します。
   ここでは、「http://arcsuite.example.com/ArcSuite/portal/system.jsp」と入力します。
   ［システム管理］画面が表示されます。
3. 左側の［システム管理］画面で、［ドキュメントスペース］リンクをクリックします。
   ［このシステム］に、ドキュメントスペースの情報が表示されます。
4. 右側の［このシステム］に表示されているドキュメントスペース管理アプリケーションのリンクをクリックします。
   ［ログイン］画面が表示されます。
5. ［ユーザー ID］および［パスワード］を入力します。
6. ［ログイン］をクリックします。
   ［ドキュメントスペース管理］画面が表示されます。

属性テンプレートの追加

ドキュメントスペースを利用できるように属性テンプレートを追加します。

1. ［ドキュメントスペース管理］画面で、［システム設定］リンクをクリックします。
   ［システム設定修正］画面が表示されます。
2. ［システム設定修正］画面の［属性テンプレート］リンクをクリックします。
   ［属性テンプレート一覧］画面が表示されます。
3. ［属性テンプレート一覧］画面の［新規作成］をクリックします。
   ［属性テンプレート設定］画面が表示されます。
4. ［属性テンプレート設定］画面の［属性テンプレート名］に、属性テンプレートの名前を入力します。

   補足 属性テンプレート名として入力できるのは、1 ～ 50 バイトの文字列です。空白文字、および特殊文字は、使用しないことを推奨します。

5. 必要に応じて、設定する属性を、次の手順で絞り込みます。

◆ 属性テンプレートの属性から選択する場合

(1) [属性テンプレート] プルダウンメニューから属性テンプレートを選択します。

◆ ネームスペースの属性から選択する場合

(1) [ネームスペース] プルダウンメニューからネームスペースを選択します。

◆ 指定した文字列から選択する場合

(1) [表示名] テキストボックスに文字列を指定します。

(2) [絞り込み] をクリックします。
[表示名] テキストボックスで指定した文字列を含んだ属性が、[属性一覧] に表示されます。

6. 属性テンプレートに含める属性を、次の手順で決定します。

補足 [属性テンプレート設定] 画面の [対象属性一覧] リストボックス中の属性が、属性テンプレートに含まれます。

◆ 属性を属性テンプレートに追加する場合

(1) [属性一覧] リストボックスで、属性テンプレートに追加する属性をクリックして選択します。複数選択できます。

(2) [→追加] をクリックします。
手順 1 で選択した属性が、[対象属性一覧] リストボックスの最後尾に移動します。

(3) 必要に応じて、手順 1 ～ 2 を繰り返します。

◆ 属性を属性テンプレートから外す場合

(1) [対象属性一覧] リストボックスで、属性テンプレートから外す属性をクリックして選択します。複数選択できます。

(2) [←削除] をクリックします。
手順 1 で選択した属性が、[属性一覧] リストボックスに移動します。

(3) 必要に応じて、手順 1 ～ 2 を繰り返します。

7. 必要に応じて、次の手順で属性の順序を変更します。

補足 [属性テンプレート設定] 画面の [対象属性一覧] リストボックス中の順序が、属性テンプレートにおける属性の順序です。

◆ 属性の順序を 1 つ上げる場合

(1) [対象属性一覧] リストボックスで、順序を変更する属性をクリックして選択します。

(2) [↑] をクリックします。
手順 1 で選択した属性の順序が 1 つ上がります。

◆ 属性値の順序を 1 つ下げる場合

(1) [対象属性一覧] リストボックスで、順序を変更する属性をクリックして選択します。

(2) [↓] をクリックします。
手順 1 で選択した属性の順序が 1 つ下がります。

8. 作成する属性テンプレートを登録用に利用するかどうかを [登録] で指定します。

・登録用に利用する場合：チェックマークを付ける
・登録用に利用しない場合：チェックマークを外す

9. 作成する属性テンプレートを検索、表示用に利用するかどうかを、[検索・表示] で指定します。

・検索、表示用に利用する場合：チェックマークを付ける
・検索、表示用に利用しない場合：チェックマークを外す

10. [設定] をクリックします。
    属性テンプレートが新規作成されて、[属性テンプレート一覧] 画面に戻ります。
    [属性テンプレート一覧] 画面に、新規作成した属性テンプレート名が表示されています。

11. 属性テンプレートに含める属性について、ドメイン値やヒント情報を設定する場合は、属性テンプレートの詳細設定をします。

12. [属性テンプレート一覧] 画面の [戻る] をクリックします。
    [システム設定修正] 画面に戻ります。

13. [システム設定修正] 画面の [戻る] をクリックします。
    [ドキュメントスペース管理] 画面に戻ります。

フォーマットの追加

インデックス画像やサムネイル画像などを作成するために、ドキュメントスペースに各種フォーマットを追加します。

1. [ドキュメントスペース管理] 画面で、[システム設定] リンクをクリックします。
   [システム設定修正] 画面が表示されます。

2. [システム設定修正] 画面の [フォーマット] リンクをクリックします。
   [フォーマット設定] 画面が表示されます。

3. [フォーマット設定] 画面で設定する [MIME-TYPE] の [新規作成] をクリックします。

4. [フォーマット名] に、フォーマット名を入力します。

5. ドキュメント情報の更新によってインデックス画像を作成するかどうかを、[インデックス画像] のチェックボックスで選択します。
   ・作成する場合：チェックマークを付ける
   ・作成しない場合：チェックマークを付けない

6. ドキュメント情報の更新によって部分画像を作成するかどうかを、[部分画像] のチェックボックスで選択します。
   ・作成する場合：チェックマークを付ける
   ・作成しない場合：チェックマークを付けない

7. ドキュメント情報の更新によってプリント画像を作成するかどうかを、[プリント画像] のチェックボックスで選択します。
   ・作成する場合：チェックマークを付ける
   ・作成しない場合：チェックマークを付けない

8. ドキュメント情報の更新によってトップネイル画像を作成するかどうかを、[トップネイル画像] のチェックボックスで選択します。
   ・作成する場合：チェックマークを付ける
   ・作成しない場合：チェックマークを付けない

9. ドキュメント情報の更新によってサムネイル画像を作成するかどうかを、[サムネイル画像] のチェックボックスで選択します。
   ・作成する場合：チェックマークを付ける
   ・作成しない場合：チェックマークを付けない

10. [設定] をクリックします。
    フォーマットが新規作成されて、[システム設定修正] 画面に戻ります。

11. [システム設定修正] 画面の [戻る] をクリックします。
[ドキュメントスペース管理] 画面に戻ります。

ドキュメント管理サービスの初期設定が終了したら、必要に応じて表示アプリケーションを設定します。

参照 表示アプリケーション管理ツールの設定については、『表示アプリケーション管理ツールのヘルプ』を参照してください。

14.4.2 中国語（簡体字）ライセンスをインストールしたときの設定

中国語（簡体字）ライセンスをインストールしたときだけ、次の手順で、ドキュメントスペースの情報を更新します。この手順をしない場合、ドキュメントスペースの画面で警告が表示され、操作できないことがあります。

1. Web ブラウザーを起動して URL を入力し、ArcSuite の [システム管理] 画面を表示します。
[ログイン] 画面が表示されます。

補足 ArcSuite の URL は、「http:// {ArcSuite サーバーのホスト名} /ArcSuite/portal/system.jsp」です。

2. ドキュメントスペースの管理者の権限があって、[ユーザープロファイル] の [言語] が日本語のユーザーでログインします。たとえば、ユーザー ID が「rmsadmin」、パスワードが「rmsadmin001」でログインします。

3. 右上にある、{ユーザー名} のリンクをクリックします。
[ユーザープロファイル] 画面が表示されます。

4. [言語] に [日本語] が選択されていることを確認し、手順 8 に進みます。
[日本語] が選択されていない場合は、[日本語] を選択し、手順 5 に進みます。

5. [変更] をクリックします。
パスワードを入力する画面が表示されます。

6. パスワードを入力し、[OK] をクリックします。
[{ユーザー名} のユーザープロファイルを更新しました。] というメッセージの画面が表示されます。

7. [OK] をクリックします。
[ユーザープロファイル] 画面が表示されます。

8. [キャンセル] をクリックします。
[システム管理] 画面が表示されます。

9. [システム管理] の [ドキュメントスペース] のリンクをクリックします。

10. 右側の [このシステム] に表示されている [ドキュメントスペース {ホスト名}] のリンクをクリックします。
[管理ログイン] 画面が表示されます。

11. 手順 2 でログインしたユーザーのユーザー ID とパスワードでログインします。
[ドキュメントスペース管理] 画面が表示されます。

12. 次の URL を入力し、ArcSuite の [ドキュメントスペース設定データベース更新] 画面を表示します。
[ドキュメントスペース設定データベース更新] 画面が表示されます。

補足 ArcSuite の URL は、「http:// {ArcSuite サーバーのホスト名} /ArcSuite/dsadmin/upgrade.do」です。

13. [更新] をクリックします。
確認画面が表示されます。

14. [OK] をクリックします。
［ドキュメントスペースの設定データベースの更新を完了しました。］というメッセージの画面が表示されます。

15. 右上にある、[ログアウト] のリンクをクリックします。
［管理ログイン］画面が表示されます。

16. Web ブラウザーの［×］をクリックします。
［管理ログイン］画面が閉じます。

17. [システム管理] 画面で［ログアウト］のリンクをクリックします。
確認画面が表示されます。

18. [OK] をクリックします。
［ログアウト］画面が表示されます。

19. [閉じる] をクリックします。
［ログアウト］画面が閉じます。

14.5 全文検索サービスの初期設定

全文検索サービスを使用するために、ArcSuiteサーバーで初期設定をします。

初期設定はドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版またはドキュメント管理サービス管理コマンドでできます。

参照 ・ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版の詳細については、『ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版のヘルプ』を参照してください。

・ドキュメント管理サービス管理コマンドの詳細については、『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。

全文検索サービスの初期設定の手順

全文検索サービスの初期設定の手順を説明します。

ここでは、すでにドキュメント管理サービスに登録されている文書を、全文検索ができるように設定する手順を説明します。

新たに登録する文書を全文検索の対象とするには、インデックスの更新と最適化をする必要があります。

参照 インデックスの更新と最適化の詳細については、『ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版のヘルプ』、または『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。

14.5.1 ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版での設定方法

全文検索サービスをドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版から設定する場合は、「全文検索エンジン連携の設定」から行います。

ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版の起動

参照 ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版の起動方法については、「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版を起動する」（P.103）を参照してください。

ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版での初期設定

1. ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版が起動すると、［ドキュメント管理サービス管理アプリケーション］の［サービス］タブのページが表示されます。
2. メニューバーの［サービス操作］＞［全文検索エンジン連携の設定］を選択します。
   ［全文検索エンジン連携の設定］画面－［全般］タブのページが表示されます。
3. ［全文検索サービス］プルダウンメニューから初期値で使用する全文検索エンジンのサービスを選択します。
4. ［全文検索エンジン連携の設定］画面で、次の項目を入力します。
   - ［最大結果取得数］
     最大結果取得数を、1 ～ 10,000 の範囲で入力します。初期値は 2,000 です。
   - ［コミット間隔］
     検索インデックスの更新処理で、いくつの文書を処理するごとに更新するのかを設定します。
     コミット間隔を、1 ～ 64 の範囲で入力します。初期値は 8 です。
   - ［ショートテキスト最大サイズ］
     ショートテキストの最大サイズを、20 ～ 512 の範囲で入力します。初期値は 512 です。

・[カーソルを開きなおす間隔]
検索インデックスの更新処理で、内部的に利用しているデータベースカーソルを、どれだけの数の文書処理したら開き直すかを設定します。
カーソルを開きなおす間隔を、64 ～ 10,000 までの範囲で入力します。初期値は 300 です。

・[一度の検索で処理する文書数]
検索したときに同時に処理する文書数を、0 ～ 10,000 までの範囲で入力します。初期値は 300 です。

5. 必要に応じて、メディアタイプやシソーラス辞書を設定します。

参照 詳細については、『ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版のヘルプ』を参照してください。

6. [OK] をクリックします。

全文検索エンジン連携の設定が終了し、[ドキュメント管理サービス管理アプリケーション] の [サービス] タブのページに戻ります。

14.5.2 ドキュメント管理サービス管理コマンドでの設定方法

ドキュメント管理サービス管理コマンドの起動

1. ArcSuite サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。

2. ドキュメント管理サービスが起動していない場合は、ドキュメント管理サービスを起動します。

参照 サービスの起動方法については、『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。

3. コマンドプロンプトを管理者として起動します。

4. 次のコマンドを入力して <Enter> キーを押し、サンプルファイルの保存フォルダーに移動します。

```
cd /d {ArcSuite のインストールフォルダー}¥Service¥Components¥Repository¥
sample¥admin
```

たとえば、「{ArcSuite のインストールフォルダー}」が「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」の場合は、次のように入力します。

```
cd /d D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite¥Service¥Components¥Repository¥
sample¥admin
```

補足 {ArcSuite のインストールフォルダー} は、インストール時に指定したインストール先のフォルダーです。たとえば、「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」です。

5. 次のコマンドを入力して <Enter> キーを押し、ドキュメント管理サービス管理コマンドを実行します。

```
" {ArcSuite のインストールフォルダー} ¥Service¥Components¥Repository¥bin¥
dradmincmd.bat"
```

たとえば、「{ArcSuite のインストールフォルダー}」が「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」の場合は、次のように入力します。

```
"D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite¥Service¥Components¥Repository¥bin¥
dradmincmd.bat"
```

次のメッセージが表示されます。

```
コマンド実行ユーザーを設定してください。
userName =
```

6. ドキュメント管理サービスの管理者を指定します。ここでは、「rmsadmin」と入力し、<Enter> キーを押します。
   次のメッセージが表示されます。

```
userPasswd =
```

7. ドキュメント管理サービスの管理者のパスワードを入力します。ここでは、「rmsadmin001」と入力し、<Enter> キーを押します。
   次のメッセージが表示されます。

```
インタラクティブモードで、管理コマンドを実行します。
利用可能なコマンドの種類は、マニュアルかヘルプ（help）コマンドで確認してください。

operation =
```

参照 各コンポーネントのユーザー ID およびパスワードについては、「1.3 セットアップ前の設定事項」(P.24)を参照してください。

続いて、「ドキュメント管理サービス管理コマンドでの操作」（P.138）に進みます。

ドキュメント管理サービス管理コマンドでの操作

1. 「operation」のプロンプトに対して、「setModeOfService」を入力します。
2. 「mode」のプロンプトに対して、「maintenance」を入力します。
3. 表示されるプロンプトに対して、初期値のまま進みます。
   ドキュメント管理サービスのモードが maintenance に変更されます。
4. 「operation」のプロンプトに対して、「setFtsDefinition」を入力します。
5. 「ftsService」のプロンプトに対して全文検索サービスの名前を入力します。ここでは、「fts2@arcsuite」を入力します。
6. 表示されるプロンプトに対して、初期値のまま進みます。
   全文検索サービスの設定が完了します。

   補足 ここでは、全文検索サービスを初期値の内容で設定しています。初期値の内容で設定しない場合は、オプションなどを指定できます。

   参照 指定可能なオプションなどの詳細については、『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。
7. 「operation」のプロンプトに対して、「setModeOfCabinet」を入力します。
8. 「Cabinet ID」のプロンプトに対して、全文検索の対象とするキャビネットのキャビネット ID を入力します。ここでは、「Cabinet1」と入力します。
9. 「mode」のプロンプトに対して、「maintenance」を入力します。
10. 表示されるプロンプトに対して、初期値のまま進みます。
    全文検索の対象とするキャビネットのモードが maintenance に変更されます。
11. 「operation」のプロンプトに対して、「initializeFtsIndex」を入力します。
12. 「Cabinet ID」のプロンプトに対して、「setModeOfCabinet」で指定したキャビネットのキャビネット ID を入力します。ここでは、「Cabinet1」を入力します。
    キャビネットのインデックスが初期化されます。
13. 「fstService」のプロンプトに対し何も入力せずに <Enter> キーを押します。

14. 「operation」のプロンプトに対して、「buildFtsIndex」を入力します。

15. 「Cabinet ID」のプロンプトに対して、「setModeOfCabinet」で指定したキャビネットのキャビネット ID を入力します。ここでは、「Cabinet1」を入力します。
    以降のオプション指定のプロンプト（retryError）では、必要に応じて明示的な指定をします。ここでは、何も指定しないでおきます。

    補足 入力値を省略した場合（<Enter> キーを押しただけの場合）、「false」が指定されたものとみなされます。

    参照 詳細については、『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。

    これで、キャビネットのインデックスが作成されます。

16. 「operation」のプロンプトに対して、「optimizeFtsIndex」を入力します。

17. 「Cabinet ID」のプロンプトに対して、「setModeOfCabinet」で指定したキャビネットのキャビネット ID を入力します。ここでは、「Cabinet1」を入力します。
    これで、キャビネットのインデックスが最適化されます。

    注記 ArcSuite の運用開始後に、キャビネットに対して「buildFtsIndex」を定期的に実施する必要があります。

    参照 「buildFtsIndex」および「optimizeFtsIndex」の詳細については、『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。

18. 「operation」のプロンプトに対して、「setModeOfCabinet」を入力します。

19. 「cabinet ID」のプロンプトに対して、全文検索の対象とするキャビネットのキャビネット ID を入力します。ここでは、「Cabinet1」と入力します。

20. 「mode」のプロンプトに対して、「normal」を入力します。
    全文検索の対象とするキャビネットのモードが normal に変更されます。

21. 全文検索の対象とするキャビネットの数だけ、手順 6 ～ 20 を繰り返します。

22. 「operation」のプロンプトに対して、「setModeOfService」を入力します。

23. 「mode」のプロンプトに対して、「normal」を入力します。
    ドキュメント管理サービスのモードが normal に変更されます。

24. 「operation」のプロンプトに対して、「exit」を入力します。
    ドキュメント管理サービス管理コマンドが終了します。

14.6 関連文書検索サービスの初期設定

関連文書検索サービスを使用するために、ArcSuiteサーバーで初期設定をします。

初期設定は、ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版またはドキュメント管理サービス管理コマンドを使用して行います。関連文書検索サービス用のキャビネットのインデックスを作成する必要があります。

参照 ・ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版の詳細については、『ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版のヘルプ』を参照してください。

・ドキュメント管理サービス管理コマンドの詳細については、『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。

関連文書検索サービスの初期設定の手順

関連文書検索サービスの初期設定の手順を説明します。

ここでは、すでにドキュメント管理サービスに登録されている文書に対して、関連文書の検索と文書群の分類を行えるように設定する手順を説明します。

新たにドキュメント管理サービスに登録する文書を関連文書検索と文書群分類の対象とするには、インデックスの更新を行う必要があります。

参照 インデックスの更新の詳細については、『ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版のヘルプ』、または『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。

14.6.1 ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版での設定方法

関連文書検索サービスをドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版から設定する場合は、「関連文書検索エンジン連携の設定」から行います。

ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版の起動

参照 ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版の起動方法については、「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版を起動する」（P.103）を参照してください。

ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版での初期設定

1. ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版が起動すると、［ドキュメント管理サービス管理アプリケーション］の［サービス］タブのページが表示されます。
2. メニューバーから［サービス操作］＞［関連文書検索エンジン連携の設定］を選択します。
   ［関連文書検索エンジン連携の設定］画面－［全般］タブのページが表示されます。
3. ［関連文書検索サービス］プルダウンメニューから初期値で使用する関連文書検索エンジンのサービスを選択します。
4. ［関連文書検索エンジン連携の設定］画面で、次の項目を入力します。
   - ［最大結果取得数］
     最大結果取得数を、1 ～ 10,000 の範囲で入力します。初期値は 2000 です。
   - ［コミット間隔］
     検索インデックスの更新処理で、いくつの文書を処理するごとに更新するのかを設定します。
     コミット間隔を、1 ～ 64 の範囲で入力します。初期値は 8 です。
   - ［最小スコア］
     結果として返す最小スコアの基準を、0 ～ 99 の範囲で入力します。初期値は 0 です。

・[カーソルを開き直す間隔]
検索インデックスの更新処理で、内部的に利用しているデータベースカーソルを、どれだけの数の文書処理したら開き直すかを設定します。
カーソルを開き直す間隔を、64 ～ 10,000 までの範囲で入力します。初期値は 300 です。

5. 必要に応じて、メディアタイプを設定します。

参照 詳細については、『ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版のヘルプ』を参照してください。

6. [OK] をクリックします。
関連文書検索エンジン連携の設定が終了し、[ドキュメント管理サービス管理アプリケーション] の [サービス] タブのページに戻ります。

14.6.2 ドキュメント管理サービス管理コマンドでの設定方法

ドキュメント管理サービス管理コマンドの起動

参照 ドキュメント管理サービス管理コマンドの起動方法については、「ドキュメント管理サービス管理コマンドの実行」(P.111) を参照してください。

ドキュメント管理サービス管理コマンドでの操作

1. 「operation」のプロンプトに対して、「setModeOfService」を入力します。

2. 「mode」のプロンプトに対して、「maintenance」を入力します。
ドキュメント管理サービスのモードが maintenance に変更されます。

3. 「operation」のプロンプトに対して、「setRdsDefinition」を入力します。

4. 「rdsService」のプロンプトに対して、関連文書検索サービスの名前を入力します。ここでは、「kSearchDuo@arcsuite」と入力します。

5. 表示されるプロンプトに対して、初期値のまま進みます。
関連文書検索サービスの設定が完了します。

6. 「operation」のプロンプトに対して、「setModeOfCabinet」を入力します。

7. 「Cabinet ID」のプロンプトに対して、処理対象とするキャビネットのキャビネット ID を入力します。ここでは、「Cabinet1」と入力します。

8. 「mode」のプロンプトに対して、「maintenance」を入力します。
処理対象とするキャビネットのモードが maintenance に変更されます。

9. 「operation」のプロンプトに対して、「initializeRdsIndex」を入力します。

10. 「Cabinet ID」のプロンプトに対して、「setModeOfCabinet」で指定したキャビネットのキャビネット ID を入力します。ここでは、「Cabinet1」を入力します。
キャビネットのインデックスが初期化されます。

11. 「rdsService」のプロンプトに対しては何も入力せずに <Enter> キーを押します。

12. 「operation」のプロンプトに対して、「buildRdsIndex」を入力します。

13. 「Cabinet ID」のプロンプトに対して、「setModeOfCabinet」で指定したキャビネットのキャビネット ID を入力します。ここでは、「Cabinet1」を入力します。
    以降のオプション指定のプロンプト（retryError）では必要に応じて、明示的な指定をします。ここでは、何も指定しないでおきます。

    補足 入力値を省略した場合（<Enter> キーを押しただけの場合）、「false」が指定されたものとみなされます。

    参照 詳細については、『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。

    これで、キャビネットのインデックスが作成されます。

14. 「operation」のプロンプトに対して、「optimizeRdsIndex」を入力します。

15. 「Cabinet ID」のプロンプトに対して、「setModeOfCabinet」で指定したキャビネットのキャビネット ID を入力します。ここでは、「Cabinet1」を入力します。
    これで、キャビネットのインデックスが最適化されます。

    注記 ArcSuite の運用開始後に、キャビネットに対して「buildRdsIndex」を定期的に実施する必要があります。

    参照 「initializeRdsIndex」、「buildRdsIndex」、および「optimizeRdsIndex」の詳細については、『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。

16. 「Cabinet ID」のプロンプトに対して、「setModeOfCabinet」で指定したキャビネットのキャビネット ID を入力します。ここでは、「Cabinet1」を入力します。
    キャビネットのインデックスが更新されます。

17. 「operation」のプロンプトに対して、「setModeOfCabinet」を入力します。

18. 「cabinet ID」のプロンプトに対して、処理対象とするキャビネットのキャビネット ID を入力します。ここでは、「Cabinet1」と入力します。

19. 「mode」のプロンプトに対して、「normal」を入力します。
    処理対象とするキャビネットのモードが normal に変更されます。

20. 関連文書検索の対象とするキャビネットの数だけ手順 6 ～ 19 を繰り返します。

21. 「operation」のプロンプトに対して、「setModeOfService」を入力します。

22. 「mode」のプロンプトに対して、「normal」を入力します。
    ドキュメント管理サービスのモードが normal に変更されます。

23. 「operation」のプロンプトに対して、「exit」を入力します。
    ドキュメント管理サービス管理コマンドが終了します。

14.7　コラボスペースの初期設定

コラボスペースのインストール後、ユーザーが利用できるように初期設定をします。

14.7.1　ユーザーのメールアカウントの作成

SMTP/POPサーバーに、コラボスペースを利用するユーザーのメールアカウントを登録します。
作成するメールアカウントは次のとおりです。
表：作成するメールアカウント

コラボスペースを利用するユーザーのPOPアカウント	コラボスペースを利用するユーザーのPOPアカウントのパスワード	メールアドレス
comaster	comaster	comaster@example.com
couser	couser	couser@example.com

注記 「メッセージ通知管理アドレス」とは別のメールアカウントを用意します。

14.7.2　メールの設定

コラボスペースでメール通知機能を使用するには、メール送信の設定、返信メール取り込み設定、およびイベント・通知先の選択などが必要です。これらの設定は、コラボスペース管理アプリケーションの［メール設定］画面と［メール通知設定］画面でします。

コラボスペース管理アプリケーションを起動する

1. Web ブラウザーを起動します。
2. Web ブラウザーの［アドレス］に、［システム管理］画面の URL を入力します。
   ここでは、「http://arcsuite.example.com/ArcSuite/portal/system.jsp」と入力します。
   ［システム管理］画面が表示されます。
3. ［システム管理］画面で、［コラボスペース］リンクをクリックします。
   ［このシステム］に、コラボスペース管理アプリケーションの情報が表示されます。
4. ［このシステム］に表示されているコンポーネントの名前のリンクをクリックします。
   ［管理ログイン］画面が表示されます。
5. ［ユーザー ID］および［パスワード］を入力します。
6. ［ログイン］をクリックします。
   左側にコラボスペース管理画面の情報が表示されます。
   右側にそれぞれの情報についての設定画面が表示されます。

メールサーバーを設定する

1. [コラボスペース管理] フレームの [メール設定] リンクをクリックします。
   右側に [メール設定] 画面が表示されます。
2. [メッセージ通知サーバーの URL] に、メッセージ通知に使用するメッセージ通知サービスの URL を入力します。ここでは、「http://arcsuite.example.com/ArcSuite/cmMailIF/services/CmessageAxisService」と入力します。
3. [通知メールの最大サイズ] に、メール送信を許可するメールサイズを、1 ～ 30,000 KB の範囲で入力します。初期値は 1,000 です。
4. エラーが発生したときの通知先のメールアドレスを、「メールマスターメールアドレス」に入力します。ここでは、「comaster@example.com」を入力します。
5. 返信メール取り込み機能を有効にする場合は、[返信メール取込みを有効にする] にチェックマークを付けます
6. [POP サーバー] に、メール取り込みで使用する POP サーバーのサーバー名を入力します。ここでは、「smtp.example.com」を入力します。
7. [POP サーバーのポート番号] に、メール取り込みで使用する POP サーバーのポート番号を、1 ～ 65535 の範囲で入力します。初期値は 110 です。
8. [メールユーザーメールアドレス] に、コラボスペースへの返信メールのあて先となるメールアドレスを入力します。ここでは、「couser@example.com」と入力します。
9. [メールユーザー名] に、[メールユーザーメールアドレス] あてのメールを POP サーバーから取得する時のユーザー名を入力します。ここでは、「couser」と入力します。
10. [パスワードを変更する] にチェックにチェックマークを付けます。
11. [メールユーザーパスワード] に、[メールユーザーメールアドレス] あてのメールを POP サーバーから取得する時のパスワードを入力します。ここでは、「couser」と入力します。

    注記 POP サーバーの認証方式は、暗号化しないように設定されている必要があります。APOP などの暗号化する認証方式には対応していません。

12. [暗号化接続方式] で、メールサーバーへの接続に使用する暗号化接続方式を選択します。

    補足 [POP3S で接続] または [STARTTLS で接続] を選択した場合、証明書格納用キャビネットを作成し、メールサーバーが通信の暗号化に使用している証明書を検証するために必要なルート証明書、中間 CA 証明書、またはサーバー証明書を格納する必要があります。

    参照 証明書格納用キャビネットの作成および証明書の格納については、『システム管理者ガイド』を参照してください。

13. [メールインポート禁止拡張子] に取り込みを禁止する拡張子を入力します。
14. [返信メールで取り込む最大サイズ] に、返信メール取込機能で、取り込みを許可するファイルのサイズを、1 ～ 30,000 KB の範囲で入力します。初期値は 1,000 です。
15. 返信メールの件名が長かった場合に、自動的に短くして、返信メッセージのタイトルとして登録したいときは、「メール取り込み時、返信メールの件名が長かった場合は件名を短くして取り込む」チェックボックスにチェックマークを付けます。

    補足 返信メール取り込み時、返信メッセージのタイトルは初期値で「Re: ＋返信メールのサブジェクト」になります。タイトルが 120 バイトを超えた場合は切り捨てられます。120 バイトを超えた場合にエラーとする場合は、チェックマークを付ける必要がありません。

16. HTML 形式のメールを添付文書として取り込みたい場合は、[HTML 形式のメールを添付文書として取り込む] にチェックマークを付けます。

17. [メール取り込み時、返信メッセージのタイトルは返信元メッセージのタイトルを利用する] にチェックマークが付いていないことを確認します。

補足 返信メール取り込み時、返信メッセージのタイトルを「Re: +返信元メッセージのタイトル」にするためのものです。タイトルが 120 バイトを超えた場合は切り捨てられます。返信メッセージのタイトルを返信メールのサブジェクトから取り込む場合は、チェックマークを付ける必要はありません。

18. [返信用の暗号キーをメールの From フィールドに付加する] にチェックマークが付いていないことを確認します。

補足 返信メール用にメールヘッダーの Reply-To フィールドに埋め込まれた暗号キーが、メール経路上のサーバー、またはクライアントのメールソフトウェアで消失する場合があります。この問題を回避するために、暗号キーを From フィールドに埋め込む設定をします。ただし、返信メールの取り込みが正常に行われている場合は、チェックマークを付ける必要はありません。

19. [返信用の暗号キーをメールの本文に付加する] にチェックマークが付いていないことを確認します。

補足 返信メール用にメールヘッダーの Reply-To フィールドに埋め込まれた暗号キーが、メール経路上のサーバー、またはクライアントのメールソフトウェアで消失する場合があります。この問題を回避するために、暗号キーをメール本文に埋め込む設定をします。この設定をすると、返信メール内容の取り込み機能によって、暗号キーをメール本文の最初から取り込みます。ただし、返信メールの取り込みが正常に行われている場合は、チェックマークを付ける必要はありません。

20. [返信用の暗号キーをメールのサブジェクトに付加する] にチェックマークが付いていないことを確認します。

補足 返信メール用にメールヘッダーの Reply-To フィールドに埋め込まれた暗号キーがメール経路上のサーバーまたはクライアントのメールソフトウェアで消失する場合があります。そのような問題を回避するために、暗号キーをメールのサブジェクトに埋め込む設定をします。また、返信メール内容取り込み機能によって、暗号キーをメールのサブジェクトから取り込みます。ただし、返信メールの取り込みが正常に行われている場合は、チェックマークを付ける必要はありません。

21. S/MIME 用証明書と秘密鍵が設定されているかどうかを確認します。

補足 S/MIME を使用して返信メールを取り込む場合は、[S/MIME を使用して取り込む] にチェックマークを付けます。

参照 S/MIME 用証明書と秘密鍵の設定方法については、『システム管理者ガイド』を参照してください。

22. [S/MIME 署名が検証できた場合のみ取り込む] にチェックマークが付いていないことを確認します。

補足 S/MIME を使用して返信メールを取り込む場合で、S/MIME の署名が検証できた場合だけ取り込むときは、[S/MIME 署名が検証できた場合のみ取り込む] にチェックマークを付けます。このチェックボックスにチェックマークを付けると、返信メールに S/MIME 署名が付いている場合で、その署名が RMS に登録されている証明書で検証できたときだけ返信メールを取り込みます。

23. [設定] をクリックします。

設定内容の登録を確認する画面が表示されます。

24. [OK] をクリックします。

設定内容を更新したことを伝えるメッセージとサーバーの再起動を促すメッセージが表示されますが、再起動の必要はありません。

14.7.3 コラボスペースの利用ユーザーの設定

リソース管理アプリケーションを使用して、コラボスペースの利用ユーザーを登録します。

コラボスペースの利用可能ユーザーを設定する

1. リソース管理アプリケーションを起動します。

   参照 リソース管理アプリケーションの起動方法については、「リソース管理アプリケーションを起動する手順」（P.126）を参照してください。

2. リソース管理アプリケーションのトップ画面で、[ライセンス編集] をクリックします。
   [ライセンス編集] 画面が表示されます。

3. ライセンスを編集するコラボスペースをクリックします。ここでは、[コラボスペース（arcsuite)] をクリックします。
   [ライセンス編集用ユーザ検索] 画面が表示されます。

4. [検索対象システム] プルダウンメニューから、ライセンス対象のユーザーが所属するシステムを選択します。ここでは、「dc=example, dc=com」を選択します。

5. [ライセンス非保持者のみ] を選択します。

6. [検索] をクリックします。
   [ライセンス編集用検索結果] 画面に検索されたユーザーの一覧が表示されます。

7. ユーザーのチェックボックスにチェックマークを付けることによって、コラボスペースにライセンスを付与するユーザーを選択します。

8. [ライセンス付与] をクリックします。
   [ライセンス付与] 画面に選択したユーザーの一覧が表示されます。

9. ユーザーの一覧を確認してから、[付与] をクリックします。
   [ライセンス付与結果] 画面が表示されます。

10. [確認] をクリックします。

14.7.4 イントラ外ユーザーの設定

コラボスペースでは、イントラ外ユーザーグループに登録されたユーザーは、イントラ外ユーザーとして取り扱われます。

- ユーザーにコラボスペースから通知メールが送信されるとき、メッセージの添付ファイルはリンクになっています。イントラ外ユーザーには、メッセージの添付ファイルは通知メールの添付ファイルとなって送信されます。また、イントラ外ユーザーへの通知メールにはコラボスペースの URL は記載されません。
  たとえば、イントラ外ユーザーには、メールの送受信はできるが、コラボスペースに Web ブラウザーからアクセスできないユーザーを指定します。
- [サーバー情報表示] 画面の [イントラ外ユーザーグループ] に表示されるグループがイントラ外ユーザーグループです。初期値では、[コラボ外部ユーザーグループ] が表示されます。イントラ外ユーザーグループは、同じ RMS に所属するすべてのコラボスペースで共通です。
- ユーザーをイントラ外ユーザーに指定するには、イントラ外ユーザーグループにユーザーを登録します。

  参照 グループへのユーザーの登録方法については、『リソース管理アプリケーションのヘルプ』を参照してください。

14.8 ワークフローの初期設定

ワークフローのインストール後、ユーザーが利用できるように初期設定をします。

14.8.1 ユーザーのメールアカウントの作成

SMTP/POPサーバーに、ワークフローを利用するユーザーのメールアカウントを登録します。
作成するメールアカウントは、次のとおりです。
表：作成するメールアカウント

ワークフローを利用するユーザーのPOPアカウント	ワークフローを利用するユーザーのPOPアカウントのパスワード	メールアドレス
rmsadmin	rmsadmin	rmsadmin@example.com

14.8.2 ワークフロー管理アプリケーションを使用する初期設定

管理者を設定する

1. ワークフロー管理アプリケーションにログインします。
2. ワークフロー定義を共用定義として公開できる権限を持つユーザーと、ワークフロー定義を作成できる権限を持つユーザーを設定します。

(1) 定義を公開する権限を持つユーザーを設定する場合は、[定義公開者] メニューをクリックします。定義を作成する権限を持つユーザーを設定する場合は、[定義作成者] メニューをクリックします。
それぞれの設定画面が表示されます。

(2) アドレス帳からユーザー、グループ、またはロールを追加します。
ワークフロー定義を作成できる権限を持つユーザーを設定します。

(3) [設定] をクリックします。
変更内容が反映されます。

メール通知を設定する

1. ワークフロー管理アプリケーションにログインします。
2. 左側の管理者設定メニューから、[メール通知設定] をクリックします。
右側に、[メール通知設定] 画面が表示されます。
3. ワークフローのシステムが送信するメールについて設定します。

(1) [メッセージ通知サーバーの URL] に、メッセージ通知サービスのインターフェイスの URL を入力します。

(2) [メールマスターメールアドレス] に、設定を行うアドレスを入力します。
ここでは、「rmsadmin@example.com」と入力します。

補足 [メッセージ通知サーバーの URL] は、たとえば「http://arcsuite.example.com/ArcSuite/cmMailIF/services/CmessageAxisService」のようになります。

注記 ここで入力する URL とメールアドレスは、メッセージ通知管理アプリケーションの [テストメール送信] 画面に表示されるインターフェイスの URL およびメールアドレスと同じです。これらは、共通設定時に自動的に設定されています。
この設定が正しくないと、ワークフロー内の作業の通知メールやメール送信作業のメールが正常に送信されません。

ログ設定を確認する

1. ワークフロー管理アプリケーションにログインします。
2. 左側の管理者設定メニューから、[ログ設定] をクリックします。
右側に、[ログ設定] 画面が表示されます。
3. ワークフローのログの設定を確認します。
インストール直後の設定は、次のとおりです。
・アカウントログ：INFO
・セッションログ：INFO
・システムログ：INFO
・トレースログ：OFF

補足 トラブル発生時の解析を簡単にするため、トレースログのレベルを「INFO」に設定することを推奨します。

ワークフローキャビネット設定を確認する

1. ワークフロー管理アプリケーションにログインします。
2. 左側の管理者設定メニューから、[ワークフローキャビネット設定] をクリックします。
右側に、[ワークフローキャビネット設定] 画面が表示されます。
3. ワークフローのキャビネットの設定を確認します。
[ワークフローキャビネット設定] 画面には、インストール時に設定されたキャビネットの情報が表示されています。

不要データの削除を確認する

1. ワークフロー管理アプリケーションにログインします。
2. 左側の管理者設定メニューから、[不要データ削除] をクリックします。
右側に、[不要データ削除] 画面が表示されます。
3. 次の各項目を確認および設定します。
・[現在のスケジュール]
現在の設定している不要データ削除のスケジュールが表示されます。
・[日程] プルダウンメニュー
[毎日]、[毎週] のどちらかを選択します。「毎週」を選択すると、曜日を選択するラジオボタンが表示されます。
・[開始時刻] プルダウンメニュー
削除時刻を選択します。

外部コマンドスケジュール設定を確認する

1. ワークフロー管理アプリケーションにログインします。
2. 左側の管理者設定メニューから、[外部コマンドスケジュール設定] をクリックします。
   右側に、[外部コマンドスケジュール設定] 画面が表示されます。
3. スケジュールの [日程] および [停止期間] を設定します。
4. [追加] をクリックします。
   スケジュールが追加されます。

外部コマンドサービス状態設定を確認する

1. ワークフロー管理アプリケーションにログインします。
2. 左側の管理者設定メニューから、[外部コマンドサービス状態設定] をクリックします。
   右側に、[外部コマンドサービス状態設定] 画面が表示されます。
3. 外部コマンドサービス状態を確認します。
   サービスが停止している場合は、[開始] をクリックします。

外部コマンド一覧を確認する

1. ワークフロー管理アプリケーションにログインします。
2. 左側の管理者設定メニューから、[外部コマンド一覧] をクリックします。
   右側に、[外部コマンド一覧] 画面が表示されます。
3. 外部コマンドの状況を確認します。

外部コマンド実行を設定する

1. ワークフロー管理アプリケーションにログインします。
2. 左側の管理者設定メニューから、[外部コマンド実行設定] をクリックします。
   右側に、[外部コマンド実行設定] 画面が表示されます。
3. 次の各項目を確認および設定します。
   - [実行状態調査間隔]
     外部コマンドの実行状態を調査する間隔を秒単位で設定します。
   - [再実行の間隔]
     スケジュールや最大同時実行数により実行できなかった場合の外部コマンド再実行の間隔を秒単位で設定します。
   - [最大同時実行数]
     外部コマンドの最大同時実行数を設定します。

14.8.3 ワークフローの利用ユーザーを登録する

リソース管理アプリケーションを使用して、ワークフローの利用ユーザーを登録します。

ワークフローの利用可能ユーザーを設定する

1. リソース管理アプリケーションを起動します。

   参照 リソース管理アプリケーションの起動方法については、「リソース管理アプリケーションを起動する手順」（P.126）を参照してください。

2. リソース管理アプリケーションのトップ画面で、［ライセンス編集］をクリックします。
   ［ライセンス編集］画面が表示されます。

3. ライセンスを編集するワークフローをクリックします。ここでは、［ワークフロー（arcsuite)］をクリックします。
   ［ライセンス編集用ユーザ検索］画面が表示されます。

4. ［検索対象システム］プルダウンメニューから、ライセンス対象のユーザーが所属するシステムを選択します。ここでは、「dc=example, dc=com」を選択します。

5. ［ライセンス非保持者のみ］を選択します。

6. ［検索］をクリックします。
   ［ライセンス編集用検索結果］画面に検索されたユーザーの一覧が表示されます。

7. ワークフローにライセンスを付与するユーザーのチェックボックスにチェックマークを付けます。

8. ［ライセンス付与］をクリックします。
   ［ライセンス付与］画面に選択したユーザーの一覧が表示されます。

9. ユーザーの一覧を確認してから、［付与］をクリックします。

10. ［OK］をクリックします。

14.9　監視サービスの初期設定

監視サービスは、ArcSuite関連のサービス系コンポーネントのWindowsサービスを監視します。
監視サービスは、「コンポーネントの共通設定」でインストールするコンポーネントです。
初期値の設定で監視が行われます。監視サービスの設定を変更する場合は、次の設定をします。

・異常監視
・運用監視

参照 設定内容の詳細については、『システム管理者ガイド』を参照してください。

14.10 ファイルフォーマット変換サービスの初期設定

ファイルフォーマット変換サービスでフォーマット変換をするための初期設定をします。
セカンダリーコンテントの作成、コントロールビューの表示、スタンプの付与、またはドキュメントレビューオプションなどを使用するために設定します。
なお、ファイルフォーマット変換サービスの初期設定をするには、「ArcSuite 4.0 インストール」インストールメディアが必要です。

14.10.1 DocuWorks のインストール後の設定をする

DocuWorksのインストール後に、次のユーザーで、DocuWorksを使用した変換をするための設定をします。

・Administrator 権限を持つユーザー
- FX XDW Creation Printer を再作成する

・サービス起動ユーザー
- FX XDW Creation Printer の設定を変更する
- DocuWorks Printer の設定を変更する
- DocuWorks のユーザー個別設定を変更する
- DocuWorks Viewer の印刷設定を変更する

FX XDW Creation Printer を再作成する

Administrator権限を持つユーザーで、FX XDW Creation Printerを削除し、再度作成します。

1. ArcSuite サーバー、またはキャプチャリングサービスをインストールした PC に、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。

補足 2 台以上で構成されている場合はコンポーネントサーバーにサインインします。ただし、リポジトリーサーバーにファイルフォーマット変換サービスをインストールした場合は、リポジトリーサーバーにサインインします。

2. Windows の［スタート］メニューから、［コントロールパネル］を選択します。
［コントロールパネル］画面が表示されます。

補足 ・Windows 8.1 の場合は、Windows のスタート画面で、［コントロールパネル］をクリックします。
・Windows 10 の場合は、Windows の［スタート］メニューから、［コントロールパネル］を選択します。

3. ［ハードウェア］の［デバイスとプリンターの表示］をクリックします。

4. ［プリンター］から「FX XDW Creation Printer」を削除します。

(1) 「FX XDW Creation Printer」を選択し、右クリックして表示されるメニューから［デバイスの削除］を選択します。

(2) 確認画面で［はい］をクリックします。

5. 「ArcSuite 4.0 インストール」インストールメディアを、ドライブにセットします。

6. 「{インストールメディア} ¥Service¥Tools¥FXXDWCreationPrinter¥as400_FXXDWCreationPrinter 再作成 .zip」ファイルを、任意のフォルダーにコピーして展開します。
たとえば、「C:¥Temp」フォルダーにコピーして展開します。
「C:¥temp」フォルダーに「updatePrinter」フォルダーが作成されます。

注記 「as400_FXXDWCreationPrinter 再作成 .zip」ファイルをコピーする任意のフォルダーは、パスに「 (スペース)」が含まれないフォルダーにしてください。

7. Windows の［スタート］メニューから、［Windows システムツール］＞［コマンドプロンプト］を右クリックし、［その他］＞［管理者として実行］を選択します。
［管理者：コマンド プロンプト］画面が表示されます。

補足
- Windows 8.1 の場合は、Windows の［スタート］ボタンを右クリックし、［コマンド プロンプト（管理者）］を選択します。
- Windows 10 の場合は、Windows の［スタート］メニューから、［Windows システムツール］＞［コマンドプロンプト］を右クリックし、［その他］＞［管理者として実行］を選択します。
- ［ユーザーアカウント制御］画面が表示された場合は、［はい］をクリックします。

8. 「updatePrinter」フォルダーに移動します。次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
cd /d  {手順 6 で作成された「updatePrinter」フォルダーのパス}
```

たとえば、「{手順 6 で作成された「updatePrinter」フォルダーのパス}」が「C:¥temp¥updatePrinter」の場合は、次のように入力します。

```
cd /d C:¥temp¥updatePrinter
```

9. FX XDW Creation Printer を再作成する実行ファイルを実行します。次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
updatePrinter_as400.bat
```

補足 実行したときのログは、「{手順 6 で作成された「updatePrinter」フォルダーのパス} ¥logs」フォルダーに作成されます。

10. 次のように表示されていることを確認します。

```
サービスを停止します。
サービスを開始します。
FX XDW Creation Printer を再作成します。
Printer has already deleted.
Delete printer driver.
Register printer driver.
Create printer.
終了しました。
```

このメッセージ以外が表示された場合は、正常に処理が行われていません。
その場合は、再度、FX XDW Creation Printer を再作成する実行ファイルを実行し、正常に処理が完了することを確認してください。

11. コマンドプロンプトを終了します。

12. サーバーを再起動します。

13. ArcSuite サーバー、またはキャプチャリングサービスをインストールした PC に、サービス起動ユーザー（ここでは ARCUSRSVC）でサインインします。

補足
- 2 台以上で構成されている場合はコンポーネントサーバーにサインインします。ただし、リポジトリーサーバーにファイルフォーマット変換サービスをインストールした場合は、リポジトリーサーバーにサインインします。
- サーバーにリモートデスクトップ接続でサインインする場合は、あらかじめ、サーバーのリモートデスクトップの設定で、接続できるユーザーにサービス起動ユーザー（ARCUSRSVC）を追加しておく必要があります。

参照 サービス起動ユーザーについては、「2.1.2 Windows のサービス起動ユーザーの設定」（P.38）を参照してください。

FX XDW Creation Printer の設定を変更する

サービス起動ユーザーで、FX XDW Creation Printerの設定を変更します。

1. Windows の［スタート］メニューから、［FUJIFILM DocuWorks］＞［DocuWorks Desk］を選択します。
   DocuWorks Desk が起動します。

   補足
   - Windows 8.1 の場合は、Windows のスタート画面で、左下の［↓］をクリックし、［FUJIFILM DocuWorks］カテゴリーの［DocuWorks Desk］をクリックします。
   - Windows 10 の場合は、Windows の［スタート］メニューから、［FUJIFILM DocuWorks］＞［DocuWorks Desk］を選択します。
   - ［DocuWorks ユーザー個別設定］画面が表示された場合は、画面の指示に従って設定を完了させます。

2. Windows の［スタート］ボタンを右クリックし、［コントロールパネル］を選択します。
   ［コントロールパネル］画面が表示されます。

   補足
   - Windows 8.1 または Windows 10 の場合は、Windows の［スタート］ボタンを右クリックし、［コントロールパネル］を選択します。

3. ［ハードウェア］の［デバイスとプリンターの表示］をクリックします。
4. ［FX XDW Creation Printer］を選択します。
5. 右クリックで表示されるショートカットメニューから、［印刷設定］を選択します。
   ［FX XDW Creation Printer 印刷設定］画面が表示されます。
6. ［用紙 / 出力］タブを選択します。
7. ［原稿サイズが A3 を超える場合は A3 に縮小する］にチェックマークが付いていないことを確認します。
8. ［用紙 / 出力］タブで［余白の編集］をクリックします。
   ［余白の編集］画面が表示されます。
9. 余白の左、右、上、および下の値に「0」を入力します。
10. ［OK］をクリックします。
    ［FX XDW Creation Printer 印刷設定］画面に戻ります。
11. ［適用］をクリックします。
12. ［OK］をクリックします。

DocuWorks Printer の設定を変更する

サービス起動ユーザーで、DocuWorks Printerの設定を変更します。

1. ［デバイスとプリンター］画面で［DocuWorks Printer］を選択します。
2. 右クリックで表示されるショートカットメニューから［印刷設定］を選択します。
   ［DocuWorks Printer 印刷設定］画面が表示されます。
3. ［用紙 / 出力］タブを選択します。
4. ［余白の編集］をクリックします。
   ［余白の編集］画面が表示されます。

5. 余白で、左、右、上、および下の値に「0」を入力します。
6. [OK] をクリックします。
   [DocuWorks Printer 印刷設定] 画面に戻ります。
7. [適用] をクリックします。
8. [OK] をクリックします。
   [DocuWorks Printer 印刷設定] 画面が閉じます。
9. [デバイスとプリンター] 画面を閉じます。

DocuWorks のユーザー個別設定を変更する

サービス起動ユーザーで、DocuWorksのユーザー個別設定を変更します。

1. Windows の［スタート］メニューから、[FUJIFILM DocuWorks] ＞ [DocuWorks ユーザー個別設定ツール] を選択します。
   [DocuWorks ユーザー個別設定] 画面が表示されます。

   補足
   - Windows 8.1 の場合は、Windows のスタート画面で、左下の［↓］をクリックし、[FUJIFILM DocuWorks] カテゴリーの［DocuWorks ユーザー個別設定ツール］をクリックします。
   - Windows 10 の場合は、Windows の［スタート］メニューから、[FUJIFILM DocuWorks] ＞ [DocuWorks ユーザー個別設定ツール] を選択します。

2. [DocuWorks Creator for Microsoft Office の設定] 画面が表示されるまで、画面の指示に従って操作します。
3. [DocuWorks Creator for Microsoft Office の設定] 画面で、次のチェックボックスのチェックマークを外します。
   - Microsoft Word
   - Microsoft Excel
   - Microsoft PowerPoint
4. [次へ] をクリックします。
5. 画面の指示に従って操作し、設定を完了させます。

DocuWorks Viewer の印刷設定を変更する

サービス起動ユーザーで、DocuWorks Viewerの印刷設定を変更します。

1. Windows の［スタート］メニューから、[FUJIFILM DocuWorks] ＞ [DocuWorks Viewer] を選択します。
   DocuWorks Viewer が起動します。

   補足
   - Windows 8.1 の場合は、Windows のスタート画面で、左下の［↓］をクリックし、[FUJIFILM DocuWorks] カテゴリーの［DocuWorks Viewer］をクリックします。
   - Windows 10 の場合は、Windows の［スタート］メニューから、[FUJIFILM DocuWorks] ＞ [DocuWorks Viewer] を選択します。

2. [ファイル] メニューから、[新規作成] を選択します。
   [新規作成] 画面が表示されます。
3. [文書] タブを選択し、[OK] をクリックします。
4. [ファイル] メニューから、[印刷] を選択します。

［印刷］画面が表示されます。

5. ［プリンター名］で［DocuWorks Printer］を選択します。
6. ［詳細設定］をクリックします。
［詳細設定］画面が表示されます。
7. ［原稿サイズを優先するための設定］の［ユーザ定義用紙サイズで印刷］にチェックマークを付けます。
8. ［OK］をクリックします。
［詳細設定］画面が閉じます。
9. ［OK］をクリックします。
［DocuWorks Desk］が起動し、「文書 .xdw」が表示されます。
10. ［DocuWorks Desk］の［ファイル］メニューから、［DocuWorks Desk の終了］を選択します。
11. ［DocuWorks Viewer］の［ファイル］メニューから、［DocuWorks Viewer の終了］を選択します。
12. 文書の保存を確認する画面が表示された場合は、［いいえ］をクリックします。

14.10.2 Microsoft Office をインストールしたあとの作業

Microsoft Officeをインストールしたあと、次の作業をします。

◆ Microsoft Office をインストールしたあとに必ずすること

・サービス起動ユーザーで Microsoft Word 文書を作成できるかどうか確認する
・Administrator 権限を持つユーザーで DCOM の構成を開けるかどうか確認する

◆ ArcSuite をインストールしたあとで、Microsoft Office をインストールしたときに必ずすること

・サービス起動ユーザーで Microsoft Word 文書を作成できるかどうか確認する
・Administrator 権限を持つユーザーで「SetupAppDcom.exe」コマンドを実行する
・Administrator 権限を持つユーザーで DCOM の構成を開けるかどうか確認する

Microsoft Word 文書を作成できるかどうか確認する

1. ArcSuite サーバー、またはキャプチャリングサービスをインストールした PC に、サービス起動ユーザー（ここでは ARCUSRSVC）でサインインします。

   補足 2 台以上で構成されている場合はコンポーネントサーバーにサインインします。ただし、リポジトリーサーバーにファイルフォーマット変換サービスをインストールした場合は、リポジトリーサーバーにサインインします。

   参照 サービス起動ユーザーについては、「2.1.2 Windows のサービス起動ユーザーの設定」（P.38）を参照してください。

2. Microsoft Word を起動して、表示されることを確認します。
3. Microsoft Word を閉じます。
4. Windows のデスクトップを表示します。
5. デスクトップで右クリックして表示されたショートカットメニューから、［新規作成］を選択し、Microsoft Word 文書を作成します。
デスクトップに、Microsoft Word 文書のアイコンが新規で作成されます。

6. 新規作成された Microsoft Word 文書をダブルクリックします。

7. Microsoft Word 文書が表示されることを確認します。

   補足 エラーが表示された場合は、手順 2 ～ 3 を繰り返します。

8. Microsoft Word 文書を閉じます。

9. ArcSuite サーバー、またはキャプチャリングサービスをインストールした PC から、サインアウトします。

「SetupAppDcom.exe」コマンドを実行する

ArcSuiteをインストールしたあとで、Microsoft Officeをインストールした場合だけ、この手順を実行します。それ以外の場合は、次の「DCOMの構成を開けるかどうか確認する」（P.158）に進みます。

「SetupAppDcom.exe」コマンドを実行して、サービス起動ユーザーでMicrosoft Office文書を起動できるように、DCOMの構成を変更します。

1. ArcSuite サーバー、またはキャプチャリングサービスをインストールした PC に、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。

   補足 2 台以上で構成されている場合はコンポーネントサーバーにサインインします。ただし、リポジトリーサーバーにファイルフォーマット変換サービスをインストールした場合は、リポジトリーサーバーにサインインします。

2. 「ArcSuite 4.0 インストール」インストールメディアを、ドライブにセットします。

3. Windows の［スタート］メニューから、［Windows システムツール］＞［コマンドプロンプト］を右クリックし、［その他］＞［管理者として実行］を選択します。
   ［管理者：コマンド プロンプト］画面が表示されます。

   補足
   - Windows 8.1 の場合は、Windows の［スタート］ボタンを右クリックし、［コマンド プロンプト (管理者)］を選択します。。
   - Windows 10 の場合は、Windows の［スタート］メニューから、［Windows システムツール］＞［コマンドプロンプト］を右クリックし、［その他］＞［管理者として実行］を選択します。
   - ［ユーザーアカウント制御］画面が表示された場合は、［はい］をクリックします。

4. 次のコマンドを実行します。

```
｛インストールメディア｝:¥Service¥Tools¥DCOM¥SetupAppDcom.exe "Setup" "｛サービス起動ユーザー名｝" "｛サービス起動ユーザーのパスワード｝"
```

   たとえば、「{インストールメディア}」が「E:」、「{サービス起動ユーザー名}」が「ARCUSRSVC」、「{サービス起動ユーザーのパスワード}」が「ArcSuite001」の場合は、次のように入力します。

```
E:¥Service¥Tools¥DCOM¥SetupAppDcom.exe "Setup" "ARCUSRSVC" "ArcSuite001"
```

   参照 サービス起動ユーザーについては、「2.1.2 Windows のサービス起動ユーザーの設定」（P.38）を参照してください。

5. ArcSuite サーバー、またはキャプチャリングサービスをインストールした PC からサインアウトします。

DCOM の構成を開けるかどうか確認する

DCOMの構成を開けるかどうかを確認します。

サーバーのOS、キャプチャリングサービスをインストールするサーバーまたはクライアントPCのOSと、Microsoft Officeとの組み合わせによって、DCOMの構成を開くための手順が異なります。

OSとMicrosoft Officeとの組み合わせによる手順は、次のとおりです。

表 :OS と Microsoft Office の組み合わせごとの手順

OS	Mirosoft Office	
	32ビット版*3	64ビット版*4
32 ビットの OS *1	「dcomcnfg」と入力する手順	なし
64 ビットの OS *2	「mmc -32」と入力する手順	「dcomcnfg」と入力する手順 および「mmc-32」と入力する手順

＊ 1 : 32 ビットの OS は、次のとおりです。
- Windows 8.1（32 ビット）
- Windows 10（32 ビット）

＊ 2 : 64 ビットの OS は、次のとおりです。
- Windows Server 2016
- Windows Server 2019
- Windows 8.1（64 ビット）
- Windows 10（64 ビット）

＊ 3 : 32 ビット版の Microsoft Office は、次のとおりです。
- Microsoft Office 2013（32 ビット版）
- Microsoft Office 2016（32 ビット版）
- Microsoft Office 2019（32 ビット版）
- Microsoft Office 365（32 ビット版）

＊ 4 : 64 ビット版の Microsoft Office は、次のとおりです。
- Microsoft Office 2013（64 ビット版）
- Microsoft Office 2016（64 ビット版）
- Microsoft Office 2019（32 ビット版）
- Microsoft Office 365（32 ビット版）

補足 32 ビットの OS に、64 ビット版の Microsoft Office はインストールできません。

「dcomcnfg」と入力する手順

1. ArcSuite サーバー、またはキャプチャリングサービスをインストールした PC に、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。

補足 2 台以上で構成されている場合はコンポーネントサーバーにサインインします。ただし、リポジトリーサーバーにファイルフォーマット変換サービスをインストールした場合は、リポジトリーサーバーにサインインします。

2. Windows の［スタート］ボタンを右クリックし、［ファイル名を指定して実行］を選択します。

3. ［名前］に「dcomcnfg」と入力して、［OK］をクリックします。
［コンポーネント サービス］画面が表示されます。

4. コンソールツリーで、次のオブジェクトを選択します。
［コンソールルート］＞［コンポーネントサービス］＞［コンピューター］＞［マイコンピューター］＞［DCOM の構成］
DCOM アプリケーションの一覧が表示されます。

補足 ［DCOM 構成の警告］画面が表示された場合は、［いいえ］をクリックしてください。

5. [ファイル] メニューから、[終了] を選択します。
   [コンポーネント サービス] 画面が閉じます。

6. ArcSuite サーバー、またはキャプチャリングサービスをインストールした PC からサインアウトします。

64ビットのOSに64ビット版のMicrosoft Officeをインストールしている場合は、「■「mmc -32」と入力する手順」(P.159)に進みます。

■「mmc -32」と入力する手順

1. ArcSuite サーバー、またはキャプチャリングサービスをインストールした PC に、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。

   補足 2 台以上で構成されている場合はコンポーネントサーバーにサインインします。ただし、リポジトリーサーバーにファイルフォーマット変換サービスをインストールした場合は、リポジトリーサーバーにサインインします。

2. Windows の [スタート] ボタンを右クリックし、[ファイル名を指定して実行] を選択します。

3. [名前] に「mmc -32」と入力して、[OK] をクリックします。
   [コンソール 1 － [コンソール ルート]] 画面が表示されます。

4. [ファイル] メニューから、[スナップインの追加と削除] を選択します。
   [スナップインの追加と削除] 画面が表示されます。

5. [利用できるスナップイン] から [コンポーネント サービス] を選択します。

6. [追加] をクリックします。
   [選択されたスナップイン] に、[コンポーネント サービス] が追加されます。

7. [OK] をクリックします。
   [スナップインの追加と削除] 画面が閉じます。

8. コンソールツリーで、次のオブジェクトを選択します。
   [コンソールルート] ＞ [コンポーネント サービス] ＞ [コンピューター] ＞ [マイコンピューター] ＞ [DCOM の構成]
   DCOM アプリケーションの一覧が表示されます。

9. [ファイル] メニューから、[終了] を選択します。
   保存するかどうかを確認する画面が表示されます。

10. [いいえ] をクリックします。
    [コンソール 1－ [コンソールルート¥ コンポーネントサービス¥ コンピューター¥ マイコンピューター ¥DCOM の構成]] 画面が閉じます。

11. ArcSuite サーバー、またはキャプチャリングサービスをインストールした PC からサインアウトします。

14.11 データベース表領域管理ツールの初期設定

データベース表領域の処理に関する性能を向上するために、ArcSuiteサーバーでデータベース表領域管理ツールを初期設定します。
データベース表領域管理ツールの初期設定は、データベース表領域管理ツールをはじめて起動する前に設定します。

1. ArcSuite サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. データベース表領域管理ツールが起動している場合は、終了します。
3. Windows の［スタート］メニューから、［Windows システムツール］＞［コマンドプロンプト］を右クリックし、［その他］＞［管理者として実行］を選択します。
   ［管理者：コマンド プロンプト］画面が表示されます。
4. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

   ```
   cd /d {データベースのインストール先}¥tools_4.0¥gatherTableStats
   ```

   たとえば、「{データベースのインストール先}」が「D:¥Database」の場合は、次のように入力します。

   ```
   cd /d D:¥Database¥tools_4.0¥gatherTableStats
   ```

   補足 {データベースのインストール先} の初期値は、「{最大容量のドライブ} :¥Database」です。
5. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

   ```
   gatherTableStats.bat
   ```

   データベース表領域管理ツールの初期設定が行われます。

   補足 処理が完了するまで、約 2 分かかります。
6. ［コマンド プロンプト］画面に［SUCCESS］と表示されるのを確認します。

   補足 データベース表領域管理ツールの起動に時間がかかる場合、手順 4 から再度実施してください。

14.12 Web サービスインターフェイスのための初期設定

Webサービスインターフェイスの仕様変更を反映するために、リソース管理アプリケーションでシステムプロパティを設定します。
また、「2.1.3 Windowsの環境設定」の「ファイルのアップロードサイズの制限値を変更する」（P.45）でアップロードできるファイルサイズの制限値を変更した場合は、システムプロパティを設定することで、IISで設定した制限値をWebサービスインターフェイスに反映します。

1. リソース管理アプリケーションを起動します。

   参照 リソース管理アプリケーションの起動方法については、「リソース管理アプリケーションを起動する手順」（P.126）を参照してください。

2. [システムプロパティ編集] をクリックします。
   [システムプロパティ編集] 画面が表示されます。

3. 次のキー名および値を入力します。
   表：入力するキー名および値

キー名	com.fujifilm.fb.arcsuite.ws.isLangRequiredInRoleType
値	TRUE

4. 「2.1.3 Windows の環境設定」の「ファイルのアップロードサイズの制限値を変更する」（P.45）でアップロードできるファイルサイズの制限値を変更した場合は、次のキー名およびファイルのアップロードサイズの制限値を入力します。
   表：入力するキー名および値

キー名	com.fujifilm.fb.arcsuite.ws.maxUploadSize
値	IISで設定したファイルのアップロードサイズの制限値を入力します。

   参照 IIS での設定については、「2.1.3 Windows の環境設定」の「ファイルのアップロードサイズの制限値を変更する」（P.45）を参照してください。

5. [保存] をクリックします。
   [システムプロパティ編集結果] 画面が表示されます。

6. [OK] をクリックします。

   補足 確認のメッセージが表示された場合は、[OK] をクリックします。

7. Windows の [スタート] メニューから、[Windows 管理ツール] > [サービス] を選択します。
   [サービス] 画面が表示されます。

8. [ArcSuite Web Application Service] を選択して、[サービスの再起動] をクリックします。
   サービスが再起動されます。

14.13 インストールしたデータのバックアップ

再インストールが必要となったときのために、インストールした直後のデータをバックアップします。

参照 バックアップするデータについては、次のマニュアルを参照してください。
・基本パッケージの機能を使用する場合は、『オフラインバックアップ・リストア運用ガイド』
・オンラインバックアップオプションを使用する場合は、『オンラインバックアップ・リストア運用ガイド』

15 キャプチャリングサービス

キャプチャリングサービスをセットアップします。

15.1 キャプチャリングサービスのインストール前の準備

キャプチャリングサービスをインストールする前に準備しておく作業を説明します。

インストール前の準備

■ サービス起動ユーザーおよび所属グループの作成

サービス起動ユーザーおよび所属グループを作成します。インストール時に作成することもできます。
オールインワン構成または2台構成のサーバーにインストールするときは、サービス起動ユーザーおよび所属グループは、すでに設定されている値と同じにします。

・キャプチャリングサービス起動ユーザー：ARCUSRSVC

・サービス起動ユーザーのグループ：ARCGRPSVC

参照 サービス起動ユーザーおよび所属グループを作成する場合、「2.1.2 Windows のサービス起動ユーザーの設定」（P.38）を参照してください。

■ Windows の環境設定

フルコンピューター名、TCP/IP プロトコル、およびMicrosoft .NET Framework 3.5の設定をします。

参照 Windows の環境設定については、「2.1.3 Windows の環境設定」（P.41）を参照してください。

■ DocuWorks および Microsoft Office のインストール

キャプチャリングサービスを使用する場合、DocuWorksおよびMicrosoft Officeをインストールする必要があります。

参照 DocuWorks および Microsoft Office のインストールについては、「2.2 DocuWorks のインストール」（P.46）または「2.3 ドキュメント編集ソフトウェアのインストール」（P.47）を参照してください。

■ ライセンスシリアル番号の取得

キャプチャリングサービスのライセンスシリアル番号を取得しておきます。

15.2　キャプチャリングサービスのインストール

キャプチャリングサービスのインストール手順を説明します。

15.2.1　キャプチャリングサービスのインストール手順

1. キャプチャリングサービスをインストールするサーバーまたはクライアント PC に、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. 「ArcSuite 4.0 オプション」インストールメディアを、ドライブにセットします。
3. 次のように操作します。

◆ **OS が 32 ビットの場合**

(1) 「{インストールメディア} :¥Capturing¥32bit¥setup.exe」をダブルクリックします。

◆ **OS が 64 ビットの場合**

(1) 「{インストールメディア} :¥Capturing¥64bit¥setup.exe」をダブルクリックします。
[ArcSuite キャプチャリングサービス セットアップへようこそ] 画面が表示されます。

4. [次へ] をクリックします。
[インストールの確認] 画面が表示されます。

補足 必要なソフトウェアがインストールされていない場合は、インストールを促す画面が表示されます。その場合は、表示されているソフトウェアをすべてインストールしてください。
インストール後、再起動が必要な場合は、再起動したあと、手順 1 から操作してキャプチャリングサービスをインストールしてください。

5. [OK] をクリックします。
[License Activator] 画面が表示されます。

補足 [キャンセル] をクリックした場合は、キャプチャリングサービスのインストールを終了します。

6. [ライセンス登録] をクリックします。
シリアル番号を入力する画面が表示されます。
7. 弊社より発行されたシリアル番号を入力します。
テキストファイルで発行されたシリアル番号がある場合は、格納場所を指定してファイルをインポートします。

補足 ・シリアル番号の追加および削除は、[追加]、[削除] をクリックして実行します。
・指定する格納場所のパスには、マルチバイト文字および Windows のフォルダーに指定できない文字は使用できません。

8. [次へ] をクリックし、ライセンス認証を完了させます。

参照 ライセンス認証完了までの手順は、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「4.1 共通設定」(P.57) の手順 7 ～ 12 を参照してください。

9. [License Activator] 画面で [終了] をクリックします。
ライセンスアクティベーターの終了を確認する画面が表示されます。
10. [はい] をクリックします。
[使用許諾契約] 画面が表示されます。
11. 使用許諾契約を読み、同意する場合は、[使用許諾契約の全条項に同意します] を選択し、[次へ] をクリックします。
[ユーザー情報] 画面が表示されます。

補足 ・同意済みの使用許諾契約は、インストール後、次のパスに保存されます。
「{ArcSuite のインストールフォルダー} ¥License ArcSuite Capturing Service.txt」
・{ArcSuite のインストールフォルダー} は、手順 13 で指定するフォルダーです。たとえば、「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」です。

12. [ユーザー名] 、[会社名] を入力し、[次へ] をクリックします。
[インストール先の選択] 画面が表示されます。

13. [インストール先のフォルダ] を確認します。

注記 インストール先には、ネットワークドライブ上のパスを指定しないでください。

補足 [参照] をクリックするとインストール先のパスを選択できます。

14. [次へ] をクリックします。
[データ格納先の選択] 画面が表示されます。

15. データの格納先を確認します。

注記 ・[データ格納先] には、ネットワークドライブ上のパスを指定しないでください。
・[データ格納先] には、半角英数字だけ使用できます。

補足 [参照] をクリックするとデータ格納先のパスを選択できます。

16. [次へ] をクリックします。
[HTTP サービスの情報] 画面が表示されます。

17. HTTP サービスの [ホスト名]、[ポート番号]、および [仮想ディレクトリー名] を確認します。

18. [次へ] をクリックします。
[サービス起動ユーザー情報] 画面が表示されます。

19. キャプチャリングサービス起動ユーザーの [ユーザー名] を確認します。

20. [パスワード] および [パスワード確認] を入力します。ここでは、「ArcSuite001」と入力します。

参照 各コンポーネントのユーザー名およびパスワードについては、「1.3 セットアップ前の設定事項」(P.24) を参照してください。

21. [次へ] をクリックします。
[サービス起動ユーザーのグループ] 画面が表示されます。

22. サービス起動ユーザーが所属するグループの [グループ名] を確認します。
ここでは、「ARCGRPSVC」と表示されています。

23. [次へ] をクリックします。
[RMI レジストリサービスのポート番号] 画面が表示されます。

24. RMI レジストリサービスの [ポート番号] を確認します。

25. [次へ] をクリックします。
[キャプチャリングサービス管理ユーザーの登録] 画面が表示されます。

26. キャプチャリングサービス管理ユーザーの [ユーザー名] を確認します。

27. [パスワード] および [パスワード確認] に、サービス管理ユーザーのパスワードを入力します。ここでは、「capadmin001」と入力します。

28. [次へ] をクリックします。
[登録先 Web サービスの設定] 画面が表示されます。

29. ArcSuite の Web サービスがインストールされている（Web アプリケーションがインストールされている）コンポーネントサーバーの URL を入力します。ここで、[URL] に「https」で始まる URL を指定しない場合は、手順 38 へ進んでください。

30. [次へ] をクリックします。
[SSL サーバー証明書の選択] 画面が表示されます。

補足 この画面は、「登録先 Web サービスの設定」に「https」で始まる URL を指定した場合に表示されます。

31. サーバー証明書の格納先を確認します。

注記 サーバー証明書の格納先には、ネットワークドライブ上のパスを指定しないでください。

補足 [参照] をクリックするとインストール先のパスを選択できます。

32. [次へ] をクリックします。
[SSL サーバー証明書のインポートパスワード] 画面が表示されます。

補足 この画面は、「登録先 Web サービスの設定」に「https」で始まる URL を指定した場合に表示されます。

33. [パスワード] および [パスワード確認] に、SSL サーバ証明書のインポートパスワードを入力します。

注記 パスワードは 6 文字以上の英数字を入力します。

34. [次へ] をクリックします。
[クライアント証明書の選択] 画面が表示されます。

補足
- この画面は、「登録先 Web サービスの設定」に「https」で始まる URL を指定した場合に表示されます。
- クライアント証明書が必要ない場合は、何も指定せず [次へ] をクリックします。

35. クライアント証明書の格納先を選択します。

注記 クライアント証明書の格納先には、ネットワークドライブ上のパスを指定しないでください。

補足 [参照] をクリックして、クライアント証明書のパスを選択します。

36. [次へ] をクリックします。
[クライアント証明書のパスワード] 画面が表示されます。

補足
- この画面は、「登録先 Web サービスの設定」に「https」で始まる URL を指定した場合に表示されます。
- この画面は、クライアント証明書を指定した場合に表示されます。

37. [パスワード] および [パスワード確認] を入力します。

38. [次へ] をクリックします。
[HTTP プロキシサーバーの情報] 画面または [HTTPS プロキシサーバーの情報] 画面が表示されます。

39. キャプチャリングサービスから ArcSuite に登録するときにプロキシサーバーを使用する場合は、[ホスト名] と [ポート番号] を入力します。

40. [次へ] をクリックします。
[ファイル コピーの開始] 画面が表示されます。

41. [次へ] をクリックします。
インストールが開始されます。インストールが終了すると、[セットアップの完了] 画面が表示されます。

42. [はい、今すぐコンピュータを再起動します。] を選択します。

43. [完了] をクリックします。
サーバーが再起動されます。

キャプチャリングサービスのインストールは終了です。

15.2.2 キャプチャリングサービスをインストールしたあとの設定

キャプチャリングサービスをインストールしたあと、DocuWorksおよびMicrosoft Officeを使用した変換をするための設定をします。なお、DocuWorks、Microsoft Officeのインストール後に設定します。

・DocuWorks のインストール後の設定
・Microsoft Office のインストール後の設定

参照 ・DocuWorks のインストール後の設定については、「14.10.1 DocuWorks のインストール後の設定をする」(P.152)を参照してください。「14.10.1 DocuWorks のインストール後の設定をする」の「FX XDW Creation Printer を再作成する」(P.152)の手順 4 で「FX XDW Creation Printer」がない場合は、次の手順に進んでください。
・Microsoft Office のインストール後の設定については、「14.10.2 Microsoft Office をインストールしたあとの作業」(P.156)を参照してください。

15.2.3 Windows 8.1（32 ビット）または Windows 10 （32 ビット）の場合に必要な設定

Windows 8.1（32ビット）またはWindows 10（32ビット）のクライアントPCにキャプチャリングサービスをインストールした場合は、ローカルグループポリシーエディターで「アプリケーションから印刷ドライバーを分離する」設定を無効にします。

補足 Windows 8.1（32 ビット）または Windows 10（32 ビット）の場合、「アプリケーションから印刷ドライバーを分離する」設定を無効にせずに Microsoft Word または Microsoft Excel の文書を変換すると、変換した文書の文字が判別できません。
これはマイクロソフト社より次のページで公開されている現象で、Windows 8.1（32 ビット）または Windows 10（32 ビット）の場合にフォントが正しく処理されないために発生します。
https://support.microsoft.com/ja-jp/kb/2808463
URL は、2021 年 4 月現在のものです。

1. キャプチャリングサービスがインストールされているクライアント PC に、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。

2. Windows の［スタート］ボタンを右クリックし、［コマンドプロンプト（管理者）］を選択します。
［管理者：コマンドプロンプト］画面が表示されます。

3. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
gpedit.msc
```

［ローカル グループ ポリシー エディター］画面が表示されます。

4. 左側のツリーから［コンピューターの構成］＞［管理用テンプレート］＞［プリンター］を選択します。

5. ［アプリケーションから印刷ドライバーを分離する］をダブルクリックします。
［アプリケーションから印刷ドライバーを分離する］画面が表示されます。

6. ［無効］を選択し、［OK］をクリックします。

15.3 Web ブラウザーの設定

キャプチャリングサービスを使用するために必要なWebブラウザーの設定をします。

注記 iPad でキャプチャリングサービスを使用することはできません。

補足 同じサーバーですでに Web ブラウザーの設定をした場合は、再度 Web ブラウザーの設定をする必要はありません。

15.3.1 Internet Explorer の設定

キャプチャリングサービスを使用するWebブラウザーがInternet Explorerの場合は、Internet Explorerの設定が必要です。

参照 Internet Explorer の設定については、「13.1 Internet Explorer の設定」（P.87）を参照してください。

15.3.2 Google Chrome の設定

キャプチャリングサービスを使用するWebブラウザーがGoogle Chromeの場合は、Google Chromeの設定が必要です。

参照 Google Chrome の設定については、「13.2 Google Chrome の設定」（P.93）を参照してください。

15.3.3 Microsoft Edge の設定

クライアントPCでキャプチャリングサービスを使用するWeブラウザーがMicrosoft Edgeの場合は、Microsoft Edgeの設定が必要です。

参照 Microsoft Edge の設定については、「13.3 Microsoft Edge の設定」（P.100）を参照してください。

15.4 キャプチャリングサービスの初期設定

キャプチャリングサービスをインストールし、使用するWebブラウザーの設定が終了したら、監視キューの作成と、作成した監視キューの開始をします。

15.4.1 監視キューを作成する

キャプチャリングサービスのインストールと、ArcSuiteのセットアップが終了したら、キャプチャリング管理アプリケーションを起動して、監視キューを作成します。

キャプチャリングサービスの管理者は、最大30個の監視キューを作成できます。
監視キューを作成すると、次のフォルダーの下にフォルダーが作成されます。

- {キャプチャリングサービスのユーザーホームフォルダー} ¥Client¥Capture¥data¥Capture¥param
- {キャプチャリングサービスのユーザーホームフォルダー} ¥Client¥Capture¥data¥Capture¥spool

補足 「{キャプチャリングサービスのユーザーホームフォルダー}」は、たとえば「D:¥ArcSuite」です。

キャプチャリング管理アプリケーションを起動する手順

1. **Windows の［スタート］メニューから、［FUJIFILM ArcSuite キャプチャリングサービス］＞［ArcSuite キャプチャリングサービス管理ツール］を選択します。**

   補足
   - Windows 8.1 の場合は、Windows のスタート画面で、左下の［↓］をクリックし、［FUJIFILM ArcSuite キャプチャリングサービス］カテゴリーの［ArcSuite キャプチャリングサービス管理ツール］をクリックします。
   - Windows 10 の場合は、Windows の［スタート］メニューから、［FUJIFILM ArcSuite キャプチャリングサービス］＞［ArcSuite キャプチャリングサービス管理ツール］を選択します。

2. **キャプチャリングサービス管理ユーザーの［ユーザー名］および［パスワード］を入力します。**

3. **［OK］をクリックします。**
   キャプチャリング管理アプリケーションが起動し、［監視キュー一覧］ページが表示されます。

   補足
   - ［監視キュー一覧］ページは、キャプチャリング管理アプリケーションのトップページとなります。
   - ログインに 3 回失敗するとエラー画面を表示し、ログインを終了します。

監視キューを作成する手順

1. **［監視キュー一覧］ページで、［作成］をクリックします。**
   ［監視キュー作成］ページが表示されます。

   ただし、すでに 30 個の監視キューが存在する場合は、［監視キュー作成］ページが表示されず、監視キューを作成できないことを示すダイアログボックスが表示されます。

   注記 **監視キューを作成するには、［監視フォルダ］、［ポーリング時間］、［登録ユーザー名］、［パスワード］、および［パスワード確認］を必ず入力します。**

   補足
   - 印刷設定が可能な場合は、［印刷パラメータ］が表示されます。
   - ［印刷ユーザー名］、［登録パラメータ］、［変換パラメータ］、［属性パラメータ］、［印刷パラメータ］は、キュー作成時の必須の入力項目ではありません。［キュー編集］ページであとから入力できます。

2. **［監視フォルダ］に、作成する監視キューの絶対パスを入力します。ここでは、「D:¥Capturing¥Queue1」と入力します。**
   D ドライブの Capturing フォルダーに監視キュー「Queue1」が作成されます。

補足
・ここで設定するフォルダーは、キャプチャリングサービスで処理するドキュメント / 画像データを格納するためのフォルダーです。
・管理ツールは、文字を UTF-8 で表示するため、パスの区切り文字として入力する「¥（半角円記号）」を
「\（半角バックスラッシュ）」として表示します。

3. [ポーリング時間] に画像変換を開始するまでの待ち時間を、1 ～ 180 秒の範囲で入力します。ここでは、「180」と入力します。

補足
・監視キューへのデータ転送は、FTP プロトコルなどを使って行われます。FTP では、データ転送が終了したことを知ることができません。そのため、キャプチャリングサービスでは、[ポーリング時間] として設定した一定時間内（転送待ち時間内）にデータが転送されていないことを確認することによって、データが確定します。
・キャプチャリングサービスを起動した場合、[ポーリング時間] に入力した時間内にデータの転送が行われないと、システムによって処理が開始されます。

4. [登録ユーザー名] を入力します。

5. [パスワード] に、ユーザーのパスワードを入力します。ここでは、「rmsadmin001」と入力します。

6. [パスワード確認] に、ユーザーのパスワードを再度入力します。

7. [印刷ユーザー名] を入力します。

8. [パスワード] に、印刷ユーザーのパスワードを入力します。

9. [登録パラメータ] エリアの [パラメータ名] プルダウンメニューから、登録パラメーターを選択します。ここでは、[locationObjectId] を選択します。

10. [パラメータ値] に、登録パラメーターの設定値を入力します。ここでは、[locationObjectId] の設定値として、登録先のドロワーやフォルダーの ID を入力します。

11. [追加] をクリックします。
初期画像の登録情報として、登録パラメーターと設定値が設定されます。

12. [変換パラメータ] エリアの [パラメータ名] プルダウンメニューから、変換パラメーターを選択します。ここでは、[out-format] を選択します。

13. [パラメータ値] に、変換パラメーターの設定値を入力します。ここでは、「out-format」の設定値として、[image/tiff] と入力します。

14. [追加] をクリックします。
初期画像の変換情報として、変換パラメーターと設定値が設定されます。

15. [属性パラメータ] エリアの [パラメータ名] プルダウンメニューから、属性パラメーターを選択します。ここでは、[name] を選択します。

16. [パラメータ値] に、属性パラメーターの設定値を入力します。ここでは、「name」の設定値として、「Picture」と入力します。

17. [追加] をクリックします。
初期画像の属性情報として、属性パラメーターと設定値が設定されます。

18. [印刷パラメータ] エリアの [パラメータ名] プルダウンメニューから、印刷パラメーターを選択します。ここでは、[baler] を選択します。

19. [パラメータ値] に、印刷パラメーターの設定値を入力します。こでは、「baler」の設定値として、「off」と入力します。

20. [追加] をクリックします。
初期画像の印刷情報として、印刷パラメーターと設定値が設定されます。

21. [作成] をクリックします。

22. [OK] をクリックします。
監視キューが作成されます。
作成に成功すると［監視キュー一覧］ページに戻り、何番のキューを作成したのかを示すダイアログボックスが表示されます。

参照 キャプチャリングサービスの各パラメーターについては、『キャプチャリング管理アプリケーションのヘルプ』を参照してください。

15.4.2 監視キューの開始

監視キューを開始する手順を説明します。操作は、キャプチャリング管理アプリケーションでします。

監視キューの開始手順

1. キャプチャリング管理アプリケーションを起動します。
［監視キュー一覧］ページが表示されます。

補足 ・［監視キュー一覧］ページは、キャプチャリング管理アプリケーションのトップページとなります。
・ログインに 3 回失敗するとエラー画面が表示され、ログインを終了します。

2. ［監視キュー一覧］ページで、処理を開始する監視キューのラジオボタンを選択します。

3. [開始] をクリックします。
確認のためのダイアログボックスが表示されます。
次の場合は、警告メッセージが表示されます。
・手順 2 で、すでに処理が開始されている場合
・異常状態の監視キューを選択した場合
・ほかのユーザーが処理中である場合

4. [OK] をクリックします。
監視キューが開始されます。開始に成功すると［監視キュー一覧］ページに戻ります。

補足 キャプチャリングサービスでは、サービスの再起動およびサーバーの再起動時に、開始できる監視キューがすべて開始されます。

16 統合検索サービス

統合検索サービスをセットアップします。

16.1 インストールの概要

インストール手順の概要を説明します。

補 足 統合検索サービスのライセンスシリアル番号を取得しておきます。

16.1.1 手順の概要

統合検索サービスは、次の手順でインストールします。

・構成の決定
・ArcSuite でサービスの確認とキャビネット／ドロワーの登録
・インストール前の準備
・統合検索インストーラーの実行
・インストール後の初期設定の実行

16.1.2 構成の決定

統合検索サービスでは、対象の文書量、システムリソースの消費状況、ほかのアプリケーションとの共存状況に応じて、複数の機器にモジュールを分離してインストールできます。
インストールの前に、次のどの構成でインストールするかを決めておきます。

・すべてのモジュールを ArcSuite サーバーにインストール
・ストレージプロキシの分離インストール
・管理ツールと登録アプリケーションの分離インストール

すべてのモジュールを ArcSuite サーバーにインストール

ArcSuiteサーバーに、管理アプリケーション、登録アプリケーション、および統合検索サービスのストレージプロキシをインストールします。収集用データベースは、ドキュメント管理サービスと共有でサーバーに構築します。

ストレージプロキシの分離インストール

ArcSuiteサーバーに、管理ツールと登録アプリケーションをインストールします。また、拠点ごとに配置するサーバーに、ストレージプロキシをインストールします。この構成の場合、サーバーは2台以上必要です。収集用データベースは、ドキュメント管理サービスと共用で構築します。

管理ツールと登録アプリケーションの分離インストール

ArcSuiteサーバーとは別のサーバーに、管理ツールと登録アプリケーションをインストールします。また、拠点ごとに配置するサーバーに、ストレージプロキシをインストールします。この構成の場合、サーバーは2台以上必要です。収集用データベースは、ドキュメント管理サービスと共用で構築します。

構成とインストールするモジュール

サーバーに、統合検索サービスのどのモジュールをインストールするのかを、構成ごとにまとめると、次の表のとおりになります。なお、ストレージプロキシは、複数のサーバーにインストールできます。

表 :構成とサーバーにインストールするモジュール

構成	Windowsサーバー A	Windowsサーバー B	Windowsサーバー C
すべてのモジュールを ArcSuite サーバーにインストール	ArcSuite本体 管理ツール、登録アプリケーション ストレージプロキシ	なし	なし

表：構成とサーバーにインストールするモジュール

構成	Windowsサーバー A	Windowsサーバー B	Windowsサーバー C
ストレージプロキシの分離インストール	ArcSuite本体 管理ツール、登録アプリケーション	ストレージプロキシ	なし
管理ツールと登録アプリケーションの分離インストール	ArcSuite本体	管理ツール、登録アプリケーション	ストレージプロキシ

16.1.3 サービスの確認とキャビネット／ドロワーの登録

収集したドキュメントを登録するキャビネット、ドロワーを登録します。
操作は、ArcSuiteサーバーで「ドキュメント管理サービス管理コマンド」、「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版」または、「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web版」でできます。

補足 「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション」には、「デスクトップ版」と、クライアント PC から Web ブラウザーを使って操作する「Web 版」があります。本書では「デスクトップ版」での操作を説明しています。

参照
- ドキュメント管理サービス管理コマンドの詳細については、『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。
- ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版の詳細については、『ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版のヘルプ』を参照してください。
- ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web 版の詳細については、『ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web 版のヘルプ』を参照してください。

ドキュメント管理サービス管理コマンドで設定する

ドキュメント管理サービス管理コマンドの「dradmincmd.bat」を使用して、各種設定をします。
dradmincmd.batの使用方法を説明します。

1. ArcSuite サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. ドキュメント管理サービスが起動していない場合は、ドキュメント管理サービスを起動します。

   参照 サービスの起動方法については、『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。

3. コマンドプロンプトを管理者として起動します。
4. コマンドプロンプトで、次のフォルダーに移動します。

```
cd /d {ArcSuite のインストールフォルダー}¥Service¥Components¥Repository¥sample¥admin
```

   補足 {ArcSuite のインストールフォルダー} は、プログラムのインストール先のフォルダーです。インストール時に指定します。

5. 次のコマンドで、ドキュメント管理サービス管理コマンドを実行します。

```
"{ArcSuite のインストールフォルダー}¥Service¥Components¥Repository¥bin¥dradmincmd.bat" {コントロールファイル名}
```

   補足
   - {ArcSuite のインストールフォルダー} は、プログラムのインストール先のフォルダーです。インストール時に指定します。
   - {コントロールファイル名} には、それぞれの操作で使用するコントロールファイルを指定します。コントロールファイル中には、必要な CSV ファイルの名前が記載されています。

参照 具体的なコントロールファイル名については、「14.1 ドキュメント管理サービスの初期設定」の「ドキュメント管理サービス管理コマンドで設定する手順」（P.112）を参照してください。

6. ドキュメント管理サービスの管理者を指定します。ここでは、「rmsadmin」を入力します。

7. ドキュメント管理サービスの管理者のパスワードを入力します。ここでは、「rmsadmin001」と入力します。

参照 各コンポーネントのユーザー名およびパスワードについては、「1.3 セットアップ前の設定事項」（P.24）を参照してください。

キャビネットを登録する

統合検索サービスを使用するときは、次の属性を持つキャビネットを管理者が登録します。キャビネットは「統合検索用キャビネットのキャビネットラベル」で作成します。

表：統合検索サービスで使用されるキャビネットの属性

属性名	説明
キャビネット ID	キャビネットを識別するために使用します。
アクセス権リスト	everyone getAttribute
デフォルトアクセス権リスト	everyone getAttribute|getContent|viewContent|printContent
（ユーザー定義属性）	収集した属性値を格納する属性を登録します。収集するドキュメントの属性と、同名の属性を対応する型で登録します。

補足 ユーザー定義属性を追加する場合、その属性がドキュメント管理サービス管理ツールで RMS に登録されている必要があります。

参照 ユーザー属性の RMS への登録方法については、『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。

統合検索キャビネットの登録手順

使用するサンプルファイルは、｛ArcSuiteのインストールフォルダー｝¥Service¥Components¥Repository¥sample¥adminにあります。サンプルファイルで作成されるキャビネットはユーザー属性のないキャビネットです。設定したい内容にあわせて、サンプルのコントロールファイルとCSVファイルを編集して、管理ツールを実行します。

補足 ｛ArcSuite のインストールフォルダー｝は、プログラムのインストール先のフォルダーです。インストール時に指定します。

参照 各ファイルの編集内容など、管理コマンドの詳細については、『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。

統合検索キャビネットの登録手順を次に示します。

1. データベース表領域を作成します。
   次のコントロールファイルを使用します。
   ・createDBTableSpaceSearch.ctl

2. 統合検索キャビネット（cabinetLabel：extraSearch）を作成します。
次のコントロールファイルを使用します。
・createCabinetSearch.ctl

補足 ・createCabinetSearch.ctl のコントロールファイルでは、次の CSV ファイルが使用されます。
- cabinetAclSearch.csv（アクセス権リストファイル）
- cabinetDefaultAclSearch.csv（デフォルトアクセス権リストファイル）
- maskAclSearch.csv（アクセス権マスクリストファイル）
- statusDefSearch.csv（状態定義ファイル）
- statusPathSearch.csv（状態遷移定義ファイル）
- contentLabelSearch.csv（コンテントラベルリストファイル）

・全文検索サービスを利用する場合は、このキャビネットに全文検索インデックスの初期化を行ってください。

参照 全文検索サービスを利用する方法については、『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。

ドロワーを登録する

統合検索サービスを使用するときは、次の属性を持つドロワーを管理者が登録します。
表：統合検索サービスで使用されるドロワーの属性

属性名	説明
ドロワー名	ドロワーを識別するために使用します。
アクセス権リスト	everyone getAttribute
デフォルトアクセス権リスト	everyone getAttribute|getContent|viewContent|printContent

■ 統合検索ドロワーの登録手順

統合検索ドロワーの登録手順を次に示します。

1. 統合検索ドロワーを作成します。
次のコントロールファイルを使用します。
・createDrawerSearch.ctl

補足 createDrawerSearch.ctl のコントロールファイルでは、次の CSV ファイルが使用されます。
・drawerAclSearch.csv（アクセス権リストファイル）
・drawerDefaultAclSearch.csv（デフォルトアクセス権リストファイル）

キャビネットのモードを normal にする

作成した統合検索キャビネットのモードをnormalにする手順を次に示します。

1. コントロールファイルを指定しないで、dradmincmd.bat を実行します。
2. ドキュメント管理サービスの管理者のユーザー名を入力します。
3. パスワードを入力します。
4. 「operation」のプロンプトに対して、「setModeOfCabinet」を入力します。
5. 「cabinetId」のプロンプトに対して、統合検索キャビネットのキャビネット ID を入力します。
6. 「mode」のプロンプトに対して、「normal」を入力します。
7. 確認メッセージに対して「y」を入力します。
キャビネットのモードが「normal」に変更されます。

8. 「operation」のプロンプトに対して、「exit」を入力します。
   ドキュメント管理サービス管理コマンドが終了します。

ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版で設定する

ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版を使用した、統合検索サービスの各種設定を説明します。

ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版の起動

1. ArcSuite サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. デスクトップ上に表示されているドキュメント管理サービス管理アプリケーションのショートカットアイコンをダブルクリックします。
   [ログイン] 画面が表示されます。
3. ドキュメント管理サービスの管理者を指定します。ここでは、「rmsadmin」を入力します。

   参照 各コンポーネントのユーザー名およびパスワードについては、「1.3 セットアップ前の設定事項」(P.24) を参照してください。

4. [サービス] プルダウンメニューで、サービスを行うサーバー ID を指定します。
5. [OK] をクリックします。
   ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版が起動します。

キャビネットを登録する

データベース表領域のサイズの算出

登録するキャビネットが必要とするデータベース表領域のサイズを、次の手順で算出します。

1. [ドキュメント管理サービス管理アプリケーション] の [サービス] タブのページで、左側の [階層ツリー表示] エリアから [サービス] を選択します。
2. メニューバーの [サービス操作] > [DB 表領域] > [DB 表領域のサイズ算出] を選択します。
   [DB 表領域のサイズ算出] 画面－ [全般] タブのページが表示されます。
3. [キャビネットラベル（用途）] プルダウンメニューから、[キャビネットの用途] を選択します。
4. [登録予定件数] に、キャビネットの登録予定件数を、1,000 ～ 2,147,483,647 までの範囲で入力します。
5. [フォルダ階層限界値] に、作成するキャビネットのフォルダー階層の限界値を、3 ～ 30 までの範囲で入力します。初期値は 10 です。
6. [計算] をクリックします。
   設定した内容のデータベース表領域のサイズの計算が開始されます。
   計算が終了すると、[DB 表領域のサイズ算出] 画面が表示されます。
7. 計算されたデータベース表領域サイズを確認します。
8. [OK] をクリックします。
   [DB 表領域のサイズ算出] 画面が閉じます。
9. [OK] をクリックします。

［ドキュメント管理サービス管理アプリケーション］の［サービス］タブのページに戻ります。

■ データベース表領域の作成

1. ［ドキュメント管理サービス管理アプリケーション］の［サービス］タブのページで、左側の［階層ツリー表示］エリアから［サービス］を選択します。
2. メニューバーの［サービス操作］＞［DB 表領域］＞［DB 表領域の作成］を選択します。
   ［DB 表領域の作成］画面が表示されます。
3. ［表領域名］に、表領域名を入力します。

   補足 先頭文字が英字、2 文字目以降が英数字と「_（アンダースコア）」で構成される文字列を、30 バイト以内で入力します。

   注記 ただし、「SYS_」で始まる文字列、またはデータベースの予約語となっている文字列は指定できません。

   参照 データベースの予約語については、次の URL で確認してください。
   https://docs.oracle.com/cd/F19136_01/sqlrf/Oracle-SQL-Reserved-Words.html#GUID-55C49D1E-BE08-4C50-A9DD-8593EB925612
   URL は、2021 年 4 月現在のものです。
4. ［表領域ファイルサイズ］に、表領域のサイズを、20 ～ 32,000 MB の範囲で入力します。初期値は 50 MB です。
5. ［表領域データファイルパス］に、作成するファイルのパスを入力します。

   補足 ・入力を省略すると「{表領域名}.dbf」が指定されます。
   ・ファイルおよびフォルダー名で使用可能な文字は、英数字、「_（アンダースコア）」、「.（ピリオド）」、「（スペース）」だけです。
6. ［OK］をクリックします。
   データベース表領域が作成されます。

■ 統合検索キャビネットの作成

1. ［ドキュメント管理サービス管理アプリケーション］の［サービス］タブのページで、左側の［階層ツリー表示］エリアから［サービス］を選択します。
2. メニューバーの［サービス操作］＞［キャビネットの作成］を選択します。
   作成する［キャビネットの用途］を選択する画面が表示されます。
3. ［統合検索キャビネット］を選択します。
4. ［OK］をクリックします。
5. ［キャビネットの作成］画面－［全般］タブのページが表示されます。次の項目を入力します。

項目	説明
キャビネット名	作成するキャビネットの名前を、384バイト以内で入力します。
キャビネット ID	作成するキャビネットIDを、64バイト以内で入力します。
登録予定件数	登録予定件数を、1,000～2,147,483,647の範囲で入力します。 補足 「■データベース表領域のサイズの算出」（P.178）の手順4で入力した、登録予定件数を入力します。

項目	説明
表領域名	作成するキャビネットが使用する表領域名を選択します。 補 足 「■データベース表領域の作成」(P.179) で作成した表領域名を入力します。
ファイルフォーマット変換サービス	ファイルフォーマット変換サービスを使用する場合は、サービス名を選択します。
フォルダ階層限界値	フォルダー階層の限界値（フォルダーを階層構造で管理できる階層の深さ）を、3～30の範囲で入力します。初期値は10です。
キャビネット管理者	[ロール参照] をクリックしてキャビネット管理者を選択します。
注釈	キャビネットに付ける注釈を、512バイト以内で入力します。

補 足 ・表領域が不明な場合は［サービス情報の表示］から確認します。
・作成するキャビネットが、分類キャビネット、およびメッセージ通知キャビネットの場合は、ファイルフォーマット変換サービスを使用できません。

6. 必要な属性や権限をタブページで選択して設定します。

7. [OK] をクリックします。
指定した条件でキャビネットが作成され、キャビネット作成が成功したことを示す画面が表示されます。

注 記 この操作には時間がかかる場合があります。

補 足 ［キャビネットの作成］画面－［エディションキー］タブのページでエディションキーを設定していない場合は、確認のダイアログボックスが表示されます。

8. [OK] をクリックします。
［ドキュメント管理サービス管理アプリケーション］の［サービス］タブのページに戻ります。

補 足 全文検索サービスを利用する場合は、このキャビネットに全文検索インデックスの初期化を行ってください。

参 照 全文検索サービスを利用する方法については、『ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版のヘルプ』、または『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。

■ 統合検索ドロワーの作成

1. ［ドキュメント管理サービス管理アプリケーション］の［サービス］タブのページで、左側の［階層ツリー表示］エリアから［サービス］を選択します。
キャビネットの一覧が表示されます。

2. キャビネット一覧が表示された状態で、操作対象のキャビネットを選択します。

3. メニューバーの［キャビネット操作］＞［ドロワーの作成］を選択します。
［ドロワーの作成］画面－［全般］タブのページが表示されます。

4. 次の項目を入力します。

項目	説明
ドロワー名	作成するドロワーの名前を、384バイト以内で入力します。
ストレージパス	あらかじめ、サーバーに任意のフォルダーを用意します。 作成するドロワーが指定するストレージとして、このフォルダーを指定します。 英数字と記号だけの絶対パスで入力します。入力できる文字列の長さは、1～165バイト以内です。

項目	説明
注釈	ドロワーに付ける注釈を、0～512バイト以内で入力します。

5. そのほか、アクセス権、デフォルトアクセス権など必要な設定をします。
6. [OK] をクリックします。
   指定した条件でドロワーが作成され、ドロワー作成が成功したことを示す画面が表示されます。
7. [OK] をクリックします。
   [ドキュメント管理サービス管理アプリケーション] の [サービス] タブのページに戻ります。

■ 通常モードへの変更

1. [ドキュメント管理サービス管理アプリケーション] の [サービス] タブのページで、左側の [階層ツリー表示] エリアから [サービス] を選択します。
   キャビネットの一覧が表示されます。
2. キャビネット一覧が表示された状態で、操作対象のキャビネットを選択します。
3. メニューバーの [キャビネット操作] ＞ [キャビネットのモード変更] を選択します。
   [キャビネットのモード変更] 画面が表示されます。
4. [キャビネットのモード変更] 画面で、[はい] をクリックします。
   モードが通常モードに変更されます。

■ ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版の終了

1. [ドキュメント管理サービス管理アプリケーション] の [サービス操作] ＞ [閉じる] を選択します。
   ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版の終了を確認する画面が表示されます。
2. [はい] をクリックします。
   ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版が終了します。

16.1.4 インストール前の準備

■ サービス起動ユーザーおよび所属グループの作成

サービス起動ユーザーおよび所属グループを作成します。インストール時に作成することもできます。
オールインワン構成または2台構成のサーバーにインストールするときは、サービス起動ユーザーおよび所属グループは、すでに設定されている値と同じにします。

・キャプチャリングサービス起動ユーザー：ARCUSRSVC
・サービス起動ユーザーのグループ：ARCGRPSVC

参照 サービス起動ユーザーおよび所属グループを作成する場合、「2.1.2 Windows のサービス起動ユーザーの設定」（P.38）を参照してください。

■ Windows の環境設定

フルコンピューター名、TCP/IP プロトコル、IIS、Microsoft .NET Framework 3.5、およびファイルのアップロードサイズの制限値の設定をします。

参照 Windows の環境設定については、「2.1.3 Windows の環境設定」（P.41）を参照してください。

16.1.5 統合検索インストーラーの実行

統合検索インストーラーは、Windowsサーバーへの統合検索コンポーネントのインストール、およびリポジトリーサーバーへの収集用データベースの表領域やテーブルなどを作成します。

参照 実行手順の詳細については、「16.2 統合検索インストーラーの実行の詳細」（P.183）を参照してください。

統合検索インストーラーの機能概要

統合検索インストーラーは、次の作業をします。

・登録アプリケーションのインストール
・管理ツールのインストール
・ストレージプロキシのインストール

統合検索インストーラーの操作概要

■ 本書で示した構成例の場合

本書で示した構成例の場合、ArcSuiteサーバーでインストーラーを実行します。

補足 2 台以上で構成されている場合は、コンポーネントサーバーで実行します。

参照 インストーラーの実行については、「16.2.1 インストール手順」（P.183）を参照してください。

■ 「ストレージプロキシの分離インストール」（P.174）の場合

ストレージプロキシを別のサーバーにインストールするときは、ArcSuiteサーバーとストレージプロキシをインストールするサーバーのそれぞれで、インストーラーを実行します。

参照 インストーラーの実行については、「16.2.1 インストール手順」（P.183）を参照してください。

■ 「管理ツールと登録アプリケーションの分離インストール」（P.174）の場合

管理ツールと登録アプリケーション、ストレージプロキシをそれぞれArcSuite本体とは別の独立したサーバーにインストールする場合は、管理ツールおよび登録アプリケーションをインストールするサーバー、ストレージプロキシをインストールするサーバーのそれぞれで、インストーラーを実行します。

注記 **管理ツールと登録アプリケーションを別々のサーバーに分離してインストールすることはできません。**

16.1.6 Web ブラウザーの設定

統合検索サービスを使用するために必要なWebブラウザーの設定をします。

統合検索サービスを使用するWebブラウザーがInternet Explorerの場合はInternet Explorerの設定が、Google Chromeの場合はGoogle Chromeの設定が必要です。

クライアントPCで統合検索サービスを使用するWeブラウザーがMicrosoft Edgeの場合は、Microsoft Edgeの設定が必要です。

注記 **iPad で統合検索サービスを使用することはできません。**

参照 Web ブラウザーの設定については、「13 Web ブラウザーの設定」（P.86）を参照してください。

16.1.7 インストール後の初期設定の実行

統合検索インストーラーの実行が終わったら、統合検索管理ツールを使って、次の初期設定をします。

・統合検索管理ツールを使用しての初期設定
・収集の開始

参照 インストール後の初期設定については、「16.4 インストール後の初期設定の操作手順」（P.188）を参照してください。

16.2 統合検索インストーラーの実行の詳細

ここでは、統合検索インストーラーの実行の詳細手順について説明します。
インストールを行う前に、次のライセンスシリアル番号を取得する必要があります。

・統合検索サービス

・NTFS プラグインコンポーネント

補足 「NTFS プラグインコンポーネント」については、収集対象のストレージに応じてライセンスを取得します。

16.2.1 インストール手順

1. ArcSuite サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。

   補足 2 台以上で構成されている場合は、コンポーネントサーバーにサインインします。

2. 「ArcSuite 4.0 インストール」インストールメディアを、ドライブにセットします。

3. 「{インストールメディア} :¥Client¥DocumentGathering¥64bit¥setup.exe」をダブルクリックします。
   [ArcSuite 統合検索サービス セットアップへようこそ] 画面が表示されます。

   補足 必要なソフトウェアがインストールされていない場合は、インストールを促す画面が表示されます。その場合は、表示されているソフトウェアをすべてインストールしてください。
   インストール後、再起動が必要な場合は、再起動したあと、手順 1 から操作して統合検索サービスをインストールしてください。

4. [次へ] をクリックします。
   [インストールの確認] 画面が表示されます。

5. [OK] をクリックします。
   [License Activator] 画面が表示されます。

   補足 [キャンセル] を選択した場合は、統合検索サービスのインストールを終了します。

6. [ライセンス登録] をクリックします。
   シリアル番号を入力する画面が表示されます。

7. 弊社より発行されたシリアル番号を入力します。
   テキストファイルで発行されたシリアル番号がある場合は、格納場所を指定してファイルをインポートします。

   補足 ・シリアル番号の追加および削除は、[追加]、[削除] をクリックして実行します。
   ・指定する格納場所のパスには、マルチバイト文字および Windows のフォルダーに指定できない文字は使用できません。

8. [次へ] をクリックし、ライセンス認証を完了させます。

   参照 ライセンス認証完了までの手順は、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「4.1 共通設定」(P.57) の手順 7 ～ 12 を参照してください。

9. [License Activator] 画面で [終了] をクリックします。
   ライセンスアクティベーターの終了を確認する画面が表示されます。

10. [はい] をクリックします。
    [機能の選択] 画面が表示されます。ライセンスをインストールしたコンポーネントのチェックボックスにチェックマークが付いています。

11. [統合検索サービス]、および [ストレージプロキシ NTFS プラグイン] を選択します。

12. [次へ] をクリックします。
[使用許諾契約] 画面が表示されます。

補足 ・同意済みの使用許諾契約は、インストール後、次のパスに保存されます。
「{ArcSuite のインストールフォルダー} ¥License ArcSuite Document Gathering Agent.txt」
・{ArcSuite のインストールフォルダー} は、手順 16 で指定するフォルダーです。たとえば、「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」です。

13. 使用許諾契約を読み、同意する場合は、[使用許諾契約の全条項に同意します] を選択し、[次へ] をクリックします。
[ユーザー情報] 画面が表示されます。

14. [ユーザー名] と [会社名] を確認します。

補足 [ユーザー名] と [会社名] には OS に設定されている内容が表示されます。

15. [次へ] をクリックします。
[インストール先の選択] 画面が表示されます。

16. [参照] をクリックして、インストール先を指定します。ここでは、「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」を指定します。

注記 インストール先には、ネットワークドライブ上のパスを指定しないでください。

補足 インストール先の初期値は「C:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」です。

17. [次へ] をクリックします。
[データ格納先の選択] 画面が表示されます。

18. [参照] をクリックするか、フォルダー名を直接入力して、ユーザーデータの格納先を指定します。ここでは、「D:¥ArcSuite」を指定します。

注記 [データ格納先] には、ネットワークドライブ上のパスを指定しないでください。

補足 ・ユーザーデータの格納先の初期値は「C:¥ArcSuite」です。
・[データ格納先] には、半角英数字だけ使用できます。

19. [次へ] をクリックします。
[RMS 用データベースのサーバー情報] 画面が表示されます。

20. [サーバー名]、[ポート番号]、および [グローバルデータベース名] を確認します。

参照 ・各コンポーネントの設定事項については、「1.3 セットアップ前の設定事項」(P.24) を参照してください。
・2 台以上で構成されている場合、設定事項の確認は、「第 2 部 2 台以上の構成へのセットアップ」の「1.3 セットアップ前の設定事項」(P.225) を参照してください。

21. [次へ] をクリックします。
[RMS 用ユーザー情報] 画面が表示されます。

22. [ユーザー名] を確認します。

23. [パスワード] を入力します。ここでは、「rms」と入力します。

24. [次へ] をクリックします。
[RMS 参照用ユーザー情報] 画面が表示されます。

25. [ユーザー名] を確認します。

26. [パスワード] を入力します。ここでは、「rmsclient」と入力します。

27. [次へ] をクリックします。
[コンピュータのホスト名] 画面が表示されます。

28. [ホスト名] を確認します。

29. [次へ] をクリックします。
[コンピューターの設置場所] 画面が表示されます。

30. コンピューターの設置場所を日本語と英語で入力します。
ここでは、[設置場所 (JA)] に「サーバールーム」、[設置場所 (EN)] に「ServerRoom」と入力します。
ここで入力した文字列は、RMS データベースに登録する属性として使用されます。

31. [次へ] をクリックします。
[サービス起動ユーザー情報] 画面が表示されます。

32. [ユーザー名] を確認します。

補足
- 入力したユーザー名に「¥」が含まれていない場合はローカルユーザーと判断します。入力したローカルユーザーが存在しない場合、[サービス起動ユーザー作成確認] 画面が表示されます。[はい] をクリックするとユーザーが作成され、「サービスとしてログオンする」権限が設定されます。
- 既存のローカルユーザーやドメインユーザーをサービス起動ユーザーとして使用する場合、そのユーザーに「サービスとしてログオンする」権限が設定されます。

33. [パスワード] と [パスワード確認] にパスワードを入力します。
ここでは、「ArcSuite001」と入力します。

34. [次へ] をクリックします。
[サービス起動ユーザーのグループ情報] 画面が表示されます。

35. [グループ名] を確認します。

補足
- 入力したローカルグループが存在しない場合、[サービス起動ユーザーのグループ作成確認] 画面が表示されます。[はい] をクリックするとローカルグループが作成されます。
- [サービス起動ユーザー情報] 画面で入力したユーザーが、入力したローカルグループのメンバーでない場合、ローカルグループのメンバーとして設定されます。

36. [次へ] をクリックします。
[HTTP サービスの情報] 画面が表示されます。

37. このコンピューターにインストールする HTTP サービスの [ポート番号]、および [仮想ディレクトリー名] を確認します。

補足 仮想ディレクトリー名には、英数字だけ入力できます。

38. [次へ] をクリックします。
[データベースのサーバー情報] 画面が表示されます。

39. [サーバー名]、[ポート番号]、および [グローバルデータベース名] を確認します。

40. [次へ] をクリックします。
[データベースの管理者情報] 画面が表示されます。

41. [パスワード] を入力します。ここでは、「System0」と入力します。

42. [次へ] をクリックします。
[データベースの統合検索用表領域作成] 画面が表示されます。

43. [表領域名] と [データファイル名] を確認します。

44. [次へ] をクリックします。
[データベースの統合検索用一時表領域作成] 画面が表示されます。

45. [一時表領域名] と [データファイル名] を確認します。

46. [次へ] をクリックします。
[データベースの統合検索用ユーザー作成] 画面が表示されます。

47. [ユーザー名] を確認します。

48. [パスワード] および [パスワード確認] を入力します。ここでは、「dga」と入力します。

49. [次へ] をクリックします。
[想定文書情報] 画面が表示されます。

50. [想定文書数] を確認します。

51. [次へ] をクリックします。
[ストレージプロキシの情報] 画面が表示されます。

52. [説明] のストレージプロキシに対する説明を確認します。

53. [次へ] をクリックします。
[ファイル コピーの開始] 画面が表示されます。

54. インストールの内容を確認します。

55. [次へ] をクリックします。
インストールが開始されます。
[セットアップの完了] 画面が表示されます。

注記 ファイアウォールサービスが起動している場合は、インストールの開始前にファイアウォールの設定を確認する画面が表示されます。
設定する場合は [はい] を選択します。すでにファイアウォールを設定している場合、または Windows ファイアウォールを使用しない場合は、[いいえ] を選択してください。

56. [完了] をクリックします。

統合検索サービスのインストールは終了です。

16.3 Web ブラウザーの設定

統合検索サービスを使用するために必要なWebブラウザーの設定をします。

注記 iPad で統合検索サービスを使用することはできません。

補足 同じサーバーですでに Web ブラウザーの設定をした場合は、再度 Web ブラウザーの設定をする必要はありません。

16.3.1 Internet Explorer の設定

統合検索サービスを使用するWebブラウザーがInternet Explorerの場合は、Internet Explorerの設定が必要です。

参照 Internet Explorer の設定については、「13 Web ブラウザーの設定」の「13.1 Internet Explorer の設定」(P.87) を参照してください。

16.3.2 Google Chrome の設定

統合検索サービスを使用するWebブラウザーがGoogle Chromeの場合は、Google Chromeの設定が必要です。

参照 Google Chrome の設定については、「13 Web ブラウザーの設定」の「13.2 Google Chrome の設定」(P.93) を参照してください。

16.3.3 Microsoft Edge の設定

クライアントPCで統合検索サービスを使用するWebブラウザーがMicrosoft Edgeの場合は、Microsoft Edgeの設定が必要です。

参照 Microsoft Edge の設定については、「13 Web ブラウザーの設定」の「13.3 Microsoft Edge の設定」(P.100) を参照してください。

16.4 インストール後の初期設定の操作手順

ここでは、統合検索サービスをインストールしたあとに必要な初期設定の手順を説明します。

注記 設定、入力にあたっての制限事項や補足事項をヘルプでも説明しています。ヘルプの内容も、合わせて確認してください。

16.4.1 作業の概要

インストールの後に、次の操作をします。各操作は、統合検索管理ツールでします。

・ストレージプロキシ起動ユーザーの設定
・リソースの作成
・収集の開始

16.4.2 ストレージプロキシ起動ユーザーの設定

ストレージプロキシはストレージにアクセスするためにストレージにアクセス可能なユーザーで起動する必要があります。ストレージプロキシと別のArcSuiteの共有フォルダーを収集する場合などにこの設定が必要です。

ストレージプロキシの起動ユーザーを設定する

1. ストレージプロキシをインストールした ArcSuite サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. Windows の［スタート］メニューから、［Windows 管理ツール］＞［サービス］を選択します。
   ［サービス］画面が表示されます。
3. ［ArcSuite DocumentGatheringAgent StorageProxy］を右クリックし、ショートカットメニューから、［プロパティ］を選択します。
   ［ArcSuite DocumentGatheringAgent StorageProxy サービスのプロパティ］画面が表示されます。
4. ［ログオン］タブの［アカウント］を選択し、［参照］をクリックします。
   ［ユーザーの選択］画面が表示されます。
5. ［詳細設定］をクリックします。
6. ［共通クエリ］エリア右側の［今すぐ検索］または［検索］をクリックします。
7. 目的のユーザーまたはグループのドメイン、またはワークグループを選択し、［OK］をクリックします。
   「選択するオブジェクト名を入力してください」エリアに選択したユーザー名が表示されます。
8. ［OK］をクリックします。
   ［ArcSuite DocumentGatheringAgent StorageProxy サービスのプロパティ］画面が表示されます。
9. ［パスワード］、および［パスワードの確認入力］に、ユーザーアカウントのパスワードを入力します。
10. ［OK］をクリックします。
    「2.1.2 Windows のサービス起動ユーザーの設定」（P.38）で作成したグループに追加されます。

16.4.3 リソースの作成

リソースを作成します。

1. Web ブラウザーの［アドレス］に ArcSuite の［ポータル］画面の URL を入力します。
   ここでは、「http://arcsuite.example.com/ArcSuite/portal」と入力します。
   ［ログイン］画面が表示されます。

2. ［ユーザー ID］および［パスワード］を入力して、［ログイン］をクリックします。
   ［ポータル］画面が表示されます。

3. 画面右上の［システム管理］リンクをクリックします。
   ［システム管理］画面が表示されます。

4. 左側のシステム管理メニューから、［統合検索サービス］をクリックします。
   ［管理ログイン］画面が表示されます。

5. 管理者ユーザーのユーザー ID およびパスワードを入力して、［ログイン］をクリックします。
   ［リソース一覧］画面が表示されます。

6. ［リソース一覧］画面で、［操作］プルダウンメニューから［追加］を選択します。
   ［リソース設定（追加）］画面が表示されます。

7. ［リソース名］にリソースの名前を入力します。

   注記 ・この項目は、入力が必須です。
   ・スペースだけのリソース名は利用できません。

   補足 ・管理者として追加できるのは、ユーザーアカウントとユーザーロールです。
   ・64 文字以内の文字列を入力します。

8. 収集したドキュメントの登録先を設定します。［登録先サービス ID］の横の（［編集］アイコン）をクリックします。
   ［登録先選択］画面が表示されます。

9. 対象とする登録先の［選択］をクリックします。
   ［リソース設定（追加）］画面で、［登録先サービス ID］、［登録先キャビネット ID］、［登録先ドロワー名］が設定されます。

10. ドキュメントを収集するストレージプロキシを設定します。［ストレージプロキシ］の横の（［編集］アイコン）をクリックします。
    ［ストレージプロキシ / プラグインの選択］画面が表示されます。

11. 収集元とするストレージプロキシの［選択］をクリックします。
    ［リソース設定（追加）］画面で、［ストレージプロキシ］、［プラグイン］が設定されます。

12. 登録するドキュメントのオブジェクトカテゴリーを選択します。

    補足 この設定は、フォーマット設定で登録オブジェクトカテゴリーが設定されていない MIME-TYPE のオブジェクトにだけ有効です。

13. 収集したドキュメントをドキュメント管理サービスに登録するときに、ドキュメントの作成者とするユーザーを指定します。［登録者］の横の（［編集］アイコン）をクリックします。
    ［アドレス帳］画面が表示されます。

14. ［アドレス帳］画面でユーザーを選択し、［追加］をクリックします。
    ［リソース設定（追加）］画面に戻ります。

    参照 詳細については、『アドレス帳のヘルプ』を参照してください。

15. リソースが［収集中］状態のときの収集スケジュールを設定します。［スケジュール］の横の（［編集］アイコン）をクリックします。
［スケジュール設定］画面が表示されます。

16. ［スケジュール設定］画面で次の項目を設定します。
・スケジュールを実行する曜日
・スケジュールの実行時間
・スケジュールの動作

17. ［追加］をクリックします。
［リソース設定（追加）］画面で［スケジュール］が設定されます。

18. ［閉じる］をクリックします。
［リソース設定（追加）］画面に戻ります。

19. ドキュメントのフォーマットを設定します。［フォーマット設定］の横の（［編集］アイコン）をクリックします。
［フォーマット設定］画面が表示されます。

20. フォーマットについて、次の項目を設定します。
・［MIME-TYPE］
・［登録オブジェクトカテゴリ］

補足 インデックス画像を作成する場合、［インデックス画像を作成する］にチェックマークを付けます。

21. ［追加］をクリックします。
［リソース設定（追加）］画面で［フォーマット設定］が設定されます。

注記 ［リソース設定（追加）］画面にすでに登録されている MIME-TYPE だった場合は、設定した内容で上書きされます。

22. ［閉じる］をクリックします。
［リソース設定（追加）］画面に戻ります。

補足 ・動的外部ドキュメントは、属性やコンテントの取得時にオリジナルドキュメントの更新をチェックします。オリジナルが更新されている場合、そのドキュメントの更新処理が行われたあとにクライアントに結果を反映します。このとき、セカンダリーコンテントの生成が指定されているとその生成も行われるため、クライアントに結果が反映されるまでに、時間がかかる場合があります。
・動的外部ドキュメントとして統合検索キャビネットに登録するフォーマットには、ドキュメント情報の更新をしない設定にすることを推奨します。

23. ドキュメント登録時に収集したドキュメントの属性をドキュメント管理サービスのどの属性に割り当てて登録するかを設定します。［属性マッピング］の横の（［編集］アイコン）をクリックします。
［属性マッピング設定］画面が表示されます。

24. ［属性マッピング設定］画面で次の項目を設定します。
・［マッピング元属性名］
・［属性値変換パターン］
・［マッピング先属性名］

25. ［設定］をクリックします。
［リソース設定（追加）］画面に［属性マッピング］が設定されます。

注記 ［リソース設定（追加）］画面にすでに登録されているマッピング元属性名の場合は、設定された内容で上書きされます。

26. ［閉じる］をクリックします。
［リソース設定（追加）］画面に戻ります。

27. [設定] をクリックします。
リソースが登録されます。
[リソース設定（表示）] 画面が表示されます。
同時に別ウィンドウが開き、ストレージプロキシ管理ツールの［ストレージ情報］画面を表示するためのログイン画面が表示されます。

28. ストレージプロキシ管理ユーザーの［ユーザー ID］と［パスワード］を入力して、［ログイン］をクリックします。
［リソース設定（表示）］画面に表示されているリソースの種類に応じて、表示される画面が異なります。
ストレージタイプが NTFS の場合は、［ストレージ情報］画面が表示されます。

参照 ［ストレージ情報］画面での操作については、「ストレージタイプが NTFS の場合の操作」（P.191）を参照してください。

ストレージタイプが NTFS の場合の操作

1. 収集する位置を指定します。

(1) [収集位置] の［参照］をクリックします。
［コンテナ構成情報］画面が表示されます。

(2) 収集元のコンテナをクリックします。
選択されているコンテナが反転表示されます。

(3) [追加] をクリックします。
追加を確認する画面が表示されます。

(4) 内容を確認し、[OK] をクリックします。

(5) すべてのコンテナを指定するまで、手順 2 ～ 4 を繰り返します。

補足 ［+］をクリックするとコンテナを展開できます。［−］をクリックすると展開されたコンテナが縮小されます。

2. 収集を優先する位置を指定します。

(1) [収集優先位置] の［参照］をクリックします。
［コンテナ構成情報］画面が表示されます。

(2) 収集を優先するコンテナをクリックします。
選択されているコンテナが反転表示されます。

(3) [追加] をクリックします。
追加を確認する画面が表示されます。

(4) 内容を確認し、[OK] をクリックします。

(5) すべてのコンテナを指定するまで、手順 2 ～ 4 を繰り返します。

3. 登録を除外する位置を指定します。

(1) [登録除外位置] の［参照］をクリックします。
［コンテナ構成情報］画面が表示されます。

(2) ［+］と［−］を使い、登録を除外するコンテナを表示します。

(3) 登録を除外するコンテナをクリックします。
選択されているコンテナが反転表示されます。

(4) [追加] をクリックします。
追加を確認する画面が表示されます。

(5) 内容を確認し、[OK] をクリックします。

(6) すべてのコンテナを指定するまで、手順 2 ～ 5 を繰り返します。

補足 登録を除外する位置には、手順 1 で指定した収集位置に含まれるコンテナを指定します。なお、収集位置で E ドライブを指定したときに、登録除外位置に E ドライブを指定するなど、収集位置で指定したコンテナそのものは指定できません。

4. [コンテナ構成情報] 画面が表示されている場合は、[閉じる] をクリックします。

5. 登録を除外する名称のパターンを指定します。

6. 収集を除外するコンテンツやコンテナの名称を指定します。

補足
- 末尾に「* (アスタリスク)」を付けると、前方一致での指定ができます。また、改行すると、複数のパターンを指定できます。
- 初期値として設定されている「~ (チルダ)」、「$ (ダラー)」、および「* (アスタリスク)」の値は、現在開いているテンポラリーのファイルの収集を除外します。
- テンポラリーファイルをすべて除外する場合は、空欄にします。

7. 登録文書ファイルタイプを指定します。

8. 左側の登録対象とするタイプに収集しない文書のタイプが含まれている場合は、収集しない文書のタイプをクリックし、[削除] をクリックします。

9. 文書タイプを追加または変更する場合は、[文書タイプの編集] をクリックします。

10. 登録ファイルの最大サイズを、バイト単位で入力します。

補足
- 最大サイズを超える容量のファイルは、登録されません。
- 登録ファイルの最大サイズの初期値は 10,000,000 バイトです。

11. 収集負荷を、[普通]、[低負荷]、または [超低負荷] から選択します。

12. [設定] をクリックします。
確認画面が表示されます。

13. [OK] をクリックします。
ストレージの情報が設定されます。

16.4.4 収集の開始

リソースごとに、収集の開始を指示できます。ここでは、収集の開始手順を説明します。

1. [リソース一覧] 画面で、操作対象のリソースのチェックボックスにチェックマークを付けます。

2. [操作] プルダウンメニューから、[収集開始] を選択します。
収集が始まります。

16.4.5 収集についての注意事項

ここでは、収集についての主な注意事項を説明します。

名称について

使用できる文書名の最大文字数は、UTF-8でエンコードされたときに800バイト以内です。
UTF-8でエンコードされたときに2000バイト以内のパスが利用できます。

収集するファイルの形式について

収集するファイル形式についての注意事項を次に示します。

注記
- NTFS のリパースポイント機能を使用した位置の収集は、できません。
- NTFS のショートカットは、ファイルとして扱われます。参照先は収集しません。
- DMS のコンテンツに付加されるプレビューイメージは、取得できません。
- ファイル名、パス、属性として使用できる文字には、次の制限があります。
- Java™ が使用している Unicode と、MS932 および EUC の間で相互に変換できない文字は、使用できません。
- 変換ルールは、稼働環境ごとの Java の実装に依存します。

補足 コンテナ名または文書名に「/ （スラッシュ）」が含まれる場合は、「_ （アンダースコア）」に置き換えられます。

性能について

収集対象となるストレージ上にウイルス対策ソフトウェアやほかのソフトウェアなどがインストールされ運用している場合、それらがインストールされ運用していない場合に比較して、性能が発揮できない場合があります。

補足 ほかのソフトウェアの中には、アンインストールしないと機能を停止できないものがあります。

17 ArcSuiteの起動と終了

ArcSuiteの起動と終了の方法を説明します。起動時にはログイン、終了時にはログアウトの操作が必要です。

17.1　ArcSuite の起動（ログイン）

ArcSuiteを起動するには、まずArcSuiteにログインする必要があります。ログインする手順について説明します。

ArcSuite にログインする

1. Web ブラウザーを起動します。
2. Web ブラウザーの［アドレス］に ArcSuite の［ポータル］画面の URL を入力します。
   ここでは、「http://arcsuite.example.com/ArcSuite/portal」と入力します。
   ［ログイン］画面が表示されます。
3. ［ユーザー ID］にユーザー ID を入力します。
4. ［パスワード］にパスワードを入力します。
5. ［ログイン］をクリックします。
   ログインに成功すると、［ポータル］画面が表示されます。

補 足
- ログインに失敗した場合には、［ポータル］画面は表示されずに、エラーメッセージが表示されます。再度、手順 3 から操作を繰り返します。
- ArcSuite では各種コンポーネントに対して共通ログイン機能が採用されています。そのため、あるコンポーネントにログインすれば、管理ツール以外のコンポーネントも利用できます。
  ただし、異なるシステムに存在するコンポーネントを使用する場合、および管理ツールを使用する場合は、再度ログインする必要があります。
- ログインを中断する場合は、Web ブラウザーを閉じます。

17.2 ArcSuite の終了（ログアウト）

ArcSuiteを終了するには、ArcSuiteからログアウトする必要があります。ログアウトする手順について説明します。

ArcSuite からログアウトする

1. ［ポータル］画面で、［ログアウト］アイコンをクリックします。
   ［ログアウト］画面が表示されます。
2. ログインしていたコンポーネントすべてのログアウト処理が成功していることを確認します。
   ログアウトに成功したかどうかは、コンポーネント名の左側のアイコンで確認できます。

   補足
   - ログアウトに失敗しているコンポーネントがある場合、コンポーネント名の右側には［再ログアウト］が表示されています。
   - ［再ログアウト］をクリックします。
   - ［ポータル］画面に戻るには、［ポータル］アイコンをクリックします。
3. ［閉じる］をクリックします。

18 動作確認

ArcSuiteのセットアップ後の動作確認について説明します。

18.1　動作確認の概要

ArcSuiteの実際の運用を始める前に、セットアップが正しく完了し、ファイルフォーマット変換サービスが正常に動作することを確認します。
ファイルフォーマット変換サービスの正常な動作は、ドキュメントスペースに登録したドキュメントが、フォーマット変換された表示になっていることで確認できます。
なお、本書では、動作確認を行うWebブラウザーとしてInternet Explorerを使用する手順で説明します。

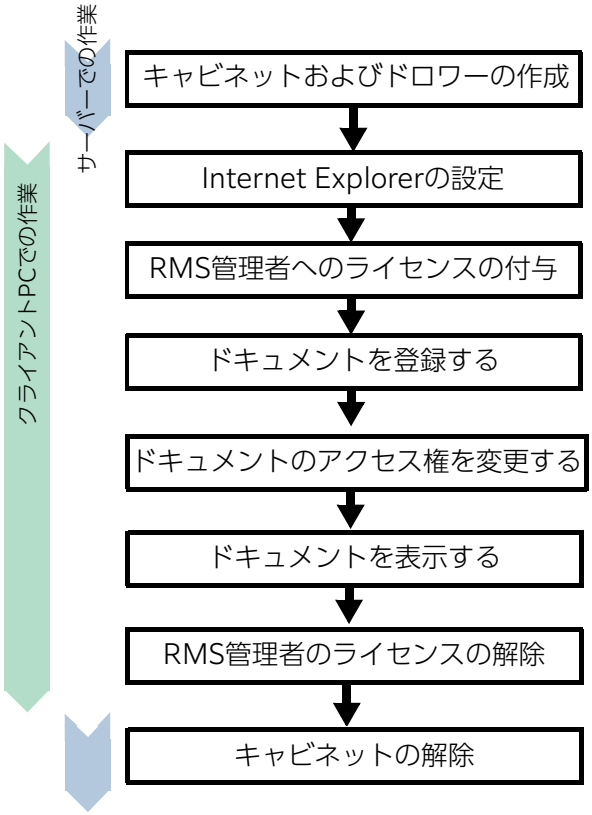
18.1.1　準備

ArcSuiteでの動作確認には、次のものを準備します。

・ArcSuite をインストールしたサーバー
・ArcSuite にアクセスするクライアント PC
・「ArcSuite 4.0 インストール」インストールメディア

18.1.2　動作確認の流れ

次のような流れで動作確認を行います。



参照 ⇨「18.2.1 キャビネットおよびドロワーの作成」(P.199)
参照 ⇨「18.2.2 Internet Explorerの設定」(P.201)
参照 ⇨「18.2.3 RMS管理者へのライセンスの付与」(P.201)
参照 ⇨「ドキュメントを登録する」(P.202)
参照 ⇨「ドキュメントのアクセス権を変更する」(P.202)
参照 ⇨「ドキュメントを表示する」(P.203)
参照 ⇨「18.2.5 RMS管理者のライセンスの解除」(P.203)
参照 ⇨「18.2.6 キャビネットの削除」(P.204)

18.2　動作確認

18.2.1　キャビネットおよびドロワーの作成

ドキュメントスペースに、ドキュメントを登録するための、データベース表領域、キャビネット、およびドロワーを作成します。

データベース表領域を作成する

ArcSuiteをインストールしたサーバーに、ドキュメント管理サービス管理アプリケーションを使用して、データベース表領域を作成します。

1. ArcSuite サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。

   補足　2 台以上で構成されている場合は、リポジトリーサーバーにサインインします。

2. C ドライブに、次のフォルダーを作成します。
   「C:¥Temp¥ArcSuite」

   補足　動作確認時は、このフォルダーにデータベース表領域のデータを格納します。

3. デスクトップの［ドキュメント管理サービス管理アプリケーション］ショートカットアイコンをダブルクリックします。
   ［ログイン］画面が表示されます。

4. RMS 管理者の［ユーザー ID］と［パスワード］を入力します。

5. ［ログイン］をクリックします。

6. ［ドキュメント管理サービス管理アプリケーション］の［サービス］タブのページで、左側の［階層ツリー表示］エリアから［サービス］を選択します。

7. メニューバーの［サービス操作］＞［DB 表領域］＞［DB 表領域の作成］を選択します。
   ［DB 表領域の作成］画面が表示されます。

8. ［表領域名］、および［表領域ファイルサイズ］に、次の値を入力します。

項目	値
表領域名	test
表領域ファイルサイズ	50
表領域データファイルパス	手順2で作成したフォルダー内に、［表領域名］を指定します。 「C:¥Temp¥ArcSuite¥test」

9. ［OK］をクリックします。
   手順 8 で、［表領域データファイルパス］として設定したフォルダー内に、［表領域］の名前のファイル「test.dbf」が作成されます。

キャビネットを作成する

1. ［ドキュメント管理サービス 管理アプリケーション］の［サービス］タブのページで、左側の［階層ツリー表示］エリアから［サービス］を選択します。

2. メニューバーの［サービス操作］＞［キャビネットの作成］を選択します。

3. ［標準キャビネット］を選択します。

4. [OK] をクリックします。
[キャビネットの作成] 画面が表示されます。

5. [全般] タブの各項目に、次の値を入力します。

項目	値
キャビネット名	test
キャビネット ID	test
登録予定件数	1000
表領域名	test
ファイルフォーマット変換サービス	「キャビネット」の「ファイルフォーマット変換」を選択します。
フォルダ階層限界値	指定しません。
キャビネット管理者	
注釈	
操作制約パターンラベル	
長期署名方式	

6. [OK] をクリックします。
エディション管理をしないことを確認する画面が表示されます。

7. [はい] をクリックします。
指定した条件でキャビネットが作成され、キャビネット作成が成功したことを示す画面が表示されます。

8. [OK] をクリックします。
[サービス] タブに戻ります。

ドロワーを作成する

1. キャビネット一覧が表示された状態で、左側のツリーまたは右側のテーブルに一覧されるキャビネットから、[test] キャビネットを選択します。

2. メニューバーの [キャビネット操作] > [ドロワーの作成] を選択します。
[ドロワーの作成] 画面－ [全般] タブのページが表示されます。

3. [全般] タブの各項目に、次の値を入力します。

項目	値
ドロワー名	testDW
ストレージパス	「データベース表領域を作成する」（P.199） 手順2で作成したフォルダー内に、[ドロワー名] を指定します。 「C:¥Temp¥ArcSuite¥testDW」
注釈	指定しません。

4. [OK] をクリックします。
指定した条件で、ドロワーが作成され、ドロワー作成が成功したことを示す画面が表示されます。

5. [OK] をクリックします。
[ドキュメント管理サービス 管理アプリケーション] の [サービス] タブのページに戻ります。

キャビネットのモードを変更する

キャビネットとドロワーを作成したあと、キャビネットを通常モードに変更します。

1. キャビネット一覧が表示された状態で、左側のツリーまたは右側のテーブルに一覧されるキャビネットから、[test] キャビネットを選択します。
2. メニューバーの［キャビネット操作］＞［キャビネットモード変更］を選択します。
   ［キャビネットモード変更］画面が表示されます。
3. ［はい］をクリックします。
   キャビネットのモードが通常モードに変更されます。

18.2.2 Internet Explorer の設定

ArcSuiteにアクセスするクライアントPCで、Internet Explorerの設定をします。

セットアップで、すでにInternet Explorerの設定がすんでいる場合は、次の「18.2.3 RMS管理者へのライセンスの付与」（P.201）に進みます。

参照 Internet Explorer の設定については、「13.1 Internet Explorer の設定」（P.87）を参照してください。

18.2.3 RMS 管理者へのライセンスの付与

ドキュメントスペースにドキュメントを登録して表示するために、RMS管理者に一時的にライセンスを付与します。動作確認が完了したら、ライセンスを解除します。

1. リソース管理アプリケーションを起動します。

   参照 リソース管理アプリケーションの起動方法については、「リソース管理アプリケーションを起動する手順」（P.126）を参照してください。

2. ［ライセンス編集］をクリックします。
   ［ライセンス編集］画面が表示されます。
3. ライセンスを編集するドキュメントスペースをクリックします。ここでは、［ドキュメントスペース(arcsuite)］をクリックします。
   ［ライセンス編集用ユーザー検索］画面が表示されます。
4. 検索する条件を選択します。指定しないこともできます。
5. ［ライセンス非保持者のみ］を選択して、［検索］をクリックします。
   ［ライセンス編集用検索結果］画面が表示されます。
6. RMS 管理者のチェックボックスにチェックマークを付け、［ライセンス付与］をクリックします。
   確認画面が表示されます。
7. ［付与］をクリックします。
   ［ライセンス付与結果］画面が表示されます。
8. ［OK］をクリックします。
9. ［戻る］をクリックします。

18.2.4 ドキュメントスペースの確認

クライアントPCにサインインし、ドキュメントスペースからドキュメントを登録します。そのあと、正常に表示されることを確認します。

ドキュメントを登録する

1. クライアント PC に、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. 「ArcSuite 4.0 インストール」インストールメディアを、ドライブにセットします。
3. インストールメディアにある次のフォルダーを、デスクトップなどにコピーします。
   「{インストールメディア} :¥SampleData」
4. コピーした「SampleData」フォルダーに、次のファイルがあることを確認します。
   - FXSampleDocuWorks.xdw
   - FXSamplePDF.pdf
   - FXSampleExcel.xlsx
   - FXSampleWord.docx
   - FXSamplePowerPoint.pptx
   - FXSampleTIFFa4.tif
5. Web ブラウザーを起動します。
6. Web ブラウザーの［アドレス］に、［ポータル］画面の URL を入力します。ここでは、「http://arcsuite.example.com/ArcSuite/portal」と入力します。
   ［ログイン］画面が表示されます。
7. RMS 管理者の［ユーザー ID］と［パスワード］を入力します。
   ［ポータル］画面が表示されます。
8. ドキュメントスペースのリンクをクリックします。
9. 左側の［ツリー表示］エリアで、「test」キャビネットの「testDW」ドロワーを選択します。
10. デスクトップにある「SampleData」フォルダーをドラッグし、ドキュメントスペースにドロップします。
    「SampleData」フォルダーが登録されます。

ドキュメントのアクセス権を変更する

ドキュメントのアクセス権から「印刷権」を外します。

1. ［ドキュメント一覧］画面の［リスト表示］エリアで、アクセス権を変更するドキュメントのチェックボックスにチェックマークを付けます。
2. ［編集］－［アクセス権変更］を選択します。
3. ［コンテント］の［印刷］チェックボックスのチェックマークを外し、［変更］をクリックします。
4. すべてのドキュメントについて、手順 1 ～ 3 の操作を繰り返し、アクセス権を変更します。

ドキュメントを表示する

アクセス権の「印刷権」が外れているドキュメントは、印刷できないDocuWorks文書に自動で変換されます。印刷できないDocuWorks文書が表示されることで、ファイルフォーマット変換サービスが正常に動作していることを確認できます。

1. [ドキュメント一覧] 画面の [リスト表示] エリアで、表示するドキュメントのチェックボックスにチェックマークを付けます。
2. [表示] − [コンテント表示] を選択します。
3. [コンテント表示] 画面で次のことを確認します。
   - DocuWorks 文書が表示されている
   - [印刷] がグレーアウトで使用できない
   - 文書の中央に「Confidential」がスタンプされている
4. すべてのドキュメントについて、手順 1 ～ 3 の操作を繰り返し、ドキュメントの表示を確認します。

18.2.5 RMS 管理者のライセンスの解除

ドキュメントの表示を確認したら、RMS管理者に一時的に付与したライセンスを解除します。

1. リソース管理アプリケーションを起動します。

   参照 リソース管理アプリケーションの起動方法については、「リソース管理アプリケーションを起動する手順」(P.126)を参照してください。

2. [ライセンス編集] メニューをクリックします。
   [ライセンス編集] 画面が表示されます。
3. ドキュメントスペースのリンクをクリックします。
   [ライセンス編集用ユーザー検索] 画面が表示されます。
4. 検索する条件を選択します。指定しないこともできます。
5. [ライセンス保持者のみ] を選択して、[検索] をクリックします。
   [ライセンス編集用検索結果] 画面が表示されます。
6. RMS 管理者のチェックボックスにチェックマークを付け、[ライセンス解除] をクリックします。
   確認画面が表示されます。
7. [解除] をクリックします。
   [ライセンス解除結果] 画面が表示されます。
8. [OK] をクリックします。
9. [戻る] をクリックします。

18.2.6 キャビネットの削除

ドキュメントスペースに登録した、表領域、キャビネット、およびドロワーを削除します。

1. ArcSuite サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
   補足 2 台以上で構成されている場合は、リポジトリーサーバーにサインインします。
2. 「ドキュメント管理サービス 管理アプリケーション デスクトップ版」を終了していた場合、デスクトップの「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション」のショートカットアイコンをダブルクリックします。
   [ログイン] 画面が表示されます。
3. RMS 管理者の［ユーザー ID］と［パスワード］を入力します。
4. [ログイン] をクリックします。
5. サービスの一覧で、[test] キャビネットを選択します。
6. メニューバーの［キャビネット操作］＞［キャビネットモード変更］を選択します。
   [キャビネットモード変更] 画面が表示されます。
7. [他のユーザーの操作を中断し、強制的にモードを設定する] を選択して、[はい] をクリックします。
   キャビネットのモードがメンテナンスモードに変更されます。
8. サービスの一覧で、[test] キャビネットを選択します。
9. [キャビネット操作] ＞［キャビネット削除］を選択します。
   [キャビネットの削除] 画面が表示されます。
10. [キャビネットを強制的に削除する] にチェックマークを付けて、[はい] をクリックします。
11. [キャビネットの削除] 画面を表示したまま、「ストレージパス」に表示されたフォルダーを削除します。
12. [キャビネットの削除] 画面で［OK］をクリックします。
13. メニューバーの［サービス操作］＞［DB 表領域］＞［DB 表領域の削除］を選択します。
    確認画面が表示されます。
14. 削除する表領域名に「test」と入力します。
    補足 「データベース表領域を作成する」（P.199）の手順 8 で設定した名前です。
15. [OK] をクリックします。
    データベース表領域の削除を確認する画面が表示されます。
16. [はい] をクリックします。
    データベース表領域が削除され、処理結果を確認する画面が表示されます。
17. [OK] をクリックします。
    ［ドキュメント管理サービス 管理アプリケーション］の［サービス］タブのページに戻ります。
18. [サービス操作] ＞［閉じる］を選択します。
19. [はい] を選択します。
20. 「データベース表領域を作成する」（P.199）の手順 2 で作成した「C:¥Temp¥ArcSuite」フォルダーを削除します。

19 ライセンス認証

ArcSuiteのライセンス認証について説明します。

19.1 ライセンス認証

ArcSuiteは、ライセンスの認証が必要なソフトウェアです。ライセンスの認証はインストール時に実行されますが、インストール後に実行することもできます。ライセンスは、インストールしただけでは有効になりません。ライセンスを認証しないまま使い続けると、インストールしてから30日後にソフトウェアが使用できなくなります。
ArcSuiteのインストールが終了したら、ライセンスを認証して、ライセンスを有効にしてください。

19.1.1 ArcSuite に必要なライセンス

ArcSuiteに必要なライセンスは、次のとおりです。

・ArcSuite サーバーライセンス

・ArcSuite クライアントアクセスライセンス

ライセンスを認証するには、次のライセンスアクティベーターを使用します。

・ArcSuite ライセンスアクティベーター
このライセンスアクティベーターで、「ArcSuite サーバーライセンス」と「ArcSuite クライアントアクセスライセンス」を認証できます。
ただし、ライセンスの認証は個別に実施します。認証するのに、どちらが先という順番はありません。

19.1.2 ライセンスの認証方法

ライセンスを認証する方法には、次の2種類があります。

インターネットを使用する

インターネットを使用してライセンスを認証します。通常はこの方法でライセンスを認証します。
インターネットを使用してライセンスを認証するには、ライセンス認証するArcSuiteをインストールしたサーバーを、インターネットに接続します。

注記 ・https プロトコル（SSL）でライセンス認証サーバーと通信できることが必要です。
・Proxy サーバーを使用する場合は、[インターネット オプション] ダイアログボックスで Proxy サーバーを設定します。

ファイルを使用する

インターネットを使用してライセンスの認証ができない場合は、「ライセンスファイル」を使用してライセンスを認証します。
「ライセンスファイル」は、「ライセンス認証情報ファイル」を出力して「富士フイルムBIダイレクト」にアップロードすることでダウンロードできます。ダウンロードした「ライセンスファイル」を使用してライセンスを認証します。

19.2 ArcSuite のライセンス認証

ArcSuiteライセンスアクティベーターを使用して、ライセンスを認証します。ライセンスを認証する方法には、次の2つの方法があります。

・インターネットを使用してライセンスを認証する
・ファイルを使用してライセンスを認証する

19.2.1 インターネットを使用してライセンスを認証する

ArcSuiteのインストールが完了したあと、インターネットを使用してライセンスを認証する方法について説明します。

1. ArcSuite サーバーで、Windows の［スタート］メニューから、［FUJIFILM ArcSuite］＞［ライセンスアクティベーター］を選択します。
   ライセンスアクティベーターの画面が表示されます。
2. ［高度な機能］をクリックします。
   機能を選択する画面が表示されます。
3. ［ライセンス認証］を選択し、［次へ］をクリックします。
   ライセンス認証するソフトウェアを選択する画面が表示されます。
4. ライセンス認証するソフトウェアにチェックマークを付け、［次へ］をクリックします。
   認証方法を選択する画面が表示されます。

   補足 ［全選択／全解除］にチェックマークを付けると、すべてのソフトウェアを選択できます。また、チェックマークを外すと、選択しているソフトウェアを未選択の状態にできます。
5. ［インターネットを使ってライセンス認証を行う（推奨）］を選択し、［次へ］をクリックします。
   「富士フイルム BI ダイレクト」のアカウント情報を入力する画面が表示されます。
6. 「富士フイルム BI ダイレクト」でユーザー登録をした［メールアドレス］および［パスワード］を入力し、［次へ］をクリックします。
   ライセンス認証が開始します。処理が終了すると、ライセンス認証の完了画面が表示されます。

   補足 ユーザー登録をしていない場合は、［会員登録］をクリックし、表示された［富士フイルム BI ダイレクト ユーザー登録］画面から、ユーザー登録をします。

   参照 「富士フイルム BI ダイレクト」でのユーザー登録の方法については、「4.1.1 「富士フイルム BI ダイレクト」でユーザー登録をする」（P.57）を参照してください。
7. ［完了］をクリックします。
8. ［終了］をクリックします。
   確認画面が表示されます。
9. ［はい］をクリックします。
   ライセンスアクティベーターが終了します。

クライアントアクセスライセンスまたは言語ライセンスを追加する

クライアントアクセスライセンスまたは言語ライセンスを追加するときには、次の手順を実行します。

1. ArcSuite サーバーで、Windows の［スタート］メニューから、［FUJIFILM ArcSuite］＞［ライセンスアクティベーター］を選択します。
ライセンスアクティベーターが表示されます。

2. ［ライセンス登録］をクリックします。
シリアル番号を入力する画面が表示されます。

3. 弊社より発行されたクライアントアクセスライセンスまたは言語ライセンスのシリアル番号を入力します。テキストファイルで発行された場合は、格納場所を指定してファイルをインポートします。

補足 ・シリアル番号の追加および削除は、［追加］、［削除］をクリックして実行します。
・指定する格納場所のパスには、マルチバイト文字および Windows のフォルダーに指定できない文字は使用できません。

4. ［次へ］をクリックします。
認証方法を選択する画面が表示されます。

5. ［インターネットを使ってライセンス認証を行う（推奨）］を選択し、［次へ］をクリックします。
「富士フイルム BI ダイレクト」のアカウント情報を入力する画面が表示されます。

6. 「富士フイルム BI ダイレクト」でユーザー登録をした［メールアドレス］および［パスワード］を入力し、［次へ］をクリックします。
ライセンス認証が開始します。処理が終了すると、ライセンス認証の完了画面が表示されます。

補足 ユーザー登録をしていない場合は、［会員登録］をクリックし、表示された［富士フイルム BI ダイレクト ユーザー登録］画面から、ユーザー登録をします。

参照 「富士フイルム BI ダイレクト」でのユーザー登録の方法については、「4.1.1 「富士フイルム BI ダイレクト」でユーザー登録をする」（P.57）を参照してください。

7. ［完了］をクリックします。

8. ［終了］をクリックします。
確認画面が表示されます。

9. ［はい］をクリックします。
ライセンスアクティベーターが終了します。
言語ライセンスを追加する場合は、ここで終了です。クライアントアクセスライセンスを追加する場合は、手順 10 に進みます。

10. Windows の［スタート］メニューから、［Windows システムツール］＞［コマンドプロンプト］を右クリックし、［その他］＞［管理者として実行］を選択します。
［管理者：コマンド プロンプト］画面が表示されます。

11. クライアントアクセスライセンスを反映します。

(1) 次のコマンドを入力して <Enter> キーを押します。

```
cd /d {ArcSuite をインストールしたドライブ}:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite¥Service¥bin
```

(2) 次のコマンドを入力して <Enter> キーを押します。

```
calset.bat
```

現在設定されているクライアントアクセスライセンスの情報と、設定するクライアントアクセスライセンスの情報が表示されます。

```
［現在設定されている CAL］
ベーシック CAL: 無制限
ドキュメントスペース CAL: 1000
コラボスペース CAL: 1003
ワークフローCAL: 1000

［設定後の CAL］
ベーシック CAL: 無制限
ドキュメントスペース CAL: 1500
コラボスペース CAL: 1003
ワークフローCAL: 1000

設定を行いますか？(y/n)
```

(3) 「y」を入力して、<Enter> キーを押します。
「設定が完了しました。」のメッセージが表示されます。

19.2.2 ファイルを使用してライセンスを認証する

ライセンスファイルを使用してライセンスを認証する方法について説明します。

ライセンスファイルでライセンスを認証する流れ

Step1：
ライセンス認証情報ファイルを出力する

ライセンスアクティベーターから、「ライセンス認証情報ファイル」を出力します。

参照 ⇨「ライセンス認証情報ファイルを出力する」(P.210)

Step2：
ライセンス認証情報ファイルをアップロードする

出力したライセンス認証情報ファイルを、「富士フイルムBIダイレクト」にアップロードします。

参照 ⇨「ライセンス認証情報ファイルをアップロードする」(P.210)

Step3：
ライセンスファイルをダウンロードする

「富士フイルムBIダイレクト」から送付されたメールのURLにアクセスし、ライセンスファイルをダウンロードします。

参照 ⇨「ライセンスファイルをダウンロードする」(P.211)

Step4：
ライセンスファイルを使用してライセンスを認証する

ダウンロードしたArcSuiteライセンスファイルを、ライセンスアクティベーターにインポートし、ライセンスを認証します。

参照 ⇨「ライセンスファイルを使用してライセンスを認証する」(P.211)

ライセンス認証情報ファイルを出力する

1. ArcSuite サーバーで、ライセンスアクティベーターを起動します。

   参照 ライセンスアクティベーターの起動方法については、「19.2.1 インターネットを使用してライセンスを認証する」（P.207）を参照してください。

2. [高度な機能] をクリックします。
   機能を選択する画面が表示されます。

3. [ライセンス認証] を選択し、[次へ] をクリックします。
   ライセンス認証するソフトウェアを選択する画面が表示されます。

4. ライセンスを認証するソフトウェアにチェックマークを付け、[次へ] をクリックします。
   認証方法を選択する画面が表示されます。

   補足 [全選択／全解除] にチェックマークを付けると、すべてのソフトウェアを選択できます。また、チェックマークを外すと、選択しているソフトウェアを未選択の状態にできます。

5. [ファイルを使ってライセンス認証を行う] を選択し、[次へ] をクリックします。
   「富士フイルム BI ダイレクト」のアカウント情報を入力する画面が表示されます。

6. 「富士フイルム BI ダイレクト」でユーザー登録をした [メールアドレス] および [パスワード] を入力し、[次へ] をクリックします。
   ライセンス認証情報ファイルの出力先を指定する画面が表示されます。

   参照 「富士フイルム BI ダイレクト」でのユーザー登録の方法については、「4.1.1 「富士フイルム BI ダイレクト」でユーザー登録をする」（P.57）を参照してください。

7. [参照] をクリックし、ライセンス認証情報ファイルの出力先とファイル名を指定し、[次へ] をクリックします。
   ライセンス認証情報ファイルが指定した出力先、およびファイル名で出力されます。
   完了画面が表示されます。

   補足 初期値の出力先は、ライセンスアクティベーターを起動している ArcSuite のデスクトップです。ファイル名は「activationinfor.dat」で設定されます。

8. [完了] をクリックします。

9. [終了] をクリックします。
   確認画面が表示されます。

10. [はい] をクリックします。
    ライセンスアクティベーターが終了します。

ライセンス認証情報ファイルをアップロードする

1. Web ブラウザーを起動します。

2. Web ブラウザーの [アドレス] に、「富士フイルム BI ダイレクト」のファイルアップロードのページの URL を入力します。
   https://direct-fb.fujifilm.com/ap1/sc/license/ja/file_act/index.html
   「富士フイルム BI ダイレクト」のログイン画面が表示されます。

3. [ユーザー ID（メールアドレス）] と [パスワード] を入力し、[ログイン] をクリックします。
   ファイルアップロードのページが表示されます。

4. [認証] タブが選択されていることを確認し、[参照] をクリックします。

5. 出力したライセンス認証情報ファイルを選択し、[開く] をクリックします。

補足 ライセンス認証情報ファイルを直接ドラッグ＆ドロップしてアップロードすることもできます。

6. ファイル欄に選択したファイルが表示されていることを確認し、[送信] をクリックします。
[ファイルの処理を受け付けました。] というメッセージが表示されます。

ライセンスファイルをダウンロードする

ライセンス認証処理の完了を知らせるメールを受信したら、「富士フイルムBIダイレクト」からライセンスファイルをダウンロードします。

1. 「富士フイルム BI ダイレクト」から送信された、ライセンス認証処理の完了を知らせるメールを受信します。

2. メールに記載されている [処理結果一覧] 画面の URL をクリックし、Web ブラウザーで富士フイルム BI ダイレクトの [処理結果一覧] 画面を表示します。

3. メールに記載されている受付番号の [結果] 欄が「OK」であることを確認し、[ダウンロード] をクリックします。
ライセンスファイルがダウンロードされます。

ライセンスファイルを使用してライセンスを認証する

1. ライセンスアクティベーターを起動します。

参照 ライセンスアクティベーターの起動方法は、「19.2.1 インターネットを使用してライセンスを認証する」（P.207）を参照してください。

2. [高度な機能] をクリックします。
機能を選択する画面が表示されます。

3. [ライセンスファイルインポート] を選択し、[次へ] をクリックします。
ライセンスファイルを指定する画面が表示されます。

4. 次のように操作します。

(1) [参照] をクリックし、「ライセンスファイルをダウンロードする」（P.211）でダウンロードしたライセンスファイルを指定します。

(2) [次へ] をクリックします。
ライセンス認証が開始します。処理が終了すると、ライセンス認証の完了画面が表示されます。

5. [完了] をクリックします。

6. [終了] をクリックします。
確認画面が表示されます。

7. [はい] をクリックします。
ライセンスアクティベーターが終了します。

19.3 ArcSuite ライセンス状態の表示

ライセンスの認証状態を確認できます。
ライセンスの状態には、次の3つがあります。

・認証
ライセンスが認証されている状態です。

・未認証
ライセンスが認証されていない状態です。

・無効
インストールからライセンス認証を 31 日以上実行しなかった状態です。

注記 インストールしてから 31 日を過ぎると、ライセンスは無効になり、ArcSuite が使用できなくなります。

補足 日にちのカウントは、インストールした日を 1 日めとして、サーバーの日時カウントで 0 時を過ぎると 2 日めになります。

19.3.1 ライセンスの状態を確認する

ライセンスの認証状態を確認する手順を説明します。

1. ライセンスアクティベーターを起動します。

   参照 ライセンスアクティベーターの起動方法は、「19.2.1 インターネットを使用してライセンスを認証する」(P.207)を参照してください。

2. [ライセンス状態] で、ライセンスの認証状態を確認します。

3. [終了] をクリックします。
   確認画面が表示されます。

4. [はい] をクリックします。
   ライセンスアクティベーターが終了します。

19.4 ArcSuite ライセンスの削除

不要なソフトウェアのライセンスを削除する手順について説明します。
ライセンスを削除すると、ライセンス認証が解除されると同時に、シリアル番号が削除されます。
インストールしたときに不要のソフトウェアをインストールしてしまったり、運用を開始したあとで使わなくなったソフトウェアがあったりした場合は、ライセンス認証を削除します。
ライセンスの削除は、ライセンスの状態が「認証済」のときに実行できます。ライセンスの状態が「未認証」または「無効」の場合は、「19.6 シリアル番号の削除」(P.219)を参照してシリアル番号を削除してください。

注記 ライセンスを削除をすると、そのソフトウェアを使用できなくなります。

ライセンスを削除するには、次の2つの方法があります。

・インターネットを使用してライセンスを削除する
・ファイルを使用してライセンスを削除する

補足 通常は、インターネットを使用してライセンスを削除します。インターネットを使用してライセンスを削除できない場合は、ファイルを使用してライセンスを削除してください。

19.4.1 インターネットを使用してライセンスを削除する

インターネットを使用してライセンスを削除する手順について説明します。

1. ArcSuite サーバーで、ライセンスアクティベーターを起動します。

   参照 ライセンスアクティベーターの起動方法については、「19.2.1 インターネットを使用してライセンスを認証する」(P.207)を参照してください。

2. [ライセンス削除] をクリックします。
   ライセンスを削除するソフトウェアを選択する画面が表示されます。

3. ライセンスを削除するソフトウェアにチェックマークを付け、[次へ] をクリックします。
   ライセンス認証の解除方法を選択する画面が表示されます。

   補足 [全選択／全解除] にチェックマークを付けると、すべてのソフトウェアを選択できます。また、チェックマークを外すと、選択しているソフトウェアを未選択の状態にできます。

4. [インターネットを使ってライセンス認証の解除を行う（推奨）] を選択し、[次へ] をクリックします。
   ライセンス認証の解除とシリアル番号の削除が開始されます。処理が終了すると、完了画面が表示されます。

5. [完了] をクリックします。

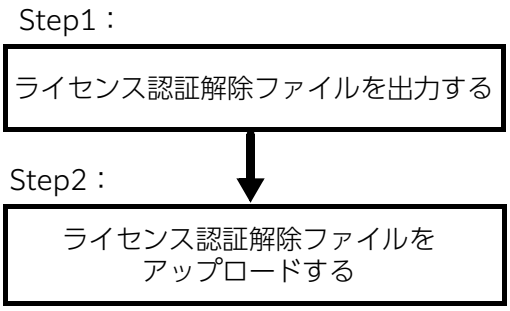
6. [終了] をクリックします。
   確認画面が表示されます。

7. [はい] をクリックします。
   ライセンスアクティベーターが終了します。

19.4.2 ファイルを使用してライセンスを削除する

ライセンス認証解除ファイルを使用してライセンスを削除する手順について説明します。

ファイルでライセンスを削除する流れ



ライセンスアクティベーターから、[ライセンス削除] を選択して「ライセンス認証解除ファイル」を出力します。

参照 ⇨「ライセンス認証解除ファイルを出力する」(P.214)

出力したライセンス認証解除ファイルを、「富士フイルムBIダイレクト」にアップロードします。

参照 ⇨「ライセンス認証解除ファイルをアップロードする」(P.215)

ライセンス認証解除ファイルを出力する

1. ArcSuite サーバーで、ライセンスアクティベーターを起動します。

参照 ライセンスアクティベーターの起動方法については、「19.2.1 インターネットを使用してライセンスを認証する」(P.207) を参照してください。

2. [ライセンス削除] をクリックします。
ソフトウェアを選択する画面が表示されます。

3. ライセンスを削除するソフトウェアにチェックマークを付け、[次へ] をクリックします。
ライセンス認証の解除方法を選択する画面が表示されます。

補足 [全選択／全解除] にチェックマークを付けると、すべてのソフトウェアを選択できます。また、チェックマークを外すと、選択しているソフトウェアを未選択の状態にできます。

4. 次のように操作します。

(1) [ファイルを使ってライセンス認証の解除を行う] を選択し、[参照] をクリックします。

(2) ライセンス認証解除ファイルの出力先およびファイル名を指定し、[保存] をクリックします。

補足 初期値ではファイル名が「LRT.dat」で、デスクトップに出力されます。

(3) [次へ] をクリックします。
ライセンス認証解除ファイルが、指定したフォルダーおよびファイル名で出力され、完了画面が表示されます。

5. [完了] をクリックします。

6. [終了] をクリックします。
確認画面が表示されます。

7. [はい] をクリックします。
ライセンスアクティベーターが終了します。

ライセンス認証解除ファイルをアップロードする

1. Web ブラウザーを起動します。
2. Web ブラウザーの［アドレス］に、「富士フイルム BI ダイレクト」のファイルアップロードのページの URL を入力します。
   https://direct-fb.fujifilm.com/ap1/sc/license/ja/file_act/index.html
   「富士フイルム BI ダイレクト」のログイン画面が表示されます。
3. 「ライセンス認証解除ファイルの出力する」（P.59）で出力したライセンス認証解除情報ファイルをアップロードします。
   ファイルのアップロード後、アップロード操作を行ったユーザーに処理完了のお知らせメールが届きます。

   参照 操作については、「ライセンス認証／認証解除（ファイルを使用）のご案内」のページを参照してください。
4. メールに記載されているページにアクセスし、処理結果が OK となっていることを確認します。

19.5 ArcSuite ライセンス認証の解除

ArcSuiteのライセンスの認証を解除する操作は、ソフトウェアをほかのサーバーに移動する場合などにします。ライセンスの認証は、ArcSuiteサーバーライセンス、ArcSuiteクライアントアクセスライセンスを個別に解除できます。ライセンスの認証を解除するには、次の2つの方法があります。

・インターネットを使用してライセンスの認証を解除する
・ファイルを使用してライセンスの認証を解除する

補足 通常は、インターネットを使用してライセンスの認証を解除します。インターネットを使用してライセンスの認証を解除できない場合は、ファイルを使用してライセンスの認証を解除してください。

19.5.1 インターネットを使用してライセンスの認証を解除する

インターネットを使用してライセンスの認証を解除する手順について説明します。

1. ArcSuite サーバーで、ライセンスアクティベーターを起動します。

   参照 ArcSuite ライセンスアクティベーターの起動方法については、「19.2.1 インターネットを使用してライセンスを認証する」（P.207）を参照してください。

2. [高度な機能] をクリックします。
   機能を選択する画面が表示されます。

3. [ライセンス認証の解除] を選択し、[次へ] をクリックします。
   認証を解除するソフトウェアを選択する画面が表示されます。

4. ライセンス認証を解除するソフトウェアにチェックマークを付け、[次へ] をクリックします。
   解除方法を選択する画面が表示されます。

   補足 [全選択／全解除] にチェックマークを付けると、すべてのソフトウェアを選択できます。また、チェックマークを外すと、選択しているソフトウェアを未選択の状態にできます。

5. [インターネットを使ってライセンス認証の解除を行う（推奨）] を選択し、[次へ] をクリックします。
   ライセンス認証の解除が開始されます。処理が終了すると、完了画面が表示されます。

6. [完了] をクリックします。

7. [終了] をクリックします。
   確認画面が表示されます。

8. [はい] をクリックします。
   ライセンスアクティベーターが終了します。

19.5.2 ファイルを使用してライセンスの認証を解除する

ライセンス認証解除ファイルを使用してライセンスの認証を解除する手順について説明します。

ライセンス認証解除ファイルでライセンス認証を解除する流れ

Step1：

ライセンス認証解除ファイルを出力する

ライセンスアクティベーターから、「ライセンス認証解除ファイル」を出力します。

参照 ⇨「ライセンス認証解除ファイルを出力する」(P.217)

Step2：

ライセンス認証解除ファイルを
アップロードする

出力したライセンス認証解除ファイルを、「富士フイルムBIダイレクト」にアップロードします。

参照 ⇨「ライセンス認証解除ファイルをアップロードする」(P.215)

ライセンス認証解除ファイルを出力する

1. ArcSuite サーバーで、ライセンスアクティベーターを起動します。

参照 ライセンスアクティベーターの起動方法については、「19.2.1 インターネットを使用してライセンスを認証する」(P.207) を参照してください。

2. [高度な機能] をクリックします。
機能を選択する画面が表示されます。

3. [ライセンス認証の解除] を選択し、[次へ] をクリックします。
ライセンス認証を解除するソフトウェアを選択する画面が表示されます。

4. ライセンスの認証を解除するソフトウェアにチェックマークを付け、[次へ] をクリックします。
ライセンス認証の解除方法を選択する画面が表示されます。

補足 [全選択／全解除] にチェックマークを付けると、すべてのソフトウェアを選択できます。また、チェックマークを外すと、選択しているソフトウェアを未選択の状態にできます。

5. 次のように操作します。

(1) [ファイルを使ってライセンス認証の解除を行う] を選択し、[参照] をクリックします。

(2) ライセンス認証解除ファイルの出力先およびファイル名を指定し、[保存] をクリックします。

補足 初期値ではファイル名が「LRT.dat」で、デスクトップに出力されます。

(3) [次へ] をクリックします。
ライセンス認証解除ファイルが、指定したフォルダーおよびファイル名で出力され、完了画面が表示されます。

6. [完了] をクリックします。

7. [終了] をクリックします。
確認画面が表示されます。

8. [はい] をクリックします。
ライセンスアクティベーターが終了します。

ライセンス認証解除ファイルをアップロードする

ライセンス認証解除ファイルを「富士フイルムBIダイレクト」にアップロードします。

参照 アップロードする手順については、「19.4.2 ファイルを使用してライセンスを削除する」の「ライセンス認証解除ファイルをアップロードする」（P.215）を参照してください。

19.6　シリアル番号の削除

不要なソフトウェアのシリアル番号を削除する手順について説明します。
インストールしたときに不要のソフトウェアをインストールしてしまったり、運用を開始したあとで使わなくなったソフトウェアがあったりした場合に、シリアル番号を削除します。
シリアル番号の削除は、ライセンスの状態が「未認証」または「無効」のときに実行できます。ライセンスの状態が「認証済」の場合は、ライセンスを削除すると、ライセンス認証の解除と同時にシリアル番号を削除できます。

注記 シリアル番号を削除すると、そのソフトウェアを使用できなくなります。

参照 ・ライセンスの状態の確認する方法については、「19.3.1 ライセンスの状態を確認する」（P.212）を参照してください。
・ライセンスを削除する方法については、「19.4 ArcSuite ライセンスの削除」（P.213）を参照してください。

19.6.1　シリアル番号を削除する

シリアル番号を削除する手順について説明します。

1. ArcSuite サーバーで、ライセンスアクティベーターを起動します。

   参照 ArcSuite ライセンスアクティベーターの起動方法については、「19.2.1 インターネットを使用してライセンスを認証する」（P.207）を参照してください。

2. [高度な機能] をクリックします。
   機能を選択する画面が表示されます。

3. [シリアル番号の削除] を選択し、[次へ] をクリックします。
   シリアル番号を削除するソフトウェアを選択する画面が表示されます。

4. シリアル番号を削除するソフトウェアにチェックマークを付け、[次へ] をクリックします。
   確認メッセージが表示されます。

   補足 [全選択／全解除] にチェックマークを付けると、すべてのソフトウェアを選択できます。また、チェックマークを外すと、選択しているソフトウェアを未選択の状態にできます。

5. シリアル番号を削除するソフトウェアが正しく選択されていることを確認し、[はい] をクリックします。
   シリアル番号が削除され、完了画面が表示されます。

6. [完了] をクリックします。

7. [終了] をクリックします。
   確認画面が表示されます。

8. [はい] をクリックします。

19.7 ArcSuite ライセンスの移動

ArcSuiteのライセンスを、別のサーバーに移動する手順について説明します。
ArcSuiteサーバーライセンス、ArcSuiteクライアントアクセスライセンスの各ソフトウェアで移動を実行します。

1. 「19.5 ArcSuite ライセンス認証の解除」（P.216）に従って、現在使用している ArcSuite のライセンスの認証を解除します。
2. 現在インストールされている ArcSuite をアンインストールします。
3. ArcSuite を移動するサーバーに ArcSuite をインストールします。
4. 「19.2 ArcSuite のライセンス認証」（P.207）に従って、ArcSuite のライセンスを有効にします。

参照 ライセンスの認証に関する操作手順の問い合わせなどの窓口については、付属の『ArcSuite ライセンス申請の手引き』を参照してください。

第2部　2台以上の構成へのセットアップ

1 ArcSuiteのセットアップの概要

ここでは、2台構成、負荷分散構成、クラスター構成など、2台以上のセットアップ前に必要な準備作業と、セットアップの流れについて説明します。

1.1 ArcSuite について

この第2部では、2台構成、負荷分散構成、およびクラスター構成の場合のセットアップについて説明します。
オールインワン構成のセットアップについては、第1部で説明しています。

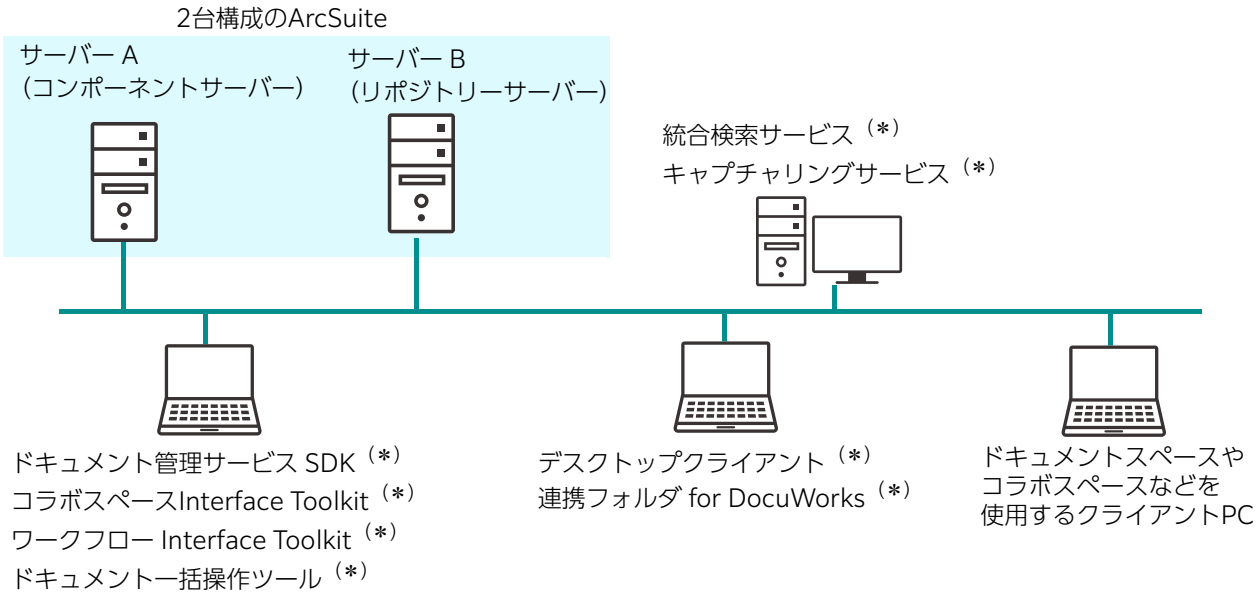
参照 オールインワン構成のセットアップについては、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」（P.21）を参照してください。

1.1.1 システム構成

2 台構成

「2 台構成」とは、次のコンポーネントをインストールしたサーバー（コンポーネントサーバー）と、データベースとドキュメント管理サービスをインストールしたサーバー（リポジトリーサーバー）の、2台の構成です。

・ドキュメントスペース
・全文検索サービス
・ファイルフォーマット変換サービス
・メッセージ通知サービス
・コラボスペース（*）
・ドキュメントレビューオプション（*）
・ワークフロー（*）
・原本性保証オプション（*）
・関連文書検索サービス（*）
・オンラインバックアップ（*）

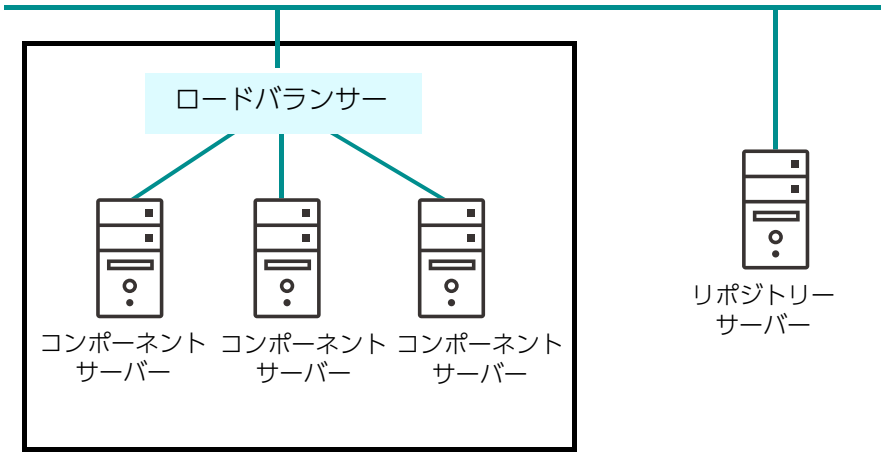


（*）はオプション商品です。ご使用の商品構成によって提供されないことがあります。

負荷分散構成

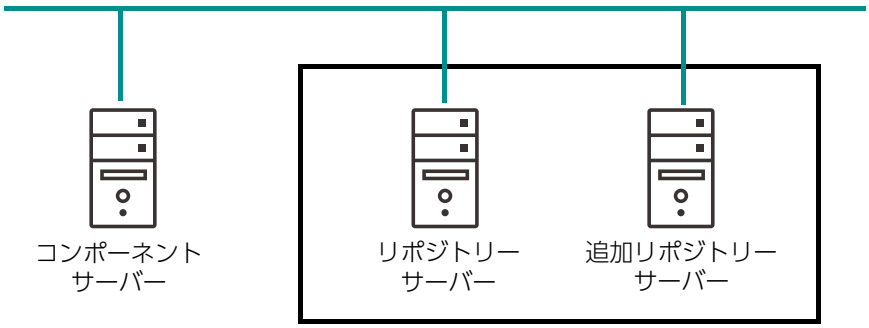
負荷分散構成とは、ロードバランサーと複数のコンポーネントサーバーを設置した環境です。コンポーネントサーバーの処理に負荷がかかるとき、ロードバランサーを使って負荷を分散できます。

補足 クラスター構成と組み合わせて設置できます。



クラスター構成

クラスター構成とは、2台のリポジトリーサーバーを設置した環境です。1台めのサーバーに異常が生じたときに、2台めのサーバーを使うことで、運用の停止を避けることができます。



1.2 動作環境

最新の情報については、弊社公式サイトをご覧ください。

1.3 セットアップ前の設定事項

セットアップを開始する前に決めておく項目と、本書での設定値について説明します。本書では、次の設定値で、セットアップの手順を説明します。

補足 設定値に関する注意制限事項は、各手順に記載しています。

参照 インストール時にインストーラーで初期値として表示される値については、「付録 N インストーラーの初期値」（P.479）を参照してください。

表：設置場所やサーバーに関する設定項目

設定項目	本書での設定値	パスの記述例
設置場所のドメイン	example.com	
コンポーネントサーバーのホスト名	arcsuite	arcsuite.example.com
リポジトリーサーバー（管理サーバーホスト）のホスト名	Server1	Server1.example.com
リポジトリーサーバー（追加リポジトリーサーバー）のホスト名	drepadd	drepadd.example.com
外部連携サーバーのホスト名	gaibu	gaibu.example.com
SMTP/pop サーバーのホスト名	smtp	smtp.example.com
プロキシサーバーのホスト名	proxy	proxy.example.com

注記 ・ホスト名には、「_（アンダースコア）」などの文字を指定しないでください。
・データベースをインストールするリポジトリーサーバーのホスト名（Server1.example.com など）は、37 文字以内にしてください。
・データベースをインストールするリポジトリーサーバーのコンピューター名（Server1 など）は、15 文字以内にしてください。

補足 本書で示した構成例の場合、データベースサーバーホスト名の設定値、パスの記述例は、リポジトリーサーバーと同じです。

参照 ホスト名の詳細については、次のサポート情報の「DNS ホスト名」および「DNS ドメイン名」を参照してください。
http://support.microsoft.com/kb/909264
URL は、2021 年 4 月現在のものです。

本書でのシステム構成例

本書でのセットアップ環境の例は次のとおりです。

表：各サーバーに関する環境

項目	リポジトリーサーバーの環境	コンポーネントサーバーの環境	SMTP/POPサーバーの環境
ホスト名	Server1.example.com	arcsuite.example.com	smtp.example.com
OS	Windows Server 2019	Windows Server 2019	
IP アドレス	192.168.1.1	192.168.1.2	192.168.1.4
DNS ドメインアドレス	なし	なし	
DNS サーバーアドレス	なし	なし	
netmask	255.255.255.0	255.255.255.0	

表 :各サーバーに関する環境

項目	リポジトリーサーバーの環境	コンポーネントサーバーの環境	SMTP/POPサーバーの環境
gateway	192.168.1.254	192.168.1.254	
partition	・C サイズは40 GB	・C サイズは40 GB	
その他のインストールソフト	・Microsoft Office ・DocuWorks	・Microsoft Office ・DocuWorks	
Administrator パスワード	admin	admin	

1.3.1 2 台構成での設定値

2台構成での設定値の例を説明します。

・コンポーネントサーバー
・リポジトリーサーバー
・外部連携サーバー

■ コンポーネントサーバー

設定項目	本書での設定値	パスの記述例
共通設定	ユーザー名	ArcSuite
	会社名	FUJIFILM
	モード選択	通常モード
	インストール先のフォルダ	D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite
	データ格納先	D:¥ArcSuite
	データベースのサーバー名	Server1.example.com
	データベースのポート番号	1521
	グローバルデータベース名	Server1.example.com
	データベース管理者のパスワード	System0
	データベース RMS 用ユーザー名	rms
	データベース RMS 用パスワード	rms
	データファイルの配置先	D:¥DATABASE¥DATAFILES¥SERVER1
	データベースの RMS 用表領域名	rms
	データベースの RMS 用データファイル名	rms.dbf
	データベース参照専用ユーザー名	rmsclient
	データベース参照専用パスワード	rmsclient
	システム名	ArcSuite
	システム ID	(発行されたシステムID)

設定項目	本書での設定値	パスの記述例
共通設定	RMS の管理者ユーザー名	rmsadmin
	パスワード	rmsadmin001
	RMS の管理者ユーザーの表示名（JA）	RMS管理者
	RMS の管理者ユーザーの表示名（EN）	rmsadmin
	RMS の管理者に設定するユーザーロール名	administrators
	管理者ユーザーロールの表示名（JA）	管理者ロール
	管理者ユーザーロールの表示名（EN）	AdminRole
	ホスト名	arcsuite.example.com
	設置場所（JA）	サーバールーム
	設置場所（EN）	ServerRoom
	サービス起動ユーザー名	ARCUSRSVC
	パスワード	ArcSuite001
	グループ名	ARCGRPSVC
	SSL 構成の選択	SSLを使用しない
	HTTP ホスト名	arcsuite.example.com
	HTTP ポート番号	80
	ArcSuite 仮想ディレクトリー名	ArcSuite
	ArcSuite のサーバー間でアクセスを許可するホスト	以下のホストからのアクセスのみ受け付ける
	ログインの方法	自動ログインを使用する
	データベースのポータル用表領域	PORTAL_TBS
	データベースのポータル用データファイル名	PORTAL_TBS.dbf
	データベースのポータル用ユーザー名	PORTAL
	データベースのポータル用パスワード	PORTAL
	RMS レジストリーサービスのポート番号	11099
	ログ管理サービスのポート番号	11102
メッセージ通知サービス	SMTP サーバーのホスト名	smtp.example.com
	SMTP サーバーのポート番号	25
	管理者のメールアドレス	rmsadmin@example.com
	データベースのメッセージ通知サービス用表領域名	cmessage
	データベースのメッセージ通知サービス用データファイル名	cmessage.dbf
	データベースのメッセージ通知サービス用ユーザー名	cmuser

設定項目	本書での設定値	パスの記述例
メッセージ通知サービス	データベースのメッセージ通知サービス用パスワード	cmuser
	ドキュメント管理サービスのサービス ID	arcsuite
	ドキュメント管理サービスの管理者ユーザー名	rmsadmin
	メッセージ通知サービス用キャビネットのストレージパス	(未入力)
ドキュメントスペース	データベースのドキュメントサービス用表領域名	eappli
	データベースのドキュメントサービス用データファイル名	eappli.dbf
	データベースのドキュメントスペース用ユーザー名	eappli
	データベースのドキュメントスペース用ユーザーのパスワード	eappli
コラボスペース	サーバー ID	0001
	データベースのコラボスペース用表領域名	collabospace
	データベースのコラボスペース用データファイル名	collabospace.dbf
	データベースのコラボスペース用ユーザー名	couser
	データベースのコラボスペース用ユーザーパスワード	couser
	全文検索サービス	fts2@arcsuite
	関連文書検索サービス	kSearchDuo@arcsuite
	ドキュメント管理サービスのサービス ID	arcsuite
	ドキュメント管理サービスの管理者ユーザー名	rmsadmin
ドキュメントレビューオプション	データベースのドキュメントレビューオプション用表領域名	dbcollabo
	データベースのドキュメントレビューオプション用データファイル名	dbcollabo.dbf
	データベースのドキュメントレビューオプション用ユーザー名	dbcollabouser
	データベースのドキュメントレビューオプション用ユーザーパスワード	dbcollabouser
ワークフロー	データベースのワークフロー用表領域名	wf
	データベースのワークフロー用データファイル名	wf.dbf
	データベースのワークフロー用ユーザー名	wf
	データベースのワークフロー用ユーザーパスワード	wf
	ドキュメント管理サービスのサービス ID	arcsuite
	ドキュメント管理サービスの管理者ユーザー名	rmsadmin
	ワークフロー用キャビネットのストレージパス	(未入力)

設定項目	本書での設定値	パスの記述例
原本性保証オプション	プロキシサーバーのサーバー名	proxy.example.com
	プロキシサーバーのポート番号	8080
	タイムスタンプサービスのライセンスファイル	D:¥etiming3161.atl
	タイムスタンプサービスの接続パスワード	etiming
原本性保証オプション	タイムスタンプサービスの URL	・従量制メニューの場合 http://tss3161.e-timing.ne.jp/astdtssvr/TSRequest ・定額制メニューでポート番号を変更していない場合 http:// {e-timing Proxy 3161 for AMANO TSAをインストールしたサーバーのFQDNまたはIPアドレス} /atssprxy/Proxy ・定額制メニューでポート番号を変更している場合 http:// {e-timing Proxy 3161 for AMANO TSAをインストールしたサーバーのFQDNまたはIPアドレス} : {ポート番号} /atssprxy/Proxy 補足 ・従量制メニューおよび定額制メニューは、アマノセキュアジャパン株式会社の料金メニューです。 ・「e-timing Proxy 3161 for AMANO TSA」は、アマノセキュアジャパン株式会社のソフトウェアです。
	ドキュメント管理サービスのサービス ID	arcsuite
	ドキュメント管理サービスの管理者ユーザー名	rmsadmin
	証明書格納用キャビネットの Certificates ストレージパス	(未入力)
	証明書格納用キャビネットの TrustAnchors ストレージパス	(未入力)

リポジトリーサーバー

サービス/コンポーネント	設定項目	本書での設定値
データベース	データベースのインストール先	D:¥Database
	データファイルの配置先	D:¥Database¥datafiles
	データベース サーバー名	Server1.example.com
	グローバルデータベース名	Server1.example.com
	データベース管理者のパスワード	System0
データベース設定ツール	データベースの最大接続数算出方法	カスタム
	設置パターン	ロードバランス無し
	設置構成	2台構成
	コンポーネントサーバー兼リポジトリーサーバーの台数	0（変更不可）
	リポジトリーサーバーの台数	1（変更不可）
	コンポーネントサーバーの台数	1（変更不可）
	コラボスペース	使用する
	ドキュメントレビューオプション	使用する
	ワークフロー	使用する
	原本性保証オプション	使用する
	作成予定のキャビネット数	20
	リポジトリーサーバーの最大セッション数	100
	追加リポジトリーサーバーの最大セッション数	0（変更不可）
	統合検索サービスの設置数	1
	データベースの最大接続数	518
共通設定	ユーザー名	ArcSuite
	会社名	FUJIFILM
	モード選択	通常モード
	インストール先のフォルダ	D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite
	データ格納先	D:¥ArcSuite
	データベースのサーバー名	Server1.example.com
	データベースのポート番号	1521
	グローバルデータベース名	Server1.example.com
	パスワード	System0
	データベース RMS 用ユーザー名	rms
	データベース RMS 用ユーザーパスワード	rms

サービス/コンポーネント	設定項目	本書での設定値
共通設定	データファイルの配置先	D:¥DATABASE¥DATAFILES¥SERVER1
	ホスト名	Server1.example.com
	設置場所 (JA)	サーバールーム
	設置場所 (EN)	ServerRoom
	サービス起動ユーザー名	ARCUSRSVC
	サービス起動ユーザーのパスワード	ArcSuite001
	サービス起動ユーザーのグループ名	ARCGRPSVC
	ログ管理サービスのポート番号	11102
ドキュメント管理サービス	サービス ID	arcsuite
	サーバー ID	arcsuite
	ユーザー定義属性の名前空間	user
	データベースのサーバー名	Server1.example.com
	データベースのポート番号	1521
	データベースのグローバルデータベース名	Server1.example.com
	データベース管理者のパスワード	System0
	データベースのドキュメント管理サービス用表領域名	DREPSYS
	データベースのドキュメント管理サービス用表領域データファイル名	DREPSYS.dbf
	データベースのドキュメント管理サービス用一時表領域名	DREPTEMP
	データベースのドキュメント管理サービス用一時表領域データファイル名	DREPTEMP.dbf
	データベースのドキュメント管理サービス用ユーザー名	DREP
	データベースのドキュメント管理サービス用ユーザーパスワード	drep
	管理サーバーのポート番号	11100
	リポジトリーサーバーのポート番号	11101

外部連携サーバー

サービス/コンポーネント	設定項目	本書での設定値
キャプチャリングサービス	ユーザー名	ArcSuite
	会社名	FUJIFILM
	インストール先のフォルダ	D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite
	データ格納先	D:¥ArcSuite
	HTTP ホスト名	Server2.example.com
	HTTP ポート番号	19115
	ArcSuite 仮想ディレクトリー名	ArcSuite
	サービス起動ユーザー名	ARCUSRSVC
	サービス起動ユーザーのパスワード	ArcSuite001
	サービス起動ユーザーのグループ名	ARCGRPSVC
	RMI レジストリーサービスのポート番号	19145
	キャプチャリングサービスの管理ユーザー名	capadmin
	キャプチャリングサービスの管理ユーザーパスワード	capadmin001
	登録先の ArcSuite の Web サービス	http://arcsuite.example.com/ArcSuite
	HTTP プロキシサーバーのホスト名	proxy.example.com
	HTTP プロキシサーバーのポート番号	8080
統合検索サービス	ユーザー名	ArcSuite
	会社名	FUJIFILM
	インストール先のフォルダ	D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite
	データ格納先	D:¥ArcSuite
	データベースのサーバー名	arcsuite.example.com
	データベースのポート番号	1521
	グローバルデータベース名	arcsuite.example.com
	データベース RMS 用ユーザー名	rms
	データベース RMS 用パスワード	rms
	データベース参照専用ユーザー名	rmsclient
	データベース参照専用パスワード	rmsclient
	ホスト名	Server2.example.com
	設置場所（JA）	サーバールーム
	設置場所（EN）	ServerRoom

サービス/コンポーネント	設定項目	本書での設定値
統合検索サービス	サービス起動ユーザー名	ARCUSRSVC
	サービス起動ユーザーのパスワード	ARCUSRSVC
	サービス起動ユーザーのグループ名	ARCGRPSVC
	HTTP ポート番号	19105
	ArcSuite 仮想ディレクトリー名	ArcSuite
	データベースのサーバー名	Server1
	データベースのポート番号	1521
	グローバルデータベース名	arcsuite.example.com
	データベース管理者のパスワード	System0
	データベースの統合検索サービス用表領域名	DGA
	データベースの統合検索サービス用表領域データファイル名	DGA.dbf
	データベースの統合検索サービス用一時表領域名	DGA_TMP
	データベースの統合検索サービス用一時表領域データファイル名	DGA_TMP.dbf
	データベースの統合検索サービス用ユーザー名	DGA
	データベースの統合検索サービス用ユーザーパスワード	dga
	想定文書情報	500000
	ストレージプロキシの説明	DocumentGatheringAgentStorageProxy

1.4 セットアップの流れ

ここでは、セットアップの流れをフロー図で示します。フロー図では、各操作項目の詳細な手順を説明している参照先（項番号）も示しています。
なお、インストールの実行中にエラーが発生した場合、エラーメッセージが表示されます。エラーメッセージが表示された場合は、記述された内容を確認してから対処してください。

ライセンスの管理

ライセンスの管理はライセンスアクティベーターによって行われます。ライセンスアクティベーターは、ArcSuiteをインストールするとインストールされます。

・ライセンスアクティベーター
ライセンス情報の登録処理や、アクティベーション / ディアクティベーション処理を管理するソフトウェアです。ライセンスアクティベーターはインストールするときに自動的に起動し、アクティベーションができます。インストールするときにアクティベーションをしなかった場合、インストールしたあとにライセンスアクティベーターを起動して、アクティベーションをすることもできます。

参照 ライセンス認証についての詳細は、「14 ライセンス認証」（P.320）を参照してください。

・ライセンス認証処理
ライセンスアクティベーターで、ライセンス認証する製品のライセンスシリアル番号を入力し、ユーザー登録で設定したメールアドレス（ユーザー ID）およびパスワードを入力すると、ライセンス認証処理が行われます。これを「アクティベーション」と言います。
ライセンス認証の解除も同様にライセンスアクティベーターにより行われます。これを「ディアクティベーション」と言います。

「富士フイルム BI ダイレクト」でのユーザー登録

ライセンスのアクティベーションで、「メールアドレス」（ユーザー ID）と「パスワード」の入力が必要となります。ライセンスのアクティベーションの前に、「富士フイルムBIダイレクト」のサイトでユーザー登録を行い、「メールアドレス」（ユーザー ID）と「パスワード」を設定します。

参照 ユーザー登録についての詳細は、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「4.1.1 「富士フイルム BI ダイレクト」でユーザー登録をする」（P.57）を参照してください。

ライセンスシリアル番号の取得

ライセンスは、対応するシリアル番号を入力することで利用可能です。

ライセンスには、大きく分けて次の3種類があります。

・コンポーネントライセンス
ライセンスを必要とするコンポーネントをインストールして運用するときに必要なライセンスで、それぞれのシリアル番号が必要です。
コンポーネントライセンスは、サーバーごとに設定します。

・言語ライセンス
言語を使用するためのライセンスで、サーバーごとに必要です。
言語ライセンスは、サーバーごとに設定します。

・クライアントアクセスライセンス（CAL）
基本アクセスライセンス、ドキュメントスペース CAL、コラボスペース CAL、ワークフロー CAL の 4 種類があります。
基本アクセスライセンスはシステム内に 1 つ必要です。
クライアントアクセスライセンスは、ArcSuite をインストールするときに指定します。
ドキュメントスペース CAL、コラボスペース CAL、およびワークフロー CAL は、インストールしたあとで追加できます。それぞれのコンポーネントを利用するユーザーの数だけ必要です。

注記 **インストールする環境やライセンスによっては、このマニュアルでの手順と異なる場合があります。注意してください。**

参照 ライセンスシリアル番号の発行方法については、「ArcSuite 4.0 インストール」インストールメディアの「License」フォルダーにある『シリアル番号ファイル発行依頼書』を参照してください。

タイムスタンプサービスのライセンスファイルの取得

原本性保証オプションをインストールする場合には、あらかじめアマノタイムスタンプサービスに契約してライセンスファイルを入手する必要があります。
詳しくは、『e-文書法対応 概要説明書』を参照してください。

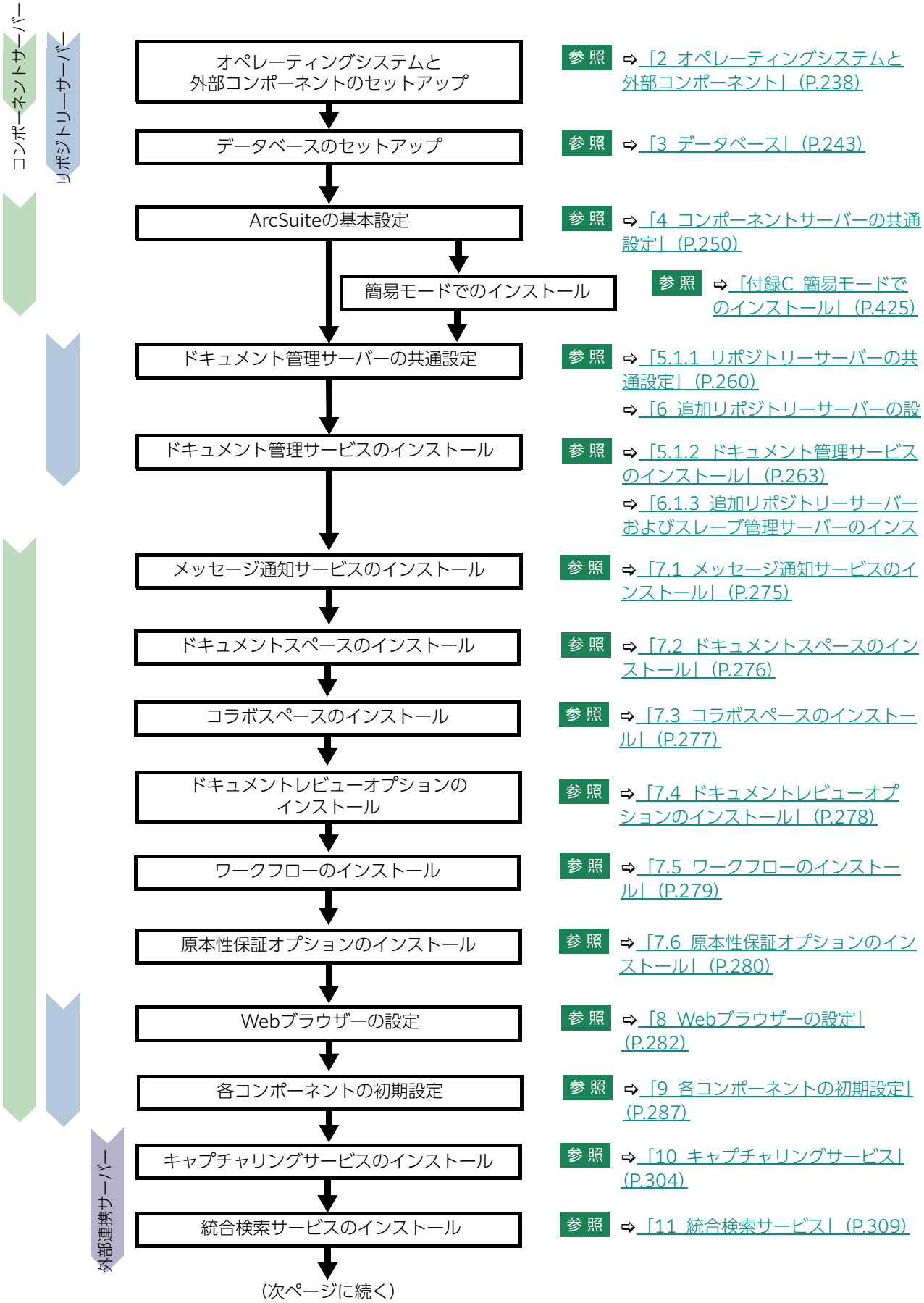
2 台構成でセットアップする場合の注意

2台構成は、インストールする順番に注意してください。

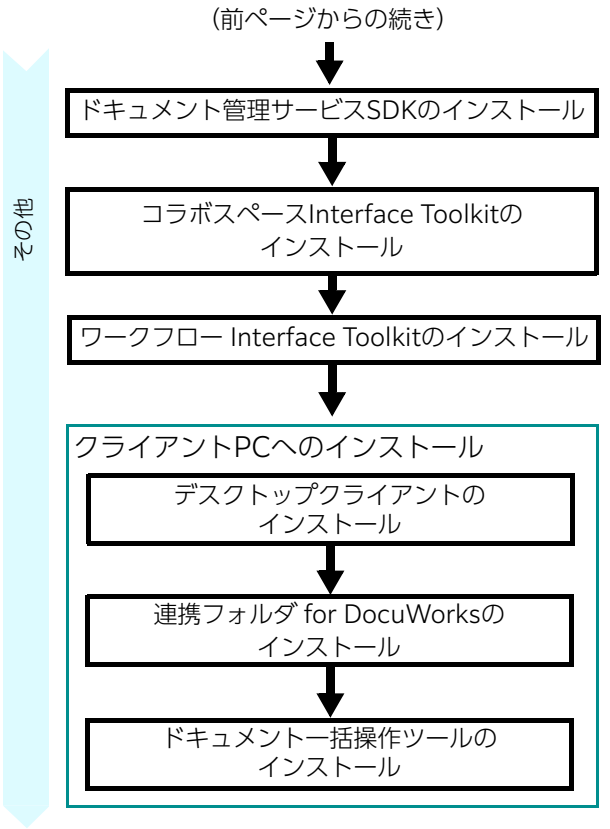
コンポーネントサーバーからインストールを始め、共通設定のインストールを終えたら、リポジトリーサーバーをインストールします。リポジトリーサーバーのインストールが完了したら、コンポーネントサーバーのインストールの続きを実行します。

注記 **セットアップの順番を間違えると、正常にインストールされないことがあります。注意してください。**

セットアップの流れ



(次ページに続く)



参照 ⇨『ドキュメント管理サービスSDK リファレンスガイド』

参照 ⇨『コラボスペースInterface Toolkit リファレンスガイド』

参照 ⇨『ワークフロー Interface Toolkit リファレンスガイド』

参照 ⇨『デスクトップクライアント セットアップガイド』

参照 ⇨『連携フォルダ for DocuWorks セットアップガイド』

参照 ⇨『ドキュメント一括操作ツール説明書』

参照 Evidence Tracker のセットアップについては、『Evidence Tracker セットアップガイド』を参照してください。

2 オペレーティングシステムと外部コンポーネント

最初に、ArcSuiteをインストールするサーバーにオペレーティングシステムと外部コンポーネントをインストールします。

2.1 Windows のインストール

ArcSuiteサーバーに、サポートしているOSをインストールします。

注記 サーバーを用意するときに注意することは、次のとおりです。

・ドメインコントローラーとして動作しているサーバーに ArcSuite をインストールしないでください。

・ArcSuite を構成するソフトウェアおよび ArcSuite で使用するドキュメント編集ソフトウェアなど、ArcSuite で必要とするソフトウェア以外はインストールしないでください。

・コンポーネントサーバーには、必ず IIS をインストールし、World Wide Web Publishing Service が自動で起動するように設定してください。

・次のドライブは、必ず NTFS ファイルシステムでフォーマットしてください。

- システムドライブ
- ArcSuite のインストール先に指定するドライブ
- ArcSuite のデータ格納先に指定するドライブ
- ArcSuite が使用するドライブ

参照 サポートしている OS のインストール手順については、Windows 付属の説明書を参照してください。

2.1.1 OS が英語版のサーバーに必要な設定

次のOSの場合に必要な設定をします。

・Windows Server 2016 英語版

・Windows Server 2019 英語版

必要な設定については、「付録」OSが英語版のサーバーに必要な設定」（P.466）を参照してください。

2.1.2 Windows のサービス起動ユーザーの設定

ArcSuiteサーバーに、ArcSuiteの各コンポーネントを起動するためのユーザー（サービス起動ユーザー）を登録します。サービス起動ユーザーとグループの設定は、ArcSuiteインストール時にも行えます。

ここでは、次のサービス起動ユーザーおよびグループを設定する例を説明します。

・ユーザー
ARCUSRSVC

・グループ
ARCGRPSVC

補足 サービス起動ユーザーには、ローカルユーザーまたは既存のドメインユーザーを指定することもできます。

Windowsのサービス起動ユーザーを設定する手順は、次のとおりです。

・ユーザー名とパスワードを設定する

・グループを設定する

・「サービスとしてログオン」の権利を設定する

参照 ・ユーザー名とパスワードを設定する手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「ユーザー名とパスワードを設定する」（P.39）を参照してください。

・グループを設定する手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「グループを設定する」（P.39）を参照してください。

・「サービスとしてログオン」の権利を設定する手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「「サービスとしてログオン」の権利を設定する」（P.40）を参照してください。

2.1.3 Windows の環境設定

各サーバーで、フルコンピューター名、サブネットマスク、デフォルトゲートウェイ、およびDNSサーバーなどの環境設定をします。

次の設定の操作を例に説明します。環境に応じて設定してください。

・フルコンピューター名を設定する
・TCP/IP プロトコルを設定する
・IIS をインストールする
・Microsoft .NET Framework 3.5 をインストールする
・ファイルのアップロードサイズの制限値を変更する

注記 **フルコンピューター名は、「コンピューター名」と「ドメイン名」を指定して設定します。**
データベースをインストールするリポジトリーサーバーのフルコンピューター名は、37 文字以内にする必要があります。37 文字を超えている場合、データベースをインストールできません。
また、データベースをインストールするリポジトリーサーバーのコンピューター名は、15 文字以内にする必要があります。15 文字を超えている場合、データベースをインストールできません。

参照 ・コンピューター名およびフルコンピューター名を設定する手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「フルコンピューター名を設定する」（P.41）を参照してください。
・TCP/IP プロトコルを設定する手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「TCP/IP プロトコルを設定する」（P.42）を参照してください。
・IIS をインストールする手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「IIS をインストールする」（P.42）を参照してください。
・Microsoft .NET Framework 3.5 をインストールする手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「Microsoft .NET Framework 3.5 をインストールする」（P.43）を参照してください。
・ファイルのアップロードサイズの制限値を変更する手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「ファイルのアップロードサイズの制限値を変更する」（P.45）を参照してください。

2.2 DocuWorks のインストール

文書を変換したり全文検索をしたりする運用や、ドキュメントレビューオプションを使用する場合は、DocuWorksをインストールします。

参照 DocuWorks のインストールについては、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「2.2 DocuWorks のインストール」（P.46）を参照してください。

2.3 ドキュメント編集ソフトウェアのインストール

文書を変換する運用の場合、必要なドキュメント編集ソフトウェア（Microsoft Officeアプリケーションなど）をインストールします。

参照 ドキュメント編集ソフトウェアのインストールについては、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「2.3 ドキュメント編集ソフトウェアのインストール」（P.47）を参照してください。

3 データベース

オペレーティングシステムと外部コンポーネントのインストールが終了したら、リポジトリーサーバーにデータベースをインストールします。

3.1 データベースのインストール

ここでは、データベースのインストール手順の概要と注意点を説明します。
データベースインストーラーを使って、データベースをインストールします。

参照 データベースインストーラーの詳細については、「3.1.2 データベースインストーラー」(P.244)を参照してください。

3.1.1 「リポジトリーサーバーの最大セッション数」の見積もり

「3.1.2 データベースインストーラー」(P.244)では、[データベースの最大接続数算出方法の選択] 画面で「カスタム」を選択したときに、「リポジトリーサーバーの最大セッション数」を入力します。「リポジトリーサーバーの最大セッション数」には、ドキュメント管理サービスに同時にアクセスするユーザーのセッション数の最大値を入力します。

リポジトリーサーバーの最大セッション数は次の点に注意して見積もってください。

- 「リポジトリーサーバーの最大セッション数」には、ドキュメント管理サービスを使用するすべてのユーザー数の 5% ～ 20% の値を指定します。
- ドキュメント管理サービスを使用するユーザーには、ドキュメントスペース、コラボスペース、およびワークフローを利用するユーザーのほかに、ドキュメント管理サービス SDK を使ったアプリケーションなどを利用するユーザーも含まれます。

3.1.2 データベースインストーラー

データベースインストーラーを起動して、データベースをインストールします。

1. リポジトリーサーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. ArcSuite 4.0 のデータベースのインストールメディアを、ドライブにセットします。
3. 「{インストールメディア} :¥setup.exe」をダブルクリックします。
   [ArcSuite データベース セットアップへようこそ] 画面が表示されます。
4. [次へ] をクリックします。
   [使用許諾契約] 画面が表示されます。
5. 使用許諾契約を読み、同意する場合は、[使用許諾契約の全条項に同意します] を選択します。
6. [次へ] をクリックします。
   [インストール先の選択] 画面が表示されます。
7. データベースのインストール先を入力します。

   補足
   - 初期値では、「{最大空容量のドライブ} :¥Database」が表示されます。
   - この項目は、入力が必須です。
   - マルチバイト文字および Windows のフォルダーに指定できない文字は使用できません。
   - 相対パス、ルートフォルダーは指定できません。
   - UNC 形式のファイルパスは指定できません。
   - インストールするドライブには、5.15 GB 以上の空き容量が必要です。
8. [次へ] をクリックします。
   [データファイル配置先の選択] 画面が表示されます。
9. データファイルの配置先を入力します。
   入力した配置先の下に、「{SID}」フォルダーが作成されます。

補足
- 初期値では、「{インストール先と同じドライブ} :¥Database¥datafiles」が表示されます。
- この項目は、入力が必須です。
- データファイルは、「{SID}」フォルダーの下に配置されます。
- マルチバイト文字および Windows のフォルダーに指定できない文字は使用できません。
- 相対パス、ルートフォルダー、および「Program Files(x86)」フォルダーの配下は、指定できません。また、64 ビット OS にインストールする場合は、「Program Files(x86)」フォルダー配下は指定できません。
- UNC 形式のファイルパスは指定できません。
- データファイルの配置先ドライブには、2 GB 以上の空き容量が必要です。

10. [次へ] をクリックします。
[データベースのサーバー情報] 画面が表示されます。

11. データベースサーバーの [サーバー名] を確認します。

注記
- [サーバー名] は変更せずに、必ず、初期値を使用してください。
- 表示されているサーバー名が 37 文字以内であることを確認してください。37 文字を超えている場合、データベースをインストールできません。
- 表示されているサーバー名のうち、コンピューター名が 15 文字以内であることを確認してください。15 文字を超えている場合、データベースをインストールできません。

補足 初期値は、通常、FQDN（ドメイン付きのフルコンピューター名）です。ドメインが設定されていない環境の場合の初期値は「コンピューター名」です。

12. データベースサーバーの [グローバルデータベース名] を確認します。
通常、[グローバルデータベース名] は初期値を使用します。[グローバルデータベース名] を変更する場合は、ArcSuite のデータベースであるということを判断できるような一意な名前を入力します。

注記
- グローバルデータベース名には、「 - （ハイフン）」、マルチバイト文字、データベースの予約語は使用できません。
- [グローバルデータベース名] のうち、最初の「 . （ピリオド）」までの文字列が、データベースの SID になります。「 . （ピリオド）」がない場合は、[グローバルデータベース名] が SID になります。データベースの SID は、先頭が英字、それ以降は英数字で構成された 8 文字以内の文字列にする必要があります。

補足
- 初期値は、通常、FQDN（ドメイン付きのフルコンピューター名）です。ドメインが設定されていない環境の場合の初期値は「コンピューター名」です。
- この項目は、入力が必須です。
- 先頭が英字、それ以降は英数字、「 . （ピリオド）」で構成された 128 文字以内の文字列で入力します。

13. [次へ] をクリックします。
[データベースの管理者パスワードの設定] 画面が表示されます。

14. [パスワード]、および [パスワード確認] に、データベースの管理者ユーザーのパスワードを入力します。

補足
- [パスワード]、および [パスワード確認] は、入力が必須です。
- [パスワード] は、先頭が英字、それ以降は英数字、「_ （アンダースコア）」で構成された 3 文字以上 30 文字以内の文字列を入力します。
- [パスワード] には、英字の大文字、小文字、数字が含まれている必要があります。

15. [次へ] をクリックします。
[ファイル コピーの開始] 画面が表示されます。

16. [次へ] をクリックします。
インストール中の画面が表示されます。
ファイアウォールの例外を設定するかどうかの確認画面が表示されます。

補足 手順 4 ～ 14 の画面で、[キャンセル] をクリックして途中で終了した状態から、再度インストールしたい場合は、手順 3 へ戻ってもう一度インストーラーを起動してください。

17. [はい] または［いいえ］をクリックします。
［スクリプトの登録］画面が表示されます。
同時に［ローカル グループ ポリシー エディター］画面が表示されます。

18. [スクリプトの登録] 画面を表示したまま、「ローカル グループ ポリシー エディター」画面で、スクリプトの登録をします。画面に記載されている手順に従って操作します。

(1) 左側のツリーから、[コンピューターの構成] > [Windows の設定] > [スクリプト（スタートアップ / シャットダウン)] を選択します。

(2) 右側の詳細情報から [シャットダウン] をダブルクリックします。
[シャットダウンのプロパティ] 画面が表示されます。

(3) [シャットダウンのプロパティ] 画面で [追加] をクリックします。
[スクリプトの追加] 画面が表示されます。

(4) [参照] をクリックします。
[参照] 画面が表示されます。

(5) 画面に表示されている「DatabaseShutdown.bat」を選択し、[開く] をクリックします。
[スクリプトの追加] 画面の [スクリプト名] に「DatabaseShutdown.bat」が設定されます。

(6) [OK] をクリックします。
[スクリプトの追加] 画面が閉じます。

(7) [OK] をクリックします。
[シャットダウンのプロパティ] 画面が閉じます。

(8) [ローカル グループ ポリシー エディター] 画面を閉じます。

19. [スクリプトの登録] 画面の [次へ] をクリックします。
[シャットダウンスクリプトの登録] 画面が表示されます。

20. [はい] をクリックします。
[セットアップの完了] 画面が表示されます。

21. 手順 18 の各画面で、[キャンセル] をクリックして途中で終了した状態から、再度インストールしたい場合は、最初にデータベースをアンインストールしてから、もう一度インストーラーを起動してください。

22. [完了] をクリックします。
[データベース設定ツールへようこそ] 画面が表示されます。

23. [次へ] をクリックします。
[データベースの最大接続数算出方法の選択] 画面が表示されます。

24. [カスタム] を選択し、[次へ] をクリックします。
[設置パターンと設置構成の選択] 画面が表示されます。

補足 2 台構成、負荷分散構成、クラスター構成などの場合は、[カスタム] を選択して値を計算します。

25. 「システム構成」、「サーバー構成」を確認して、[設置パターン]、[設置構成] を選択します。次の表を参照して操作します。

システム構成	サーバー構成	選択する [設置パターン]	選択する [設置構成]
2 台構成	2 台構成	ロードバランス無し	2台構成
負荷分散構成	リポジトリーサーバーが 1 台、コンポーネントサーバーが 2 台	ロードバランス有り	3台構成
	リポジトリーサーバーが 1 台、コンポーネントサーバーが 3 台		4台構成（コンポーネントサーバー ×3)

システム構成	サーバー構成	選択する［設置パターン］	選択する［設置構成］
クラスター構成	リポジトリーサーバーが 1 台、コンポーネントサーバーが 2 台	ロードバランス無し	3台構成
	負荷分散構成＋クラスター構成	ロードバランス有り	負荷分散構成＋クラスター構成 参照 クラスター構成で、ロードバランス有りの場合の設置構成については、「負荷分散＋クラスター構成」の項目を参照してください。
負荷分散構成＋クラスター構成	リポジトリーサーバーが 2 台、コンポーネントサーバーが 2 台	ロードバランス有り	4台構成（コンポーネントサーバー ×2）
	リポジトリーサーバーが 2 台、コンポーネントサーバーが 3 台		5台構成

26. ［次へ］をクリックします。
［サーバー情報の設定］画面が表示されます。

27. ［リポジトリーサーバーの台数］、［コンポーネントサーバーの台数］をそれぞれ入力し、［次へ］をクリックします。
［データベースのコンポーネント情報］画面が表示されます。

28. それぞれのコンポーネントについて、［使用する］または［使用しない］のどちらかを選択して、［次へ］をクリックします。
［ドキュメント管理サービスの利用情報の設定］画面が表示されます。

29. ［作成予定のキャビネット数］、［リポジトリーサーバーの最大セッション数］、および［追加リポジトリーサーバーの最大セッション数］の値を入力します。

補足
- リポジトリーサーバーの最大セッション数は次の計算式で求めます。
  {リポジトリーサーバーの最大セッション数} = {ドキュメント管理サービスに同時にアクセスするユーザーの数} × {0.05 ～ 0.2}
  原本性保証オプションを使うときは、{リポジトリーサーバーの最大セッション数} = {ドキュメント管理サービスに同時にアクセスするユーザーの数} × {0.05 ～ 0.2} +15
  {0.05 ～ 0.2} は、運用に応じた値を入力します。
- ［作成予定のキャビネット数］には、1 ～ 999 までの数値を入力できます。初期値は 20 です。
- ［リポジトリーサーバーの最大セッション数］には、10 ～ 1000 までの数値を入力できます。初期値は 100 です。
- ［追加リポジトリーサーバーの最大セッション数］は、［コンポーネントサーバー兼リポジトリーサーバーの台数］と［リポジトリーサーバーの台数］の合計が 2 以上の場合に入力できます。10 ～ 1000 までの数値を入力できます。初期値は 0 です。

参照 「リポジトリーサーバーの最大セッション数」の計算方法については、「3.1.1 「リポジトリーサーバーの最大セッション数」の見積もり」（P.244）を参照してください。

30. ［次へ］をクリックします。
［統合検索サービスの設置情報］画面が表示されます。

31. ［統合検索サービスの設置数］を入力し、［次へ］をクリックします。

補足 0 ～ 10 までの数値を入力できます。初期値は 0 です。

［データベースの最大接続数］画面が表示されます。計算された数値が初期値として表示されます。

32. 計算された数値を変更したい場合は、数値を変更して、［次へ］をクリックします。
［データベース設定の開始］画面が表示されます。

補足 初期値は 270 です。最小値は 170 です。

33. [次へ] をクリックします。
[セットアップステータス] 画面が表示され、インストールが開始されます。インストールが終わると [データベース設定の完了画面] が表示されます。

34. [はい、今すぐコンピュータを再起動します。] を選択します。

35. [完了] をクリックします。
コンピュータが再起動されます。

データベースインストーラーでのインストールは終了です。

注記 データベース設定ツールがエラーで終了したり、[キャンセル] で終了したりした場合は、データベースのインストールメディアにある、次のデータベース設定ツールを個別に実行してください。
「{インストールメディア} :¥tool¥setup.exe」

3.1.3 データベースの起動と停止

データベースを起動する手順については、「第1部 オールインワン構成のセットアップ」の「データベースを起動する」（P.54）を参照してください。
データベースを停止する手順については、「第1部 オールインワン構成のセットアップ」の「データベースを停止する」（P.55）を参照してください。

4 コンポーネントサーバーの共通設定

データベースのインストールが終了したら、共通設定をします。

4.1 コンポーネントサーバーの共通設定

4.1.1 「富士フイルム BI ダイレクト」でユーザー登録をする

サーバーの設定をする前に、「富士フイルムBIダイレクト」サイトでユーザー登録をします。

補足 ライセンスを認証するには、「富士フイルム BI ダイレクト」サイトでユーザー登録する必要があります。

参照 「富士フイルム BI ダイレクト」サイトでのユーザー登録については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「4.1.1 「富士フイルム BI ダイレクト」でユーザー登録をする」（P.57）を参照してください。

4.1.2 コンポーネントサーバーの共通設定

メインインストーラーでライセンスシリアル番号、RMSデータベースの情報などを入力し、EXEファイルやJARファイルなどをコンポーネントサーバーにインストールします。

参照 設定時のユーザー名およびパスワードについては、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「1.3 セットアップ前の設定事項」（P.24）を参照してください。

コンポーネントサーバーの共通設定

1. コンポーネントサーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. 「ArcSuite 4.0 インストール」インストールメディアを、ドライブにセットします。
3. 「{インストールメディア} :¥Service¥ArcSuite¥setup.exe」をダブルクリックします。
   [ArcSuite セットアップへようこそ] 画面が表示されます。
4. [次へ] をクリックします。
   [インストールの確認] 画面が表示されます。
5. [OK] をクリックします。
   ライセンスアクティベーターの画面が表示されます。

   補足 [キャンセル] を選択した場合は、ArcSuite のインストールを終了します。
6. [ライセンス登録] をクリックします。
   シリアル番号を入力する画面が表示されます。
7. 弊社より発行されたシリアル番号を入力します。
   テキストファイルで発行されたシリアル番号がある場合は、格納場所を指定してファイルをインポートします。

   注記 ・言語ライセンスのシリアル番号は、サーバーごとに登録する必要があります。
   ・クライアントアクセスライセンス（CAL）のシリアル番号は、必ず、最初にインストールするコンポーネントサーバーに登録してください。

   補足 ・シリアル番号の追加および削除は、[追加]、[削除] をクリックして実行します。
   ・指定する格納場所のパスには、マルチバイト文字および Windows のフォルダーに指定できない文字は使用できません。
8. [次へ] をクリックし、ライセンス認証を完了させます。

   参照 ライセンス認証完了までの手順は、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「4.1 共通設定」（P.57）の手順 7 ～ 12 を参照してください。

9. [License Activator] 画面で [終了] をクリックします。
ライセンスアクティベーターの終了を確認する画面が表示されます。

10. [はい] をクリックします。
[機能の選択] 画面が表示されます。
ライセンスをインストールしたコンポーネントのチェックボックスにチェックマークが付いています。

11. インストールが必要なコンポーネントを選択して、[次へ] をクリックします。
[インストールするコンポーネントの確認] 画面が表示されます。

12. インストールするコンポーネントを確認します。

13. [次へ] をクリックします。
使用許諾契約の画面が表示されます。

補足 ・同意済みの使用許諾契約は、インストール終了後、次のパスに保存されます。
「{ArcSuite のインストールフォルダー} ¥License ArcSuite.txt」
・{ArcSuite のインストールフォルダー} は、手順 19 で指定するフォルダーです。たとえば、「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」です。

14. 使用許諾契約を読み、[使用許諾契約の全条項に同意します] を選択し、[次へ] をクリックします。[次へ] をクリックします。
[ユーザー情報] 画面が表示されます。

15. [ユーザー名] と [会社名] を確認します。

補足 [ユーザー名] と [会社名] には、OS に設定されている内容が表示されます。

16. [次へ] をクリックします。
[モード選択] 画面が表示されます。

注記 ・次の場合は、[簡易モード] を選択しないでください。
- ドキュメント管理サービスがクラスター構成である
- 2 セットめのドキュメント管理サービスをインストールする
- 負荷分散構成のコンポーネントサーバーのインストールする

・次の場合は、[通常モード] だけを選択できます。
- 「分散サーバー構成」を選択している
- 再インストールする
- すでにキャプチャリングサービスや統合検索サービスをインストールしている

17. モードを選択します。ここでは、[通常モード] をクリックします。

参照 「簡易モード」を選択してインストールする場合は、「付録 C 簡易モードでのインストール」(P.425) を参照してください。

18. [次へ] をクリックします。
[インストール先の選択] 画面が表示されます。

19. [参照] をクリックして、インストール先を指定します。ここでは、「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」を指定します。

注記 インストール先には、ネットワークドライブのパスを指定しないでください。

補足 インストール先の初期値は、「C:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」です。

20. [次へ] をクリックします。
[データ格納先の選択] 画面が表示されます。

21. [参照] をクリックするか、フォルダー名を直接入力して、ユーザーデータの格納先を指定します。ここでは、「D:¥ArcSuite」を指定します。

注記 データ格納先には、ネットワークドライブ上のパスを指定しないでください。

補足 ・ユーザーデータの格納先の初期値は、「C:¥ArcSuite」です。
・データ格納先名には、半角英数字だけを使用できます。

22. [次へ] をクリックします。
[データベースのサーバー情報] 画面が表示されます。

補足 データベースとは、ArcSuite システムの設定情報が保存されているデータベースです。

23. [サーバー名] で、データベースサーバーのホスト名を確認します。

24. [ポート番号] を確認します。

25. [グローバルデータベース名] に、データベースを設定したときに入力したグローバルデータベース名を入力します。ここでは、「arcsuite.example.com」と入力します。

26. [次へ] をクリックします。
[データベースの管理者情報] 画面が表示されます。

27. [パスワード] にデータベースの管理者ユーザーのパスワードを入力します。ここでは、「System0」と入力します。

28. [次へ] をクリックします。
[データベースの RMS 用ユーザー情報] 画面が表示されます。

29. [ユーザー名] に、データベースにアクセスするための RMS 用ユーザーのユーザー名を入力します。

注記 ここで入力するユーザー名は、追加するコンポーネントのインストール時に、入力が必要になる場合があります。

補足 ・ユーザー名の初期値は、「rms」です。
・インストールするコンポーネント、ユーザー、グループ、またはロールなどを管理するデータベースを新たに構築する場合は、すでに作成されているデータベースで使用していないユーザー名を入力します。また、既存の RMS データベースにアクセスする場合は、初期化時に作成した RMS 用のユーザー名を入力します。

30. [パスワード]、および [パスワード確認] を入力します。ここでは、「rms」と入力します。

注記 ここで入力するパスワードは、追加するコンポーネントのインストール時に、入力が必要になる場合があります。忘れないようにしてください。

補足 既存の RMS データベースにアクセスする場合は、初期化時に作成した RMS 用のパスワードを入力してください。

31. [次へ] をクリックします。
データベースがシングルインスタンス構成の場合は、[データベースの RMS 用表領域作成] 画面が表示されます。手順 32 へ進みます。

補足 新たに RMS データベースを構築する場合は、[次へ] をクリックすると [RMS の新規構築] の確認メッセージ画面が表示されます。[はい] をクリックします。

32. [次へ] をクリックします。
[データファイルの配置先] 画面が表示されます。

33. [データファイルの配置先] にデータベースのデータファイルの配置先を指定します。

注記 初期値で表示された配置先のフォルダーとは別のフォルダーを指定する場合は、あらかじめデータベースがインストールされたサーバーでフォルダーを作成しておきます。作成したフォルダーのパスを指定してください。
フォルダーを作成していなかった場合は、インストールできません。

補足 UNC 形式のファイルパスは指定できません。

34. [次へ] をクリックします。
[データベースの RMS 用表領域作成] 画面が表示されます。

35. RMS データベースに作成する表領域の [表領域名] と [データファイル名] を確認します。

36. [次へ] をクリックします。
[データベースの RMS 参照専用ユーザー登録] 画面が表示されます。

37. [ユーザー名] を入力します。ここでは、「rmsclient」と入力します。

注記 ここで入力するユーザー名は、追加するコンポーネントのインストール時に、入力が必要になる場合があります。忘れないようにしてください。

38. [パスワード]、および [パスワード確認] を入力します。ここでは、「rmsclient」と入力します。

注記 ここで入力するパスワードは、追加するコンポーネントのインストール時に、入力が必要となる場合があります。忘れないようにしてください。

39. [次へ] をクリックします。
[RMS のシステム名] 画面が表示されます。

40. RMS の [システム名] 、[システム ID] を入力します。ここでは、[システム名] に「ArcSuite」、[システム ID] に弊社から発行されたシステム ID を入力します。

補足
- [システム名] とは、現在セットアップ中の ArcSuite システムの名前です。ここで入力した値は、DN の [dc=] 部に使用されます。ドット「 . 」で区切られたドメイン名を指定した場合には、[dc=XXX.dc=XXX] のように、ドット部分でドメイン名が区切られます。
- [システム名] には、先頭と末尾が英数字、それ以外は英数字、「 - （ハイフン）」、「 . （ピリオド）」で構成された文字列を入力します。

41. [次へ] をクリックします。
[RMS の管理者ユーザー登録] 画面が表示されます。

42. RMS の管理者ユーザーの [ユーザー名] を入力します。ここでは、「rmsadmin」と入力します。

43. [パスワード]、および [パスワード確認] を入力します。ここでは、「rmsadmin001」と入力します。

注記 RMS に登録するユーザーのパスワードは、英小文字、数字で構成された 8 文字以上で入力する必要があります。

44. [次へ] をクリックします。
[RMS の管理者ユーザーの表示名] 画面が表示されます。

45. RMS 管理ユーザーの表示名を日本語と英語で入力します。

- [表示名（JA）]
  日本語で入力します。
- [表示名（EN）]
  英語で入力します。

ここでは、[表示名（JA）] に「RMS 管理者」、[表示名（EN）] に「rmsadmin」と入力します。

46. [次へ] をクリックします。
[RMS の管理者に設定するユーザーロール] 画面が表示されます。

47. RMS に登録する [ユーザーロール名] を入力します。ここでは、「administrators」と入力します。

48. ユーザーロールの表示名を日本語と英語で入力します。

・［表示名（JA)］
日本語で入力します。

・［表示名（EN)］
英語で入力します。

ここでは、［表示名（JA)］に「管理者ロール」、［表示名（EN)］に「AdminRole」と入力します。

補足 RMS の管理者には、ユーザーまたはユーザーロールを設定できます。この画面でユーザーロール名を入力すると、そのユーザーロールを RMS に作成したあと、RMS 管理者に設定できます。したがって、そのロールを持つユーザーが RMS 管理者になります。インストール直後の状態では、「RMS の管理者ユーザー情報」で作成したユーザーだけが、このユーザーロールを持っています。この画面でユーザーロール名を入力しなかった場合、RMS 管理者には「RMS の管理者ユーザー情報」で作成したユーザーを直接設定します。

49. ［次へ］をクリックします。
［コンピュータのホスト名］画面が表示されます。

50. ［ホスト名］を確認します。

51. ［次へ］をクリックします。
［コンピュータの設置場所］画面が表示されます。

52. コンピューターの設置場所を、日本語と英語で入力します。

・［設置場所（JA)］
日本語で入力します。

・［設置場所（EN)］
英語で入力します。

ここでは、［設置場所（JA)］に「サーバールーム」、［設置場所（EN)］に「ServerRoom」と入力します。

補足 ここで入力した文字列は、RMS データベースに登録する属性として使用されます。

53. ［次へ］をクリックします。
［サービス起動ユーザー情報］画面が表示されます。

54. ［ユーザー名］を確認します。ユーザー名は、ローカルユーザーかドメインユーザーのユーザー名のどちらかです。ドメインユーザーの場合は、次の形式で表示されます。
{ドメイン名} ￥ {ユーザー名}

補足
・ユーザー名に「_（アンダースコア)」を含む文字列を指定した場合、画面に次のメッセージが表示されます。ユーザー名を変更するかどうかを選択します。
「jconsole を用いた監視機能を使用する場合は、「はい」を選択し、「_（アンダースコア)」を含まないユーザー名に変更してください。利用しない場合は、「いいえ」を選択しインストールを継続してください。」
・入力されたユーザーが「サービスとしてログオン」権限を持たない場合、画面に次のメッセージが表示されます。権限を付与するかどうかを選択します。
「入力されたユーザーの次の設定を変更します。ほかのユーザーを使用する場合は、「いいえ」を選択してください。サービスとしてログオン権限の付与」
・ローカルユーザーとして入力したユーザー名が、既存のローカルユーザーに存在しなかった場合、画面に次のメッセージが表示さます。ローカルユーザーを新規作成するかどうかを選択します。
「入力されたユーザー名とパスワードでサービス起動ユーザーを作成します。既存のユーザーを使用する場合、または、作成するユーザーを変更する場合は、「いいえ」を選択してください。」

55. ［パスワード］を入力します。ここでは、「ArcSuite001」と入力します。

56. ［次へ］をクリックします。
［サービス起動ユーザーのグループ情報］画面が表示されます。

57. サービス起動ユーザーが所属するグループの［グループ名］を確認します。

補足 ・入力したグループが存在しない場合、画面に次のメッセージが表示されます。ローカルグループを新規作成するかどうかを選択します。
「入力されたグループ名でサービス起動ユーザーのグループを作成します。既存のグループを使用する場合、または、作成するグループ名を変更する場合は、「いいえ」を選択してください。」
・入力したグループが存在していて、［サービス起動ユーザー情報］画面で入力したユーザーがメンバーに含まれていない場合、画面に次のメッセージが表示されます。サービス起動ユーザーをメンバーに追加するかどうかを選択します。
「入力されたグループの次の設定を変更します。ほかのグループを使用する場合は、「いいえ」を選択してください。サービス起動ユーザーをグループメンバーに追加」

58. ［次へ］をクリックします。
［SSL 構成の選択］画面が表示されます。

補足 IIS の「Web サイト」が複数存在する場合は、［SSL 構成の選択］画面の前に［IIS の Web サイトの選択］画面が表示されます。

59. ［SSL を使用しない］を選択します。

補足 ［SSL アクセラレーターを使用する］を選択する場合は、別途ハードウェアの設定が必要となります。詳細については、弊社担当者に確認してください。

参照 ［SSL 構成の選択］画面で、［HTTP サービスに直接 SSL を設定する］を選択した場合の操作については、「付録 B HTTP サービスに直接 SSL を設定する」（P.422）を参照してください。

60. ［次へ］をクリックします。
［HTTP サービスの情報］画面が表示されます。

61. このコンピューターにインストールする HTTP サービスの［ホスト名］、［ポート番号］、および［仮想ディレクトリー名］を確認します。

◆ SSL アクセラレーターを使用する場合

(1) SSL アクセラレーターの設定情報を入力します。

◆ HTTP サービスに直接 SSL を設定する場合

(1) IIS に設定するサーバー名などを入力します。ポート番号には、ほかのソフトウェアが使用していないポート番号を入力します。

◆ SSL アクセラレーターを使用せず、ロードバランサーも使用しない場合

(1) IIS に設定するサーバー名などを入力します。

(2) ポート番号に、ほかのソフトウェアが使用していないポート番号を入力します。

◆ SSL アクセラレーターを使用せず、ロードバランサーを使用する場合

(1) ロードバランサーの設定情報を入力します。

補足 仮想ディレクトリー名には、半角英数字だけ入力可能です。

62. ［次へ］をクリックします。
［アクセス制御情報］画面が表示された場合は、手順 64 に進みます。
［HTTP サービスのサービス間通信ポート番号］画面が表示された場合は、次の手順に進みます。

補足 ［HTTP サービスのサービス間通信ポート番号］画面は、次の場合に表示されます。
・手順 11 で「分散サーバー構成」を選択した場合
・手順 11 で「分散サーバー構成」を選択していない場合で、手順 59 で［HTTP サービスに直接 SSL を設定する］、または［SSL アクセラレーターを使用する］を選択したとき
それ以外の場合は、［アクセス制御情報］画面が表示されます。

63. ［ポート番号］を確認して、［次へ］をクリックします。
［アクセス制御情報］画面が表示されます。

64. アクセスを受け付けるホストを制限する場合は、［以下のホストからのアクセスのみ受け付ける］を選択します。制限しない場合は、［全てのホストからのアクセスを受け付ける］を選択します。

注記 ［追加］をクリックして、すべてのコンポーネントサーバー、リポジトリーサーバーの IP アドレスを追加してください。なお、SSL アクセラレーター、ロードバランサー、またはプロキシサーバーを使用する場合は、それらの IP アドレスも追加してください。

補足 ホスト名および IP アドレスは、追加、削除できます。［編集］をクリックし、ArcSuite をインストールするサーバーの IP アドレスを入力します。

65. ［次へ］をクリックします。
［ログイン方法の選択］画面が表示されます。

66. ［自動ログインを使用する］を選択します。

補足 ログイン方法の動作は次のとおりです。

・［自動ログインを使用する］
ユーザー認証に 1 度成功すると、2 度め以降はユーザー認証することなくログインできます。
- 自動ログインでユーザー認証に成功していない場合：
1 度めは、入力フォームでユーザーがログイン名とパスワードを入力する必要があります。クライアントからサーバーに、パスワードと秘密情報の通信のための情報が送られます。サーバーでパスワードが確認されると、自動ログイン用秘密情報が生成され、クライアントに送られます。これでログイン状態になります。
その後は、ユーザー認証することなくログインできます。
- 自動ログインでユーザー認証に成功している場合：
認証処理を意識することなく、自動ログインに参加しているアプリケーションを選択できます。

・［常にログインフォームを使用する］
ログインするときに毎回ユーザー認証します。入力フォームでユーザーがログイン名とパスワードを毎回入力することになります。

・［統合 Windows 認証を使用する］
統合 Windows 認証では、Web ブラウザーを利用している Windows のログイン済みの状態が ArcSuite に引き継がれます。そのため、ユーザ名、およびパスワードの入力を省略できます。

67. ［次へ］をクリックします。
［データベースのポータル用表領域作成］画面が表示されます。

68. ［表領域名］および［データファイル名］を確認します。

69. ［次へ］をクリックします。
［データベースポータル用ユーザー作成］画面が表示されます。

70. ［ユーザー名］を確認します。

71. ［パスワード］および［パスワード確認］を入力します。ここでは、「PORTAL」と入力します。

参照 各コンポーネントのユーザー名およびパスワードについては、「1.3 セットアップ前の設定事項」(P.225)を参照してください。

72. ［次へ］をクリックします。
［RMI レジストリサービスのポート番号］画面が表示されます。

73. RMI レジストリサービスで使用する［ポート番号］を確認します。

補足 通常は初期値を使用します。表示されている番号を別のソフトウェアが使用している場合は、未使用のポート番号に変更します。

74. ［次へ］をクリックします。
［ログ管理サービスのポート番号］画面が表示されます。

75. ログ管理サービスで使用する［ポート番号］を確認します。

補足 通常は初期値を使用します。表示されている番号を別のソフトウェアが使用している場合は、未使用のポート番号に変更します。

76. [次へ] をクリックします。

［ファイルコピーの開始］画面が表示されます。

77. [次へ] をクリックします。

インストールが開始されます。インストールが終了すると、リポジトリーサーバーのインストールを確認する画面が表示されます。

注記 ファイアウォールサービスが起動している場合は、インストールの開始前にファイアウォールの設定を確認する画面が表示されます。

設定する場合は［はい］を選択します。すでにファイアウォールを設定している場合、または Windows ファイアウォールを使用しない場合は、［いいえ］を選択してください。

78. この画面が表示されている状態で、「5.1 リポジトリーサーバーの設定」（P.260）に進みます。

注記 リポジトリーサーバーの設定が終わっていないと、正常に動作しないことがあります。ドキュメント管理サービスのインストールを終了してから、手順 79 へ進んでください。

79. リポジトリーサーバーの設定が終わったら、［OK］をクリックします。

「7 コンポーネントサーバーの設定」（P.274）に進みます。

5 リポジトリーサーバーの設定

リポジトリーサーバーの設定をします。

5.1 リポジトリーサーバーの設定

リポジトリーサーバーに、ドキュメント管理サービスの共通設定とセットアップを行います。

5.1.1 リポジトリーサーバーの共通設定

リポジトリーサーバーとして使用するサーバーに、共通設定をします。

リポジトリーサーバーの共通設定をする

共通設定の手順は次のとおりです。

1. リポジトリーサーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. 「ArcSuite 4.0 インストール」インストールメディアを、ドライブにセットします。
3. 「{インストールメディア} :¥Service¥ArcSuite¥setup.exe」をダブルクリックします。
   [ArcSuite セットアップへようこそ] 画面が表示されます。
4. [次へ] をクリックします。
   [インストールの確認] 画面が表示されます。
5. [OK] をクリックします。
   ライセンスアクティベーターの画面が表示されます。

   補 足 [キャンセル] を選択した場合は、ドキュメント管理サービスのインストールを終了します。

6. [ライセンス登録] をクリックします。
   シリアル番号を入力する画面が表示されます。
7. 弊社より発行されたシリアル番号を入力します。
   テキストファイルで発行されたシリアル番号がある場合は、格納場所を指定してファイルをインポートします。

   補 足 シリアル番号の追加および削除は、[追加]、[削除] をクリックして表示される画面でします。

8. [次へ] をクリックし、ライセンス認証を完了させます。

   参 照 ライセンス認証完了までの手順は、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「4.1 共通設定」(P.57) の手順 7 ～ 12 を参照してください。

9. [License Activator] 画面で [終了] をクリックします。
   ライセンスアクティベーターの終了を確認する画面が表示されます。
10. [はい] をクリックします。
    [機能の選択] 画面が表示されます。
    ライセンスをインストールしたコンポーネントのチェックボックスにチェックマークが付いています。
11. インストールが必要なコンポーネントを選択して、[次へ] をクリックします。
    [インストールするコンポーネントの確認] 画面が表示されます。
12. インストールするコンポーネントを確認します。

13. [次へ] をクリックします。
使用許諾契約の画面が表示されます。

14. 使用許諾契約を読み、同意する場合は、[使用許諾契約の全条項に同意します] を選択し、[次へ] をクリックします。
[ユーザ情報] 画面が表示されます。

15. [ユーザ名] と [会社名] を確認します。

補足 [ユーザ名] と [会社名] には、OS に設定されている内容が表示されます。

16. [次へ] をクリックします。
[モード選択] 画面が表示されます。

17. モードを選択します。ここでは、[通常モード] をクリックします。

18. [次へ] をクリックします。
インストール先を選択する画面が表示されます。

注記 インストール先には、ネットワークドライブ上のパスを指定しないでください。

19. [参照] をクリックして、インストール先を指定します。ここでは、「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」を指定します。

補足 インストール先の初期値は、「C:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」です。

20. [次へ] をクリックします。
データ格納先を選択する画面が表示されます。

21. [参照] をクリックするか、フォルダー名を直接入力して、ユーザーデータの格納先を指定します。ここでは、「D:¥ArcSuite」を指定します。

注記 データ格納先には、ネットワークドライブ上のパスを指定しないでください。

補足 ・ユーザーデータの格納先の初期値は、「C:¥ArcSuite」です。
・データ格納先には、半角英数字だけ使用できます。

22. [次へ] をクリックします。
[データベースのサーバー情報] 画面が表示されます。

補足 データベースとは、ArcSuite システムの設定情報が保存されているデータベースです。

23. [サーバー名] と [ポート番号] を確認します。

補足 [サーバー名] には、データベースサーバーのホスト名が表示されます。

24. [グローバルデータベース名] を入力します。
ここでは、「arcsuite.example.com」と入力します。

補足 ここで入力する [グローバルデータベース名] は、コンポーネントサーバーのインストール時に作成した、RMS データベースと同じサーバー情報です。

参照 各コンポーネントのユーザー名およびパスワードについては、「1.3 セットアップ前の設定事項」(P.225) を参照してください。

25. [次へ] をクリックします。
[データベースの管理者情報] 画面が表示されます。

26. [パスワード] に、データベース管理者のパスワードを入力します。ここでは、「System0」と入力します。

27. [次へ] をクリックします。
[データベースの RMS 用ユーザー情報] 画面が表示されます。

28. RMS データベースへアクセスするための、RMS 用ユーザーの［ユーザー名］を入力します。

注記 ・コンポーネントサーバーと同じユーザー名を入力してください。新規でデータベースを構築しないでください。
・ここで入力するユーザー名は、追加するコンポーネントをインストールするときに、入力が必要となる場合があります。忘れないようにしてください。

29. ［パスワード］、および［パスワード確認］を入力します。ここでは、「rms」と入力します。

注記 ・コンポーネントサーバーと同じパスワードを入力してください。新規でデータベースを構築しないでください。
・ここで入力するパスワードは、追加するコンポーネントをインストールするときに、入力が必要となる場合があります。忘れないようにしてください。

30. ［次へ］をクリックします。
［データファイルの配置先］画面が表示されます。

31. ［データファイルの配置先］にデータベースのデータファイルの配置先を指定します。

注記 初期値で表示された配置先のフォルダーとは別のフォルダーを指定する場合は、あらかじめデータベースがインストールされたサーバーでフォルダーを作成しておき、作成したフォルダーのパスを指定してください。
フォルダーを作成していなかった場合は、インストールできなくなります。

補足 UNC 形式のファイルパスは指定できません。

32. ［次へ］をクリックします。
［コンピュータのホスト名］画面が表示されます。

33. ［ホスト名］を確認します。

34. ［次へ］をクリックします。
［コンピュータの設置場所］画面が表示されます。

35. コンピューターの設置場所を、日本語と英語で入力します。

・［設置場所（JA)］
日本語で入力します。
・［設置場所（EN)］
英語で入力します。

ここでは、［設置場所（JA)］に「サーバールーム」、［設置場所（EN)］に「ServerRoom」と入力します。

補足 ここで入力した文字列は、RMS データベースに登録する属性として使用されます。

36. ［次へ］をクリックします。
［サービス起動ユーザー情報］画面が表示されます。

37. ［ユーザー名］を確認します。ユーザー名は、ローカルユーザーかドメインユーザーのユーザー名のどちらかです。ドメインユーザーの場合は、次の形式で表示されます。
{ドメイン名} ￥ {ユーザー名}

補足 ・ユーザー名に「_ （アンダースコア)」を含む文字列を指定した場合、次のメッセージが表示されます。ユーザー名を変更するかどうかを選択します。
「jconsole を用いた監視機能を使用する場合は、「はい」を選択し、「_ （アンダースコア)」を含まないユーザー名に変更してください。利用しない場合は、「いいえ」を選択しインストールを継続してください。」
・入力されたユーザーが「サービスとしてログオン」権限を持たない場合、次のメッセージが表示されます。権限を付与するかどうかを選択します。
「入力されたユーザーの次の設定を変更します。ほかのユーザーを使用する場合は、「いいえ」を選択してください。サービスとしてログオン権限の付与」
・ユーザー名をローカルユーザーとして入力しても、既存のローカルユーザーに存在しなかった場合、次のメッセージが表示されます。ローカルユーザーを新規作成するかどうかを選択します。

「入力されたユーザー名とパスワードでサービス起動ユーザーを作成します。既存のユーザーを使用する場合、または、作成するユーザーを変更する場合は、「いいえ」を選択してください。」

38. [パスワード] を入力します。ここでは、「ArcSuite001」と入力します。

39. [次へ] をクリックします。
[サービス起動ユーザーのグループ情報] 画面が表示されます。

40. サービス起動ユーザーが所属するグループの [グループ名] を確認します。

補足
- 入力したグループが存在しない場合、次のメッセージが表示されます。ローカルグループを新規作成するかどうかを選択します。
「入力されたグループ名でサービス起動ユーザーのグループを作成します。既存のグループを使用する場合、または、作成するグループ名を変更する場合は、「いいえ」を選択してください。」
- 入力したグループが存在しても、[サービス起動ユーザー情報] 画面で入力したユーザーがメンバーに含まれていない場合、次のメッセージが表示されます。サービス起動ユーザーをメンバーに追加するかどうかを選択します。
「入力されたグループの次の設定を変更します。ほかのグループを使用する場合は、「いいえ」を選択してください。サービス起動ユーザーをグループメンバーに追加」

41. [次へ] をクリックします。
[ログ管理サービスのポート番号] 画面が表示されます。

42. [次へ] をクリックします。
ファイルのコピーが開始されます。コピーが完了すると、ドキュメント管理サービスのインストーラーが自動的に起動します。

注記 ファイアウォールサービスが起動している場合は、インストールの開始前にファイアウォールの設定を確認する画面が表示されます。
設定する場合は、[はい] を選択します。すでにファイアウォールを設定している場合、または Windows ファイアウォールを使用しない場合は、[いいえ] を選択してください。

参照 ドキュメント管理サービスのインストールについては、「5.1.2 ドキュメント管理サービスのインストール」(P.263) を参照してください。

リポジトリーサーバーの共通設定は終了です。

5.1.2 ドキュメント管理サービスのインストール

ドキュメント管理サービスをインストールします。
共通設定が完了すると、自動的にドキュメント管理サービスのインストール画面が表示されます。
インストールする手順は次のとおりです。

1. [ArcSuite ドキュメント管理サービスセットアップへようこそ] 画面で、[次へ] をクリックします。
[サービス ID の登録] 画面が表示されます。

2. [サービス ID] にドキュメント管理サービスのサービス ID を入力します。ここでは、「arcsuite」と入力します。

補足
- 先頭が英字で、それ以降は英数字、「 _ 」(アンダースコア)」で構成された 30 文字以内の文字列を入力します。
- マルチバイト文字は使用できません。
- ここでは、RMS 内で重複する [サービス ID] は設定できません。
- 初期値には、メインインストーラーで入力された「ホスト名」がドメイン無しホスト名として設定されます。

3. [次へ] をクリックします。
[サーバー ID の登録] 画面が表示されます。

4. ドキュメント管理サービス内でサーバーを一意に識別するための [サーバー ID] を入力します。

補足
- 英数字、「- （ハイフン）」、「. （ピリオド）」で構成された 64 文字以内の文字列を入力します。
- マルチバイト文字は使用できません。
- RMS 内で重複する［サーバー ID］は設定できません。
- 初期値には、メインインストーラーで入力された「ホスト名」がドメイン無しホスト名として設定されます。

5. ［次へ］をクリックします。
［ユーザー定義属性の名前空間登録］画面が表示されます。

6. ［名前空間］を入力します。

補足
- 先頭が英字、それ以降は英数字、「_ （アンダースコア）」で構成された 64 文字以内の文字列を入力します。
- マルチバイト文字は使用できません。
- 大文字、小文字、どちらの場合でも、「system」は使用できません。
- 初期値には「user」が設定されています。

7. ［次へ］をクリックします。
［データベースのサーバー情報］画面が表示されます。

8. データベースをインストールしたときに指定した［サーバー名］、［ポート番号］、および［グローバルデータベース名］を入力します。

補足 「データベースのサーバー情報」画面の初期値には、メインインストーラーで指定したデータベースの情報が設定されています。

9. ［次へ］をクリックします。
［データベースの管理者情報］画面が表示されます。

10. ［パスワード］にデータベースのサーバー管理者のパスワードを入力します。ここでは、「System0」と入力します。

11. ［次へ］をクリックします。
［データベースのドキュメント管理サービス用表領域作成］画面が表示されます。

12. ［表領域名］と［データファイル名］を入力します。

補足
- ［表領域名］は、先頭が英字、それ以降は英数字、「_ （アンダースコア）」で構成された 30 文字以内の文字列を入力します。
- ［表領域名］には、マルチバイト文字は使用できません。
- ［表領域名］には、システム表領域、データベースの予約語、すでに存在する表領域は使用できません。
- ［データファイル名］は、先頭が英字、それ以降は英数字、「_ （アンダースコア）」、「. （ピリオド）」、「 （スペース）」で構成された文字列を入力します。
- ［データファイル名］には、マルチバイト文字は使用できません。
- ［データファイル名］には、すでに使用されているデータファイルは使用できません。ファイル名だけを指定してください。
- ［表領域名］の初期値には、「DREPSYS」が設定されています。
- ［データファイル名］の初期値には、「DREPSYS.dbf」が設定されています。

13. ［次へ］をクリックします。
［データベースのドキュメント管理サービス用一時表領域作成］画面が表示されます。

14. ［一時表領域名］と［データファイル名］を入力します。

補足
- ［一時表領域名］は、先頭が英字、それ以降は英数字、「_ （アンダースコア）」で構成された 30 文字以内の文字列で入力します。
- ［一時表領域名］には、マルチバイト文字は使用できません。
- ［一時表領域名］には、システム表領域、データベースの予約語、すでに存在する表領域は使用できません。

・[データファイル名] は、先頭が英字、それ以降は英数字、「_ (アンダースコア)」、「. (ピリオド)」、「 (スペース)」で構成された文字列を入力します。
・[データファイル名] には、マルチバイト文字は使用できません。
・[データファイル名] には、すでに使用されているデータファイルは使用できません。ファイル名だけを指定してください。
・[一時表領域名] の初期値には「DREPTEMP」が設定されています。
・[データファイル名] の初期値には「DREPTEMP.dbf」が設定されています。

15. [次へ] をクリックします。
[データベースのドキュメント管理サービス用ユーザー作成] 画面が表示されます。

補足 [データベースのドキュメント管理サービス用ユーザー作成] 画面は、リポジトリーサーバー (マスター管理サーバー) を新規でインストールする場合に表示されます。
バージョンアップ、再インストール、または追加リポジトリーサーバー (スレーブ管理サーバー) を新規でインストールする場合は、[データベースのドキュメント管理サービス用ユーザー情報] 画面が表示されます。

16. [ユーザー名] を入力します。

補足 ・[ユーザー名] は、先頭が英字、それ以降は英数字、「_ (アンダースコア)」で構成された 30 文字以内の文字列を入力します。
・[ユーザー名] には、マルチバイト文字は使用できません。
・[ユーザー名] には、「SYS_」で始まる文字列、データベースの予約ユーザー、予約語、すでに使用されているユーザー名は使用できません。
・[ユーザー名] の初期値には「DREP」が設定されています。

17. [パスワード] および [パスワード確認] にパスワードを入力します。ここでは、「drep」と入力します。

補足 ・[パスワード] は、先頭が英字、それ以降は英数字、「_ (アンダースコア)」で構成された 30 文字以内の文字列で入力します。
・[パスワード] には、マルチバイト文字は使用できません。

18. [次へ] をクリックします。
[管理サーバーの情報] 画面が表示されます。

19. [ポート番号] を確認します。

補足 ・[ポート番号] には、1 ～ 65535 までの整数値を入力します。
・初期値には「11100」が設定されています。

20. [次へ] をクリックします。
[リポジトリーサーバーの情報] 画面が表示されます。

21. [ポート番号] を入力します。

補足 ・[ポート番号] には、[管理サーバーの情報] 画面のものとは異なる、1 ～ 65535 までの整数値を入力します。
・初期値には「11101」が設定されています。

22. [次へ] をクリックします。
[ファイルコピーの開始] 画面が表示されます。

23. インストールの内容を確認し、[次へ] をクリックします。
インストールが開始されます。インストールが終了すると、[セットアップの完了] 画面が表示されます。

24. [完了] をクリックします。
[セットアップの完了] 画面が表示されます。

25. [はい、今すぐコンピュータを再起動します。] を選択します。

26. [完了] をクリックします。
サーバーが再起動されます。

ドキュメント管理サービスのインストールは終了です。

サーバーが再起動したら、
リポジトリーサーバーが1台の場合は、「4 コンポーネントサーバーの共通設定」（P.250）の手順79に進みます。
リポジトリーサーバーが2台の場合は、「6 追加リポジトリーサーバーの設定」（P.267）に進みます。

6 追加リポジトリーサーバーの設定

追加リポジトリーサーバーの設定をします。

6.1 追加リポジトリーサーバーおよびスレーブ管理サーバーの追加

クラスター構成として追加リポジトリーサーバーとスレーブ管理サーバーを用意する場合、リポジトリーサーバーを追加する操作をします。
ここでは、リポジトリーサーバーおよびスレーブ管理サーバーとしてサーバーを使用する場合の手順を説明します。

補足 クラスター構成でない場合は、ここで説明する作業は必要ありません。

6.1.1 サービス起動ユーザーの設定

ドキュメント管理サービスのセットアップを実行する前に、次の作業します。

サービス起動ユーザーを設定する

追加のリポジトリーサーバーおよびスレーブ管理サーバーとして使用するサーバーに、次のサービス起動ユーザーとグループを作成します。

・ユーザー
ARCUSRSVC

・グループ
ARCGRPSVC

参照 操作の詳細については、「2.1.2 Windows のサービス起動ユーザーの設定」（P.239）を参照してください。

6.1.2 追加リポジトリーサーバーおよびスレーブ管理サーバーの共通設定

追加のリポジトリーサーバーおよびスレーブ管理サーバーとして使用するサーバーに、追加リポジトリーサーバーおよびスレーブ管理サーバーの共通設定をします。

1. 追加リポジトリーサーバーおよびスレーブ管理サーバーとして使用するサーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. 「ArcSuite 4.0 インストール」インストールメディアを、ドライブにセットします。
3. 「{インストールメディア} :¥Service¥ArcSuite¥setup.exe」をダブルクリックします。
   [ArcSuite セットアップへようこそ] 画面が表示されます。
4. [次へ] をクリックします。
   [インストールの確認] 画面が表示されます。
5. [OK] をクリックします。
   [License Activator] 画面が表示されます。

   補足 [キャンセル] を選択した場合は、ドキュメント管理サービスのインストールを終了します。
6. [ライセンス登録] をクリックします。
   シリアル番号を入力する画面が表示されます。
7. 弊社より発行されたシリアル番号を入力します。
   テキストファイルで発行されたシリアル番号がある場合は、格納場所を指定してファイルをインポートします。

   補足 シリアル番号の追加および削除は、[追加]、[削除] をクリックして表示される画面でします。

8. [次へ] をクリックし、ライセンス認証を完了させます。

参照 ライセンス認証完了までの手順は、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「4.1 共通設定」(P.57) の手順 7 ～ 12 を参照してください。

9. [License Activator] 画面で [終了] をクリックします。
ライセンスアクティベーターの終了を確認する画面が表示されます。

10. [はい] をクリックします。
機能を選択する画面が表示されます。
ライセンスをインストールしたコンポーネントのチェックボックスにチェックマークが付いています。

11. インストールが必要なコンポーネントを選択して、[次へ] をクリックします。
インストールするコンポーネントを確認する画面が表示されます。

12. インストールするコンポーネントを確認します。

13. [次へ] をクリックします。
使用許諾契約の画面が表示されます。

補足 ・同意済みの使用許諾契約は、インストール終了後、次のパスに保存されます。
「{ArcSuite のインストールフォルダー} ¥License ArcSuite.txt」
・{ArcSuite のインストールフォルダー} は、手順 19 で指定するフォルダーです。たとえば、「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」です。

14. 使用許諾契約を読み、同意する場合は、[使用許諾契約の全条項に同意します] を選択し、[次へ] をクリックします。
[ユーザ情報] 画面が表示されます。

15. [ユーザ名] と [会社名] を確認します。

補足 [ユーザ名] と [会社名] には、OS に設定されている内容が表示されます。

16. [次へ] をクリックします。
[モード選択] 画面が表示されます。

注記 ・次の場合は、[簡易モード] を選択しないでください。
- ドキュメント管理サービスがクラスター構成である
- 2 セットめのドキュメント管理サービスをインストールする
- 負荷分散構成のコンポーネントサーバーのインストールする

・次の場合は、[通常モード] だけを選択できます。
- 「分散サーバー構成」を選択している
- 再インストールする
- すでにキャプチャリングサービスや統合検索サービスをインストールしている

17. モードを選択します。ここでは、[通常モード] をクリックします。

参照 [簡易モード] を選択してインストールする場合は、「付録 C 簡易モードでのインストール」(P.425) を参照してください。

18. [次へ] をクリックします。
インストール先を選択する画面が表示されます。

注記 インストール先には、ネットワークドライブ上のパスを指定しないでください。

19. [参照] をクリックして、インストール先を指定します。ここでは、「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」を指定します。

補足 インストール先の初期値は、「C:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」です。

20. [次へ] をクリックします。
[データ格納先の選択] 画面が表示されます。

21. [参照] をクリックするか、フォルダー名を直接入力して、ユーザーデータの格納先を指定します。ここでは、「D:¥ArcSuite」を指定します。

注記 データ格納先には、ネットワークドライブ上のパスを指定しないでください。

補足 ・ユーザーデータの格納先の初期値は、「C:¥ArcSuite」です。
・データ格納先には、半角英数字だけ使用できます。

22. [次へ] をクリックします。
[データベースのサーバー情報] 画面が表示されます。

補足 データベースとは、ArcSuite システムの設定情報が保存されているデータベースです。

23. [サーバー名] と [ポート番号] を確認します。

補足 [サーバー名] には、データベースサーバーのホスト名が表示されます。

24. [グローバルデータベース名] を入力します。
ここでは、「arcsuite.example.com」と入力します。

補足 ここで入力する [グローバルデータベース名] は、コンポーネントサーバーのインストール時に作成した、RMS データベースと同じサーバー情報です。

参照 各コンポーネントのユーザー名およびパスワードについては、「1.3 セットアップ前の設定事項」(P.225) を参照してください。

25. [次へ] をクリックします。
[データベースの管理者情報] 画面が表示されます。

26. [パスワード] を入力します。ここでは、「System0」と入力します。

補足 [パスワード] には、データベース管理者のパスワードが表示されます。

27. [次へ] をクリックします。
[データベースの RMS 用ユーザー情報] 画面が表示されます。

28. RMS データベースへアクセスするための、RMS 用ユーザーの [ユーザー名] を確認します。

注記 新規でデータベースを構築しないでください。コンポーネントサーバーと同じ [ユーザー名]、[パスワード] を入力してください。

29. [パスワード]、および [パスワード確認] を入力します。ここでは、「rms」と入力します。

30. [次へ] をクリックします。
[データファイルの配置先] 画面が表示されます。

31. [データファイルの配置先] にデータベースのデータファイルの配置先を指定します。

補足 「4.1.2 コンポーネントサーバーの共通設定」(P.251) の手順 33 で、データファイルの配置先に指定したフォルダーと、同じフォルダー階層になるように配置先を指定してください。

32. [次へ] をクリックします。
[コンピュータのホスト名] 画面が表示されます。

33. [ホスト名] を確認します。

34. [次へ] をクリックします。
[コンピュータの設置場所] 画面が表示されます。

35. コンピューターの設置場所を、日本語と英語で入力します。

・［設置場所（JA)］
日本語で入力します。

・［設置場所（EN)］
英語で入力します。

ここでは、［設置場所（JA)］に「サーバールーム」、［設置場所（EN)］に「ServerRoom」と入力します。

補足 ここで入力した文字列は、RMS データベースに登録する属性として使用されます。

36. ［次へ］をクリックします。

［サービス起動ユーザー情報］画面が表示されます。

37. ［ユーザー名］を確認します。ユーザー名は、ローカルユーザーかドメインユーザーのユーザー名のどちらかです。ドメインユーザーの場合は、次の形式で表示されます。
{ドメイン名} ￥ {ユーザー名}

補足
・ユーザー名に「_（アンダースコア)」を含む文字列を指定した場合、次の画面が表示され、ユーザー名を変更するかどうかを選択します。
「jconsole を用いた監視機能を使用する場合は、「はい」を選択し、「_（アンダースコア)」を含まないユーザー名に変更してください。利用しない場合は、「いいえ」を選択しインストールを継続してください。」
・入力されたユーザーが「サービスとしてログオン」権限を持たない場合、画面に次のメッセージが表示されます。権限を付与するかどうかを選択します。
「入力されたユーザーの次の設定を変更します。ほかのユーザーを使用する場合は、「いいえ」を選択してください。サービスとしてログオン権限の付与」
・ユーザー名をローカルユーザーとして入力しても、既存のローカルユーザーに存在しなかった場合、画面に次のメッセージが表示されます。ローカルユーザーを新規作成するかどうかを選択します。
「入力されたユーザー名とパスワードでサービス起動ユーザーを作成します。既存のユーザーを使用する場合、または、作成するユーザーを変更する場合は、「いいえ」を選択してください。」

38. ［パスワード］を入力します。ここでは「ArcSuite001」と入力します。

39. ［次へ］をクリックします。

［サービス起動ユーザーのグループ情報］画面が表示されます。

40. サービス起動ユーザーが所属するグループの［グループ名］を確認します。

補足
・入力したグループが存在しない場合、画面に次のメッセージが表示されます。ローカルグループを新規作成するかどうかを選択します。
「入力されたグループ名でサービス起動ユーザーのグループを作成します。既存のグループを使用する場合、または、作成するグループ名を変更する場合は、「いいえ」を選択してください。」
・入力したグループが存在しても、［サービス起動ユーザー情報］画面で入力したユーザーがメンバーに含まれていない場合、画面に次のメッセージが表示されます。サービス起動ユーザーをメンバーに追加するかどうかを選択します。
「入力されたグループの次の設定を変更します。ほかのグループを使用する場合は、「いいえ」を選択してください。サービス起動ユーザーをグループメンバーに追加」

41. ［次へ］をクリックします。

ファイルのコピーが開始されます。コピーが完了すると、ドキュメント管理サービスのインストーラーが自動的に起動します。

参照 追加リポジトリーサーバーのインストールについては、「6.1.3 追加リポジトリーサーバーおよびスレーブ管理サーバーのインストール」（P.272）を参照してください。

追加リポジトリーサーバーの共通設定は終了です。

6.1.3 追加リポジトリーサーバーおよびスレーブ管理サーバーのインストール

共通設定が完了したら、追加リポジトリーサーバーおよびスレーブ管理サーバーに、ドキュメント管理サービスをインストールします。自動的にドキュメント管理サービスのインストーラーが起動します。

ドキュメント管理サービスをインストールする

1. [ArcSuite ドキュメント管理サービスセットアップへようこそ] 画面で、[次へ] をクリックします。
   [サービス ID の登録] 画面が表示されます。
2. 表示されている内容を確認します。
3. [次へ] をクリックします。
   [サービス ID の登録] 画面が表示されます。
4. [サービス ID] に、ドキュメント管理サービスのサービス ID を入力します。
   ここでは、「arcsuite」と入力します。

   補足
   - 先頭が英字、それ以降は英数字、「_ (アンダースコア)」で構成された 30 文字以内の文字列を入力します。
   - マルチバイト文字は使用できません。
   - ここでは、スレーブ管理サーバーをインストールするので、RMS 内に存在する [サービス ID] を設定します。
   - 追加リポジトリーサーバーにインストールする場合は、リポジトリーサーバーごとに異なるサービス ID を入力します。
   - 初期値には、メインインストーラーで入力された「ホスト名」がドメイン無しホスト名として設定されます。

   参照 各コンポーネントのユーザー名およびパスワードについては、「1.3 セットアップ前の設定事項」(P.225) を参照してください。
5. [次へ] をクリックします。
   [サーバー ID の登録] 画面が表示されます。
6. ドキュメント管理サービス内でサーバーを一意に識別するための [サーバー ID] を、入力します。

   補足
   - 英数字、「- (ハイフン)」、「. (ピリオド)」で構成された 64 文字以内の文字列を入力します。
   - マルチバイト文字は使用できません。
   - RMS 内で重複するサーバー ID は設定できません。
   - 初期値には、メインインストーラーで入力された「ホスト名」がドメイン無しホスト名として設定されます。
7. [次へ] をクリックします。
   [データベースのサーバー情報] 画面が表示されます。
8. データベースをインストールしたときに指定した [サーバー名]、[ポート番号]、および [グローバルデータベース名] を入力します。

   補足 「データベースのサーバー情報」画面の初期値には、メインインストーラーで指定したデータベースの情報が設定されます。
9. [次へ] をクリックします。
   [データベースの管理者情報] 画面が表示されます。
10. [パスワード] にデータベース管理者のパスワードを入力します。ここでは、「System0」と入力します。

11. [次へ] をクリックします。
[データベースのドキュメント管理サービス用ユーザー情報] 画面が表示されます。

12. [ユーザー名] を入力します。

補足
- 先頭が英字、それ以降は英数字、「_ (アンダースコア)」で構成された 30 文字以内の文字列を入力します。
- マルチバイト文字は使用できません。
- 初期値には「DREP」が設定されます。
- データベースに接続できる値を入力します。

13. [パスワード] にパスワードを入力します。ここでは [drep] を入力します。

補足
- 先頭が英字、それ以降は英数字、「_ (アンダースコア)」で構成された 30 文字以内の文字列を入力します。
- マルチバイト文字は使用できません。
- データベースに接続できる値を入力します。
- ドキュメント管理サービスのスキーマに入力したサービス ID が存在することを確認します。

14. [次へ] をクリックします。
[管理サーバーの情報] 画面が表示されます。

15. [ポート番号] を入力します。

補足 [ポート番号] には、1 ～ 65535 までの整数値を入力します。

16. [次へ] をクリックします。
[リポジトリーサーバーの情報] 画面が表示されます。

17. [ポート番号] を確認します。

補足 [ポート番号] には、[管理サーバーの情報] 画面のものとは異なる、1 ～ 65535 までの整数値を入力します。

18. [次へ] をクリックします。
[ファイルコピーの開始] 画面が表示されます。

19. インストールの内容を確認します。

20. [次へ] をクリックします。
インストールが開始されます。インストールが終了すると、[セットアップの完了] 画面が表示されます。

注記 ファイアウォールサービスが起動している場合は、インストールの開始前にファイアウォールの設定を確認する画面が表示されます。
設定する場合は、[はい] を選択します。すでにファイアウォールを設定している場合、または Windows ファイアウォールを使用しない場合は、[いいえ] を選択してください。

21. [はい、今すぐコンピュータを再起動します。] を選択します。

22. [完了] をクリックします。
サーバーが再起動されます。

追加リポジトリーサーバーおよびスレーブ管理サーバーのインストールは終了です。
「4 コンポーネントサーバーの共通設定」(P.250) の手順79へ進みます。

7 コンポーネントサーバーの設定

コンポーネントサーバーの設定をします。

7.1 メッセージ通知サービスのインストール

コンポーネントサーバーとして使用するサーバーに、メッセージ通知サービスをインストールします。

参照 インストール手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「6.1 メッセージ通知サービスのインストール」(P.70) を参照してください。

7.2 ドキュメントスペースのインストール

コンポーネントサーバーとして使用するサーバーに、ドキュメントスペースをインストールします。

参照 インストール手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「7.1 ドキュメントスペースのインストール」（P.73）を参照してください。

7.3 コラボスペースのインストール

コンポーネントサーバーとして使用するサーバーに、コラボスペースをインストールします。

参照 インストール手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「8.1 コラボスペースのインストール」（P.75）を参照してください。

7.4 ドキュメントレビューオプションのインストール

コンポーネントサーバーとして使用するサーバーに、ドキュメントレビューオプションをインストールします。

参照 インストール手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「ドキュメントレビューオプションのインストール手順」（P.78）を参照してください。

7.5 ワークフローのインストール

コンポーネントサーバーとして使用するサーバーに、ワークフローをインストールします。

参照 インストール手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「10.1 ワークフローのインストール」（P.80）を参照してください。

7.6 原本性保証オプションのインストール

コンポーネントサーバーとして使用するサーバーに、原本性保証オプションをインストールします。

補 足 原本性保証オプションをインストールする場合には、あらかじめアマノタイムスタンプサービスと契約しライセンスファイルを入手する必要があります。詳しくは、『e- 文書法対応 概要説明書』を参照してください。

参 照 ・原本性保証オプションの初期設定については、『e- 文書法対応 概要説明書』を参照してください。

・インストール手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「11.1 原本性保証オプションのインストール」（P.82）を参照してください。

7.7 サーバーの再起動

コンポーネントのインストールが終了すると、［セットアップの完了］画面が表示されます。

1. ［はい、今すぐコンピュータを再起動します。］を選択します。
2. ［完了］をクリックします。
   サーバーが再起動されます。

8 Webブラウザーの設定

ArcSuiteを使用するWebブラウザーの設定について説明します。

8.1 Internet Explorer の設定

ArcSuiteを使用するWebブラウザーがInternet Explorerの場合は、Internet Explorerの設定が必要です。

参照 Internet Explorer の設定については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「13.1 Internet Explorer の設定」（P.87）を参照してください。

8.2 Google Chrome の設定

ArcSuiteを使用するWebブラウザーがGoogle Chromeの場合は、Google Chromeの設定が必要です。

参照 Google Chrome の設定については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「13.2 Google Chrome の設定」（P.93）を参照してください。

8.3 Microsoft Edge の設定

クライアントPCでArcSuiteを使用するWebブラウザーがMicrosoft Edgeの場合は、Microsoft Edgeの設定が必要です。

参照 Microsoft Edge の設定については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「13.3 Microsoft Edge の設定」（P.100）を参照してください。

8.4 Safari の設定

iPadでArcSuiteを使用する場合は、Safari（iOSまたはiPadOS標準ブラウザー）の設定が必要です。

参照 Safari の設定については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「13.4 Safari の設定」（P.101）を参照してください。

9 各コンポーネントの初期設定

9.1 ドキュメント管理サービスの初期設定

ドキュメント管理サービスの初期設定には、「ドキュメント管理サービス管理ツール」を使います。「ドキュメント管理サービス管理ツール」は、サーバー、サービス、キャビネット、およびドロワーを管理するためのツールで、ツールには3つの種類があります。

ここでは、主に「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版」と「ドキュメント管理サービス管理コマンド」を使用して、ドキュメント管理サービスの初期設定をする方法を説明します。

ここで設定する項目には、「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web版」では設定できない項目も含まれています。ここでは、設定できる項目だけ説明します。

ドキュメント管理サービスに設定する主な項目は次のとおりです。

・ユーザーアトムの追加

・ユーザー属性の追加

・標準キャビネット（cabinetLabel=public）の作成

・標準キャビネットドロワーの作成

・ワークスペースキャビネット（cabinetLabel=workspace）の作成

・ワークスペースキャビネットのドロワーの作成

・インデックスの追加

・キャビネットのモード変更

補足 ・ユーザーアトムの追加とユーザー属性の追加は必要に応じて行います。キャビネットに設定するユーザーアトム・ユーザー属性がある場合は必要な作業です。

・「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web 版」では、ユーザーアトムの追加、ユーザー属性の追加、および、インデックスの追加は設定できません。

9.1.1 ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版での設定方法

「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版」は、GUIを利用した管理ツールです。

ドキュメント管理サービスをインストールすると、自動的にドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版がインストールされます。ここでは、「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版」を使った初期設定の方法を説明します。

参照 ・「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版」の詳細については、『ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版のヘルプ』を参照してください。

・「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版」を使った初期設定の手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「14.1.1 ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版での設定方法」（P.103）を参照してください。

9.1.2 ドキュメント管理サービス管理コマンドでの設定方法

初期設定はリポジトリーサーバー（管理サーバーホスト）でします。
ドキュメント管理サービス管理コマンドを使用して、ドキュメント管理サービスを設定するためには、CSVファイルとコントロールファイルが必要です。ArcSuiteでは、それぞれの設定をするために必要なCSVファイルとコントロールファイルのサンプルファイルが用意されています。これらのサンプルファイルを使用して、設定できます。必要に応じて、サンプルファイルの内容を変更できます。

参照
- CSV ファイルとコントロールファイルの詳細については、『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。
- ドキュメント管理サービス管理コマンドの詳細については、『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。
- 「ドキュメント管理サービス管理コマンド」を使った初期設定の手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「14.1.2 ドキュメント管理サービス管理コマンドでの設定方法」（P.111）を参照してください。

9.1.3 ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web 版での設定方法

「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web版」は、クライアントPCからWebブラウザーを使って操作する管理ツールです。
ここでは、「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web版」を使った初期設定の方法を説明します。

参照
- 「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web 版」の詳細については、『ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web 版のヘルプ』を参照してください。
- 「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web 版」を使った初期設定の手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「14.1.3 ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web 版での設定方法」（P.114）を参照してください。

9.2 リソース管理アプリケーションでの初期設定

リソース管理アプリケーションを使用して、ドキュメントスペースの利用ユーザーを割り当てます。

参照 リソース管理アプリケーションを使用して、ドキュメントスペースの利用ユーザーの割り当てを行う手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「14.2 リソース管理アプリケーションでの初期設定」（P.126）を参照してください。

9.3 メッセージ通知管理アプリケーションでの初期設定

メッセージ通知管理アプリケーションの初期設定をします。

参照 メッセージ通知管理アプリケーションの初期設定の手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「14.3 メッセージ通知管理アプリケーションでの初期設定」(P.129)を参照してください。

9.4 ドキュメントスペース管理アプリケーションでの初期設定

ドキュメントスペース管理アプリケーションを使用して、属性テンプレートの作成とフォーマットを追加します。

参照 ドキュメントスペース管理アプリケーションを使用して、属性テンプレートの作成とフォーマットの追加を行う手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「14.4 ドキュメントスペース管理アプリケーションでの初期設定」(P.131)を参照してください。

9.5 全文検索サービスの初期設定

全文検索サービスを使用するために、リポジトリーサーバーで初期設定をします。
初期設定はドキュメント管理サービス管理アプリケーションまたはドキュメント管理サービス管理コマンドでできます。

参照
- ドキュメント管理サービス管理アプリケーションの詳細については、『ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版のヘルプ』を参照してください。
- ドキュメント管理サービス管理コマンドの詳細については、『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。
- 全文検索サービスを使用するための、リポジトリーサーバーでの初期設定手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「14.5 全文検索サービスの初期設定」（P.136）を参照してください。

9.6 関連文書検索サービスの初期設定

関連文書検索サービスを使用するために、リポジトリーサーバーで初期設定をします。
初期設定は、ドキュメント管理サービス管理アプリケーションまたはドキュメント管理サービス管理コマンドを使用します。関連文書検索サービス用のキャビネットのインデックスを作成する必要があります。

参照
- ドキュメント管理サービス管理アプリケーションの詳細については、『ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版のヘルプ』を参照してください。
- ドキュメント管理サービス管理コマンドの詳細については、『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。
- 関連文書検索サービスを使用するための、リポジトリーサーバーでの初期設定手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「14.6 関連文書検索サービスの初期設定」（P.140）を参照してください。

9.7 コラボスペースの初期設定

コラボスペースをインストールしたあと、ユーザーが利用できるように初期設定をします。

参照 コラボスペースの初期設定手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「14.7 コラボスペースの初期設定」（P.143）を参照してください。

9.8 ワークフローの初期設定

ワークフローをインストールしたあと、ユーザーが利用できるように初期設定をします。
また、「2台以上の構成」のうち「負荷分散構成」の場合は、外部コマンドを設定します。

9.8.1 初期設定

ワークフローの初期設定をします。

参照 ワークフローの初期設定手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「14.8 ワークフローの初期設定」（P.147）を参照してください。

9.8.2 負荷分散構成の外部コマンド設定

「2台以上の構成」のうち「負荷分散構成」でワークフローをインストールしたときの外部コマンドの設定方法について記載します。

負荷分散構成の場合に外部コマンドを使用するためには、外部コマンドの配置フォルダーとするフォルダーを作成して、アクセス権を設定する必要があります。
アクセス権を設定するときには、サービス起動ユーザー名およびパスワードを使用します。

このあとに、「arcsuite.example.com」というコンポーネントサーバーの「D:¥externalCmd」という共有ディスクを外部コマンド配置フォルダーにする例を説明します。

補足 外部コマンド配置フォルダーは、ArcSuite を冗長化する目的で ArcSuite サーバー以外のサーバーに作成することもできます。

共有ディスクを外部コマンド配置フォルダーにする

1. 外部コマンドの配置フォルダーを置くサーバーの「arcsuite.example.com」の［コントロールパネル］から［Windows ファイアウォール］または［Windows Defender ファイアウォール］を選択し、例外タブをクリックします。［プログラムおよびサービス］の欄内の［ファイルとプリンタの共有］にチェックマークが付いていることを確認します。
   チェックマークが付いていない場合は、チェックマークを付けます。
2. コンポーネントサーバー以外のサーバーにあるフォルダーを外部コマンド配置フォルダーとする場合は、そのサーバーに、コンポーネントサーバーと同じ名前とパスワードを持つサービス起動ユーザーを作成します。
3. 共有するフォルダー（この例では「D:¥externalCmd」）を作成し、その直下に「command」フォルダーを作成します。
4. エクスプローラーで共有するフォルダーを右クリックし、ショートカットメニューから、［プロパティ］を選択します。
   フォルダーのプロパティ画面が表示されます。
5. ［共有］タブを選択し、［詳細な共有］をクリックします。
6. ［このフォルダーを共有する］のチェックボックスにチェックマークを付けます。
7. ［アクセス許可］をクリックし、サービス起動ユーザー名（ここでは ARCUSRSVC）にフルコントロールのアクセス権を設定します。
8. フォルダーのプロパティ画面の［セキュリティ］タブを選択し、サービス起動ユーザー名（ここでは ARCUSRSVC）にフルコントロールのアクセス権を与えます。

9. ワークフロー管理ツールの「外部コマンド一覧」メニューから「外部コマンドの配置フォルダ」を設定します。

10. bat ファイルを起動する外部コマンドを使用する場合、次の手順を実施します。bat ファイルを起動する外部コマンドを使用しない場合は、手順 11 に進んでください。

(1) 「ArcSuite 4.0 インストール」インストールメディアを、ドライブにセットします。

(2) 「{インストールメディア} :¥Service¥Tools¥DisableUNCCheck¥AddDisableUNCCheck.reg」をダブルクリックします。
[AddDisableUNCCheck.reg 内の情報をレジストリに追加しますか？] という［レジストリエディタ］画面が表示されます。

(3) [はい] をクリックします。
[AddDisableUNCCheck.reg の情報がレジストリに正しく入力されました] という［レジストリエディタ］画面が表示されます。

(4) [OK] をクリックします。

11. 「負荷分散構成」を構成している、すべてのコンポーネントサーバーの「ArcSuite Web Application Service」を再起動します。
外部コマンドが正常に動作します。

9.9 監視サービスの初期設定

監視サービスは、ArcSuite関連のサービス系コンポーネントのWindowsサービスを監視します。
監視サービスは、「コンポーネントの共通設定」でインストールするコンポーネントです。
初期値の設定で監視が行われます。監視サービスの設定を変更する場合は、次の設定を行います。

・異常監視

・運用監視

参照 設定内容の詳細については、『システム管理者ガイド』を参照してください。

9.10 ファイルフォーマット変換サービスの初期設定

ファイルフォーマット変換サービスでフォーマット変換をするための初期設定をします。
セカンダリーコンテントの作成、コントロールビューの表示、スタンプの付与、またはドキュメントレビューオプションなどを使用するために設定します。
なお、ファイルフォーマット変換サービスの初期設定をするには、「ArcSuite 4.0 インストール」インストールメディアが必要です。

9.10.1 DocuWorks のインストール後の設定をする

DocuWorksをインストールしたあとに必要な設定をします。さらに、ドキュメント管理サービスのスタンプを利用する場合は、DocuWorks Viewerの印刷設定とDocuWorks Printerの設定をします。

参照 DocuWorks のインストール後の設定手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「14.10.1 DocuWorks のインストール後の設定をする」（P.152）を参照してください。

9.10.2 Microsoft Office のインストール後の設定をする

Microsoft Officeをインストールしたあとに必要な設定をします。

参照 Microsoft Office のインストール後の設定手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「14.10.2 Microsoft Office をインストールしたあとの作業」（P.156）を参照してください。

9.11 データベース表領域管理ツールの初期設定

データベース表領域の処理に関する性能を向上するために、リポジトリーサーバーでデータベース表領域管理ツールを初期設定します。
データベース表領域管理ツールの初期設定は、データベース表領域管理ツールをはじめて起動する前に設定します。

参照 データベース表領域管理ツールの初期設定手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「14.11 データベース表領域管理ツールの初期設定」（P.160）を参照してください。

9.12 Web サービスインターフェイスのための初期設定

Webサービスインターフェイスを利用するために必要なシステムプロパティの設定をします。
また、「2台以上の構成」のうち「負荷分散構成」でWebサービスインターフェイスをインストールしたときに必要な、プロパティファイルの作成方法について記載します。

9.12.1 システムプロパティの設定

Webサービスインターフェイスの仕様変更を反映するために、リソース管理アプリケーションでシステムプロパティを設定します。
また、「2.1.3 Windowsの環境設定」(P.240)の「ファイルのアップロードサイズの制限値を変更する」でアップロードできるファイルサイズの制限値を変更した場合は、システムプロパティを設定することで、IISで設定した制限値をWebサービスインターフェイスに反映します。

参照 Web サービスインターフェイスのための初期設定手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「14.12 Web サービスインターフェイスのための初期設定」(P.161)を参照してください。

9.12.2 負荷分散構成でのプロパティファイルの作成

負荷分散構成の場合は、次の手順でプロパティファイルを作成します。

1. ArcSuite をインストールしたサーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. テキストエディターなどを起動して新規にファイルを作成します。
3. 次の行を入力します。

```
com.fujifilm.fb.nim.login.server.allowedRedirectionHosts=｛ロードバランサーの IP アドレス；ホスト名｝；｛コンポーネントサーバーの IP アドレス；ホスト名｝
```

補足
- ｛ロードバランサーの IP アドレス ; ホスト名｝には、使用しているロードバランサーの IP アドレスとホスト名を「;」で区切って入力します。たとえば、「111:111:111:111;LoadBalancer.example.com」のようになります。
- ｛コンポーネントサーバーの IP アドレス｝には、使用しているコンポーネントサーバーの IP アドレスとホスト名を「;」で区切って入力します。複数のコンポーネントサーバーを使用している場合は、「;」で区切り、すべてのコンポーネントサーバーの IP アドレスとホスト名を入力してください。

たとえば、2 台のコンポーネントサーバーを使用している場合は、「190:160:1:1;server1.example.com;195:165:1:1;server2.example.com」のように入力します。

4. 作成したファイルを「rms.props」の名前で、任意の場所に保存します。
5. Windows の［スタート］メニューから、［Windows システムツール］＞［コマンドプロンプト］を右クリックし、［その他］＞［管理者として実行］を選択します。
6. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
｛ArcSuite のインストールフォルダー｝¥Service¥Components¥RMS¥bin¥rmssetproperty.bat ｛プロパティファイルの格納先のパス｝ -p ｛ドキュメント管理サービスの管理者のパスワード｝
```

補足
- ｛ArcSuite のインストールフォルダー｝は、インストール時に指定したインストール先のフォルダーです。たとえば、「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」です。
- ｛プロパティファイルの格納先のパス｝は、手順 4 で保存したプロパティファイルのパスです。

・{ドキュメント管理サービスの管理者のパスワード} は、ドキュメント管理サービスの管理者のパスワードです。たとえば、「rmsadmin001」です。

たとえば、{ArcSuite のインストールフォルダー} が「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」、{プロパティファイルの格納先のパス} が「C:¥temp¥rms.props」、{ドキュメント管理サービスの管理者のパスワード} が「rmsadmin001」の場合は、次のように入力します。

```
D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite¥Service¥Components¥RMS¥bin¥
rmssetproperty.bat C:¥temp¥rms.props -p rmsadmin001
```

処理が終了すると、次のように表示されます。

```
command was finished.
```

9.13　インストールしたデータのバックアップ

再インストールが必要となったときのために、インストールした直後のデータをバックアップします。

参照 バックアップするデータについては、次のマニュアルを参照してください。
・基本パッケージの機能を使用する場合は、『オフラインバックアップ・リストア運用ガイド』
・オンラインバックアップオプションを使用する場合は、『オンラインバックアップ・リストア運用ガイド』

10 キャプチャリングサービス

キャプチャリングサービスをインストールします。

10.1　キャプチャリングサービスのインストール前の準備

キャプチャリングサービスをインストールする前に、サーバーの環境を準備します。

参照 インストール前の準備については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「15.1 キャプチャリングサービスのインストール前の準備」（P.164）を参照してください。

10.2 キャプチャリングサービスのインストール

キャプチャリングサービスをインストールします。
Windows 8.1（32ビット）またはWindows 10（32ビット）のクライアントPCにキャプチャリングサービスをインストールした場合は、ローカルグループポリシーエディターで「アプリケーションから印刷ドライバーを分離する」設定を無効にします。

参照 ・インストール手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「15.2.1 キャプチャリングサービスのインストール手順」（P.165）を参照してください。

・「アプリケーションから印刷ドライバーを分離する」設定を無効にする手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「15.2.3 Windows 8.1（32 ビット）または Windows 10 （32 ビット）の場合に必要な設定」（P.168）を参照してください。

10.3　Web ブラウザーの設定

キャプチャリングサービスを使用するWebブラウザーがInternet Explorerの場合はInternet Explorerの設定が、Google Chromeの場合はGoogle Chromeの設定が必要です。
クライアントPCでキャプチャリングサービスを使用するWeブラウザーがMicrosoft Edgeの場合は、Microsoft Edgeの設定が必要です。

注記 iPad でキャプチャリングサービスを使用することはできません。

補足 同じサーバーですでに Web ブラウザーの設定をした場合は、再度 Web ブラウザーの設定をする必要はありません。

参照
- Internet Explorer の設定については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「13.1 Internet Explorer の設定」（P.87）を参照してください。
- Google Chrome の設定については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「13.2 Google Chrome の設定」（P.93）を参照してください。
- Microsoft Edge の設定については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「13.3 Microsoft Edge の設定」（P.100）を参照してください。

10.4 キャプチャリングサービスの初期設定

キャプチャリングサービスをインストールしたら、監視キューの作成と、作成した監視キューの開始を行います。

参照 ・監視キューの作成については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「15.4.1 監視キューを作成する」（P.170）を参照してください。

・監視キューの開始については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「15.4.2 監視キューの開始」（P.172）を参照してください。

11 統合検索サービス

統合検索サービスをインストールします。

11.1 インストールの概要

統合検索サービスのインストール手順の概要を説明します。

補 足 統合検索サービスのライセンスシリアル番号を取得しておきます。

参 照
- 手順の概要については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「16.1.1 手順の概要」（P.174）を参照してください。
- 構成の決定については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「16.1.2 構成の決定」（P.174）を参照してください。
- サービスの確認や、キャビネット / ドロワーの登録方法については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「16.2 統合検索インストーラーの実行の詳細」（P.183）を参照してください。
- 統合検索インストーラーの実行については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「16.1.5 統合検索インストーラーの実行」（P.182）を参照してください。
- 統合検索サービスを使用するために必要な Web ブラウザーの設定については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「16.1.6 Web ブラウザーの設定」（P.182）を参照してください。
- インストール後の初期設定については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「16.1.7 インストール後の初期設定の実行」（P.182）を参照してください。

11.2　統合検索インストーラーの実行

統合検索インストーラーを実行する前に、次のライセンスシリアル番号を取得する必要があります。

・統合検索サービス

・NTFS プラグインコンポーネント

補足 「NTFS プラグインコンポーネント」については、収集対象のストレージに応じてライセンスを取得します。

参照 統合検索インストーラーの実行の詳細については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「16.2 統合検索インストーラーの実行の詳細」（P.183）を参照してください。

11.3 Web ブラウザーの設定

統合検索サービスを使用するWebブラウザーがInternet Explorerの場合はInternet Explorerの設定が、Google Chromeの場合はGoogle Chromeの設定が必要です。
クライアントPCで統合検索サービスを使用するWeブラウザーがMicrosoft Edgeの場合は、Microsoft Edgeの設定が必要です。

注記 iPad で統合検索サービスを使用することはできません。

補足 同じサーバーですでに Web ブラウザーの設定をした場合は、再度 Web ブラウザーの設定をする必要はありません。

参照
- Internet Explorer の設定については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「13.1 Internet Explorer の設定」（P.87）を参照してください。
- Google Chrome の設定については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「13.2 Google Chrome の設定」（P.93）を参照してください。
- Microsoft Edge の設定については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「13.3 Microsoft Edge の設定」（P.100）を参照してください。

11.4　インストール後の初期設定

統合検索サービスをインストールしたあとに必要な初期設定をします。

注記 設定、入力の制限事項や補足事項は、ヘルプでも説明しています。ヘルプの内容も、合わせて確認してください。

参照
- インストール後の初期設定作業の概要については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「16.4.1 作業の概要」（P.188）を参照してください。
- ストレージプロキシ起動ユーザーの設定については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「16.4.2 ストレージプロキシ起動ユーザーの設定」（P.188）を参照してください。
- リソースの作成手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「16.4.3 リソースの作成」（P.189）を参照してください。
- 収集の開始手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「16.4.4 収集の開始」（P.192）を参照してください。
- 収集についての注意事項については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「16.4.5 収集についての注意事項」（P.193）を参照してください。

12 ArcSuiteの起動と終了

ArcSuiteの起動と終了の方法を説明します。起動時にはログイン、終了時にはログアウトの操作が必要です。

12.1 ArcSuite の起動（ログイン）

ArcSuiteを起動するには、ArcSuiteにログインする必要があります。

参照 ログイン手順の詳細については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「ArcSuite にログインする」（P.195）を参照してください。

12.2 ArcSuite の終了（ログアウト）

ArcSuiteを終了するには、ArcSuiteからログアウトする必要があります。

参照 ログアウト手順の詳細については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「ArcSuite からログアウトする」（P.196）を参照してください。

13 動作確認

ArcSuiteのセットアップ後の動作確認について説明します。

13.1 動作確認の概要

ArcSuiteの実際の運用を始める前に、セットアップが正しく完了し、ファイルフォーマット変換サービスが正常に動作することを確認します。
ファイルフォーマット変換サービスの正常な動作は、ドキュメントスペースに登録したドキュメントが、フォーマット変換された表示になっていることで確認できます。

13.1.1 準備

ArcSuiteでの動作確認には、次のものを準備します。

・ArcSuite をインストールしたリポジトリーサーバー
・ArcSuite にアクセスするクライアント PC
・「ArcSuite 4.0 インストール」インストールメディア

13.1.2 動作確認の流れ

オールインワン構成での動作確認の流れと同じです。

参照 動作確認の流れについては、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「18.1.2 動作確認の流れ」(P.198) を参照してください。

13.2　動作確認

オールインワン構成での動作確認と同じです。

参照 動作確認については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「18.2 動作確認」（P.199）を参照してください。

14 ライセンス認証

ArcSuiteのライセンス認証について説明します。

14.1　ライセンス認証

ArcSuiteは、ライセンスの認証が必要なソフトウェアです。ライセンスの認証はインストール時に実行されます。インストール後に実行することもできます。ライセンスは、インストールしただけでは有効になりません。ライセンスを認証しないまま使い続けると、インストールしてから30日後にソフトウェアが使用できなくなります。

ArcSuiteのインストールが終了したら、ライセンスを認証して、ライセンスを有効にしてください。

参照 ライセンス認証の手順の詳細については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「19 ライセンス認証」（P.205）を参照してください。

第3部　バージョンアップ

1 概要

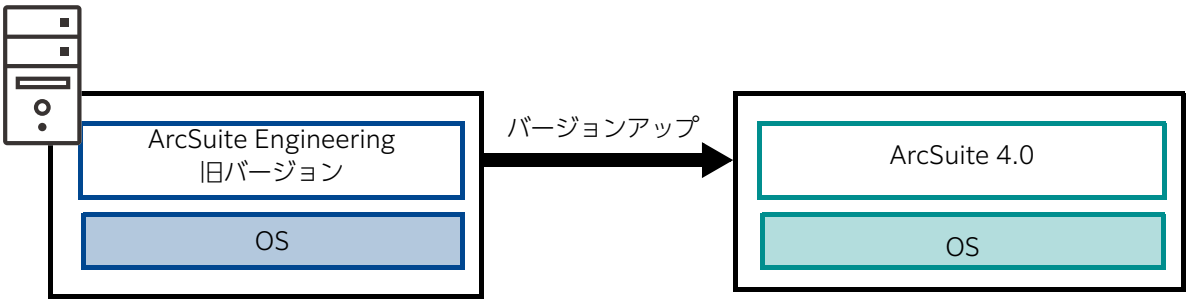
ここでは、バージョンアップの種類について説明します。

1.1 バージョンアップの種類

同じサーバーでバージョンアップする方法と、新規に用意したサーバーに移行してバージョンアップする方法があります。

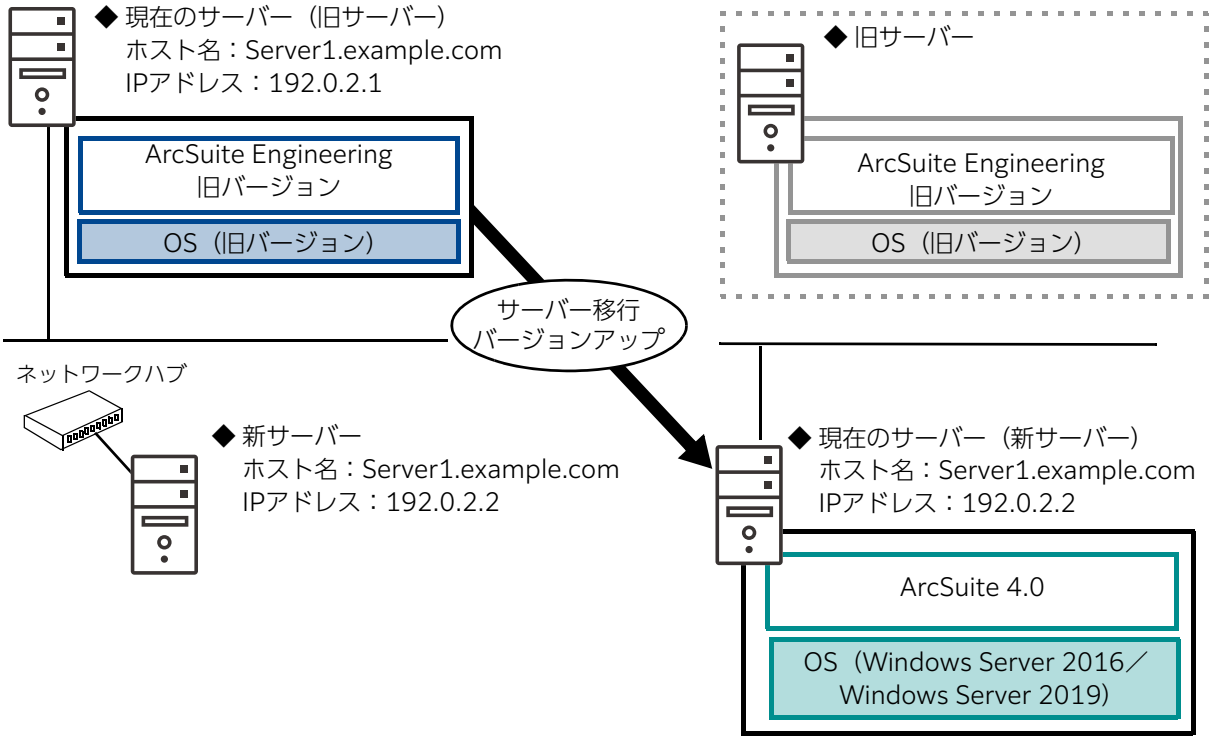
◆ 同じサーバーでのバージョンアップ（オールインワン構成の場合のみ）

オールインワン構成で、Windows Server 2016またはWindows Server 2019を使用している環境の場合に、同じサーバーでOSを変更せずに、FUJI XEROX ArcSuite EngineeringからArcSuite 4.0にバージョンアップします。



◆ 新サーバーへの移行とバージョンアップ

OSがWindows Server 2016またはWindows Server 2019の新しいサーバーを用意して、FUJI XEROX ArcSuite EngineeringからArcSuite 4.0にバージョンアップします。



参照 新サーバーに移行してバージョンアップする方法については、「3 新サーバーへの移行とバージョンアップ」(P.346) を参照してください。

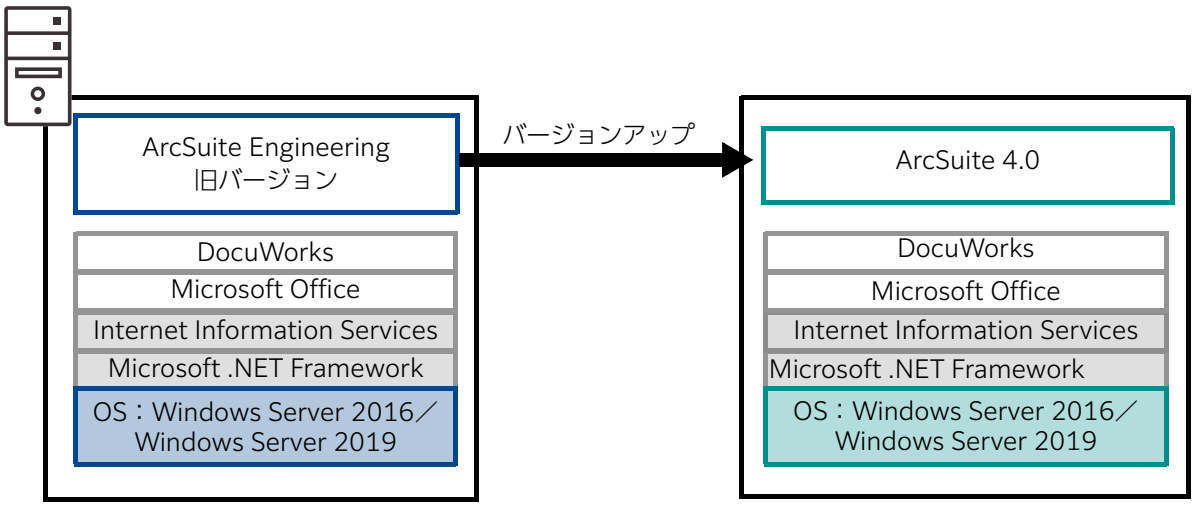
2 同じサーバーでのバージョンアップ（オールインワン構成の場合のみ）

ここでは、オールインワン構成でArcSuite Engineeringを使用している、Windows Server 2016またはWindows Server 2019のサーバーで、OSを変更せずに、ArcSuite 4.0にバージョンアップする手順について説明します。

2.1 概要

この章では、オールインワン構成でOSがWindows Server 2016または2019の場合に、同じサーバーでOSを変更せずに、ArcSuite Engineeringだけをバージョンアップする手順について説明します。

注記
・この方法でバージョンアップできるのは、オールインワン構成の環境だけです。
・キャプチャリングサービス、統合検索サービス、ドキュメント管理サービス SDK、コラボスペース IFTK、ワークフロー IFTK、インターネット登録プラグイン for ApeosWare Flow Management をインストールしている場合は、アンインストールしてからバージョンアップしてください。

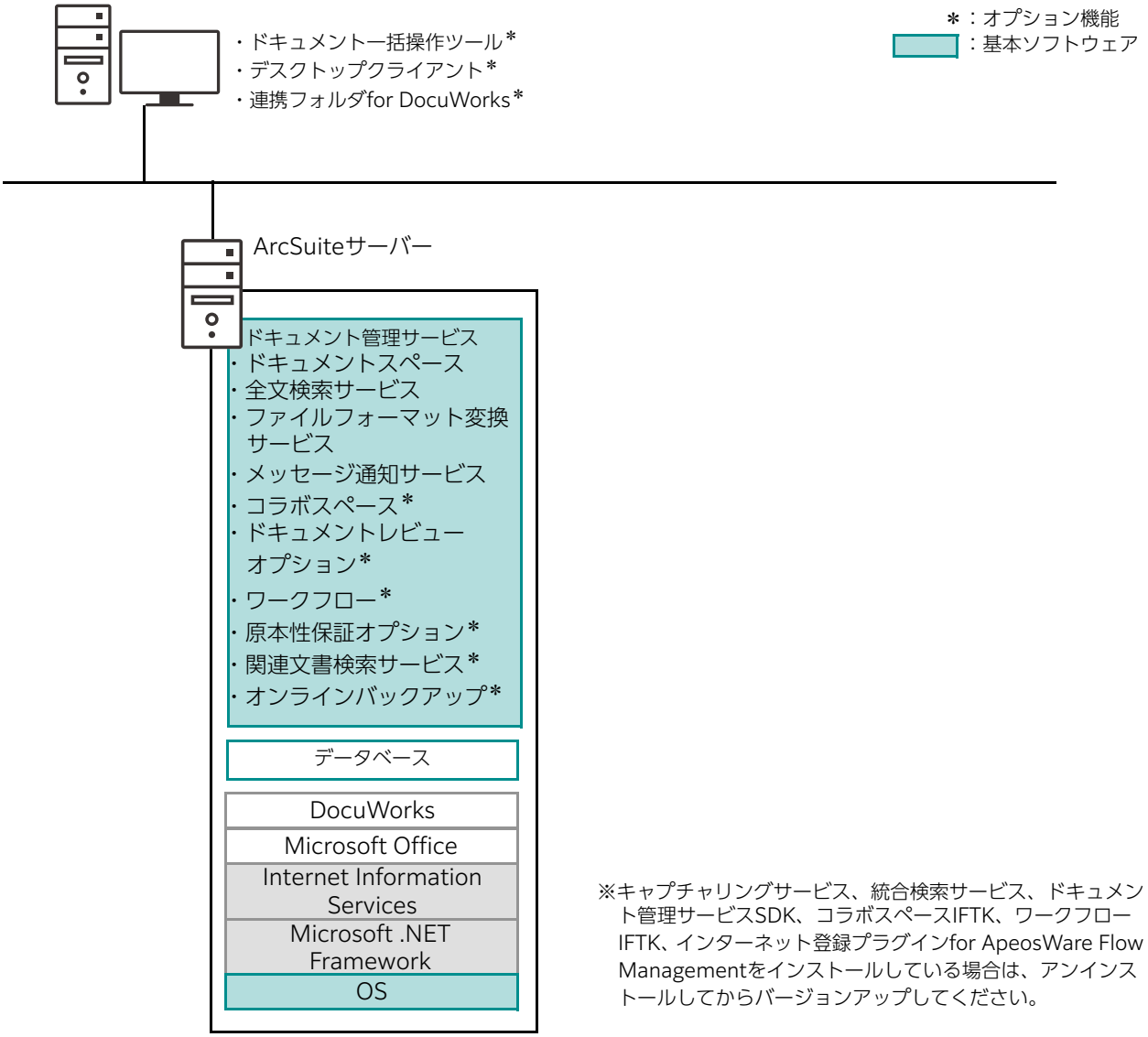


注記
・バージョンアップに失敗したときのために、バージョンアップの操作を始める前に、ArcSuite Engineering のバックアップをとってください。
・2 台構成からオールインワン構成への変更などサーバーの構成変更を伴うバージョンアップはできません。サーバーの構成を変更する場合、事前に構成を変更してからバージョンアップするか、バージョンアップしてから構成を変更してください。

参照
・Apeos PEMaster Evidence Tracker を使用している環境のバージョンアップ手順は、『Evidence Tracker セットアップガイド』を参照してください。
・ArcEPS® と連携した環境を構築している場合のバージョンアップ手順は、「2.14 ArcEPS と連携している環境を ArcSuite 4.0 にバージョンアップする手順と注意点」（P.345）を参照してください。
・ほかの製品と連携した環境構築については、ほかの製品の関連ドキュメントを参照してください。

2.1.1 サーバー構成

この章では、次のサーバー構成のバージョンアップについて説明します。



補足 本書では、オールインワン構成のサーバーのバージョンアップ手順について説明します。

2.1.2 バージョンアップ対象

同じサーバーでのバージョンアップの手順でバージョンアップできるのは、次のバージョンのArcSuite Engineeringです。

・ArcSuite Engineering 3.0.10（Hotfix を含みます）

補足 ・次のバージョンの Apeos PEMaster Evidence Manager からもバージョンアップできます。
- Apeos PEMaster Evidence Manager 2.4.10

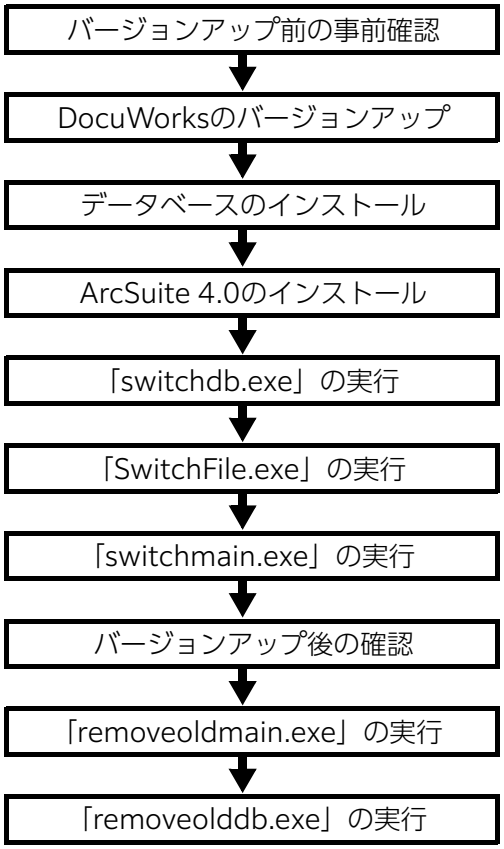
・同じサーバーでバージョンアップできるのは、データベースのバージョンが「19.3.0.0」の場合だけです。

2.2 同じサーバーでのバージョンアップの流れ

OSがWindows Server 2016またはWindows Server 2019のオールインワン構成の環境で、ArcSuite Engineeringを使用しているサーバーを変更せずに、ArcSuite 4.0にバージョンアップする流れを説明します。

補足 バージョンアップの前に、ArcSuite Engineering のバックアップをとってください。

参照 ArcEPS と連携している ArcSuite Engineering 3.0 をバージョンアップする場合は、最初に「2.14 ArcEPS と連携している環境を ArcSuite 4.0 にバージョンアップする手順と注意点」（P.345）を参照してください。



参照 ⇨「2.3 バージョンアップ前の事前確認」（P.328）

参照 ⇨「2.4 DocuWorksのバージョンアップ」（P.331）

参照 ⇨「2.5 データベースのインストール」（P.332）

参照 ⇨「2.6 ArcSuite 4.0のインストール」（P.333）

参照 ⇨「2.7 「switchdb.exe」の実行」（P.334）

参照 ⇨「2.8 「SwitchFile.exe」の実行」（P.335）

参照 ⇨「2.9 「switchmain.exe」の実行」（P.336）

参照 ⇨「2.10 バージョンアップ後の確認」（P.337）

参照 ⇨「2.11 「removeoldmain.exe」の実行」（P.338）

参照 ⇨「2.12 「removeolddb.exe」の実行」（P.339）

参照 Apeos PEMaster Evidence Tracker を使用している環境のバージョンアップについては、『Evidence Tracker セットアップガイド』を参照してください。

2.3 バージョンアップ前の事前確認

バージョンアップをする前に、ArcSuite Engineeringを使用しているサーバーで、次のことを確認します。

- 旧バージョンの稼働の確認
- メッセージのスプールの確認
- ダイジェストメールボックスの確認
- 表領域の使用率の確認
- LDAPS の確認

2.3.1 旧バージョンの稼働の確認

旧バージョンがインストールされていて、正常に稼働していることを確認します。

注記 旧バージョンをアンインストールしてしまうと、バージョンアップできません。必ず、旧バージョンがインストールされていて、正常に稼働している状態で、バージョンアップしてください。

2.3.2 メッセージのスプールの確認

スプールされているメッセージがないかを確認します。
スプールされているメッセージがある場合は、すべて削除します。

補足 再送が必要なメールがある場合は、エラーを解消して状態を「送信待ち」にリセットすることで再送できます。再送してから、削除してください。

1. ［ポータル］画面で、［システム管理］リンクをクリックします。
2. ［システム管理］画面の左側にある［システム管理］から、［メッセージ通知］をクリックします。
3. 管理アプリケーションのリンクをクリックします。
   ［管理ログイン］画面が表示されます。
4. 管理者権限を持つユーザーの［ユーザー ID］と［パスワード］を入力します。
5. ［ログイン］をクリックします。
6. ［メッセージ通知管理］画面で、［スプールメール一覧］リンクをクリックします。
7. ［スプールメール一覧］ページで、［すべて削除］をクリックします。
8. ［はい］をクリックします。
   すべてのメールが削除されます。

2.3.3 ダイジェストメールボックスの確認

ダイジェストメールボックス一覧に表示項目がないかを確認します。
ダイジェストメールボックス一覧に表示項目がある場合は、次の手順ですべて削除します。

補足 送信が必要なメールがある場合は、事前にすべて送信してから削除してください。

1. ［ポータル］画面で、［システム管理］リンクをクリックします。
2. ［システム管理］画面の左側にある［システム管理］から、［メッセージ通知］をクリックします。
3. 管理アプリケーションのリンクをクリックします。
   ［管理ログイン］画面が表示されます。

4. 管理者権限を持つユーザーの［ユーザー ID］と［パスワード］を入力します。
5. ［ログイン］をクリックします。
6. 管理者権限を持つユーザーの［ユーザー ID］と［パスワード］を入力します。
7. ［ログイン］をクリックします。
8. ［メッセージ通知管理］画面で、［ダイジェストメールボックス一覧］リンクをクリックします。
9. ［ダイジェストメールボックス一覧］ページで、［すべて削除］をクリックします。
10. ［はい］をクリックします。
    すべてのメールが削除されます。

2.3.4 表領域の使用率の確認

キャビネットの表領域の使用率を確認します。使用率がおよそ80%を超えている場合、表領域のサイズを大きくする、またはデータファイルを追加します。80%以下の場合でも、運用に応じて、表領域を拡張しておきます。

参照 表領域の拡張方法については、「付録 O データベース表領域管理ツール」（P.489）を参照してください。

2.3.5 LDAPS の確認

LDAPSを使用しているかどうかを確認します。LDAPSを使用している場合は、次の情報を確認します。

・SSL サーバー証明書

・エイリアス名

・キーストアファイル「cacerts」のパスワード

これらの情報は、バージョンアップしたあとの「2.13.5 SSLサーバー証明書を再設定する」（P.343）で必要です。

1. リソース管理アプリケーションを起動します。

   参照 リソース管理アプリケーションの起動方法については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「リソース管理アプリケーションを起動する手順」（P.126）を参照してください。

2. ［システムプロパティ編集］をクリックします。
   ［システムプロパティ編集］画面が表示されます。

3. キー名に「com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.serverURI.｛構成名｝」があるかどうかを確認します。
   次のように、設定されているキー名と値によって LDAPS を使用しているかどうかを判断します。

   表 :LDAPS を使用しているかどうかの判断基準

キーの有無	値	LDAPS
なし	なし	使用していません。
あり	「ldap://」で始まる値 (例：ldap://ldapserver.example.com)	使用していません。
あり	「ldaps://」で始まる値 (例：ldaps://ldapserver.example.com)	使用しています。

   補足 ｛構成名｝は文字列が表示されます。たとえば、「ARCSUITE」です。

4. LDAPS を使用している場合は、次の情報を確認します。

・エイリアス名
キーストアから証明書を削除するときなどに指定する名前です。
・SSL サーバー証明書
ファイルをエクスポートするなどしておきます。
・キーストアファイル「cacerts」のパスワード
初期値は「changeit」です。バージョンアップを実行する前に、初期値を変更しておくことをお薦めします。

2.4 DocuWorks のバージョンアップ

DocuWorksを、ArcSuiteがサポートしているバージョンにします。

参照 ・DocuWorks のバージョンアップ手順については、DocuWorks のマニュアルを参照してください。
・サポートしている DocuWorks のバージョンについては、弊社公式サイトの動作環境を参照してください。

2.5 データベースのインストール

ArcSuite Engineeringがインストールされているサーバーに、ArcSuite 4.0のデータベースをインストールします。

注記 環境に応じた正しい設定値を設定してください。

1. ArcSuite をインストールするサーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. ArcSuite 4.0 のデータベースのインストールメディアを、ドライブにセットします。
3. {インストールメディア} :¥setup.exe」をダブルクリックします。
   このあとは、画面の指示に従ってデータベースをインストールします。

2.6 ArcSuite 4.0 のインストール

ArcSuite 4.0のデータベースをインストールしたサーバーに、ArcSuite 4.0をインストールします。

1. ArcSuite をインストールするサーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. 「ArcSuite 4.0 インストール」インストールメディアを、ドライブにセットします。
3. 「{インストールメディア} :¥Service¥ArcSuite¥setup.exe」をダブルクリックします。
   このあとは、画面の指示に従って ArcSuite 4.0 をインストールします。

2.7 「switchdb.exe」の実行

ArcSuite 4.0をインストールしたサーバーで、「switchdb.exe」を実行します。
「switchdb.exe」を実行すると、データベースがArcSuite 4.0のデータベースに切り替わります。

1. Windows の［スタート］メニューから、次のファイルを右クリックし、［その他］＞［管理者として実行］を選択します。
「{データベースのインストールフォルダー} ¥tools_4.0¥Upgrade¥SwitchDB¥switchdb.exe」

   補足 {データベースのインストールフォルダー} とは、「2.5 データベースのインストール」（P.332）でデータベースをインストールしたフォルダーです。デフォルトは、「D:¥Database」です。

2. 表示された画面で［Update］をクリックします。

3. ［はい］をクリックします。

2.8 「SwitchFile.exe」の実行

ArcSuite Engineeringがインストールされているサーバーで、「SwitchFile.exe」を実行します。
「SwitchFile.exe」を実行すると、設定ファイルやレジストリがArcSuite 4.0に切り替わります。

1. 次のファイルを右クリックし、［その他］＞［管理者として実行］を選択します。
「{ArcSuite のインストールフォルダー} ¥Service¥Components¥Upgrade¥SwitchFile¥SwitchFile.exe」

   補足 {ArcSuite のインストールフォルダー} とは、「2.6 ArcSuite 4.0 のインストール」（P.333）で ArcSuite 4.0 をインストールしたフォルダーです。デフォルトは、「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」です。

2.9 「switchmain.exe」の実行

ArcSuite 4.0をインストールしたサーバーで、「switchmain.exe」を実行します。
「switchmain.exe」を実行すると、サービスがArcSuite 4.0のサービスに切り替わります。

1. 次のファイルを右クリックし、［その他］＞［管理者として実行］を選択します。
「{ArcSuite のインストールフォルダー} ¥Service¥Components¥Upgrade¥SwitchMain¥switchmain.exe」

   補足 {ArcSuite のインストールフォルダー} とは、「2.6 ArcSuite 4.0 のインストール」（P.333）で ArcSuite 4.0 をインストールしたフォルダーです。デフォルトは、「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」です。

2. 表示された画面で［Update］をクリックします。

3. ［はい］をクリックします。

4. 「Please Input password:」と表示されたら、サービス起動ユーザーのパスワードを入力します。
［管理者：コマンド プロンプト］画面が閉じます。

   補足 「［管理者：コマンド プロンプト］画面：UpdateIISConfig Failed!」というエラーが表示された場合は、しばらく待ってから、手順 1 に戻って再度「switchmain.exe」を実行してください。

5. サーバーを再起動します。

2.10 バージョンアップ後の確認

ArcSuite 4.0が正しくインストールされていることを確認します。

1. ArcSuite 4.0 をインストールしたサーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. ドキュメント管理サービス管理アプリケーションが起動することを確認します。

(1) デスクトップの「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション」のショートカットアイコンをダブルクリックします。
［ログイン］画面が表示されます。

(2) RMS 管理者の［ユーザー ID］と［パスワード］を入力します。

(3) ［ログイン］をクリックします。

3. ［ポータル］画面にログインできることを確認します。

(1) クライアント PC にサインインします。

(2) Web ブラウザーを起動します。

(3) Web ブラウザーの［アドレス］に、［ポータル］画面の URL を入力します。ここでは、「http://arcsuite.example.com/ArcSuite/portal」と入力します。
［ログイン］画面が表示されます。

2.11 「removeoldmain.exe」の実行

ArcSuite 4.0をインストールしたサーバーで、「removeoldmain.exe」を実行します。
「removeoldmain.exe」を実行すると、ArcSuite Engineeringのインストール情報が削除されます。

1. 次のファイルを右クリックし、［その他］＞［管理者として実行］を選択します。
「{ArcSuite のインストールフォルダー} ¥Service¥Components¥Upgrade¥RemoveOldMain¥removeoldmain.exe」

   補足 {ArcSuite のインストールフォルダー} とは、「2.6 ArcSuite 4.0 のインストール」（P.333）で ArcSuite 4.0 をインストールしたフォルダーです。デフォルトは、「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」です。

2. ［はい］をクリックします。
［管理者：コマンド プロンプト］画面が閉じます。

2.12 「removeolddb.exe」の実行

ArcSuite 4.0をインストールしたサーバーで、「removeolddb.exe」を実行します。
「removeolddb.exe」を実行すると、ArcSuite Engineeringのインストール情報が削除されます。

1. 次のファイルを右クリックし、[その他] > [管理者として実行] を選択します。
「{データベースのインストールフォルダー} ¥tools_4.0¥Upgrade¥RemoveOldDB¥removeolddb.exe」

   補足 {データベースのインストールフォルダー} とは、「2.5 データベースのインストール」(P.332) でデータベースをインストールしたフォルダーです。デフォルトは、「D:¥Database」です。

2. [はい] をクリックします。
[管理者：コマンド プロンプト] 画面が閉じます。

2.13 バージョンアップしたあとの設定

バージョンアップしたあと、次の設定をします。

- 「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「14.10.1 DocuWorks のインストール後の設定をする」(P.152)
- コラボスペースの全文検索インデックス・関連文書検索インデックスを生成する
- 全文検索エンジン連携を設定する
- 関連文書検索エンジン連携を設定する
- SSL サーバー証明書を再設定する

2.13.1 全文検索インデックス・関連文書検索インデックスを生成する

バージョンアップ前に全文検索、または関連文書検索を利用していた場合、バージョンアップ後に全文検索や関連文書検索のインデックスを再作成する必要があります。
次の手順で、全文検索インデックス、関連文書検索インデックスを再作成します。

1. コマンドプロンプトを管理者として起動します。
2. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
cd /d {ArcSuite のインストールフォルダー}¥Service¥Components¥Repository¥bin
```

たとえば、{ArcSuite のインストールフォルダー} が「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」の場合は、次のように入力します。

```
cd /d D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite¥Service¥Components¥Repository¥bin
```

3. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
dradminIndexcmd.bat
```

4. 「userName=」のあとにドキュメント管理サービスのサービス管理者の「ユーザー名」を入力します。
5. 「userPasswd=」のあとにドキュメント管理サービスのサービス管理者の「パスワード」を入力します。
全文検索と関連文書検索のインデックスの初期化が完了すると、画面が閉じます。
6. 全文検索インデックスの更新、関連文書検索インデックスの更新を運用に合わせて実施します。

参照 インデックスの更新作業の詳細については、『ドキュメント管理サービス管理者ガイド』を参照してください。

2.13.2 コラボスペースの全文検索インデックス・関連文書検索インデックスを生成する

コラボスペースの全文検索インデックスおよび関連文書検索インデックスを生成します。

■ 全文検索インデックスの生成

1. コマンドプロンプトを管理者として起動します。
2. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
cd /d {ArcSuite のインストールフォルダー}¥Service¥Components¥collabo¥bin
```

たとえば、{ArcSuite のインストールフォルダー} が「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」の場合は、次のように入力します。

```
cd /d D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite¥Service¥Components¥collabo¥bin
```

3. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
IndexSetup.bat create {全文検索サービスの DN または cn}
```

4. 「account: 」のあとに、RMS 管理者ユーザー名を入力します。
5. 「passwd: 」のあとに、パスワードを入力します。
入力したパスワードは、画面には表示されません。
コマンドが正常に終了すると、「SUCCESS」と表示されます。

参照 QueueSetup の詳細については、『システム管理者ガイド』を参照してください。

■ 関連文書検索インデックスの生成

1. コマンドプロンプトを管理者として起動します。
2. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
cd /d {ArcSuite のインストールフォルダー}¥Service¥Components¥collabo¥bin
```

たとえば、{ArcSuite のインストールフォルダー} が「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」の場合は、次のように入力します。

```
cd /d D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite¥Service¥Components¥collabo¥bin
```

3. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
ClusteringIndexSetup.bat drop
```

4. 「account: 」のあとに、RMS 管理者ユーザー名を入力します。
5. 「passwd: 」のあとに、パスワードを入力します。
6. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
ClusteringIndexSetup.bat create {関連文書検索サービスの DN または cn} {インデックス更新間隔 (min)}
```

7. 「account: 」のあとに、RMS 管理者ユーザー名を入力します。

8. 「passwd: 」のあとに、パスワードを入力します。
コマンドが正常に終了すると、「SUCCESS」と表示されます。

2.13.3 全文検索エンジン連携を設定する

バージョンアップしたあと、新規に登録されるDocuworks文書またはDocuWorks Binder文書を全文検索の対象にするために、次のように設定します。

1. ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版を起動します。

参照 ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版の起動方法は、を参照してください。

2. [ドキュメント管理サービス 管理アプリケーション] の [サービス] タブのページで、左側の [階層ツリー表示] エリアから [サービス] を選択します。

3. サービスをメンテナンスモードに変更します。

(1) メニューバーの [サービス操作] > [サービスのモード変更] を選択します。

(2) [サービスのモード変更] 画面でラジオボタンを選択し、[はい] をクリックします。
サービスがメンテナンスモードに変更されます。

4. メニューバーの [サービス操作] > [全文検索エンジン連携の設定] を選択します。
[全文検索エンジン連携の設定] 画面－ [全般] タブのページが表示されます。

5. [メディアタイプ] タブをクリックします。
[全文検索エンジン連携の設定] 画面－ [メディアタイプ] タブのページが表示されます。

6. [メディアタイプの一覧] から、次のメディアタイプを選択し、[→] をクリックします。
・application/vnd.fujifilm.fb.docuworks
・application/vnd.fujifilm.fb.docuworks.binder
「application/vnd.fujifilm.fb.docuworks」および「application/vnd.fujifilm.fb.docuworks.binder」が、[検索対象となるメディアタイプ] に移動します。

7. [OK] をクリックします。

8. サービスを通常モードに変更します。

(1) サービスを選択し、メニューバーの [サービス操作] > [サービスのモード変更] を選択します。

(2) [サービスのモード変更] 画面で、[はい] をクリックします。
サービスが通常モードに変更されます。

2.13.4 関連文書検索エンジン連携を設定する

バージョンアップしたあと、新規に登録されるDocuworks文書またはDocuWorks Binder文書を関連文書検索の対象にするために、次のように設定します。

1. ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版を起動します。

参照 ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版の起動方法は、を参照してください。

2. [ドキュメント管理サービス 管理アプリケーション] の [サービス] タブのページで、左側の [階層ツリー表示] エリアから [サービス] を選択します。

3. サービスをメンテナンスモードに変更します。

(1) メニューバーの [サービス操作] > [サービスのモード変更] を選択します。

(2) [サービスのモード変更] 画面でラジオボタンを選択し、[はい] をクリックします。

サービスがメンテナンスモードに変更されます。

4. メニューバーの［サービス操作］＞［関連文書検索エンジン連携の設定］を選択します。
［関連文書検索エンジン連携の設定］画面－［全般］タブのページが表示されます。

5. ［メディアタイプ］タブをクリックします。
［関連文書検索エンジン連携の設定］画面 ―［メディアタイプ］タブのページが表示されます。

6. ［メディアタイプの一覧］から、次のメディアタイプを選択し、［→］をクリックします。
・application/vnd.fujifilm.fb.docuworks
・application/vnd.fujifilm.fb.docuworks.binder
「application/vnd.fujifilm.fb.docuworks」および「application/vnd.fujifilm.fb.docuworks.binder」が、［検索対象となるメディアタイプ］に移動します。

7. ［OK］をクリックします。

8. サービスを通常モードに変更します。

(1) サービスを選択し、メニューバーの［サービス操作］＞［サービスのモード変更］を選択します。

(2) ［サービスのモード変更］画面で、［はい］をクリックします。
サービスが通常モードに変更されます。

2.13.5 SSL サーバー証明書を再設定する

LDAPSを使用している環境で、SSLサーバー証明書として自己署名証明書を使用する場合は、SSLサーバー証明書を再設定します。

1. Windows の［スタート］メニューから、［Windows システムツール］＞［コマンドプロンプト］を右クリックし、［その他］＞［管理者として実行］を選択します。
［管理者：コマンド プロンプト］画面が表示されます。

2. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
" {ArcSuite のインストールフォルダー} ¥Service¥Java¥jre¥bin¥keytool" -importcert -trustcacerts -alias {エイリアス名} -file " {SSL サーバー証明書のフルパス} " -keystore " {ArcSuite のインストールフォルダー} ¥Service¥Java¥jre¥lib¥security¥cacerts" -storepass {キーストアパスワード}
```

たとえば、次のように入力します。

```
"C:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite¥Service¥Java¥jre¥bin¥keytool" -importcert -trustcacerts -alias keyarcsrv001 -file "C:¥SSL¥siteCert.cer" -keystore "C:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite¥Service¥Java¥jre¥lib¥security¥cacerts" -storepass changeit
```

補足
・コマンドは、改行せずに入力してください。
・{エイリアス名} は、キーストアから証明書を削除するときなどに指定する名前です。インポートする証明書に対して重複しない名前を指定してください。
・{SSL サーバー証明書のフルパス} は、「2.3.5 LDAPS の確認」(P.329)でエクスポートするなどした、SSL サーバー証明書のファイルのフルパスを指定します。
・{キーストアパスワード} は、キーストアファイル「cacerts」のパスワードです。初期値は「changeit」です。コマンドを実行する前に、初期値を変更しておくことをお薦めします。

3. 「y」を入力し、<Enter> キーを押します。

処理が完了すると、次のように表示されます。

```
証明書がキーストアに追加されました
```

2.14 ArcEPS と連携している環境を ArcSuite 4.0 にバージョンアップする手順と注意点

ArcEPS と連携している環境をArcSuite 4.0にバージョンアップする手順は、次のとおりです。

1. 旧バージョンの ArcEPS マトリックスクライアントをアンインストールします。
2. 旧バージョンの ArcEPS をアンインストールします。
3. 旧バージョンの ArcEPS 印刷アプリケーションをアンインストールします。
4. 旧バージョンの ArcSuite を ArcSuite 4.0 にバージョンアップします。
5. ArcSuite 4.0 対応の ArcEPS 印刷アプリケーションをインストールします。
6. ArcSuite 4.0 に接続する ArcEPS をインストールします。
7. ArcSuite 4.0 対応の ArcEPS マトリックスクライアントをインストールします。

注記
- ArcEPS のインストール、アンインストール手順については、ArcEPS のマニュアルを参照してください。
- ArcEPS のアップデーターを適用している場合は、アップデーターをアンインストールしたあと、ArcEPS をアンインストールしてください。
- インストールする ArcEPS、ArcEPS 印刷アプリケーション、および ArcEPS マトリックスクライアントは、同じバージョンを使用してください。

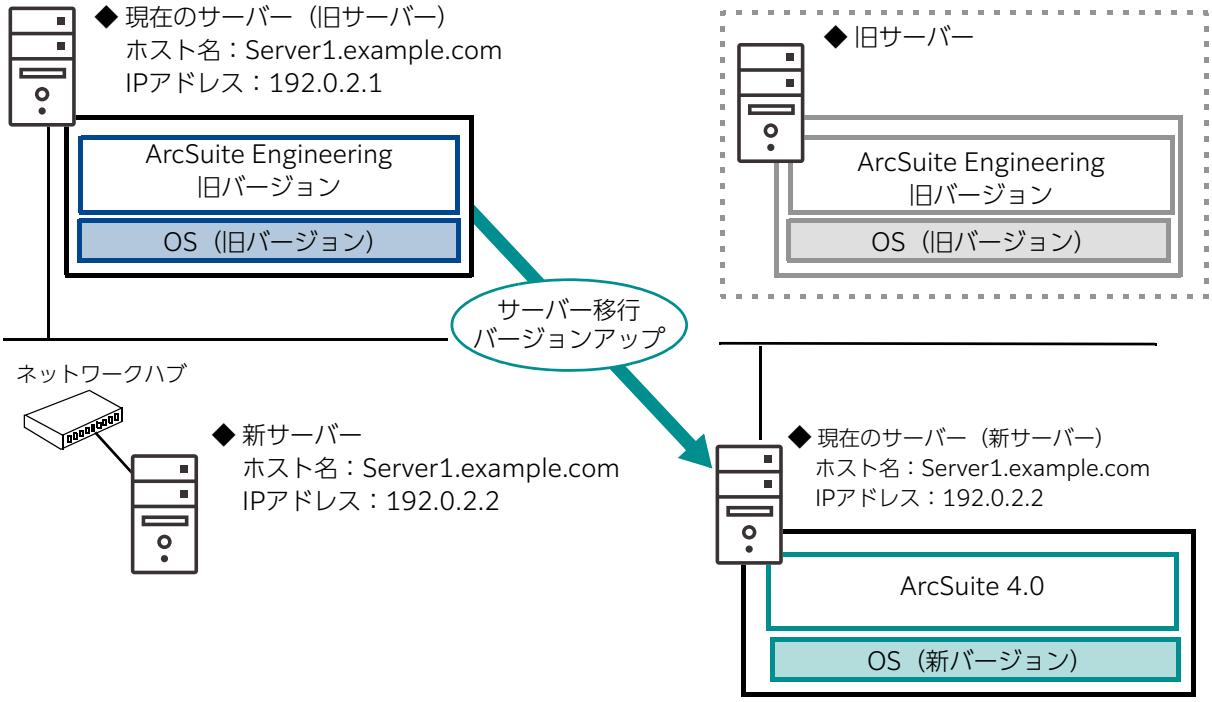
3 新サーバーへの移行とバージョンアップ

ここでは、新規にサーバーを用意し、ArcSuite Engineeringを使用している環境を新サーバーに移行して、ArcSuite 4.0にバージョンアップする手順について説明します。

3.1 新サーバーへの移行とバージョンアップの概要

この章では、現在、ArcSuite Engineeringを運用しているサーバー（旧サーバー）から、新規に用意したサーバー（新サーバー）に移行してバージョンアップする手順について説明します。
旧サーバーと同じホスト名で新サーバーを運用する場合に実施します。

ここでは、ネットワークハブを介して旧サーバーと同じホスト名（FQDN）の新サーバーを用意し、新サーバーだけをネットワークにつなげて運用を再開します。
同一のネットワーク内で旧サーバーから新サーバーにデータをコピーするとき、一時的に新サーバーのホスト名を変更する必要があるため、一時的に名前解決ができるホスト名を1つ用意してください。



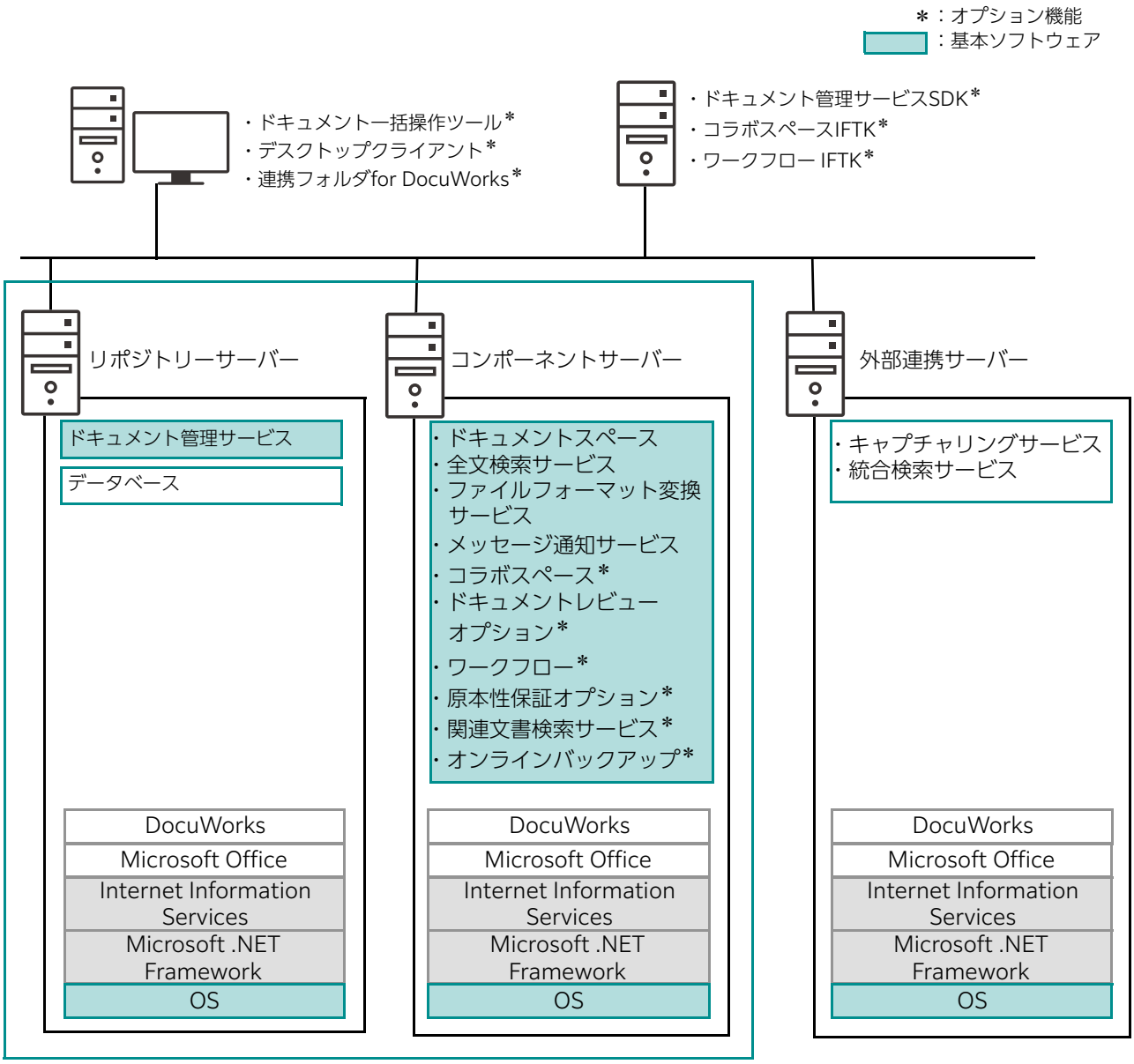
注記 **2台構成からオールインワン構成への変更などサーバーの構成変更を伴うバージョンアップはできません。サーバーの構成を変更する場合、事前に構成を変更してからバージョンアップするか、バージョンアップしてから構成を変更してください。**

補足
- 現在のサーバーとは異なるホスト名の新サーバーにバージョンアップすることもできます。その場合の流れについては「付録 P 新サーバーへの移行とバージョンアップ（ホスト名を変更する場合）」（P.493）を参照してください。
- 2台以上の構成で LDAP 連携を設定している場合、バージョンアップする前に、LDAP 連携の連携用のシステムプロパティの設定を解除し、バージョンアップ後に再度、LDAP 連携の連携用のシステムプロパティを設定する必要があります。

参照
- Apeos PEMaster Evidence Tracker を使用している環境のバージョンアップ手順は、『Evidence Tracker セットアップガイド』を参照してください。
- ArcEPS と連携した環境を構築している場合のバージョンアップ手順は、「2.14 ArcEPS と連携している環境を ArcSuite 4.0 にバージョンアップする手順と注意点」（P.345）を参照してください。
- LDAP 連携の設定手順およびシステムプロパティについては、「付録 E LDAP 連携を設定する」（P.433）を参照してください。

3.1.1　サーバー構成

この章では、次のサーバー構成でのバージョンアップについて説明します。



◆ オールインワン構成の場合
リポジトリーサーバーとコンポーネントサーバーにインストールする基本ソフトウェアを、1台のサーバーにインストールします。

補 足　本書では、オールインワン構成のサーバー、リポジトリーサーバー、コンポーネントサーバー、外部連携サーバーのバージョンアップ手順について説明します。

3.1.2　バージョンアップ対象

新サーバーに移行してArcSuite 4.0にバージョンアップできるのは、次のバージョンのArcSuiteです。

・ArcSuite Engineering 3.0.10（Hotfix を含みます）

補 足　次のバージョンの Apeos PEMaster Evidence Manager からもバージョンアップできます。

・Apeos PEMaster Evidence Manager 2.4.10

3.2 新サーバーへの移行とバージョンアップの準備

新サーバーに移行してバージョンアップするために、次の準備をします。

■ 新しいサーバー

ArcSuite 4.0を新規にインストールする、OSがWindows Server 2019のサーバー（新サーバー）です。

■ ネットワークハブ（同じホスト名の場合のみ）

新サーバーのホスト名を、現在運用しているサーバー（旧サーバー）と同じホスト名にする場合は、新サーバーだけを接続するネットワークハブを用意します。

補足
- 仮想環境で、新サーバーと旧サーバーを異なるネットワークで構築する場合には、ネットワークハブは不要です。
- 新サーバーを旧サーバーと同じホスト名にできない場合があります。旧サーバーと同じホスト名にできるかどうかは、「3.6.1 コンピューター名、グローバルデータベース名、パスワードなどの確認」（P.359）で確認します。

■ 旧サーバーでデータをエクスポートするフォルダーの空き容量

旧サーバーでデータをエクスポートするフォルダーの容量は、次のファイルサイズの容量を足した値より大きな値を確保してください。

◆ レジストリー情報やコンポーネント情報などのファイルサイズ

120 KB

◆ データベースのデータファイルのファイルサイズを合計したもの

データベースのデータファイルのファイルサイズ（使用量）は、次の方法で確認できます。

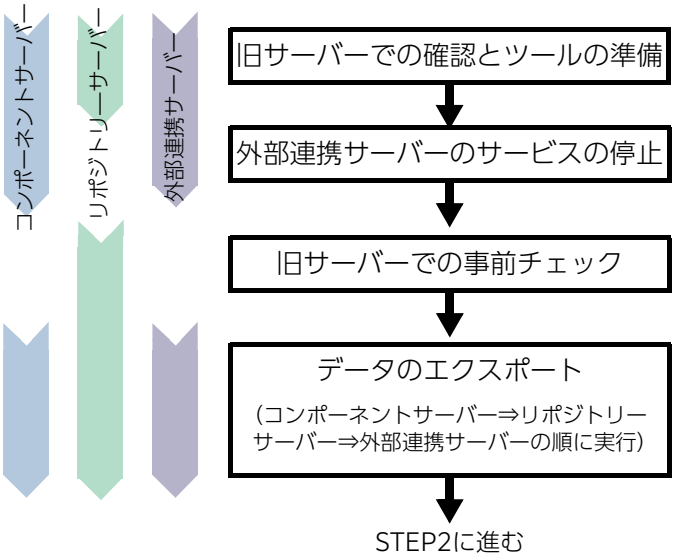
- エクスプローラーを起動して、旧サーバーにデータベースをインストールした時に指定した［データファイルの配置先］のフォルダーで右クリックし、プロパティを表示します。［全般］タブの［サイズ］に表示される値が、［データファイルの配置先］に存在するデータファイルのファイルサイズです。
- ［データファイルの配置先］とは別のフォルダーにデータベースのデータファイルを作成している場合は、そのファイルのファイルサイズを加算します。

3.3 新サーバーへの移行を伴うバージョンアップの流れ

ここでは、旧サーバーと同じホスト名の新サーバーに移行してバージョンアップする場合の流れについて説明します。
STEP内の項目を、作業対象のすべてのサーバーで実施したあと、次のSTEPの項目に進んでください。

参照 旧サーバーとは異なるホスト名の新サーバーに移行してバージョンアップする手順については、「付録 P 新サーバーへの移行とバージョンアップ（ホスト名を変更する場合）」（P.493）を参照してください。

■ STEP1：旧サーバーでの事前作業、データのエクスポート（旧サーバー）



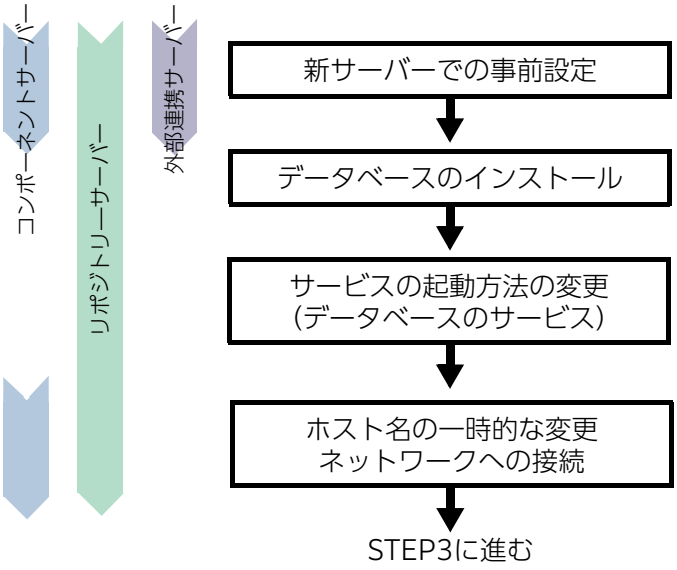
参照 ⇨「3.4 旧サーバーでの確認とツールの準備」（P.353）

参照 ⇨「3.5 外部連携サーバーのサービスの停止」（P.358）

参照 ⇨「3.6 旧サーバーでの事前チェック」（P.359）

参照 ⇨「3.7 データのエクスポート」（P.363）

■ STEP2：新サーバーの設定、データベースのインストール（新サーバー）



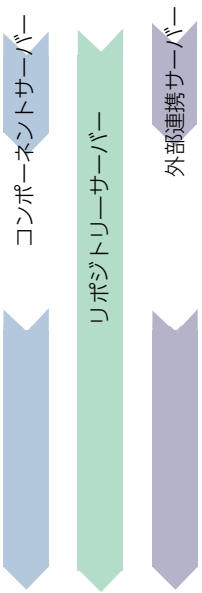
参照 ⇨「3.8 新サーバーの事前設定」（P.365）

参照 ⇨「3.9 データベースのインストール」（P.367）

参照 ⇨「3.10 サービスの起動方法の変更」（P.368）

参照 ⇨「3.11 新サーバーのホスト名の一時変更とネットワークへの接続」（P.369）

STEP3：データのコピーとインポート（新サーバー）



旧サーバーのデータのコピー

参照 ⇨「3.12 エクスポートデータのコピー」(P.370)
⇨「3.13 その他のデータのコピー」(P.372)

↓

サービスの自動起動の設定
(データベースのサービス)

参照 ⇨「3.14 サービスの自動起動の設定」(P.378)

↓

新サーバーのホスト名の変更

参照 ⇨「3.15 新サーバーのホスト名の変更」(P.379)

↓

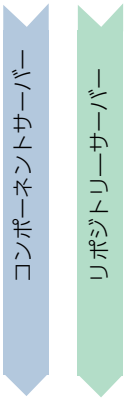
データのインポート
(リポジトリーサーバー⇒コンポーネントサーバー⇒外部連携サーバーの順に実行)

参照 ⇨「3.16 データのインポート」(P.380)

↓

STEP4に進む

STEP4：リポジトリーサーバー、コンポーネントサーバーのインストール（新サーバー）



ArcSuite 4.0のインストール

参照 ⇨「3.18 コンポーネントサーバーのインストール」(P.383)
⇨「3.19 リポジトリーサーバーのインストール」(P.388)
⇨「3.20 コンポーネントサーバーのインストール（続き）」(P.392)

↓

インストール後の設定

参照 ⇨「3.22 インストール後の設定」(P.402)

↓

「mime.types」ファイルのコピー

参照 ⇨「3.23 「mime.types」ファイルのコピー」(P.409)

↓

STEP5に進む

STEP5：外部連携サーバーのインストール（新サーバー）

監視キューフォルダーの作成

参照 ⇨「3.17 キャプチャリングサービスの監視キューフォルダーの作成」(P.382)

↓

キャプチャリングサービス、
統合検索サービスのインストール

参照 ⇨「3.21 外部連携サーバーへのインストール」(P.396)

↓

インストール後の設定

参照 ⇨「3.22 インストール後の設定」(P.402)

↓

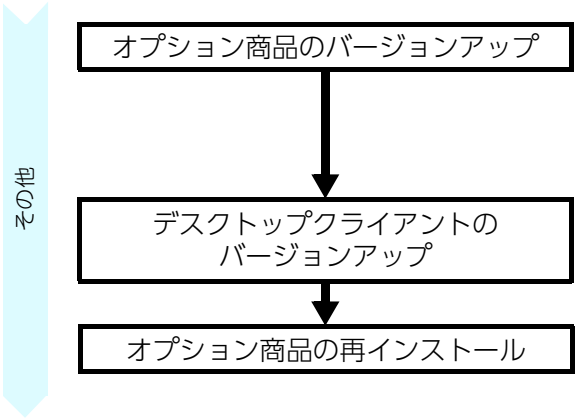
「mime.types」ファイルのコピー

参照 ⇨「3.23 「mime.types」ファイルのコピー」(P.409)

↓

STEP6に進む

STEP6：その他オプション商品のバージョンアップ



参照 ⇨「3.24 SDK、IFTK、ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版のバージョンアップ」(P.410)

参照 ⇨「3.25 デスクトップクライアントのバージョンアップ」(P.411)

参照 ⇨「3.26 連携フォルダ for DocuWorksのバージョンアップ」(P.412)

⇨「3.27 ドキュメント一括操作ツールのバージョンアップ」(P.413)

参照 Apeos PEMaster Evidence Tracker を使用している環境のバージョンアップについては、『Evidence Tracker セットアップガイド』を参照してください。

3.4 旧サーバーでの確認とツールの準備

バージョンアップをする前に、旧サーバーで次の確認および準備をします。

- 旧バージョンの稼働の確認
- メッセージのスプールの確認
- ダイジェストメールボックスの確認
- 表領域の使用率の確認
- コラボスペースのインポートフォルダーの確認
- ワークフローの外部コマンドを配置するフォルダーの確認
- LDAPS の確認
- オンラインバックアップが正常終了していることの確認
- ツールの準備（旧サーバー）

3.4.1 旧バージョンの稼働の確認

すべての旧サーバーで、旧バージョンがインストールされていること、および正常に稼働していることを確認します。

注記 旧バージョンをアンインストールしてしまうと、バージョンアップできません。必ず、旧バージョンがインストールされていて、正常に稼働している状態で、バージョンアップしてください。

3.4.2 メッセージのスプールの確認

スプールされているメッセージがないかを確認します。
スプールされているメッセージがある場合は、すべて削除します。

補足 再送が必要なメールがある場合は、エラーを解消して状態を「送信待ち」にリセットすることで再送できます。再送してから、削除してください。

1. [ポータル] 画面で、[システム管理] リンクをクリックします。
2. [システム管理] 画面の左側にある [システム管理] から、[メッセージ通知] をクリックします。
3. 管理アプリケーションのリンクをクリックします。
   [管理ログイン] 画面が表示されます。
4. 管理者権限を持つユーザーの [ユーザー ID] と [パスワード] を入力します。
5. [ログイン] をクリックします。
6. [メッセージ通知管理] 画面で、[スプールメール一覧] リンクをクリックします。
7. [スプールメール一覧] ページで、[すべて削除] をクリックします。
8. [はい] をクリックします。
   すべてのメールが削除されます。

3.4.3 ダイジェストメールボックスの確認

ダイジェストメールボックス一覧に表示項目がないかを確認します。
ダイジェストメールボックス一覧に表示項目がある場合は、次の手順ですべて削除します。

補足 送信が必要なメールがある場合は、事前にすべて送信してから削除してください。

1. [ポータル] 画面で、[システム管理] リンクをクリックします。
2. [システム管理] 画面の左側にある [システム管理] から、[メッセージ通知] をクリックします。
3. 管理アプリケーションのリンクをクリックします。
   [管理ログイン] 画面が表示されます。
4. 管理者権限を持つユーザーの [ユーザー ID] と [パスワード] を入力します。
5. [ログイン] をクリックします。
6. 管理者権限を持つユーザーの [ユーザー ID] と [パスワード] を入力します。
7. [ログイン] をクリックします。
8. [メッセージ通知管理] 画面で、[ダイジェストメールボックス一覧] リンクをクリックします。
9. [ダイジェストメールボックス一覧] ページで、[すべて削除] をクリックします。
10. [はい] をクリックします。
    すべてのメールが削除されます。

3.4.4 表領域の使用率の確認

旧サーバー（2台以上の構成の場合はリポジトリーサーバー）で、キャビネットの表領域の使用率を確認します。使用率がおよそ80%を超えている場合、表領域のサイズを大きくする、またはデータファイルを追加します。80%以下の場合でも、運用に応じて、表領域を拡張しておきます。

参照 表領域の拡張方法については、「付録 O データベース表領域管理ツール」（P.489）を参照してください。

3.4.5 コラボスペースのインポートフォルダーの確認

使用していたArcSuite Engineeringでコラボスペースがインストールされていた場合は、コラボスペースのインポートフォルダーのパスを確認します。
ここで確認したパスが、ユーザーデータの格納先フォルダー内にない場合、確認したパスは「3.13.3 コラボスペースのインポートフォルダーのコピー」（P.375）で必要になります。

1. Web ブラウザーを起動し、ArcSuite の URL にアクセスします。
2. [ポータル] 画面で、[システム管理] リンクをクリックします。
   [システム管理] 画面が表示されます。
3. [システム管理] 画面の左側にある [システム管理] から、[コラボスペース] をクリックします。
   画面の右側に、コラボスペースの情報が表示されます。
4. [このシステム] から [コラボスペース（{サーバー名}）] を選択します。
   [管理ログイン] 画面が表示されます。
5. 管理者権限を持つユーザーの [ユーザー ID] と [パスワード] を入力します。

6. [ログイン] をクリックします。
   ログインに成功すると、[コラボスペース管理] メニューが表示されます。
7. 左側のツリーから、[ファイルインポート設定] リンクをクリックします。
   [ファイルインポート設定] ページが表示されます。
8. [インポートフォルダのルートディレクトリ] のパスを確認します。ユーザーデータの格納先フォルダー内にない場合は、メモを取るなどして控えます。

3.4.6 ワークフローの外部コマンドを配置するフォルダーの確認

使用していたArcSuite Engineeringでワークフローがインストールされていた場合は、ワークフローの外部コマンドの配置フォルダーのパスを確認します。
ここで確認したパスが、ユーザーデータの格納先フォルダー内にない場合、確認したパスは「3.13.4 ワークフローの外部コマンド配置フォルダーのコピー」(P.376)で必要になります。

1. Web ブラウザーを起動し、ArcSuite Engineering の URL にアクセスします。
2. [ポータル] 画面で、[システム管理] リンクをクリックします。
   [システム管理] 画面が表示されます。
3. [システム管理] 画面の左側にある [システム管理] から、[ワークフロー] をクリックします。
   画面の右側に、ワークフローの情報が表示されます。
4. [このシステム] から [ワークフロー ({サーバー名})] を選択します。
   [管理ログイン] 画面が表示されます。
5. 管理者権限を持つユーザーの [ユーザー ID] と [パスワード] を入力します。
6. [ログイン] をクリックします。
   ログインに成功すると、[ワークフロー管理] メニューが表示されます。
7. 左側のツリーから、[外部コマンド一覧] リンクをクリックします。
   [外部コマンド一覧] ページが表示されます。
8. [外部コマンドの配置フォルダ] に表示されているフォルダーを確認します。ユーザーデータの格納先フォルダー内にない場合は、メモを取るなどして控えます。
9. 外部コマンドの設定ファイルと実行ファイルとが異なるフォルダーに格納されていないかを確認します。

(1) 手順 8 で確認したフォルダーを、Windows のエクスプローラーで開きます。

(2) 設定ファイル「command.xml」を、テキストエディターなどで開きます。

(3) 拡張子が「exe」や「bat」などの、外部コマンドで実行するファイルが格納されているフォルダーのパスを確認します。手順 8 で確認したフォルダーのパスと異なる場合で、ユーザーデータの格納先フォルダー内にないときは、メモを取るなどして控えます。

3.4.7 LDAPS の確認

LDAPSを使用しているかどうかを確認します。LDAPSを使用している場合は、次の情報を確認します。

・SSL サーバー証明書

・エイリアス名

・キーストアファイル「cacerts」のパスワード

これらの情報は、バージョンアップしたあとの「3.22 インストール後の設定」（P.402）で必要です。

1. リソース管理アプリケーションを起動します。

参照 リソース管理アプリケーションの起動方法については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「リソース管理アプリケーションを起動する手順」（P.126）を参照してください。

2. [システムプロパティ編集] をクリックします。

[システムプロパティ編集] 画面が表示されます。

3. キー名に「com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.serverURI.｛構成名｝」があるかどうかを確認します。次のように、設定されているキー名と値によって LDAPS を使用しているかどうかを判断します。

表 :LDAPS を使用しているかどうかの判断基準

キーの有無	値	LDAPS
なし	なし	使用していません。
あり	「ldap://」で始まる値 (例：ldap://ldapserver.example.com)	使用していません。
あり	「ldaps://」で始まる値 (例：ldaps://ldapserver.example.com)	使用しています。

補足 ｛構成名｝は文字列が表示されます。たとえば、「ARCSUITE」です。

4. LDAPS を使用している場合は、次の情報を確認します。

・エイリアス名
キーストアから証明書を削除するときなどに指定する名前です。

・SSL サーバー証明書
ファイルをエクスポートするなどしておきます。

・キーストアファイル「cacerts」のパスワード
初期値は「changeit」です。バージョンアップを実行する前に、初期値を変更しておくことをお薦めします。

3.4.8 オンラインバックアップが正常終了していることの確認

オンラインバックアップを使用していた場合、オンラインバックアップが正常に終了している環境であることを確かめるために、次のファイルが存在しないことを確認します。

「｛ArcSuite Engineeringのユーザーホームフォルダー｝¥Service¥data¥OnlineBackup¥work_snapshot.lst」

注記 「work_snapshot.lst」ファイルが存在した場合、『オンラインバックアップ・リストア運用ガイド』を参照して「スナップショットのアンマウント」のコマンドが正常に終了するまでの作業を実施してください。
「work_snapshot.lst」ファイルが存在している状態でバージョンアップした場合、オンラインバックアップの機能が使用できなくなることがあります。

3.4.9 ツールの準備（旧サーバー）

バージョンアップで使用するツールを、旧サーバーに準備します。

1. 旧サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. 「ArcSuite 4.0 インストール」インストールメディアの「{インストールメディア} :¥Service¥Tools¥Upgrade¥ASUpgradeTool.zip」を任意のフォルダーに展開します。
   たとえば、「C:¥Temp」フォルダーに展開します。

   注記 展開したツールは、バージョンアップのすべての作業が完了するまで、移動したり削除したりしないでください。

   補足 旧サーバーでは次のツールを使用します。
   - AS_precheck.bat
   - AS_list_stgpath.bat
   - AS_export.bat

3.5 外部連携サーバーのサービスの停止

データベースデータの整合性を保つため、データベースをバージョンアップする前に、外部連携サーバーのサービスを停止します。

注記 各サービスは決められた順序で停止する必要があります。

補足 使用している環境によって、表示されないサービスがあります。その場合は、次に記載されているサービスを停止します。

1. 外部連携サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. Windows のスタート画面で、［サーバーマネージャー］をクリックします。
   ［サーバーマネージャー］画面が表示されます。
3. ［ツール］メニューから［サービス］を選択します。
4. サービスを選択して、［サービスの停止］をクリックします。次の順序で停止します。

(1) ArcSuite DocumentGatheringAgent StorageProxy

(2) ArcSuite DocumentGatheringAgent WebAdmin

(3) ArcSuite DocumentGatheringAgent Register

(4) ArcSuite Capturing Service Admin

(5) ArcSuite Capturing Service

3.6 旧サーバーでの事前チェック

旧サーバー（2台以上の構成の場合はリポジトリーサーバー）コンピューター名、ホスト名、グローバルデータベース名、および、データ格納先のフォルダー以外にあるストレージパスを確認しておきます。

・・コンピューター名、グローバルデータベース名、パスワードなどの確認
・・データ格納先フォルダー以外にあるストレージパスの確認

3.6.1 コンピューター名、グローバルデータベース名、パスワードなどの確認

「3.4.9 ツールの準備（旧サーバー）」（P.357）で準備した「AS_precheck.bat」を使用して、データベースをインストールした旧サーバー（2台以上の構成の場合は、データベースをインストールしたリポジトリーサーバー）で、次の設定を確認します。

・ホスト名
・グローバルデータベース名
・フルコンピューター名
・RMS 管理者ユーザー、サービス起動ユーザー、サインインユーザーのパスワード

注記 バージョンアップするには、コンピューター名、ホスト名、およびグローバルデータベース名が次の条件をすべて満たしている必要があります。

・コンピューター名
- 15 文字以内であること

・ホスト名（arcsuite.example.com など）
- 37 文字以内であること

・グローバルデータベース名
-「- （ハイフン）」が含まれていないこと
- 128 文字以内であること
- データベースの SID が 8 文字以内であること

補足 [グローバルデータベース名] のうち、最初の「. （ピリオド）」までの文字列が、データベースの SID になります。「. （ピリオド）」がない場合は、[グローバルデータベース名] が SID になります。

1. オールインワン構成の場合は旧サーバーに、2 台以上の構成の場合はリポジトリーサーバーとして使用していた旧サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. デスクトップでマウスカーソルを左下隅に移動します。
3. 表示された [スタート] ボタンを右クリックし、[コマンド プロンプト（管理者）] を選択します。
4. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
cd /d {ツールを展開したフォルダー}
```

たとえば、「{ツールを展開したフォルダー}」が「C:¥Temp」の場合は、次のように入力します。

```
cd /d C:¥Temp
```

補足 「{ツールを展開したフォルダー}」は、「3.4.9 ツールの準備（旧サーバー）」（P.357）でツールを展開したフォルダーです。

5. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
AS_precheck.bat
```

補足 コマンド実行中に、次の項目の入力をうながすメッセージが表示されます。その場合は、画面の指示に従って該当するユーザー名とパスワードを入力してください。
・RMS 管理者のユーザー名およびパスワード
・サービス起動ユーザーのユーザー名およびパスワード
・旧サーバーにサインインするためのユーザー名およびパスワード

次のように表示されます。

```
CHECK1: フルコンピューター名の長さ
データベースの情報が存在します。
フルコンピューター名の長さをチェックします ...
↓
OK：フルコンピューター名「 {旧サーバーのフルコンピューター名} 」は 37 文字以下です。

CHECK2: データベースのグローバルデータベース名
グローバルデータベース名にハイフン「-」が含まれていないかチェックします ...
↓
OK：グローバルデータベース名「 {グローバルデータベース名} 」にハイフン「-」は含まれていません。

CHECK3: グローバルデータベース名の SID の長さ
SID の長さをチェックします ...
↓
OK：SID「 {SID} 」は 8 文字以下です。

CHECK4: グローバルデータベース名の長さ
グローバルデータベース名の長さをチェックします ...
↓
OK：グローバルデータベース名「 {グローバルデータベース名} 」は 128 文字以下です。

CHECK5: コンピューター名の長さ
データベースの情報が存在します。
コンピューター名の長さをチェックします ...
↓
OK：コンピューター名「 {旧サーバーのコンピューター名} 」は 15 文字以下です。

CHECK6: RMS 管理者ユーザーのパスワード
RMS 管理者ユーザーのパスワードをチェックします ...
ユーザー名とパスワードを入力してください。
↓
RMS 管理者ユーザー名：{RMS の管理者ユーザー名 }
パスワード：{RMS の管理者ユーザーのパスワード }
OK：パスワードに半角英数字、「$」、「#」、「_」以外の文字は含まれていません。
```

```
CHECK7: サービス起動ユーザーのパスワード
サービス起動ユーザーのパスワードをチェックします ...
ユーザー名とパスワードを入力してください。
↓
ユーザー名： {サービス起動ユーザー名}
パスワード： {サービス起動ユーザーのパスワード}
OK：パスワードに半角英数字、「$」、「#」、「_」以外の文字は含まれていません。

CHECK8: 新サーバーへファイルをコピーする際にログオンする旧サーバーのユーザーのパスワード
新サーバーへファイルをコピーする際にログオンする旧サーバーのユーザーのパスワードをチェックします ...
ユーザー名とパスワードを入力してください。
↓
ユーザー名： {サーバーのサインユーザー名}
パスワード： {サーバーのサインインユーザーのパスワード}
OK：パスワードに半角英数字、「$」、「#」、「_」以外の文字は含まれていません。
```

6. 表示された CHECK1 ～ 8 のチェック結果を確認します。

・CHECK1 ～ 8 の結果がすべて「OK」の場合
旧サーバーと同じホスト名、グローバルデータベース名、およびパスワードでバージョンアップできます。

・CHECK 1 の結果が「NG」の場合
新サーバーのホスト名を、旧サーバーのホスト名から変更する必要があります。
「付録 P 新サーバーへの移行とバージョンアップ（ホスト名を変更する場合）」（P.493）を参照してバージョンアップの流れを確認し、バージョンアップを実施してください。

・CHECK 2、CHECK 3、または CHECK 4 の結果が「NG」の場合
新サーバーにデータベースをインストールするときに、必要な条件を満たすグローバルデータベース名を指定します。

・CHECK 5 の結果が「NG」の場合
新サーバーのホスト名を、旧サーバーのホスト名から変更する必要があります。
「付録 P 新サーバーへの移行とバージョンアップ（ホスト名を変更する場合）」（P.493）を参照してバージョンアップの流れを確認し、バージョンアップを実施してください。

・CHECK6、CHECK7、または CHECK8 の結果が「NG」の場合
NG となったパスワードを、次の文字だけを含む文字列に変更したあと、バージョンアップを実施してください。
- 半角英数字、「$（ドル）」、「#（シャープ）」、「_（アンダースコア）」

補足 {SID} は、「グローバルデータベース名」のうち、最初の「．（ピリオド）」までの値です。

続いて、「3.6.2 データ格納先フォルダー以外にあるストレージパスの確認」（P.361）に進みます。

3.6.2 データ格納先フォルダー以外にあるストレージパスの確認

データ格納先のフォルダー以外にストレージパスがある場合、そのフォルダーも新サーバーにコピーする必要があります。

「3.4.9 ツールの準備（旧サーバー）」（P.357）で準備した「AS_list_stgpath.bat」を使用して、データ格納先のフォルダー以外にあるストレージパスを確認します。

なお、「AS_list_stgpath.bat」を使用するには、ドキュメント管理サービスおよびデータベースのサービスが起動している必要があります。

補足 ・起動している必要があるドキュメント管理サービスおよびデータベースのサービスは、次のとおりです。
- ArcSuite Repository Service
- ArcSuite Repository Master Admin Service
- ArcSuite Repository Slave Admin Service
- OracleService {SID}
- OracleOraDB19Home1TNSListener

使用している環境によっては、存在しないサービスがあります。

・{SID} は、データベースをインストールしたときに、[データベースのサーバー情報] 画面で「グローバルデータベース名」に入力した値から、最初の「. (ピリオド)」までの値です。「. (ピリオド)」がない場合は、入力したグローバルデータベース名がそのまま表示されます。たとえば、「server1.example.com」と入力すると、{SID} には「SERVER1」と表示されます。

1. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
AS_list_stgpath.bat
```

2. RMS の管理者ユーザー名を入力して、<Enter> キーを押します。

補足 「RMS の管理者ユーザー名」は、旧サーバーのインストール時に、インストーラーの「RMS の管理者ユーザー登録」画面で指定した [ユーザー名] です。たとえば、「rmsadmin」です。

3. RMS の管理者ユーザーのパスワードを入力して、<Enter> キーを押します。

補足 「RMS の管理者ユーザーのパスワード」は、旧サーバーのインストール時に、インストーラーの「RMS の管理者ユーザー登録」画面で指定した [パスワード] です。たとえば、「rmsadmin001」です。

4. 「y」を入力して、<Enter> キーを押します。

たとえば、次のように表示されます。

```
Unknown operation listBackupTargetStorages.
Trying listCabinets...
cabinetId=CMESSAGE_CAB1
cabinetId=COLLABO_CAB1
cabinetId=CertStore **

SUCCESS: storage_archive_path.txt.
```

また、ストレージパスの一覧が記述された「storage_archive_path.txt」ファイルが、「3.4.9 ツールの準備 (旧サーバー)」(P.357) でツールを展開したフォルダーに出力されます。

注記 60 秒以上、画面に表示されている内容が変わらない場合は、管理者ユーザー名またはパスワードが正しくない可能性があります。その場合は、<Ctrl> キーと <C> キーを押して処理を中止し、再度、手順 1 から実行してください。

5. 出力された「storage_archive_path.txt」ファイルを開いて、ストレージパスがデータ格納先のフォルダー以外にあるかどうかを確認します。

補足 データ格納先フォルダー以外にあるストレージパスのフォルダーは、「3.12 エクスポートデータのコピー」(P.370) で新サーバーにコピーする必要があります。

3.7 データのエクスポート

「3.4.9 ツールの準備（旧サーバー）」（P.357）で準備した「AS_export.bat」を使用して、旧サーバーの次のデータをエクスポートします。
2台以上の構成の場合は、コンポーネントサーバー、リポジトリーサーバー、および外部連携サーバーで、データをエクスポートします。

◆ データベースのデータ
データベースに格納されているデータです。

◆ レジストリー情報
バージョンアップに必要なレジストリー情報です。

補足 旧サーバーで、ドキュメント管理サービスのストレージパスを、データ格納先のフォルダー以外に設定した場合は、新サーバーでも同じパス構成になるようにしてください。

また、「AS_export.bat」を実行すると、次のデータを新サーバーにコピーするためのツール「cp_ALL.bat」が、エクスポート先のフォルダーに自動で生成されます。

◆ インストール先のフォルダー
旧サーバーにArcSuite Engineeringをインストールしたときに、［インストール先の選択］画面で指定した［インストール先フォルダ］のフォルダーです。

◆ データ格納先のフォルダー
旧サーバーにArcSuite Engineeringをインストールしたときに、［データ格納先の選択］画面で指定した［データ格納先フォルダ］のフォルダーです。

補足 生成されたツール「cp_ALL.bat」は、「3.12 エクスポートデータのコピー」の「3.12.2 インストール先フォルダー、データ格納先フォルダーのコピー」（P.371）で使用します。

1. 旧サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. デスクトップでマウスカーソルを左下隅に移動します。
3. 表示された［スタート］ボタンを右クリックし、［コマンド プロンプト（管理者）］を選択します。
4. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
cd /d　{ツールを展開したフォルダー}
```

たとえば、「{ツールを展開したフォルダー}」が「C:¥Temp」の場合は、次のように入力します。

```
cd /d C:¥Temp
```

補足 「{ツールを展開したフォルダー}」は、「3.4.9 ツールの準備（旧サーバー）」（P.357）でツールを展開したフォルダーです。

5. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
AS_export.bat
```

6. エクスポート先のフォルダーを入力して、<Enter> キーを押します。

補足 「エクスポート先のフォルダー」の入力は、省略できます。エクスポート先のフォルダーを入力せずに <Enter> キーを押した場合は、「C:¥ASUpgrade」がエクスポート先として設定されます。

7. データベース管理者のパスワードを入力して、<Enter> キーを押します。

補足 「データベース管理者のパスワード」は、旧サーバーのインストール時に、インストーラーの［データベースの管理者情報］画面で指定した［パスワード］です。たとえば、「System0」です。

8. データベースの RMS 用ユーザー名を入力して、<Enter> キーを押します。

補足 「データベースの RMS 用ユーザー名」は、旧サーバーのインストール時に、インストーラーの［データベースの RMS 用ユーザー情報］画面で指定した［ユーザー名］です。たとえば、「rms」です。

9. データベースの RMS 用ユーザーのパスワードを入力して、<Enter> キーを押します。

補足 「データベースの RMS 用ユーザーのパスワード」は、旧サーバーのインストール時に、インストーラーの［データベースの RMS 用ユーザー情報］画面で指定した［パスワード］です。たとえば、「rms」です。

10. RMS の管理者ユーザー名を入力して、<Enter> キーを押します。

補足 「RMS の管理者ユーザー名」は、旧サーバーのインストール時に、インストーラーの［RMS の管理者ユーザー登録］画面で指定した［ユーザー名］です。たとえば、「rmsadmin」です。

11. RMS の管理者ユーザーのパスワードを入力して、<Enter> キーを押します。

補足 「RMS の管理者ユーザーのパスワード」は、旧サーバーのインストール時に、インストーラーの［RMS の管理者ユーザー登録］画面で指定した［パスワード］です。たとえば、「rmsadmin001」です。

12. 「y」を入力して、<Enter> キーを押します。

エクスポート先に指定したフォルダーに、データがエクスポートされます。
また、インストール先のフォルダー、データ格納先のフォルダーを新サーバーにコピーするためのツール「cp_ALL.bat」が、エクスポート先のフォルダーに生成されます。

補足 生成されたツール「cp_ALL.bat」は、「3.12 エクスポートデータのコピー」の「3.12.2 インストール先フォルダー、データ格納先フォルダーのコピー」（P.371）で使用します。

3.8 新サーバーの事前設定

旧サーバーからのデータをインポートできるように、新サーバーで次の順に設定します。

・ネットワークハブの接続
・動作環境と設定する項目の確認
・オペレーティングシステムおよび外部コンポーネントのインストール
・ツールの準備（新サーバー）

3.8.1 ネットワークハブの接続

旧サーバーと同じホスト名を使用する場合、新サーバーの事前設定を行うと、新サーバーと旧サーバーは同じホスト名になります。
旧サーバーと新サーバーの両方を起動させた状態で作業する場合は、旧サーバーと新サーバーをそれぞれ別のネットワークハブに接続します。

注記 旧サーバーとは別のホスト名にする場合は、旧サーバーと新サーバーを同じネットワークハブに接続して作業できます。

3.8.2 動作環境と設定する項目の確認

動作環境を確認する

新サーバーに必要な動作環境について確認します。
2台以上の構成の場合は、それぞれのサーバーで必要な動作環境を確認します。

参照 新サーバーの動作環境については、弊社公式サイトをご覧ください。

設定する項目を確認する

新サーバーで設定する各種項目について確認します。

注記 設定項目は、IP アドレス以外は、旧サーバーと同じ設定値にしてください。
なお、「3.6 旧サーバーでの事前チェック」（P.359）で確認した結果、ホスト名またはグローバルデータベース名の変更が必要になった場合は、ホスト名またはグローバルデータベース名は、旧サーバーとは異なる設定値にしてください。

参照 新サーバーでの設定項目については、次を参照してください。
・オールインワン構成の場合
「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「1.3 セットアップ前の設定事項」（P.24）
・2 台以上の構成の場合
「第 2 部 2 台以上の構成へのセットアップ」の「1.3 セットアップ前の設定事項」（P.225）

3.8.3 オペレーティングシステムおよび外部コンポーネントのインストール

新サーバーで次の設定をします。2台以上の構成の場合は、それぞれのサーバーで必要な設定をします。

・Windows をインストールする

・DocuWorks、ドキュメント編集ソフトウェアをインストールする

Windows をインストールする

Windowsをインストールしたあと、Windowsの環境設定をします。

参照 Windows のインストールについては、次を参照してください。

・オールインワン構成の場合
「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「2.1 Windows のインストール」（P.38）

・2 台以上の構成の場合
「第 2 部 2 台以上の構成へのセットアップ」の「2.1 Windows のインストール」（P.239）

DocuWorks、ドキュメント編集ソフトウェアをインストールする

必要に応じて、DocuWorksおよびドキュメント編集ソフトウェアをインストールします。

参照 DocuWorks およびドキュメント編集ソフトウェアのインストールについては、次を参照してください。

・オールインワン構成の場合
「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「2.2 DocuWorks のインストール」（P.46）、「2.3 ドキュメント編集ソフトウェアのインストール」（P.47）

・2 台以上の構成の場合
「第 2 部 2 台以上の構成へのセットアップ」の「2.2 DocuWorks のインストール」（P.241）、「2.3 ドキュメント編集ソフトウェアのインストール」（P.242）

3.8.4 ツールの準備（新サーバー）

バージョンアップで使用するツールを、新サーバーに準備します。

1. 新サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. 「ArcSuite 4.0 インストール」インストールメディアの「{インストールメディア} :¥Service¥Tools¥Upgrade¥ASUpgradeTool.zip」を任意のフォルダーに展開します。
   たとえば、「C:¥Temp」フォルダーに展開します。

   注記 展開したツールは、バージョンアップのすべての作業が完了するまで、移動したり削除したりしないでください。

   補足 新サーバーでは次のツールを使用します。
   ・AS_copy_export_data.bat
   ・AS_set_acl.bat
   ・AS_import.bat
   ・AS_copy_mimetypes.bat

3.9 データベースのインストール

新サーバーにデータベースをインストールします。
2台以上の構成の場合は、リポジトリーサーバーとして使用する新サーバーにインストールします。

注記 「3.6 旧サーバーでの事前チェック」（P.359）で確認した結果、旧サーバーで使用しているグローバルデータベース名が次の条件を満たしていなかった場合は、インストール時に旧サーバーと同じグローバルデータベース名を設定できません。その場合は、条件を満たすような、旧サーバーとは異なるグローバルデータベース名を設定してください。

・「 - （ハイフン）」が含まれていないこと
・128 文字以内であること
・データベースの SID が 8 文字以内であること

補足 ・［グローバルデータベース名］のうち、最初の「 . （ピリオド）」までの文字列が、データベースの SID になります。「 . （ピリオド）」がない場合は、［グローバルデータベース名］が SID になります。
・データベースのパスワードポリシーが変更になっているため、旧サーバーと新サーバーで、データベース管理者に同じパスワードを設定できないことがあります。その場合は、新サーバーで設定したパスワードを「{データベース管理者のパスワード}」に指定してください。

参照 データベースのインストールについては、次を参照してください。

・オールインワン構成の場合
「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「3.1 データベースのインストール」（P.50）
・2 台以上の構成の場合
「第 2 部 2 台以上の構成へのセットアップ」の「3.1 データベースのインストール」（P.244）

3.10 サービスの起動方法の変更

新サーバーのホスト名を、旧サーバーと同じホスト名にした場合、データベースをインストールしたあと、データベースのサービスの［スタートアップの種類］を［手動］に変更します。

1. オールインワン構成の場合は新サーバーに、2 台以上の構成の場合はリポジトリーサーバーとして使用する新サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. Windows の［スタート］メニューから、［Windows 管理ツール］＞［サービス］を選択します。
   ［サービス］画面が表示されます。
3. 「OracleOraDB19Home1TNSListener」を右クリックして、ショートカットメニューから［プロパティ］を選択します。
4. ［スタートアップの種類］で［手動］を選択し、［OK］をクリックします。
5. 「OracleService｛SID｝」を右クリックして、ショートカットメニューから［プロパティ］を選択します。

   補足 ｛SID｝は、データベースをインストールしたときに、［データベースのサーバー情報］画面で「グローバルデータベース名」に入力した値から、最初の「.（ピリオド）」までの値です。「.（ピリオド）」がない場合は、入力したグローバルデータベース名がそのまま表示されます。たとえば、「server1.example.com」と入力すると、｛SID｝には「SERVER1」と表示されます。
6. ［スタートアップの種類］で［手動］を選択し、［OK］をクリックします。

3.11 新サーバーのホスト名の一時変更とネットワークへの接続

新サーバーのホスト名を、旧サーバーと同じホスト名にした場合、新サーバーのホスト名を一時的に別のホスト名に変更し、旧サーバーと同じネットワークに接続します。同じネットワークに接続することで、旧サーバーから新サーバーへとファイルをコピーできるようになります。

1. 新サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. Windows の［スタート］メニューから、［コントロールパネル］を選択します。
   ［コントロール パネル］画面が表示されます。
3. ［システムとセキュリティ］＞［システム］をクリックします。
4. ［システムの詳細設定］をクリックし、［コンピューター名］タブを選択します。
5. ［変更］をクリックし、［コンピューター名］に旧サーバーとは異なるホスト名を指定します。
6. ［OK］をクリックします。
   ［コンピューター名／ドメイン名の変更］画面が表示されます。
7. ［OK］をクリックします。
8. ［閉じる］をクリックします。
   確認のメッセージが表示されます。
9. ［後で再起動する］をクリックします。
10. 新サーバーをシャットダウンします。
11. ネットワークハブを使用している場合はハブを外して、新サーバーを旧サーバーと同じネットワークに接続します。
12. 新サーバーの OS を起動します。

3.12 エクスポートデータのコピー

旧サーバーからエクスポートしたデータなどを、新サーバーにコピーします。

・エクスポート先フォルダーのコピー

・インストール先フォルダー、データ格納先フォルダーのコピー

3.12.1 エクスポート先フォルダーのコピー

「3.8.4 ツールの準備（新サーバー）」（P.366）で準備した「AS_copy_export_data.bat」を使用して、「3.7 データのエクスポート」（P.363）でエクスポートしたフォルダーを、新サーバーにコピーします。
2台以上の構成の場合は、コンポーネントサーバー、リポジトリーサーバー、および外部連携サーバーで、エクスポートしたデータを新サーバーにコピーします。

1. 新サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. Windows の［スタート］メニューから、［Windows システムツール］＞［コマンドプロンプト］を右クリックし、［その他］＞［管理者として実行］を選択します。
［管理者：コマンド プロンプト］画面が表示されます。
3. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
cd /d {ツールを展開したフォルダー}
```

たとえば、「{ツールを展開したフォルダー}」が「C:¥Temp」の場合は、次のように入力します。

```
cd /d C:¥Temp
```

補足 「{ツールを展開したフォルダー}」は、「3.8.4 ツールの準備（新サーバー）」（P.366）でツールを展開したフォルダーです。

4. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
AS_copy_export_data.bat
```

5. 旧サーバーの IP アドレスまたはホスト名を入力して、<Enter> キーを押します。
6. 旧サーバーのエクスポート先フォルダーを入力して、<Enter> キーを押します。

補足 「旧サーバーのエクスポート先フォルダー」は、「3.7 データのエクスポート」（P.363）で入力したエクスポート先のフォルダーを入力します。エクスポート先のフォルダーの入力を省略した場合は「C:¥ASUpgrade」を入力します。

7. 「y」を入力して、<Enter> キーを押します。
8. 旧サーバーにログインするユーザーを入力して、<Enter> キーを押します。

補足 「旧サーバーにログインするユーザー」の入力は、省略できます。旧サーバーにログインするユーザーを入力せずに <Enter> キーを押した場合は、「{旧サーバーの IP アドレスまたはホスト名}¥Administrator」が設定されます。

9. 手順 8 で入力したユーザーのパスワードを入力して、<Enter> キーを押します。
10. 「y」を入力して、<Enter> キーを押します。
エクスポートデータがコピーされます。

3.12.2 インストール先フォルダー、データ格納先フォルダーのコピー

「3.7 データのエクスポート」(P.363)で生成された「cp_ALL.bat」を使用して、旧サーバーのArcSuiteをインストールしたフォルダー（インストール先のフォルダー）、およびユーザーデータの格納先フォルダー（データ格納先のフォルダー）のうち、新サーバーへの移行を伴うバージョンアップに必要なデータをコピーします。

1. 新サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. Windows の［スタート］メニューから、［Windows システムツール］＞［コマンドプロンプト］を右クリックし、［その他］＞［管理者として実行］を選択します。
   ［管理者：コマンド プロンプト］画面が表示されます。
3. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

   ```
   cd /d {エクスポートデータをコピーしたフォルダー}¥copy_bat
   ```

   たとえば、「{エクスポートデータをコピーしたフォルダー」が「C:¥ASUpgrade」の場合は、次のように入力します。

   ```
   cd /d C:¥ASUpgrade¥copy_bat
   ```

   補足 「{エクスポートデータをコピーしたフォルダー}」は、「3.12.1 エクスポート先フォルダーのコピー」(P.370)の手順 6 で表示された、旧サーバーからエクスポートデータをコピーしたフォルダーです。
4. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

   ```
   cp_ALL.bat
   ```
5. 旧サーバーにログインするユーザーを入力して、<Enter> キーを押します。

   補足 「旧サーバーにログインするユーザー」の入力は、省略できます。旧サーバーにログインするユーザーを入力せずに <Enter> キーを押した場合は、「Administrator」が設定されます。
6. 手順 5 で入力したユーザーのパスワードを入力して、<Enter> キーを押します。
7. 「y」を入力して、<Enter> キーを押します。
   インストール先のフォルダーおよびデータ格納先のフォルダーがコピーされます。

3.13 その他のデータのコピー

コピー対象のデータは次のとおりです。

・ドキュメント管理サービスのストレージパスのフォルダーのコピー
・コラボスペースのインポートフォルダーのコピー
・ワークフローの外部コマンド配置フォルダーのコピー

これらのデータを旧サーバーから新サーバーにコピーするには、新サーバーにサービス起動ユーザーが必要です。サービス起動ユーザーを作成したあと、旧サーバーから新サーバーにコピーし、アクセス権を設定します。

3.13.1 サービス起動ユーザーの作成

「3.8.4 ツールの準備（新サーバー）」（P.366）で準備した「AS_set_acl.bat」を使用して、新サーバーにサービス起動ユーザーを作成します。

補足 サービス起動ユーザーとして既存のドメインユーザーを設定する場合は、サービス起動ユーザーを作成する必要はありません。

1. 新サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. Windows の［スタート］メニューから、［Windows システムツール］＞［コマンドプロンプト］を右クリックし、［その他］＞［管理者として実行］を選択します。
［管理者：コマンド プロンプト］画面が表示されます。
3. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
cd /d {ツールを展開したフォルダー}
```

たとえば、「{ツールを展開したフォルダー}」が「C:¥Temp」の場合は、次のように入力します。

```
cd /d C:¥Temp
```

補足 「{ツールを展開したフォルダー}」は、「3.8.4 ツールの準備（新サーバー）」（P.366）でツールを展開したフォルダーです。

4. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
AS_set_acl.bat
```

5. 「3.12 エクスポートデータのコピー」（P.370）で新サーバーにコピーした、エクスポートデータが格納されているフォルダーを入力し、<Enter> キーを押します。

補足 「エクスポートデータが格納されているフォルダー」の入力は、省略できます。エクスポートデータが格納されているフォルダーを入力せずに <Enter> キーを押した場合は、「C:¥ASUpgrade」がエクスポートデータの格納先とみなされます。

6. サービス起動ユーザーのパスワードを入力して、<Enter> キーを押します。
7. 次のように操作します。

◆ オールインワン構成、または 2 台以上の構成でリポジトリーサーバーの場合

(1) 「y」を入力します。

◆ 2 台以上の構成でコンポーネントサーバーの場合

(1) 「y」を入力します。
(2) 「y」を入力します。

旧サーバーで、サービス起動ユーザーおよびサービス起動グループをそれぞれローカルのユーザー、ローカルのグループに設定していた場合は、旧サーバーと同じ設定で、サービス起動ユーザーおよびサービス起動グループが作成されます。
また、作成されたサービス起動ユーザーで、データ格納先のフォルダーのデータにアクセス権が設定されます。

補足 サービス起動ユーザーのパスワードは、旧サーバーで使用していたサービス起動ユーザーのパスワードを入力してください。

3.13.2 ドキュメント管理サービスのストレージパスのフォルダーのコピー

「3.6.2 データ格納先フォルダー以外にあるストレージパスの確認」(P.361)で出力された「storage_archive_path.txt」に記述されているパスを確認し、同じパス構成になるように、ストレージパスのフォルダーを新サーバーにコピーします。
コピーが完了したあと、新サーバーのストレージパスのフォルダーにアクセス権を設定します。

ストレージパスのフォルダーのコピー

旧サーバーのデータ格納先のフォルダー以外にあるストレージパスのフォルダーを、新サーバーにコピーします。

1. 旧サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. デスクトップでマウスカーソルを左下隅に移動します。
3. 表示された［スタート］ボタンを右クリックし、［コマンド プロンプト（管理者）］を選択します。
4. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
net share ArcUpgrade=｛ストレージパスのフォルダー｝ /grant:｛新サーバーから旧サーバーに接続するユーザー名｝,read
```

たとえば、「｛ストレージパスのフォルダー｝」が「D:¥Storage01」、「｛新サーバーから旧サーバーに接続するユーザー名｝」が「Administrator」の場合は、次のように入力します。

```
net share ArcUpgrade=D:¥Storage01 /grant:Administrator,read
```

補足
- 「｛ストレージパスのフォルダー｝」には、「3.6.2 データ格納先フォルダー以外にあるストレージパスの確認」(P.361)で出力された「storage_archive_path.txt」に記述されているフォルダーを指定してください。
- 「｛新サーバーから旧サーバーに接続するユーザー名｝」は、新サーバーから旧サーバーの共有フォルダーに接続するユーザーです。「｛ストレージパスのフォルダー｝」に読み取り権限を持つユーザーを指定してください。

5. 新サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
6. Windows の［スタート］メニューから、［Windows システムツール］＞［コマンドプロンプト］を右クリックし、［その他］＞［管理者として実行］を選択します。
［管理者：コマンド プロンプト］画面が表示されます。
7. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
net use ｛共有フォルダーを割り当てるドライブ｝: ¥¥｛旧サーバーのホスト名｝¥ArcUpgrade /USER:｛新サーバーから旧サーバーに接続するユーザー名｝
```

たとえば、「{共有フォルダーを割り当てるドライブ}」が「X」、「{旧サーバーのホスト名}」が「arcsuite.example.com」、「{新サーバーから旧サーバーに接続するユーザー名}」が「Administrator」の場合は、次のように入力します。

```
net use X: ¥¥arcsuite.example.com¥ArcUpgrade /USER:Administrator
```

補足
- 「{共有フォルダーを割り当てるドライブ}」には、何も割り当てられていないドライブを指定します。
- 「{旧サーバーのホスト名}」は、旧サーバーのホスト名です。
- 「{新サーバーから旧サーバーに接続するユーザー名}」は、手順 4 で指定したユーザーです。

8. 「{新サーバーから旧サーバーに接続するユーザー名}」のパスワードを入力して、<Enter> キーを押します。

9. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
xcopy {共有フォルダーを割り当てるドライブ}:¥*.* {ストレージパスのフォルダー}¥ /E/H/O/X
```

たとえば、「{共有フォルダーを割り当てるドライブ}」が「X」、「{ストレージパスのフォルダー}」が「D:¥Storage01」の場合は、次のように入力します。

```
xcopy X:¥*.* D:¥Storage01¥ /E/H/O/X
```

補足 「{共有フォルダーを割り当てるドライブ}」には、手順 7 で共有フォルダーを割り当てたドライブを指定します。

10. コピーが完了したら、次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
net use {共有フォルダーを割り当てるドライブ}: /delete
```

たとえば、「{共有フォルダーを割り当てるドライブ}」が「X」の場合は、次のように入力します。

```
net use X: /delete
```

補足 「{共有フォルダーを割り当てるドライブ}」には、手順 7 で共有フォルダーを割り当てたドライブを指定します。

11. 旧サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。

12. デスクトップでマウスカーソルを左下隅に移動します。

13. 表示された［スタート］ボタンを右クリックし、［コマンド プロンプト（管理者）］を選択します。

14. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
net share ArcUpgrade /delete
```

続いて、「アクセス権の設定」（P.374）に進みます。

アクセス権の設定

新サーバーにコピーしたストレージパスのフォルダーに、アクセス権を設定します。

1. オールインワン構成の場合は新サーバーに、2 台以上の構成の場合はリポジトリーサーバーとして使用する新サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。

2. Windows の［スタート］メニューから、［Windows システムツール］＞［コマンドプロンプト］を右クリックし、［その他］＞［管理者として実行］を選択します。
［管理者：コマンド プロンプト］画面が表示されます。

3. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
cacls ｛ストレージパスのフォルダー｝ /T /C /P Administrators:F ｛サービス起動ユーザーのユーザー名｝:F
```

たとえば、「{ストレージパスのフォルダー}」が「D:¥Storage01」、「{サービス起動ユーザーのユーザー名}」が「ARCUSRSVC」の場合は、次のように入力します。

```
cacls D:¥Storage01 /T /C /P Administrators:F ARCUSRSVC:F
```

補足 「{サービス起動ユーザーのユーザー名}」は、「3.13.1 サービス起動ユーザーの作成」（P.372）で設定した「サービス起動ユーザー」のユーザー名です。初期値は、旧サーバーが ArcSuite Engineering の場合は「ARCUSRSVC」、Apeos PEMaster Evidence Manager の場合は「APEMEMUSRSVC」です。

4. 「y」を入力します。

3.13.3 コラボスペースのインポートフォルダーのコピー

コラボスペースのインポートフォルダーをデータ格納先のフォルダー以外に設定している場合は、同じパス構成になるように、インポートフォルダーを新サーバーにコピーします。
コピーが完了したあと、新サーバーのコラボスペースのインポートフォルダーにアクセス権を設定します。

補足 コラボスペースのインポートフォルダーを設定していない場合は、コラボスペースのインポートフォルダーのコピー、およびアクセス権の設定は必要ありません。

参照 インポートフォルダーは、コラボスペース管理アプリケーションの［ファイルインポート設定］で設定したフォルダーです。設定方法については、『コラボスペース管理アプリケーションのヘルプ』を参照してください。

インポートフォルダーのコピー

「3.13.2 ドキュメント管理サービスのストレージパスのフォルダーのコピー」の「ストレージパスのフォルダーのコピー」（P.373）の手順を参照して、旧サーバーのデータ格納先のフォルダー以外にあるインポートフォルダーを、新サーバーにコピーします。
なお、コマンドを入力するとき、「{ストレージパスのフォルダー}」を「{コラボスペースのインポートフォルダー}」に読み替えて行ってください。

アクセス権の設定

新サーバーにコピーしたインポートフォルダーに、アクセス権を設定します。

1. オールインワン構成の場合は新サーバーに、2 台以上の構成の場合はコンポーネントサーバーとして使用する新サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。

2. Windows の［スタート］メニューから、［Windows システムツール］＞［コマンドプロンプト］を右クリックし、［その他］＞［管理者として実行］を選択します。
［管理者：コマンド プロンプト］画面が表示されます。

3. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
cacls ｛インポートフォルダーのルートフォルダー｝ /T /C /P Administrators:F ｛サービス起動ユーザーのグループ名｝:R ｛サービス起動ユーザーのユーザー名｝:C
```

たとえば、「{インポートフォルダーのルートフォルダー}」が「C:¥ArcUpgrade」、「{サービス起動ユーザーのグループ名}」が「ARCGRPSVC」、「{サービス起動ユーザーのユーザー名}」が「ARCUSRSVC」の場合は、次のように入力します。

```
cacls C:¥ArcUpgrade /T /C /P Administrators:F ARCGRPSVC:R ARCUSRSVC:C
```

補足
- 「{インポートフォルダーのルートフォルダー}」は、コラボスペース管理アプリケーションの［ファイルインポート設定］で、［インポートフォルダのルートディレクトリ］として設定した値です。「3.4.5 コラボスペースのインポートフォルダーの確認」（P.354）で確認したパスを入力してください。
- 「{サービス起動ユーザーのグループ名}」は、「3.13.1 サービス起動ユーザーの作成」（P.372）で設定したサービス起動ユーザーのグループ名です。初期値は、旧サーバーが ArcSuite Engineering の場合は「ARCGRPSVC」、Apeos PEMaster Evidence Manager の場合は「APEMEMGRPSVC」です。
- 「{サービス起動ユーザーのユーザー名}」は、「3.13.1 サービス起動ユーザーの作成」（P.372）で設定したサービス起動ユーザーのユーザー名です。初期値は、旧サーバーが ArcSuite Engineering の場合は「ARCUSRSVC」、Apeos PEMaster Evidence Manager の場合は「APEMEMUSRSVC」です。

3.13.4 ワークフローの外部コマンド配置フォルダーのコピー

ワークフローの外部コマンドを配置するフォルダー（外部コマンド配置フォルダー）をデータ格納先のフォルダー以外に設定している場合は、同じパス構成になるように、外部コマンド配置フォルダーを新サーバーにコピーします。

コピーが完了したあと、新サーバーにコピーした外部コマンド配置フォルダーにアクセス権を設定します。

補足 ワークフローの外部コマンドを設定していない場合は、外部コマンドを配置するフォルダーのコピー、およびアクセス権の設定は必要ありません。

外部コマンド配置フォルダーのコピー

「3.13.2 ドキュメント管理サービスのストレージパスのフォルダーのコピー」の「ストレージパスのフォルダーのコピー」（P.373）の手順を参照して、旧サーバーのデータ格納先のフォルダー以外にある外部コマンド配置フォルダーを、新サーバーにコピーします。

なお、コマンドを入力するとき、「{ストレージパスのフォルダー}」を「{外部コマンド配置フォルダー}」に読み替えて行ってください。

アクセス権の設定

新サーバーにコピーした外部コマンド配置フォルダーに、アクセス権を設定します。

1. オールインワン構成の場合は新サーバーに、2 台以上の構成の場合はコンポーネントサーバーとして使用する新サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. Windows の［スタート］メニューから、［Windows システムツール］＞［コマンドプロンプト］を右クリックし、［その他］＞［管理者として実行］を選択します。
   ［管理者：コマンド プロンプト］画面が表示されます。

3. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
cacls {外部コマンド配置フォルダーのパス} /T /C /P Administrators:F {サービス起動ユーザーのグループ名}:R {サービス起動ユーザーのユーザー名}:C
```

たとえば、「{外部コマンド配置フォルダーのパス}」が「C:¥wfextcmd」、「{サービス起動ユーザーのグループ名}」が「ARCGRPSVC」、「{サービス起動ユーザーのユーザー名}」が「ARCUSRSVC」の場合は、次のように入力します。

```
cacls C:¥wfextcmd /T /C /P Administrators:F ARCGRPSVC:R ARCUSRSVC:C
```

補足
- 「{外部コマンド配置フォルダーのパス}」は、「3.4.6 ワークフローの外部コマンドを配置するフォルダーの確認」（P.355）で確認したパスを入力してください。ここでは、例として「C:¥wfextcmd」としています。
- 「{サービス起動ユーザーのグループ名}」は、「3.13.1 サービス起動ユーザーの作成」（P.372）で設定したサービス起動ユーザーのグループ名です。初期値は、旧サーバーが ArcSuite Engineering の場合は「ARCGRPSVC」、Apeos PEMaster Evidence Manager の場合は「APEMEMGRPSVC」です。
- 「{サービス起動ユーザーのユーザー名}」は、「3.13.1 サービス起動ユーザーの作成」（P.372）で設定したサービス起動ユーザーのユーザー名です。初期値は、旧サーバーが ArcSuite Engineering の場合は「ARCUSRSVC」、Apeos PEMaster Evidence Manager の場合は「APEMEMUSRSVC」です。

3.14 サービスの自動起動の設定

新サーバーのホスト名を、旧サーバーと同じホスト名にした場合、データのコピーが終了したあと、データベースのサービスの［スタートアップの種類］を［自動（遅延開始）］にします。

1. オールインワン構成の場合は新サーバーに、2 台以上の構成の場合はリポジトリーサーバーとして使用する新サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. Windows の［スタート］メニューから、［Windows 管理ツール］＞［サービス］を選択します。
   ［サービス］画面が表示されます。
3. 「OracleOraDB19Home1TNSListener」を右クリックして、ショートカットメニューから［プロパティ］を選択します。
4. ［スタートアップの種類］で［自動（遅延開始）］を選択し、［OK］をクリックします。
5. 「OracleService｛SID｝」を右クリックして、ショートカットメニューから［プロパティ］を選択します。

   補足 ｛SID｝は、データベースをインストールしたときに、［データベースのサーバー情報］画面で「グローバルデータベース名」に入力した値から、最初の「.（ピリオド）」までの値です。「.（ピリオド）」がない場合は、入力したグローバルデータベース名がそのまま表示されます。たとえば、「server1.example.com」と入力すると、｛SID｝には「SERVER1」と表示されます。
6. ［スタートアップの種類］で［自動（遅延開始）］を選択し、［OK］をクリックします。

3.15　新サーバーのホスト名の変更

旧サーバーのOSをシャットダウンしたあとで、新サーバーのホスト名を、旧サーバーと同じホスト名に変更します。

1. 旧サーバーをシャットダウンします。
2. 新サーバーに Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
3. Windows の［スタート］メニューから、［コントロールパネル］を選択します。
   ［コントロール パネル］画面が表示されます。
4. ［システムとセキュリティ］＞［システム］をクリックします。
5. ［システムの詳細設定］をクリックし、［コンピューター名］タブを選択します。
6. ［変更］をクリックし、［コンピューター名］に旧サーバーと同じホスト名を指定します。
7. ［OK］をクリックします。
   ［コンピューター名／ドメイン名の変更］画面が表示されます。
8. ［OK］をクリックします。
9. ［閉じる］をクリックします。
   確認のメッセージが表示されます。
10. ［今すぐ再起動する］をクリックします。
    新サーバーの OS が再起動されます。

2 台以上の構成の場合のホスト名と IP アドレスの名前解決

2台以上の構成の場合は、それぞれの新サーバー間でホスト名とIPアドレスの名前解決ができるように設定します。

補足 Active Directory や DNS サーバーでホスト名と IP アドレスを管理している場合は、ネットワーク管理者に設定を依頼してください。

hostsファイルでホスト名とIPアドレスを管理している場合は、「{システムドライブ} ¥Windows¥System32¥drivers¥etc¥hosts 」ファイルをテキストエディターなどで開き、次のようにそれぞれの新サーバーのIPアドレスとホスト名を追加してください。

ここでは、それぞれの新サーバーのIPアドレスとホスト名として、次の値を例に設定します。

項目	リポジトリーサーバー	コンポーネントサーバー
IPアドレス	192.168.1.1	192.168.1.2
ホスト名	Server1.example.com	arcsuite.example.com

```
# Copyright (c) 1993-2009 Microsoft Corp.
・・・省略・・・
# localhost name resolution is handled within DNS itself.
#127.0.0.1       localhost
#::1             localhost
192.168.1.1     Server1.example.com
192.168.1.2     arcsuite.example.com
```

3.16 データのインポート

「3.8.4 ツールの準備（新サーバー）」（P.366）で準備した「AS_import.bat」を使用して、「3.12 エクスポートデータのコピー」（P.370）で新サーバーにコピーしたエクスポートデータをインポートします。
2台以上の構成の場合は、次のサーバーの順にデータをインポートします。
1.リポジトリーサーバー
2.コンポーネントサーバー
3.外部連携サーバー

1. オールインワン構成の場合は新サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2 台以上の構成の場合はリポジトリーサーバーとして使用する新サーバーに、Administrator 権限を持ち、「ora_dba」グループに所属するユーザーでサインインします。

   補足 「ora_dba」グループに所属するユーザーとは、通常、データベースをインストールしたときにサーバーにサインインしていたユーザーです。たとえば、「administrator」でデータベースをインストールした場合、ここでは「administrator」でサインインできます。

2. Windows の［スタート］メニューから、［Windows システムツール］＞［コマンドプロンプト］を右クリックし、［その他］＞［管理者として実行］を選択します。
［管理者：コマンド プロンプト］画面が表示されます。

3. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
cd /d {ツールを展開したフォルダー}
```

   たとえば、「{ツールを展開したフォルダー}」が「C:¥Temp」の場合は、次のように入力します。

```
cd /d C:¥Temp
```

   補足 「{ツールを展開したフォルダー}」は、「3.8.4 ツールの準備（新サーバー）」（P.366）でツールを展開したフォルダーです。

4. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
AS_import.bat
```

5. 「3.12 エクスポートデータのコピー」（P.370）で新サーバーにコピーした、エクスポートデータが格納されているフォルダーのパスを入力して、<Enter> キーを押します。

   補足 「エクスポートデータが格納されているフォルダーのパス」の入力は、省略できます。エクスポートデータが格納されているフォルダーのパスを入力せずに <Enter> キーを押した場合は、「C:¥ASUpgrade」とみなされます。

6. データベース管理者のパスワードを入力して、<Enter> キーを押します。

   補足 「データベース管理者のパスワード」は、新サーバーへのデータベースのインストール時に、インストーラーの［データベースの管理者パスワードの設定］画面で指定した［パスワード］です。たとえば、「System0」です。

7. RMS の管理者ユーザー名を入力して、<Enter> キーを押します。

   補足 「RMS の管理者ユーザー名」は、旧サーバーでの ArcSuite のインストール時に、インストーラーの［RMS の管理者ユーザー登録］画面で指定した［ユーザー名］です。たとえば、「rmsadmin」です。

8. 新しい ArcSuite をインストールするフォルダーのパスを入力して、<Enter> キーを押します。

   補足 新しい ArcSuite をインストールするフォルダーのパスのデフォルトは、「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」です。

9. 新しいユーザーホームフォルダーのパスを入力して、<Enter> キーを押します。

補足 新しいユーザーホームフォルダーのパスのデフォルトは、「D:¥FUJIFILM¥ArcSuite」です。

10. RMS の管理者ユーザーのパスワードを入力して、<Enter> キーを押します。

補足 「RMS の管理者ユーザーのパスワード」は、旧サーバーでの ArcSuite のインストール時に、インストーラーの［RMS の管理者ユーザー登録］画面で指定した［パスワード］です。たとえば、「rmsadmin001」です。

11. 新サーバーでの HTTP サービスのホスト名を指定します。

◆ **SSL アクセラレーターを使用する場合**

(1) SSL アクセラレーターの設定情報を入力して、<Enter> を押します。

◆ **HTTP サービスに直接 SSL を設定する場合**

(1) IIS に設定するサーバー名を入力して、<Enter> を押します。

◆ **SSL アクセラレーターを使用せず、ロードバランサーも使用しない場合**

(1) IIS に設定するサーバー名を入力して、<Enter> を押します。

◆ **SSL アクセラレーターを使用せず、ロードバランサーを使用する場合**

(1) ロードバランサーの設定情報を入力して、<Enter> を押します。

補足 ここで指定したホスト名は、新サーバーでの ArcSuite のインストール時に、インストーラーの［HTTP サービスの情報］画面の HTTP サービスの［ホスト名］でも設定します。

12. データベースをインストールした新サーバーのホスト名を入力して、<Enter> キーを押します。

補足 「ドメインありデータベースサーバーホスト名」は、データベースをインストールした新サーバーのホスト名です。たとえば、新サーバーのホスト名が「newarc」の場合、「newarc.example.com」と入力します。

13. 新サーバーのグローバルデータベース名を入力して、<Enter> キーを押します。

補足 「グローバルデータベース名」は、データベースをインストールした新サーバーのグローバルデータベース名です。通常、「FQDN（ドメイン付きのフルコンピューター名）」を入力します。

14. 「y」を入力して、<Enter> キーを押します。

インポートが開始されます。
インポートが終了すると、次のように表示されます。

```
データのインポートに成功しました。
```

補足 ［SwichFile］画面が表示された場合は、［はい］をクリックします。

3.17 キャプチャリングサービスの監視キューフォルダーの作成

データのインポートが完了したあと、キャプチャリングサービスの移行先となる新サーバーに監視キューフォルダーを作成します。

1. 外部連携サーバーとして使用する新サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. Windows の［スタート］メニューから、［Windows システムツール］＞［コマンドプロンプト］を右クリックし、［その他］＞［管理者として実行］を選択します。
   ［管理者：コマンド プロンプト］画面が表示されます。
3. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
cd /d "｛キャプチャリングサービスのデータ格納先のフォルダー｝¥Client¥Capture¥conf¥Capture" && for /f "skip=1 tokens=2 delims=," %a in (config.csv) do (mkdir "%a" & cacls "%a" /T /C /P Administrators:F ｛キャプチャリングサービスの起動ユーザー名｝:C ｛監視キューフォルダーに登録するユーザー名｝:C)
```

   たとえば、「{キャプチャリングサービスのデータ格納先のフォルダー}」が「D:¥ArcSuite」、「{キャプチャリングサービスの起動ユーザー名}」が「ARCUSRSVC」、「{監視キューフォルダーに登録するユーザー名}」が「APPUSR」の場合は、次のように入力します。

```
cd /d "D:¥ArcSuite¥Client¥Capture¥conf¥Capture" && for /f "skip=1 tokens=2 delims=," %a in (config.csv) do (mkdir "%a" & cacls "%a" /T /C /P Administrators:F ARCUSRSVC:C APPUSR:C)
```

   補足 「{監視キューフォルダーに登録するユーザー名}」は、監視キューフォルダーに文書を登録するときに使用するユーザー名です。

   次のように表示されます。

```
よろしいですか (Y/N)？
```

4. 「y」を入力して、<Enter> キーを押します。
   ［処理ディレクトリ :］のメッセージのあとに、監視キューフォルダーのパスが表示されます。
   たとえば、次のように表示されます。

```
処理ディレクトリ : C:¥que
```

3.18　コンポーネントサーバーのインストール

データベースのインストールが完了したら、コンポーネントサーバーとして使用する新サーバーにArcSuite 4.0をインストールします。

補足 次のコンポーネントをバージョンアップで新規にインストールする場合、新規のインストールと同じ画面が表示されます。表示された画面で、設定内容を入力します。
・オンラインバックアップ

共通の設定

1. コンポーネントサーバーとして使用するサーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. 「ArcSuite 4.0 インストール」インストールメディアを、ドライブにセットします。
3. 「{インストールメディア} :¥Service¥ArcSuite¥setup.exe」をダブルクリックします。
   [ArcSuite セットアップへようこそ] 画面が表示されます。
4. [次へ] をクリックします。
   [インストールの確認] 画面が表示されます。
5. [OK] をクリックしてインストールします。
   [License Activator] 画面が表示されます。

   補足 [キャンセル] を選択した場合は、ArcSuite のインストールを終了します。
6. [ライセンス登録] をクリックします。
   シリアル番号を入力する画面が表示されます。
7. 弊社より発行されたシリアル番号を入力します。
   テキストファイルで発行されたシリアル番号がある場合は、格納場所を指定してファイルをインポートします。

   補足 ・シリアル番号の追加および削除は、[追加]、[削除] をクリックして実行します。
   ・指定する格納場所のパスには、マルチバイト文字および Windows のフォルダーに指定できない文字は使用できません。
8. [次へ] をクリックし、ライセンス認証を完了させます。

   参照 ライセンス認証完了までの手順は、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「4.1 共通設定」(P.57) の手順 7 ～ 12 を参照してください。
9. [License Activator] 画面で [終了] をクリックします。
   確認画面が表示されます。
10. [はい] をクリックします。
    [機能の選択] 画面が表示されます。
    ライセンスを認証したコンポーネントのチェックボックスにチェックマークが付いています。
11. インストールが必要なコンポーネントを選択して、[次へ] をクリックします。
    [インストールするコンポーネントの確認] 画面が表示されます。
12. インストールするコンポーネントを確認します。

13. [次へ] をクリックします。
使用許諾契約の画面が表示されます。

補足 ・同意済みの使用許諾契約は、インストール終了後、次のパスに保存されます。
「{ArcSuite のインストールフォルダー} ¥License ArcSuite.txt」
・{ArcSuite のインストールフォルダー} は、手順 27 で指定するフォルダーです。たとえば、「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」です。

14. 使用許諾契約を読み、同意する場合は、[使用許諾契約の全条項に同意します] を選択します。

15. [次へ] をクリックします。
[ArcSuite アップグレーダー セットアップへようこそ] 画面が表示されます。

16. [次へ] をクリックします。
[データベースの管理者情報] 画面が表示されます。

17. [パスワード] に、データベースをインストールしたときに設定した、データベースの管理者ユーザーのパスワードを入力します。ここでは、「System0」と入力します。

18. [次へ] をクリックします。
[データベースの RMS 用ユーザー情報] 画面が表示されます。

19. [パスワード] に、ArcSuite をインストールしたときに設定した、データベースの RMS 用ユーザーのパスワードを入力します。ここでは、「rms」と入力します。

20. [次へ] をクリックします。
[アップグレードの開始] 画面が表示されます。

注記 再起動を促す画面が表示された場合は、必ず [再起動をしない] を選択してください。[再起動をする] を選択して再起動すると、アップグレードに失敗します。

21. 内容を確認して、[次へ] をクリックします。
[アップグレードの完了] 画面が表示されます。

22. [完了] をクリックします。
[ユーザ情報] 画面が表示されます。

23. [ユーザ名] と [会社名] を確認します。

補足 [ユーザ名] と [会社名] には、OS に設定されている内容が表示されます。

24. [次へ] をクリックします。
[モード選択] 画面が表示されます。

25. [通常モード] が選択されていることを確認します。

26. [次へ] をクリックします。
[インストール先の選択] 画面が表示されます。

27. インストール先を確認します。

注記 インストール先は変更しないでください。

28. [次へ] をクリックします。
[データ格納先の選択] 画面が表示されます。

29. ユーザーデータの格納先を確認します。

注記 ユーザーデータの格納先は変更しないでください。

30. [次へ] をクリックします。
[データベースの管理者情報] 画面が表示されます。

31. [パスワード] に、データベースをインストールしたときに設定した、データベースの管理者ユーザーのパスワードを入力します。ここでは、「System0」と入力します。

注記 データベースの管理者ユーザーは、変更しないでください。

32. [次へ] をクリックします。
[データベースの RMS 用ユーザー情報] 画面が表示されます。

33. [パスワード] に、ArcSuite をインストールしたときに設定した、データベースの RMS 用ユーザーのパスワードを入力します。ここでは、「rms」と入力します。

34. [次へ] をクリックします。
[データファイルの配置先] 画面が表示されます。

35. データベースのデータファイルの配置先を確認します。

注記 データファイルの配置先は変更しないでください。

36. [次へ] をクリックします。
[コンピュータのホスト名] 画面が表示されます。

37. ホスト名を確認します。

38. [次へ] をクリックします。
[コンピュータの設置場所] 画面が表示されます。

39. コンピューターの設置場所を、日本語と英語で入力します。

・[設置場所（JA)]
日本語で入力します。
・[設置場所（EN)]
英語で入力します。

ここでは、[設置場所（JA)] に「サーバールーム」、[設置場所（EN)] に「ServerRoom」と入力します。

補足 ここで入力した文字列は、RMS データベースに登録する属性として使用されます。

40. [次へ] をクリックします。
[サービス起動ユーザー情報] 画面が表示されます。

41. [ユーザー名] を確認して、[パスワード] および [パスワード確認] を入力します。ここでは、「ArcSuite001」と入力します。

42. [次へ] をクリックします。
[サービス起動ユーザーのグループ情報] 画面が表示されます。

補足 [サービス起動ユーザーの設定変更] ダイアログボックスが表示された場合は、[はい] をクリックしてください。

43. [グループ名] を確認して、[次へ] をクリックします。
[SSL 構成の選択] 画面が表示されます。

補足 IIS の「Web サイト」が複数存在する場合は、[SSL 構成の選択] 画面の前に [IIS の Web サイトの選択] 画面が表示されます。この場合は、選択内容を確認して、[次へ] をクリックします。

44. SSL の構成を確認して、[次へ] をクリックします。
[HTTP サービスの情報] 画面が表示されます。

45. [ホスト名]、[ポート番号]、および［仮想ディレクトリー名］を確認して、[次へ] をクリックします。
［アクセス制御情報］画面が表示されます。

46. アクセスを受け付けるホストに表示されている内容を確認して、[次へ] をクリックします。

注記 ・リポジトリーサーバーの IP アドレスまたはホスト名が表示されていないときは、IP アドレスまたはホスト名を追加します。
・SSL アクセラレーターまたはプロキシサーバーを使用する場合は、[追加] をクリックし、使用する SSL アクセラレーターまたはプロキシサーバーの IP アドレスを追加してください。

補足 ホスト名および IP アドレスは、追加、削除できます。[編集] をクリックし、ArcSuite をインストールするサーバーの IP アドレスを入力します。

［ログイン方法の選択］画面が表示されます。

47. 選択されているログイン方法を確認して、[次へ] をクリックします。
［データベースのポータル用ユーザー情報］画面が表示されます。

48. [ユーザー名] を確認して、[パスワード] を入力します。ここでは、「PORTAL」と入力します。

49. [次へ] をクリックします。
［RMI レジストリサービスのポート番号］画面が表示されます。

50. RMI レジストリサービスのポート番号を確認して、[次へ] をクリックします。
［ログ管理サービスのポート番号］画面が表示されます。

51. ログ管理サービスのポート番号を確認して、[次へ] をクリックします。

◆ **[機能の選択] 画面でオンラインバックアップを選択していない場合**
［ファイルコピーの開始］画面が表示されます。手順 56 に進みます。

◆ **[機能の選択] 画面でオンラインバックアップを選択した場合**
［オンラインのバックアップのユーザー情報］画面が表示されます。手順 52 に進みます。

52. オンラインバックアップの［ユーザー名］、[パスワード] および［パスワード確認］を入力します。ここでは、すべてに「ONLINE_BACKUP」と入力します。

53. [次へ] をクリックします。
［オンラインバックアップのアーカイブログの出力先］画面が表示されます。

54. オンラインバックアップのアーカイブログの出力先を指定します。

補足 ・システムドライブ以外のパスを指定することを推奨します。システムドライブを選択した場合、オンラインバックアップに時間がかかることがあります。
・初期値では、「{データベース格納先ドライブ} :¥Database¥ArchiveLogArea」が表示されます。

55. [次へ] をクリックします。
［ファイルコピーの開始］画面が表示されます。

56. [次へ] をクリックします。
ファイアウォールの例外を設定するかどうかの確認画面が表示されます。

57. [はい] または［いいえ］をクリックします。
インストールが開始されます。
オールインワン構成の場合、インストールが終了すると［ArcSuite ドキュメント管理サービスセットアップへようこそ］画面が表示されます。「3.19 リポジトリーサーバーのインストール」の「ドキュメント管理サービスのインストール」（P.391）に進みます。
2 台以上の構成の場合、インストールが終了すると、リポジトリーサーバーのインストール / アップグレードの実施を促す画面が表示されます。

58. 画面を表示したまま、「3.19 リポジトリーサーバーのインストール」（P.388）に進みます。

補足
- リポジトリーサーバーのインストールが完了したあとで、コンポーネントサーバーでインストールの続きをします。そのときに、［OK］をクリックします。
- ここで［OK］をクリックすると、次の画面が表示されます。その場合は、画面を表示したまま、「3.19 リポジトリーサーバーのインストール」（P.388）に進みます。
  リポジトリーサーバーのインストールが完了したあとで、この画面で、［はい］をクリックします。

3.19 リポジトリーサーバーのインストール

コンポーネントサーバーで、[リポジトリサーバー（ドキュメント管理サービス）のインストール/アップグレードを実施していない場合は、実施してください。作業が完了しましたら「OK」を押してください。]画面を表示させた状態で、サーバーとして使用する新サーバーにArcSuite 4.0をインストールをします。

注記 ・表領域の残りの容量が不足している場合、インストールで次のようなエラーが表示されます。その場合、データベース表領域管理ツールで、該当する表領域のサイズを大きくするか、データファイルを追加するかしてください。
- ORA-01652：一時セグメントを拡張できません（{ブロック数} 分、表領域 {表領域名}）
- ORA-01653：表 {表名} を拡張できません（{ブロック数} 分、表領域 {表領域名}）
- ORA-01654：索引 {インデックス名} を拡張できません（{ブロック数} 分、表領域 {表領域名}）
- ORA-01658：表領域 {表領域名} にセグメント用の INITIAL エクステントを作成できません

補足 オールインワン構成の場合、コンポーネントサーバーのインストールのあと、自動でリポジトリーサーバーのインストールに進みます。その場合、「ドキュメント管理サービスのインストール」（P.391）から始まります。[データベースのドキュメント管理サービス用ユーザー作成]画面の入力のあとは、「3.20 コンポーネントサーバーのインストール（続き）」（P.392）の［データベースのドキュメントスペース用ユーザー作成］画面に進みます。

参照 データベース表領域管理ツールについては、「付録 O データベース表領域管理ツール」（P.489）を参照してください。

リポジトリーサーバーの共通設定

1. リポジトリーサーバーとして使用するサーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. 「ArcSuite 4.0 インストール」インストールメディアを、ドライブにセットします。
3. 「{インストールメディア} :¥Service¥ArcSuite¥setup.exe」をダブルクリックします。
   [ArcSuite セットアップへようこそ]画面が表示されます。
4. [次へ]をクリックします。
   [インストールの確認]画面が表示されます。
5. [OK]を選択してインストールします。
   [License Activator]画面が表示されます。

   補足 ［キャンセル］を選択した場合は、ArcSuite のインストールを終了します。
6. [ライセンス登録]をクリックします。
   シリアル番号を入力する画面が表示されます。
   弊社より発行されたシリアル番号を入力します。
   テキストファイルで発行されたシリアル番号がある場合は、格納場所を指定してファイルをインポートします。

   補足 ・シリアル番号の追加および削除は、[追加]、[削除]をクリックして実行します。
   ・指定する格納場所のパスには、マルチバイト文字および Windows のフォルダーに指定できない文字は使用できません。
7. [次へ]をクリックし、ライセンス認証を完了させます。

   参照 ライセンス認証完了までの手順は、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「4.1 共通設定」（P.57）の手順 7 ～ 12 を参照してください。
8. [License Activator]画面で［終了］をクリックします。
   確認画面が表示されます。

9. [はい] をクリックします。
[機能の選択] 画面が表示されます。
ライセンスを認証したコンポーネントのチェックボックスにチェックマークが付いています。
インストールが必要なコンポーネントを選択して、[次へ] をクリックします。
[インストールするコンポーネントの確認] 画面が表示されます。

10. インストールするコンポーネントを確認します。

11. [次へ] をクリックします。
使用許諾契約の画面が表示されます。

補足 ・同意済みの使用許諾契約は、インストール終了後、次のパスに保存されます。
「{ArcSuite のインストールフォルダー} ¥License ArcSuite.txt」
・{ArcSuite のインストールフォルダー} は、手順 26 で指定するフォルダーです。たとえば、「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」です。

12. 使用許諾契約を読み、同意する場合は、[使用許諾契約の全条項に同意します] を選択します。

13. [次へ] をクリックします。
[ArcSuite アップグレーダー セットアップへようこそ] 画面が表示されます。

14. [次へ] をクリックします。
[データベースの管理者情報] 画面が表示されます。

15. [パスワード] に、データベースをインストールしたときに設定した、データベースの管理者ユーザーのパスワードを入力します。ここでは、「System0」と入力します。

16. [次へ] をクリックします。
[データベースの RMS 用ユーザー情報] 画面が表示されます。

17. [パスワード] に、ArcSuite をインストールしたときに設定した、データベースの RMS 用ユーザーのパスワードを入力します。ここでは、「rms」と入力します。

18. [次へ] をクリックします。
[アップグレードの開始] 画面が表示されます。

19. 内容を確認して、[次へ] をクリックします。
[ArcSuite アップデーターセットアップ] 画面が表示されます。

20. [次へ] をクリックします。
確認画面が表示されます。

21. [OK] をクリックします。
[アップグレードの完了] 画面が表示されます。

22. [完了] をクリックします。
ユーザー情報の画面が表示されます。

23. [ユーザ名] と [会社名] を確認します。

補足 [ユーザ名] と [会社名] には、OS に設定されている内容が表示されます。

24. [次へ] をクリックします。
[モード選択] 画面が表示されます。

25. [次へ] をクリックします。
インストール先を確認する画面が表示されます。

26. インストール先を確認します。

注記 インストール先は変更しないでください。

27. [次へ] をクリックします。
[データ格納先の選択] 画面が表示されます。

28. ユーザーデータの格納先を確認します。

注記 ユーザーデータの格納先は変更しないでください。

29. [次へ] をクリックします。
[データベースの管理者情報] 画面が表示されます。

30. [パスワード] に、データベースをインストールしたときに設定した、データベースの管理者ユーザーのパスワードを入力します。ここでは、「System0」と入力します。

31. [次へ] をクリックします。
[データベースの RMS 用ユーザー情報] 画面が表示されます。

32. ユーザー名を確認して、[パスワード] に、ArcSuite をインストールしたときに設定した、データベースの RMS 用ユーザーのパスワードを入力します。ここでは、「rms」と入力します。

33. [次へ] をクリックします。
[データファイルの配置先] 画面が表示されます。

34. データベースのデータファイルの配置先を確認します。

注記 データファイルの配置先は変更しないでください。

35. [次へ] をクリックします。
[コンピュータのホスト名] 画面が表示されます。

36. ホスト名を確認します。

37. [次へ] をクリックします。
[コンピュータの設置場所] 画面が表示されます。

38. コンピューターの設置場所を、日本語と英語で入力します。

・[設置場所（JA)]
日本語で入力します。
・[設置場所（EN)]
英語で入力します。
ここでは、[設置場所（JA)] に「サーバールーム」、[設置場所（EN)] に「ServerRoom」と入力します。

補足 ここで入力した文字列は、RMS データベースに登録する属性として使用されます。

39. [次へ] をクリックします。
[サービス起動ユーザー情報] 画面が表示されます。

補足 [サービス起動ユーザーの設定変更] 画面が表示された場合は、[はい] をクリックします。

40. [ユーザー名] を確認して、[パスワード] および [パスワード確認] を入力します。ここでは、「ArcSuite001」と入力します。

41. [次へ] をクリックします。
[サービス起動ユーザーのグループ情報] 画面が表示されます。

42. [グループ名] を確認して、[次へ] をクリックします。
[ログ管理サービスのポート番号] 画面が表示されます。

43. ログ管理サービスのポート番号を確認して、[次へ] をクリックします。
[ファイルコピーの開始] 画面が表示されます。

44. [次へ] をクリックします。
インストールが開始されます。インストールが終了すると、[ArcSuite ドキュメント管理サービスセットアップへようこそ] 画面が表示されます。

注記 ファイアウォールサービスが起動している場合は、インストールの開始前にファイアウォールの設定を確認する画面が表示されます。
設定する場合は、[はい] を選択します。すでにファイアウォールを設定している場合、または Windows ファイアウォールを使用しない場合は、[いいえ] を選択してください。

続いて、「ドキュメント管理サービスのインストール」（P.391）に進みます。

ドキュメント管理サービスのインストール

1. [次へ] をクリックします。
[データベースのサーバー情報] 画面が表示されます。

2. データベースの [サーバー名]、[ポート番号]、および [グローバルデータベース名] を確認して、[次へ] をクリックします。
[データベースの管理者情報] 画面が表示されます。

3. [パスワード] にデータベースをインストールしたときに設定した、データベースの管理者ユーザーのパスワードを入力します。ここでは、「System0」と入力します。

4. [次へ] をクリックします。
[データベースのドキュメント管理サービス用ユーザー情報] 画面が表示されます。

補足 バージョンアップ、再インストール、または追加リポジトリーサーバー（スレーブ管理サーバー）を新規でインストールする場合に、[データベースのドキュメント管理サービス用ユーザー情報] 画面が表示されます。
リポジトリーサーバー（マスター管理サーバー）を新規でインストールする場合は、[データベースのドキュメント管理サービス用ユーザー作成] 画面が表示されます。

5. [ユーザー名] を確認して、[パスワード] に ArcSuite をインストールしたときに設定した、データベースのドキュメント管理サービス用ユーザーのパスワードを入力します。ここでは、「drep」と入力します。

6. [次へ] をクリックします。
[ファイルコピーの開始] 画面が表示されます。

7. インストールの内容を確認して、[次へ] をクリックします。
インストールが開始されます。インストールが終了すると、[セットアップの完了] 画面が表示されます。

8. [はい、今すぐコンピュータを再起動します。] を選択します。

9. [完了] をクリックします。
サーバーが再起動されます。

続いて、「3.20 コンポーネントサーバーのインストール（続き）」（P.392）に進みます。

3.20 コンポーネントサーバーのインストール（続き）

リポジトリーサーバーのインストールが完了したら、コンポーネントサーバーのインストールに戻ります。

補足 次のコンポーネントをバージョンアップで新規にインストールする場合、新規のインストールと同じ画面が表示されます。表示された画面で、設定内容を入力します。
- メッセージ通知サービス
- コラボスペース
- ドキュメントレビューオプション
- ワークフロー
- 原本性保証オプション

1. コンポーネントサーバーとして使用するサーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。

2. 「ArcSuite 4.0 インストール」インストールメディアを、ドライブにセットします。

3. [リポジトリサーバー（ドキュメント管理サービス）のインストール / アップグレードを実施していない場合は、実施してください。作業が完了しましたら「OK」を押してください。] 画面で、[OK] をクリックします。

◆ **[機能の選択] 画面でメッセージ通知サービスを選択した場合**
[ArcSuite メッセージ通知サービス セットアップへようこそ] 画面が表示されます。手順 4 に進みます。

◆ **[機能の選択] 画面でメッセージ通知サービスを選択していない場合**
[ArcSuite ドキュメントスペース セットアップへようこそ] 画面が表示されます。手順 5 に進みます。

4. 次の操作をします。

◆ **メッセージ通知サービスをインストールしていた場合**

(1) [次へ] をクリックします。
[データベースのメッセージ通知サービス用ユーザー情報] 画面が表示されます。

(2) [ユーザー名] を確認して、[パスワード] に ArcSuite をインストールしたときに設定した、データベースのメッセージ通知サービス用ユーザーのパスワードを入力します。ここでは、「cmuser」と入力します。

(3) [次へ] をクリックします。
[ファイルコピーの開始] 画面が表示されます。

(4) [次へ] をクリックします。
[セットアップの完了] 画面が表示されます。

(5) [完了] をクリックします。

◆ **バージョンアップするときに、新しくメッセージ通知サービスをインストールする場合**

(1) メッセージ通知サービスの設定をします。
このときに表示される画面は、新規にインストールするときの画面と同じです。

参照 新規にインストールするときの手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「6 メッセージ通知サービス」（P.69）を参照してください。

メッセージ通知サービスの設定をしたら、[ArcSuite ドキュメントスペース セットアップへようこそ] 画面が表示されます。

5. ドキュメントスペースの設定をします。

(1) [次へ] をクリックします。
[データベースのドキュメントスペース用ユーザー情報] 画面が表示されます。

(2) [ユーザー名] を確認して、[パスワード] に ArcSuite をインストールしたときに設定した、データベースのドキュメントスペース用ユーザーのパスワードを入力します。ここでは、「eappli」と入力します。

(3) [次へ] をクリックします。
[ファイルコピーの開始] 画面が表示されます。

(4) [次へ] をクリックします。
[セットアップの完了] 画面が表示されます。

(5) [完了] をクリックします。

6. [機能の選択] 画面でコラボスペースを選択した場合は、コラボスペースの設定をします。

◆ **コラボスペースをインストールしていた場合**

(1) [ArcSuite コラボスペース セットアップへようこそ] 画面で [次へ] をクリックします。
[サーバー ID 情報] 画面が表示されます。

(2) [サーバー ID] を確認して、[次へ] をクリックします。
[データベースのコラボスペース用ユーザー情報] 画面が表示されます。

(3) [ユーザー名] を確認して、[パスワード] に ArcSuite をインストールしたときに設定した、データベースのコラボスペース用ユーザーのパスワードを入力します。ここでは、「couser」と入力します。

(4) [次へ] をクリックします。
[ファイルコピーの開始] 画面が表示されます。

(5) [次へ] をクリックします。
[セットアップの完了] 画面が表示されます。

(6) [完了] をクリックします。

補足 次にインストールするコンポーネントがない場合、[完了] をクリックしたあとは、アップデートが実行されます。そのため、次の [セットアップの完了] 画面が表示されるまで時間がかかることがあります。

◆ **バージョンアップするときに、新しくコラボスペースをインストールする場合**

(1) コラボスペースの設定をします。
このときに表示される画面は、新規にインストールするときの画面と同じです。

参照 新規にインストールするときの手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「8 コラボスペース」（P.74）を参照してください。

7. [機能の選択] 画面でドキュメントレビューオプションを選択した場合は、ドキュメントレビューオプションの設定をします。

◆ **ドキュメントレビューオプションをインストールしていた場合**

(1) [ArcSuite ドキュメントレビューオプション セットアップへようこそ] 画面で [次へ] をクリックします。
[ドキュメントレビューオプション用ユーザー情報] 画面が表示されます。

(2) [ユーザー名] を確認して、[パスワード] に ArcSuite をインストールしたときに設定した、データベースのドキュメントレビューオプション用ユーザーのパスワードを入力します。ここでは、「dbcollabouser」と入力します。

(3) [次へ] をクリックします。
[ファイルコピーの開始] 画面が表示されます。

(4) [次へ] をクリックします。
[セットアップの完了] 画面が表示されます。

(5) [完了] をクリックします。

補足 次にインストールするコンポーネントがない場合、[完了] をクリックしたあとは、アップデートが実行されます。そのため、次の [セットアップの完了] 画面が表示されるまで時間がかかることがあります。

◆ バージョンアップするときに、新しくドキュメントレビューオプションをインストールする場合

(1) ドキュメントレビューオプションの設定をします。
このときに表示される画面は、新規にインストールするときの画面と同じです。

参照 新規にインストールするときの手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「9 ドキュメントレビューオプション」(P.77) を参照してください。

8. [機能の選択] 画面でワークフローを選択した場合は、ワークフローの設定をします。

◆ ワークフローをインストールしていた場合

(1) [ArcSuite ワークフロー セットアップへようこそ] 画面で [次へ] をクリックします。
[データベースのワークフロー用ユーザー情報] 画面が表示されます。

(2) [ユーザー名] を確認して、[パスワード] に ArcSuite をインストールしたときに設定した、データベースのワークフロー用ユーザーのパスワードを入力します。ここでは、「wf」と入力します。

(3) [次へ] をクリックします。
[セットアップの完了] 画面が表示されます。

(4) [完了] をクリックします。

補足 次にインストールするコンポーネントがない場合、[完了] をクリックしたあとは、アップデートが実行されます。そのため、次の [セットアップの完了] 画面が表示されるまで時間がかかることがあります。

◆ バージョンアップするときに、新しくワークフローをインストールする場合

(1) ワークフローの設定をします。
このときに表示される画面は、新規にインストールするときの画面と同じです。

参照 新規にインストールするときの手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「10 ワークフロー」(P.79) を参照してください。

9. [機能の選択] 画面で原本性保証オプションを選択した場合は、原本性保証オプションの設定をします。

◆ 原本性保証オプションをインストールしていた場合

(1) [ArcSuite 原本性保証オプション セットアップへようこそ] 画面で [次へ] をクリックします。
[プロキシサーバーの情報] 画面が表示されます。

(2) [サーバー名]、および [ポート番号] を確認して、[次へ] をクリックします。
[タイムスタンプサービスのライセンスファイルのインポート] 画面が表示されます。

補足 プロキシサーバーの設定は省略できます。

(3) [ライセンスファイル] を確認して、[次へ] をクリックします。
[タイムスタンプサービスの接続時のパスワードの設定] 画面が表示されます。

(4) [パスワード]、および [パスワード確認] に、パスワードを入力します。ここでは、「etiming」と入力します。

補足 アマノタイムスタンプサービスの契約時に提供されるパスワードを入力します。

(5) [次へ] をクリックします。
[タイムスタンプサービスの URL の設定] 画面が表示されます。

(6) [URL] に、アマノタイムスタンプサービスの URL を指定します。

・従量制メニューの場合
http://tss3161.e-timing.ne.jp/astdtssvr/TSRequest

・定額制メニューでポート番号を変更していない場合

http:// {e-timing Proxy 3161 for AMANO TSA をインストールしたサーバーの FQDN または IP アドレス} /atssprxy/Proxy

・定額制メニューでポート番号を変更している場合
http:// {e-timing Proxy 3161 for AMANO TSA をインストールしたサーバーの FQDN または IP アドレス} : {ポート番号} /atssprxy/Proxy

補足
・初期値はアマノタイムスタンプサービスの従量制メニューの URL です。
・従量制メニューおよび定額制メニューは、アマノセキュアジャパン株式会社の料金メニューです。
・「e-timing Proxy 3161 for AMANO TSA」は、アマノセキュアジャパン株式会社のソフトウェアです。
・{ポート番号} は、「e-timing Proxy 3161 for AMANO TSA」のポート番号です。コンポーネントサーバーに「e-timing Proxy 3161 for AMANO TSA」をインストールした場合、「e-timing Proxy 3161 for AMANO TSA」のポート番号を変更する必要があります。

参照 「e-timing Proxy 3161 for AMANO TSA」のポート番号の変更については、『e- 文書法概要説明書』を参照してください。

(7) [次へ] をクリックします。
[ファイルコピーの開始] 画面が表示されます。

(8) [次へ] をクリックします。
[セットアップの完了] 画面が表示されます。

(9) [完了] をクリックします。

補足 [完了] をクリックしたあとは、アップデートが実行されます。そのため、次の [セットアップの完了] 画面が表示されるまで時間がかかることがあります。

◆ バージョンアップするときに、新しく原本性保証オプションをインストールする場合

(1) 原本性保証オプションの設定をします。
このときに表示される画面は、新規にインストールするときの画面と同じです。

参照 新規にインストールするときの手順については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「11 原本性保証オプション」（P.81）を参照してください。

選択された機能のインストールが終了すると、[セットアップの完了] 画面が表示されます。

10. [セットアップの完了] 画面の [はい、今すぐコンピュータを再起動します。] を選択します。

11. [完了] をクリックします。
コンポーネントサーバーのサーバーが再起動されます。
再起動したことを確認したら、「3.21 外部連携サーバーへのインストール」（P.396）に進みます。
外部連携サーバー、ドキュメント管理サービス SDK、コラボスペース IFTK、ワークフロー IFTK を使用していない場合は、「3.22 インストール後の設定」（P.402）に進みます。

3.21 外部連携サーバーへのインストール

外部連携サーバーとして使用する新サーバーに、ArcSuite 4.0のキャプチャリングサービス、統合検索サービスをインストールします。

3.21.1 キャプチャリングサービスのインストール

1. キャプチャリングサービスをインストールするサーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。

2. 「ArcSuite 4.0 オプション」インストールメディアを、ドライブにセットします。

3. 次のように操作します。

◆ OS が 32 ビットの場合

(1) 「{インストールメディア} :¥Capturing¥32bit¥setup.exe」をダブルクリックします。

◆ OS が 64 ビットの場合

(1) 「{インストールメディア} :¥Capturing¥64bit¥setup.exe」をダブルクリックします。
［ArcSuite キャプチャリングサービス セットアップへようこそ］画面が表示されます。

4. ［次へ］をクリックします。
［インストールの確認］画面が表示されます。

5. ［OK］をクリックしてインストールします。
ライセンスアクティベーターの画面が表示されます。

補足 ［キャンセル］をクリックした場合は、キャプチャリングサービスのインストールを終了します。

(1) ［ライセンス登録］をクリックします。
シリアル番号を入力する画面が表示されます。

(2) 弊社より発行されたシリアル番号を入力します。
テキストファイルで発行されたシリアル番号がある場合は、格納場所を指定してファイルをインポートします。

補足 ・シリアル番号の追加および削除は、［追加］、［削除］をクリックして実行します。
・指定する格納場所のパスには、マルチバイト文字および Windows のフォルダーに指定できない文字は使用できません。

(3) ［次へ］をクリックし、ライセンス認証を完了させます。

参照 ライセンス認証完了までの手順は、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「4.1 共通設定」(P.57) の手順 7 ～ 12 を参照してください。

6. ［終了］をクリックします。
ライセンスアクティベーターの終了を確認する画面が表示されます。

7. ［はい］をクリックします。
［使用許諾契約］画面が表示されます。

8. 使用許諾契約を読み、同意する場合は、［使用許諾契約の全条項に同意します］を選択します。

9. ［次へ］をクリックします。
［ユーザー情報］画面が表示されます。

10. ［ユーザー名］、［会社名］を入力し、［次へ］をクリックします。
［インストール先の選択］画面が表示されます。

11. [インストール先のフォルダ] を確認します。

注記 インストール先には、ネットワークドライブ上のパスを指定しないでください。

補足 [参照] をクリックするとインストール先のパスを選択できます。

12. [次へ] をクリックします。
[データ格納先の選択] 画面が表示されます。

13. データの格納先を確認します。

注記 ・[データ格納先] には、ネットワークドライブ上のパスを指定しないでください。
・[データ格納先] には、半角英数字だけ使用できます。

補足 [参照] をクリックするとデータ格納先のパスを選択できます。

14. [次へ] をクリックします。
[HTTP サービスの情報] 画面が表示されます。

15. HTTP サービスの [ホスト名]、[ポート番号]、および [仮想ディレクトリー名] を確認します。

16. [次へ] をクリックします。
[サービス起動ユーザー情報] 画面が表示されます。

17. キャプチャリングサービス起動ユーザーの [ユーザー名] を確認します。

18. [パスワード] および [パスワード確認] を入力します。ここでは、「ArcSuite001」と入力します。

参照 各コンポーネントのユーザー名およびパスワードについては、「1.3 セットアップ前の設定事項」(P.24) を参照してください。

19. [次へ] をクリックします。
[サービス起動ユーザーのグループ] 画面が表示されます。

20. サービス起動ユーザーが所属するグループの [グループ名] を確認します。
ここでは、「ARCGRPSVC」と表示されています。

21. [次へ] をクリックします。
[RMI レジストリサービスのポート番号] 画面が表示されます。

22. RMI レジストリサービスの [ポート番号] を確認します。

23. [次へ] をクリックします。
[キャプチャリングサービス管理ユーザーの登録] 画面が表示されます。

24. キャプチャリングサービス管理ユーザーの [ユーザー名] を確認します。

25. [パスワード] および [パスワード確認] に、サービス管理ユーザーのパスワードを入力します。ここでは、「capadmin001」と入力します。

26. [次へ] をクリックします。
[登録先 Web サービスの設定] 画面が表示されます。

27. ArcSuite の Web サービスがインストールされている（Web アプリケーションがインストールされている）コンポーネントサーバーの URL を入力します。ここで、[URL] に「https」で始まる URL を指定しない場合は、手順 36 へ進んでください。

28. [次へ] をクリックします。
[SSL サーバー証明書の選択] 画面が表示されます。

補足 この画面は、「登録先 Web サービスの設定」に「https」で始まる URL を指定した場合に表示されます。

29. サーバー証明書の格納先を確認します。

注記 サーバー証明書の格納先には、ネットワークドライブ上のパスを指定しないでください。

補足 [参照] をクリックするとインストール先のパスを選択できます。

30. [次へ] をクリックします。

[SSL サーバー証明書のインポートパスワード] 画面が表示されます。

補足 この画面は、「登録先 Web サービスの設定」に「https」で始まる URL を指定した場合に表示されます。

31. [パスワード] および [パスワード確認] に、SSL サーバ証明書のインポートパスワードを入力します。

注記 パスワードは 6 文字以上の英数字を入力します。

32. [次へ] をクリックします。

[クライアント証明書の選択] 画面が表示されます。

補足
- この画面は、「登録先 Web サービスの設定」に「https」で始まる URL を指定した場合に表示されます。
- クライアント証明書が必要ない場合は、何も指定せず [次へ] をクリックします。

33. クライアント証明書の格納先を選択します。

注記 クライアント証明書の格納先には、ネットワークドライブ上のパスを指定しないでください。

補足 [参照] をクリックして、クライアント証明書のパスを選択します。

34. [次へ] をクリックします。

[クライアント証明書のパスワード] 画面が表示されます。

補足
- この画面は、「登録先 Web サービスの設定」に「https」で始まる URL を指定した場合に表示されます。
- この画面は、クライアント証明書を指定した場合に表示されます。

35. [パスワード] および [パスワード確認] を入力します。

36. [次へ] をクリックします。

[HTTP プロキシサーバーの情報] 画面または [HTTPS プロキシサーバーの情報] 画面が表示されます。

37. キャプチャリングサービスから ArcSuite に登録するときにプロキシサーバーを使用する場合は、[ホスト名] と [ポート番号] を入力します。

38. [次へ] をクリックします。

[ファイル コピーの開始] 画面が表示されます。

39. [次へ] をクリックします。

インストールが開始されます。インストールが終了すると、[セットアップの完了] 画面が表示されます。

40. [はい、今すぐコンピュータを再起動します。] を選択します。

41. [完了] をクリックします。

サーバーが再起動されます。

キャプチャリングサービスのインストールは終了です。

3.21.2 統合検索サービスのインストール

1. 統合検索サービスがインストールされているサーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. 「ArcSuite 4.0 インストール」インストールメディアを、ドライブにセットします。
3. 「{インストールメディア} :¥Client¥DocumentGathering¥64bit¥setup.exe」をダブルクリックします。
   ［ArcSuite 統合検索サービスセットアップへようこそ］画面が表示されます。
4. ［次へ］をクリックします。
   ［インストールの確認］画面が表示されます。
5. ［OK］をクリックします。
   ライセンスアクティベーターの画面が表示されます。
   補足 ［キャンセル］を選択した場合は、統合検索サービスのインストールを終了します。
6. ［キャンセル］をクリックします。
   ［機能の選択］画面が表示されます。手順 7 に進みます。
7. ［はい］をクリックします。
   ［機能の選択］画面が表示されます。
   ライセンスをインストールしたコンポーネントのチェックボックスにチェックマークが付いています。
8. ［統合検索サービス］および［ストレージプロキシ NTFS プラグイン］を選択します。
9. ［次へ］をクリックします。
   ［インストールするコンポーネントの確認］画面が表示されます。
10. インストールするコンポーネントを確認します。
11. ［次へ］をクリックします。
    ［使用許諾契約］画面が表示されます。
12. 使用許諾契約を読み、同意する場合は、［使用許諾契約の全条項に同意します］を選択します。
13. ［次へ］をクリックします。
    ［ArcSuite 統合検索サービスアップグレードへようこそ］画面が表示されます。
14. ［次へ］をクリックします。
    ［アップグレードの完了］画面が表示されます。
15. ［次へ］をクリックします。
    ［ユーザー情報］画面が表示されます。
16. ［ユーザー名］と［会社名］を確認します。
    補足 ［ユーザー名］と［会社名］には OS に設定されている内容が表示されます。
17. ［次へ］をクリックします。
    ［RMS 用データベースのサーバー情報］画面が表示されます。
18. ［サーバー名］、［ポート番号］、および［グローバルデータベース名］を確認します。
19. ［次へ］をクリックします。
    ［RMS 用ユーザー情報］画面が表示されます。

20. [ユーザー名] を確認します。

21. [パスワード] を入力します。ここでは、「rms」と入力します。

22. [次へ] をクリックします。
[RMS 参照用ユーザー情報] 画面が表示されます。

23. [ユーザー名] を確認します。

24. [パスワード] を入力します。ここでは、「rmsclient」と入力します。

25. [次へ] をクリックします。
[サービス起動ユーザー情報] 画面が表示されます。

26. [ユーザー名] を確認します。

補足
- 入力したユーザー名に「¥」が含まれていない場合はローカルユーザーと判断します。入力したローカルユーザーが存在しない場合、[サービス起動ユーザー作成確認] 画面が表示されます。[はい] をクリックするとユーザーが作成され、「サービスとしてログオンする」権限が設定されます。
- 既存のローカルユーザーやドメインユーザーをサービス起動ユーザーとして使用する場合、そのユーザーに「サービスとしてログオンする」権限が設定されます。

27. [パスワード] と [パスワード確認] にパスワードを入力します。
ここでは、「ArcSuite001」と入力します。

28. [次へ] をクリックします。
[サービス起動ユーザーのグループ情報] 画面が表示されます。

29. [グループ名] を確認します。

補足
- 入力したローカルグループが存在しない場合、[サービス起動ユーザーのグループ作成確認] 画面が表示されます。[はい] をクリックするとローカルグループが作成されます。
- [サービス起動ユーザー情報] 画面で入力したユーザーが、入力したローカルグループのメンバーでない場合、ローカルグループのメンバーとして設定されます。

30. [次へ] をクリックします。
[データベースのサーバー情報] 画面が表示されます。

31. [サーバー名]、[ポート番号]、および [グローバルデータベース名] を確認します。

32. [次へ] をクリックします。
[データベースの統合検索用ユーザー作成] 画面が表示されます。

33. [ユーザー名] を確認します。

34. [パスワード] を入力します。ここでは、「dga」と入力します。

35. [次へ] をクリックします。
[ファイル コピーの開始] 画面が表示されます。

36. インストールの内容を確認します。

37. [次へ] をクリックします。
インストールが開始されます。[セットアップの完了] 画面が表示されます。

注記 ファイアウォールサービスが起動している場合は、インストールの開始前にファイアウォールの設定を確認する画面が表示されます。設定する場合は [はい] を選択します。すでにファイアウォールを設定している場合、または Windows ファイアウォールを使用しない場合は、[いいえ] を選択してください。

38. [完了] をクリックします。

統合検索サービスのインストールは終了です。

3.22 インストール後の設定

ArcSuite 4.0をインストールしたあとで、次の設定をします。

- 「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「13 Web ブラウザーの設定」(P.86)
- 「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「14.10 ファイルフォーマット変換サービスの初期設定」(P.152)
- 「3.22.1 コラボスペースを設定する」(P.402)
- 「3.22.2 ワークフローを設定する」(P.404)
- 「3.22.3 全文検索エンジン連携を設定する」(P.405)
- 「3.22.4 関連文書検索エンジン連携を設定する」(P.406)
- 「3.22.5 データベース表領域管理ツールの性能向上のための設定をする」(P.406)
- 「3.22.6 Web サービスインターフェイスのための設定をする」(P.407)
- 「3.22.7 SSL サーバー証明書を再設定する」(P.408)

負荷分散構成でワークフローをインストールした場合は、次の設定をします。

- 「第 2 部 2 台以上の構成へのセットアップ」の「9.12.2 負荷分散構成でのプロパティファイルの作成」(P.301)

キャプチャリングサービスだけをインストールした場合は、次の設定をします。

- 「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「14.10 ファイルフォーマット変換サービスの初期設定」(P.152)

また、キャプチャリングサービスをインストールしたPCのOSがWindows 8.1（32ビット）またはWindows 10（32ビット）の場合は、次の設定もします。

- 「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「15.2.3 Windows 8.1（32 ビット）または Windows 10（32 ビット）の場合に必要な設定」(P.168)

3.22.1 コラボスペースを設定する

メッセージ通知サーバーの URL

バージョンアップしたときに、メッセージ通知サーバーのURLが変更されていることがあります。コラボスペースに設定されているメッセージ通知サーバーのURLを変更する必要があります。

変更する手順は次のとおりです。

1. ArcSuite にログインします。
   ポータル画面が表示されます。
2. 画面右上の［システム管理］リンクをクリックします。
   システム管理画面が表示されます。
3. ［システム管理］画面の左側にある［システム管理］から、［メッセージ通知］をクリックします。
   画面の右側に、メッセージ通知の情報が表示されます。
4. ［メッセージ通知サービス］のリンクをクリックします。
   管理ログイン画面が表示されます。

5. RMS 管理者のユーザー名とパスワードを入力します。
   メッセージ通知管理画面が表示されます。
6. 画面の左側にある［メッセージ通知管理］から、［テストメール送信］リンクをクリックします。
   テストメール送信画面が表示されます。
7. ［メッセージ通知サービスの URL］に記述されている URL をコピーします。
   ここでは、「http://arcsuite.example.com/ArcSuite/cmMailIF/services/CmessageAxisService」をコピーします。
8. 画面右上の［ポータル］リンクをクリックします。
   ポータル画面が表示されます。
9. 画面右上の［システム管理］リンクをクリックします。
   システム管理画面が表示されます。
10. ［システム管理］画面の左側にある［システム管理］から、［コラボスペース］をクリックします。
    画面の右側に、コラボスペースの情報が表示されます。
11. ［コラボスペース］リンクをクリックします。
    管理ログイン画面が表示されます。
12. RMS 管理者ユーザー名とパスワードを入力します。
    コラボスペース管理画面が表示されます。
13. 画面の左側にある［コラボスペース管理］から、［メール設定］をクリックします。
    メール設定画面が表示されます。
14. ［メール送信の設定］の［メッセージ通知サーバーの URL］に、手順 7 でコピーした URL をペーストします。
15. ［設定］をクリックします。

コラボスペースのメール設定は終了です。

全文検索インデックスの生成

1. コマンドプロンプトを管理者として起動します。
2. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
cd /d  {ArcSuite のインストールフォルダー} ¥Service¥Components¥collabo¥bin
```

   たとえば、{ArcSuite のインストールフォルダー} が「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」の場合は、次のように入力します。

```
cd /d D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite¥Service¥Components¥collabo¥bin
```

3. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
IndexSetup.bat create  {全文検索サービスの DN または cn}
```

4. 「account: 」のあとに、RMS 管理者ユーザー名を入力します。

5. 「passwd: 」のあとに、パスワードを入力します。
   入力したパスワードは、画面には表示されません。
   コマンドが正常に終了すると、「SUCCESS」と表示されます。

   参照 QueueSetup の詳細については、『システム管理者ガイド』を参照してください。

コラボスペースの全文検索インデックスの生成は終了です。

関連文書検索インデックスの再作成

1. コマンドプロンプトを管理者として起動します。
2. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
cd /d {ArcSuite のインストールフォルダー}¥Service¥Components¥collabo¥bin
```

   たとえば、{ArcSuite のインストールフォルダー} が「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」の場合は、次のように入力します。

```
cd /d D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite¥Service¥Components¥collabo¥bin
```

3. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
ClusteringIndexSetup.bat drop
```

4. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
ClusteringIndexSetup.bat create {関連文書検索サービスの DN または cn} {インデックス更新間隔 (min)}
```

   コマンドが正常に終了すると、「SUCCESS」と表示されます。

コラボスペースの関連文書検索インデックスの再生成は終了です。

3.22.2 ワークフローを設定する

メッセージ通知サーバーの URL

「コラボスペースの設定」と同様に、ワークフローが設定しているメッセージ通知サーバーのURLを変更する必要があります。変更する手順は、次のとおりです。

1. ArcSuite にログインします。
   ポータル画面が表示されます。
2. 画面右上の［システム管理］リンクをクリックします。
   システム管理画面が表示されます。
3. ［システム管理］画面の左側にある［システム管理］から、［メッセージ通知］をクリックします。
   画面の右側に、メッセージ通知の情報が表示されます。
4. ［メッセージ通知サービス］リンクをクリックします。
   管理ログイン画面が表示されます。
5. RMS 管理者ユーザー名とパスワードを入力します。
   メッセージ通知管理画面が表示されます。

6. 画面の左側にある［メッセージ通知管理］から、［テストメール送信］リンクをクリックします。
   テストメール送信画面が表示されます。
7. ［メッセージ通知サービスの URL］に記述されている URL をコピーします。
   ここでは、「http://arcsuite.example.com/ArcSuite/cmMailIF/services/CmessageAxisService」をコピーします。
8. 画面右上の［ポータル］リンクをクリックします。
   ポータル画面が表示されます。
9. 画面右上の［システム管理］リンクをクリックします。
   システム管理画面が表示されます。
10. ［システム管理］画面の左側にある［システム管理］から、［ワークフロー］をクリックします。
    画面の右側に、ワークフローの情報が表示されます。
11. ［ワークフロー］のリンクをクリックします。
    管理ログイン画面が表示されます。
12. RMS 管理者ユーザー名とパスワードを入力します。
    ワークフロー管理画面が表示されます。
13. 画面の左側にある［ワークフロー管理］から、［メール通知設定］リンクをクリックします。
    メール通知設定画面が表示されます。
14. ［メッセージ通知サーバーの URL］に、上記手順 7 でコピーした、URL をペーストします。
15. ［設定］をクリックします。

ワークフローのメール設定は終了です。

外部コマンド設定

旧バージョンからのバージョンアップで、クラスター構成の場合は、「第2部 2台以上の構成へのセットアップ」の「9.8.2 負荷分散構成の外部コマンド設定」（P.296）に従って、設定を変更してください。

3.22.3 全文検索エンジン連携を設定する

バージョンアップしたあと、新規に登録されるDocuworks文書またはDocuWorks Binder文書を全文検索の対象にするために、次のように設定します。

1. ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版を起動します。
   参照 ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版の起動方法は、を参照してください。
2. ［ドキュメント管理サービス 管理アプリケーション］の［サービス］タブのページで、左側の［階層ツリー表示］エリアから［サービス］を選択します。
3. メニューバーの［サービス操作］＞［全文検索エンジン連携の設定］を選択します。
   ［全文検索エンジン連携の設定］画面－［全般］タブのページが表示されます。
4. ［メディアタイプ］タブをクリックします。
   ［全文検索エンジン連携の設定］画面－［メディアタイプ］タブのページが表示されます。

5. [メディアタイプの一覧] から、次のメディアタイプを選択し、[→] をクリックします。
   ・application/vnd.fujifilm.fb.docuworks
   ・application/vnd.fujifilm.fb.docuworks.binder
   「application/vnd.fujifilm.fb.docuworks」および「application/vnd.fujifilm.fb.docuworks.binder」が、[検索対象となるメディアタイプ] に移動します。
6. [OK] をクリックします。

3.22.4 関連文書検索エンジン連携を設定する

バージョンアップしたあと、新規に登録されるDocuworks文書またはDocuWorks Binder文書を関連文書検索の対象にするために、次のように設定します。

1. ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版を起動します。
   参照 ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版の起動方法は、を参照してください。
2. [ドキュメント管理サービス 管理アプリケーション] の [サービス] タブのページで、左側の [階層ツリー表示] エリアから [サービス] を選択します。
3. メニューバーの [サービス操作] > [関連文書検索エンジン連携の設定] を選択します。
   [関連文書検索エンジン連携の設定] 画面－ [全般] タブのページが表示されます。
4. [メディアタイプ] タブをクリックします。
   [関連文書検索エンジン連携の設定] 画面 ― [メディアタイプ] タブのページが表示されます。
5. [メディアタイプの一覧] から、次のメディアタイプを選択し、[→] をクリックします。
   ・application/vnd.fujifilm.fb.docuworks
   ・application/vnd.fujifilm.fb.docuworks.binder
   「application/vnd.fujifilm.fb.docuworks」および「application/vnd.fujifilm.fb.docuworks.binder」が、[検索対象となるメディアタイプ] に移動します。
6. [OK] をクリックします。

3.22.5 データベース表領域管理ツールの性能向上のための設定をする

データベース表領域の処理に関する性能を向上するために、ArcSuiteサーバーでデータベース表領域管理ツールを設定します。
なお、この設定は、データベース表領域管理ツールを起動したあとに実施しても問題ありません。

1. ArcSuite サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. データベース表領域管理ツールが起動している場合は、終了します。
3. Windows の [スタート] メニューから、[Windows システムツール] > [コマンドプロンプト] を右クリックし、[その他] > [管理者として実行] を選択します。
   [管理者：コマンド プロンプト] 画面が表示されます。

4. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
cd /d {データベースのインストール先}¥tools_4.0¥gatherTableStats
```

たとえば、{データベースのインストール先} が「D:¥Database」の場合は、次のように入力します。

```
cd /d D:¥Database¥tools_4.0¥gatherTableStats
```

補足 {データベースのインストール先} の初期値は、「{最大容量のドライブ} :¥Database」です。

5. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
gatherTableStats.bat
```

データベース表領域管理ツールの初期設定が行われます。

補足 処理が完了するまで、約 2 分かかります。

6. [管理者：コマンド プロンプト] 画面に [SUCCESS] と表示されるのを確認します。

補足 データベース表領域管理ツールの起動に時間がかかる場合、手順 4 から再度実施してください。

3.22.6 Web サービスインターフェイスのための設定をする

Webサービスインターフェイスの仕様変更を反映するために、リソース管理アプリケーションでシステムプロパティを設定します。
また、旧バージョンでアップロードできるファイルサイズの制限値を変更した場合は、システムプロパティを設定することで、IISで設定した制限値をWebサービスインターフェイスに反映します。

1. リソース管理アプリケーションを起動します。

参照 リソース管理アプリケーションの起動方法については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「リソース管理アプリケーションを起動する手順」（P.126）を参照してください。

2. [システムプロパティ編集] をクリックします。
[システムプロパティ編集] 画面が表示されます。

3. 次のキー名および値を入力します。
表：入力するキー名および値

キー名	com.fujifilm.fb.arcsuite.ws.isLangRequiredInRoleType
値	TRUE

4. 旧バージョンでアップロードできるファイルサイズの制限値を変更した場合は、次のキー名およびファイルのアップロードサイズの制限値を入力します。
表：入力するキー名および値

キー名	com.fujifilm.fb.arcsuite.ws.maxUploadSize
値	IISで設定したファイルのアップロードサイズの制限値を入力します。

参照 IIS での設定については、「2.1.3 Windows の環境設定」の「ファイルのアップロードサイズの制限値を変更する」（P.45）を参照してください。

5. [保存] をクリックします。
[システムプロパティ編集結果] 画面が表示されます。

6. [OK] をクリックします。

補足 確認のメッセージが表示された場合は、[OK] をクリックします。

7. Windows の［スタート］メニューから、［Windows 管理ツール］＞［サービス］を選択します。
［サービス］画面が表示されます。

8. [ArcSuite Web Application Service] を選択して、［サービスの再起動］をクリックします。
サービスが再起動されます。

3.22.7 SSL サーバー証明書を再設定する

LDAPSを使用している環境で、SSLサーバー証明書として自己署名証明書を使用する場合は、SSLサーバー証明書を再設定します。

1. Windows の［スタート］メニューから、［Windows システムツール］＞［コマンドプロンプト］を右クリックし、［その他］＞［管理者として実行］を選択します。
［管理者：コマンド プロンプト］画面が表示されます。

2. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
" {ArcSuite のインストールフォルダー} ¥Service¥Java¥jre¥bin¥keytool" -importcert -trustcacerts -alias {エイリアス名} -file " {SSL サーバー証明書のフルパス} " -keystore " {ArcSuite のインストールフォルダー} ¥Service¥Java¥jre¥lib¥security¥cacerts" -storepass {キーストアパスワード}
```

たとえば、次のように入力します。

```
"C:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite¥Service¥Java¥jre¥bin¥keytool" -importcert -trustcacerts -alias keyarcsrv001 -file "C:¥SSL¥siteCert.cer" -keystore "C:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite¥Service¥Java¥jre¥lib¥security¥cacerts" -storepass changeit
```

補足
- コマンドは、改行せずに入力してください。
- {エイリアス名} は、キーストアから証明書を削除するときなどに指定する名前です。インポートする証明書に対して重複しない名前を指定してください。
- {SSL サーバー証明書のフルパス} は、[3.4.7 LDAPS の確認」(P.356) でエクスポートするなどした、SSL サーバー証明書のファイルのフルパスを指定します。
- {キーストアパスワード} は、キーストアファイル「cacerts」のパスワードです。初期値は「changeit」です。コマンドを実行する前に、初期値を変更しておくことをお薦めします。

3. 「y」を入力し、<Enter> キーを押します。
処理が完了すると、次のように表示されます。

```
証明書がキーストアに追加されました
```

3.23 「mime.types」ファイルのコピー

ArcSuiteで使用できるデータに加えて、カスタマイズしてMicrosoft Excel、Microsoft Wordなどのデータタイプを新規に追加している場合、「mime.types」ファイルがあります。

データタイプを追加した場合は、「3.12 エクスポートデータのコピー」(P.370)でエクスポートデータをコピーしたフォルダーにある「mime.types」ファイルを、新サーバーにコピーします。

1. 新サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。

   補足 2 台以上の構成では、旧サーバーでファイルフォーマット変換サービスがコンポーネントサーバーにインストールされていた場合は、新サーバーでもコンポーネントサーバーで設定してください。

2. Windows の［スタート］メニューから、［Windows システムツール］＞［コマンドプロンプト］を右クリックし、［その他］＞［管理者として実行］を選択します。
   ［管理者：コマンド プロンプト］画面が表示されます。

3. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

   ```
   cd /d {ツールを展開したフォルダー}
   ```

   たとえば、「{ツールを展開したフォルダー}」が「C:¥Temp」の場合は、次のように入力します。

   ```
   cd /d C:¥Temp
   ```

   補足 「{ツールを展開したフォルダー}」は、「3.8.4 ツールの準備（新サーバー）」(P.366)でツールを展開したフォルダーです。

4. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

   ```
   AS_copy_mimetypes.bat {エクスポートデータをコピーしたフォルダー}
   ```

   たとえば、「{エクスポートデータをコピーしたフォルダー}」が「C:¥ASUpgrade」の場合は、次のように入力します。

   ```
   AS_copy_mimetypes.bat C:¥ASUpgrade
   ```

   補足 「{エクスポートデータをコピーしたフォルダー}」は、「3.12.1 エクスポート先フォルダーのコピー」(P.370)の手順 6 で表示された、旧サーバーからエクスポートデータをコピーしたフォルダーです。

3.24 SDK、IFTK、ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版のバージョンアップ

オプション商品をバージョンアップします。
次のコンポーネントをインストールしている場合は、旧バージョンをアンインストールしてから、新バージョンをインストールします。

・ドキュメント管理サービス SDK

・コラボスペース Interface Toolkit

・ワークフロー Interface Toolkit

・単独でインストールしたドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版

3.24.1 旧バージョンのアンインストール

次のコンポーネントをインストールしている場合は、旧バージョンをアンインストールします。

・ドキュメント管理サービス SDK

・コラボスペース Interface Toolkit

・ワークフロー Interface Toolkit

・単独でインストールしたドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版

参照 ・アンインストール手順の詳細については、それぞれのコンポーネントのマニュアルを参照してください。
・単独でインストールした「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版」のアンインストール手順については、「付録 A.4 ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版のアンインストール」（P.417）を参照してください。

3.24.2 新バージョンのインストール

次のコンポーネントをインストールします。

・ドキュメント管理サービス SDK

・コラボスペース Interface Toolkit

・ワークフロー Interface Toolkit

・単独でインストールするドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版

インストールメディアを使ってインストールします。

参照 ・インストール手順についての詳細は、インストールメディアにあるマニュアルを参照してください。
・単独でインストールする「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版」のインストール手順については、「付録 G ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版の単独インストール」（P.461）を参照してください。

3.25　デスクトップクライアントのバージョンアップ

ArcSuite 4.0のデスクトップクライアントをインストールします。旧バージョンをアンインストールする必要はありません。

3.26 連携フォルダ for DocuWorks のバージョンアップ

連携フォルダ for DocuWorksはArcSuite 4.0の商品です。

連携フォルダ for DocuWorksをインストールします。旧バージョンをアンインストールする必要はありません。

3.27　ドキュメント一括操作ツールのバージョンアップ

ドキュメント一括操作ツールのバージョンアップをします。
ドキュメント一括操作ツールは、インストールメディアにあるファイルをデスクトップにコピーして、「setup.xls」を開き、「インストール先フォルダ」とインストールする機能を同じにしてセットアップして、新しいバージョンをインストールします。

補足　ドキュメント一括操作ツールをインストールするクライアント PC にインストールされている、ドキュメント管理サービス SDK の旧バージョンをアンインストールし、ArcSuite 4.0 のドキュメント管理サービス SDK をインストールしてから、ドキュメント一括操作ツールをインストールします。

参照　ドキュメント一括操作ツールのインストールについては、『ドキュメント一括操作ツール説明書』を参照してください。

付録

付録 A アンインストール

ArcSuiteのアンインストールについて説明します。

・アンインストールする前にすること
・オールインワン構成のアンインストール
・2 台以上の構成のアンインストール
・ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版のアンインストール
・統合検索サービスのアンインストール
・キャプチャリングサービスのアンインストール
・ライセンスアクティベーターの削除
・データベース表領域管理ツールのアップデートモジュールのアンインストール
・データベースのアンインストール

付録 A.1 アンインストールする前にすること

アンインストールを開始すると、次の順でコンポーネントがアンインストールされます。

・原本性保証オプション
・ワークフロー
・ドキュメントレビューオプション
・コラボスペース
・ドキュメントスペース
・メッセージ通知サービス
・ドキュメント管理サービス
・共通設定

注記 カスタマイズによって追加されたファイルや Servlet はアンインストールされません。

アンインストールする前に

ArcSuiteをアンインストールする前に、次の作業をします。

◆ ライセンスの認証の解除

アンインストールを実行する前に、ArcSuiteのライセンスを解除します。

注記 この操作は、アンインストール前に必ず実行してください。

参照 ライセンスの認証を解除する方法については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「19.5 ArcSuite ライセンス認証の解除」（P.216）を参照してください。

◆ バックアップ

ArcSuiteをアンインストールする前に、ArcSuiteをバックアップすることを推奨します。

参照 ・オフラインバックアップを使用する場合は、『オフラインバックアップ・リストア運用ガイド』を参照してください。
・オンラインバックアップを使用する場合は、『オンラインバックアップ・リストア運用ガイド』を参照してください。

付録 A.2　オールインワン構成のアンインストール

オールインワン構成でアンインストールする手順を説明します。

1. Windows の［スタート］メニューから、［コントロールパネル］を選択します。
   ［コントロールパネル］画面が表示されます。
2. ［プログラム］の［プログラムのアンインストール］をクリックします。
3. ［ArcSuite］を選択します。
4. ［アンインストール］をクリックします。
   アンインストーラーが起動します。
5. 画面の指示に従って操作します。

   注記　インストールされていたアップデートや Hotfix のバージョンによっては、次のようなメッセージが表示される場合があります。
   ・「以前のインストールの再起動が保留されています。コンピューターを再起動後に実行してください。」
   ・「パッチが全てアンインストールされなかったので、アンインストールを中断します。」
   これらのメッセージが表示された場合は、画面の指示に従って操作を完了したあと、サーバーを再起動させてから、再度アンインストールを実行してください。

   補足　再起動するかどうかを確認する画面が表示された場合は、再起動を選択して、サーバーを再起動してください。

ArcSuiteのアンインストールは終了です。

付録 A.3　2 台以上の構成のアンインストール

2台構成、負荷分散構成など2台以上の構成でアンインストールする手順を説明します。

コンポーネントサーバーでアンインストールする

コンポーネントサーバーにインストールされたコンポーネントをアンインストールします。

参照　アンインストールの手順は、「付録 A.2　オールインワン構成のアンインストール」（P.416）を参照してください。

リポジトリーサーバーでアンインストールする

リポジトリーサーバーにインストールされたコンポーネントをアンインストールします。

追加リポジトリーサーバーおよびスレーブ管理サーバーが設置されている場合は、追加リポジトリーサーバーおよびスレーブ管理サーバー、リポジトリーサーバーの順でアンインストールします。

2台構成のときは、コンポーネントサーバーとリポジトリーサーバーで、それぞれアンインストールします。アンインストールする手順は同じです。

参照　アンインストールの手順は、「付録 A.2　オールインワン構成のアンインストール」（P.416）を参照してください。

付録 A.4 ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版のアンインストール

リポジトリーサーバーとは別のサーバーにインストールしたドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版をアンインストールします。

1. Windows の［スタート］メニューから、［コントロールパネル］を選択します。
   ［コントロールパネル］画面が表示されます。
2. ［プログラム］の［プログラムのアンインストール］をクリックします。
3. ［ArcSuite ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版］を選択します。
4. ［アンインストール］をクリックします。
   アンインストーラーが起動します。
5. 画面の指示に従って操作します。

ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版のアンインストールは終了です。

付録 A.5 統合検索サービスのアンインストール

統合検索サービスをアンインストールする手順を説明します。

1. Windows の［スタート］メニューから、［コントロールパネル］を選択します。
   ［コントロールパネル］画面が表示されます。
2. ［プログラム］の［プログラムのアンインストール］をクリックします。
3. ［ArcSuite 統合検索サービス］を選択します。
4. ［アンインストール］をクリックします。
   ［ArcSuite 統合検索サービスのアンインストール］画面が表示されます。
5. ［次へ］をクリックします。
   ［統合検索削除］画面が表示されます。
6. ［削除しない（バージョンアップ / 再設置時）］をクリックします。
7. ［次へ］をクリックします。
   ［RMS 用データベースのサーバー情報］画面が表示されます。
8. ［サーバー名］、［ポート番号］、および［グローバルデータベース名］を確認します。
9. ［次へ］をクリックします。
   ［RMS 用ユーザー情報］画面が表示されます。
10. ［ユーザー名］を確認します。
11. ［パスワード］を入力します。ここでは、「rms」と入力します。
12. ［次へ］をクリックします。
    ［アンインストールの確認］画面が表示されます。

13. [OK] をクリックします。
    アンインストールが開始されます。アンインストールが完了すると、[アンインストールの完了] 画面が表示されます。

14. [完了] をクリックします。

統合検索サービスのアンインストールは終了です。

付録 A.6　キャプチャリングサービスのアンインストール

キャプチャリングサービスをアンインストールする手順を説明します。

アンインストール実行前の作業

キャプチャリングサービスのアンインストールを実行する前に、キャプチャリングサービスの各サービスを次の順序で停止します。

(1) ArcSuite Capturing Service Admin

(2) ArcSuite Capturing Service

キャプチャリングサービスをアンインストールする

1. Windows の [スタート] メニューから、[コントロールパネル] を選択します。
   [コントロールパネル] 画面が表示されます。

2. [プログラム] の [プログラムのアンインストール] をクリックします。

3. [ArcSuite キャプチャリングサービス] を選択します。

4. [アンインストールと変更] をクリックします。
   [ArcSuite キャプチャリングサービスのアンインストール] 画面が表示されます。

5. [次へ] をクリックします。
   [Capturing Service セットアップメンテナンス プログラム] 画面が表示されます。

6. [削除･･･キャプチャリングサービスを削除します。] を選択します。

7. [次へ] をクリックします。
   [設定内容の確認] 画面が表示されます。

8. [次へ] をクリックします。
   アンインストールが開始されます。アンインストールが完了すると、キャプチャリングサービスのアンインストール完了の確認、サーバー OS の再起動を指示する画面が表示されます。

9. [はい、今すぐコンピュータを再起動します。] を選択します。

10. [完了] をクリックします。
    サーバーの OS が再起動します。

キャプチャリングサービスのアンインストールは終了です。

補足　サービスを停止しなくてもアンインストールは完了しますが、キャプチャリングサービスのインストール先にファイルが残ることがあります。残ったファイルは、Windows エクスプローラーで削除してください。

付録 A.7 ライセンスアクティベーターの削除

ライセンスアクティベーターには、ライセンスの認証に必要な情報が含まれています。ArcSuiteをアンインストールしても、ライセンスアクティベーターはアンインストールされません。
ArcSuiteを使用しなくなる場合は、ライセンスアクティベーターを削除します。必ず、ArcSuiteをアンインストールし、ライセンスの認証を解除してシリアル番号を削除したあとで、ライセンスアクティベーターを削除します。

注記 **ライセンスアクティベーターを削除する場合は、必ず ArcSuite がインストールされていたすべてのサーバーで、ライセンスアクティベーターを削除してください。ライセンスアクティベーターが残ったサーバーがあると、ライセンスに不整合が起こり、インストールするときに問題が発生することがあります。**

参照 ・ライセンスの認証を解除する方法については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「19.5 ArcSuite ライセンス認証の解除」（P.216）を参照してください。
・シリアル番号を削除する方法については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「19.6 シリアル番号の削除」（P.219）を参照してください。

1. ArcSuite サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. 次のフォルダーを削除します。
「{Common Files フォルダー} ¥FUJIFILM¥ArcSuite¥4.0.0¥License」フォルダー

補足 ・「{Common Files フォルダー}」は、通常、次のフォルダーです。
「{システムドライブ} :¥Program Files¥Common Files」
・2 台以上の構成の場合は、サーバーの構成に応じて、フォルダーを削除します。
- コンポーネントサーバー
- リポジトリーサーバー
- キャプチャリングサービスがインストールされているサーバー
- 統合検索サーバーがインストールされているサーバー
- ドキュメント管理サービスの追加リポジトリーサーバー

付録 A.8 データベース表領域管理ツールのアップデートモジュールのアンインストール

データベース表領域管理ツールのアップデートモジュールをインストールしていた場合、ArcSuiteをアンインストールしても、データベース表領域管理ツールのアップデートモジュールはアンインストールされません。ArcSuiteを使用しなくなる場合は、データベース表領域管理ツールのアップデートモジュールをアンインストールします。

1. Windows の［スタート］メニューから、［コントロールパネル］を選択します。
［コントロールパネル］画面が表示されます。
2. ［プログラム］の［プログラムのアンインストール］をクリックします。
3. ［ArcSuite データベース 表領域管理ツール アップデート {バージョン}］を選択します。

補足 {バージョン} には、お使いの、データベース表領域管理ツールのアップデートモジュールのバージョンが表示されています。

4. ［アンインストール］をクリックします。
アンインストーラーが起動します。
5. 画面の指示に従って操作します。
データベース表領域管理ツールのアップデートモジュールのアンインストールは終了です。

付録 A.9　データベースのアンインストール

データベースだけをアンインストールする手順について説明します。

注記　データベースをアンインストールするには、次のサービスが開始されている必要があります。
・OracleOraDB19Home1TNSListener
・OracleService｛SID｝
｛SID｝は、「グローバルデータベース名」のうち、最初の「．(. ピリオド)」までの値です。

1. Windows の［スタート］メニューから、［コントロールパネル］を選択します。
［コントロールパネル］画面が表示されます。
2. ［プログラム］の［プログラムのアンインストール］をクリックします。
3. ［ArcSuite データベース］を選択します。
4. ［アンインストール］をクリックします。
アンインストーラーが起動し、［ArcSuite データベースのアンインストール］画面が表示されます。
5. ［次へ］をクリックします。
［削除対象のフォルダー一覧］画面が表示されます。
6. ［はい］をクリックします。
［エクスポートの選択］画面が表示されます。
7. アンインストールの前に、データベースのデータをエクスポートするかどうかを選択して、［OK］をクリックします。
［エクスポートする］を選択した場合は、［データベースの管理者情報］画面が表示されます。手順 8 に進みます。
［エクスポートしない］を選択した場合は、［エクスポートの確認］画面が表示されます。手順 10 へ進みます。
8. ［パスワード］にデータベースをインストールしたときに設定した、データベースの管理者ユーザーのパスワードを入力して、［次へ］をクリックします。
［エクスポートデータの保存先の選択］画面が表示されます。
9. エクスポートデータの保存先を入力して、［次へ］をクリックします。
エクスポートを開始する画面が表示されます。データがエクスポートされます。
10. メッセージを確認して、［OK］をクリックします。
［アンインストールの開始］画面が表示されます。
11. ［次へ］をクリックします。
［スクリプトの削除］画面が表示されます。同時に［ローカル グループ ポリシー エディター］画面が表示されます。
12. ［スクリプトの削除］画面を表示したまま、［ローカル グループ ポリシー エディター］画面で、スクリプトの削除をします。画面に記載されている手順に従って操作します。

(1) 左側のツリーから、［コンピューターの構成］＞［Windows の設定］＞［スクリプト（スタートアップ / シャットダウン)］を選択します。

(2) 右側の詳細情報から［シャットダウン］をダブルクリックします。
［シャットダウンのプロパティ］画面が表示されます。

(3) ［シャットダウンのプロパティ］画面で［削除］をクリックします。

(4) ［シャットダウンのプロパティ］画面で［OK］をクリックします。
［シャットダウンのプロパティ］画面が閉じます。

(5) [ローカル グループ ポリシー エディター] 画面を閉じます。

13. [スクリプトの削除] 画面の［次へ］をクリックします。
［アンインストールの確認］画面が表示されます。

14. [OK] をクリックします。
［セットアップステータス］画面が表示されたあと、［アンインストールの完了］画面が表示されます。

以上でデータベースのアンインストールは完了です。

付録 B　HTTP サービスに直接 SSL を設定する

ここでは、ArcSuiteインストーラーの［SSL構成の選択］画面で、［HTTPサービスに直接SSLを設定する］を選択した場合の手順について説明します。

付録 B.1　インストーラーで設定する

［SSL構成の選択］画面で、［HTTPサービスに直接SSLを設定する］を選択したあと、次の操作をします。
HTTPサービスにサイト証明書を設定し、SSLを利用した通信ができるようにします。

1. ［HTTP サービスに直接 SSL を設定する］を選択します。
2. ［次へ］をクリックします。
   ［HTTP サービスの情報］画面が表示されます。
3. このコンピューターにインストールする HTTP サービスの［ホスト名］を入力します。ここでは、「arcsuite.example.com」と入力します。
4. HTTP サービスの［ポート番号］と［仮想ディレクトリー名］を確認します。

   補足　仮想ディレクトリー名には、半角英数字だけ入力できます。
5. ［次へ］をクリックします。
   ［HTTP サービスのサービス間通信ポート番号］画面が表示されます。
6. HTTP サービスの通信に使用する HTTP ポートの［ポート番号］を入力します。ここでは「80」と入力します。
7. 次のように操作します。

◆ **オールインワン構成の場合**

(1) 「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「4.1　共通設定」（P.57）の手順 65 以降の手順を実行します。

◆ **2 台以上の構成の場合**

(1) 「第 2 部 2 台以上の構成へのセットアップ」の「4.1　コンポーネントサーバーの共通設定」（P.251）の手順 63 以降の手順を実行します。

付録 B.2　IIS（HTTP サービス）にサーバー証明書を設定する

IISに対してサーバー証明書を使うための設定をします。
インストーラーによる設定が完了した状態でこの設定をします。

補足　入手した証明書は、バックアップとして保管しておくことを推奨します。

参照　IIS への証明書設定手順や証明書の入手方法などについては、IIS 関連の各種ドキュメントを参照してください。

付録 B.3 クライアント証明書で認証するための設定をする

ここでは、「第1部 オールインワン構成のセットアップ」の「4.1 共通設定」（P.57）で設定したIIS（HTTP サービス）で、クライアント証明書を使ってユーザー認証の設定について説明します。

・IIS に対する設定

・証明書とユーザーのマッピングデータの設定

・ArcSuite のログイン方法の設定

補足
・この設定はオプションです。ArcSuite のログイン方法として、「クライアント証明書による認証」または「クライアント証明書による認証とフォーム認証の併用」を選択する場合にだけ必要です。
・IIS での設定と ArcSuite の設定は連動している必要はありません。たとえば、IIS ではクライアント証明書を要求するように設定していても、ArcSuite では自動ログインを選択することもできます。この場合、「証明書とユーザーのマッピングデータの設定」（P.423）と「ArcSuite のログイン方法の設定」（P.424）の設定は必要ありません。
・「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「4.1 共通設定」（P.57）で設定が終了している必要があります。

IIS に対する設定

IISに対して、クライアント証明書を使うための設定をします。

参照 IIS に対して、証明書を設定する手順や証明書の入手方法などについては、IIS 関連の各種ドキュメントを参照してください。

証明書とユーザーのマッピングデータの設定

ArcSuiteでクライアント証明書によるログイン方法を選択する場合は、クライアント証明書によって識別されるユーザーが、ArcSuiteのどのユーザーに対応するのかを設定する必要があります。この対応関係は、クライアント証明書の「サブジェクト」という項目の値を、ArcSuiteのユーザーエントリーの「rmsCertDN」（ユーザー証明書のDN）という属性に設定します。

このとき、属性「rmsCertDN」に設定する値の形式はDN形式です。その文字列を取得する手順は次のとおりです。

1. Internet Explorer の［ツール］＞［インターネットオプション］＞［コンテンツ］タブで［証明書］をクリックします。
［証明書］ダイアログボックスが表示され、［個人］タブの一覧に証明書が表示されます。

2. 一覧の証明書をダブルクリックします。
［証明書］ダイアログボックスの［全般］タブが表示されます。

3. ［詳細］タブをクリックし、［フィールド］の一覧から［サブジェクト］を選択します。
［フィールド］の一覧の下に、証明書の内容が次のように表示されます。

```
E = user001@fujifilm.com/fb
CN = user001
OU = division1
O = FUJIFILM
L = city1
S = area1
C = JP
```

4. 手順 3 のように表示された場合には、次の DN 文字列を、対応するユーザーエントリーの属性 rmsCertDN に設定します。
EMAILADDRESS = user001@fujifilm.com/fb, CN = user001, OU = division1, O = FUJIFILM, L = city1, S = area1, C = JP
属性 rmsCertDN への設定は、リソース管理アプリケーションのユーザーのプロパティ編集画面で、

「ユーザー証明書の DN」というラベルの付いたテキストボックスに入力するか、リソース管理サービス管理ツール（コマンド）でします。

注記
- 等号記号の前後には、スペースを入れないでください。
- カンマのあとには、半角スペースを入れてください。
- 「S=xxx」の部分は「ST=xxx」として、「E=yyy」の部分は「EMAILADDRESS=yyy」として DN 文字列を作成します。

ArcSuite のログイン方法の設定

ArcSuiteのログイン方法は、ログインサーバー管理アプリケーションで設定できます。

ログインサーバー管理アプリケーションのパラメーター管理画面で「認証モード」を「ssl」または「ssl+form」に変更します。

参照 ログイン方法の設定および認証モードの詳細については、『ログインサーバー管理アプリケーションのヘルプ』を参照してください。

付録 C 簡易モードでのインストール

ここでは、ArcSuiteのインストールのモード選択画面で、［簡易モード］を選択した場合の手順について説明します。

注記 簡易モードでインストールできるのは、オールインワン構成と 2 台構成です。負荷分散構成や追加リポジトリーサーバーをインストールするときは、簡易モードでは、インストールできません。

付録 C.1 インストールの手順

モード選択画面で、［簡易モード］を選択したあとに、次の操作をします。

1. ［簡易モード］を選択します。
2. ［次へ］をクリックします。
   ［インストール先の選択］画面が表示されます。
3. ［参照］をクリックして、インストール先を指定します。ここでは、「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」を指定します。

   注記 ・インストール先には、ネットワークドライブのパスを指定しないでください。
   ・［機能の選択］画面で、［オンラインバックアップ］にチェックマークを付けた場合、システムドライブ以外のパスを指定することを推奨します。システムドライブを選択すると、オンラインバックアップに時間がかかることがあります。

   補足 インストール先の初期値は、「C:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」です。

4. ［次へ］をクリックします。
   ［データ格納先の選択］画面が表示されます。
5. ［参照］をクリックするか、フォルダー名を直接入力して、ユーザーデータの格納先を指定します。ここでは、「D:¥ArcSuite」を指定します。

   注記 ・データの格納先には、ネットワークドライブのパスを指定しないでください。
   ・［機能の選択］画面で、［オンラインバックアップ］にチェックマークを付けた場合、システムドライブ以外のパスを指定することを推奨します。システムドライブを選択すると、オンラインバックアップに時間がかかることがあります。

   補足 ・ユーザーデータの格納先の初期値は、「C:¥ArcSuite」です。
   ・データ格納先名には、半角英数字だけが使用できます。

6. ［次へ］をクリックします。
   ［データベースのサーバー情報］画面が表示されます。

   補足 データベースとは、ArcSuite システムの設定情報が保存されているデータベースです。

7. ［サーバー名］と［ポート番号］を確認します。

   補足 ［サーバー名］は、データベースの［ホスト名］です。

8. ［グローバルデータベース名］に、データベースのサーバー情報を入力します。ここでは、［arcsuite.example.com］と入力します。

   補足 データベースの［グローバルデータベース名］の文字列を入力します。入力する文字列には、制限があります。

   参照 ［グローバルデータベース名］に入力する文字列の制限については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「3.1.2 データベースインストーラー」（P.50）を参照してください。

9. ［次へ］をクリックします。
   ［データベースの管理者情報］画面が表示されます。

10. [パスワード] に、データベース設定時のパスワードを入力します。ここでは、「System0」と入力します。

11. [次へ] をクリックします。
[データベースの RMS 用ユーザー情報] 画面が表示されます。

12. データベースにアクセスするための、データベース用ユーザーの［ユーザー名］を入力します。

注記 ここで入力するユーザー名は、追加するコンポーネントのインストール時に、入力が必要になる場合があります。
・ユーザー名の初期値は、「rms」です。
・インストールするコンポーネント、ユーザー、グループ、またはロールなどを管理するデータベースを新たに構築する場合は、すでに作成されているデータベースで使用していないユーザー名を入力します。また、既存の RMS データベースにアクセスする場合は、初期化時に作成した RMS 用のユーザー名を入力します。

13. [パスワード]、および［パスワード確認］を入力します。ここでは、「rms」と入力します。

注記 ここで入力するパスワードは、追加するコンポーネントのインストール時に、入力が必要となる場合があります。忘れないようにしてください。

補足 新たに RMS データベースを構築してアクセスする場合は、既存のデータベースで使用していないユーザー名を入力します。また、既存の RMS データベースにアクセスする場合は、初期化時に作成した RMS 用のユーザー名とパスワードを入力します。

14. [次へ] をクリックします。
[データファイルの配置先] 画面が表示されます。

15. [データファイルの配置先] にデータベースのデータファイルの配置先を指定します。

注記 ・[機能の選択] 画面で、[オンラインバックアップ] にチェックマークを付けた場合、システムドライブ以外のパスを指定することを推奨します。システムドライブを選択した場合、オンラインバックアップに時間がかかることがあります。
・初期値で表示された配置先のフォルダーとは別のフォルダーを指定する場合は、あらかじめデータベースがインストールされたサーバーでフォルダーを作成しておき、作成したフォルダーのパスを指定してください。フォルダーを作成していなかった場合は、インストールできません。

補足 ・ほかのホストですでにインストーラーが実行された場合は、そこで設定された値が初期値として表示されます。
・入力値が空のときはエラーとなります。
・UNC 形式のファイルパスは指定できません。

16. [次へ] をクリックします。
[データベースの RMS 参照専用ユーザー登録] 画面が表示されます。

17. [ユーザー名] を入力します。ここでは、「rmsclient」と入力します。

注記 ここで入力するユーザー名は、追加するコンポーネントのインストール時に、入力が必要となる場合があります。忘れないようにしてください。

18. [パスワード]、および［パスワード確認］を入力します。ここでは、「rmsclient」と入力します。

注記 ここで入力するパスワードは、追加するコンポーネントのインストール時に、入力が必要となる場合があります。忘れないようにしてください。

19. [次へ] をクリックします。
[RMS のシステム名] 画面が表示されます。

20. RMS の［システム名］、[システム ID] を入力します。ここでは、[システム名] に「ArcSuite」、[システム ID] に弊社から発行されたシステム ID を入力します。

補足 ・[システム名] とは、現在セットアップ中の ArcSuite システムの名前です。ここで入力した値は、DN の［dc=］部に使用されます。ドット「 . 」で区切られたドメイン名を指定した場合には、[dc=XXX.dc=XXX] のように、ドット部分でドメイン名が区切られます。

・[システム名] には、先頭と末尾が英数字、それ以外は英数字、「 - （ハイフン）」、「 . （ピリオド）」で構成された文字列を入力します。

21. [次へ] をクリックします。
[RMS の管理者ユーザー登録] 画面が表示されます。

22. RMS の管理者ユーザーの［ユーザー名］を入力します。ここでは、「rmsadmin」と入力します。

23. [パスワード]、および［パスワード確認］を入力します。ここでは、「rmsadmin001」と入力します。

補足 英小文字、数字で構成された 8 文字以上の文字列を入力します。

24. [次へ] をクリックします。
[コンピュータのホスト名] 画面が表示されます。

25. [ホスト名] を確認します。

26. [次へ] をクリックします。
[サービス起動ユーザー情報] 画面が表示されます。

27. [ユーザー名] を確認します。

28. [パスワード] を入力します。ここでは、「ArcSuite001」と入力します。

29. [次へ] をクリックします。
[サービス起動ユーザーのグループ情報] 画面が表示されます。

30. サービス起動ユーザーが所属するグループの［グループ名］を確認します。

31. [次へ] をクリックします。
[アクセス制御情報] 画面が表示されます。

補足 IIS の「Web サイト」が複数存在する場合は、[アクセス制御情報] 画面の前に、[IIS の Web サイトの選択] 画面が表示されます。
[次へ] をクリックします。

32. [以下のホストからのアクセスのみ受け付ける] を選択します。

33. [編集] をクリックし、ArcSuite をインストールするサーバーの IP アドレスを入力します。

注記 負荷分散構成の場合、プロキシの IP アドレスの追加も必要です。

34. [次へ] をクリックします。[機能の選択] 画面でメッセージ通知サービスを選択しなかった場合は、手順 39 に進みます。
[SMTP サーバー情報] 画面が表示されます。

補足 [SMTP サーバー情報] 画面は、[機能の選択] 画面でメッセージ通知サービスを選択した場合は表示されます。

35. [ホスト名] を入力します。
ここでは、[ホスト名] に「smtp.example.com」と入力します。

36. SMTP サーバーの［ポート番号］を確認します。

37. [次へ] をクリックします。
[管理者メールアドレス情報] 画面が表示されます。

補足 [管理者メールアドレス情報] 画面は、[機能の選択] 画面でメッセージ通知サービスを選択した場合は表示されます。

38. [メールアドレス] に管理者のメールアドレスを入力します。
ここでは、「rmsadmin@example.com」と入力します。

39. [次へ] をクリックします。[機能の選択] 画面でコラボスペースを選択しなかった場合は、手順 41 に進みます。
[サーバー ID 情報] 画面が表示されます。

補足 [サーバー ID 情報] 画面は、[機能の選択] 画面でコラボスペースを選択した場合に表示されます。

40. コラボスペースの [サーバー ID] を入力します。ここでは、「0001」と入力します。

補足 [サーバー ID] には、弊社から発行されたサーバー ID を入力します。

41. [次へ] をクリックします。[機能の選択] 画面で原本性保証オプションを選択しなかった場合は、手順 49 に進みます。
[プロキシーサーバーの設定] 画面が表示されます。

補足 [プロキシーサーバーの設定] 画面は、[機能の選択] 画面で原本性保証オプションを選択した場合に表示されます。

42. プロキシサーバーの [サーバー名]、[ポート番号] を確認します。
ここでは、[サーバー名] に「proxy.example.com」を、[ポート番号] に「8080」と入力します。

43. [次へ] をクリックします。
[タイムスタンプサービスのライセンスファイルのインポート] 画面が表示されます。

補足 [タイムスタンプサービスのライセンスファイルのインポート] 画面は、[機能の選択] 画面で原本性保証オプションを選択した場合に表示されます。

44. タイムスタンプサービスのライセンスファイル（拡張子が「atl」のファイル）を指定します。

補足 ・アマノタイムスタンプサービスの契約時に提供されたライセンスファイルを指定します。
・[参照] をクリックするか、フォルダー名を直接入力して、ライセンスファイルのインポート先を変更できます。

45. [次へ] をクリックします。
[タイムスタンプサービス接続時のパスワード] 画面が表示されます。

補足 [タイムスタンプサービス接続時のパスワード] 画面は、[機能の選択] 画面で原本性保証オプションを選択した場合に表示されます。

46. [パスワード]、および [パスワード確認] を入力します。ここでは、「etiming」と入力します。

補足 アマノタイムスタンプサービスの契約時に提供されたパスワードを入力します。

47. [次へ] をクリックします。
[タイムスタンプサービスの URL] 画面が表示されます。

補足 [タイムスタンプサービスの URL] 画面は、[機能の選択] 画面で原本性保証オプションを選択した場合に表示されます。

48. [URL] に、アマノタイムスタンプサービスの URL を指定します。

・従量制メニューの場合
http://tss3161.e-timing.ne.jp/astdtssvr/TSRequest
・定額制メニューでポート番号を変更していない場合
http:// {e-timing Proxy 3161 for AMANO TSA をインストールしたサーバーの FQDN または IP アドレス} /atssprxy/Proxy
・定額制メニューでポート番号を変更している場合
http:// {e-timing Proxy 3161 for AMANO TSA をインストールしたサーバーの FQDN または IP アドレス} : {ポート番号} /atssprxy/Proxy

補足 ・初期値はアマノタイムスタンプサービスの従量制メニューの URL です。
・従量制メニューおよび定額制メニューは、アマノセキュアジャパン株式会社の料金メニューです。
・「e-timing Proxy 3161 for AMANO TSA」は、アマノセキュアジャパン株式会社のソフトウェアです。

・{ポート番号} は、「e-timing Proxy 3161 for AMANO TSA」のポート番号です。コンポーネントサーバーに「e-timing Proxy 3161 for AMANO TSA」をインストールした場合、「e-timing Proxy 3161 for AMANO TSA」のポート番号を変更する必要があります。

参照 「e-timing Proxy 3161 for AMANO TSA」のポート番号の変更については、『e- 文書法概要説明書』を参照してください。

49. [次へ] をクリックします。
［ファイル コピーの開始］画面が表示されます。

50. [次へ] をクリックします。
インストールが開始されます。

注記 ファイアウォールサービスが起動している場合は、インストールの開始前にファイアウォールの設定を確認する画面が表示されます。
設定する場合は［はい］を選択します。すでにファイアウォールを設定している場合、または Windows ファイアウォールを使用しない場合は、［いいえ］を選択してください。

［セットアップの完了］画面が表示されます。

51. [はい、今すぐコンピュータを再起動します。] を選択します。

52. [完了] をクリックします。
サーバーが再起動されます。

簡易モードでのインストールは終了です。

簡易モードで補完する入力値

簡易モードでは、入力値を各インストーラーの初期値で補完します。初期値以外で補完する入力値には、次のものがあります。

該当する画面、インストーラー	入力項目	補完する値
[RMS の管理者ユーザーの表示名] 画面	表示名（JA）	RMS管理者
	表示名（EN）	RMS administrator
[RMS の管理者に設定するユーザーロール] 画面	ユーザーロール名	rmsadministrators
[RMS の管理者に設定するユーザーロール] 画面	表示名（JA）	RMS管理者ロール
	表示名（EN）	RMS administrator role
[SSL 構成の選択] 画面	-	SSLを使用しない
[HTTP サービスの情報] 画面	ホスト名	［コンピュータのホスト名］画面の「ホスト名」の値
[ログイン方法の選択] 画面	-	自動ログインを使用する
[データベースの XXXX 用ユーザー作成] 画面 (XXXX はコンポーネント名)	パスワード	［データベースのRMS用ユーザー情報］画面の「パスワード」の値
	パスワード確認	
キャビネットを作成するインストーラー	キャビネット作成時に指定する［管理者ユーザ名］	［RMSの管理者ユーザー登録］画面、または［RMSの管理者ユーザー情報］画面の「ユーザー名」の値

該当する画面、 インストーラー	入力項目	補完する値
ドキュメント管理サービス インストーラー	サービスID	ドメイン名を除くホスト名をベースにして、英数字以外の文字をすべて「_ (アンダースコア)」に置き換え、先頭文字が数字か「_ (アンダースコア)」であれば取り除き、先頭から30バイトの文字列
	サーバー ID	ドメイン名を除くホスト名をベースにし、英数字、「 - (ハイフン)」、「 _ (アンダースコア)」以外の文字をすべて、「 - (ハイフン)」に置き換え、先頭から64バイトの文字列

付録 D 機能を追加する

機能を追加するには、インストーラーを起動して追加する機能のシリアル番号を登録します。
機能を追加する手順は、オールインワン構成の場合でも、2台以上の構成の場合でも同じです。ここでは、手順の概要を説明しています。詳細な手順はそれぞれの参照先を参照してください。

補足 機能を追加するには、アップデートのアンインストールと、再適用が必要です。

1. Windows の［スタート］メニューから、［コントロールパネル］を選択します。
［コントロールパネル］画面が表示されます。

2. ［プログラム］の［プログラムのアンインストール］を選択します。
［プログラムと機能］画面が表示されます。

3. ArcSuite のアップデートまたは Hotfix を選択し、［アンインストール］をクリックします。

補足 ArcSuite のアップデートは、［ArcSuite アップデート {バージョン}］と表示されています。また、ArcSuite の Hotfix は、［ArcSuite Hotfix {バージョン}］と表示されています。
{バージョン} は、バージョン番号です。たとえば、「4.0.1」です。

4. 手順 3 を繰り返して、すべてのアップデートまたは Hotfix をアンインストールします。

5. 「ArcSuite 4.0 インストール」インストールメディアを、ドライブにセットします。

6. 共通の設定をします。
ライセンスシリアル番号、ユーザー情報、RMS データベースの情報などを入力し、インストールします。

参照 共通設定については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「4.1.2 共通設定をする」（P.57）を参照してください。

7. ドキュメント管理サービスをインストールします。
共通設定が完了すると、自動的にドキュメント管理サービスのインストール画面が表示されるので、引き続きインストールします。

参照 ドキュメント管理サービスのインストールについては、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「5.1 ドキュメント管理サービスのインストール」（P.66）を参照してください。

8. メッセージ通知サービスをインストールします。

参照 オールインワン構成の場合、メッセージ通知サービスのインストールについては、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「6.1 メッセージ通知サービスのインストール」（P.70）を参照してください。

9. ドキュメントスペースをインストールします。

参照 ドキュメントスペースのインストールについては、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「7.1 ドキュメントスペースのインストール」（P.73）を参照してください。

10. コラボスペースをインストールします。
コラボスペースは、共通設定の手順の［機能の選択］画面で、コラボスペースを選択したときにインストールします。

参照 コラボスペースのインストールについては、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「8.1 コラボスペースのインストール」（P.75）を参照してください。

11. ドキュメントレビューオプションをインストールします。
ドキュメントレビューオプションは、共通設定の手順の［機能の選択］画面で、ドキュメントレビューオプションを選択したときにインストールします。

参照 ドキュメントレビューオプションのインストールについては、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「9.1 ドキュメントレビューオプションのインストール」（P.78）を参照してください。

12. ワークフローをインストールします。
ワークフローは、共通設定の手順の［機能の選択］画面で、ワークフローを選択したときにインストールします。

参照 ワークフローのインストールについては、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「10.1 ワークフローのインストール」（P.80）を参照してください。

13. 原本性保証オプションをインストールします。
原本性保証オプションは、共通設定の手順の［機能の選択］画面で、原本性保証オプションを選択したときにインストールします。

参照 原本性保証オプションのインストールについては、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「11.1 原本性保証オプションのインストール」（P.82）を参照してください。

付録 E LDAP 連携を設定する

「LDAP連携」とは、Lightweight Directory Access Protocol（以降、「LDAP」と表記します）サーバーに登録されているユーザーやグループなどの情報をArcSuiteで使用する仕組みのことです。
ここでは、LDAP連携の設定方法について説明します。

付録 E.1 LDAP 連携の概要

LDAP 連携とは

LDAP連携を設定すると、次のことができるようになります。

・ユーザー認証
ArcSuite で認証をするときに、LDAP サーバーに登録されているユーザーの ID およびパスワードが使用できます。

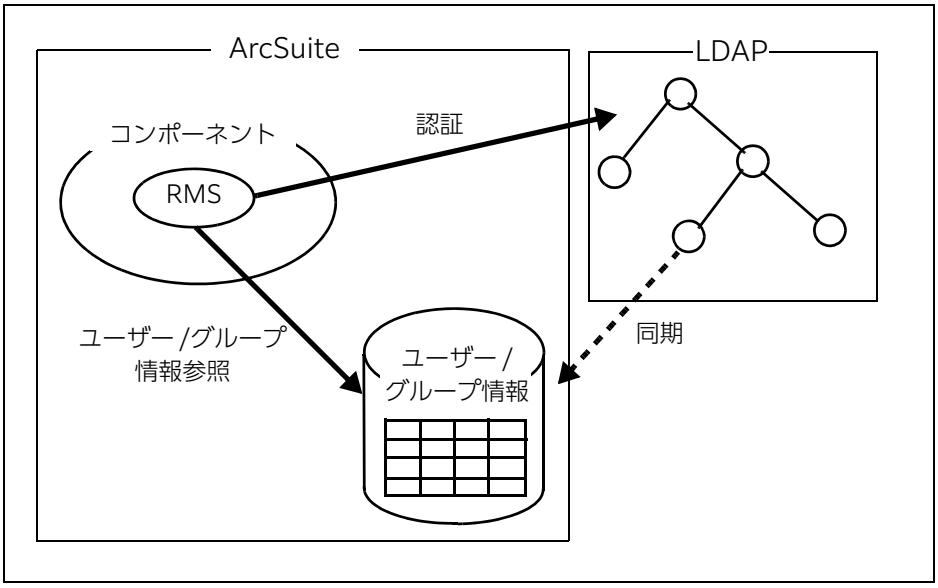
・ユーザーおよびグループ情報の検索・取得
LDAP サーバーに登録されているユーザーおよびグループのデータを、ArcSuite のアドレス帳で表示、検索できます。

・ライセンス管理
LDAP サーバーに登録されているユーザーに、ArcSuite のライセンス付与・解除を設定できます。

・オブジェクトへのアクセス権設定
LDAP サーバーに登録されているユーザーまたはグループにアクセス権を設定できます。RMS で管理されているユーザーと同じように、ドキュメントスペースなどでアクセス権が反映されます。

LDAP 連携を構成する

LDAP連携をしたときの内部の構成について、次に示します。



図：LDAP 連携の構成

LDAP連携をしたとき、ArcSuiteでは、次のように動作します。

・同期コマンドを実行すると、LDAP サーバーの情報を ArcSuite のデータベースに取り込みます。

・ArcSuite でユーザーを認証すると、LDAP サーバーにアクセスし、認証します。

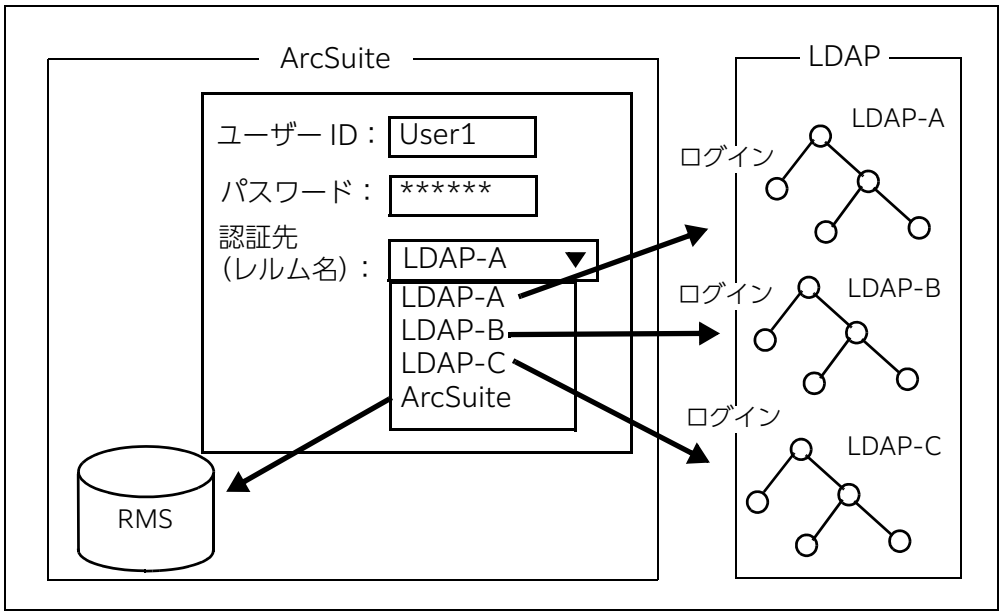
・ユーザーまたはグループ情報を参照するときは、ArcSuite のデータベースにアクセスします。

補足 同期処理は、必要に応じて行います。

参照 同期コマンドの使用方法については、『システム管理者ガイド』を参照してください。

付録 E.2　複数の LDAP サーバーとの連携

ArcSuiteは複数のLDAPサーバーと連携できます。複数のLDAPサーバーと連携したとき、［ログイン］画面で、［認証先（レルム名)］が表示されます。プルダウンメニューで、LDAPサーバーを選択し、ユーザー IDとパスワードを入力して、ログインします。



図：複数の LDAP サーバーと連携したときの概念図

構成名とは

構成名とは、LDAPサーバーを区別するための名前です。

複数のLDAPサーバーと連携するときは、構成名で設定を区別します。

LDAP 連携のシステムプロパティ

認証についての設定です。ArcSuiteかLDAPサーバーで認証するかを指定します。LDAPサーバーの場合、サーバーのURLやアクセスユーザーなどを設定します。何も設定されていないときは、ArcSuiteで認証します。

また、LDAPサーバーごとの設定は、「. {構成名}」で区別されます。「表：LDAPサーバーごとに設定するシステムプロパティ」で、LDAPサーバーごとに設定します。たとえば、図の場合、システムプロパティ 1つにつき、

com.fujifilm.fb.rms.auth.serverName	LDAP-A
com.fujifilm.fb.rms.auth.serverName. {LdapServer-B}	LDAP-B
com.fujifilm.fb.rms.auth.serverName. {LdapServer-C}	LDAP-C
com.fujifilm.fb.rms.auth.serverName. {ArcSuiteサーバー}	ArcSuite

をそれぞれ設定します。

「. {構成名}」を省略した設定は、「.default」として設定されます。この場合、「LDAP-A」サーバーについての設定が、「.default」の設定になります。

付録 E.3 LDAP 連携の準備

LDAP連携を設定する前に、次の準備をします。

・LDAP サーバーの運用状況の確認
確認シート（「付録 E.10 LDAP 連携確認シート」（P.444））を利用して、LDAP サーバーの運用状況を確認します。LDAP サーバーの構成、同期させる情報の範囲と種類、およびログイン名に使用する属性などを、あらかじめ確認しておきます。

・同期する属性の確認
LDAP サーバーで管理しているユーザーおよびグループの属性について、次のことを確認します。
- 同期する範囲
- 同期する ArcSuite の属性

付録 E.4 設定方法

次の設定をします。

・連携用のシステムプロパティを設定する

・同期コマンドを実行する

連携用のシステムプロパティを設定する

システムプロパティの設定は、リソース管理アプリケーションまたはリソース管理コマンド（「rmsgetproperty.bat」コマンド）を使用できます。

1. システムプロパティをバックアップします。
リソース管理コマンドの「rmsgetproperty.bat」コマンドを実行して、現在のシステムプロパティの値をバックアップしておきます。

補足 LDAP 連携の設定に失敗したときに、「rmssetproperty.bat」コマンドを使用して、元に戻します。

参照 コマンドの実行方法については、『システム管理者ガイド』を参照してください。

2. システムプロパティを設定します。
それぞれのシステムプロパティを設定します。

・共通のシステムプロパティ
ログインのときに使用する、認証サーバーの構成について設定します。

・LDAP サーバーごとに設定するシステムプロパティ
認証についての設定は、「表：LDAP サーバーごとに設定するシステムプロパティ」で設定します。プロパティ名の文字列に、「. {構成名}」を指定して、LDAP サーバーごとの設定を区別します。「. {構成名}」を省略した設定は、「.default」の設定として、「共通のシステムプロパティ」で使用されます。

表：共通のシステムプロパティ

番号	プロパティ名	説明	備考
(1)	com.fujifilm.fb.rms.auth.authConfigs	ドキュメントスペースやコラボスペースなど各アプリケーションの［ログイン］画面で表示する構成名を、「：（コロン）」で区切って指定します。左から指定された順に、構成名が表示されます。必ず指定します。「表：LDAPサーバーごとに設定するシステムプロパティ」で、「. {構成名}」を省略した設定は、ここで「default」という文字列で指定します。 例. default:ldapserver1	No.5

表：共通のシステムプロパティ

番号	プロパティ名	説明	備考
(2)	com.fujifilm.fb.rms.auth.authAdminConfigs	管理アプリケーションの［ログイン］画面で表示する構成名を、「：（コロン）」で区切って指定します。左から指定された順に、構成名が表示されます。必ず指定します。「表：LDAPサーバーごとに設定するシステムプロパティ」で、「.｛構成名｝」を省略した設定は、ここで「default」という文字列で指定します。 例. ldapserver1:default:ldapserver2	No.5
(3)	com.fujifilm.fb.rms.auth.commandConfig.user	「ドキュメント管理サービス SDK」、「ワークフロー Interface Tool Kit」、または「コラボスペースInterface Tool Kit」のログインで使用する構成名を指定します。複数の場合、「：（コロン）」で区切ります。	
(4)	com.fujifilm.fb.rms.auth.commandConfig.admin	「ドキュメント管理サービス管理コマンド」または「リソース管理アプリケーション管理コマンド」のログインで使用する構成名を指定します。複数の場合、「：（コロン）」で区切ります。 補足 Apeos PEMaster Evidence Tracker®を使用している環境の場合は、「｛LDAPサーバーの構成名｝：｛ArcSuiteサーバーの構成名｝」のように、LDAPサーバーの構成名とArcSuiteサーバーの構成名の両方を指定する必要があります。	
(5)	com.fujifilm.fb.rms.auth.commandConfig.alias	(3) または (4) のシステムプロパティは、それぞれのコマンドを実行するときにも指定できます。コマンドを実行するときに指定しなかった場合の初期値を指定します。 ・(3) を初期値にする場合：　user ・(4) を初期値にする場合：　admin	

次に、LDAP サーバーごとに「.｛構成名｝」を指定して、システムプロパティ設定します。
「.｛構成名｝」を省略した場合、その設定は、「.default」の設定として、「表：共通のシステムプロパティ」で使用されます。

表：LDAP サーバーごとに設定するシステムプロパティ

番号	プロパティ名	説明	備考
(6)	com.fujifilm.fb.rms.auth.authModuleFactory.｛構成名｝	使用する認証サーバーを指定します。省略した場合、ArcSuiteが認証サーバーになります。 **ArcSuite を認証サーバーとする場合** com.fujifilm.fb.rms.auth.rdb.RdbFactory 補足 省略した場合は、この値になります。 **LDAP サーバーを認証サーバーとする場合** com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.LdapFactory 補足 LDAP連携の場合はこの値を指定します。	
(7)	com.fujifilm.fb.rms.auth.serverName.｛構成名｝	［ログイン］画面で表示されるLDAPサーバーのサーバー名を指定します。半角英数字で16文字までです。省略した場合、認証先がArcSuiteのときは空白、LDAPサーバーのときは構成名が表示されます。	
(8)	com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.serverURI.｛構成名｝	連携するLDAPサーバーのURLを指定します。必ず指定します。 注記 LDAPサーバーのURLは、必ずFQDNで指定してください。IPアドレスで指定しないでください。	

表：LDAP サーバーごとに設定するシステムプロパティ

番号	プロパティ名	説明	備考
(9)	com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.principal.{構成名} com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.credentials.{構成名}	連携するLDAPサーバーへのアクセスユーザーを指定します。 LDAPサーバーで、匿名ユーザーによるアクセスを許可するように設定されていても、必ず指定します。 検索および読み込み権を持つアクセスユーザーのDNおよびパスワードを指定します。 ・com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.principal アクセスユーザーのDNを指定します。 ・com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.credentials アクセスユーザーのパスワードを指定します。	No.9
(10)	com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.userAttrName.{構成名}	ログインで指定されたユーザー名から、ユーザーを特定する検索キーとして使用する属性名を指定します。省略した場合、「uid」が指定されます。 検索キーとして使用する属性の値は、一意になるようにしてください。eDirectoryは「cn」、Active Directoryは「sAMAccountName」または「userPrincipalName」を使用することを推奨します。	No.7
(11)	com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.baseDN.{構成名}	(10) で指定された属性が、ツリーでエントリーを一意に特定できない場合、ArcSuiteが検索する範囲を限定するために指定します。省略した場合、ルートから検索します。	No.10
(12)	com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.userObjectClass.{構成名}	ユーザーエントリーとして使用するLDAPサーバーのオブジェクトクラスを指定します。省略した場合、「user」が使用されます。 eDirectoryは「inetOrgPerson」、Active Directoryは「user」が使用されます。	No.1
(13)	com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.groupObjectClass.{構成名}	グループエントリーとして使用するLDAPサーバーのオブジェクトクラスを指定します。省略した場合、「group」が使用されます。	
(14)	com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.needsAuthDNConversion.{構成名}	LDAPサーバーに登録されているユーザーのDNと、ArcSuiteに登録されているユーザーのDNが同じかどうかを表します。省略した場合、DNが同じ（FALSE）とします。 同じ場合、「FALSE」、同じでない場合、「TRUE」を指定します。	No.3
(15)	com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.rmsExtUserMap.{構成名}	(14) でTRUEを指定した場合、RMSの「rmsExtUser」属性とマップさせる、LDAPサーバーの属性名を指定します。省略した場合、「uid」が使用されます。	No.10
(16)	com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.rmsExtGroupMap.{構成名}	LDAPサーバーに登録されているグループのDNと、ArcSuiteに登録されているグループのDNが同じでない場合、RMSの「rmsExtGroup」とマップさせる、LDAPサーバーの属性名を指定します。省略した場合、「cn」が使用されます。	
(17)	com.fujifilm.fb.rms.config.allowChangePassword.{構成名}	ArcSuiteの［ユーザープロファイル編集］画面でパスワードの変更ができるかどうかを指定します。 変更できない場合、「FALSE」、変更できる場合、「TRUE」を指定します。省略した場合、「TRUE」として扱われます。 ただし、Active Directoryの場合、このプロパティの設定にかかわらず、パスワードは変更できません。	No.11

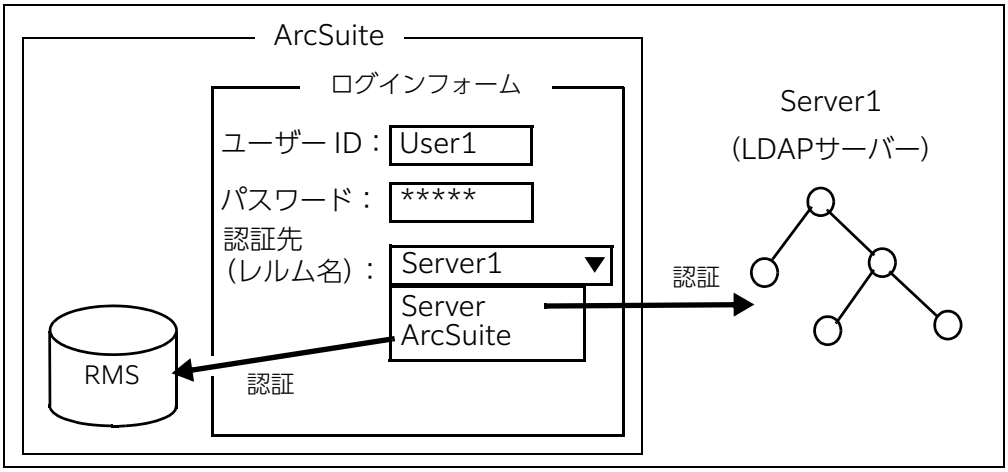
表：LDAP サーバーごとに設定するシステムプロパティ

番号	プロパティ名	説明	備考
(18)	com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.userPasswordAttrName. {構成名}	(17) で「TRUE」を指定した場合、パスワードが設定されているLDAPサーバーの属性名を指定します。省略した場合、「userPassword」が使用されます。	No.11

補足 備考欄に記載されている番号のプロパティは、それぞれ関連している設定です。値を設定するときに、整合がとれているかを確認してください。

設定例

ここでは、ArcSuiteとLDAPサーバーの両方を認証サーバーとして使用する場合の設定例を図に示します。
また、そのときのシステムプロパティの設定例を表に示します。ここでは、ArcSuiteの構成名を「arcsuite」、LDAPサーバー（Active Directory）の構成名を「default」とします。



図：LDAP 連携の概念図

表：LDAP 連携共通のシステムプロパティの設定例

プロパティ名	設定例	説明
com.fujifilm.fb.rms.auth.authConfigs	default:arcsuite	共通ログインで使用する認証サーバーは「default」と「arcsuite」とし、ログインフォームのサーバー名のリストにはこの順番で表示します。
com.fujifilm.fb.rms.auth.authAdminConfigs	arcsuite:default	管理アプリケーション用ログインで使用する認証サーバーは「default」と「arcsuite」とし、ログインフォームのサーバー名のリストにはこの順番で表示します。
com.fujifilm.fb.rms.auth.commandConfig.user	default	一般ユーザー向けのコマンドラインツールで使用する認証サーバーに「default」を使用します。
com.fujifilm.fb.rms.auth.commandConfig.admin	arcsuite	管理ユーザー向けのコマンドラインツールで使用する認証サーバーに「arcsuite」を使用します。
com.fujifilm.fb.rms.auth.commandConfig.alias	user	コマンドライン版のツールが初期値で使用する認証用構成情報を、一般ユーザー向け（user）のものとします。

表：LDAP サーバーの認証用構成情報（「arcsuite」）に関するシステムプロパティの設定例

プロパティ名	設定例	説明
com.fujifilm.fb.rms.auth.serverName.arcsuite	ArcSuite	ログインフォームのサーバー名のリストで表示するサーバー名を「ArcSuite」とします。

表：LDAP サーバーの認証用構成情報（「default」）に関するシステムプロパティの設定例

プロパティ名	設定例	説明
com.fujifilm.fb.rms.auth.authModuleFactory	com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.LdapFactory	認証モジュールのファクトリクラスとしてLDAPサーバー用のクラスを使用します。
com.fujifilm.fb.rms.auth.serverName	Server1	ログインフォームのサーバー名のリストで表示するサーバー名を「Server1」とします。
com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.serverURI	ldap://ldapserver.example.com	LDAPサーバーのURLを「ldap://ldapserver.example.com」とします。 注記 LDAPサーバーのURLは、必ずFQDNで指定してください。IPアドレスで指定しないでください。
com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.principal	cn=accessUser,ou=ldaptest,dc=FUJIFILM	LDAPサーバーへのアクセスユーザーのDNを「cn=accessUser,ou=ldaptest,dc=FUJIFILM」とします。
com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.credentials	secret	LDAPサーバーへのアクセスユーザーのパスワードを「secret」とします。
com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.userAtrrName	sAMAccountName	ログインフォームで指定されたユーザー名の検索に使用する属性を「sAMAccountName」とします。
com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.baseDN	dc=FUJIFILM	ユーザー名の検索の基点を「dc=FUJIFILM」とします。
com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.userObjectClass	user	ユーザーの検索対象とするオブジェクトクラスを「user」とします。
com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.groupObjectClass	group	グループの検索対象とするオブジェクトクラスを「group」とします。
com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.needsAuthDNConversion	TRUE	LDAPサーバーのユーザーと対応するArcSuiteのユーザーではDNが異なるものとします（DNの変換が必要）。
com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.rmsExtUserMap	sAMAccountName	「sAMAccountName」という属性の値を使用して、LDAPサーバーのユーザーとArcSuiteのユーザーの対応付けをします。
com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.rmsExtGroupMap	sAMAccountName	「sAMAccountName」という属性の値を使用して、LDAPサーバーのグループとArcSuiteのグループの対応付けをします。
com.fujifilm.fb.rms.config.allowChangePassword	FALSE	LDAPサーバーに登録されているユーザーのパスワードは、ArcSuiteからは変更できないものとします。

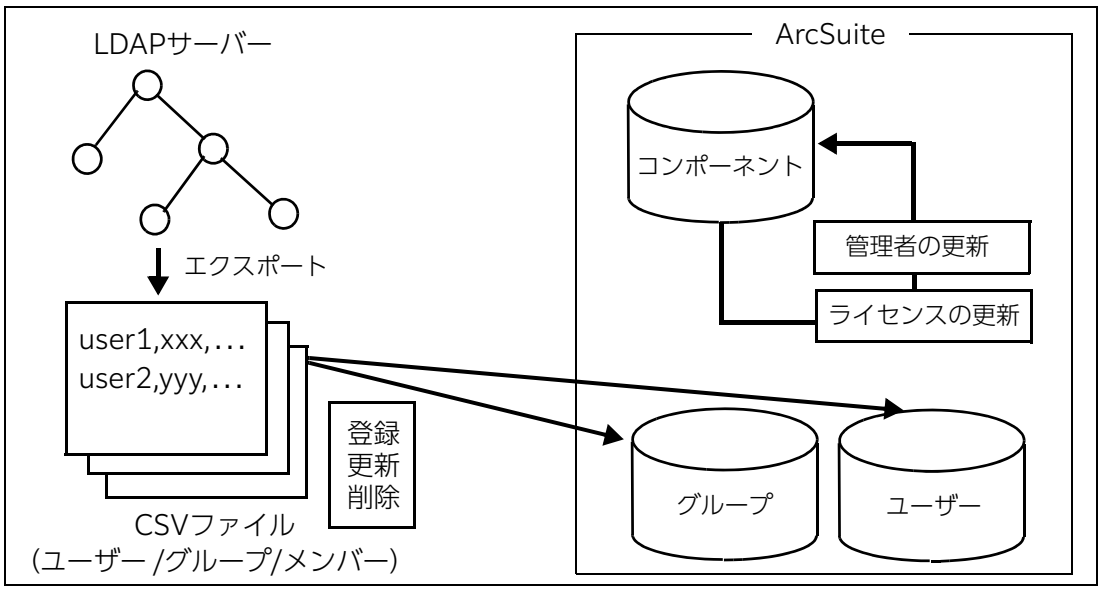
同期コマンドを実行する

リソース管理コマンドの「rmssync.bat」を実行して、同期します。Windowsのタスクの機能などを利用して、定期的に同期コマンドを実行させるようにしておくと便利です。

参照 同期コマンドの設定および実行については、『システム管理者ガイド』を参照してください。

■ 同期コマンドの処理の流れ

同期コマンドを実行して、ユーザー、グループ、およびライセンス情報を更新します。同期コマンドの処理の流れを次に示します。



図：同期コマンドの処理の流れ

1. 連携先の LDAP サーバーから、同期対象となるエントリーを検索します。
2. 手順 1 で検索されたエントリー情報を CSV ファイルに出力します。

   注記 このとき出力対象となるのは、ドメイン情報設定ファイル（syncdomains.csv）の「from」に記述されたドメインは、次のエントリーすべてで、「filter」にマッチしなかったエントリーも含まれます。ただし、「filter」にマッチしなかったエントリーは、登録・更新の対象となりません。
3. 手順 2 で出力されたエントリー情報をもとに、ArcSuite のエントリー情報を更新します。
4. LDAP サーバーで削除または移動されたエントリーについて、対応する ArcSuite のエントリーを削除または無効化します。

   補足 エントリーを削除するか無効化するかどうかは、同期情報設定ファイル（rms_sync.csv）の「deleteEntry」の設定によります。
5. コンポーネントの管理者とライセンスユーザーの情報から、手順 4 で削除または無効化されたエントリーを除外します。
6. 手順 2 で出力されたエントリー情報のうち、ArcSuite に存在しないエントリーの場合は新規に作成し、既存のエントリーの場合はその情報を更新します。

   補足 ・同期コマンド設定ファイルで「licenseComponent」パラメーターが指定されている場合、新規に作成するエントリーに限り、作成時に指定されたコンポーネントのライセンスを付与します。
   ・既存のエントリーの更新の場合は、属性情報設定ファイル（syncattrs.csv）に記述されている属性だけを更新し、記述されていない属性については、何もしません。
7. 手順 2 で出力されたグループ、メンバー情報をもとに、グループのメンバー情報を再設定します。

付録 E.5 確認方法

RMSの設定、およびLDAPサーバーに登録されているユーザーが正しく利用できることを、確認します。

RMS の設定、各種ユーザー登録の確認

1. 同期コマンドの実行が正常終了したあとで、ArcSuite のすべてのサーバーを再起動します。
2. クライアント PC から、ArcSuite にアクセスします。URL は、次のとおりです。
「http:// {ArcSuite サーバーのホストアドレス} /ArcSuite/login」
3. [ログイン] 画面で、[認証名（レルム名)] に、LDAP サーバーの名前が表示されていることを確認します。
「com.fujifilm.fb.rms.auth.authConfigs」で設定した順で、「com.fujifilm.fb.rms.auth.serverName.{構成名}」で設定したサーバー名が表示されます。
4. LDAP サーバーを選択し、一般ユーザーでログインします。
5. [{ユーザー名}] リンクをクリックして、[ユーザープロファイル] 画面を表示します。ユーザープロファイルが正しく表示されることを確認します。また、ArcSuite でパスワードの変更を許可しない設定の場合、[新パスワード] および [新パスワード（確認)] が表示されないことを確認します。
6. [キャンセル] をクリックします。
[ポータル] 画面に戻ります。
7. [システム管理] > [RMS] リンクを選択します。
リソース管理アプリケーションの [ログイン] 画面が表示されます。
8. [管理ログイン] 画面で、[認証名（レルム名)] に、LDAP サーバーの名前が表示されていることを確認します。
「com.fujifilm.fb.rms.auth.authAdminConfigs」で設定した順で、
「com.fujifilm.fb.rms.auth.serverName.{構成名}」で設定したサーバー名が表示されます。
9. サーバーリストから [ArcSuite] を選択し、RMS の管理ユーザーでログインします。
10. [ログアウト] リンクをクリックし、ログアウトします。
11. 「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版」を起動し、サービス管理者でログインします。

補足 「ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版」は、ArcSuite が 2 台構成の場合は、通常、リポジトリーサーバーにインストールされています。オールインワン構成の場合は、ArcSuite サーバーにインストールされています。

エラーが発生した場合、次の対処方法に記載された内容で、設定を確認します。

表：エラーメッセージ

メッセージ	原因	対応
手順4で次のエラーメッセージが表示される。 [ログインに失敗しました。 ユーザー名またはパスワードに誤りがあります。]	ユーザー名およびパスワードが正しいにもかかわらずこのエラーメッセージが表示された場合、LDAP連携用のシステムプロパティの設定が誤っていることが考えられます。	システムプロパティの設定内容を、確認シートでの確認結果と「システムプロパティの設定」での記載内容とを照らし合わせ、誤りがないかどうかを確認してください。

同期コマンドの設定、実行の確認

同期コマンドの設定および実行が正しく行われていることを次の手順で確認します。

1. LDAP サーバーのユーザーエントリーのどれかで、RMS でユーザーの［表示名］属性または［表示名 ;（lang-ja）;］属性（displayName;lang-ja）にマップさせている属性の値を変更します。
2. 同期コマンドを実行します。
3. 手順 1 で変更したユーザーで、ArcSuite にログインします。
4. ［ポータル］画面で、［{ユーザー名}］リンクに、手順 1 で変更した値が表示されていることを確認します。

変更されない場合、同期コマンドの設定が正しくない可能性があります。『システム管理者ガイド』を参照して、各種設定ファイルの設定に誤りがないかどうか確認してください。

付録 E.6　クラスター構成の LDAP サーバーとの連携

LDAPをレプリケーションによって多重化した場合、LDAPサーバーと接続できなかったときに、自動でほかのLDAPサーバーに参照を切り替えることができます。自動で切り替えるためには、切り替えたときの参照先のLDAPサーバーを設定しておきます。

切り替え先のLDAPサーバーは、システムプロパティで、
「com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.multiplexedConfigs.｛構成名｝」の値を設定します。

「｛構成名｝」が「ldapServer1」の切り替え先構成名として「ldapServer2」、「｛構成名｝」が「ldapServer2」の切り替え先構成名として「ldapServer1を指定する場合、次のように設定します。

プロパティ名	設定例
com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.multiplexedConfigs.ldapServer1	ldapServer2
com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.multiplexedConfigs.ldapServer2	ldapServer1

複数の構成名を指定する場合、次のように「：（コロン）」で区切って指定します。左から指定された順で通信し、成功したLDAPサーバーに切り替わります。すべての切り替え先に通信できない場合は、エラーになります。

プロパティ名	設定例
com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.multiplexedConfigs.ldapServer1	ldapServer2:ldapServer3:ldapServer4

付録 E.7 注意事項

◆ パスワードの変更について

LDAP 連携の構成の場合、ユーザーのリンクから［プロパティ編集］画面でパスワードを変更できません。パスワードを変更しようとすると、次のメッセージが表示されます。
メッセージ：「RMS_AUTH-01041206: パスワードの変更はできません。」

◆ LDAP サーバーとの通信について

LDAP プロトコルを使用したサーバーとの通信は、暗号化されません。LDAPS を使用して通信を暗号化し、通信データを保護することを推奨します。

◆ 同期コマンドのエクスポートファイルの取り扱いについて

同期コマンドでエクポートしたデータには、ユーザーやグループの情報が含まれています。取り扱いには注意してください。たとえば、管理者だけがアクセスできるような場所に保存してください。

◆ LDAP サーバーとアクセスユーザーの設定について

セキュリティの観点から、アクセスユーザーは、読み取りおよび検索だけの権限を持つユーザーを使用してください。

付録 E.8 Active Directory と連携する場合の注意・制限事項

連携先の Active Directory がグローバルカタログの場合の制限

連携先のActive Directoryがグローバルカタログの場合、次の制限があります。

・複数のドメインと連携する場合、ルートコンテキストが同じときは、1 つの認証用構成名を共有できます。ルートコンテキストが異なるときは、それぞれの構成名を設定します。

-ルートコンテキストが同じ場合
・・・・,DC=xxx,DC=com
・・・・,DC=yyy,DC=com

-ルートコンテキストが異なる場合
・・・・,DC=xxx,DC=com
・・・・,DC=yyy,DC=co,DC=jp

・LDAP サーバーの URL には、グローバルカタログポートを FQDN 形式で指定する必要があります。

プロパティ名	設定例
com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.serverURI	ldap://server.com:3268

・グループのメンバーに異なるドメインのエントリーが設定されている場合、そのメンバーは同期されません。

補足 同じドメインのメンバーは同期されます。

検索上限値を超えるエントリーの同期

Active Directoryには、一度に検索できるエントリーの上限値が設定されています。この上限値は、LDAPポリシー設定の「MaxPageSize」パラメーターで管理されています。初期値は1,000です。同期対象のエントリー数が検索上限値を超える場合には、次のどれかの方法を選択する必要があります。

・「MaxPageSize」パラメーターを同期対象のエントリー数より大きい値に変更する。

・同期コマンドの同期設定ファイル（rms_sync.csv）の「pageSize」パラメーターで、Active Directoryの「MaxPageSize」パラメーターの値を設定する。

補足 「pageSize」は、1 回のアクセスで取得するエントリーの数を指定するパラメーターで、「1 ～ {MaxPageSize}」の範囲で指定します。この値が小さい場合は、Active Directory へのアクセス回数は多くなり、1 回あたりのデータ量は少なくなります。値が大きい場合は、Active Directory へのアクセス回数は少なくなり、1 回あたりのデータ量が多くなります。

Active Directory の制限

Active Directoryを使用した場合、認証または同期に影響する制限は次のとおりです。

・Active Directory でアカウントが無効化されたとき、同期コマンドを実行しても、ArcSuite ではアカウントはそのままです。削除されたり、無効化されたりはしません。

・Active Directory のアカウントの設定でログオン先（ユーザーがログオンできるサーバー）を制限する場合、ログオン先として、ユーザーがログオンするサーバー、および Active Directory がインストールされているサーバーを指定する必要があります。
また、Active Directory へのアクセスユーザー（システムプロパティの「com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.principal」に設定されたユーザー）に対しても、同じ設定が必要です。

付録 E.9　トラブルシューティング

エラーが発生したときのメッセージと対応方法を次に示します。

表：トラブルシューティング

現象	原因	対処方法
ユーザー、グループ以外のエントリーが同期されてしまう。	LDAPサーバーの同期対象ドメインにユーザー、グループ以外のエントリーが含まれている。	ドメイン情報設定ファイル（syncdomains.csv）の「filter」を記述して、同期したくないエントリーを除外します。 例：Active Directoryの「コンピューター名」を除外する場合 (!（objectClass=computer))
同期コマンドを実行すると、フォーマットが乱れた（列数が少ないなど）CSVファイルが出力され、同期に失敗する。	LDAPサーバーのエントリーの属性に改行が含まれている可能性がある。	LDAPサーバーのエントリーの属性に改行が含まれていないかどうか確認します。
Active Directoryで一度に大量のエントリーを同期すると、一部のエントリーが同期されず、ArcSuiteで削除または無効化されてしまう。	何らかのリソースが不足して、Active Directoryとの通信が切断された可能性がある。	同期コマンドの「pageSize」パラメーターにできる値を設定します。

付録 E.10 LDAP 連携確認シート

LDAP連携について確認するためのシートです。

LDAP 連携確認シート（利用者用）

利用者に対する質問用シートです。「質問内容」欄の内容を確認して、「回答」欄に回答を記入してください。

表：LDAP 連携確認シート（利用者用）

No.	カテゴリー	質問内容	回答例	備考	回答
1	スキーマ	ユーザーおよびグループのエントリーに設定されるオブジェクトクラスは何ですか。 topからすべて教えてください。	top person organizationalPerson inetOrgPerson	LDAP Browserなどで、ユーザーとグループの「objectClass」という属性のすべての設定値です。	

表：LDAP 連携確認シート（利用者用）

No.	カテゴリー	質問内容	回答例	備考	回答
2	スキーマ	ユーザーおよびグループのエントリーに設定される属性には、どのようなものがありますか。	cn displayName mail など。	運用ルール上、設定することになっている属性が必要となります。	
3	ディレクトリー構造	ルートからのツリー構造は、どのようになっていますか。 特に、ユーザーおよびグループのエントリーが配置されている位置は、どこですか。	ユーザーは「ou=users,dc=FUJIFILM,dc=co,dc=jp」の下に配置する。	ツリー構造の図を、提供していただきたいです。	
4	ディレクトリー構造	ユーザーおよびグループのRDNに使用している属性を教えてください。	uid	RDN（Relative Distinguished Name）とは、ファイルシステムでの相対パスのようなものです。	
5	ログイン	連携対象のLDAPサーバーの台数を教えてください。	2台		
6	ログイン	シングルサインオンの枠組みがありますか。 **ある場合** ArcSuiteは、それに従う必要がありますか。 **ない場合** ログインのための統一的な規則はありますか。 （ログインフォームが決まっている、パスワードを使用した認証以外の方法が取られているなどです。）	シングルサインオンのしくみはない。 トップページにログイン用のフォームが表示される。		
7	ログイン	ログイン名に使用する属性には、どのようなものがありますか。	社員番号	ディレクトリーツリー全体で一意性が保証されると予測される属性（社員番号など）は、ツリー全体を検索しても1件だけしかヒットしません。一意性の保証されていないと予測される属性は、サブツリーを限定する必要があります。	

表：LDAP 連携確認シート（利用者用）

No.	カテゴリー	質問内容	回答例	備考	回答
8	ログイン	ログインの成否を決定するための要件は、何ですか。	登録されているログイン名とそれに対応するパスワードが正しく入力されること。	追加情報として、「あるフラグが立っていたら、そのユーザーのログインは常に失敗するようにする」のような特殊な要件もあれば、それも教えてください。	
9	運用	どのようにアクセスを制御していますか。次の3点について回答してください。 **質問 1** どのようなユーザーに、どのような範囲で、書き込みなどの処理を許可していますか。 **質問 2** 一般的なユーザーに許可している操作は何ですか。 **質問 3** 匿名ユーザーに許可している操作は何ですか。	**質問 1 の回答** 情報システム部のシステム管理者は、ツリー全体に書き込みができる。部門のシステム管理者は、部門のサブツリーにだけ書き込みができる。 **質問 2 の回答** 自身のデータだけ、読み書きが可能。他人のデータは参照も禁止している。 **質問 3 の回答** 検索だけは可能。	書き込み権に関する情報は、利用者のサーバーに書き込み処理をする可能性がある場合だけ提供してください。	
10	運用	ツリー全体にわたって、ユーザーおよびグループのエントリーの一意性を保証する属性がありますか。	ユーザー：社員番号 グループ：組織コード		
11	運用	エンドユーザーのパスワードの運用は、どのようになっていますか。次の2点について回答してください。 **質問 1** エンドユーザーに、自身のパスワードを変更する権利がありますか。 **質問 2** 定期的にパスワードの変更を求めるルールとなっていますか。	**質問 1 の回答** 変更する権利があり、パスワード変更用のページが存在する。 **質問 2 の回答** 定期的に変更するルールになっており、最後にパスワードを変更してから1か月以上が経過した場合、ログインした直後にパスワード変更画面に遷移する。	セキュリティ上問題のない範囲で回答してください。	
12	運用	異動や退職などによって無効となったユーザーのエントリーをどのように処理していますか。	エントリーは削除せずに残す。ただし、ログインはできない。		

表：LDAP 連携確認シート（利用者用）

No.	カテゴリー	質問内容	回答例	備考	回答
13	運用	グループはどのような目的で使用していますか。 組織の構造にマップされている場合、組織を変更したときのエントリーの変更処理は、どのように行っていますか。	組織構造にマップさせており、半期ごとに一括して作り直す。		

LDAP 連携確認シート（弊社サービスエンジニア用）

弊社サービスエンジニアが使用する質問用シートです。

表：LDAP 連携確認シート（サービスエンジニア用）

No.	カテゴリー	利用者に対する質問の内容	この質問の意図	得られた情報の使用箇所
1	スキーマ	ユーザーおよびグループのエントリーに設定されるオブジェクトクラスは何ですか。 topからすべて教えてください。	ArcSuiteへ同期させるべき属性を明らかにしようとしています。また、一般的なデータであっても、LDAPの標準的な属性でなく、利用者が独自に拡張した属性に設定している場合もあるため、それを調べるのも目的の1つです。	システムプロパティの設定、および同期コマンドの設定ファイルの作成に使用します。
2	スキーマ	ユーザーおよびグループのエントリーに設定される属性には、どのようなものがありますか。	ArcSuiteへ同期させるべき属性を明らかにしようとしています。また、一般的なデータであっても、LDAPの標準的な属性でなく、利用者が独自に拡張した属性に設定している場合もあるため、それを調べるのも目的の1つです。さらに、グループのデータも同期させる場合は、グループのメンバーに使用している属性名についても確認してください。	
3	ディレクトリー構造	ルートからのツリー構造は、どのようになっていますか。 特に、ユーザーおよびグループのエントリーが配置されている位置は、どこですか。	同期対象のコンテナを特定するための質問です。	同期コマンドの設定ファイルの作成に使用します。
4	ディレクトリー構造	ユーザーおよびグループのRDNに使用している属性を教えてください。	同期コマンドによって、RDNに使用している属性は、「同期属性情報ファイル」での指定に関わらず同期対象となりますので、注意が必要です。たとえば、利用者のLDAPで「cn=suzuki」という名前で登録されているユーザーエントリーは、同期コマンドによってArcSuiteでは「uid=suzuki」という名前のユーザーエントリーとしてコピーされます。	同期コマンドの設定ファイルの作成に使用します。
5	ログイン	連携対象のLDAPサーバーの台数を教えてください。	複数のLDAPサーバー連携が必要であるかを確認するための質問です。	システムプロパティの設定に使用します。

表：LDAP 連携確認シート（サービスエンジニア用）

No.	カテゴリー	利用者に対する質問の内容	この質問の意図	得られた情報の使用箇所
6	ログイン	シングルサインオンの枠組みがありますか。 **ある場合** ArcSuiteは、それに従う必要がありますか。 **ない場合** ログインのための統一的な規則はありますか。 (ログインフォームが決まっている、パスワードを使用した認証以外の方法が取られているなどです。)	シングルサインオンのしくみがあって、それに従わなければならないケースや、利用者のセキュリティポリシーによって、ログインについて独自の規則に従わなくてはならないケースでは、単純なLDAP連携の適用は不可能であり、個別対応となります。	特に使用する箇所はありません。
7	ログイン	ログイン名に使用する属性には、どのようなものがありますか。	ArcSuiteでは、ログイン実行時に、入力されたログイン名からユーザーエントリーを検索しますが、その検索キーを明らかにしようとしています。	システムプロパティの設定に使用します。
8	ログイン	ログインの成否を決定するための要件は、何ですか。	「登録されているログイン名とそれに対応するパスワードが正しく入力されること」以外の条件（たとえば「社員であること」のような条件を満たさないとログインできない）が必要であるケースでは、単純なLDAP連携の適用は不可能であり、個別対応となります。	特に使用する箇所はありません。
9	運用	どのようにアクセスを制御していますか。次の3点について回答してください。 **質問 1** どのようなユーザーに、どのような範囲で、書き込みなどの処理を許可していますか。 **質問 2** 一般的なユーザーに許可している操作は何ですか。 **質問 3** 匿名ユーザーに許可している操作は何ですか。	利用者の環境のアクセス制御に関する一般的なポリシーを明らかにしようとしています。ArcSuiteの初期値の設定では、LDAPへのアクセスユーザーは、匿名ユーザーとなります。したがって、匿名ユーザーに検索および読込み権がない場合は、検索および読込み権があるユーザーをアクセスユーザーとして指定する必要があります。(1) はLDAP連携には直接の関係はありません。	システムプロパティの設定、および同期コマンドの設定ファイルの作成に使用します。

表：LDAP 連携確認シート（サービスエンジニア用）

No.	カテゴリー	利用者に対する質問の内容	この質問の意図	得られた情報の使用箇所
10	運用	ツリー全体にわたって、ユーザーおよびグループのエントリーの一意性を保証する属性がありますか。	同期コマンドの最初の実行時に、利用者のLDAPサーバー上のエントリーと、ArcSuiteにコピーされたエントリーの対応を取る必要がありますが、このときに対応付けのために使用できる属性があるかどうかを、明らかにしようとしています。これは、ログイン名に使用する属性と同一でも構いません。もし、一意性が保証される属性が存在しない場合は、同期させるエントリーの範囲を狭める必要があります。	システムプロパティの設定、および同期コマンドの設定ファイルの作成に使用します。
11	運用	エンドユーザーのパスワードの運用は、どのようになっていますか。次の2点について回答してください。 **質問 1** エンドユーザーに、自身のパスワードを変更する権利がありますか。 **質問 2** 定期的にパスワードの変更を求めるルールとなっていますか。	LDAP連携時に利用者のパスワードをArcSuiteのポータルから変更できます。ただし、自身のパスワードを変更する権利がない場合は、ポータルから変更しようとするエラーになるため、あらかじめパスワード変更に関する制約を明らかにしようとしています。また、利用者のLDAPサーバーがActive Directoryの場合は、権利に関わらずポータルからはパスワードを変更できません。	システムプロパティの設定に使用します。
12	運用	異動や退職などによって無効となったユーザーのエントリーをどのように処理していますか。	エントリーが削除されるのであれば、削除されたことを同期コマンドが検知します。ある属性を利用して無効であることを表現している場合、同期コマンドでは解釈できないため、ArcSuiteでエントリーを無効化する必要があります。	特に使用する箇所はありません。
13	運用	グループはどのような目的で使用していますか。 組織の構造にマップされている場合、組織を変更したときのエントリーの変更処理は、どのように行っていますか。	グループのメンバーの変更は問題ありませんが、組織変更に対応するためにグループエントリーを作成し直すような運用の場合、ArcSuiteでグループに対してアクセス権設定をしているときは、変更前のアクセス権設定が無効となるため、再度アクセス権の設定を行う必要があります。	特に使用する箇所はありません。

付録 E.11 バージョンアップ時に設定する LDAP 連携のシステムプロパティ

LDAP連携を設定している環境をバージョンアップする場合、バージョンアップを実行する前にLDAP連携のシステムプロパティを解除する必要があります。また、バージョンアップ後は、LDAP連携のシステムプロパティを再度設定する必要があります。

システムプロパティ名は、バージョンアップ前とバージョンアップ後で異なります。

バージョンアップ前に解除したシステムプロパティの値を、対応するバージョンアップ後のシステムプロパティの値として設定します。

バージョンアップ前に解除が必要なシステムプロパティ名と、対応するバージョンアップ後のシステムプロパティ名は、次のとおりです。

表：バージョンアップ時に解除／設定するシステムプロパティ名

バージョンアップ前に解除するシステムプロパティ	バージョンアップ後のシステムプロパティ
jp.co.fujixerox.rms.auth.authConfigs	com.fujifilm.fb.rms.auth.authConfigs
jp.co.fujixerox.rms.auth.authAdminConfigs	com.fujifilm.fb.auth.authAdminConfigs
jp.co.fujixerox.rms.auth.commandConfig.user	com.fujifilm.fb.auth.commandConfig.user
jp.co.fujixerox.rms.auth.commandConfig.admin	com.fujifilm.fb.rms.auth.commandConfig.admin
jp.co.fujixerox.rms.auth.commandConfig.alias	com.fujifilm.fb.rms.auth.commandConfig.alias
jp.co.fujixerox.rms.auth.authModuleFactory.{構成名}	com.fujifilm.fb.rms.auth.authModuleFactory.{構成名}
jp.co.fujixerox.rms.auth.serverName.{構成名}	com.fujifilm.fb.rms.auth.serverName.{構成名}
jp.co.fujixerox.rms.auth.ldap.serverURI.{構成名}	com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.serverURI.{構成名}
jp.co.fujixerox.rms.auth.ldap.principal.{構成名}	com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.principal.{構成名}
jp.co.fujixerox.rms.auth.ldap.credentials.{構成名}	com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.credentials.{構成名}
jp.co.fujixerox.rms.auth.ldap.userAttrName.{構成名}	com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.userAttrName.{構成名}
jp.co.fujixerox.rms.auth.ldap.baseDN.{構成名}	com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.baseDN.{構成名}
jp.co.fujixerox.rms.auth.ldap.userObjectClass.{構成名}	com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.userObjectClass.{構成名}
jp.co.fujixerox.rms.auth.ldap.groupObjectClass.{構成名}	com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.groupObjectClass.{構成名}
jp.co.fujixerox.rms.auth.ldap.needsAuthDNConversion.{構成名}	com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.needsAuthDNConversion.{構成名}
jp.co.fujixerox.rms.auth.ldap.rmsExtUserMap.{構成名}	com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.rmsExtUserMap.{構成名}
jp.co.fujixerox.rms.auth.ldap.rmsExtGroupMap.{構成名}	com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.rmsExtGroupMap.{構成名}

表：バージョンアップ時に解除／設定するシステムプロパティ名

バージョンアップ前に解除するシステムプロパティ	バージョンアップ後のシステムプロパティ
jp.co.fujixerox.rms.config.allowChangePassword.｛構成名｝	com.fujifilm.fb.rms.config.allowChangePassword.｛構成名｝
jp.co.fujixerox.rms.auth.ldap.userPasswordAttrName.｛構成名｝	com.fujifilm.fb.rms.auth.ldap.userPasswordAttrName.｛構成名｝

付録 F　統合 Windows 認証連携

付録 F.1　統合 Windows 認証連携とは

統合Windows認証連携とは、Windowsにログオンまたはサインインしたユーザーが、ArcSuiteのアプリケーションを使用するときに、再びユーザー名やパスワードを入力することなく利用できる機能です。統合Windows認証連携では、Windowsのログオンユーザーと ArcSuiteのユーザーを、システムプロパティで指定します。初期値では「uid」で対応付けられます。

注記 統合 Windows 認証は、一般の Web サービスにだけ適用されます。認証モードに「統合 Windows 認証」が設定されていても、次のアプリケーションには適用されません。

・管理アプリケーション

・「ArcSuite ドキュメント管理サービス SDK」、「ArcSuite ワークフロー Interface Tool Kit」、「ArcSuite コラボスペース Interface Tool Kit」などのコマンドラインツール

・「ドキュメント管理サービス管理コマンド」、「リソース管理アプリケーション管理コマンド」などのコマンドラインツール

参照 「uid」以外の属性で対応付ける場合、「付録 F.4 統合 Windows 認証連携の設定」の「■ Windows のログオンユーザーと ArcSuite のユーザーの対応付けの設定」（P.455）を参照してください。

付録 F.2　統合 Windows 認証連携の条件

統合Windows認証連携を利用するには、次の条件が必要です。

・サーバーの IIS の設定が、統合 Windows 認証に必要な設定になっている

・クライアントの Internet Explorer の設定が、統合 Windows 認証に必要な設定になっている

参照 Internet Explorer の設定については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「13.1 Internet Explorer の設定」（P.87）を参照してください。

付録 F.3　統合 Windows 認証連携の構成

統合Windows認証連携の構成には、次の2種類があります。

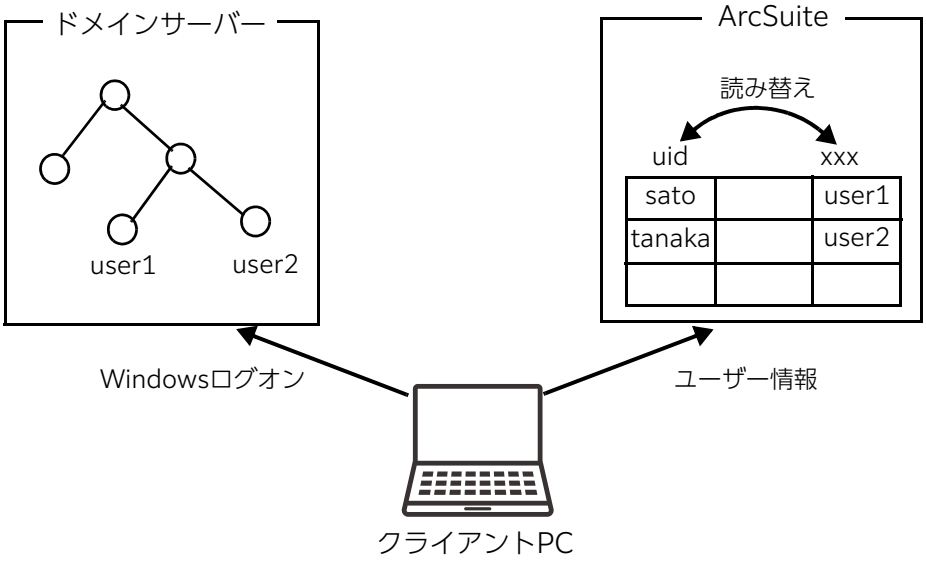
・ユーザーを同期しない構成

・ユーザーを同期する構成

ユーザーを同期しない構成

あらかじめ、統合Windows認証をするドメインのユーザーに対応付けられたユーザーを、ArcSuiteに登録する必要があります。ドメインユーザーのユーザー名とArcSuiteユーザーのログイン名が異なる場合は、さらに読み替えるための対応付けを設定する必要があります。

対応付けられたユーザーが存在しない場合や、複数のユーザーに対応付けられた場合は、ArcSuiteへのログインに失敗します。



図：ユーザーを同期しない統合 Windows 認証連携の構成

ユーザーを同期しない構成を採用するのは、次のようなケースがあります。

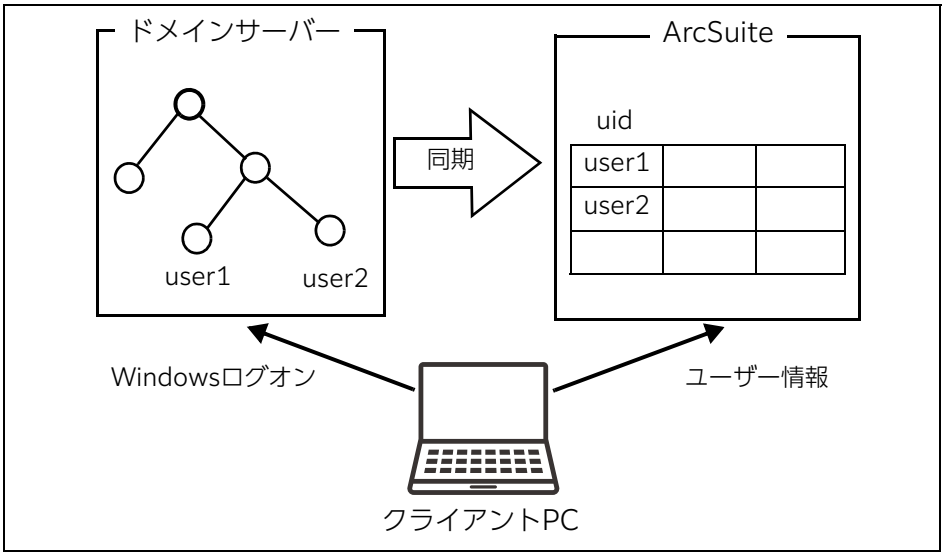
・すでに運用されている ArcSuite の認証モードを、統合 Windows 認証以外から統合 Windows 認証に変更する場合

・統合 Windows 認証連携するドメインサーバーがユーザー管理のマスターサーバーでない場合

「統合Windows認証連携するドメインサーバーがユーザー管理のマスターサーバーでない場合」では、認証はドメインサーバーに対してされ、ユーザーの同期はマスターサーバーからするような運用が想定されます。

ユーザーを同期する構成

同期するときにドメインユーザーに対応するユーザーが作成されるため、あらかじめArcSuiteに登録しておく必要はありません。ただし、ドメインユーザーのユーザー名とArcSuiteユーザーのログイン名が異なるように同期した場合は、同期するとき、または同期したあとで、読み替えるために対応付けの設定をする必要があります。



図：ユーザーを同期する統合 Windows 認証連携の構成

ユーザーを同期する構成を採用するのは、次のようなケースがあります。

・新規に ArcSuite を統合 Windows 認証連携としてインストールする場合

・統合 Windows 認証連携するドメインサーバーが、ユーザー管理のマスターサーバーである場合

付録 F.4 統合 Windows 認証連携の設定

付録 F.4.1 新規に ArcSuite を統合 Windows 認証連携としてインストールする

新規にArcSuiteを統合Windows認証連携としてインストールする場合については、「第1部 オールインワン構成のセットアップ」の「4.1 共通設定」（P.57）を参照してください。

付録 F.4.2 すでに運用されている ArcSuite の認証モードを、統合 Windows 認証以外から統合 Windows 認証に変更する

ここでは、すでにArcSuiteを運用している環境で、ArcSuiteとWindowsの設定を変更する場合の手順について説明します。

注記 すでに統合 Windows 認証で運用されている ArcSuite を、統合 Windows 認証以外の認証モードに変更する場合は、「ArcSuite の設定」（P.455）と「Windows の設定」（P.457）の変更を元に戻すように設定します。「付録 F.4.3 ユーザーの対応付け」（P.458）の手順を実行している場合は、対応付けの設定も削除してください。

ArcSuite の設定

■ Windows のログオンユーザーと ArcSuite のユーザーの対応付けの設定

統合Windows認証するためには、Windowsのログオンユーザーに対応付けられたユーザーがArcSuiteに存在している必要があります。対応付けは、システムプロパティで設定します。この設定を省略した場合、「uid」が使用されます。

1. リソース管理アプリケーションのトップ画面で［プロパティ編集］を選択します。
2. ［システムプロパティ編集］画面で次のプロパティを追加します。
   - キー名：
     com.fujifilm.fb.rms.login.authByWindows.mapAttr
   - 値（Windows のログオンユーザーに対応付ける ArcSuite のユーザーの属性値例）：
     rmsCertDN
3. ［変更］をクリックします。
4. Windows のログオンユーザーと ArcSuite のユーザーを対応付けます。

   参照 Windows のログオンユーザーと ArcSuite のユーザーを対応付ける方法については、「付録 F.4.3 ユーザーの対応付け」（P.458）を参照してください。
5. Windows の［スタート］メニューから、［Windows 管理ツール］＞［サービス］を選択します。
   ［サービス］画面が表示されます。
6. サービスを選択して、［サービスの停止］をクリックします。次の順序で停止します。

(1) ArcSuite DocumentGatheringAgent StorageProxy

(2) ArcSuite DocumentGatheringAgent WebAdmin

(3) ArcSuite DocumentGatheringAgent Register

(4) ArcSuite Capturing Service Admin

(5) ArcSuite Capturing Service

(6) ArcSuite Monitoring Service
(7) ArcSuite Web Application Service
(8) ArcSuite Collabo Service
(9) ArcSuite Repository Service
(10) ArcSuite Repository Master Admin Service
(11) ArcSuite kSearchDuo Service
(12) ArcSuite Full Text Search Service
(13) ArcSuite Basic Service

7. サービスを選択して、[サービスの開始] をクリックします。次の順序で起動します。

(1) ArcSuite Basic Service
(2) ArcSuite Full Text Search Service
(3) ArcSuite kSearchDuo Service
(4) ArcSuite Repository Master Admin Service
(5) ArcSuite Repository Service
(6) ArcSuite Collabo Service
(7) ArcSuite Web Application Service
(8) ArcSuite Monitoring Service
(9) ArcSuite Capturing Service
(10) ArcSuite Capturing Service Admin
(11) ArcSuite DocumentGatheringAgent Register
(12) ArcSuite DocumentGatheringAgent WebAdmin
(13) ArcSuite DocumentGatheringAgent StorageProxy

■ ArcSuite の認証モードの変更

ArcSuiteの認証モードを「統合Windows認証」に変更します。

1. ログインサーバー管理アプリケーションのトップ画面から［パラメータ管理］を選択します。
2. ［パラメータ管理］画面で［認証モード］を「windows」に変更します。
3. ［変更］をクリックします。

Windows の設定

IIS の設定変更

IISの認証方法を統合Windows認証に設定します。
役割Webサーバー（IIS）の役割サービス［Windows 認証］をあらかじめ追加しておきます。

1. Windows の［スタート］メニューから、［Windows 管理ツール］＞［インターネット インフォメーション サービス（IIS）マネージャー］を選択します。
   ［インターネット インフォメーション サービス（IIS）マネージャー］画面が表示されます。
2. ［接続］ツリーから、［{コンピューター名}］＞［サイト］＞［Default Web Site］＞［ArcSuite］を選択します。
   補足 ［Default Web Site］以外の Web サイトに ArcSuite をインストールした場合は、使用した Web サイト名に読み替えてください。
3. ［機能ビュー］で［認証］をダブルクリックします。
   補足 ［コンテンツビュー］が表示されている場合は、［機能ビュー］に切り替えてください。
4. ［Windows 認証］を選択し、右クリックで表示されるショートカットメニューから［有効にする］を選択します。
5. ［接続］ツリーから、［{コンピューター名}］＞［サイト］＞［Default Web Site］＞［ArcSuite］＞［login］を選択します。
6. ［機能ビュー］で［認証］をダブルクリックします。
7. ［匿名認証］を選択し、右クリックで表示されるショートカットメニューから［無効にする］を選択します。
8. ［接続］ツリーから、［{コンピューター名}］＞［サイト］＞［Default Web Site］＞［ArcSuite］＞［login］＞［servlet］＞［GetDNServer］を選択します。
9. ［機能ビュー］で［認証］をダブルクリックします。
10. ［匿名認証］を選択し、右クリックで表示されるショートカットメニューで［有効にする］を選択します。
11. ［接続］ツリーから、［{コンピューター名}］＞［サイト］＞［Default Web Site］＞［ArcSuite］＞［login］＞［servlet］＞［GetKeyServer］を選択します。
12. ［機能ビュー］で［認証］をダブルクリックします。
13. ［匿名認証］を選択し、右クリックで表示されるショートカットメニューで［有効にする］を選択します。
14. ［接続］ツリーから、［{コンピューター名}］＞［サイト］＞［Default Web Site］＞［ArcSuite］＞［jakarta］を選択します。
15. ［機能ビュー］で［認証］をダブルクリックします。
16. ［Windows 認証］の状態が［有効］になっていることを確認します。
    ［無効］になっている場合、［Windows 認証］を選択し、右クリックで表示されるショートカットメニューから［有効にする］を選択します。

ファイルシステムのアクセス権の変更

統合Windows認証で認証済みのユーザーがArcSuiteのアプリケーションにアクセスできるように、ファイルシステムのアクセス権を追加します。

1. Windows フォルダーの［セキュリティ］の設定にグループ「Authenticated Users」を追加します。
2. 追加したグループに読み取り関連の権限を設定します。
   - 対象フォルダー
     「{ArcSuite のインストールフォルダー}¥Service¥Resource¥htdocs¥VirtualTop」
     「{ArcSuite のインストールフォルダー}¥Service¥Components」
     「{ArcSuite のインストールフォルダー}¥Service¥bin¥iis」
   - 設定するグループ
     「Authenticated Users」
   - 設定するアクセス権限
     ［読み取りと実行］、［フォルダ内容の一部表示］、［読み取り］

付録 F.4.3　ユーザーの対応付け

WindowsのログオンユーザーとArcSuiteのユーザーを対応付けるには、次のアプリケーションを利用できます。どちらを利用するかは、対応付けするユーザー数や、運用方針などを考慮して選択してください。

- リソース管理アプリケーション
- リソース管理サービス管理ツール

リソース管理アプリケーションを用いたユーザーの対応付け

リソース管理アプリケーションを使用する方法では、1ユーザーずつ対応付けをします。

この方法は、運用開始後にユーザーの追加があった場合など、少数のユーザーに対して対応付ける場合を想定しています。

1. リソース管理アプリケーションの検索画面で、対応付けるユーザーを検索します。
2. ［検索結果］画面で対応付けるユーザーを選択します。
3. ［編集］をクリックします。
4. ［プロパティ編集］画面で、対応付ける属性に Windows のログオンユーザーのユーザー名を設定します。
5. ［設定］をクリックします。

リソース管理サービス管理ツールを用いたユーザーの対応付け

リソース管理サービス管理ツールを使用する方法では、複数のユーザーに対して一括で対応付けを行えます。この方法は、統合Windows認証連携の運用開始前に、すべてのユーザーに一括して対応付けを行うような場合を想定しています。

1. 対応付けの情報が記述された CSV ファイルを作成します。

   補足 対応付けの属性が「rmsCertDN」の場合の CSV ファイルの例は、次のとおりです。
   - uid,rmsCertDN
   - User1,winUser1
   - User2,winUser2

2. コマンド プロンプトを管理者として起動します。

3. 次のフォルダーに移動します。

   ```
   cd /d {ArcSuite のインストールフォルダー}¥Service¥Components¥RMS¥bin
   ```

   たとえば、「{ArcSuite のインストールフォルダー}」が「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」の場合は、次のように入力します。

   ```
   cd /d D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite¥Service¥Components¥Repository¥
   sample¥admin
   ```

   補足 {ArcSuite のインストールフォルダー} は、インストール時に指定したインストール先のフォルダーです。たとえば、「D:¥Program Files¥FUJIFILM¥ArcSuite」です。

4. 次のコマンドを実行します。

   ```
   rmscsvmodify -rp user "ou=users,dc=systemname" {CSV ファイル名}
   ```

   補足 「"ou=users,dc=systemname"」の部分は、コマンドを実行する環境に応じて変更してください。

付録 F.4.4　統合 Windows 認証連携に必要な設定

ここでは、統合Windows認証連携を行う場合にArcSuiteで必要となる設定について説明します。

ユーザーを同期しない構成

■ 認証モード

ログインサーバー管理アプリケーションで、認証モードに「windows」を設定します。

■ システムプロパティ

表：システムプロパティ

パラメーター名	説明値	省略可（初期値）
com.fujifilm.fb.rms.login.authByWindows.mapAttr	統合Windows認証時に、ユーザーの対応付け対象となる属性の属性ID。ただし、対応付けで指定する属性にはローカライズされたものは指定できない（「cn-lang-ja」など）。	○（uid）

■ ユーザー属性

システムプロパティのキー「com.fujifilm.fb.rms.login.authByWindows.mapAttr」に対応付けている場合は、そのユーザー属性にWindowsのログオンユーザー名を設定します。

ユーザーを同期する構成

■ 認証モード

認証モードについては、「ユーザーを同期しない構成」（P.460）を参照してください。

■ システムプロパティ

システムプロパティについては、「ユーザーを同期しない構成」（P.460）を参照してください。

■ ユーザー属性

ユーザー属性については、「ユーザーを同期しない構成」（P.460）を参照してください。

■ 同期コマンドの設定

同期コマンドの設定については、『システム管理者ガイド』を参照してください。

付録 F.5　トラブルシューティング

エラーが発生したときのメッセージと対応方法を次に示します。

表：トラブルシューティング

現象	原因	対処方法
Windowsの認証画面が表示される。	ユーザーがログオンまたはサインインしているアカウントのドメインが、ArcSuiteが統合Windows認証時にアクセスする（サーバーが参加している）ドメインと同一でない。または、クライアントPCのローカルユーザーでログオンまたはサインインしている。 ArcSuiteサーバーが、ユーザーがログオンまたはサインインしているドメインにアクセスできない。	ArcSuiteを使用するときは、ArcSuiteが統合Windows認証時にアクセスするドメインにログオンまたはサインインします。 ArcSuiteサーバーが、ユーザーがログオンまたはサインインしているドメインにアクセスできるか確認します。

付録 G ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版の単独インストール

ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版のインストール手順を説明します。
ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版は、2台以上の構成のときに、コンポーネントサーバーにだけ追加でインストールできます。

補足 ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版は、ドキュメント管理サービスのインストール時に、リポジトリーサーバーに一緒にインストールされます。

ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版をインストールする

1. コンポーネントサーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. 「ArcSuite 4.0 インストール」インストールメディアを、ドライブにセットします。
3. 「{インストールメディア} :¥Service¥DocumentRepositoryAdminTool¥setup.exe」をダブルクリックします。
   [ArcSuite ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版セットアップへようこそ] 画面が表示されます。
4. [次へ] をクリックします。
   [ユーザー情報] 画面が表示されます。
5. [ユーザー名] および [会社名] を確認します。
6. [次へ] を選択します。
   [インストール先の選択] 画面が表示されます。
7. インストール先のフォルダー名を確認します。
   補足 [参照] をクリックするとインストール先のフォルダーを変更できます。
8. [次へ] をクリックします。
   [データベースのサーバー情報] 画面が表示されます。
9. データベースが稼働しているサーバーの [サーバー名]、[ポート番号]、および [グローバルデータベース名] を確認します。
10. [次へ] をクリックします。
    [データベースの RMS 用ユーザー情報] 画面が表示されます。
11. [ユーザー名] を入力します。ここでは、データベースの RMS 用ユーザー、「rms」を入力します。
12. [パスワード] を入力します。ここでは、「rms」と入力します。
    参照 各コンポーネントのユーザー名およびパスワードについては、各部にある「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「1.3 セットアップ前の設定事項」(P.24)、または「第 2 部 2 台以上の構成へのセットアップ」の「1.3 セットアップ前の設定事項」(P.225)を参照してください。
13. [次へ] をクリックします。
    [ファイルコピーの開始] 画面が表示されます。
14. インストールの内容を確認します。

15. [次へ] をクリックします。
インストールが開始されます。インストールが終了すると、[セットアップの完了] 画面が表示されます。

16. [完了] をクリックします。

ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版のインストールは終了です。

付録 H インストール後に原本性保証オプションの設定内容を変更する手順

インストール後に原本性保証オプションの設定内容を変更する手順は次のとおりです。

1. Windows の［スタート］メニューから、［コントロールパネル］を選択します。
   ［コントロールパネル］画面が表示されます。
2. ［プログラム］の［プログラムのアンインストール］を選択します。
   ［プログラムと機能］画面が表示されます。
3. ArcSuite のアップデートまたは Hotfix を選択し、［アンインストール］をクリックします。

   補足 ArcSuite のアップデートは、［ArcSuite アップデート {バージョン}］と表示されています。また、ArcSuite の Hotfix は、［ArcSuite Hotfix {バージョン}］と表示されています。
   {バージョン} は、バージョン番号です。
4. 手順 3 を繰り返して、すべてのアップデートまたは Hotfix をアンインストールします。
5. 「ArcSuite 4.0 インストール」インストールメディアを、ドライブにセットします。
6. 「{インストールメディア} :¥Service¥ArcSuite¥setup.exe」をダブルクリックします。
7. 画面に表示される指示に従って操作します。
8. メインインストーラーでの入力が完了すると、原本性保証オプションのインストーラーが起動されます。
   設定項目を選択する画面が表示されます。

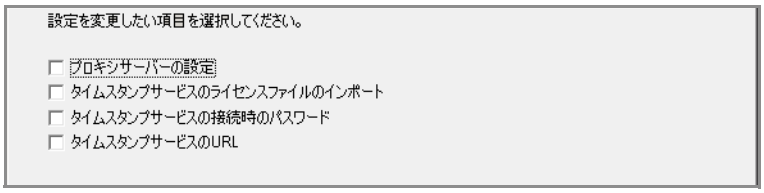


図 :設定項目を選択する画面

9. 設定内容を変更したい項目のチェックボックスにチェックマークを付けます。
10. ［次へ］をクリックします。
    チェックマークを付けた設定項目の画面が表示されます。
11. 以降、画面に表示される指示に従って操作します。
    設定変更が完了すると、［セットアップの完了］画面が表示されます。
12. ［完了］をクリックします。
    メインインストーラーの完了画面が表示されます。
13. ［完了］をクリックします。

原本性保証オプションの設定内容の変更は終了です。

タイムスタンプサービスの変更に必要な情報

タイムスタンプサービスの設定を変更する場合は、次のURLを参照して、タイムスタンプサービスの設定として必要な情報を準備してください。

・アマノタイムスタンプサービス 3161 有償サービス
http://www.e-timing.ne.jp/product/timestamp/characteristic/typet/

補足 ルート証明書などの URL は、2021 年 4 月現在のものです。

表：タイムスタンプサービスの設定として必要な情報

種類	説明
ライセンスファイル	タイムスタンプサービスへ接続するときに使用するライセンスファイルを入手します。
パスワード	タイムスタンプサービスへ接続するときに使用するパスワードを入手します。
接続先 URL	接続するタイムスタンプサービスのURLを確認します。
TSA 証明書のトラストアンカー（ルート証明書）	タイムスタンプの検証で使用されるTSAの証明書のトラストアンカーを入手します。 有償サービス用のリポジトリー https://repository.secomtrust.net/SC-Root2/SCRoot2ca.cer

注記 適切なタイムスタンプサービスを利用することは、文書を保存する上で、大変重要です。設定を変更したあとは、次の操作を必ず実行してください。

・証明書格納用キャビネットに正しい TSA 証明書だけを保存する

・タイムスタンプ付与が可能であることを確認する

付録 I　インストール後にデータベースの最大接続数を変更する手順

インストール後にデータベースの最大接続数を変更する手順は次のとおりです。

1. サーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. ArcSuite 4.0 のデータベースのインストールメディアを、ドライブにセットします。
3. 「{インストールメディア} :¥tool¥setup.exe」をダブルクリックします。
   [[データベース設定ツールへようこそ] 画面が表示されます。
4. データベース設定ツールで、データベースの最大接続数を設定します。

   参照 データベース設定ツールの操作については、「第 1 部 オールインワン構成のセットアップ」の「3.1.2 データベースインストーラー」（P.50）の手順 23 ～ 35 を参照してください。

付録 J　OS が英語版のサーバーに必要な設定

Windows Server 2016 英語版またはWindows Server 2019 英語版にArcSuiteをインストールする場合、Windowsの設定をする前に、次の設定をする必要があります。なお、これらのOSのサーバーが複数ある場合、すべてのサーバーで設定します。

・Microsoft .NET Framework 3.5 のインストール
・タイムゾーンの変更
・日本語の言語パックの適用
・設定言語の変更
・「コードページ」が日本語（932）に設定されていることの確認
・「.admx エラー」を回避する更新プログラムの適用（Windows Server 2016 英語版のみ）

注記　ArcSuite のすべてのサーバーで、「日付と時刻」に同じ値を設定してください。

付録 J.1　Microsoft .NET Framework 3.5 のインストール

Microsoft .NET Framework 3.5をインストールします。

補足　・OS が 英語版のサーバーに日本語の言語パックを適用すると、ArcSuite をセットアップするときに Microsoft .NET Framework 3.5 のインストールに失敗することがあります。その問題を回避するため、事前に Microsoft .NET Framework 3.5 をインストールします。詳細は、次の URL で公開されている情報を参照してください。
https://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/5a4x27ek(v=vs.110).aspx
URL は、2021 年 4 月現在のものです。
・環境によって Microsoft .NET Framework 3.5 のインストールに時間がかかることがあります。

1. ArcSuite をインストールするサーバーに、Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
2. Windows の［Start］を右クリックし、［Control Panel］を選択します。
3. ［Programs］をクリックし、［Turn Windows features on or off］をクリックします。
［Add Roles and Features Wizard］が表示されます。
4. ［Next］をクリックし、［Select features］画面の表示まで進みます。
5. ［Features］で、一覧から［.NET Framework 3.5 Features］にチェックマークを付けます。
6. ［Next］をクリックします。
7. ［Restart the destination server automatically if required］にチェックマークを付けます。

   補足　画面上部に「Do you need to specify an alternate source path? ...（以下略）」というメッセージが表示された場合は、OS のインストールメディアが必要です。
   OS のインストールメディアをドライブにセットしたあと、［Specify an alternate source path］をクリックし、［Path］に「{OS のインストールメディア}¥Sources¥sxs」を入力してください。

8. ［Yes］をクリックします。
9. ［Install］をクリックします。
インストールが完了したら、自動で OS が再起動されます。

   補足　[Restart the destination server automatically if required] にチェックマークを付けなかった場合、OS を再起動します。

続いて、「付録J.2 タイムゾーンの変更」（P.467）に進みます。

付録 J.2　タイムゾーンの変更

日本のタイムゾーンである「大阪、札幌、東京」が設定されていない場合、タイムゾーンを変更します。

1. Windows の［Start］を右クリックし、［Control Panel］を選択します。
2. ［Clock, Language, and Region］の［Date and Time］をクリックします。
   ［Date and Time］画面が表示されます。
3. ［Time zone］が［(UTC+09:00) Osaka, Sapporo, Tokyo］に設定されていない場合、タイムゾーンを日本に変更します。

(1) ［Change time zone］をクリックします。

(2) 一覧から［(UTC+09:00) Osaka, Sapporo, Tokyo］を選択し、［OK］をクリックします。

(3) ［OK］をクリックします。

続いて、「付録J.3 日本語の言語パックの適用」（P.467）に進みます。

付録 J.3　日本語の言語パックの適用

日本語の言語パックを適用します。

1. Windows の［Start］を右クリックし、［Control Panel］を選択します。
2. ［Clock, Language, and Region］の［Add a language］をクリックします。
   ［language］画面が表示されます。
3. 日本語を追加します。［日本語］が表示されている場合、手順 4 に進みます。

(1) ［Add a language］をクリックします。

(2) ［日本語］を選択し、［Add］をクリックします。
   ［日本語］が追加されます。

4. ［日本語］の［Options］をクリックします。
5. language pack をインストールします。［Make this primary language］が表示されている場合、手順 6 に進みます。

(1) ［Download and install language pack］をクリックします。
   インストールが完了すると、［Installation Complete］画面が表示されます。

   補足　画面が表示されるまでに時間がかかることがあります。

(2) ［Close］をクリックします。

6. 日本語で表示するように設定します。

(1) 日本語の［Options］をクリックし、［Windows display language］の［Make this the primary language］をクリックします。
   ［Change display language］画面が表示されます。

(2) ［Log Off now］をクリックします。
   サインアウトされます。

7. 再度、サーバーに Administrator 権限を持つユーザーでサインインします。
8. サーバーのメニューなどが日本語で表示されていることを確認します。

続いて、「付録J.4 設定言語の変更」（P.468）に進みます。

付録 J.4　設定言語の変更

設定言語を日本語に変更します。

1. Windows の［スタート］メニューから、［コントロールパネル］を選択します。
   ［コントロールパネル］画面が表示されます。
2. ［時計、言語、および地域］＞［地域］の順でクリックします。
3. ［形式］タブで、［形式］プルダウンメニューから［日本語（日本）］を選択し、［適用］をクリックします。
4. ［場所］タブで、［主な使用場所］プルダウンメニューから［日本］を選択し、［適用］をクリックします。
5. ［管理］タブで、［設定のコピー］をクリックします。
   ［ようこそ画面と新しいユーザー アカウントの設定］画面が表示されます。
6. ［現在のユーザー］が、次のように表示されていることを確認します。
   ・表示言語：日本語
   ・入力言語：日本語 (日本)
   ・形式：日本語 (日本)
   ・場所：日本
7. ［現在の設定のコピー先］欄で、次の項目にチェックマークを付けて［OK］をクリックします。
   ・［ようこそ画面とシステムアカウント］
   ・［新しいユーザーアカウント］

   注記 ［表示言語の変更］画面が表示された場合は［キャンセル］をクリックし、サインアウトや再起動をしないでください。
8. システムロケールを日本語に変更します。

(1) ［管理］タブの［システムロケールの変更］をクリックします。

(2) ［現在のシステムロケール］プルダウンメニューから［日本語（日本）］を選択し、［OK］をクリックします。
   ［システム ロケール変更］画面が表示されます。

9. ［今すぐ再起動］をクリックします。
   画面が表示されなかった場合は、［地域］画面を閉じてから OS を再起動します。
10. OS が再起動したあと、［サインイン］画面などが日本語で表示されていることを確認します。

続いて、「付録J.5 「コードページ」が日本語（932）に設定されていることの確認」（P.469）に進みます。

付録 J.5 「コードページ」が日本語（932）に設定されていることの確認

ドキュメント管理サービスのイベントトリガーやワークフローで使用する外部コマンドが正常に動作するために、「コードページ」と呼ばれる文字集合が日本語（932）に設定されていることを確認します。

1. Windows の［スタート］メニューから、［Windows システムツール］＞［コマンドプロンプト］を右クリックし、［その他］＞［管理者として実行］を選択します。
［管理者：コマンド プロンプト］画面が表示されます。

2. 次のコマンドを入力して、<Enter> キーを押します。

```
chcp
```

3. 次のように、「932」が表示されることを確認します。

```
現在のコード ページ： 932
```

4. コマンドプロンプトを閉じます。

Windows Server 2016 英語版の場合は、続いて「付録J.6 「.admxエラー」を回避する更新プログラムの適用（Windows Server 2016英語版のみ）」（P.469）に進みます。
Windows Server 2019 英語版の場合は、「第1部 オールインワン構成のセットアップ」の「2.1.2 Windowsのサービス起動ユーザーの設定」（P.38）に進みます。

付録 J.6 「.admx エラー」を回避する更新プログラムの適用（Windows Server 2016 英語版のみ）

Windows Server 2016英語版の場合は、データベースのインストールでローカルグループポリシーエディターを設定するときにエラーが発生しないように、Windowsの更新プログラム「KB4053579」以降の累積的な更新プログラムを適用します。

注記 「付録 J.3 日本語の言語パックの適用」（P.467）を適用した場合でも、「KB4053579」以降の累積的な更新プログラムを適用し直してください。

補足 この回避策は、次のページで公開されている情報から引用しています。
https://support.microsoft.com/ja-jp/help/3049255/admx-errors-when-running-local-group-policy-editor-gpedit-msc-in-wind
URL は、2021 年 4 月現在のものです。

参照 「KB4053579」については、次のページを参照してください。
https://support.microsoft.com/ja-jp/help/4053579/windows-10-update-kb4053579
URL は、2021 年 4 月現在のものです。

Windows Server 2016 英語版のための設定が終了したら、「第1部 オールインワン構成のセットアップ」の「2.1.2 Windowsのサービス起動ユーザーの設定」（P.38）に進みます。

付録 K　Windows の互換性に関する注意・制限事項

付録 K.1　ユーザーアカウント制御（UAC）に関する設定について

動作環境としてサポートしているWindowsのOSの中には、セキュリティ機構として、ユーザーアカウント制御（以降、「UAC」と表記します）を提供するものがあります。

これは、管理者グループに属するユーザーであっても、通常は一般ユーザーの権限で実行し、管理者権限での実行が必要な場合に警告を促す機構です。

参照 詳細は、次の Microsoft 社のページを参照してください。URL は、2021 年 4 月現在のものです。

・『ユーザーアカウント制御』 http://technet.microsoft.com/ja-jp/library/cc772207(WS.10).aspx

・『Windows ユーザーアカウント制御手順ガイド』 http://technet.microsoft.com/ja-jp/library/cc709691(WS.10).aspx

ArcSuiteが提供するコマンドを実行するときにも、UACに制御されます。

UAC管理下でコマンドを実行するときは、次のような方法をとります。運用やセキュリティーポリシーに応じて方法を選択してください。

方法	対応策	利点	問題点
管理者として実行する1	実行するときに右クリックで表示されるショートカットメニューから、[管理者として実行] を選択します。	特に必要な設定はありません。	毎回選択する必要があります。
管理者として実行する2	実行ファイルのプロパティ画面を開き、[特権レベル] ＞ [管理者としてこのプログラムを実行する] をチェックします。	一度設定すると、以後、設定は不要です。	各実行ファイルに設定する必要があります。 バッチファイルには設定できません。
互換モードを利用する	実行ファイルのプロパティ画面を開き、[互換モード] ＞ [互換モードでこのプログラムを実行する] をチェックします。	一度設定すると、以後設定は不要です。 バッチファイルにも設定できます。	各実行ファイルに設定する必要があります。
UACを無効にする	使用OSの設定方法を確認してください。	本製品のコマンド以外でも、UACにより起動時の制御を受けなくなります。	セキュリティ対策の機能が無効になります。
UACをユーザー単位で無効にする	使用OSの設定方法を確認してください。	設定したユーザーに関して、本製品のコマンドを含み、UACによる起動時の制御を受けなくなります。	設定ユーザーに対して、セキュリティ対策の機能が無効になります。

補足 「管理者として実行する 1」、「管理者として実行する 2」、および「互換モードを利用する」で、コマンド自体が Web ブラウザーから参照できない場合や、「管理者として実行する 2」をバッチファイルに設定したい場合は、次のような対処方法があります。

・コマンド プロンプト（cmd.exe）を管理者として実行する。

・管理者（Administrator ユーザーなど、UAC の制御を受けないユーザー）でログオンまたはサインインし、実行したいコマンド（バッチファイル可）のショートカットを作成する。作成したショートカットのプロパティ画面を開き、「管理者として実行する 2」、または「互換モードを利用する」の設定を行う。

付録 L Windows のファイアウォール機能に対する設定内容

Windowsには、「セキュリティが強化されたWindowsファイアウォール」機能があります。
ArcSuiteのインストーラーは、Windowsのファイアウォールサービスが稼動している場合、「セキュリティが強化されたWindowsファイアウォール」機能に対して、必要な設定を自動的に行います。ここでは、その設定内容について説明します。

補足 ・Windows のファイアウォールサービスが停止している場合は、設定する必要はありません。
・ファイアウォール機能を利用する場合は、『ポート番号の設定手順』を参照して、必要なポートを開放してください。

付録 L.1 「セキュリティが強化された Windows ファイアウォール」に対する設定

「セキュリティが強化されたWindowsファイアウォール」は、送受信全体の拒否/許可、個々の通信を拒否/許可する規則を登録することで設定をします。

表：「セキュリティが強化された Windows ファイアウォール」の挙動と設定方法

通信の向き	初期値の挙動	設定方法
受信	すべて拒否	「規則」を登録することで、受信の許可または拒否を設定できます。
送信	すべて許可	「規則」を登録することで、送信の許可または拒否を設定できます。

表：「セキュリティが強化された Windows ファイアウォール」の挙動と設定方法

通信の向き	初期値の挙動	設定方法
受信	すべて拒否	「規則」を登録することで、受信の許可または拒否を設定できます。
送信	すべて許可	「規則」を登録することで、送信の許可または拒否を設定できます。

補足 「規則」には、プログラムとポートのどちらも指定可能です。ArcSuite のインストーラーでは、ポートを指定する場合には、プログラムの指定はせずに「規則」を登録します。プログラムを指定する場合には、ポートは指定せずに「規則」を登録します。

参照 ArcSuite のインストーラーにより登録される「例外」については、「付録 L.2 登録される「例外」、「規則」一覧」(P.473)を参照してください。

次に、ArcSuiteのインストーラーが「規則」に指定する値を説明します。

表：インストーラーが登録する「規則」の設定値

規則のタイプ［ポート/プログラム］	設定区分	項目名	設定値（斜体：「規則」ごとに異なる値 太字：「規則」で共通の値）
ポート	全般	名前	{プログラムごとの説明}
		説明	{プログラムごとの説明}（名前と同じ値）
		操作	**接続を許可する**
	プログラムおよびサービス	プログラム	**指定なし**
		サービス	**指定なし**
	リモートコンピューター	承認されているコンピューター	**指定なし**
		例外	**指定なし**
	プロトコルおよびポート	プロトコルの種類	**TCP**
		ローカルポート	{プログラムごとのポート}
		リモートポート	{プログラムごとのポート}
ポート	スコープ	ローカルIPアドレス	**任意の IP アドレス**
		リモートIPアドレス	**任意の IP アドレス**
	詳細設定	プロファイル	**すべてのプロファイル**
		インターフェイスの種類	**指定なし**
		エッジ トラバーサル	**指定なし**
プログラム	全般	名前	{プログラムごとの名前}
		説明	{プログラムごとの説明}（名前と同じ値）
		操作	**接続を許可する**
	プログラムおよびサービス	プログラム	{プログラムごとのパス}
		サービス	**指定なし**
	リモートコンピューター	承認されているコンピューター	**指定なし**
		例外	**指定なし**
	プロトコルおよびポート	プロトコルの種類	**TCP**
		ローカルポート	**すべてのポート**
		リモートポート	**すべてのポート**
	スコープ	ローカルIPアドレス	**任意の IP アドレス**
		リモートIPアドレス	**任意の IP アドレス**
	詳細設定	プロファイル	**すべてのプロファイル**
		インターフェイスの種類	**指定なし**
		エッジ トラバーサル	**指定なし**

付録 L.2 登録される「例外」、「規則」一覧

ArcSuiteのインストーラーがWindowsのファイアウォール機能に対して登録する、「例外」または「規則」について説明します。

付録 L.2.1 ポートを指定して登録される「例外」、「規則」の一覧

表 :インストーラーが登録するポート指定の「規則」、「例外」一覧

インストーラー名	名前	ポート番号	「例外」または「規則」の設定条件
データベース インストーラー	Database Port	データベースインストーラーの［ポート番号］ 固定値:1521	データベースをインストールするとき
メイン インストーラー	ArcSuite HTTP Port	次のどれか **SSL 構成が［SSL を使用しない］/［HTTP サービスに直接 SSL を設定する］場合** ［HTTPサービスの情報］画面の［ポート番号］入力値（初期値:80/443） **負荷分散構成の場合** ［HTTPサービスのサービス間通信ポート番号］画面の［ポート番号］入力値（初期値:81）	ドキュメントスペースなどWebアプリケーションをインストールするとき
	ArcSuite Application Port	SSL構成が［HTTPサービスに直接SSLを設定する］場合の、［HTTPサービスのサービス間通信ポート番号］画面の［ポート番号］入力値（初期値:80）	SSLの構成で「HTTPサービスに直接SSLを設定する」のとき

付録 L.2.2　プログラムを指定して登録される「例外」、「規則」の一覧

表：インストーラーが登録するプログラム指定の「規則」、「例外」一覧

インストーラー名	名前	プログラムのパス	「例外」または「規則」の設定条件
メインインストーラー	ArcSuite Basic Service	{ArcSuiteのインストールフォルダー}¥Service¥bin¥ArsBasic.exe	基本サービスをインストールするとき
	ArcSuite Collabo Service	{ArcSuiteのインストールフォルダー}¥Service¥bin¥ArsClbSvc.exe	コラボスペースをインストールするとき
	ArcSuite Full Text Search Service	{ArcSuiteのインストールフォルダー}¥Service¥bin¥ArsFts2.exe	基本サービスをインストールするとき
	ArcSuite kSearchDuo Service	{ArcSuiteのインストールフォルダー}¥Service¥bin¥ArsKSP.exe	関連文書検索をインストールするとき
	ArcSuite Repository Master Service	{ArcSuiteのインストールフォルダー}¥Service¥bin¥ArsDAdm.exe	ドキュメント管理サービス管理サーバーをインストールするとき
	ArcSuite Repository Slave Service	{ArcSuiteのインストールフォルダー}¥Service¥bin¥ArsDAdm.exe	ドキュメント管理サービススレーブ管理サーバーをインストールするとき
メインインストーラー	ArcSuite Repository Service	{ArcSuiteのインストールフォルダー}¥Service¥bin¥ArsDRep.exe	ドキュメント管理サービスリポジトリーサーバーをインストールするとき
	ArcSuite Web Application Service	{ArcSuiteのインストールフォルダー}¥Service¥bin¥ArsWebApp.exe	ドキュメントスペースなどWebアプリケーションをインストールするとき
キャプチャリングサービス インストーラー	-	-	-
統合検索サービス インストーラー	ArcSuite DocumentGatheringAgent Register	{ArcSuiteのインストールフォルダー}¥Client¥DocumentGatheringAgent¥bin¥ArsReg.exe	統合検索サービスをインストールするとき
	ArcSuite DocumentGatheringAgent StorageProxy	{ArcSuiteのインストールフォルダー}¥Client¥DocumentGatheringAgent¥bin¥ArsStrge.exe	ストレージプロキシサービスをインストールするとき
	ArcSuite DocumentGatheringAgent WebAdmin	ArcSuiteのインストールフォルダー}¥Client¥DocumentGatheringAgent¥bin¥ArsGAAdm.exe	統合検索サービスをインストールするとき
ドキュメント管理サービス SDK インストーラー	ArcSuite Document Management Service SDK	{ArcSuiteのインストールフォルダー}¥Tool¥dRepTools\Java¥jre¥bin¥java.exe	ドキュメント管理サービスSDKをインストールするとき

表 :インストーラーが登録するプログラム指定の「規則」、「例外」一覧

インストーラー名	名前	プログラムのパス	「例外」または「規則」の設定条件
コラボサービス IFTK インストーラー	ArcSuite CollaboSpace Interface Toolkit	{ArcSuiteのインストールフォルダー} ¥Tool¥CollaboIFTK¥Java¥jre¥bin¥java.exe	コラボスペースIFTKをインストールするとき
ワークフロー IFTK インストーラー	-	-	-

付録 M コンポーネントとサービスの関係

ArcSuiteでインストールしたコンポーネントとWindowsのサービスとの関係は次のようになります。

オールインワン構成の場合

補足 *は、お使いの商品構成によって提供されないことがあります。

サーバーの種類	インストーラーの［インストールする機能］で選択した項目	サービス
ArcSuite サーバー	ファイルフォーマット変換サービス	ArcSuite Basic Service
	ドキュメントレビューオプション*	
	メッセージ通知サービス	
	ドキュメント管理サービス	ArcSuite Repository Service
		ArcSuite Repository Master Admin Service
	ドキュメントスペース	ArcSuite Web Application Service
	分類ビュー*	
	コラボスペース* ドキュメントレビューオプション*	
	ワークフロー*	
	原本性保証オプション*	
	全文検索サービス	ArcSuite Full Text Search Service
	関連文書検索サービス*	ArcSuite kSearchDuo Service
	ファイルフォーマット変換サービス	Fx Doc Conv Helper
		DocuWorks Print Service
	コラボスペース*	ArcSuite Collabo Service
	(必ずインストールされる項目)	ArcSuite Monitoring Service
		OracleJobScheduler {SID}
		OracleOraDB19Home1MTSRecoveryService
		OracleOraDB19Home1TNSListener
		OracleRemExecServiceV2
		OracleService {SID}
		OracleVSSWriter {SID}

サーバーの種類	インストーラーの［インストールする機能］で選択した項目	サービス
外部連携サーバー	キャプチャリングサービス*	ArcSuite Capturing Service
		ArcSuite Capturing Service Admin
	統合検索サービス*	ArcSuite DocumentGatheringAgent Register
		ArcSuite DocumentGatheringAgent WebAdmin
		ArcSuite DocumentGatheringAgent StorageProxy

2 台構成の場合

補足 *は、お使いの商品構成によって提供されないことがあります。

サーバーの種類	インストーラーの［インストールする機能］で選択した項目	サービス
コンポーネントサーバー	ファイルフォーマット変換サービス	ArcSuite Basic Service
	ドキュメントレビューオプション*	
	メッセージ通知サービス	
	ドキュメントスペース 分類ビュー*	ArcSuite Web Application Service
	コラボスペース* ドキュメントレビューオプション*	
	ワークフロー*	
	原本性保証オプション*	
	全文検索サービス	ArcSuite Full Text Search Service
	関連文書検索サービス*	ArcSuite kSearchDuo Service
	ファイルフォーマット変換サービス	Fx Doc Conv Helper
		DocuWorks Print Service
	コラボスペース*	ArcSuite Collabo Service
	(必ずインストールされる項目)	ArcSuite Monitoring Service

サーバーの種類	インストーラーの［インストールする機能］で選択した項目	サービス
リポジトリーサーバー	ドキュメント管理サービス	ArcSuite Repository Service
		ArcSuite Repository Master Admin Service
	(必ずインストールされる項目)	ArcSuite Monitoring Service
		OracleJobScheduler｛SID｝
		OracleOraDB19Home1MTSRecoveryService
		OracleOraDB19Home1TNSListener
		OracleRemExecServiceV2
		OracleService｛SID｝
		OracleVSSWriter｛SID｝
外部連携サーバー	キャプチャリングサービス*	ArcSuite Capturing Service
		ArcSuite Capturing Service Admin
	統合検索サービス*	ArcSuite DocumentGatheringAgent Register
		ArcSuite DocumentGatheringAgent WebAdmin
		ArcSuite DocumentGatheringAgent StorageProxy

補足 ｛SID｝は、データベースをインストールしたときに、［データベースのサーバー情報］画面で「グローバルデータベース名」に入力した値から、最初の「．（ピリオド）」までの値です。「．（ピリオド）」がない場合は、入力したグローバルデータベース名がそのまま表示されます。たとえば、「server1.example.com」と入力すると、｛SID｝には「SERVER1」と表示されます。

付録 N インストーラーの初期値

インストーラー	画面	入力項目	初期値
データベース インストーラー	使用許諾契約	-	使用許諾契約の条項に同意しません
	インストール先の選択	インストール先	{最大空容量のドライブ} :¥Database
	データファイルの配置先の 選択	データファイルの配置先	{インストール先と同じドライブ} :¥Database¥ datafiles
	データベースのサーバー情報	サーバー名	{ホスト名} のFQDN表示
		グローバルデータベース名	{ホスト名} のFQDN表示
	データベースの管理者パスワードの設定	パスワード	未設定
		パスワード確認	未設定
	データベースの最大接続数 算出方法の選択	-	標準
	設置パターンと設置構成の選択	ロードバランス	ロードバランス無し
		設置構成（ロードバランス無しの場合）	All in One 構成
		設置構成（ロードバランス有りの場合）	3台構成
	サーバー情報の設定	コンポーネントサーバー兼リポジトリーサーバーの台数	「ロードバランス無し」+「All in One構成」の場合 「1」（変更不可） 「ロードバランス無し」+「2台構成」の場合 「0」（変更不可） 「ロードバランス無し」+「3台構成」の場合 「0」（変更不可） 「ロードバランス無し」+「その他」の場合 「0」（変更可） 「ロードバランス有り」+「3台構成」の場合 「0」（変更不可） 「ロードバランス有り」+「4台構成（コンポーネントサーバー ×2）」の場合 「0」（変更不可） 「ロードバランス有り」+「4台構成（コンポーネントサーバー ×3）」の場合 「0」（変更不可） 「ロードバランス有り」+「5台構成」の場合 「0」（変更不可） 「ロードバランス有り」+「その他」の場合 「0」（変更可）

インストーラー	画面	入力項目	初期値
データベース設定ツール	サーバー情報の設定	リポジトリーサーバーの台数	「ロードバランス無し」+「All in One構成」の場合 「0」(変更不可) 「ロードバランス無し」+「2台構成」の場合 「1」(変更不可) 「ロードバランス無し」+「3台構成」の場合 「2」(変更不可) 「ロードバランス無し」+「その他」の場合 「1」(変更可) 「ロードバランス有り」+「3台構成」の場合 「1」(変更不可) 「ロードバランス有り」+「4台構成（コンポーネントサーバー ×2)」の場合 「2」(変更不可) 「ロードバランス有り」+「4台構成（コンポーネントサーバー ×3)」の場合 「1」(変更不可) 「ロードバランス有り」+「5台構成」の場合 「2」(変更不可) 「ロードバランス有り」+「その他」の場合 「1」(変更可)
		コンポーネントサーバーの台数	「ロードバランス無し」+「All in One構成」の場合 「0」(変更不可) 「ロードバランス無し」+「2台構成」の場合 「1」(変更不可) 「ロードバランス無し」+「3台構成」の場合 「1」(変更不可) 「ロードバランス無し」+「その他」の場合 「1」(変更可) 「ロードバランス有り」+「3台構成」の場合 「2」(変更不可) 「ロードバランス有り」+「4台構成（コンポーネントサーバー ×2)」の場合 「2」(変更不可) 「ロードバランス有り」+「4台構成（コンポーネントサーバー ×3)」の場合 「3」(変更不可) 「ロードバランス有り」+「5台構成」の場合 「3」(変更不可) 「ロードバランス有り」+「その他」の場合 「2」(変更可)

インストーラー	画面	入力項目	初期値
データベース設定ツール	データベースのコンポーネント情報	コラボスペース	使用しない
		ドキュメントレビューオプション	使用しない
		ワークフロー	使用しない
		原本性保証オプション	使用する
	ドキュメント管理サービスの利用情報の設定	作成予定のキャビネット数	20
		リポジトリーサーバーの最大セッション数	100
		追加リポジトリーサーバーの最大セッション数	0
	統合検索サービスの設置情報	統合検索サービスの設置数	0
	データベースの最大接続数の設定	最大接続数（標準の場合）	270
		最大接続数（カスタムの場合）	{それまでの入力情報の計算結果}
メインインストーラー	使用許諾契約	-	使用許諾契約の条項に同意しません
	ユーザー情報	ユーザー名	{Windowsのユーザー名}
		会社名	{Windowsの会社名}
	モード選択	-	簡易モード
	インストール先の選択	インストール先のフォルダ	{プログラムファイルフォルダーのパス}￥FUJIFILM¥ArcSuite
	データ格納先の選択	データ格納先	{Windowsのシステムフォルダーのあるドライブ}￥ArcSuite
	データベースのサーバー情報	サーバー名	{ホスト名}のFQDN表示
		ポート番号	1521
		グローバルデータベース名	未設定
	データベースの管理者情報	ユーザー名	system
		パスワード	未設定
	データベースのRMS用ユーザー情報	ユーザー名	rms
		パスワード	未設定
		パスワード確認	未設定

インストーラー	画面	入力項目	初期値
メイン インストーラー	データファイルの配置先	データファイルの配置先	{SYSTEMデータファイルの配置先}
	データベースのRMS用表領域作成	表領域名	rms
		データファイル名	rms.dbf
	データベースのRMS参照専用ユーザー登録	ユーザー名	rmsclient
		パスワード	未設定
		パスワード確認	未設定
	RMSのシステム名	システム名	未設定
		システムID	未設定
	RMSの管理者ユーザー登録	ユーザー名	未設定
		パスワード	未設定
		パスワード確認	未設定
	RMSの管理者ユーザーの表示名 RMSの管理者に設定するユーザーロール	表示名（JA）	未設定
		表示名（EN）	未設定
		ユーザーロール名	未設定
		表示名（JA）	未設定
		表示名（EN）	未設定
	コンピュータのホスト名	ホスト名	{ホスト名} のFQDN表示
	コンピュータの設置場所	設置場所（JA）	未設定
		設置場所（EN）	未設定
	サービス起動ユーザー情報	ユーザー名	ARCUSRSVC
		パスワード	未設定
		パスワード確認	未設定
	サービス起動ユーザーの グループ情報	グループ名	ARCGRPSVC
	SSL構成の選択	-	SSLを使用しない
	HTTPサービスの情報	ホスト名	{フルコンピュータ名}
		ポート番号	80
		仮想ディレクトリー名	ArcSuite
	アクセス制御情報	-	以下のホストからのアクセスのみ受け付ける
		-	「コンピューターのIPアドレス」が選択されている
	ログイン方法の選択	-	自動ログインを使用する

インストーラー	画面	入力項目	初期値
メイン インストーラー	データベースのポータル用 表領域作成	表領域名	PORTAL_TBS
		データファイル名	PORTAL_TBS.dbf
	データベースのポータル用ユーザー作成	ユーザー名	PORTAL
		パスワード	未設定
	データベースのポータル用ユーザー作成	パスワード確認	未設定
	RMIレジストリサービスのポート番号	ポート番号	11099
	ログ管理サービスのポート番号	ポート番号	11102
ドキュメント管理サービス インストーラー	サービスIDの登録	サービスID	ドメイン無しの {ホスト名}
	サーバー IDの登録	サーバー ID	ドメイン無しの {ホスト名}
	ユーザー定義属性の名前空間登録	名前空間	user
	データベースのサーバー情報	サーバー名	{メインインストーラーの入力値}
		ポート番号	{メインインストーラーの入力値}
		グローバルデータベース名	{メインインストーラーの入力値}
	データベースの管理者情報	ユーザー名	SYSTEM
		パスワード	未設定
	データファイルの配置先	データファイルの配置先	{SYSTEMデータファイルの配置先}
	データベースのドキュメント管理サービス用表領域作成	表領域名	DREPSYS
		データファイル名	DREPSYS.dbf
	データベースのドキュメント管理サービス用一時表領域作成	一時表領域名	DREPTEMP
		データファイル名	DREPTEMP.dbf
	データベースのドキュメント管理サービス用ユーザー作成	ユーザー名	DREP
		パスワード	未設定
		パスワード確認	未設定
	管理サーバーの情報	ポート番号	11100
	リポジトリーサーバーの情報	ポート番号	11101
メッセージ通知サービス インストーラー	SMTPサーバー情報	ホスト名	未設定
		ポート番号	25
	管理者のメールアドレス情報	メールアドレス	未設定

インストーラー	画面	入力項目	初期値
メッセージ通知サービス インストーラー	データベースのメッセージ通知サービス用表領域作成	表領域名	cmessage
		データファイル名	cmessage.dbf
	データベースのメッセージ通知サービス用ユーザー作成	ユーザー名	cmuser
		パスワード	未設定
		パスワード確認	未設定
	ドキュメント管理サービスのメッセージ通知サービス用キャビネット作成	サービスID	{ドキュメント管理サービスインストーラーで入力されたサービスID} (変更可)
		管理者ユーザー名	未設定
		ストレージパス	未設定
ドキュメントスペース インストーラー	データベースのドキュメントスペース用表領域作成	表領域名	eappli
		データファイル名	eappli.dbf
	データベースのドキュメントスペース用ユーザー作成	ユーザー名	eappli
		パスワード	未設定
		パスワード確認	未設定
コラボスペース インストーラー	サーバー ID情報	サーバー ID	未設定
	データベースのコラボスペース用表領域作成	表領域名	collabospace
		データファイル名	collabospace.dbf
	データベースのコラボスペース用ユーザー作成	ユーザー名	couser
		パスワード	未設定
		パスワード確認	未設定
	全文検索の設定	-	全文検索サービスのコンポーネントエントリー名
	類似タスク検索の設定	-	関連文書検索サービスのコンポーネントエントリー名
	ドキュメント管理サービスのコラボスペース用キャビネット作成	サービスID	{ドキュメント管理サービスインストーラーで入力されたサービスID} (変更可)
		管理者ユーザー名	未設定
		ストレージパス	未設定

インストーラー	画面	入力項目	初期値
ドキュメントレビューオプションインストーラー	データベースのドキュメントレビューオプション用表領域作成	表領域名	dbcollabo
		データファイル名	dbcollabo.dbf
	データベースのドキュメントレビューオプション用ユーザー作成	ユーザー名	dbcollabouser
		パスワード	未設定
		パスワード確認	未設定
ワークフローインストーラー	データベースのワークフロー用表領域作成	表領域名	wf
		データファイル名	wf.dbf
	データベースのワークフロー用ユーザー作成	ユーザー名	wf
		パスワード	未設定
		パスワード確認	未設定
	ドキュメント管理サービスのワークフロー用キャビネット作成	サービスID	{ドキュメント管理サービスインストーラーで入力されたサービスID}（変更可）
		管理者ユーザー名	未設定
		ストレージパス	未設定
原本性保証オプションインストーラー	設定項目の選択（変更インストールだけ）	プロキシサーバーの設定	チェックなし
	設定項目の選択（変更インストールだけ）	タイムスタンプサービスのライセンスファイルのインポート	チェックなし
		タイムスタンプサービスの接続時のパスワード	チェックなし
	定項目の選択（変更インストールだけ）	タイムスタンプサービスのURL	チェックなし
	プロキシサーバーの情報	サーバー名	未設定
		ポート番号	未設定
	タイムスタンプサービスのライセンスファイルのインポート	ライセンスファイル	未設定
	タイムスタンプサービスの接続時のパスワードの設定	パスワード	未設定
		パスワード確認	未設定
	タイムスタンプサービスのURLの設定	URL	http://tss3161.e-timing.ne.jp/astdtssvr/TSRequest

インストーラー	画面	入力項目	初期値
原本性保証オプションインストーラー	ドキュメント管理サービスの証明書格納用キャビネットの作成（1/N）（サービスIDの数と同じ数のダイアログボックスが表示される）	サービスID	{ドキュメント管理サービスインストーラーで入力されたサービスID}（変更不可）
		サービスの管理者	未設定
		Certificatesストレージパス	未設定
		TrustAnchorsストレージパス	未設定
統合検索サービスインストーラー	機能の選択	-	統合検索サービス
		-	ストレージプロキシNTFSプラグイン
	使用許諾契約	-	使用許諾契約の条項に同意しません
	ユーザー情報	ユーザー名	{Windowsのユーザー名}
		会社名	{Windowsの会社名}
	インストール先の選択	インストール先のフォルダ	{プログラムファイルフォルダーのパス}¥FUJIFILM¥ArcSuite
	データ格納先の選択	データ格納先	{Windowsのシステムフォルダーのあるドライブ}¥ArcSuite
	RMS用データベースのサーバー情報	サーバー名	{ホスト名}のFQDN表示
		ポート番号	1521
		グローバルデータベース名	未設定
	RMS用ユーザー情報	ユーザー名	rms
		パスワード	未設定
	RMS参照用ユーザー情報	ユーザー名	rmsclient
		パスワード	未設定
	コンピュータのホスト名	ホスト名	{ホスト名}のFQDN表示
	コンピュータの設置場所	設置場所（JA）	未設定
		設置場所（EN）	未設定
	サービス起動ユーザー情報	ユーザー名	ARCUSRSVC
		パスワード	未設定
		パスワード確認	未設定
	サービス起動ユーザーのグループ情報	グループ名	ARCGRPSVC
	HTTPサービスの情報	ポート番号	19105
		仮想ディレクトリー名	ArcSuite

インストーラー	画面	入力項目	初期値
統合検索サービスインストーラー	データベースのサーバー情報	サーバー名	{RMS用データベースのサーバー名}
		ポート番号	{RMS用データベースのポート番号}
		グローバルデータベース名	{RMS用データベースのグローバルデータベース名}
	データベースの管理者情報	ユーザー名	system
		パスワード	未設定
	データベースの統合検索用表領域作成	表領域名	DGA
		データファイル名	DGA.dbf
	データベースの統合検索用一時表領域作成	一時表領域名	DGA_TMP
	データベースの統合検索用一時表領域作成	データファイル名	DGA_TMP.dbf
	データベースの統合検索用ユーザー作成	ユーザー名	DGA
		パスワード	未設定
		パスワード確認	未設定
	想定文書情報	想定文書数	500000
	ストレージプロキシの情報	説明	DocumentGatheringAgentStorageProxy
キャプチャリングサービスインストーラー	使用許諾契約	-	使用許諾契約の条項に同意しません
	ユーザー情報	ユーザー名	Windowsのユーザー名
		会社名	Windowsの会社名
	インストール先の選択	インストール先のフォルダ	{プログラムファイルフォルダーのパス} ¥FUJIFILM¥ArcSuite
	データ格納先の選択	データ格納先	{Windowsのシステムフォルダーのあるドライブ} ¥ArcSuite
	HTTPサービスの情報	ホスト名	{ホスト名} のFQDN表示
		ポート番号	19115
		仮想ディレクトリー名	ArcSuite
	サービス起動ユーザー情報	ユーザー名	ARCUSRSVC
		パスワード	未設定
		パスワード確認	未設定
	サービス起動ユーザーのグループ	グループ名	ARCGRPSVC

インストーラー	画面	入力項目	初期値
キャプチャリングサービス インストーラー	RMIレジストリサービスのポート番号	ポート番号	19145
	キャプチャリングサービス 管理ユーザーの登録	ユーザー名	capadmin
		パスワード	未設定
		パスワード確認	未設定
	登録先Webサービスの設定	URL	http:// {キャプチャリングサービスをインストールするサーバー名} /ArcSuite
	HTTPプロキシサーバー	ホスト名	未設定
		ポート番号	未設定
ドキュメント管理サービス 管理アプリケーション デスクトップ版 インストーラー	ユーザー情報	ユーザー名	{メインインストーラーの入力値}、または {Windowsのユーザー名}
		会社名	{メインインストーラーの入力値}、または {Windowsの会社名}
	インストール先の選択	インストール先	{メインインストーラーのインストール先} ¥Tool¥RepositoryAdminTool
	データベースのサーバー情報	サーバー名	{メインインストーラーの入力値}
		ポート番号	{メインインストーラーの入力値}
		グローバルデータベース名	{メインインストーラーの入力値}
	データベースのRMS用ユーザー情報	ユーザー名	{メインインストーラーの入力値}
		パスワード	未設定
バージョンアップ	データベースの管理者情報	パスワード	未設定
	データベースのRMS用ユーザー情報	パスワード	未設定

付録 O データベース表領域管理ツール

ArcSuiteの運用を開始したあと、「データベース表領域管理ツール」を使って、データベースの表領域を管理できます。

付録 O.1 データベース表領域管理ツールとは

データベース表領域管理ツールについて説明します。

■ 表領域とは

表領域は、データベースのデータを格納したり管理したりするところです。

ArcSuiteでは、コンポーネントのデータを格納する表領域や、キャビネットのデータを格納する表領域などがあります。

また、表領域は1つ以上のデータファイルで構成されています。データファイルは物理的なファイルで、データベースをインストールしたフォルダーや、指定したフォルダーに格納されています。

表領域のサイズは、最大サイズまで自動で拡張されます。ただし、最大サイズになると、データが登録できなくなったり、ArcSuiteのサービスが停止したりすることがあります。

最大サイズにならないように、定期的に、表領域のサイズを確認することが必要です。

■ データベース表領域管理ツールとは

データベース表領域管理ツールは、表領域が最大サイズまで自動で拡張されたときの使用量を管理できます。

表領域の使用量が多い場合は、データファイルを追加したり、データファイルの最大サイズをより大きな値に変更したりして、表領域の最大サイズを増やします。

表領域の最大サイズを増やすときは、データファイルを格納するドライブの空き容量が、データファイルのサイズよりも大きく、十分な空き容量があることを確認しておきます。

補足
- 表領域ごとに、データファイルの数は 1,022 個までです。データファイルの最大サイズは OS によって異なり、通常は 32 GB です。
- データベースのサイズは、表領域のサイズを合わせたものです。データベースのデータファイルの数は、65,533 個までです。

付録 O.2 データベース表領域管理ツールとドキュメント管理サービス管理ツールの違い

データベース表領域管理ツールとドキュメント管理サービス管理ツールとでは、表示される内容に違いがあります。ここでは、表示される内容の違いを説明します。

■ 表領域の使用量

表領域のサイズを表示します。

補足 使用量は、表領域が作成されてから使用された最大の値を表しています。たとえば、操作ログや認証ログなどを削除しても、使用量は更新されません。

ツール	説明
データベース表領域管理ツール	[使用済サイズ] と表示しています。
ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web 版	[使用量] と表示しています。
ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版	
ドキュメント管理サービス管理コマンド	「showDbTableSpaceInformation」を実行したときの、[dbTableSpaceUsedSize] の値です。

■ 表領域の使用率

表領域の使用率は、使用量の割合を表示します。

補足 使用量と同様に、たとえば、操作ログや認証ログなどを削除しても、使用率は更新されません。

ツール	説明
データベース表領域管理ツール	表領域の [最大サイズ] に対する使用量の割合を表示します。
ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web 版	表領域の [サイズ] に対する使用量の割合を表示します。
ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版	
ドキュメント管理サービス管理コマンド	

■ データファイルの増分

データファイルのサイズは、最大サイズまで自動で拡張されます。自動で拡張されるときに、増える値です。

ツール	説明
データベース表領域管理ツール	表示しません。
ドキュメント管理サービス管理アプリケーション Web 版	[増分] と表示しています。
ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版	
ドキュメント管理サービス管理コマンド	「showDbTableSpaceInformation」を実行したときの、[dataFileExtendSize] の値です。

付録 O.3 データベース表領域管理ツールを使った操作

ArcSuiteの運用に応じて、データベース表領域のデータファイルを追加したり、データファイルのサイズを変更したりできます。

データベース表領域管理ツールを起動する

1. ArcSuite サーバーに、Administrator 権限を持ち、「ora_dba」グループに所属するユーザーでサインインします。

   補足 ・2 台以上で構成されている場合は、リポジトリーサーバーにサインインします。
   ・「ora_dba」グループに所属するユーザーとは、通常、データベースをインストールしたときにサーバーにサインインしていたユーザーです。たとえば、「administrator」でデータベースをインストールした場合、ここでは「administrator」でサインインできます。

2. 次のファイルをダブルクリックします。
   「{データベースのインストール先} ¥tools_4.0¥tbstool_as303¥tbstool.bat」

   補足 {データベースのインストール先} の初期値は、「{最大容量のドライブ} :¥Database」です。

表領域の一覧を表示する

1. データベース表領域管理ツールを起動します。

   参照 データベース表領域管理ツールの起動手順は、「データベース表領域管理ツールを起動する」(P.491)を参照してください。

[表領域管理] 画面にデータベース表領域の一覧が表示されます。

表領域のデータファイルを追加する

データベース表領域の使用率が高くなったときに、データファイルを追加して使用率を下げます。

1. [表領域管理] 画面から、表領域を選択します。
   [データファイル] エリアに、選択した表領域のデータファイルパスやサイズなどの情報が表示されます。

2. [データファイル] エリアに表示されている表領域のチェックボックスにチェックマークを付けて、[データファイル追加] をクリックします。
   [データファイルの追加] 画面が表示されます。

3. [ファイルパス]、[初期サイズ]、および [最大サイズ] に値を入力します。
   [ファイルパス] に入力したファイルが、自動で作成されます。

項目名	説明
表領域	表領域のファイル名が表示されます。
ファイルパス	データファイルのファイルを保存するパスを、絶対パスで入力します。 入力するフォルダーは、存在するフォルダーを指定し、ファイルは存在しないファイルの名前を入力します。必ず入力します。 UNC形式のファイルパスは指定できません。
初期サイズ	データファイルのファイルサイズを入力します。 1～32,767（32 GB)までの範囲で入力できます。必ず入力します。 ファイルを作成するドライブに、指定したサイズの空き容量がない場合はエラーになります。

項目名	説明
最大サイズ	データファイルの最大サイズを入力します。 1～32,767（32 GB)までの数字で、［初期サイズ］で入力した値より大きい数字を入力します。 必ず入力します。

4. **データファイルを追加したあとの使用率を確認する場合は、［追加後の使用率計算］をクリックします。確認せずに追加する場合は、手順 6 へ進みます。**
   データファイルを追加した場合の使用率を表すメッセージが表示されます。

5. **確認したら、［OK］をクリックします。**
   ［データファイルの追加］画面に戻ります。

6. **［追加］をクリックします。**
   データファイルが追加され、［表領域管理］画面に戻ります。

   補足 ［キャンセル］をクリックした場合は、何もせずに［表領域管理］画面に戻ります。

表領域のデータファイルのサイズを拡大する

データベース表領域の使用率が高くなったときに、データファイルの最大サイズを拡大して使用率を下げます。データファイルを格納するドライブに十分な空き容量があるかを、事前に確認しておきます。

1. **［表領域管理］画面から、表領域を選択します。**
   ［データファイル］エリアに、選択した表領域のデータファイルパスやサイズなどの情報が表示されます。

2. **［データファイル］エリアに表示されているデータファイルのチェックボックスにチェックマークを付けて、［サイズ拡張］をクリックします。**
   ［データファイルの最大サイズ拡張］画面が表示されます。

3. **［最大サイズ］の値を書き換えます。**

   補足
   - ファイルが格納されているドライブに、最大サイズのファイルを作成できる空き容量がない場合は、エラーになります。
   - ［最大サイズ］には、現在のファイルサイズや最大サイズより、大きな値を指定する必要があります。
   - ［最大サイズ］に入力できる値は、1 ～ 32,767（32 GB) です。

4. **データファイルのサイズを設定したあとの使用率を確認する場合は、［拡張後の使用率計算］をクリックします。**
   確認せずに追加する場合は、手順 6 へ進みます。
   サイズを設定したあとの使用率を表すメッセージが表示されます。

5. **確認したら、［OK］をクリックします。**
   ［データファイルの最大サイズ拡張］画面に戻ります。

6. **［拡張］をクリックします。**
   データファイルのサイズが拡張され、［表領域管理］画面に戻ります。

   補足 ［キャンセル］をクリックした場合は、設定は反映されずに［表領域管理］画面に戻ります。

データベース表領域管理ツールの終了

1. **［データベース表領域管理ツール］画面で、右上にある［×］をクリックします。**
   データベース表領域管理ツールが終了します。

付録 P 新サーバーへの移行とバージョンアップ（ホスト名を変更する場合）

ここでは、新サーバーのホスト名を、旧サーバーとは異なるホスト名に変更してバージョンアップする手順について説明します。

付録 P.1 注意事項

旧サーバーとは異なるホスト名の新サーバーに移行してバージョンアップした場合、ホスト名を使用している次の情報が使用できなくなります。

◆ ドキュメントスペース、ワークスペース

・ドキュメント操作 URL

・カレントワークスペース（Cookie に設定されたカレントワークスペースの情報でホスト名を使用しています。カレントワークスペースを再設定してください。）

・コラボスペースからドキュメントスペースへ登録された文書に設定される「コラボスペース URL」属性

・URI 型のユーザー属性

◆ コラボスペース

・コラボ操作 URL

・クライアントに送信済みのメッセージに書かれているタスク URL など

・関連フォルダー

・コラボスペースからドキュメントスペースへ登録された文書に設定される「格納先情報」

・「関連リンク」の中に、ホスト名を変更したサーバーを入力している場合

◆ ワークフロー

・ワークフロー操作 URL

・クライアントに送信済みのメッセージに書かれている作業 URL など

・ワークフローからドキュメントスペースへ登録された文書に設定される「ワークフロー URL」属性

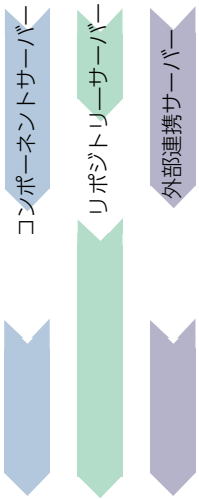
◆ ポータル

・「お気に入り」の外部リンクの中に、フルコンピューター名を変更したサーバーを含むリンクを設定している場合

付録 P.2　バージョンアップの流れ

旧サーバーとは異なるホスト名の新サーバーに移行してバージョンアップする場合の流れは、次のとおりです。
なお、STEP内の項目を、作業対象のすべてのサーバーで実施したあと、次のSTEPの項目に進んでください。

■ STEP1：旧サーバーでの事前作業、データのエクスポート（旧サーバー）



旧サーバーでの確認とツールの準備

外部連携サーバーのサービスの停止

旧サーバーでの事前チェック

データのエクスポート
(コンポーネントサーバー⇒リポジトリーサーバー⇒外部連携サーバーの順に実行)

STEP2に進む

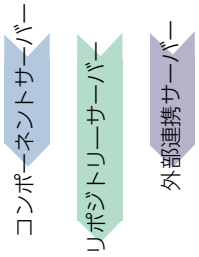
参照 ⇨「第3部 バージョンアップ」の「3.4 旧サーバーでの確認とツールの準備」（P.353）

参照 ⇨「第3部 バージョンアップ」の「3.5 外部連携サーバーのサービスの停止」（P.358）

参照 ⇨「第3部 バージョンアップ」の「3.6 旧サーバーでの事前チェック」（P.359）

参照 ⇨「第3部 バージョンアップ」の「3.7 データのエクスポート」（P.363）

■ STEP2：新サーバーの設定、データベースのインストール（新サーバー）



新サーバーでの事前設定

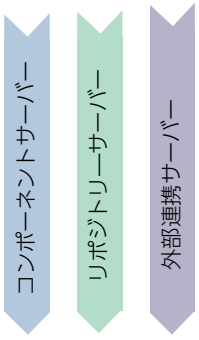
データベースのインストール

STEP3に進む

参照 ⇨「第3部 バージョンアップ」の「3.8 新サーバーの事前設定」（P.365）

参照 ⇨「第3部 バージョンアップ」の「3.9 データベースのインストール」（P.367）

■ STEP3：データのコピーとインポート（新サーバー）



旧サーバーのデータのコピー

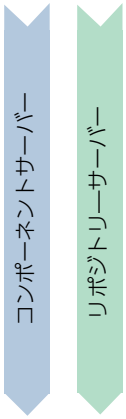
データのインポート
(リポジトリーサーバー⇒コンポーネントサーバー⇒外部連携サーバーの順に実行)

STEP4に進む

参照 ⇨「第3部 バージョンアップ」の「3.12 エクスポートデータのコピー」（P.370）
⇨「第3部 バージョンアップ」の「3.13 その他のデータのコピー」（P.372）

参照 ⇨「第3部 バージョンアップ」の「3.16 データのインポート」（P.380）

■ STEP4：リポジトリーサーバー、コンポーネントサーバーのインストール（新サーバー）



ArcSuite 4.0のインストール

↓

インストール後の設定

↓

「mime.types」ファイルのコピー

↓

STEP5に進む

参照 ⇨「第3部 バージョンアップ」の「3.18 コンポーネントサーバーのインストール」(P.383)、「3.19 リポジトリーサーバーのインストール」(P.388)、「3.20 コンポーネントサーバーのインストール（続き）」(P.392)

参照 ⇨「第3部 バージョンアップ」の「3.22 インストール後の設定」(P.402)

参照 ⇨「第3部 バージョンアップ」の「3.23 「mime.types」ファイルのコピー」(P.409)

■ STEP5：外部連携サーバーのインストール（新サーバー）

キャプチャリングサービスの監視キューフォルダーの作成

↓

キャプチャリングサービス、統合検索サービスのインストール

↓

インストール後の設定

↓

「mime.types」ファイルのコピー

↓

STEP6に進む

参照 ⇨「第3部 バージョンアップ」の「3.17 キャプチャリングサービスの監視キューフォルダーの作成」(P.382)

参照 ⇨「第3部 バージョンアップ」の「3.21 外部連携サーバーへのインストール」(P.396)

参照 ⇨「第3部 バージョンアップ」の「3.22 インストール後の設定」(P.402)

参照 ⇨「第3部 バージョンアップ」の「3.23 「mime.types」ファイルのコピー」(P.409)

■ STEP6：その他オプション商品のバージョンアップ

その他オプション商品のバージョンアップ

参照 ⇨「第3部 バージョンアップ」の「3.24 SDK、IFTK、ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版のバージョンアップ」(P.410)
⇨「3.25 デスクトップクライアントのバージョンアップ」(P.411)
⇨「3.26 連携フォルダ for DocuWorksのバージョンアップ」(P.412)
⇨「3.27 ドキュメント一括操作ツールのバージョンアップ」(P.413)

付録 Q バージョンアップのためのチェックリスト

「第3部 バージョンアップ」の「3 新サーバーへの移行とバージョンアップ」（P.346）での作業のチェックリストです。新サーバーのホスト名を旧サーバーと同じホスト名で運用するケースの手順を記載しています。

	項目	内容	✓	備考
事前確認	サーバー構成	バージョンアップと同時にサーバーの構成変更をしないこと 例：2台構成からオールインワン構成に変更する	☐	
	ArcEPSとの連携	ArcEPSと連携しているか	☐	
	対象バージョン	使用しているバージョンが、次のどれかであること ・ArcSuite Engineering 3.0.10（Hotfix を含みます） ・Apeos PEMaster Evidence Manager 2.4.10 使用バージョン（例：ArcSuite 3.0.10）	☐	ArcSuite 4.0（バージョン 4.0.0）時点の情報です。最新の対象バージョンは弊社公式サイトを参照してください。
	新サーバーの準備	対象OSなどは、「3.8.2 動作環境と設定する項目の確認」（P.365）を参照	☐	サポートしている最新の動作環境については、弊社公式サイトを参照してください。
	ネットワークハブの準備	同じネットワーク内で、旧サーバーと新サーバーを同じFQDNで接続する場合に必要	☐	
	フォルダーの空き容量	・レジストリー情報やコンポーネント情報などのファイルサイズ 120 KB	☐	
		・データベースのデータファイルのファイルサイズを合計したもの （例：「D:¥Database¥datafiles フォルダー」500GB、「E:¥datafiles2」フォルダー 100MB）	☐	
STEP1	旧バージョンの稼働の確認	次の2つを確認する ・旧バージョンがインストールされていること ・正常に稼働していること	☐	
	表領域の使用率の確認	データベース表領域管理ツールを使用して、表領域の使用率が80%以下になるようにする	☐	（2台構成の場合はコンポーネントサーバー）
	コラボスペースのインポートフォルダーの確認	コラボスペースがインストールされている場合に実施する。 ・インポートフォルダーを確認する （例：「D:¥Collabo¥CollaboImportフォルダー」）	☐	コラボスペースがインストールされている場合、サーバーのサービスに「ArcSuite Collabo Service」がある。（2台構成の場合はコンポーネントサーバーで確認）
		・タスクのアーカイブデータの出力先を確認する （例：「D:¥Collabo¥TaskArchiveフォルダー」）	☐	

	項目	内容	✓	備考
STEP1	ワークフローの外部コマンドを配置するフォルダーの確認	ワークフローがインストールされている場合に実施する。 ・外部コマンドの配置フォルダを確認する （例：「D:¥ArcSuite¥Service¥data¥Workflowフォルダー」）	☐	ワークフローがインストールされている場合、［システム管理］画面の左側に、［ワークフロー］リンクが表示される。
	ツールの準備（旧サーバー）	次のツールを旧サーバーにコピーする。 ・AS_precheck.bat ・AS_list_stgpath.bat ・AS_export.bat 「{インストールメディア} :¥Service¥Tools¥Upgrade¥ASUpgradeTool.zip」に格納	☐	
	外部連携サーバーのサービスの停止	次の順序で停止する (1) ArcSuite DocumentGatheringAgent StorageProxy (2) ArcSuite DocumentGatheringAgent WebAdmin (3) ArcSuite DocumentGatheringAgent Register (4) ArcSuite Capturing Service Admin (5) ArcSuite Capturing Service	☐	
	旧サーバーでの事前チェック（コンピューター名、グローバルデータベース名、パスワードなどの確認）	「AS_precheck.bat」を使用して、ホスト名、パスワードなどのチェック結果を確認する。 (例：結果 CHECK1: フルコンピューター名の長さ →OK CHECK2: データベースのグローバルデータベース名 →OK CHECK3: グローバルデータベース名のSIDの長さ →OK CHECK4: グローバルデータベース名の長さ →OK CHECK 5：コンピューター名の長さ →OK CHECK6: RMS 管理者ユーザーのパスワード →OK CHECK7: サービス起動ユーザーのパスワード →OK CHECK8: 新サーバーへファイルをコピーする際にログオンする旧サーバーのユーザーのパスワード →OK)	☐	
	データ格納先フォルダー以外にあるストレージパスの確認	「AS_list_stgpath.bat」を使用して、「storage_archive_path.txt」からデータ格納先以外のストレージパスを確認する。 (例：「D:¥storage¥archiveフォルダー」)	☐	
	データのエクスポート	「AS_export.bat」を使用して、旧サーバーのデータをエクスポートする。 結果 「SUCCESS: storage_archive_path.txt.」が表示されること	☐	

	項目	内容	✓	備考
STEP2	ネットワークハブの接続	同じネットワーク内で、旧サーバーと新サーバーを同じFQDNで接続する場合に必要	☐	
	動作環境と設定する項目の確認	・動作環境を確認する	☐	サポートしている最新の動作環境については、弊社公式サイトを参照してください。
		・設定する項目を確認する	☐	
	オペレーティングシステムおよび外部コンポーネントのインストール	・Windows の環境設定	☐	
		・DocuWorks をインストールする ・ドキュメント編集ソフトウェア（Microsoft Office など）	☐	サポートしている最新の動作環境については、弊社公式サイトを参照してください。
	ツールの準備（新サーバー）	次のツールを新サーバーにコピーする。 ・AS_copy_export_data.bat ・AS_set_acl.bat ・AS_import.bat ・AS_copy_mimetypes.bat 「{インストールメディア} :¥Service¥Tools¥Upgrade¥ASUpgradeTool.zip」に格納	☐	
	データベースのインストール	「旧サーバーでの事前チェック」で「AS_precheck.bat」を実行した結果、CHECK2～4が「NG」だった場合、グローバルデータベース名が次の条件を満たすように設定する。 ・「 - （ハイフン）」が含まれていないこと ・128 文字以内であること ・データベースの SID が 8 文字以内であること	☐	
	サービスの起動方法の変更	データベースのサービスの［スタートアップの種類］を［手動］に変更する。	☐	
	新サーバーのホスト名の一時変更とネットワークへの接続	同じネットワーク内で、旧サーバーと新サーバーを同じFQDNで接続する場合に必要 ・新サーバーのホスト名を一時的に別のホスト名に変更し、旧サーバーと同じネットワークに接続する。	☐	
STEP3	エクスポートデータのコピー	「AS_copy_export_data.bat」を使用して、エクスポートしたフォルダーを新サーバーにコピーする。	☐	
		「cp_ALL.bat」を使用して、旧サーバーのデータをコピーする。	☐	
	サービス起動ユーザーの作成	「AS_set_acl.bat」を使用して、新サーバーにサービス起動ユーザーを作成する。	☐	
	ドキュメント管理サービスのストレージパスのフォルダーのコピー	「storage_archive_path.txt」に記述されているパスを確認し、net shareコマンド、net useコマンド、xcopyコマンドを実行して、同じパス構成になるようにストレージパスのフォルダーを新サーバーにコピーする。	☐	
		caclsコマンドを実行して、新サーバーにコピーしたストレージパスのフォルダーにアクセス権を設定する。	☐	

	項目	内容	✓	備考
STEP3	コラボスペースのインポートフォルダーのコピー	コラボスペースがインストールされている場合に実施する。 「storage_archive_path.txt」に記述されているパスを確認し、net shareコマンド、net useコマンド、xcopyコマンドを実行して、同じパス構成になるようにインポートフォルダーを新サーバーにコピーする。	☐	
		caclsコマンドを実行して、新サーバーにコピーしたインポートフォルダーにアクセス権を設定する。	☐	
	ワークフローの外部コマンド配置フォルダーのコピー	ワークフローがインストールされている場合に実施する。 「storage_archive_path.txt」に記述されているパスを確認し、net shareコマンド、net useコマンド、xcopyコマンドを実行して、同じパス構成になるように外部コマンド配置フォルダーを新サーバーにコピーする。	☐	
		caclsコマンドを実行して、新サーバーにコピーした外部コマンド配置フォルダーにアクセス権を設定する。	☐	
	サービスの自動起動の設定	データベースのサービスの［スタートアップの種類］を［自動（遅延開始）］にする。	☐	
	新サーバーのホスト名の変更	旧サーバーのOSをシャットダウンしたあとで、新サーバーのホスト名を、旧サーバーと同じホスト名に変更する。	☐	
	データのインポート	「AS_import.bat」を使用して、新サーバーにコピーしたエクスポートデータをインポートする。	☐	
STEP4	キャプチャリングサービスの監視キューフォルダーの作成	新サーバーに監視キューフォルダーを作成する。	☐	
	ArcSuite 4.0のインストール	新サーバーにArcSuite 4.0をインストールする。	☐	
	インストール後の設定	・Web ブラウザーの設定	☐	
		・ファイルフォーマット変換サービスの初期設定 - DocuWorks のインストール後の設定をする - Microsoft Office をインストールしたあとの作業	☐	
		・コラボスペースを設定する ・ワークフローを設定する ・データベース表領域管理ツールの性能向上のための設定をする ・Web サービスインターフェイスのための設定をする	☐	
	「mime.types」ファイルのコピー	「mime.types」ファイルを、新サーバーにコピーする。 (使用できるデータに、Microsoft Excelなどのデータを追加するなどのカスタマイズをしていた場合)	☐	
STEP5	外部連携サーバーへのインストール	外部連携サーバーとして使用する新サーバーに、次のソフトウェアをインストールする。 ・キャプチャリングサービス ・統合検索サービス	☐	

	項目	内容	✓	備考
STEP5	インストール後の設定	・Web ブラウザーの設定	☐	
		・ファイルフォーマット変換サービスの初期設定 - DocuWorks のインストール後の設定をする - Microsoft Office をインストールしたあとの作業	☐	
		・Windows 8.1（32 ビット）または Windows10（32 ビット）の場合に必要な設定	☐	
	「mime.types」ファイルのコピー	「mime.types」ファイルを、新サーバーにコピーする。 (使用できるデータに、Microsoft Excelなどのデータを追加するなどのカスタマイズをしていた場合)	☐	
STEP6	・SDK、IFTK、ドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版のバージョンアップ ・デスクトップクライアントのバージョンアップ ・連携フォルダ for DocuWorks のバージョンアップ ・ドキュメント一括操作ツールのバージョンアップ	オプション商品を使用している場合に実施する。 ・ドキュメント管理サービス SDK ・コラボスペース Interface Toolkit ・ワークフロー Interface Toolkit ・単独でインストールしたドキュメント管理サービス管理アプリケーション デスクトップ版 ・デスクトップクライアント ・連携フォルダ for DocuWorks ・ドキュメント一括操作ツール	☐	